
森羅と創世が行くチート過ぎるネギま！

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森羅と創世が行くチート過ぎるネギま！

【Nコード】

N8889R

【作者名】

メア

【あらすじ】

病弱な双子の妹と二人で日々懸命に生きてきた。

大震災が起こった。

大震災中に妹を抱き抱え逃げている途中いきなり力がぬけて、倒壊してきたビルの下敷きになり死んだ。

ここが死後の世界か？なんか真っ白い世界だな。そして、目の前に爺さんがいた。

なんだこれ？

ここから始まる双子の旅路。二人一つの身体。待ち受ける強敵達（
？）はたして二人は生き残ることができるか！！つづきは本編でど
うぞ。

プロローグ（前書き）

書きたくなつたから書いた。後悔はしてない（キリ

プロローグ

病弱な双子の妹と二人で日々懸命に生きてきた。

大震災が起こった。

大震災中に妹を抱き抱え逃げている途中いきなり力がぬけて、倒壊してきたビルの下敷きになり死んだ。

ここが死後の世界か？なんか真っ白い世界だな。そして、目の前に爺さんが頭をさげていた。

なんだこれ？

「あんだ、何してんの？」

「誠に申し訳ない、実はな、御主は死ぬはずなかったんじゃ。それが、こちらの手違いでの。」

「つまり、いきなり力が抜けたのは貴様の仕業なのか！」

「すまん！許してくれ！」

「まずは、妹を連れて来いそれからだ。」

「いや、あの子はどちにしろ寿命が「知らん、連れて来い。」・・・
・わかったわい。」

いきなり、横に妹が出てきた。神様つてのは本当みたいだな。

「信じてなかったんかい。」

「……………にいなま。」

「よしよし、なにも心配ないからな。」

「……………（しんく）」

「シスコンじゃな。」

「しんく。ご。で。ど。じ。す。ん。だ。？」

「お主には転成してもらおう。」

「妹と……レンと一緒にじゃないと許さないからな。」

「いや、転生枠は一つしかない。なんとかしろ、神のくせにその程度も出来ないのか？」分かったやっつてやるのじゃ！」

「かかった！」

「転生じゃがネギまの世界に行ってもらおう。」

「あのバグキャラだらけのかよ。無理無理。」

「そこしか相手無くてな。なに、チートくれてやるから安心するん
じゃ。」

「ならいいか、爺さん名前は？」

「わしはオーディンじゃ。」

「たいした神じゃ……ってオーディンかよ！」

「わははは、故に大概のことはできるぞ。」

「楽しみだな。なあ。」

「……………（じく）」

「それでは、まずは基本のチートじゃが主達には、身体能力、魔力、気はSSにした。さらに、真祖の吸血鬼になってもらおう。」

「吸血鬼かつまりエヴァと同じか……………いやまて、自分達で決められるのは何個だ？」

「2〜3じゃな、それ以上持たないんじゃ魂がな。」

「ならいいか、まず一つ目のチートだがアセリアやナルカナにでてくる永遠神剣創れる力をくれ。」

「なっ！無茶なあれ神にもひとしいんじゃよ！」

「主神オーデインならできるよね？」

「くっ、よりによって創れる方とはな。ま、いいか。」

「よっー」

「くいくい）……………」

スソが引っ張られたのでレンの方をみる。

「……………ひとつ……………きまった。」

「なんだい？」

「……………ぜんぶの……………るん……………」

「ちょ、じつら。遠慮というの知らんのいいけど。」

「いいの。」

「そっだ、レンのこんなはどう？あらゆる生物を従えられるのと会

話できる力とか。」

「っ！………（じくじく）」

「それなら簡単じゃな。」

「あとは俺か、うん。そうだな決めた、魔眼だな。」

「魔眼にも色々あるが？」

「全部」

「おい。」

「ありとあらゆる魔眼をくれ。」

「発動は二つが限度じゃがよいか？」

「ああ。」

直死やアルファステイグマがあれば基本問題無いしな。

「これで「あと一個か」まだいるのか？」

「当たり前だ、あんなバグキャラだらけなんだからな。」

「十分ぬしらもバグキャラじゃがな。」

「決めた！零時迷子だ！」

「まさか御主……………」

「くくく、一日で全回復素晴らしいじゃないか。」

「反則技じゃな。」

「……………（くくく）」

「魔力も気もすべて回復するように頼むな。」

「分かったわい。」

「永遠神剣の材料はどうすればいいんだ？」

「主等二人分はここで創っていけ材料も持ってやるのでな。」

「了解。」

しばらくして、できたのは大太刀と一本の杖。

「杖はレンに……………なに、ぬいぐるみがいいだと？わかった、ウサギでいいな。というか形式好きに変えられるようにしとくな。」

「……………（じくじく）」

「名前は永遠神剣第一位森羅。そっちのも同じく永遠神剣第一位創世。」

「もう、エターナルじゃな。」

「うん、森羅は森羅万象を操る。創世は何かをつくったり、マナ…

…魔力などを生み出したりできる。」

「化けもんじゃなくそれら装備したらステータスは全てEXじゃろうな。」

「すげ〜」

「……………うん。」

「さて、準備もできたことだし行ってきてもらうかの。」

「はいー！（こく）」

「じゃあ、二人で抱き合うのじゃ。」

「？わかった。」

レンをギュッと抱きしめる。

「……………っ（かあ）」

ん、ここはどこだ？目を開けると木々に囲まれた広い広場見たいだな。抱いていたレンがいなくなっている！

「レンどこだ！」

周りを見渡すが綺麗な湖があるだけ……………ん、手紙だな。

“……………おにいさま……………じじい……………います”

「頭の中に声が聞こえるけど……………手紙を読んで見るか」

『この手紙を読んでいるなら無事着いたみたいだな。まず、説明する。君達は二人で一人じゃ、転生棒は一個しかないのと嬢ちゃんの寿命とかの関係でその身体になってしまった。変わる方法は意識を失ったり同意したりじゃな。Changeといっても変われるので安心するといい。』

「なるほど……………無茶言ったのこっちだし仕方ないか。」

“……………（じくじく）”

『次じゃが、原作より600年前に飛ばしておいたので修行すると

いい。パラレルワールドなので好きなように過ごすといい。あと、
念話以外にも普通に喋れるから。』

「さて、取り合えず湖の横に家でも造るかな。いい？」

「……………うん。」

「Change。」

身体が光りに包まれる感覚が途切れる。

Transide

身体から光が無くなると身体感覚がもどってくる。

「……………」

ぴよんぴよん飛んでみた……………すごい、ぜんぜんつかれないよ。
身体が自由に動くの〜

「喜んでる見たいでよかったよ。無理するなよ」

「……………（しぐ）」

湖の近くに行き、創世を構える。

「けけけ、レンよこれからよろしくナー」

「……………（しぐ）」

「家を頼む。」

「任せな！永遠神剣第一位創世の力とくと見よ！」

地面が光り一瞬で家ができた。ただし、お菓子の家が……………や

った。

「おい。」

「レンの望みだナ。」

「ならいいが、溶けないのと虫がよってこないようにしたは。」

「アイアイサー。」

「……………やった。」

こうして、新たな生活が始まりました。楽しみです。

プロローグ（後書き）

主人公男のほうは名前決まってるないです。

レンは8〜9歳の外見。兄は14くらい。なお、料理の腕はかなり
凄い、マオやさすらいの凄腕料理人くらい。

エヴァンジェリンがやって来た。

シオンSide

お菓子の家は、住めなくは無い。甘ったるい臭いを気にしなければな。

まず、食料の確保……これは、森と湖から魚を取れるから問題無い。

人払いと気配探知の結界を張り、このあたり一帯を支配下に置き、創世の力を使いシルフとウンディーネを生み出し警備させてみた。

こんな感じに無事10年ほどの時間が過ぎた。

この十年のうちに俺は鍛冶を習い、自宅近くに工房を作り魔法剣………ルーンソードなどの魔具などを作り売っていた。販売は全部バイトを雇って行っている。会う時は、基本フードで姿を隠すし正体はばれない。

巷じゃ、精霊の森とか言われてる。街の守り神見たいです。

今日も工房で武器を造ってます。レンは寝てる。

ふう、今日のノルマ終了とこの頃依頼増えてきたな。資金貯めもかねてたが結構貯まってきたな。

「あるじ〜。」

「どうした、シルフ。」

「しんじゆうしゃ〜。」

「数は？」

「500〜くらい〜。」

「多いな。」

「どっするっ？どっするっ？」

「よし、見てみるか。」

千里眼を使い、侵入者を見てみるとたしかに50人くらいの連中が一人の幼……少女を追っていた。

「シルフ。」

「はい。」

「警告して去らないようなら追ってる連中は殺せ。女は連れて来い。」

「シルフ、りょうかい。」

風が起き、移動したようだ。あの少女は間違いなければ同族だな。たぶん、エヴァンジェリンだろう。

H
ブ
ア
S
i
d
e

シ
オ
ン
S
i
d
e
O
u
t

「くっまずいな……………」

今私は50人のハンターに終われている。

「くそ、私になにをしたっていうんだ。」

「きゃっ!」

木の根に足をとられ倒れた。ますい、早く逃げなきゃ……………。

「どっやらここまでみたいだな……………」

「見つけたぞ。」

「っく。」

「吸血鬼の真祖よ。ハイ・デイルイトウォーカー貴様はここで終わりだ。」

囲まれた……………ここまでか……………

そのとき、一陣の風吹いた。

「けいこくします。」

「」「」「」「」

「じくは〜われわれのりょじきです〜そつじくたちをっってください
い〜」

「なんだこいつは？」

空中に現れた少女は命令してくる。

「そのひと、おいてたちを〜」

「ふざけるな！」

「悪いがそんなわけにはいかないんでな！」

「ん〜こうしようけつね〜これより、きょつせいはいじよになる
けどいいですか〜？」

「やれるもんならやってみろ！」

「はい〜やりますね〜。」

風切り音が聞こえたと思ったら、腕や首、足などが落ちていく。

「「「「「ぎゃあああああ！」「」「」「」

「ばっばかな、こんなことが……………。」

「逃げる！」

「ひいっ！」

「逃がしません〜」

「やるしかねえ！」

彼女が手を振るだけで、障壁もろとも切り裂かれ血の雨を降らして

行く。

「喰らえ！」

剣や矢などの物理攻撃が少女を通り抜けていく。妖精とかのたぐいか？

「くそ、化け物め。魔法ならどうだ！光の精霊333柱！集い来たりて 敵を射て！！ 魔法の射手！！」

やはり、こいつらかなりの実力者だな。どうなる？

「すごい、こっちもいくよ、魔法の射手、連弾、風の精霊555柱。」

「「「「っ！、ありえねえ！」「」「」

その気持ち分かるぞ、空一面にうめつくされた圧倒的なる物量の魔法の射手……………規格外にもほどがあるな。

そして、放たれたそれは、流星のように綺麗だった。

5分後、動くものはいなかった。

「にがしました〜まあ、いいか〜。」

2、3人は逃げのびたようだ。

「おい、私をどうする気だ。」

「あるじのところに連れてくの〜」

「逆らっても無駄だな。いいだろう、連れていけ。」

「〜」

私は空中に浮され森の奥へと連れていかれた。

H
U
A
S
i
d
e
O
u
t

シ
オ
ン
S
i
d
e

『あるじ〜どにっねてく?』

ん、きたか。そうだな、家のほうでいいよ。

「おじいさま……………おきゃくさま?」

「ああ、多分エヴァンジェリンって子。」

「……………しってる……………の?」

「聞いたことがあるだけだ。お前の友達としていいかもな。同じ真祖だから。」

「…………… (1)」

「もう少し、寝てなさい。」

「…………… (1)」

さて、どうなるかな。昼飯の準備でもしとくか。

シオンSideOut

エヴァSide

「なんだこれは！」

「おかしのいえ〜。」

馬鹿なのか？馬鹿じゃないの？しかも、所々かけているな。

「おいしいよ〜。」

「あ、ありがとう。」

屋根の一部を取り渡されたので、食べてみる。うむ、美味だな。

チョコを味わっていると一人の青年がでてきた。

「あるじ〜、連れてきた〜。」

こいつが……………なんだ、この魔力は……………。

「初めまして、もう一人の吸血鬼の真祖。ハイ・デイルイトウォーカー」

何者だ、こいつ……………さて、もうひとりだと？まさか……………
こいつも……………。

「ところで、お腹すいてない？」

「えっ、空いてなんか……………（きゆう〜）」

「じー。」

「おなかなた〜。」

「う、うるさい。そんな目で私をみるな！」

「くすくす。」

「笑うな〜!!!（／＼／＼）」

「そっちのテーブルで待ってな。すぐ用意するから。」

「つく、いいだろう待ってやるから早くしろよ。」

「OKOK。シルフいつもの通り手伝って。」

「りょうかい〜。」

男は、家の隣にある建物（お菓子の家では無い）に入って行った。私は、指示されたテーブルについて待っていると信じられないことが起きた。

「ま、まさか。麒麟にユニコーンだと！」

それ以外にも、妖精たちが集まってくる。

「こんにちは。」

後ろに振り返ると水でできた人がいた。

「お前は……………」。

「私はウンディーネ。水を司る大精霊です。」

「大精霊だと……………では、あのシルフとかいうのは……………」。

「あの子は、風の大精霊です。」

なるほどだから、あんな馬鹿見たいな数出せるのか……………どっちにしるこんなの従えてるあいつは化け物だな。

「傷を負っているようですね。治します。」

「ありがとう、私は……………」

「あるじがいらっしゃる時で構いませんよ。治りました。」

「瞬んだな。ありがたい。」

「お水でも飲んでゆっくりお待ちください。」

「ああ、分かった。」

この水……………素晴らしく美味しいな。甘みもある。さすが、水の大精
霊だな。

エヴァ Side Out

シオン Side

「あるじ〜きょうつのはんなじ〜?」

「カルボナーラスパゲティーとカルパッチョにオニオンスープだよ。」

「よっふ〜。」

「麒麟達の飯は出来てるからくばってきて。」

「アイアイサー」

「よし、サラダもスープ、ソースもできた。後は茹で揚がるのを待つだけ。」

「あるじ〜」

「次はサラダとスープ持っていって。あとは持っていくから。」

「りょうかい〜。」

「よし、完璧。持っていくか」

かなりでかい
大皿に大量のカルボナーラをいれ、皿を持ち外へと運ぶ。ここ数年は麒麟やユニコーン達と共に食事をしている。レンが……………やっぱり、食べてもらおうほうが嬉しいしね。

「お待たせ。」

「遅い。」

「そういうな。予定外の客なんだから。」

「う、すまん。って、連れてきたのはそっちでは無いか！」

「だね。まあ、食べよう。」

「分かった。それじゃ……………」
「待った、いただきますがさきだ。」
「分かった。いただきます。」

「んぞ」

H
U
A
S
i
d
e

「「いただきます。」」

食事を開始した。私は衝撃を受けた。

「なんだこの美味さは！」

絡み付く濃厚な味わい。しかし、あと味はあっさりとしている。他のサラダやスープもとても美味しい。これまで食べたことがないような美味しさだ

「あるじのりょうりはいつもまいなぞ。」

「ですね。」

「使ってる水もいいしね。」

エヴァSideOut

シオンSide

それから、数十分がすぎ、今は紅茶とケーキを食べながら話している。

「さて、名乗ろうか。俺はシオン。君と同じ吸血鬼の真祖だ。」

「私は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。危ない所助けてくれてありがとう。」

「気にするな。こっちも下心ありだからな。」

「なに?」

「単刀直入にいうと俺のモノになれ。」

「なっ、貴様なにを言っている。」

「君みたいな可愛い子が欲しい。」

「なっ（／＼／」

「それに、逃げられると思うか？」

「ぐっ、無理だな……………」。

「それに、俺の物になれば身の安全と衣食住保障してやるぞ。どうぞ、いくあても無いのだから?。」

「くっ、いいだろう。好きにする。」

よし、落ちたな。

「で、私にどうしろというのだ?。」

「ああ、基本的に妹の相手をしてくれ。」

「妹だと」

「それについて教えようか……………」。

自分達の身体について教えた。

「つまり、シオンの中に妹がいて入れ代われると。」

「そっだ、病弱だったからベットから出すわけにも行かずにいたかな。どうにかする方法として真祖化を選んだ。問題があつてこんな姿になつてしまつたがな。」

「そっか、真祖化によつて助かることもあるんだな。」

「ああ、だから一緒にいて常識とか教えてやつてくれ。」

「わかつた。あつあのお願いがあるんだが……………いいか?」

「つく、上目遣いに見てきやつて、可愛いじゃないか。」

「いいだろう。言つて見な。」

「うん、魔法を教えてほしい。」

「うん、無理。」

「なんでだ!」

「決まってる。俺が出来ないからだ。」

「そ、それは仕方ないな。」

「まあ、シルフとウンディーネ達に習えばいいじゃないか。」

「うちらは〜かんかくだよ〜?」

「私達でよければ構いませんよ。」

「頼む。あゝあと、お金が結構かかるんだが……………いいかな?」

「いいよ、ただし俺と妹にも教えてくれ。」

「任せろ。」

「さて、じゃあ買い物行ってくるか。あ、そうだエヴァ買って。」

「なんだ？きゃっ、いきなり触るな。やめ……………」

「ふむ、身長、スリーサイズはこんなもんか」

「うう、汚された……………」

「気にするな。エヴァは俺のものだし。」

「気にするに決まってるだろうが！」

「あっ、どんな服がいい？」

「え、えつと黒くて動き安いのが。」

「分かった。適当に買ってくる。」

「あっ、ああ。好きにしているのいいのか？」

「ああ、しばらくは好きに過ごしてる。」

「分かった。」

「じゃ、行ってくる。」

「いってらっしゃい。」

さて、追加の武器届けたら服買つか。

「いくぞ森羅。」

「はい、我が主。」

買い物に出かけて行った。

シオンSideOut

エヴァンジェリンがやって来た。(後書き)

エヴァがメインになるかもです。

闇の福音と創世の魔王の誕生（前書き）

アンケートを開始します。

内容は大戦をどの勢力でいくかです。

1 連合

2 帝国

3 紅の翼

4 独自勢力

5 世界ぶらり旅。

この5つのなかからお選びください。

闇の福音と創世の魔王の誕生

エヴァSide

まったくいきなり身体を触りやがって………まあ、いい。それより、早く力を付けることだな。

「さて、教えてくれウンディーネ。」

「わかりました。まず、エヴァ様の得意な属性はわかりますか？」

「ああ、私は氷と闇だな。」

「エヴァ様の場合魔力は問題無いので空中に、魔法の射手3000を放ってください。」

「いきなり3000か!」

「はい。我ら大精霊の教えを受けるのです。最強の魔法使いになっていただきます。」

「いいだろうやってやる。リク・ラク、ラ・ラック、ライラック、氷の精霊、3000頭、集い来りて、敵を切り裂け、魔法の射手、連弾・氷の3000矢!!」

空中に大量の氷のつぶてを作り出していく。作り出す端からシルフが消していく。

「すばらしいですね。連弾を使えるとは。」

「はあはあ、当然だ……」「じゃあ、同じのを次は闇でお願いします。」まっまで、それは……。。。」

「できないのですか？」

「やってやる！」

く、魔力もつかな？連弾なんてするんじゃないか。

「リク・ラク、ラ・ラック、ライラック、闇の精霊3000柱！！
魔法の射手！！ 連弾・闇の3000矢！！きゆう。」

「あらら、計一万二千本ですか。これならかなり鍛えますね。」

「おにだね。」

「氷ならなんとかありますが闇はどうにもなりません。どうしまし
よう。」

「あるじにどうほづねがったらいんじゃないかな。」

「氷と闇ですか。」

「そうですね。そうしましよ。」

「どうして〜エヴァさまはこぼないといけないんじゃない?」

「主の部屋につれていきましょ。お願いしますねシルフ。」

「まかされた」

エヴァ Side Out

シオンSide

街に買い物に出た俺はまず自分の店にいった。これは、作った武器を売ったお金で買った。経営は全部まかせてる。

「いらっしやいませ、あ、おはようございます。」

「おはよう。これ補充の剣と杖、槍とかね。」

「はい、こっちが売り上げになります。今月2千万\$超えましたよ。」

「

「それは、嬉しいね……ほら、今月分100万\$だ。」

「ありがとうございます。ちょっと相談あるんですが、普通の武器もおきませんか？どれも、高くて強力な物ばかりだと。お客さんから意見がありまして……。」

「ふむ、なら今まであげたお金で君が仕入れてきなさい。その売り上げは全部もらっていいから。」

「つまり、スペースは貸してもらえると？」

「ああ、自分の目利きに賭けるがいいさ。あと、魔法関係の材料買取どうなってる？」

「いろいろいい溜まってきてますよ。」

「じゃあ、馬車に積んどいて持ってかえるから。」

「了解しました。これから、どうするんですか？」

「買い物してくる。」

「いっぺんいっぺん。」

「いっぺん。」

軍資金二千万\$を手に入れた。

……多すぎだろ。

さて、やってまいりました市場です。食材もいつもの店で買い込んで店の法に送ってもらった。さて、服だな。

“おにいさま”

む、おきたかちよどいい。

“居候が一人増えた。レンの服も一緒に買うから変わるつ。大丈夫

か？
”

“ たぶん ”

“ 不安だが、変わるぞ。
”

“ はい
”

裏路地に入り誰にも見られてないことを確認し変わる。

「チエンジ」

表と裏が入れ替わる

Inside

シオンSideOut

「ん……………」

初めての買い物……………おにいさま心配してせんぜ
ん買い物させてくれないから……………

“気をつけるんだぞ。”

「……………」
「く」

私は、表通りに移動して感動した……………こんなに人が
いっぱいいる……………。

“おにいさま、あれなに？”

“ あれは、機織り機だな。”

“ あれは？あれは？”

“ あれは……………”

こんな感じで一時間後ようやく服屋さんについた。抱いている創生を抱きしめ中にはいっていく。

「 あら、かわいらしいお嬢さんね？ひとり？」

「 ……ひとりじゃない……………」

「 そうだぜ、俺様もいるからな！」

「 つー！ぬいぐるみがしゃべった……………お嬢さん人形遣いなね。」

「 ……(びびり)」

「今日は服を身に来たんだぜ。可愛いのあるか？」

「あるわ、まかせなさい。」

「キシシ、あなたのセンスはどんなもんか見てやるぜ。」

「望むところよー!」

それからしばらく、着せ替え人形みたくいろいろ着させられた。

「おにいさま、似合う?」

「ああ、これとあっちのがいいんじゃないか？」

「じゃあ、それにする。」

「他にも在るけど?」

「これがいいの。」

“ わかった。”

「……………これと……………これ……………
……………がいい……………」

「これとこれね。なら、リボンと靴はサービスしとくね。」

「キシシ、あと同じの二着とあっちの色違い黒と青の奴も三着くれや。黒のワンピースは10着ほどな。」

「OK、靴も4足セットあげるね。でも、結構な額になるけどいいのかい？」

「問題ないぜ。な、お嬢」

「……………（177777）」

「まあ、こんないっぱい……………お金持ちなんだね。代金分の1万\$もらってくね。まいどあじ〜。」

「なかなかよかったぜ、またな〜。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（じくじく）」

お店を出て、荷物を抱えて動く。

「ちょ！いたっ、痛いっってお嬢ひきずってる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いてて、どっしちしょうか？」

「お嬢さん困ってるみたいだね。荷物もってあげよう。」

「あっ。」

「気がするじつは無いですよ。どっしまでいくんだい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・しゅみーと・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、シュミートか。おいでこっちからのほうが近いよ。」

裏路地の法に進んでゆく。(シユミートは店の名前)

しばらくして、開けた場所に出た……何人かの人がある・
……こわい……。

「お嬢ちゃんがエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだな。」

「……?」

「悪いがここで死んでもらう。」

「一斉に武器を構える。」

「……レン……」

「なに?」

「……わたし、は……レン……」

「おい、人違いなんじゃないのか？」

「どっちにしる真祖だ。殺しちまえ。」

「そつだな。悪く思つなよ。」

“レン、変わるうか。”

“はい、おにいさま。”

「殺すという事は殺される覚悟はできているんだろつな？」

「なつなんだ。どこから声が……」

「男の声だぞ。」

「……ちえんじ……」

瞬時に私の身体が反転しおにいさまになる。

シオンSide

インサイドアウト

さて、妹を怖がらせた罪とエヴァを狙ったこと後悔させてやる。

「さて、どうなんだ？殺し殺される覚悟はあるんだろうな？今なら見逃してやる。」

「なっなんだてめえ、さっきのガキはどこいった。」

「答える必要は無い。」

「っ、そいつも真祖だ………なんなんだこの街は……
・なぜ、真祖が三人もいやがる!!」

「どうする？ここは、引いた方がよくねえか？」

「今、一人なんだ。合流される前にここでヤルぞ！」

「わかった。」

「おっ。」

「ふん、覚悟なんて無いぜ。俺たちは手前ら化け物どもを狩るだけだ！」

「そうか、では森羅のシオン参る。これより始まるはただ一方向的な虐殺としれ。」

「なにいつてや、があ！」

「まず、一人。」

さらに、走り抜けながら二、三人を切り捨てる。

そして、全ての敵を視界に納められる位地に移動した。一対多数の場合不利な位地にいないよう常に受け異界しなければならぬ。

「なにしやがった！」

「今が見えないならやはり一方向的な虐殺だな。」

「つく、食ら」遅い、月牙天衝「ぐはあ」

フリーチ
BLEACHの技だが………できるもんだな。全部さっ
きので死んだし帰るか。

「レン、大丈夫か？」

「……………（くくくく）」

「創世いくぞ。」

「おれの心配は無しかよ。」

「どうせ、傷ついてもすぐ治るし。そんな柔につくってねえ。」

「へいへい。そうですね。」

「よし、荷物もひろったし。お前も中にもどってる。」

「アイアイサー。」

創世が身体の中に……………レンのもとへ行き静かになった。

「森羅、死体进行处理してくれ。」

「了解。分解して養分にします。」

「さて、帰るか。」

シュミートへと帰り、馬車に乗り自宅を目指した……………。

「走った方が早くねえですか？」

「走った方が速いな……………馬じゃな。」

「なんか創りやしよう。」

「だ……………いいのがある。こんなのに引つ張らせるのかと思っただが……………幻獣とかなら創れるよな？」

「もちろんですぜ。」

「ならムシユフシユを創れ。」

「ムシユフシユは……………ティアマトが生んだ奴ですか。」

「できるか？」

「もちろん。」

「では、やれ。盗賊除けにも使えるだろ。」

「アイアイサー。創世開始……………対象、馬を書き換え……………完了。」

「GRUUUUUUUUUU。」

「いい子だ。誰が主か分かるな？」

「GRU。」

「よし、じゃあこいつを引いて行く。」

「ひゃっほっ、はやいぜ〜。」

「だな。街に行かないときは警備にも使えるかな。」

いつもより早く帰れた。さて、エヴァはどこだろ。

「あるじ〜おかえりなさい〜。」

「ただいま。エヴァは？」

「あるじ〜の部屋に寝かせてる〜。」

「とりあえず、主の服を借りて着替えさせました。」

「そうか、わかった。新しい仲間だ」

「これは強そうですね。」

「だね。」

「名前きめないとな。」

「ムーがいい」

「レンがそういうならいいか。お前はこれからムーだいいか？」

「GRUUUU」

「いいみたいだな。好きにすごしていいけど喧嘩はするなよ。」

「(U<U)」

「さて……………エヴァの服は……………ぼろぼろだな。よし

捨てよう。」

「いいのかな？」

「いいだろ。それより、晩御飯なにがいい？」

「わ～！しょ～！く～！～！」

「レンは？」

「……………おすし……………」

「米は……………あるし、酢は作ったし……………魚だな。
ウンディーネある？」

「生食用の魚ですか？さすがに……………。」

「なければ創ればいいZE！」

「うむ、なら本来の姿に戻れ。」

「アイアイサー」

「さて、鮭、鯛、マグロ、ヒラメ、イカ、鰯これくらいでいいかな。

」

「いいと思う。」

「とりあえず10匹ずつ創るぞ。」

「アイアイサー。」

杖を湖の水につけて創生を開始する。油の乗り美味しい奴らを……
………10分後、無事に創れた。疲れたけど……膨大な魔力＝マナを消費しやがるからな。
ムーでかなり使った後だったからね。

「さて、各一匹捕まえてるし捌くとするか。」

それから、二時間後。エヴァが起きて来た。

「ふあ〜。」

「おはよう、エヴァ。」

「おはよう。」

「目を……………」

「どうした？」

「いや、いい格好をしてるな。あと、下着みえてるぞ。」

「っ、見るな！」

エヴァは素肌にてかいYシャツのみで、前が開いていたんだ。眼福？

「まったく。」

「もう晩飯できたぞ。」

「なんだ？」

「寿司だ。」

「寿司か！食べてみたかったんだ！早く食べさせる！」

「すごい喜びようだな。まあ、準備終わったしすぐだ。その前に妹に変わる。」

「ああ、あのファンシーな部屋の持ち主か。」

「ああ、ぬいぐるみだらけだったろ。チェンジ。」

「ああ。」

H
ヴ
ア
S
i
d
e

シ
オ
ン
S
i
d
e
O
u
t

いきなり姿が変わった。背丈は私と同じで髪も同じくらいだな。髪の色は白銀瞳は真紅。ふん、かわいいじゃないか。

「ほら、挨拶しなさい。」

どこからかシオンの声が聞こえてくる。

「……………レン……………(びくびく)」

「私は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。」

「……………(じー)」

「なんだ？じーとみて。」

「……………あなたに……………まちがわれて……………
……………殺されそうに……………なった……………」

「……………すまん。」

「……………べつにいい、おにいさまがたすけてくれたから……………」

「そうか。」

「じゃ、次は俺だな俺は創世。レンの永遠神剣だ。」

「永遠神剣？」

「使用者に膨大な力を与える武器のことだ。高位の物には対象を不老にしかぎりなく不死にできる。ま、簡単にいって宝具の上位の物だな。全てに共通して身体能力を跳ね上げたりできる。」

「すごいな。私も欲しいぞ。」

「作ってやるうか？」

「作れるのか！」

「ああ、作れる。今度作ってやる。」

「やった。とこるで、そこにいるかなり強いドラゴンみたいなのはなんだ？」

「ムーちゃん。」

「ムーちゃんか、わかった。とりあえず気にしたら負けだということかな。」

「まあ、ご飯食べな、せつかく作ったんだ。」

「そうだな。お、赤だしもあるのか」

「おいしそう」

「いただきます。」

「はいどうぞ。」

他の者達も食べ始めた。

「まずは、マグロだな。」

「……………」

「はい(1)へ」

「次は中トロ……………」

「だな、うむ。口の中でとろける。」

「……………」

「ああ!」

一時間後すっかり食べきった。ああ、堪能した。

「片付けますね。」

ウンディーネが水を操り食器を綺麗にして運んでゆく……………
こいつら便利だな。ここの生活はかなり快適になりそうだ。

「さて、エヴァ魔法に使いそうな素材や道具と魔法書とかいろいろ買ってきたから見てね。レンは倉庫一個とその近くに研究施設作ってあげて。」

「……………（こくこく）」

「レンも魔法ならいなさい。」

「うん、がんばる。」

こうして、闇の福音と創世の魔王が誕生した……………
ここから月日は流れる。

闇の福音と創世の魔王の誕生（後書き）

やっちまった。でもきにしない。エヴァがとユエ、メイがすきな
で無双しそうです（あ

世界樹の精霊マーテル誕生（前書き）

アンケートですが5番を追加。

5番はどの勢力にも入らずに魔法世界ぶらり旅。みかけた戦争とかは乱入してとめたりとはた迷惑になるかもしれないです。

第三勢力が一票、帝国一票、紅の翼一票です。

世界樹の精霊マーテル誕生

レノSide

あれから、190年の月日が流れました。

エヴァちゃんと一緒に魔法を極め、開発したりしました。精霊もたくさん生み出しました。新たに、イフリート、ノーム、セルシウス、シャドウ、ボルト、アスカ。この子達はめったにでてこないけどね。

「レン、やるぞ。」

「うん。やるぞ。」

私とエヴァちゃんのこの頃の日課は魔術合戦。それも新しく作って
いって戦うの。

「デオス・デア・サタナス・アポカリプス、契約に従い、我に従え、
精霊の王、来たれ、根源の破壊、消滅！！！！」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 来たれ氷精 闇の精！！
闇を従え吹雪け 常夜の氷雪闇の吹雪！！！！」

エヴァちゃんが、強力な吹雪と暗闇を発生させて攻撃してきた。で
も、残念。私のは消滅させる魔法。だからエヴァちゃんの魔法はあ
たった瞬間に削られていく。

「馬鹿な・・・・・・・・私の魔法がこうも容易く消滅させられる
か。」

「・・・・・・・・わたしの・・・・・・・・かち・・・・・・・・
・・・・・・・・」

「だな。次は負けん。」

今のところ勝ったり負けたりしてる。

「レン、ちゃんと直しとけよ?」

「……………(じく)」

でも……………勝った私が直すのかな?何か変な感じ。

「お前の方が壊したからな。」

なんで、心の中が分かる……………。

「付き合いが長いからだ。というか、顔みればわかる。」

「むう」

「マジア・エレベアも完成したし次なにするかな?」

「両腕、両足?」

「それは、シオンが完成させたな。」

おにいさまも一緒になって作ってたんだ………私
は使わないけど。

「治った。今日………侵入者………」

「だな。迎撃にセルシウスとムーが出たようだ。大丈夫だろ。」

「うん」

でも、突破される感じがする………。

シオンSide

さて、進入者か………まあ、エヴァとお茶でもしておくかな。

「エヴァ、紅茶なにがいい？お茶請けはミルクティーユだけど。」

「ダージリンで頼む。」

「俺モソレデ頼ムゼ」

つと紹介しよう。こいつはエヴァが作ったチャチャゼロだ。まあ、
ヌイグルミだな。ダージリンを用意つと。

「今度の侵入者はここまでこれるかな？」

「これたら、メリットはあるがな。」

そう、きたら永遠神剣をくれてやる。この噂はすでに流れ何人も挑
戦してきているがまだ一人の成功者もでていない。

「永遠神剣についてくわしく教えてくれないか？」

「ん？いいだろう。」

ダージリンを渡し話し出す。

「まず、永遠神剣は意思を持っている。自分の使用者を自分で決める。資格無き者が持つとみずから使用者の意識を乗っ取る。」

「危険だな。」

ああ、危険だとも運が良くても身体はボロボロほぼ戦えん。悪ければ廃人や死ぬまで戦うことになる。

「まあね。で、効果だがどれも基礎能力として身体能力向上、回復能力向上があるし魔力増幅機能もついてる。そうだね、だいたい2ランクはあがるとみていい。」

「馬鹿げているな。AならS、SでEXランクの戦闘能力を得るわけだな。」

そう、雑魚がもっても強力な雑魚。初期MAPから中盤MAPくらいまであがっちゃう。

「ようは、バグキャラ量産機？」

「そんな感じだね。うむ、ミルフィーユの出来いいな。」

「うむ、旨いぞ。あとは固有能力か。」

「永遠神剣格自に固有能力あるね。超でかい剣の永遠神剣だってある。」

たしか、惑星につきささってる奴。

「お前の森羅は森羅万象を自在に操り、レンの創世が魔力を糧に自由により出すことが出来るか。」

「創世は、イメージが固まってないといけないし。問題は作った奴が従うかはまた別だな。」

レンの場合チート能力で従えられるだけだからな。俺は、レンの力ちょっと使えるからね。その逆も然りだけど。

「おかわり。」

「俺も頼むぜ。」

「はいはい、どうぞ。」

「「お、ぬけてきたな。」」

「息アツテルナ。」

「うるさい！」

ふむ、どうやら二人ぬけてきたようだね。なら、客人としてお迎えする用意をしておこう。

「じゃあ、準備しておくか。」

「敵対したら？」

「愚問、潰すだけだ。」

「だな。私は椅子だしてくる。」

「頼む。」

さて、ロールケーキでもだすか………お茶はハーブテイ
でいいか。ノームの力でかなり品種改良して質のいいハーブが手に
入ってるからな。

準備してから二十分後彼らがやってきた。ボロボロだね。

「ようこそ、我が領域へご用件は何かな？」

「ここに強力な武器をつくってくれる奴がいると聞いてきた。」

「門番がかなり反則級の強さだったけどね。」

大精霊や神獣だしな。

「なるほど、では我々に危害を加えないかい？」

「ああ。」

「今の状態で勝てる気もしないしね。」

「よろしい。ならば、客として扱おう。どうぞ掛けて。」

「わかった。」

「ありがとう。」

二人にハーブティとロールケーキを切り渡す。エヴァとチャチャゼ口の分も。

「で、お前たち名前は？私はエヴァンジェリンだ。」

「そうか、君が闇の福音か。僕はフェイト。」

「私は、デユナミスだ。」

なるほど、この二人が完全なる世界コスモエンテレケイアの二人か。なら、試練を超えてきたのも納得するね。

「俺はシオン。ここの支配者だ。以後よろしく。」

「貴方が森羅か。たしか、懸賞金200万\$だったかな。」

「そんなんついてるんだ知らなかったな。」

時たま外に出て料理の勉強してた時に襲ってきた連中殺したのがま
ずかったか？まあいいか。

「このハーブティ美味しいね。できたら、どこで手に入れたか教え
てくれない？コーヒーもあれば嬉しいんだけど。」

「あるぞ、コーヒーはもう来るはずだ。」

シルフにもつてくるよう頼んだが………まだかな？

「あるじ〜。」

「来たぞ。シルフこつちだ。」

「おもかった〜。」

「よしよし、ほらケーキやるから。」

「わーい。」

ついでに、シルフの頭を撫でてやりフェイトにコーヒーを入れる。

「デユミナスは？」

「いただきっ。」

「まじっ。」

エヴァとチャチャゼロ、自分の分もいれて渡し味わう。

「」「」「」「」「」「」

ゆっくり味わい堪能する。

「どうだ？」

「すっごく美味しい。」

「ああ、これはいままで飲んだことが無いな。」

「よかった。」

「この豆売ってくれないかな？」

フェイトはかなり気に入ったようだな。

「いいよ。どれくらい欲しい？」

「あんまりこれないだろうから………100kg頼める？」

「お安い御用だ、後で渡そう。」

「ありがとう。それで本題だけど。」

「武器をつくってくれるか？」

「高いよ?」

いろいろ規格外だからな。

「いくらだ？」

「あんだ達クラスが持つなら……一人4000万\$
だな。」

「でたらめな値段だな。戦艦買えるぞ。」

「買えるだろうね〜でも……………」

「それだけの価値はあるが？それとも、それが分からないのか？」

「いってくれるな。もちろん分かる。」

「う〜ん、これは相談なんだけどね。一個はこれと交換じゃダメかな？」

「これは、造物主の掟「ド・オブ・ザ・ライフメイカー」についていう杖だよ。」

「どれどれ。」

これは、すごいもの持ってきたな………こいつは………

「これじゃだめだな。」

フェイトに投げ返す。

「なぜだい？」

「簡単だ。マスターキーが最低でもグランドマスターキーをよこせ。」

「なぜ、それを知っている。」

そう、今渡されたのは単なるマスターキーだ、だから断った。

「それは企業秘密だ。」

「………」

「デユミナスどうする？」

「いいだろう。ただし、これと交換する価値があるものでなければダメだぞ。そして、渡せるのはグランドマスターキーだけだ。これは、後に封印する予定なのだからな。」

「いいだろう。まず、二人とも形状は何がいい？」

「私は杖だ。」

「僕は……腕輪がいいかな。」

「デユナミスが杖でフェイトが腕輪だな。いいだろう。」

「この杖がか〜」

エヴァがいただいたグランドマスターキーで遊んでるが気にしない。杖と腕輪か……材料もとりにいかないとな。

「連絡先を教えてください。まず、材料から探さなきゃならんからな。」

Hand Side

Shion Side Out

「ある材料じゃできないのか？」

「妥協する気は無い。」

これがなぐそうだ。

「妥協する気は無い。」

「そうか、ならぬ、3年以内にできるか？」

「それはできる。」

「なあ、フェイト。」

シオンとデュナミスはほつといて、フェイトに話を聞く。

「なんだい？エヴァンジェリン。」

「これの使い方教えてくれ。」

「ん、まいいか。」

よし、これなんか力を隠してあるみたいだしな。

「これはね………かくかくじかじか。」

「なるほど。わかった。」

かなり危険な代物だな。まさか創造主の力が使える杖か………
ふふふ、面白い。

「あんまり使わないでね。」

「ああ、たぶんな。あ、シオン私の永遠神剣も頼むぞ。」

まだ、もらってないからな。

「わかった。んじゃ、2年後ここで落ち合うときに受け渡しでいいな。その杖どうする？」

「持っていつてかまわん。」

「OKOK、じゃあ最後にあなた達の身体検査だ。」

「なに？どつどつのことだ？」

「完全に適合するように計測すんだよ。2年で成長しないだろあなた達。」

「わかった。どうすればいい。」

「僕もいいよ。」

私もかな？

「私も？」

「エヴァはいいよ。後で俺が直接調べるし。」

「なっ！なにいつてるゆんだ！／／／／」

「噛んだ／＼／＼。」

「噛んだね。」

「噛んだな。」

「カミヤガッタナ。」

「大丈夫か？」

「う、うりゆさい！／＼」

「さてと、お二人さん。そこに並んでね。」

「わかった。」

「ああ。」

「フェイトとデュミナスが並んだ。私がやるか。」

「契約に従い、我が前に来い、ウンディーネ！」

召喚陣から水の奔流が渦を巻きその中から、ウンディーネが現れる。

「御用でしょうか？」

「ああ、あの二人を計測してくれ。」

「承りました。」

二人にウンディーネの奔流が襲い。二人を包み込みすぐに戻ってくる。

「終わりました。」

「はああ、驚いたよ。」

「息は出来たみたいだな。」

「あはは、でも楽しんだこれ。身体の中まで調べてくれるしな。」

私は嫌だがな。

「これで計測終了だな。どうするんだ？もう、夕食の時間だが。」

「よかったら食べてくか？」

「そうだね、お言葉に甘えよう。いいかな？」

「ああ、かまわん。」

「んじゃ、バーベキュウにするかな。いい肉と酒もあるしな。」

「ヤッタゼ。カイトイサセロヨ！」

「ああ、好きにしる。んじゃ準備してくる。」

「手伝うぞ。」

私は、シオンの後を追い一緒に台所で手伝った。

。 次の日の朝、二人は去っていき私たちも準備している

「エヴァ、旧世界に行くぞ。」

「わかった。」

場所まで聞いていなかったな。

「旧世界でなにするんだ？」

「ああ、聖地を手に入れる。」

「聖地か……って、何個あるかもしれんのか。」

「ああ、買い取って結界と守護者を置く。極悪のな。」

「それは、面白そうだな。では、いくか。」

「ああ、ムーお留守番よろしく。」

「GRU」

ふふふ、ふたりで旅行だ。楽しみだぞ。かれこれほぼ200年ここから動いてないからな。レンは旅行というか人ごみ事態が嫌いだからでてこないし、ほぼ二人つきりだ

「どづした？」

「なんでもない ほらいくぞ」

「ああ、じゃいくか。」

「とじろで、どづやって旧世界に行くんだ？」

「こいつを使う。」

ちっこい竜を出してきた。こんなのいたかな？

「なんだそいつは？」

「こいつは次元竜の幼竜クーだ。こいつの力で次元をわたることができる。まだ、子供だから旧世界の聖地くらい強い土地にしかいけないがな。」

「つまり、今回は逆に都合がいいということだな。」

にしても、可愛いな。よしよし、デートの邪魔するんじゃないぞ。

「さて、行くぞエヴァ。」

「ああ、行こうシオン。」

私たちは、クーの力によって旧世界の聖地へとかけた。

一年後、12箇所の聖地全てを大量の金を使い購入し守護者に精霊やドラゴン、魔獣達を置いた。もちろん、認識障害に人払いなど結界のオンパレードも施した。聖地そのもの魔力を使うから永久機関だ。もちろんデート観光も行った。

「聖地は終わったな。」

「ああ、いい材料も入ったな。」

「なあ、シオン次は日本に行きたい。」

日本………いつてみたいんだよねとくに抹茶が飲みたい。

「ふむ、日本か………」

「だめか？」

「いいぞ」

「やった。」

日本だ、日本に行ける！わぶ、きゆうに頭をなでられた……
気持ちいい……って、ちがうちがう。

「こら、撫でるな！」

「ちょうどいい位置にあるエヴァの頭が悪い。」

「くっ、ふん、今は気分がいい好きにしろ」

さて、ついたぞ日本！で、なんで私たちは森の中にいるんだ？

「おい、なんでこんな所に？」

さりげなく、枝とかどけたり壊したりしてくれるから歩きやすいけど。やっぱり気になるぞ。

「かなりの魔力を感じた。いい素材が手に入りそうだ。」

「そうか、ならとっととすませろ。」

「ああ。」

それから、道なき道を進み2時間後ようやくついた。

「これか？」

「だろうな、にしてもでかいな。エヴァ何人分だ？」

この、この、この、足に蹴りを入れてやった。い、痛くなんてないんだからな。

「にしてもでかいな。魔力も十分だ。ここも聖地になるな。」

「なら買い取るか？」

「もちろん。ふむ、エヴァこの大樹なんて名前にする？」

「こんなでかいんだ、世界樹でいいだろ。」

「世界樹………世界樹なら精霊もないとな。」

「おい、何する気だ。」

また、変なことし出すぞ。

「チェンジ。」

いきなりレンにかわったってことは何か創るんだな。

「……………」

手を大樹に当てて、会話でもしてるのか？

「エヴァ、魔力かして？」

「かまわないぞ、ほら。」

こいつらが魔力ほつするなんて相当だな。ありったけの魔力くれてやった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・みつけた。」

私はレンをみつめる。

∩
∩
e d i s i d e
∩
∩

H
∩
∩
S i d e
O u t
∩
∩

おにいさまの依頼。大樹の意思と会話する。

「貴方がこの大樹？」

「はい・・・・・・・・・・貴方たちは？」

「私たちは・・・・・・・・・・貴方の味方（？）・・・・・・・・・・
聖地を保護してる者。」

おにいさまが聖地を悪用されないために、材料集めのついでに保護
しているからまちがってないよね？

「そうですね、他の聖地の方から感謝の気持ちを感じます。わか
りました、私も貴方方を受け入れます。」

聖地にも感情なんてあるのかな？

「うん………これからよろしく。貴方にお願ひがある。」

これが本題。

「なんなりと」

「貴方を精霊に押し上げる、いい？」

「精霊ですか？」

「そう、全ての聖地を司る存在にするの。」

他の聖地にはここまで確りした意思は無かった。

「私でよろしければお願ひします。」

うん、この人(?)なら大丈夫。

「いくよ。創世」

「アイアイサー、魔力全快、エヴァの嬢ちゃんからもらった魔力も全部使いますZ E!!」

「がんばれよ！」

「うん。」

“ レンがんばれ。”

「おにいさまのためにもがんばる。創世よこの者を大精霊に……
……聖地を守る………うっん、世界を守る守護者に!!」

世界樹から閃光がほとばしり周りを真昼間のように照らす。

どうなったの？

「ありがとうございます。」

「どつちら、成功みたいだぞ。」

「創世のレンに不可能はありませんぜ。」

「うん。でも、もう魔力もから……きゅ」

「あつら、どつしましゅ。」

私がんばったよね？

おこいたま。

“ああ、ゆっくりお休み。”

シオ\nSide

シオ\nSide

気絶したレンにかわり俺が表に出る。

「ふう。」

しかし、身体のダルさはそのままだ。魔力が無いからな。

「貴方様は先ほどいた……………」

「シオンだ、悪いが少し魔力を貰うぞ？」

「ええ、かまいません。」

「森羅、魔力を吸え。」

「御意。」

森羅の力……………五行がもとになってるから木々からほんの少しづつ魔力を貰う。

「ふう、身体が動くな。」

「無事でなによりだ。」

「あ……………」。

「ん？」

「できたら、お名前をいただきたいです。精霊になったので。」

「なら、マーテルだな。世界樹の精霊マーテル。」

「マーテル……………わかりました。これからよろしくお願
いします。ご主人様方。」

「今日はここで野宿か？」

「そうなるな。」

さすがに、創世も動かないというより……………魔力が無い・

「……………いや、手段はあるな。」

「深夜零時になるまで待つなら創世は使えるな。」

「なぜだ？そんなに魔力なんて回復しないだろ。」

「ああ、いつてなかったな。俺が所持している宝具に零時迷子っていうのがあってな。こいつはその日一日消費した力を深夜零時に全快してくれる便利なものだ。」

「……………つまり、零時になるとさっき使った魔力は元通りになると……………このバグキャラめ！」

「失礼な……………否定は出来んがな。」

「この辺りの気候はコントロールできますので快適にすごせますよ。」

「ふむ……………ん？待てよ……………よし、今日は野宿だ。それがいい！」

「マタ何カヘンナコト考エヤガッタゼ。」

「うっさい。チャチャゼロ。」

「エヴァがそれでいいならいいや。」「飯は………お互いの血液でいいか。」

「ああ、私はお前の貰えれば満足だ。」

「俺八、食イタイガナ。」

「「知るか。」」

「「アハハ。」」

エヴァ Side

その後、食事を取りあつたあと。シオンは、寝転がって星空をみていた。私は、横に寝転がりシオンにくつつく。

「近くないか？」

「うるさい、こうつすれば温かいじゃないか。」

「それもそうだな。」

私の頭の下に腕をいれてくれたので頭を乗せ星空を見上げる。夜空には満天の星空だ。

「ん？」

マーテルがシオンに膝枕を………まあ、いいか。すりすり。

「ありがと。そういや、今日7月7日か。」

「七夕って奴か、あれが天の川？」

「だな。あれが、織姫と彦星だな。」

「綺麗なものだな。たまに夜空をみあげるのもいいか。」

それに、マーテルが空気よんでくれてあんまり発現しないし。二人つきりみたいだ。チャチャゼロは狩りにいつているしな。

「ああ、いいこと思いついた。」

「なんだ？」

「星の魔法。」

「なに？」

「星々の力を使う魔法だな。」

「そんなことができるのか？」

できたとしても制限きついな。夜限定……いや、昼間でも使えるか、見えないだけで星はある。

「星の光を使う。できそうだ。言うなら星の魔法マギア・アステリかな。」

できたら、かなり強力な魔法になるな。

「くくく、切り札としていいんじゃないか？こいつをマジギア・エレベアで圧縮してしまえばな。」

「くくく、たしかに極悪な威力になるな。完成させればだぞ。」

「三人に精霊の力を借りれば出来るだろう。」

たしかに、難しいだろうが出来なくは無いな。タイミングはここだな。

「プレゼントがあるんだ。」

「なに？」

「これだ。」

私は懐から小さい水晶玉三つ取り出しみせる。

「こいつは別荘といってな。現実と時間をずらし引き伸ばしたり短くしたりできる。まあ、難点が入ったら一日は出れないのだがな。私の別荘は一時間一日だな。」

「素晴らしいな。くれるのか？」

「ああ、シオンとレンの分だ。」

「ありがとう。なにかお礼をしないとな。」

「なら、ちょうどほしいものがあるぞ？」

そう、ほしい物がな。

「いってみ？」

「仮契約してくれ！」

いまなら聞いてくれるかな？

「うん。」

「え、いいのかー！」

「ああ、どっちが主で従者だ？」

「そうだな、どうするか……。」

「両方すればいいじゃないですか。」

「そうだな。そうするか。」

両方だと、つまり二回……嬉しいじゃないか。

「私もいいぞ。」

「いくぞ。」

「まって、心の準備、ん、ん、ちゅ、ん、あ。」

「ふう。まず一枚だな。次だいくぞ。」

「はい……ん……あ……ちゅ……んっ……
……れる……びちゅ……あ……んっ……」

「旨かったぞ。」

舌が入ってきた・・・・・・・・きもちよかった・・・・・・・・

「もっとだ、もっとよこせ。」

「ちょ！やめ・・・・・・・・ま、いいか。」

「ラブラブですね。」

こうして、一晩中キスしつづけていた。とつても気持ちよかったぞ。途中でレンに怒られたが・・・・・・・・私もおにいさまとキスした
いって・・・・・・・・どうなんだ兄弟で？問題はあんまないのか？

次の日、私はこの辺り一体の土地を買占めに出かけた。もちろん幻術で大人に変身してだ。シオンは普段幻術使うと怒るからな。予算は3000万\$だったが余裕だった。渋っていた奴も心を読み、弱

点をついて売らせた。なにせ私は悪の魔法使いなんだからな。使ったのは2000万\$あと1000万\$か結構のこつたな。といっても残りの全財産なわけだがな。豪遊しすぎたか。

「よう、おかえり」

「ただい……………すばらしいな」

私の眼前に広がっていたのは、日本家屋、日本庭園だ。砂庭式枯山水に泉回遊式。日本文化をこれでもかという感じだ。

「喜んでもらえて何より……………しかしだ、驚くのはこれだけじゃないぞ？」

これ以上に何があるというのだ？

「温泉も作った。滝湯から電気風呂、流れる風呂などもな。」

「ふふふ、最高だな。」

まさか、温泉とはな。

「ああ。」

「さて、エヴァ次は京都にいくぞ。」

「京都か！楽しみだが何をするんだ？」

「決まっている刀の技術を習う。もうすぐ江戸時代だからな。」

「了解した。私もなにか習うかな。」

「いいんじゃないか？とりあえず風呂入るぞエヴァ。」

「わかった。いこ……」

「どうした？」

「いつ、一緒に入るってことか！」

「そつだぞ。あんな広い風呂一人では行っても詰まらん。」

「そうか……そうだな。」

よし、覚悟を決めた。

「いくぞ!」

「ああ!」

三人であらいつこをし温泉を堪能した。

「きもちい〜」

「きもちいいな。」

「……………(ムムムム)」

ハイサイドアウト

世界樹の精霊マール誕生（後書き）

次回からは江戸時代で暴れます。徳川吉宗、暴れん坊將軍です。

紗代と小次郎（前書き）

エヴァ「さて、はじまったな。なぜか開始した。江戸時代編。」

シオン「新たに待ち受ける強敵。今回は死ぬかと思った。」

エヴァ「森羅の力使ってないからだろ。」

シオン「うんでも、神鳴流は使ったよ？いろいろオリジナルいれてたけど。」

レン「うん、雷鳴剣・迅雷とかの半オリジナル技とかだね。」

エヴァ「そして、江戸編ヒロインの紗代だな。ぱつとでてきてシオンかつさらいおってからに。」

レン「でもそのおかげでエヴァさんはおにいさまとの仲がさらに進展したね。」

チャチャゼロ「ムフフ、ダッタナ。」

エヴァ「う、うるさい。」

レン「では、本編をお楽しみください。」

創世「おれさまの出番は~~~~~」

森羅「まほら編まであんまない。」

創世「マジデ……！」

紗代と小次郎

シオンSide

2年後、世界樹の枝を加工して永遠神剣第2位幻想、永遠神剣第2位神託を作った。幻想は分身など幻術を押し上げる。具体的に言う
と幻による殺傷が可能。神託は、神の啓示・・・・・・・・す
こし先の未来がみえたりする。戦闘面では、敵の攻撃を予測し殲滅、
回避に優秀。使い手をかなり選ぶ。

まあ、こんな感じのをフェイトとデュナミスにやった。フェイトに腕輪型永遠神剣幻想をデュナミスに杖型永遠神剣天啓。どちらも喜んでたから満足だ。

さらに時は流れ、1720年になった。この時には刀の腕はかなりついた。なんてったて120年修行したしな。大概の神鳴流を使えるし、改良をするようになってる。

表の世界では、徳川吉宗が八代將軍になり大きな戦も無く安定した平和が訪れているように見えた。しかし、裏では妖怪達が暴れまわっていた。陰陽師もいるんだろぅがたいした効果を出せていない。という話をエヴァにした。

「おい、まさか介入するつもりか？」

「反対？」

「まさか！大いに構わん。むしろ、やろぅ！」

よし、エヴァの賛成は得れた。まあ、反対してもやめないけどな。

「レンはどうだ？」

パートナーである最愛の妹の反応を見る。

“今の時代だと暴れん坊將軍ですか？”

“ああ、どうやらこの世界じゃ本当に暴れん坊見たいだぞ。”

「私は、おにいさまにまかせます。基本的に旅はおにいさまがお願いします。エヴァちゃんの邪魔はしないので。”

「いいこだな、レンは……………よし、撫でてやるじ。」

「」

レンもすっかりエヴァに懐いた……………ってまで、今表に出ているのは俺だ。どうやって撫でるんだ？

「ちょ！俺を撫でるな！」

「仕方ないではないかレンは中なのだからな。」

「……………おぼえてるよ。」

「……………うん、わすれた。」

「……。」

こんな感じで旅に出ることとなった。

手押し車に旗を挿し、旗には『剣客商売』とかいてエヴァを手押し車に乗つけて旅に出る。

ここで、幻術を使いエヴァと俺は完全な日本人になっている。もちろん和服を着ている。エヴァは子供服だ。

「なんだこれは！私が子供見たいではないか！」

「くくく、その背格好じゃ仕方ないだろ。あきらめろ。」

「ぐっ……………しかし……………」

「その和服、似合ってるぞ。」

「そっ、そっかならいい。」

扱いやすい奴。似合ってるのはほんただけだな。

今、京都へ向かう街道を歩いている。

「今日は良い月夜だな。」

「ああ、綺麗な月だ。」

そっ、俺たちは夜移動している。吸血鬼だから夜目もばっちりだからな。獲物も夜のほうが出やすい。

「しかし、団子はいいもんだ。とくにこの三色団子に月見酒。うむ、

風流だ。ほら、あ〜ん。」

「もぐもぐ、たしかに味はいいが、少し練りこみがたりんな。」

「まあ、そういうな。こんな月夜だ、野暮なことはよそづ。」

「そうだな。それより……………」

「ああ、前から何か来たな。」

前方で人と人ならざる気配がする。さて、どうするかな。

「どうするっ？」

「どうしよっか？」

「そうだな、このまま進もう。襲ってきたら潰せばいい。」

それって、絶対潰すフラグだよな……………。

「わかった、そうするか。」

しばらくすると、前方で鬼に追われている青年を見つけた。

「た、助けてくれ!!!!!!!!!!」

「だと、どうする?」

「残念だが、現在閉店中だ。」

鬼に向かい。

「どうぞ、お構いなく。俺たちは先いだけなんで。」

いちいち雑魚にかまってられっか。それに、あの餓鬼長くもたねえし。

「そういつわけには、いかねえな。見られちゃったからにはお前らも始末する。」

「ああ、恨むんなら逃げたこいつを恨むんだな。」

「おい、身の程知らずどもがああ言っているぞ?」

「ち、面倒だがしかたないな。身の程を教えてやるか。」

「人間風情がいきがりやがって!」

さてと、エヴァを後に置き、前に出て抜刀の構えをとる。

「食らいやがれ!!!!!!!!!!」

鬼の一体が殴りかかってきたが、遅すぎるな。

「斬鉄閃。」

螺旋状に気を放ち、拳ごと身体を叩ち切る。

「存外脆いな。」

「なっ！！貴様ほんとに人間か！！」

「だれも、人間なんていつてないだろ。ただの通りすがりの真祖だ。」

「なっ！馬鹿なこんな所に「うるさい、死んでおけ。斬空閃！！」があー！！」

ふん、これで終わりだな。雑魚のくせに俺の旅の邪魔しやがって。

「おい、小僧生きてるか？」

「・・・・・・・・・・はあ、はあ、アン達強いんだな・・・・・・・・・・」

どうやら、真祖とかは聞こえてなかったか、分からなかったみたいだな。それより腹に穴が開いている・・・・・・・・・・後数分の命か。

「すくなくとも、あんな雑魚にやられないぐらいにはな。」

「ならお願いが……ある……この先にある龍神村……にい
で……この先にある龍神村……をたすけ……
るおれの……ねえちゃん……をたすけ……
てくれ……。」

「おい！」

「もう、死んでるな。」

「くそ、無理やり金とペンダントにぎらせやがった。」

「いくら入ってるんだ？」

「一分。」

現代で1万5千だ。(一両6万計算)

「で、どうするのだ？あきらかに安いぞ？」

「もらったもんはしかたない、いくぞ。」

「律儀だな。ほっておけばいいものを……………」

「うっさい、契約は遵守する。それに、いざとなればこいつの姉からもらえばいい。」

「くくく、それもそうだな。」

とりあえずこの餓鬼の死体を焼いて瓶に遺灰をいれてやる。アフターサービスで故郷にぐらいはとどけてやるか。

“やさしいですね。”

“ ついでだ。”

「そのペンダントは持って行くのか？」

先ほど、餓鬼から金と一緒に渡されたものだ。

「姉の手がかりにはなるだろ。」

「じゃ、いくか。次の目的地は龍神村………なにがま
ってるか楽しみだな。」

「まあ、退屈しのぎになればいいさ。俺的に柳生新影流と戦いたい
がな。」

次の日、茶屋をみつけたのでさっそく団子とお茶を注文した。エヴ
アが俺の膝に座った。………重くな
いからいいか。

「はい、どうぞ。」

お団子とお茶をとる。エヴァは団子に夢中だな。

「女将、この近くに龍神村という村はあるか？」

情報収集せねばな。

「ここから、しばらくいって交差路を右にいけばありますが……
……いくのはお勧めしませんよ?」

「なにかあるのか?」

多分、鬼だと思つが……。

「はい、夜な夜な鬼がでるそうので、近く生贄を捧げるそうです。」

「生贄?」

「はい、あの村には代々不思議な力を宿す女の子が生まれるそうですよ。龍神の血を引いてるとかで。」

「鬼どもにとって格好の餌というわけだな。」

「わかったありがとう。こいつは礼だ。」

少量のお金を女将に渡し、何個か団子をつつんでもらい龍神村を指す。

しばらく進み交差路を右に行く。

「どう思う？」

「……………おそらく、龍神の血がまことならかなりの魔力をもっていることになるな。おそらく、力も龍神関係だろうよ。」

「たしかにな。」

エヴァの考えどおりだろう。すこし、さきを見てみるか。

「まずいな」

千里眼を使い道を見るとに鬼どもと妖怪がうじゃうじゃいる。

「どうした？」

さっき見た光景をエヴァに伝える。

「時間かかりそうだな。」

「まあ、しかたないか。いくぞ、エヴァ押していくから片っ端から殺せ。」

「うむ、了解だ。ついでにチャチャゼロ。」

「ヤットデバンカ？」

「ああ、思う存分殺しまくれ。」

「ケケケ、切りマクルゼ。」

チャチャゼロはりきってるなうなら、こっちも出すか。

「おいでムー。」

召喚陣を通し自宅にいるムーを呼ぶ。

「GRUUUUUU。」

「オーダーはただ一つだ。鬼と妖怪を片っ端から見敵必殺だ。見つけ次第殺せ。」

「イクゼ」

チャチャゼロとムーが走り出し林の中に消えていく。

「いいのか？」

「あいつらに軽く殺されるようならいらんだろ。」

「そうだな。じゃあ、私達もいくか。」

「ああ。」

そうして、龍神村へむけ出発した。

「まかせろ、リク・ラク ラ・ラック ライラック 来れ氷精 爆
ぜよ風精 氷爆「ウイス・カースス!!!」

空气中に大量の氷を瞬時に発生させ、凍気と爆風で相手を問答無用でなぎ払う。

「ふはは、私の敵ではないな!!!」

「ほら、どんどんくるぞ。」

「わかつている、リク・ラク ラ・ラック ライラック 闇の精霊ウンデトリリーギンタ
29柱!!!魔法の射手!!!スピリトゥス・オグスクササタ・マギカ 連弾セリエス・闇の29矢!!! さらに、リク・
ラク ラ・ラック ライラック 来れオプスクーリー(ケノテートス) 虚空の雷アストラブサト
薙ぎ払え(デ・テメトー)! 雷の斧テイオス・テュコス!!!」

魔法の射手ぶっ放してそくざに雷の斧か。雷苦手なはずだが・・・
・・あそんでやがるな。

「俺も、一発うつつとか。」

「なに撃つんだ?」

「デオス・デア・サタナス・アポカリプス、契約に従い（ト・シユ
ンボライオン） 我に従え（ディアークネーター・モイ） 炎の覇ホ・テュラ
王ネ・フロコス 来れ（エピゲネーター） 浄化の炎フロクス・カタルセオースフロキネー・ロンファイア 燃え盛る大剣 ほと
ばしれよ（レウサントーン） ソドムを（ピユール・カイ） 焼き
し（テイオン） 火と硫黄ハ・エスフレイン・ソドム 罪ありし者を（ハマルトートウス）
死の塵に（エイヌ・クーン・タナトウ） 燃える天空！！！！」

一定空間、千里眼とあわせて、道の先まで見えている敵のいる空間を指定して放った。超高温となり敵は解けて消え、地面は焼け焦げていた。ちゃんと林の中は指定しなかつたから安心だ。

「やりすぎじゃないのか？」

「別にこれくらい普通だろう。」

「そ、そうか……道が開けた。とつとといくか。」

「ああ、このペースなら夜には付くな。」

さて、まにあうか？

シオンSideOut

紗代Side

少し時は遡る。

私は神鳴^{かみな} 紗代^{さよ}13歳。この村……龍神村で育った。家族は弟が一人。父親は分からず、母親に育てられた。

私と母には力があつた。みなが龍神様の力という。我が家計の女子は代々瞳が蒼く蒼いほど力が強いそうだ。その中でも私の力は歴史

上一番高いらしい。そんな力はなく親子で静かに過ごせればどれだけ良かったか……。三年前に龍神村に大勢の鬼達がやってきて鬼に支配された。そのとき、母は鬼に食われた。そして、今度は私の番。鬼は村の人々の安全を保障するかわりに私をさしだせと要求してきた。村に鬼に逆らう力は無く従うしかない。

「すまん、紗代。お前を差し出すほか手は無いのじゃ。」

村長さんは疲れきった表情で私に謝って来た。もう、覚悟はできてるから、気にしなくていいのに。

「気にしないでください。少し痛いのを我慢すればいいだけです。」

「それが、ちがつのじゃ。」

どう違うんだろう？母を食べて力を付けた鬼達なのに。

「それが……。紗代を母体にするといっておった。」

「えっ、それって。」

私は、村長が言った言葉を疑った。それほど信じられないことだった。

「昨日言っておったのじゃ。紗代を母体にして、鬼の子を生ませそれを食らうとな。そうすることで安定して力を得ることができるらしい。」

「そんな……」

「奴らは紗代の母親を食って後悔しておった。一人しか得られないと。どうにか安定して供給する方法が……」

「それが、母体にして子を食らうということ……?」

「まさに悪鬼羅刹の所業よ。」

「いつ、いやです。そんな辱めをつけるなんて!」

「しかし、そうせねばこの村は滅ぶ。そして、近隣の村々にまで被害が広まるやもしれん。」

「そんな……」

私は体中から力が抜けた。あの……母を食らった鬼に辱めを受けなくてはいけないとは……しかし、そうしなければ他の人々が殺される。どうしようもないのか……この力も怪我をすこし治すだけなのに……。

「すまん、この三年間手出ししてこなかったのは紗代の成長を待っておつたのじゃろう。二日後の満月の晩に迎にくるといっておつた。それまで、身を清めておくようにな。」

「……はい……」

村長さんがでていった。なにもする気がおきない。そう、この時もっと私がしっかりしていれば弟はあんな無茶なことはしなかった。少なくともとめる事ができていた。

本来ならもう、帰ってきている時間だったのに……。

小次郎
Side

紗代
Side
Out

．．．．．そんな．．．．．姉ちゃんが．．．．．あいつら
に．．．．．そんなの絶対にダメだ！どうにかして助けな
い。でも、俺にそんな力は無いし．．．．．村の外に助けを呼びにい
こうにも鬼達に封鎖されてる。どうする、どうする考える何か道が
あるはずだ．．．．．
．．．．．
．．．．．。

十分後、一つの考えが閃いた。かなり無茶な方法だけど．．．．．
．．．．．姉ちゃんを助けるためだなんとしても助けを呼ぶん
だ。

村から鬼達に渡す酒を運ぶ仕事を変わってもらった。

これで、用意ができ龍神の祠へと向かった。

今龍神の祠は現在鬼達に占拠されている。

「なんだ餓鬼がなんのようだ。」

「お酒を持ってきました。」

「そうか、ちょっと味見してやる。よこせ！」

「どうぞ。」

お酒を差し出した。

「よし、いい味だ。もっていけ」

「はい。」

奥へと入れた。これで第一段階完了。次は第二段階だ。第二段階はさらに奥へとすすむこと。

しばらく、進むとお酒を置く場所についた。そこに樽を置き、持ってきた取って置きのお酒をもってさらに奥へと進む。

「おい止まれ！」

見張りか、言われたとおり止まる。

「こんなところで何をしている。」

「はい、剛鬼様ゴウキに特別なお酒をお届けしようと思ひまして。」

剛鬼というのはこの鬼達の頭だ。

「そうか、なら俺がとどけよう。そいつをよこせ。」

「いけません、これは直接お渡しするよう言われております。」

「ここが正念場だ。」

「どつしてもか？」

「…どつしてもです。」

「なら、死ね！」

つく、失敗したか！じっと迫ってくる棍棒を見つめる。

俺の眼前で棍棒が止まった……………たすかったのか？

「ふん、いい根性だ。いいだろう、こい。」

「はい！」

第二段階完了……………最終閉門だな。

奥に歩き、鬼の人が案内してくれた。ついに剛鬼のいるところへとついた。

「生きて帰ってくるんだな。」

「はい。貴方は？」

「俺は炎鬼だ。」

「俺……僕は小次郎といいます。ここまで、ありがとうございます。」

「かまわん。それじゃあな。」

「はい、さようなら。」

扉を開け龍神様の祠へと向かう。

中には滝がありその横に祠が作られている。

「なんだテメエは……。」

「この特別なお酒をお届けに参りました。」

「ほう、もってこい。」

「わかりました。」

お酒を持っていき、侍らせられている女の人にお酒をわたし滝の方に下がる。

「ぎ…………ぎぎぎ。」

女の人がお酒をいれて剛鬼に差し出す。

「おう…………お前が飲んでみる。」

「はい。」

ち、ばれたか。

「ぐっ！がはあ！」

「ごめんねお姉さん。滝の方へ後ず去ってゆく。」

「やっぱり毒かやってくれたな小僧。」

「ふん、飲んで死んでくれればいいものを……………」

「

「貴様どつかで見たと思つたらあの小娘の弟か。大方姉の為に俺を殺しに来たつて所か残念だつたな。」

「くっ。」

「大人しく死んでおけ！」

大皿をいきよいよく投げつけてきた。大皿に合わせて滝に飛び込んだ。

「ぶぶあゝ、はあはあ。どろにかいったか。」

ここは村から結構離れた川原だ。ここに龍神様の祠にある滝は繋がっている。

「よし、作戦成功だ。あとは救助を呼ぶんだ。」

俺の目的は龍神様の滝を使い脱出することだ。毒による暗殺なんてたんなるついでだ。

「形見の首飾りも無事だし。いくか。」

俺は街へむかって走り出した。

それからしばらくして、鬼の関所を難なく突破した。

そして、表通りに出たとき狼に見つかった。くそ、狼まで従えてるとか計算外だぞ！即座に狼を倒し走り出した。

「待ちやがれ！！！」

「だれが待つか！……！」

しばらく走った後、回り込まれ戦うしかなかった。

「ここまでのようだな。てこずらせやがって！」

「だれがあきらめるか！」

ねえちゃんに教わった剣で………舞の剣技だけどころか戦えるんだ。

その後、どうにか追っつての5体のうち3体まで倒したが腹に致命傷を受けた。朦朧とする意識の中そいつらはやってきた。

「た、助けてくれ……！！！」

藁にもすがる思い出声をかけた。

「だど、どつする？」

黒く長い髪を棚引かせ手押し車に座る少女。

「残念だが、現在閉店中だ。」

閉店だと？少女が座っている手押し車に掛けられた旗には『剣客商売』の文字……………どうぞ……………る？

「どうぞ、お構いなく。俺たちは先いだけなんです。」

助けてくれる……………気はないのかよ……………だめだ……………意識が……………朦朧とする意識の中見たのは見たことも無い剣技を使い鬼を瞬殺する青年の姿だった。

しばらくして、少女が声をかけてきた。

「おい、小僧生きてるか？」

「……………はあ、はあ、アン達強いんだ……………」

この人たちなら……………ねえちゃんを……………
・たすけられるかもしれない。

「すくなくとも、あんな雑魚にやられないぐらいにはな。」

「ならお願いが……ある……この先にある龍神村……にい
るおれの……ねえちゃん……をたすけ……
てくれ……」

青年にいままでねえちゃんの嫁入り道具でも買ってやろうと貯めて
いたお金を全部と首飾りを渡し……

「……後を……たの……
む……」

これで……よか……た……。

小次郎 Side Out

剛鬼 Side

くそ、あの餓鬼のせいで一人死んじまったじゃねえか。まあいい、どうせ明日の晩にはあの紗代って小娘が手に入るんだしな。」

「頭！大変です！！！！！」

「なんだ！」

「逃亡した餓鬼を追っていた奴らが何者かに殺されました。」

まさか、あの餓鬼が生きてるはずもねえし。逃亡者は別か……
……しかし、追ってを殺せる力を持つ奴らか危険だな。

「警備を強化しろ。」

「どれくらいで？」

「最大だ。予備の戦力全てを街道方面に向けろ。」

「そこまでは、必要ないのでは？」

「嫌な予感がしやがる。いいから言われたとおりにしろ！」

「ぐはあ！.....」

ち、死似やがったか。

「おい、報告しろ。」

「はっはい！」

くそ、今日の晩はお楽しみだったのによ。

「ここに向かっている連中がいます。」

「ああん？そんなんで一々報告するな！」

くそ、使えねえ奴らだな。

「違つぞ、剛鬼。」

「なんだと？炎鬼よ。」

「はい…………配置した連中はどんどん殺されてます。」

「すでに半壊状態だそうぞ。」

「馬鹿野郎！そんなことあるはず無いだろ！たとえ陰陽師の連中が300人いようとそんなことおきるはずねえ！！！」

あそこには二千近い鬼や妖怪がいるんだからな。

「事実です。敵はたった2名と1体、1匹…………すでに、千以上殺されております。」

「く…………ほんとなのか…………？」

「ああ、まず間違いない。」

くそ、どうする？俺の力で勝てるのか？まてよ全ての兵力使って弱まらせばいいんじゃないか？そんな簡単にこっちに来れるはず無いんだからな。

「よし、すべての兵力を進入者にあてろ。」

「よろしいので?」

「ここは俺と炎鬼でいい。それ以外の全てを侵入者に回すんだ。」

「了解しました。」

これで、この村や祠にいる連中もたせばかなりの数になる。念のため、炎鬼にも準備させるべきだな。

「お前も準備してろ。本気で相手を潰せ。」

「わかった。」

炎鬼が本気なら大丈夫だろう。何せ炎王の名を冠する鬼なんだからな。

剛鬼SideOut

紗代Side

昨日から小次郎の姿が見えない。村のみんなにもさがしてもらったけど見つからない。あとは、竜神様の祠だけ……嫌な予感がする。秀吉さんの話しじゃ昨日お酒をもって龍神様の祠にとどけにいったらしい。それから誰も見ていない……

……やっぱり……もうすぐの儀式の時間。そのとき、聞いてみよう。

どうか小次郎をお守りください龍神様。

そして、夜空に満月が輝き儀式の時間がやってきた。龍神様の祠前
にある舞台へと神事の服を着て向かった。

「よく来たな。」

そこには既に剛鬼と炎鬼がいた。

「はい。」

村長さんや村人の皆もあつまっている。

剛鬼は私を汚らわしい目でなめるように見つめてきた。おもわず体を抱いてしまう。

「やて、じつちんきて貰おうか。」

炎鬼って鬼は動かず目をつむっている。

「わかりました。」

舞台へと上がった所で止まった。

「どうした？」

ここで聞かなきゃ、もうあとはないんだから。

「聞きたいことがあります。」

「なんだいつて見る。」

「弟・・・・・・・・小次郎を知りませんか？」

「ああ、あの餓鬼か。」

やっぱり知ってる！

「教えてください！」

「いいぞ。ただし、こっちにきな。」

「分かりました。」

私は剛鬼の横に行きました。

「きゃっ！」

剛鬼は私を抱き寄せ穂を舐めて来ました。気持ち悪いけど我慢です。

「弟は！」

私は剛鬼を睨み付けます。

「あいつは、死んだぞ。」

そんな・・・・・・・・・・嘘です・・・・・・・・・・。

「う…………嘘です…………。」

「本当だ、俺を毒殺しようとしやがったから殺してやった。」

「そんな…………。」

小次郎……………まで、死んじやったら私は一人……………もう……………。」

「生きている可能性もあるがな。」

「えっ。」

「何言つてやがる。あの時、俺は確かに……………。」

「あいつは、あの瞬間自ら滝に飛び込んでいた。恐らく生きてるだろっな。」

「おいおい。」

その話しが本当なら……………小次郎は……………

.....

「だが、他の連中が脱走者を見つけたと聞いていたからどうなるか分からんがな。」

「そうですね.....ありがとうございます。」

わざわざ、教えてくれるなんて以外に優しいのかな？

「どつちみち、死んでるだろ。侵入者もろともな。」

「それより、こいつを飲んでもらおうか。」

「なんですかそれは？」

得体の知れない物です。ごぼごぼいって白く濁ったもの。

「こいつを飲んだらお前は俺から逆らえない。飲まなくてもいいぜ？ここにいる連中が死ぬだけだからな。」

「分かりました。」

飲もうと口を近づけた・・・・・・・・生臭くて気持ち悪い・・・・・・・・
村長さん、みんな・・・・・・・・ごめんね、小次郎・・・・・・・・ごめ
んなさいお母様・・・・・・・・。

「いきます。」

「ああ、いけ。」

どうか、龍神様皆をお救いください。私はどうなってもいいですか
ら。

「飲む必要は無いな。」

「まっただくだな。」

「ケケケ、ドウセイソイツラハ死ヌダケダシナ。」

「どこだ！どこにいやがる！」

辺りを見まわしてる剛鬼。

紗代 Side Out

シオン Side

何とか間に合ったな。まったく空飛ばなきや間に合わなかったぞ。
（
手押し車はおいで来た）

「なんだ手前は！！！！！どうやってここに来た！！！！」

「うん？どうやってだと見て分からのか馬鹿者め。飛んで来たに決まってるだろ。」

うん、たしかにそうだな。質問の意図は違つたらうけど。

「ちげえ！あいつらはどうした！兵がいたはずだ！」

「ああ、あのゴミどもか。やつらなら、逃げたか死んだぞ。」

「だな。今生き残ってるのもうちの子が食ってるところだろう。ゆえに増援はこないと思え。」

ムーが食事してるからな。

「そして、俺たちが何者かという質問には………答え
る必要は感じないが………。」

ここは龍神をあがめてるんだつたな。

「龍神の使い？」

「なっ！」

「なんだそれ、もっとマシなのはないのか？」

「ま、なんでもいいだろ？どうせ、こいつらを殺すだけだ。悪いな依頼金一両とこのペンダントを持ち主にもらったんだ。契約は遵守させてもらう。よって、貴様に与えられるのは死のみだ。」

「ふざけるな！……！」

ふざけてないが、いいたい気持ちは分かるな。

「さて、どっちが来るんだ？」

地上に降りて、二人の鬼を見る。あつちのより、こつちの寡黙な鬼の方が圧倒的に強いな。

「あの！その首飾りの持ち主は……………」

ん？じゃあ、この子が依頼にあつた子が助けに来てくれていった。

可愛いな、しかたない代金はまけるか。

“おにいさま？”

“まじめにするよ。”

「ああ、この前の持ち主は死んだよ。」

「そうですか……………」

「ふん、無駄死にしたわけだな。」

「そうじゃないな。本来なら来る気がなかったのに、あの小僧、いや少年が命をとって金なんか渡すから断れなかったわけだからな。すくなくとも無駄死には無い。」

今では、感謝してるよ。この鬼は当りだ。

「この野郎！炎鬼やっちまえ！」

「わかった。下がっている。」

「ああ。」

少女と鬼はさがる。そこにエヴァがしかけた。

「小娘はもらっていくぞ！」

「が！」

ゲートを使い彼女を救い出したか……………やるね。

「こっちは確保した安心しろ。」

「OK〜こころおきなく戦おうか。」

「いいだろう。」

舞台をリングにみたてて互い準備する。炎鬼っていうのは剣か……………
……………こころは、ちゃんとするか。

「俺はシオン・・・・・・・・森羅のシオン。あんたは？」

「炎鬼・・・・・・・・炎王鬼だ。」

「なら、炎王鬼。なんであんなのに従ってるんだ？」

「借りがあるからだ。」

「律儀な奴だな。なら、賭けをしようか。」

「賭けだと？」

「勝った方が相手を好きにするというのはどうだ？」

「..しする..」

「いいだろ、やって勝て！..!!」

「..しする..」

よし、楽しくなってきたな。

「じゃあ。」

「ああ。」

「「いざ、尋常に勝負……！」」

「「うらあああああああ……！」」

即座に、お互い切りあい、炎王鬼の剣と森羅がぶつかるが、炎王鬼がふつとばされる。

「みかけによらず力があるんだな。」

炎王鬼は空中で体勢をととのえ何事も無かったように見える。

「あ、たしかにずるいな。よく聞け、俺は吸血鬼の真祖だ。こっぴえて数百年生きてる。だから、手加減とか無しで全力で行こうぜ。」

俺だけ種族ばらさないのは反則だしな。まあ、満月でさらに底上げされてるが。」

「吸血鬼か……………この夜に会いたくない相手だな。」

「降参するか？」

「まさか！炎王鬼、押して参る！！！」

あはは、プレッシャー半端ないな。剣が炎の大剣になりやがったな。さすが、炎王ってか。ここからか……………面白！！

「来い！森羅が受けてやる！！！」

「はあ！！！」

炎の大剣を高速で打ち込んでくる。28連撃とか反則だろ！

「ぐー！やるな！なら、雷鳴剣！！！」

こちらも刀に電気エネルギーを纏わせ切りあつ。

「くっ！」

すでにお互いの剣戟は音速を超え衝撃波を発生させている。

「……………すげい……………」

「こいつはまずいな。」

「ダナ。」

「なにがですか？」

「お互いまだ小手調べの段階ということだ。」

「これですか！」

「ああ。」

「ドンドン周りガヤバクナルゼ！ゴ主人！」

「ああ、三重結界を張るか。」

「お願いします。」

村人は既に避難してるし、エヴァが結界をはったようだ。なら安心だな。

「炎王鬼。」

「なんだ？」

「上げてくぞ！」

「いいだろう！」

さて、こいつならどうだ！

「浮雲・旋一閃！」

「なに！」

肩を掴んで引きながら足を前に払って、敵を空中で回転させそこにさらに技を放つ。剣……刀に集中してたな。

「雷鳴剣・迅雷！」

剣の電気エネルギーを使い加速させ36連撃を空中にいる回避不能の炎王鬼に叩き込む。神鳴流を開発して作り上げた奥義だ。

「ぐ。惑え炎獄！」

「っち。」

いそいで離れる。地獄の業火を召喚しやがった。くらったらやばいな。

「やるな。」

「貴様こそ。」

「くくく。」

「ふふふ。」

「月下天衝！」

「斬神！」

爆音が響き、結界をふるわせる。俺は吹き飛ばされながら相手をさらに攻撃する。

「斬空閃・連撃・極大雷鳴剣・迅雷！」

こいつで極大雷鳴剣で36回遠距離攻撃だ！もちろんすきも無いぜ！

「斬天開放！」

まじか、宝具もちかきついな。森羅つかってないからだけど。

「さっきの耐えるのか、かなり無茶して攻撃したんだがな。」

「斬天を開放せねばこちらがやられていたな。次はこちらの番だ。」

「くそ、こい。」

「炎獄・鬼炎斬！受けてみよ」

目算20Mある地獄の業火でできた大剣か。やってくれる。

「デオス・デア・サタナス・アポカリプス 来れ（アギター・）

深淵の闇 デネフエラ・アビュシイ・エンシス・インケンデンス 燃え盛る大剣！！ 闇と影と憎悪と破壊（エト・インケ

ンデイウム・カリギニス・ウンプラエ） 復讐の大焰（イニミーク

ティアエ・デア・ストルクテイオーニス・ウルテイオーニス）！！

我を焼け 彼を焼け（インケンダント・エト・メー・エト・エウム）

そはただ焼き尽くす者 シント・ソールム・インケンデントニス 奈落の（インケンデイウム）業火！！ ゲヘナエ！！

ステージネット
術式固定！！！！
コンプレクショ
アルマテイオーネム
掌握！
魔力充！（スプレームントウム・プロ・
）
「術式兵装」！！！！」

眼前にせまる巨大な炎の大剣……………。

「間に合った。秘奥義・朱雀！いつけええええ！」

爆音と閃光で真昼様な明るさになる。

「おい！無事か！」

「シツカシ、イマノデ結界ガ壊レタナ。」

「大丈夫でしょうか……………。」

「お前そういう趣味なのか？」

「なにがだ？」

「そ……その……ええい、わかれ！」

「じゃあ、なわけないだろ。」

「なっ！からかっていたのか！」

「ケケケ、カラカワレテナ。」

「まあ、仲間になれ。百鬼夜行作るんだ。」

「百鬼夜行か……いいだろう。そういう、契約だからな。」

よし、一人目ゲット。いや、精霊たちたすからもっとだけどね。

「ば……ばかな……こんなはずは……」

「

「これが現実だな。」

さて、この「ゴ」をどうするか……よし、決めた。

「お嬢さん。」

「はい、なんですか龍神様？」

はい？なんで、龍神様？

“最初……龍神の使いとかいったから？”

まあいい。

「君に聞きたいんだが……」

「それは……敵を取りたいです。」

「紗代、神鳴 紗代です。」

「なら、紗代。君に力をあげよう。レン、チェンジ。」

「え？」

俺とレンが入れ替わる。

「えええ、女の子になりましたよ！」

「貴方に力をあげる。いい？」

「はっ、はい！」

「私の80%分の魔力と気をあげる。贈り物のルーン、ギューフ！」

ルーンの数によって回復したほとんどの力を紗代さんに与えた。

「やりすぎだろそれは！」

「すごく、力がみなぎって来ます。」

「ちえんじ。」

おにいさまにかわる。

「ふう、その力で奴を倒すといい。」

「はい！」

紗代 Side

私は剛鬼の前に立ち宣言する。

「母と弟の敵とらせていただきます。」

「き、貴様に何ができる！」

「これくらいはできます。舞え、炎獄。」

これは、母が得意としていた力。さらに、いただいた力のほとんどを使い炎獄は剛鬼を焼き尽くしていく。

「嫌だ！死にたくない！助けてくれ！」

「そういつた人たちに貴方は今まで何をしてきましたか？自らの罪をつぐないなさい。」

「ぎゃああああああああ。」

これで、敵は討つたよ………。

「さて、これからどうするかな。さすがに疲れた、面白かったが。」

「たしかにな。俺はどうしたらいい？」

「基本的に本拠にいるか別荘にいるかだな。とりあえず別荘にいつ

て見たらいいさ。中で好きな建物でもたてとくといい。」

「わかった。では、さらばだ。」

別荘とかいう中に炎王鬼さんは入っていった。

「あの、もしよろしければ私の家にきませんか？」

今、私の家は私しか住んでないし・・・・・・・・・・でも、殿方を止めるのは初めてです。

「そうだね、お邪魔させてもらうか。」

「わかった。」

私の家に移動する間に村長さんにことの次第をほつこくすると村中で宴会騒ぎになった。

みなさんは、荷物を置いた後宴会に参加されるそうなので、私の家に置いた後村の宴会に参加しました。こんなに活気があるのは三周年ぶりです。

それから、二時間後シオンさんが龍神の祠の方へとむっていきまして。気になった私は悪いと思いつながらおっていきます。

紗代 Side Out

シオンSide

ふうん、ここが龍神の祠か。神聖な空気が滝を通して流れてきているな。

「これが祠か……………あれ？」

これって龍の牙？壁に埋まってるけど……………まさか……………なるほど、ここに龍の遺体があるんだな。ん？この気配どこかで……………あいつか。

「おい、じーさんいるんだろ。」

「ふおっふお、ひさしいのシオン。」

オーデインの爺さんが現れた。

「なんで、こんなところにいるんだ？」

あんた仮にも、主神だろ。

「こやつに頼まれたんじゃよ。お主に礼と子孫をまもってくれてありがとっつたえろっつな。」

「なんで、オーデインの爺さんが知ってたんだよ。」

「こやつは昔馴染だからじゃ、聞くか？」

「いい、興味ない。」

「そ、そうか……………」

話したかったのか？聞かないがな。

「お礼じゃがなこやつの遺体を材料に何か創ればいい。かなりの品じゃからな。」

「いいのかよ、友人の遺体だろ？」

「問題ない、魂になってこの世界を見てただけじゃし、本人ももう転生するっていつておるしの。」

じーさんが、壁に埋まっていた牙や骨、竜核などをとりだし渡してきた。

「なら、たしかにいただいた。」

「うむ、わしは消えるな、仕事がたまっておる。」

「お〜がんばれ。」

「お主もな。」

紗代の家に戻り借りた部屋で考えてると紗代が尋ねてきた。他の連中はまだでてるみたいだ。というか朝までさわぐんじゃないか？

「さて、どーすっかな。」

「あの……………」

ゆっくり、していると紗代が尋ねてきた。

「どうした？」

「お礼とお願いをしに来ました。」

「お礼とお願いか、お願いからどうぞ。」

さて、なにがどうなるやら。

「はい、お願いですが………私を旅に連れて行って剣術を教えてください。」

「とつとつだね。」

「すみません。お礼は私自身をさしあげます。」

「言葉の意味わかっていつてるんだよね？」

「これはいいのか？顔真っ赤にして恥ずかしくてるけど。」

「はい、貴方のご自由になさってください。」

「旅って言うけど家族は？」

「父はわかりませんし、母と弟は………。」

「あゝしまった、父もいないのか。」

「っあ。」

紗代を引き寄せ唇を奪う。もう、据え膳食わねば男の恥ってね。

「ん、ん……………あ……………」

ぼーとして、瞳も潤んでるな。

「いいだろ。剣も旅も叶えてあげるけど、辛いよ？覚悟はいい？」

「はい。」

覚悟はいいみたいだ。

「じゃ、続きいいかな？」

「は、はい。私は貴方にモノです。どうぞお好きになさってください。」

「じゃ、いただきます。」

「ん」

次の朝………大変だった。

起きた目の前には仁王立ちしたエヴァンジェリンがいた。

「これは、どついでのことだ？」

バックにゴゴゴゴゴとどす黒いオーラが見えますよ。

「なにがだ？」

とりあえず、しらばっくってみる。

「お前の隣で裸で寝ている紗代についてだ。」

昨日は激しくしたしね。

「ケケケ、昨日ハオ楽シミダッタナ。」

「ああ、楽しんだ。」

「貴様!!!!!!!!!!!!!!」

「エヴァなんで怒ってるんだ？別に合意だからかまわんだろ。」

「そ、それは！その……………。」

顔真っ赤だな、やっぱいじりがあるな。

「ん……………おはようございます。」

「おはよう。」

「おい、紗代「これはどういことだ？」

「え？え？あ、きゃあああああ。」

「落ち着け。」

「はっ、はい。」

「で、どういことだ？」

紗代のお蔭でとりもどしたみたいだな。

「えっと……昨日は……シオン様に私を捧げました・
……。」

「しっおん。」

「なんだ？どうして欲しいんだ？いつてみ？」

「う……私にはしてくれないくせに……もう、

知らん……………うう。」

エヴァが泣き出した。やば、いじめすぎたか。

「ほらエヴァ」

エヴァを抱きしめて、なでてやる。

「お前が求めるんだったらいつでも答えてやるぞ？俺はお前のも好きだしな。」

「本当か！」

「ああ……………きゆうに元気になったな。」

「うるさい。答えるといったんだ今から楽しませてもらうぞー！いままで散々じらされた分も含めてな！」

「お手やらかに……………お願いします。」

「ダメだ。」

エヴァに押し倒されました。焦らし過ぎた？でも、普通そうなるか何年じらしてたことやら。

「じゃあ、私は……」お前も混ぜられ……えっ、いいんですか？私が入って。」

「かまわん。人間の寿命などたかが知れてる。たしか、今の日本は一夫多妻制たる問題ない。」

色々ある気はするが別にいいや。この子達がそれでいいなら。

「わかりました、喜んで参加しますね。エヴァ様。」

「あと、鍛えることについてもチャチャゼロから聞いた。私も入ってやる。私とシオンとレンで鍛えてやるんだ覚悟しておけ。」

「はい、よろしくお願いします。」

こうして、新たな仲間と新たな関係を手に入れた俺たちは紗代の修行を行うためしばらく滞在することにした。

シオンSideOut

紗代と小次郎（後書き）

紗代「やっちゃんいました。どうしましょう。」

エヴァ「うむ、楽しかった。ところで私の永遠真剣は？」

メア「考えてはいる。永遠真剣第 位福音。効果はD&Dにでてるおっぱいどらこんとおんなじでひたすらブースト宣言する。あとはロー・アイアスだっけ？FATEの強力な障壁。あれを展開可能な奴を考えたが……。」

シオン「強すぎだな。エヴァがもつとほぼ誰も勝てないという……。」

メア「うん、あとはユエにもたせる永遠真剣魔王とか。紗代に次回もたせる予定の永遠真剣龍神と永遠真剣紅桜。などを考え中だよ。」

レン「どつちにしろチート。」

エヴァ「まあ、フェイトとデュナミスのやつも地味に強いしな。」

紗代「私のは多分下位になると思います。」

チャチャゼロ「アンケートモ、エドヘンオウルマデボシユウシテルカラナ。ツマリ、サヨガシヌマデダナ。」

紗代「不吉なこといわないでください！ただ、江戸編だけで、寿命ですから！」

メア「予定通り良くかは分かりませんが、これからもよろしく願います。」

剣聖への道〜地獄の特訓〜（前書き）

レン「……………現在の……………」

創世「現在のアンケート二次発表だぜ。耳をかつぽじってよ……ぐはあ、やめ、痛い痛い！」

レン「……………（ばん！ばん！）」

創世「俺が悪かった！だからゆるしてくれ……………はあはあ、どうぞ、おききくだせえ。」

レン「……………帝国2……………ぶらり旅2……………」

紅の翼1……………独自勢力1……………」

創世「となってるぜ。あと、感想で教えてもらった各話にあった誤字を修正したぜ〜ありがとうな！」

紗代「神祖を真祖にしたりとか。チャチャゼロさんにも修正入りしました。」

レン「……………今回予告……………地獄……………死なせてください。」

紗代「ガクガクブルブル」

創世「それでは、本編を楽しみやがれ！ゲ、やめて！ふまないで……………」

劍聖への道へ地獄の特訓へ

シオンSide

さて、昨日・・・・・・・・・・三日間ほどエヴァに求められていた。

紗代は途中で抜けたり入ったりを繰り返した。いかげん話を進めることにした。

「さて、いかげん話しをするぞ。」

「はい。」

「むう、しかたないな。」

エヴァを膝の上に乗せてやる。エヴァは身体力を抜いて身を委ねて来た。

「まず、俺たちのことからいこうか。」

まず、幻術をといて本来の姿にもどる。

「綺麗な金髪………外国の方々だったんですね。どうりで、名前が不思議な感じでした。」

「ああ、私の本名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。そして、こっちがチャチャゼロだ。」

「ヨロシクナ。」

「はい、こちらこそお人形さん。」

「マア、イイゼ。」

さて、次は俺の番かな。

「俺は、シオン・・・・・・・・苗字は特に無い。で、チエンジ。」

姿が反転し、レンへと変わる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／」

「どづした？」

「どづやら、思い出してるみたいだな。」

「み、見られてたんですか！」

「基本的に、寝てるか見てるかだぜ。あつと俺は創世っていうんだ、よろしくな！基本的にご主人の変わりにしゃべるぜ！」

「こつちも可愛い人形さんです。」

「……………（こくこく）」

“レン、恥ずかしいのは悪かったが……………挨拶はきちんとしような？”

“……………うん……………。”

「……………ねん……………よろしく……………」
「……………」

「はい、お待ちしております。よろしくお願ひします。」

「よし、これでいいな。」

「……………ちえんじ……………」

・・・／／／

元に戻りレンは中へと引っ込んだ。

「まあ、最初は人見知りするけど仲良くしてやってくれ。」

「はい、分かりました。次は、私ですね。私は神鳴 紗代です。」

「じゃ、次はさらに説明するね。エヴァ頼む。」

エヴァに説明を頼んだ。吸血鬼のこととか。

「・・・・・・・・・・というわけで、私達は真祖の吸血鬼という存在だ。」

「そうなんです。驚きました。」

「どうする？お前は仮にも、龍神・・・・・・・・神に仕える巫女なのだろう？我々は闇の存在だ。」

そうなんだよな、龍神の祠みただ。神聖な気配がかなり伝わって

きた。

「はい、たとえそうだとしても。私は旦那様のものです。龍神様も許してくださると思います。」

「なら、いいか。」

「その旦那様っていうのはやめろ。」

なんか、こそばゆい。

「わかりました。シオン様とお呼びしますね。」

あんま変わってないがいいかな。

「私はエヴァでいい。」

「分かりました。エヴァさんでいいですか？」

「ああ。次はお前のことについて話してくれ。」

「はい、私の一族は龍神の血が流れていると言われていました。一族の祖先が龍神様と交わり子を成したと伝えられています。実際に一族の女性には代々不思議な力が現れます。私の場合は龍眼が、母は炎の龍を呼んだりできました。炎王鬼さんにはかないませんでした。」

「まあ、あいつに炎で挑む方が間違ってるからな。」

あいつの炎の力はすごかったからな。

「はい、それは仕方ありません。一族の女性は治癒の力もあつたので簡単な怪我なら治せました。だから、村の方々も感謝してくれたりしてたので、龍神様を祭るようになったそうです。」

「男の方には何も無いのか？」

それは少し気になるな。

「ほとんど女性しか生まれませんが、男性の場合は治癒力と身体能力、頑丈さなどがすごかったと聞きました。」

「でたらめだな。」

「ああ、龍眼について何か分かるか？」

「わかりません。ただ、いろんな物が見えるようになりました。」

「それは、後々調べるか。」

時間はあるわけだしな。

「後は……私の父は偉いお方だとは聞きましたがあつたことも覚えてないので分かりません。」

「そうか……。」

「マ、気ニスルナヤ。」

「だな、じゃあ次にすることがある。紗代、一族の墓はあるか？」

「ありますよ？」

「なら、こいつを入れてやれ。」

遺灰をいれた瓶を渡す。

「これは、まさか……………小次郎の？」

「ああ、一族の墓に弔ってやれ。」

「はい、ありがとうございます……………。」

これでよかったかな？

“いいと思う……………泣いてるけど……………”

「なら、手伝ってやるか。案内しろ。」

「はい！」

俺たちは神鳴家の墓へと移動した。

シオン
Sideout

紗代Side

お墓に移動した私達は、小次郎の遺灰を墓に収め線香をあげて祈った。

「お姉ちゃんは強くなるね。強くなって母と貴方の分まで生きるよ。そして、私達と同じような人をださないためにがんばるね。」

弟に報告をすませ、決意を新たにす。すこし、後の皆のそこへと戻る。

「もういいのか？」

「はい、いきましよう。」

「分かった。いくぞ、エヴァ」

「ああ。」

そして、私の家にもどりシオンさんの別荘に入った。

「なんですかこれは……………」

目の前に広がっているのは雄大な大自然と見たことの無い家。

「あゝ、勝手に出歩くなよ？死ぬぞ。」

死ぬって一体何が……………。

「ここは、大精霊からはじまって精霊やら魔獣、妖精やらが大量にいるからな。この空間も大精霊どもが大量の魔力を循環させているし、世界各地の聖地ともつながっている。そのため、独自に進化した動物や植物、魔獣どもがたくさんいるのだ。実力がないとすぐあの世行きだ。」

「わかりました、気をつけます。」

「まあ、この辺は安全だ。あそこでもしばらく泊まる。現実で1日
ここでは24日だ。存分に修行できる。」

「わかりました。」

「まずは、エヴァが教える。魔法を。」

「私は日本の魔法はしらんぞ?」

「それは後から紗代自身がどうにかするだろ。それにだ魔力の使
方と効率よい運用方法教えるだけでいいだろ。マギア・エレベアは
教えてやってくれ。」

「分かった。では、いくぞ!」

私の知らないところで色々決まっていくな。

「ああ、そつだ修行中私達のことにはマスター、師匠と呼べ。」

シオン様を師匠。エヴァさんをマスターですね。

「分かりました。」

「あ、毎日まずは基礎訓練からしてね？筋トレとかも。」

「わかった。いくぞ！」

「はい！」

こうして、修行の日々が開始された。

半年間の基礎訓練が終わりました。かなり厳しかったけど耐え抜きました。

体中に重力魔法で重力を数倍にあげられて走らされたり、川で泳がされたり……。川の中には鮭鮫（シャケ）のようなサメかなり

凶暴)に追われたり……一回足食べれたこともあり
ました。その時は、エヴァさんがすぐ助けてくれて控えていたウンディ
ーネさんがすぐ治してくれました。そして、また泳がされました。
……

よく、生きていました……いえ、死んだほうがま
しだったときも何度かありました。その度に治療されてはまた、繰
り返される。おかげで、痛みには平気になりましたけど……
……ここ半年、成長していません。ずっと重力魔法が掛けら
れっ放しで抑え付けられてるせいだということです。おかげで、そ
の辺の魔獣も倒せるようになって来ました。

「だいぶ基礎できてきたな。」

「あんな無茶な訓練させられれば嫌でもあがりますよ。」

あれから、シオン様とはあっていない。なにやらレン様が新しい魔
法を研究中とかで……はやく、会いたいです。

「さて、次はなににするかな……なんかいいのないか？チ
ャチャゼロ。」

「ソウダナ。イマ重力ガハチ倍ダロ。ジュウ倍ニスルダケデカナリ
カワルンジャナイカ？」

「そうだな、そうするか。」

「や、やめてください!」

今ですら大変なのに一気に2倍も増えるなんて。

「ダメだ、もう決めた。」

「そんな……………」

「というわけで10倍って、やったね、ついに二桁だ。」

嬉しいような嬉しくないような……………。

「しかし、鮭鮫も飽きてきたな……………そうだな、
チヤチャゼロお前が紗代を襲え。」

「マジカ。」

「え……………」

「ああ、四六時中攻撃しろ。」

「切り刻ンデイイノカ？」

「かまわんぞ。」

「そんな、まってくださいマスター。」

重力十倍でお人形さんから襲われろってむちゃくちゃにも程があります！

「またない。ウンディーネ！」

「御用ですか？エヴァ。」

「ああ、今から紗代に徹底的について死に掛けたら全快まで回復させてくれ1、2週間ほど。」

今死刑宣告が………気のせいですよ？気のせいっていつまでか。

「アキラメロ。」

「そんな。」

「分かりました。聖域の守護を他のものに頼んだら行きますね。」

「いや、それはこっちで頼んどく。炎王鬼あたりにな。だから今から頼む。」

「分かりました。小夜さん行きますよ。」

「はい………っ!。」

ウンディーネが私の中に入って来て、身体の隅々まで染み渡る。

「これで、いついかなる時、傷を負っても死には至りません。心臓も私が防御しますし、血流もコントロールします。」

「それって……」

「つまり、死ぬほどの痛みは味わうが決して死なないってことだな。」

「ケツケケ、コレハ楽シメソウダゼ。」

「じゃ、がんばって戦闘技術を学んだな。人生これ常時戦場なりってシオンがいつていた。ここで得られる技術はかなり有効だ。まあ、あとは魔力と気をうまく使うんだな。今のお前なら大概どうにかなるはずだ。」

「はい、がんばります。」

「っというわけで、私はシオンのところへ行って来る。がんばれ。」

あ、ずるいです！

「エヴァさんずるすぎます！」

「はっはは、知らんな。じゃ、チャチャゼロ30分後スタートしろ。では、さらばだ。また会おう諸君。」

そういつて、エヴァさんは空を飛んでいきました。ずるい、私も甘えたいのに……………。

「オーイ、早く行カナイト襲ツチマウゼ？」

「分かりました！手加減してくださいよ！」

走りながら、お人形さんをお願いしてみます。

「マカセロ、最初八加減シテヤルゼ。」

ほ、よかった。私は、木々を足場にしどんだん離れていきます。時折、方向かえたりしながら……………だいたい重力10倍もなれてきましたね。（別荘内の木々はかなり丈夫。たとえ、折れてもすぐ芽が出てどんどん成長してゆく。）

「ウンディーネさん、これからよろしくお願いしますね。」

しばらく、パートナーになるウンディーネに挨拶をする。

「はい、昔エヴァも通った道です。がんばってください。」

「そうなんですか、エヴァさんも……………」

「ええ、エヴァの時はここまで完全なサポート体制とってませんでした。真祖ですからね。」

「なるほど。ただの……………」

急いで木を蹴り、地上に降りる。降りるまでかかった時間は一秒、さっきまでいたところに包丁やクナイが突き刺さる。

「ケケケ、気ツキヤガッタカ。」

「手加減してくれるんじゃないんですか？」

「手加減シテルダロ？」

そういつて、両手に包丁をもって襲い掛かってきます。怖すぎです！私は刀を使い迎撃にはいりますが……………」

「ケツケケ、甘イゼ。ホラ、死亡一回メダゼ！」

「あああああああ！」

刀を弾き飛ばされ両腕を切り落とされた。

「ツイデニ、両足モイタダキダゼ。」

今度は両足を切られた……………痛過ぎる。

「くっ……………いたい、いたいいいい。」

「ケケケ、ソリヤナじゃ、三十分後開始ダゼ。アバヨ！」

そういつて、お人形さんは姿を消しました。

「では、治します。」

数分後、治癒が終わり動けるようになった体を確認する。

「お人形さん容赦なさすぎです。」

「今の実力で挑む方が間違っています。相手の実力をちゃんと把握してください。」

「はい………がんばります。」

弟との約束のためにもがんばろう。

それから、その日死んだ回数は19回でした。お人形さんに襲われたらほんの少しも生きられません。いかにして、見つからないようにする………その考えでやっていくと一日25回前後ですむようになりました。

一週間がたち、近頃は気配探知、隠蔽を駆使して反撃もできるようになりました。この頃の死亡回数は一日10回を下回ってきました。お人形さんはこのごろ魔獣もけし掛けるようになり、寝てるときもご飯のときも襲ってくるようになりました。

「今日ハティラノザウルスヲツレテキタゼ!!」

「一体なんてもの連れてくるんですか!」

急いで身支度を整え迎撃します。

「イタカラシカタナイナ。」

「くっ、この!」

しばらくして、ティラノザウルスさんを撃退しました。ここは太古に滅びた恐竜もいるから驚きです。

「チ、ツマンネエナ〜コノ頃殺セナクナツテキタゼ。」

「ふふふ、そう簡単にやられませんか?」

「ア〜ドウスツカナ〜……………ア、イイノガイヤガ
ツタ。」

「え？」

「オイ、シルフ！」

まさか？

「な〜に〜？」

「暇か？遊バナイカ？」

「遊ぶ〜！」

この時、私は嫌な予感を感じた……………確定したので
すぐ逃亡を図ります。

「ルールハ紗代ヲ適当ニ追イ回シテ殺スンダ。イツ殺ツテモイイゼ。
ドウダ？」

「ん、あるじ、たちのやくにたつ？」

「アア、ヤリ過ギナイヨウ三十分は殺シタアト何モシナインダゼ？」

「うん、前にやったエヴァちゃんとの鬼ごっこか、わかった。」

「アア、ジャイクカ！」

やっぱりそうなりますか。これは不味いです。

「いっくよ。」

「イケ、イッチマエ。」

「。GO。」

そして、放たれたのは無数の見えない風の刃………避
けるはずも無くその日から最初のころにもどった感じがしました。

Inside

紗代 Side Out

今私は、自分の別荘の研究室にいる………研究しているのはおにいさまと分離できる魔法を研究中。

「失敗………（しゅん）」

やっぱり、そんな簡単にはいきません。

“ 思うんだが、オーデインの爺さんがいつていた一枠しかないというのが問題なんじゃないか？ ”

“ ？ ”

“ コップを世界だとすると魂は水だ。万物には魂が宿ってるとか言うしな。そして、世界には俺たち………一人が来てまんぱんになったんじゃないかなって思ってたさ。正確には一人の身体と、魂

二つこれ以上はいらないうって感じなんじゃないかなとね。”

なら、世界の容量を増やせば……無理……
……じゃあ、世界を作れば？……創世
でも世界は……創れそうだけどエネルギー
が無い……できないことも無いけど時間が
かかりすぎる……ダメ……
なにかないかな？……。

“うーん、異界でもいいのかもしれないけどね。”

異界……あ、あれならできる？

“見つけた……実験してみる……。”

“何を見つけたんだ？”

“固有結界ならどうなって……あれって異界でしょ……
……？”

“固有結界か、たしかにアレならできるけどできるのか？”

“ なければ 創
るだけ ”

“ そうか、がんばるか。 ”

“ うん。 ”

「 おうい、元気か? 」

「 エヴァちゃん、どうしたの? 」

「 顔みにきたかれこれ半年合っていないからな。 」

そういつてエヴァちゃんは私を抱きしめた。私も抱きしめ返す。

「 ありがとう。 」

「 ああ、気にするな。 」

私を撫で回してくる 嫌じゃ無いけどくすぐりたい。

「……………くすぐりたいよ。」

「そうか、何創ってるんだ？」

私を撫でながら聞いてきたので答える。

「うんと、おにいさまと合える魔法。」

「できたのか？」

「できてない……………けど、可能性あるのを考えた。」

「教えてみる。」

「うん、固有結界っていうのだけど……………。」

「ああ、あるな。」

「え、あるの？」

あるなら、創らなくていい。

「ああ、ドールマスターになるため修行したときに聞いた話しだからな。現実世界のメガロメセンブリアかオスティアに固有結界の魔法書が禁呪指定で封印されてると聞いたな。」

「あるなら、いいや今度取りに行こう。」

今は紗代さん達に時間あげればいい……………あせらなくても時間はたくさんあるんだから。

「いいのか？というか、私達を目の敵にしてるような連中だが……………」

「邪魔なら滅ぼすだけだよ？」

「くくく、それもそうだな。私も付き合おうか。」

「うん、ありがとう。」

「“そういえば紗代はどうしたんだ？”」

「ああ、今チャチャゼロに襲わされている。」

「そうか、安全策はとってるんだろ？」

「もちろん。」

「じゃいいか、俺は寝る。」

「お休みなさい。」

「まで！私の相手もしろ！」

「なら、レンと楽しんでろ。おきたら相手してやるし、じゃお休み。」

「寝ました。」

「ふふふ、ならレンにあいてして貰おうか。」

なにか身体が震えます・・・・・・・・・・エヴァちゃんが獲物を見る
目をしてます。

「大丈夫だ優しくしてやるからな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・キスと処女はあげないよ？／／／／」

「ああ、それ以外で楽しませてやる。」

「エヴァちゃん・・・・・・・・エッチです・・・・・・・・。。。」

「文句はシオンに言うんだな。」

「・・・・・・・・。。うう。。。。。」

その数日間、エヴァちゃんと気持ちよくなりました。

おにいさまが起きてきたので変りました。

「ところで、エヴァよアレから結構時間たってるが紗代はいいのか？」

「あっ！」

「どうやら、忘れてた見たいです。」

シオン
side

急いでエヴァとともに紗代の下に行く。レンの別荘は時間の流れが違っているので俺の別荘ではエヴァがでてからすでに二ヶ月近くたっている。

「おい、紗代無事か？」

「あ、シオン様お久しぶりです。」

血で真っ赤に染まった服を着た小夜と、シルフの大量の風の刃を避けながら会話している。

「あるじ〜紗代ちゃん〜あたらなくなっただ〜」

「マツタクダゼ、タマニ俺ガマジデ放ツタ奴シカアタラナイゼ。」

「大分、回避技術とか高くなってるな。」

「あっはは、私のおかげだな。」

「うん、だれかさんが日にち忘れてくれましたから。」

「ごめんなさい。」

すんなりエヴァが謝るのもめずらしいな。まあ、たしかに悪かったがな。

「別にいいですけど。もう、いいですか？」

「そうだな、チャチャゼロとシルフもいいぞ。というか何でシルフまで参加してたんだ？」

「退屈だったから。」

「なるほど。」

「それで何度殺されたかわかりません。」

「まあ、いいじゃないか。かなり強くなってるぞ。」

「はい。ウンディーネもありがとう。」

紗代の身体からウンディーネが出てきた。

「こちらこそ、楽しかったです。」

「とりあえず温泉いって着替えてこい。洋館の裏手にあるから。」

「分かりました。行きましようエヴァさん。」

紗代にエヴァが連れていかれた。

「さて、ご飯の準備でもするか………チャチャゼロお前とシルフもいってこい。」

「エー。」

「シルフ連れて行ってエヴァに引き渡して来い。」

「了解」

「ヤメロー」

さて、今日の献立は……あれにするかな。

空を飛んでいる巨大なエイじら（えいとくじらが融合した大きな魚。空をとんでいる。）

「デオス・デア・サタナス・アポカリプス 契約により我に従え（ト・シユンポライオン・ディアコネート） 高殿の王 来れ巨神を滅ぼす（エピゲネーテートー・アィタルース） 燃ゆる立つ雷霆（ケラウネ・ホス・ティテーナス・フテイレイン） 遠隔補助 魔陣展開！ 第一から第十 目標捕捉！ 範囲固定！ 域内精霊圧力（イントウス・セー・プレマント・スピリトウス） 臨界まで加圧！ 3（トリプス） 2（ドウオーブス） 臨界圧！ 拘束解除！ 全雷精（オムネース・スピリトウス・フルグラノレース） 全力解放！！ 百重千重と（ヘカトンタキス・カイ） 重なりて（キーリアキス） 走れよ（アストラ） 稲妻！！ 千の雷！！！！」

千の雷をエイじらに叩き込み落とし、即座に止めをさす。このクラスの奴は千の雷くらっても死なないからな。飛行タイプのくせして。

「しばらく、食料には困らんか……しかし、いたいことどうなってんだ？ たしかレンと創世が赴くままに創りまくったといっていたが……変なんばっかだな。気にしたら負けか。」

その後、料理を作り仲良くいただきました。ステーキとかエンガワとか塩焼きにしたりしてもうまかった。

次の日、滝で紗代の修行だ。滝に身を打たれ清める。流れ落ちる水流に身体をいれて精神を集中させる。

「冷たいです。」

「さて、上から何か落ちてくるかもしれないから気をつける。今日の課題は素手で滝を割れ。」

「え、無理ですよそんなの！」

「気を使え、あとは明鏡止水っていう奴があつてな、自分を無にして高めることができるんだが、それも覚える。」

「無茶言いますね……………」

だろうな〜がんばれ。ちなみに明鏡止水は自分を無にして自然体で身体のを引き出す技法だった気がする。無我の境地とかそんな奴だった気がする。

「分かりましたやってみます。」

それから、2時間後、紗代は精神を集中しているろがんばってるがうまくいかないようだ。

「ひまっだ〜。」

エヴァが甘えてきた。よし、かまってやるか。

「ほら、エヴァ。」

「なん……んっ！ん〜。」

抱き寄せ口付けしてやるとすぐに舌を絡めてきた。そのまま、どんどんエスカレートしていきエヴァの身体を揉みまくる。

「あ……あ……そこ、きもちい……。」

そんなことを20分ほどやっていると。

「何やってるんですか！ずるいです！」

と紗代に怒られた。怒ってる内容がなんか違う気がするけど。

「あ……おまえは、ん……課題が終わったら……あああ、
はあはあ、んん……してもらえ……もっとして……」

エヴァは身体を震わせてイッタみたいだな。もっとしてやるが……
……というか、紗代がクリアするまでしつづけるがな。

「わかりました。がんばります。」

それから、一時間後。

「もう………やめ……あああああ。」

「だめだ。紗代が終わるまでこのままだな。」

「むりだろ……………ん……………いくらなんでも……………」
「……………ああ。」

さっきから行きっぱなしだな。

「あはは、さてどうなるかな？」

紗代Side

ひどいです。ずるいです。私もして欲しいです。

心を無にしろっていつでも……声は水音で聞こうと思わなければ聞こえないけど……深呼吸して……わぶ、滝の中でした……シルフの攻撃避けさせた時の感じを思い出して……滝の流れに身をまかせ……なおかつながされないように……。

目を開くと色々な情報がいってきた。遠くで鳴いている鳥や水浴びしている動物たちや食事している魔獣……そして、近くにいる二人に精霊達……この感覚を内にむければ……私の中に二つの大きな力……霊力（魔力）と気……この二つを……すると、力がわいてきた……。

「おい、龍眼発動したぞ。」

「ふえ………ほんとだ………目が蒼くなってる。」

「覚醒しでしたか？どっかの誰かさんがバカみみたいな基礎修行させてたし。」

「うるしゃい………咸卦法まで………ちゆかいだし
たじよ………」

「ちなみに、いろいろかみまくりというかなんというか………
可愛いが。」

「だれのせいりや~~~~!!/~/」

私はいつきに貯めた力を上に放出すると重力魔法もろとも滝を縦に割った。

「あ……………できたあああああ！……！」

「馬鹿、気をつける！」

「え？きやあああああああ！……！」

もどつてきた水に押し流されました。

「おい、大丈夫か？」

「はい……………平気です。ありがとうございます。」

気づいたらシオン様に助け出されてました。

「ならよかった。じゃ、今日の間を忘れずにいるよ。今日は終了
つとなんかしてほしいことは？」

「じゃあ、可愛がってください。／＼／」

「Ok」

その後たっぷりと愛していただきました。途中からエヴァさんも乱入してきましたけど。

それから、さらに半年で魔法も習い。もう半年で剣戟も覚えました。闇の魔法も……。神鳴流という剣術だそうである。覚えただ私は免許皆伝をいただきました。さらに、炎王鬼さんと戦い勝利して私と契約（使い魔的なもの）していただきました。勝てた理由は永遠神剣のお蔭です。剣と魔法の習得した後、気と龍眼の修行するときにいただきました。

永遠神剣第5位龍神。形状は刀、この子のは龍神様の牙や龍核を使い作ったそうです。神剣の基本効果の身体能力強化とこの子の二つの特殊能力。一つ目は所有者の潜在能力解放。これは、まだ普通なんですが……。最後の一個、龍神化……。

の効果は、10分間のみ所有者の戦闘能力を10倍化し、全ての魔法が詠唱無視で使用可能。ただし、使用后とてつもない激痛が襲いますしばらく、動けないどころか死ねない苦しみを味わうことになります。固有結界内な時間制限が伸びるみたいですけど、私にはできません。炎王鬼さんと戦った時初めて使いましたが……。・勝った後二週間ほどウンディーネのウォーターベットの中でした。掛け布団の重さや衣擦れだけで激痛が全身にはしるのだからしかたがありません。

「あとは実戦経験だな。」

「うむ、間違いなく現代最強の名を欲しいままにできるな。人間の中では。」

人間の中限定なんですね。

「重力10倍。炎王鬼と戦う以外かけっぱなしだんだろ？」

はい、炎王鬼さんにはなんとか……油断してるところに龍神使って勝っただけですし、実力では負けていますね。

「今は15倍だな。自分でかけだしてるからな。」

「恐ろしいな。大体現実で一ヶ月かな。」

「そんなに短いんですか？」

既に、この中にはいって2年近くたってます。

「ああ、単純に30日が24倍だからな。」

「じゃあ、旅を再開するのか？」

「そうだな。紗代を連れて剣客商売かな。」

「あの、江戸で剣術大会が開かれるって聞いたことがあります。いつてみていいですか？」

「ふむ、江戸か………近いしいかな。いいよな？」

「ああ、私は構わない。」

「なら、次は江戸だな。」

やった、ここにいる人達うあ精霊さんみなさん強すぎていまいち強さわからないんですよ。剣術大会でためしてみましよう。

「ああ、そうだ紗代。」

「なんですか？」

なんででしょう？何か変なことお願いされる気がします。

「神鳴流として、道場破りしてね。これ師匠命令。」

「えええええ。」

「いいなそれは、もし負けたら鍛えなおしだな。」

そんな、無茶苦茶な……………。

「なら、その時は俺が稽古つけてやるぞ。」

「炎王鬼ならたしかにいいな。使い魔より弱い主など無いしな。」

「だな。あと、道場破りのときは気と魔力、神剣は無しだな。」

どんだんへんな方向にいきます……。

「あ……………」

「「なんだ？」」

シオンさんとエヴァさん二人の師匠が同時に返事します。

「がんばりますから……………勝ったらご褒美くださいね？」

「ああ、いいぞ。」

「うむ、まかせろ。」

がんばってみましょう。それにしても、私も自分の技考えてみようかな？

それから、現実に戻り旅立つ準備をしてからシオン様とお墓参りと龍神様の祠へと行きました。

「いまさらだけど、ほんとにいいのか？」

「はい。後悔はありません。」

振り返って決意を陳べます。

「そういや、一つお願いがあるんだがいいか？」

シオン様からのお願いとは夜伽以外ではめじらしいですね。

「なんでしょう?..」

「舞見せてよ。一応神剣龍神は舞にも使えるようにしてあるし見てみたい。」

だから、鈴なんてつけてあるんですね。

「わかりました。もう、ここに龍神様は感じませんので……
……この舞は貴方様に奉納いたします。」

そして、私は古くから一族に伝わる舞を踊る。

これは、神楽舞を元にした舞なので神事も兼ねて使われていた。

「綺麗だ。」

数十分後。ただ一人のために踊られた舞は終わった。

「お見事、とても綺麗だった。神聖な気配だけでなく人ならざるほど美しく神秘的だったよ。」

拍手と共にそんなこと言われてたら……照れてしまいます。
／／／

「ご満足いただけて何よりです。何か至らぬ点ありましたか？」

「ん〜無いって言えは無いんだけど。今度巫女服かな？そういう服で見せて欲しいね。」

「普通の着物ですみません……………」

「いや、それでも十分すごかったからね。気にしなくていいよ。踊る技術は俺から見たら完璧に見えたし。」

「ありがとうございます。でも、これは母の踊りなんですよ……………」

そう、母に教えてもらった母の踊り。

「それじゃダメなの？」

「はい、我が一族は各自自分の舞に昇華させ踊るのです。私はまだそこまでできていません。だから、旅に出て色々な事柄に触れて行きたいです。」

そして、私だけの舞を貴方に奉納したい。一族の女性は好きな殿方に舞を奉納して嫁いで言ったから。

「なら、ためしに剣術にその舞いれてみたらいいんじゃないかな？
剣の流れを踊りと合わせてみたいいい線いきそうだけど。」

「……………そうですね……………」

「あと、戦闘のときにも有効だな。神楽ってトランス状態になれるか結構有効かもね。俺の知ってるところじゃ剣舞って呼ばれる踊りもあるしね。」

「わかりました。挑戦してみます。」

「ああ、じゃいこうか。我が巫女よ。」

笑いながら、手を差し出してくれました。

「はい、我が神よ。」

その後、エヴァさんたちと合流した。今日はいいことがありました。

紗代 Side Out

ぞあれ……何が我が巫女だよ……
まった。エヴァに神剣渡してとつと寝よ。

「エヴァどこだよ？」

家の中にはいなかった。

「どこだよ。」

庭のほうか……屋根のうえかよ。

「どうしたんだこんなところで？」

「星を見ていた。」

「星か、そういえば星の魔法完成したぞ。」

「本当か？」

「ああ、まだ二、三個で戦闘で使えないがな。」

改良の余地ありまくりだしな。

「どんなのだ？」

「その前に、星をみてなにしてたんだ？」

「笑うなよ？」

「笑わない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・星占い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

「ぶ。」

「笑うな〜〜〜〜／／／」

今更星占いか。相変わらず楽しいな。

「まあ、いいんじゃないか？」

「ふん、私にはお前とレンしか共に生きる存在はいないのだからな。」

「まあ、たしかに吸血鬼の真祖に寿命はあるかどうかも分からんな。」

「ああ、それでふと考えてな。」

「まあ、忘れてるようだが精霊達に寿命は無いぞ？」

「そうなのか？」

「少なくとも設定はしていないな。」

「ああ。だから、独りになることは無いだろ。」

「そうか、よかった。」

やはり、エヴァの笑顔とほいほいものだな。

「エヴァ、プレゼントがある。」

「なんだ？」

エヴァの左手を取り、薬指に指輪をはめる。

「こ、これは／＼／＼」

「少なくともこれで、一人ではなくなるだろ。」

「いいのか？もう、かえさないぞ！」

「それ、壊れることも無いだろうしな。」

「おい、これってまさか……………」

「ああ、世界一豪華なエンゲージリングじゃないか？」

「ふん、だろうな。なんいったて永遠神剣なんだからな。」

「そうだ。永遠神剣第二位福音気に入ったか？」

「ああ、大喜びだ」

この笑みみれただけで作ったかいはあつたかな。

「
」

「そいつは、倍々にブーストしつづける機能とそれを対象に渡せたりもでき。障壁を100層にもわたり展開する。ただし、マジックキャンセルはどうにもならん。結界破壊ならある程度対策は取ったがな。防御と支援、攻撃と万能タイプの神剣だな。」

「すごいな。」

「あと魔力発動体もかねてるから、かなり便利はずだ。」

「ああ、ありがとう。そして、これからもよろしくな」

「ああ、よろしく。」

星屑雨で流星群を擬似的に演出した。その後しばらく、二人で夜空を見上げていた。

次の日、村長たちに見送られ旅立った。その時、俺と紗代が夫婦でエヴァが子供っていわれて、エヴァが怒っていた。

シオンSideOut

剣聖への道〜地獄の特訓〜（後書き）

紗代「さて、永遠神剣第5位竜神について〜ほんとに五位なんですか？」

メア「潜在能力開放はない奴がもっても意味ないし、竜神化は死んだりする自爆業！」

紗代「え、私は平気ですけど？死ぬほど痛いんですけど・・・」
メア「紗代の場合は、竜神の血が入っていて適合しやすいのと同じく血で丈夫。最後に・・・エヴァとチャチャゼロ、ウンデイーネ、シルフの無茶修行において痛みに対して耐性が付いたので助かってるだけだよ。これらの要素がなきゃ発狂死してるだろうな。」

紗代「な・・・なんと死に掛けたことか・・・（ガクガクブルブル）」

メア「まあ、そういうわけで第5位となっております。あとエヴァのアーティファクトは鎌の予定です。現在ナギやラカン、アルに持たす神剣も考え中です。だして欲しい神剣があればだします。感想に書いてくださいな。」

シルフ「PV11,353アクセスユニーク1,781人ありがとうです〜」

レン「お楽しみのおにいさまとエヴァちゃんは置いて次は剣術大会と上様にあつてくるよ・・・それでは、また会いましょう。」

はじめての道場破り（前書き）

メア「ここまで紗代の龍眼について説明します。まず第一に情報収集能力、5km内の情報を見れます。第二、龍脈から力をもらえます。第三に森羅万象を少しだけ操れます（神剣森羅の十分の一しか効果は無い）。ついでに、紗代の中にいる龍について（まあ、霊的なもので使い魔的存在？母親は炎龍一体だけど小夜は雷龍と黒龍、炎龍を体内に飼ってます。歴代最強ですね。雷龍は千の雷を無詠唱でぶっ放す力の塊です。雷龍しか紗代はきずいていない。」

紗代「私って……バグキャラ？」

エヴァ「間違いなくな。」

紗代「一応龍眼も長時間の使用はできません。なぜなら、脳がパンクします。あ、私はすでにシオン様達から横文字とかならってますのであしからず。」

シオン「あと、前話でこちらのミスによりご迷惑をおかけしたこと深くお詫び申し上げます。致命的なのは可能な限り早く直せたいと思います。」

はじめての道場破り

紗代Side

私達が龍神村を出て早数日、ようやく江戸の町が見えてきました。

「ようやくか、長かったぞ。」

いいながら、手押し車の上で足をぶらぶらさせています。「これで私より数百歳も年上とは思えません。」

「ん？どうした？」

「いえ、なんでもありません。」

あぶない、あぶない。子ども扱いするとエヴァさんはかなり機嫌が悪くなります。たまに、年上と感ずることもありますがどちらかというと妹とかそんな感じですよ。

「まあ、歩きだとしかたないだろ。」

「馬でも買え、馬でも。」

「そんな金は無い。」

「おい、待て！なんでだ！」

「決まっている。今までの茶屋代でだ。」

茶屋みかけるといつもよって、お団子包んだりしてもらってましたからね。

「くっ、どつするんだ？」

「働くしかないだろう。江戸で稼いでいくぞ。」

「刀作って………売ればいい………」

「レンの言つとおりだ！」

「材料が無いな。あと、まじめにここで稼いでいくからな。ちゃんと手伝えよ。」

「わかった。」

「でも、宿はどうしますか？」

「あゝ長屋でも借りる。」

長屋ですか、住んだことはありませんね。ちょっと楽しみです。そんな感じに話しながら歩いていると、江戸の町に入りました。

江戸の町は綺麗で活気があります。シオンさんについていくと、広くなっているところで止まり、手押し車の旗を変えました。どうするんでしょ？

「さて、この子に勝てたら1両さしあげます。参加費は一人10文です。」

と大きな声で私を指差してきます。

「えええええ！」

「がんばれ、あと刀禁止な。皆さんは武器あります。」

制限きびしすぎです。

「おいおい、こんな嬢ちゃん倒すだけで一両ももらえるのか？」

「無茶だろ……………」

「馬鹿だな。」

という、野次馬さん達の声が聞こえてきます。

「ああ、そつだ。紗代、勝てそつで勝てないようにやれよ。」

無茶いいますね……………。

「がんばったら、ご褒美やるからな。」

「ご褒美………なんでしょうか？どちらにしてもこれはないんじゃないかな。」

「よし、俺がやる！」

浪人風の人々が挑戦してきます。

「よろしくお願いしますね。」

お辞儀をして、構えを取る。

「右からいくぞ！」

わざわざ教えてくれます。嘘かとも思いましたがどつちやら油断して
るようです。

「はい………明鏡止水。」

身体力を抜き、相手の動きにあわせ避けたり弾いたり……
・演舞の感じで5分間続けた後相手を倒しました……周りを
見回して……。

「次の方どうぞ。」

「次は俺だ！」

それからは、繰り返し同じ感じでした。相手の動きがかなり遅く見えるのであわせるのは楽でした。

四時間後、私の周りには疲れきった人たちと結構な数の野次馬がい
ました。

「次の方。」

「」「」……「」「」

皆さん、静まり返ってどうしたんでしょうか？

「兄貴！こいつらです！」

なにか素行が悪い人たちが6人ほど来ました。ちょっと怖いですが……。

「お前ら、よくもうちの連中を可愛がってくれたな。」

「契約の問題だ。そっちは金はらって試合をしただけだ。」

「ほう、なら俺たちも参加させてもらおうか。」

「なら、全員で60文だな。全員で同時なら100文でいいぞ？」

「舐めやがっていいだろう。」

ええ、次は一気に6人ですか！

「ああ、ただし俺が相手だ。」

あ、シオン様がお相手するんですね。よかった。

「いいだろう。やっちまえ！」

掛け声と同時に6人が一斉にシオン様に襲い掛かります。

「ああ、やっちまおう。」

それは、違うかと思いますが………一分後、だれひとり立ち上がれないほど痛めつけられてました。やっぱり、すごいです。刀を抜いた相手6人に無手で圧勝するなんて。

「さて、ここまででいいか。エヴァ守備は？」

「うむ、こっちだ。」

今度はエヴァさんの先導で移動します。あの人たち放って置いていいのかな？

その後、長屋につきました。

「この奥を一個借りたぞ。」

いつの間に借りたんでしょうか？

「ああ、ありがとう。さっそく中に入るか。」

「ああ。」

「待ってください。」

あわてて、私も中に入りました。中はこじんまりしていて三人で住むにはきつそうです。それに小部屋が二個しかありません。

「せまいな。」

「ああ。」

「ですね。」

「まあ、いいだろ。それ以前に……………」

そうですね。掃除しないとけません。しばらく使ってなかったのか埃だらけです。

「安くは借りられたんだがな。」

「しかたない。森羅……………埃を一箇所に集めてくれ。」

「嫌です。何が悲しくてこの永遠神剣第一位が埃なんて集めなくてはいけないんですか！」

「すぐ、その心はわかります。」

「仕方ない、シルフ。」

シルフが召喚陣から出てきました。

「あるじ〜なに〜？」

「埃を「やだ〜」。……………」

ですよ。

「あとで和菓子作ってやるから「わかつた〜」。手伝……………」

その後、シルフが風を使い部屋中の埃を一箇所に集めて、創世さんを使い部屋の修理と長屋に防音などの結界を張りました。

「ご褒美に今日の料理は奮発したぞ。」

食卓に並んでいるのは、松茸ご飯に松茸などの煮物やお刺身、お味

噌汁に白玉餡蜜などでした。

「普通の料理と変わらなないか？」

エヴァさんがそういうのも分かります。いつもシオン様の別荘でとれる不思議な物を食べてますから。このような普通の食事は久しぶりです。（紗代も結構いいものを食べて育っています。）

「食べてみるよ。」

私とエヴァさんはお味噌汁を飲み、松茸ご飯を食べると驚いたことに、口の中の松茸が噛めば噛むほど味が変わって行きます。どの味も非常に美味しいです。

「なんだこの松茸は……………」

「別荘でとれた七色に輝く松茸だが？」

「相変わらずでたらめだな。」

「一色後とに味が変わるから調整がむずかしいのと、魔眼使って調べたら数十年から数百年単位でしか出ないから味わって食べよ。」

それは確かに「馳走です。」

「あるじ〜おかわりは?」

「頼ムゼ?」

「お前いつの間に出てきた……………」

「ずっと手押し車ノ中ニイタンダゼ?出レルナラ出ルゼ、ゴ主人。」

たしかに、可愛そうですね……………あれ?別荘にいればいいだけじゃ……………。

「まあ、たくさんあるからよく味わって食べる。」

「はい。」

その後、シルフは別荘に戻りお人形さんは居間で寝ています。私達も寝室に入り、真ん中にシオン様を挟んで眠りました。

次の日、他の長屋の方々に挨拶をしてお昼を取り終えたときシオン様から巻物が渡されました。

「これは？」

「うん、前に話したが紗代に道場破りをしてもらう。」

「本気なんですね……………」

「ああ、それで勝ったらそこに流派と師範の名前、血判をもらってこい。」

「普通は看板貰うんじゃないですか？」

「邪魔になるだろ。それに、道場潰すわけじゃないしな。」

たしかに、納得する理由です。

「分かりました。」

巻物をしまいます。

「あと、紗代に呪いをかける。」

「えっ！」

わ、わたし悪いことしましたか！それとも嫌われるようなこと……

「あゝ違う。たんに修行の一環だ。」

「そうですか、よかったです。」

「というわけで神剣使わない限りは身体能力は普通の女性と同じになる。といっても身体に付加をかけてるので普通の修行としても問題ない。」

今も重力魔法掛けっ放しですからそんなにかわりませんが……
……となる。

「剣術の技術だけで勝てと言う事ですか？」

「そうだ。いい修行になるだろ。」

「わかりました、がんばってみます。」

「よし、いいこだ。」

「」

頭を撫でてくれました。エヴァさんを見てて思ったんですが私も撫でられるのは好きみたいです。

「今日は玄武館にいつてきなさい。」

「玄武館って結構有名なところじゃないですか？」

結構どころでは無いかもしれませんが………龍神村にはあんまりそういう情報は来ませんでしたから。

「大丈夫だいつてこい。」

「分かりました。勝つてきます！」

「そっだ、いってこい。」

「はい！」

私は、巫女服を改造した動きやすい服装で長屋を出て玄武館へ向かいます。この服はシオン様が作ってくださいました。

シオンSide

さてと、紗代を送り出してしばらくするとエヴァが帰ってきた。

「ただいま、いい物件があったぞ。」

「おお、それはよかった。」

エヴァは午前中から店の物件をさがしてもらっていた。

「うむ、もう契約も済ませてきた。さっそく、行くぞ。」

エヴァと共に物件を見に出かけた。

エヴァに連れられて行った場所は、大通りの一角だった。

「どつだこは？」

どつといわれればいいに決まっているが……………。

「よくこんなところ買えたな？」

「うむ、昨日の晩皆が寝たあとに賭博にいったな。巻き上げてきた。」

どつか出かけたと思つたら……………。

「今度は俺も連れてけ。」

「わかった。まあ、それで手に入れた金を使って売ろうとしていた連中から買い取った。」

ふうん、元米屋か………ってことは蔵もあるな。

「わかった、ありがとう。営業許可は？」

「鍛冶屋と服、飲食関係の許可はとってある
くくく。」

いろいろ悪どい事したな………普通はこんな早くとれないしな。

「さて、中に入るか………。」

中に入ると元の店の店主がいた。

「この二人が売ってくれた人たちだ。」

「あの、あなた方は？」

ん、ああ、そうかエヴァは幻術使って交渉してたのか………。

「ここを買い取ったものだ、これが契約書。」

「たしかに、こちらが権利書などになります。従業員たちは退職金を払い解雇しました。」

ふむ、店の間取りも悪くないし改造したらすぐ使えるな。

「あんだ達はこれからどうすんだ？」

「私達は……娘達と相談してみます。」

ん？なんか変だな……よし、ここは未来眼使って対象の未来を見るか。

「ちよつといい？」

「はい？」

相手の瞳を覗き込み未来を見る。……なるほど、娘をつるしか生き残る手段も無くなるんだな。

「どうせ、娘さん達売るしかないんだろ？」

「う、それは……………」

「なら、俺が買ってやるからここで住み込みで働け。」

「いいのですか？」

「従業員手に入るわけだし別にいいよ。ただし、あくまで娘さん達は買う形だぞ。逃げられてもかなわんしな。」

さっき、映像で見たけど可愛かったし看板娘にはなるだろ。

「分かりました。それで、お願いします。」

「じゃ、そういふことだ。」

「では、娘達を説得してきます。」

「行ってらっしゃい。明日またきてくれたらいいからね。」

「わかりました。」

元店主さんは店を出て行った………あ、名前聞いてねえ。

「良かったのか？」

なんですかエヴァさんちよつと機嫌悪いですよ？

「ま、いいんじゃない？それにちよつと気になるのも見えたし………つ！」

「大丈夫か！」

心配そうな顔して………これは、単なる未来眼の副作用だしな。長いこと使ったりしなければ問題は無い。

「ああ、それより結界を頼む。今から店内を弄る。」

「分かった。人払いの結界を張る。」

エヴァが結界を張り準備ができたので、レンから創世を借りて店内

を改造する。店の右部分は飲食店に、左部分は米や衣類関係の場所を作り、倉を武器屋にした。

「こんなもんですか？」

「ああ、あとは保存庫（冷蔵庫みたいなもの）も作るか……
・もうひとつの倉に魔法ほどこして温度を一定にしてな。」

「了解しました！」

「いろいろ無茶してるな。あとで店主たちにも魔法かけねばな。」

「だな。」

そんな感じでその日一日作業をしておりました。

シオンSide

紗代 Side

私の目の前には玄武館。初めての一人行動………形見の首飾りを握り呼吸を整え中に入る。

「御免ください。」

道場に入り中を見渡すと60人くらいの人たちが修行に励んでいた。その皆がこつちを見る………すこし、怖いですが、でも、しっかりしないと。

「何様ですか？」

「………ふう………」

「？」

だめです。緊張してなかなか話せません。仕方ない………

明鏡止水を使います。奥義の真髄だけどいいですよね？

「・・・・・・・・・・道場破りに来ました。」

「はは、ご冗談を・・・・・・・・」

私は無表情で対応している人を見ます。

「本気ですか？」

「・・・・・・・・・・（じく）」

「師範どうしますか？」

「誰か、相手をしてやれ。」

どうやら、すんなり相手をしてくれるみたいです。

「では、俺がしましょう。なに、安心してくれちゃんど手加減してやる。」

私達は道場の中心で構えをとる。

私は借りた木刀を右下に構える。

「北辰一刀流、加納利家（かのう、としいえ）参る。」

「神鳴流、神鳴紗代（かみな、さよ）参ります。」

私達は、礼をして試合を開始する。

「いくぞ！」

打ち込んできた木刀を受け、鏝迫り合いになります。が男性の力にはやはり勝てません。

「ほら、やっぱりな。」

他の門下生の人たちが何かを話しているようですが……。

「これで、俺の勝ちだ！」

さらに、力を入れてきます。私は力を抜き、身体を回転させ相手の力を利用して通り抜けざまに木刀を脇腹に切りつけます。

「いつ、一本。」

「なんだ今の……。」

まず、一人。木刀を振り血を払う動作をする……
もう、くせですね。

「次」

「なっ……。」

「待て！今のは油断しただけだ！」

面倒です。意識を刈り取りましょう。

それからの試合は、開始と同時に一撃で意識を刈り取っていく。

「……………遅すぎです……………」

「があ！」

「……………次……………」

「何をしている。」

「師範代！」

どうやら、一番強い人が来たみたいですね。

周作
Side

紗代
Side
Out

俺は北辰一刀流流祖、千葉周作だ。

水戸から江戸の道場にもどってきたら信じられない光景が目の前にあった。

道場中に倒れた門下生。そして、真ん中にいる成人してるかどうかもわからない少女が無表情で神秘的な空気をかもし出しながら木刀を下げている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・次・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「何をしている。」

「師範代！」

少女がこちらを見る。長い髪を後で纏めてながしている。

「何事だ？」

「道場破りです。神鳴流となつています。」

神鳴流だと？聞いたことの無い流派だな。しかし、あのような少女がこれだけの人数を倒して息一つ乱れてないというのか……

「わかった。俺が、相手をする。」

「しかし！」

「いいから、気絶してる連中を起こして横で見ている。」

真ん中へ行き彼女と対峙する……ふははは、これでは門下生が敵うはずも無いな。正真正銘の強者だな、面白い。

「北辰一刀流流祖千葉周作だ。」

「神鳴流神鳴紗代です。」

お互い挨拶をしてお辞儀をする。かなり高貴な身分か、行動の一つ一つが精錬され気品が溢れている。

「少々お待ちください。倒れているものを退かしたら立ち合いますよう。」

「わかりました。」

その後、怪我はあるが命に別状も無いので見学するよう申し付けた。

そして、中心で対峙した。

「それでは、北辰一刀流対神鳴流の試合を開始します。礼。」

お互いに礼をし構える。本来は省略するのだが看板を賭けた最後の試合となると正式な手順をする。

「本気で行く。本気で来てくれ。」

「分かりました。今出せる全力でお相手します。」

そういったあとから感じる圧力が半端なく上がっている。だらりと構えているのに……打ち込めば打ち返されるのが目に浮かぶように分かる。こいつは、武の境地といわれる無の領域

にはいつているのか……なら、我が武力を全力をも
って試せる相手だ！その上で打ち勝つ！！！！

周作 Side Out

紗代Side

私は千葉周作さんと退治している。

すごいプレッシャーを感じる。すこしでも明鏡止水をとくと負けそ

うな感じがする。今まで相手した人とは次元が違うさすが流祖。全力をもって相手をする。お願いされたのもあるけどそれが礼儀だと思う。

「すいませんが、一本じゃなくお互いが負けを認めるまでにしませんか？」

「いいだろう。その提案を待っていた。」

どうやらあちらも私と同じ考えだったみたい。

「では、行くぞ！」

「はい。」

始まった立ち合い。すきも無く連続で切りかかってくる。

「早いですね。」

「瞬息心気力一致が我流派の要諦だからな！」

「くっ！」

連続攻撃をいなして行く限界は近い……相手の目を見て次の攻撃を予測する。

「そこだ！」

攻めて来ましたか……しかし、こちらにはチャンスです。

「なっ！」

私は飛び上がり、彼の刀を避け、さらに突き出されてる刀を踏み台にしてさらに高く飛び上がる。

「神鳴流、龍槌閃。」

落ちる勢いを利用し彼に木刀を叩きつける。

「くっ！」

驚いたことに木刀で防御してきました。すごいです……
一瞬の均衡の後私達の木刀は折れて飛びました。即座に次の行動を
起こします。

「神鳴流浮雲・桜散華。」

両足で彼の頭を挟み、後方に反りながら空中で回転して、大地に叩
きつけます。そして、首に折れた木刀を添える。

「がぁぁ！」

背中から叩きつけられるしそうです。さらに、相手の動きを封じ
ます。

「……………わたしの勝ちですね……………」

「剣術では無いが……………関係は無いな見事だ。俺の負け
だ。っ！」

「え、えつと大丈夫ですか？」

周作
Side

紗代
Side
Out

まさか、俺の突きだした木刀を使いさらに上に跳ぶとはな。こちらの体制もくずれて一石二鳥か。なんとか防御に間に合ったがその後の対応がまずかった。

「神鳴流浮雲・桜散華。」

あちらは、即座に反応して技を放ってきた。しかも、両足で頭を挟み困れ、後方に反りながら空中で回転して、大地に叩きつけられるとはな。逃れられんかと試したが受身を取ることでもできずに叩きつけられた。しかも、さきの割れた木刀の破片が背中に刺さりやがった。その後、彼女が体重と重力利用してのってきやがった。この時にあばらが何本か折れた。

「ぐはあー！」

「・・・・・・・・・・わたしの勝ちですね・・・・・・・・・・」

首に折れた木刀を添えられたら仕方ないな。

「剣術では無いが・・・・・・・・・・関係は無いな見事だ。俺の負けだ。っ！」

「え、えっと大丈夫ですか？」

いきなり、瞳に感情がもどって雰囲気が変わった。

「大丈夫じゃねえな。」

「「師範代！」」

「すまん、まけちまった。」

これで道場たたまなくちゃいけなくなっただな・・・・・・・・・・。

「そんなことより怪我を！」

まったく心配性な奴らだな。

周作 Side Out

紗代 Side

「そんなことより怪我を！」

まったくその通りです。私がやっておいてなんですが………

「うわ………痛そうですね………」

千葉さんを起こして背中を見ると木刀の破片が沢山ささっています。あとは、あばらが何本か折れてるみたいです。

「痛いな………結構危ないところに刺さったみたいだな。右手が動かないな。」

「そんな！」

何人かの門下生さんが私をにらみつけてきます。

「この嬢ちゃんは悪くねえよ。俺が弱かったただけだ。いいな？」

「はい……………」

「じゃあ、治療しますね？」

「できんのか？」

「まかせてください。」

「なら、頼む。」

信じてませんね……………いいでしょう、見せてあげます。

「痛いんですけど我慢してくださいね。」

「なんだ……………っ!!」

私はどんどん木刀の破片を抜いていきます。

「っ、いてええええ!!」

「我慢してください。男でしょ！」

さらに、抜いていきます。

「し、師範代？」

「っ！！！！！！」

歯食いしばってますね……………あ、これが最後ですね。肉を少し巻き込んでますが……………きにせず気を通して壊れないようにして抜きましょう、えい。

「ぎゃあああああ！」

すごい声です、思わず耳をふさいでしまいました。

「これで最後です。」

私は傷口に手を翳し精神を集中し龍眼を発動し的確に傷を見極めて治癒の光をかけていきます。

私は治すのに集中しなくてはいけないため周りの声が聞こえない域まで入ります。

「なんだ。急に背中があったかくなって力が戻ってくる……」

「すげえ。どんどん治って行ってる。」

「……………」

それから、しばらく治療をつづけました。

周作
Side

紗代
Side
Out

信じられないことにどんどん身体が楽になって息やがる。陰陽師とかの連中か？でも、札も何も使ってないが……妖怪の類か？だがそんな力なんて聞いたことが無いしな。

「ふう、終わりました。」

うつすらと汗が出てるな。立ち合いじゃ息一つ乱さなかったのに……ずいぶん無茶してくれたみたいだな。

「さてと」

上座の方に移動して座ったが、何する気だ？

「怪我がある方は順番に並んでください。治します。」

蒼い瞳で神秘的な雰囲気をかもし出してやがる。綺麗だな……門下生の中で怪我をおっている連中は並んで治療してもらっている……待て、たしか対峙してる時彼女の瞳は黒だったはずだ。それに、蒼の瞳なんているはずが無い。やはり、妖怪の類か？

それから、しばらくして全員の治療が終わったようだ。

「ほら、看板だ。」

「？」

なんか不思議そうな表情しているな？どうしたんだ？

「あなた……立ち合いの時その不思議な力使ったんだろ！そうじゃなきゃ師範が！」

「馬鹿っ！」

「使ってません！れっきとした剣術と体術です！」

涙目になって反論してきた……たしかにそうだな。

「う、しかし。」

「おい、よせって。」

「お前ら、あれは俺の実力不足だ。この神鳴の嬢ちゃんがいつてる

事は本当だ。」

「師範……………」

「しかし、これで道場は無くなります……………」

「何言ってるんですか?」

「おい、お前はこの看板がほしかったんじゃないのか?」

「違いますよ?」

おい、どつなつてやがる。

紗代Side

周作SideOut

どうやら、勘違いされてるみたいです。

「この巻物に流派と師範の名前、血判を押していただくだけでかまいません。」

「なんだそれさえ書けば道場つけていいってことか？」

「はい。どうぞつけてください。私は腕試ししてるだけです。看板なんて旅の邪魔になるだけですから。」

「それも、そうだな。わかった。これでいいか？」

千葉さんはすぐに流派とかを書いてくれました。

「ありがとうございます。」

「なあ、今度開かれる剣術大会でるのか？」

「そのつもりですよ？」

「なら、ちょっとまってる。」

「なんでしょ、奥へいかれまして。しばらくすると、何通かの手紙をもってきました。」

「いいか、こつちが剣術大会の推薦書だ。これがあると本線から入れる。予選はもう終わっちまってるからな。」

「そうなんですか……知りませ

んでした。」

「あと、2、3枚いるんだがな。こつちは道場への紹介状だ。これを見せて立ち合ってもらえ。んで、勝ったらこついんだぞいいか？」

「なんですか？」

「私と再選して名誉を回復したいなら剣術大会の推薦書をください」

い。そうしなければ、貴方たちは神鳴流よりおとっている事になる。
『ってな。』

悪い顔してますね。

「わ、わかりました。」

それでいただけるかどうかわかりませんがやってみましょう。

「っと、もう遅いから帰えんな。お前たちも解散だ。明日からもつと厳しく修行するぞー!」

「「「「「はい!」」」」」

おっきな声です……。

「剣術大会楽しみにしてるぞ。またやろうぜ。」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。」

再戦を誓い私は玄武館を後にしました。まずは一勝です

玄武館からの帰り、空が赤くなっているのを発見した。

「あれは………火事ですか………シオン様に教えていただいた、火事と喧嘩は江戸の華ってほんとみたいですね。」
とりあえず、火事の起こった現場にいつてみます。何かできることがあるかもしれません。

現場に行ってみると大変な騒ぎでした。火消しの人たちや住人の方々がいます。

「おい、全員逃げられたのか！」

「中に一組の家族が！」

まずいですね。火の勢いが強い。

「どうにかならねえか？」

「無理です！中に入ることも。」

私は龍眼を発動し建物内部や燃える速度順番を見ます。これならいけます。

「どいてください。」

「お嬢ちゃんここは危ないぞ！」

火消しの方々の間に入り私は二つの指を揃えて前に出し私の中にある雷龍の力を使います。母は炎龍でした。

「紫電。」

雷がおき燃えている館の半分を消し飛ばします。これで進入経路を確保しました。もちろん、事前に人がいないことは確認済みです。龍神を引き抜き力を解放させます。これによって掛けられていた呪いと重力魔法を解除して建物の中に飛び込みます。

「なんだってんだ……………」

断面についた私は壊れた木材などを足場にして二階に上がり取り残された人の場所まで走ります。

煙も結構でていますね。しばらくして扉の前につきましたが変形して動かないので切り刻みます。

「ご無事ですか！」

中に入ると倒れてきた木材から子供を守って死んでいる人が二人見えます。

「っ、遅かったの？」

「……………」

「どうやら、子供は生きています。すぐに助け出し傷を確認します。」

「大丈夫？」

「うん……………母上と父上は？」

「残念だけでもう……………」

「そんな……………」

後追いしそうですね。

「いいですか、この両親の分まで貴方は生きなくてははいけません。分かりますね？きつとこの両親も願っていると思います。」

「はい……………」

どうやら大丈夫そうですね。暴れられたら脱出が困難ですし、生きていて欲しいですからね。

「しっかりつかまっていてくださいね。」

「はい！」

右手で子供を抱き上げ、左手で龍神を持ちます。

「すぐ外に出ます。行きますよ！神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！！」

この部屋から外までの障害物を全て吹き飛ばします。

「す、すい……………」

そのまま外に飛び出し2Fから飛び出し無事地上に着地します。

「これでもう大丈夫だよ。」

「ありがとうおねえちゃん。」

さて、次は・・・・・・・・・・周りみると火の勢いはどんどん広がっていきます。

「離れていてください。」

「うん。」

子供が離れるのを見た後私は雨を降らせるために舞を踊ります。舞を踊るのは集中しやすくしてトランス状態(?)になつて魔力や気をコントロールしやすいからです。そして練つた魔力を空へと上げ舞の最後に火災の方に龍神を向けます。この時、すでに雨雲は集まつてきていて即座に雨を降らしていきます。

「あ、雨だ・・・・・・・・・・。」

私を遠めで見ていた人たちが歓声をあげます。次に重傷を負つていた人たちを癒しました。軽傷の方は手当てを受けてもらったほうがいいです。

「あい、あんたはいつたい・・・・・・・・・・。」

「ただの通りすがりの者です。それより、消火作業いそいでください。」

「わ、わかった。おいお前らいくぞ!」

「「「「「へい!」「」「」「」」」」」

火消しの方々は作業にもどりました。私は今の間にこの場を後にします。もう大丈夫のはずですから。

Inside

すごい……俺は助けてくれた恩人から目が離せなかった。刀を振り火と壁を吹き飛ばし地面におりてから離れるように言われ離れて見ていると舞を踊りだした。まわりの皆があまりの神秘的な雰囲気と力にみとれてとまっていた。少女は薄い青白い光に つつまれていた。

「綺麗……。」

「……。」

空にはどんどん雨雲が集まってくる。

舞の終わりに刀を燃えている建物へと向けるとすごい勢いで雨が降り出した。見る見るうちに炎を消していく。

「あい、あなたはいい……。」

シオンSide

??Sideout

夜になると紗代が帰ってきた。おれとエヴァはもう帰ってきていた。

「ただいまもどりました。」

「おかえり。」

「ケケケ、無事ダツタ力。」

「え？」

「お帰り、お前竜神つかつただろ。」

「え、なんで分かるんですか？」

「呪いが一時的に解けたからな。」

かけた呪いが消えれば分かる。

「はい、火事があつて……。」

説明をうけるが、思いつきり力をつかって平気なのか？まあ、この時代なら平気か……多分。やばくなったらそんな時考えるか。

その後、晩御飯中に今日のことを聞くととんでもない（？）事実が判明した。

「つまり、お前は龍槌閃放つたんだな？」

「はい、神鳴流龍槌閃をうちました。」

こいつまさか………教えてなかったけど………。

「もしかして、教えた奴全部神鳴流だと思ってる？」

「はい、違うんですか？」

やっぱりですか、最初に教えた神鳴流だからか？まあ、それはそれで面白そうだから放置しよう。どうせ、ほとんど漫画の世界の話だからな。現実に出てきたらそれはそれだな。うん。

「いや、それでいいよ。」

「はい！」

「それにしても火事か物騒だな。」

「そうですね。」

「俺的ニ、カヲ使ツタ姫ノガ物騒ダナ。」

「いえてるな。」

「そんな〜。」

紗代が遭遇した火事と店の件何か関係あるのかな？あの店には不審な点あるしな、経営状態とかよかったのに急にいろいろ事件が起きたみたいだしな。

シオ
ン
S
i
d
e
O
u
t

はじめての道場破り（後書き）

チャチャゼロ「俺八紗代ノコトヲ姫ツテイウコトニシタゼ。」

メア「まあ、2つ名に姫巫女つていれようとがんばるからその一環だな。」

シオン「しかし、紗代が全部神鳴流と思っているとわな。」

メア「そのほうがおもしろいだろ。」

チャチャゼロ「神鳴流チートニナルダロ。」

シオン「だな、ほとんどの流派の技叩き込んでるし……。」

メア「だがそれも良し。タイトルどおりで無問題。」

シオン「ま、いいか。ようやくめ組が出てきました。次回の更新は遅くなるかもしれませんが、がんばってみます。なお、暴れん坊將軍含む多分に改造されております。百鬼夜行もできるかあわかりませんが……がんばってみます。出して欲しい日本妖怪いたら書いてくれると調べて出してみます。それでは、これからもよろしくお願ひします。」

レン・エヴァ「ペコリ）」

鶴ちゃんと雪女ちゃんがやってきた。(前書き)

アンケート続行中。

内容は大战をどの勢力でいくかです。

1 連合

2 帝国

3 紅の翼

4 独自勢力

5 世界ぶらり旅。

この5つのなかからお選びください。

現在2と5が2票、3と4が一票です。

だして欲しい日本妖怪も書いてくれると敵か味方かわかりませんががんばってほしいです。

後長いかもです。では、本編をどうぞ。

鶴ちゃんと雪女ちゃんがやってきた。

吉宗side

「上様！上様！大変ですぞ。」

「どうした爺？」

また、なにかあったのか？

「はい、陰陽師達から報告があがって来ました。」

「例の龍神村の件か？」

「いえ、そうじゃありません。二日ほど前、江戸に強大な力をもった妖怪がはいたとのことですよ。」

「陰陽師が張った強力な結界があったのでは無いのか？」

先代たちが張った結界は今も生きているはずだが……

……。

「はい、どうやら巧妙に隠蔽されていたとかで……

……」

「よく気づき申したな。」

もっともな意見だな。

「大岡殿、それが隠蔽されていた場所をさらに別の妖怪が通ったので気付いたと……。」

「して、その妖怪どもはどうなったのだ？」

民に被害が出てなければ良いが………火事の場合もある。

「先に入った者たちは不明ですが、後に進入した妖怪は現在陰陽師が追跡中とのこと。」

「そうか、では引き続き調査をするよう伝えてくれ。」

「わかりましたぞ。」

爺が出て行き、話しを元に戻す。

「それで、忠相先ほどはしていた件だが……

……」

「はい、巷で噂になっている、巫女ですね。」

「ああ。詳しく申してみよ。」

「はい、その者は雷を落とし雨を降らせ、次々人々の傷を治したそうです。」

「そんなことが可能なのか？」

雨を降らすことは数十人がかりで陰陽師が三日三晩祈禱を捧げてようやくと聞いたが……

「はい、実際目撃情報もございます。黒い髪に蒼い瞳の少女だったと。」

「蒼い瞳だと？その者が現れたのはいつだ？」

「昨日の火事があったときだと聞いております。それ以前に目撃情報はありません。」

昨日か……もしや爺のいったことに関係があるのか？

「強大な妖怪と関係あるかもしれないな。しかし、なぜ巫女なのだ？」

「はい。雨を降らす時に舞を舞ったそうです。その姿が神秘的だったとかでそのように言われております。」

火事か……め組にいけば何か分かるかもしれないな。
。

「あと、気になることが一つございます。」

「なんだ？」

「失礼いたします。」

御庭番の才三が入ってきた。

「龍神村の件か、先に良いか？」

「はい。」

龍神村との連絡が途絶えたと報告があり、先遣隊を派遣したが誰一人として帰ってこなかったために御庭番を派遣した。

「ご報告申し上げます。龍神村に潜んでいた鬼は何者かによって始末されておりました。村人の話では、龍神の使いが現れたと申しております。そして、龍神の巫女と共に旅に出たとも申しておりました。」

「ふむ、どじおまじっ。」

「それについて先ほど申し上げようとしたのが、龍神の巫女についてです。」

「ほう、申してみよ。」

「はい、龍神の巫女は目が蒼いと史書で見たことがございます。それと、江戸に現れた巫女……これは繋がりがあのではないかと思ひまして。」

「だろうな。」

恐らく同一人物だろ。ということは、連れの龍神の使いというのが妖怪の化身か何かか……。

「鬼どもの戦力はいかほどだったのだ？」

「はい、3千以上だったそうです。」

「馬鹿な！それだけの数を殺せるといふ力があるといふのか

！」

「落ち着け、事実だとすると下手に手を出すとまずいことになる。今のところその者達は民衆を助けているだけだからな。下手に手を出して逆鱗に触れると江戸が滅ぶやもしれん。」

「

鬼一体が兵10人分に相当し、陰陽師は鬼5体くらいだからな。陰陽師が600人もいることになる。それだけの戦力・

.....京都ならまだしも江戸には無いしな。近

頃妖怪どもが暴れているらしくてそちらに戦力をつぎ込んで

いると報告は上がってきているし、今のところ見極めるのみ

だな。

「はい、では所在だけ慎重に調査します。」

「頼む。俺はめ組にいつて調べてくる。」

「おやめください！危険です！」

「大丈夫だ。忠相安心しろ、無茶はせん。」

「わかりました。その言葉信じますぞ。」

「ああ、才三行くぞ。」

「はっ！」

隠し通路から船を使い江戸城を抜け出し徳田新之助になる。

江戸の城下町にでてめ組みに行く途中一人の少女とぶつかり
そうになった。その少女は驚いたことに回避行動をとった。
その動作は流れるようで無駄が無く精練されていた。

「申し訳ございません。お侍様、大丈夫でしたか？」

「ああ、こちらこそ悪かったな。」

鍔の無い飾り気ない刀を腰に挿していた。

「ところで君は武芸を嗜んでいる様だな。」

「はい、まだ修行中の身ですけど。」

かなりの手足れだが……瞳の色は黒か、
違うようだな。

「？」

「ああ、すまない。急いでいたようだ？」

「はい、土学館と練兵館知りませんか？」

土学館と練兵館といえば鏡新明智流、神道無念流の道場か。

「見学か？」

「そんな感じですか。分かりますか？」

「ああ、ここを右にいったつきあたりを左にいくと土学館だ

。さらにずっと右に行くと練兵館もある。」

「ありがとうございます。それでは失礼いたします。」

どこの姫君だ？着ている物といい、気品があるな。姫として

はじゃじゃ馬になるんだろうがな。さて、め組にいくとする

か、いづれ立ち合って見たいものだ。

背面Side Out

紗代Side

さっき、ぶつかりかけたお侍さんに教えていただいたとおり
に行くのと土学館にようやくつきました。江戸の町はごちゃご
ちやしすぎです！1時間も迷ってしまいました。これからは
、龍神に聞くとしましょう。さて、今日は土学館と練兵館で
す。決めたかは……………エヴァさんとシオン
様が紹介状の中から適当に賽サイコロで決められました

門をくぐり中に入り用件を伝えます。

「師範の方にこれをお渡し願えますか？」

「分かりました。」

数十分後、私と鏡新明智流、桃井春蔵は対峙の準備をしてい

ます。最初、信じてくれなかったので何人かの人を打ち倒し
ようやくかないました。

「鏡新明智流師範代、桃井春蔵。」

「神鳴流、神鳴紗代。」

「勝負！」

お互い礼儀作法に則り勝負を開始します。

「でやあああああああああ！」

瞬動を使い一気に距離を詰めてきます。

「くっ！」

こちらも瞬動で加速して切り結びます。

「はっ！」

一撃一撃がたしかに強いですがそれだけです。今の私では力比べは無意味。技を使うのみ。

「どうしたこの程度か？貴様の流派もたかがしれているな。

」

じっと隙を見ます……………しかし、やはり無い。

「……………」

無いなら作ればいいだけです。

「そこだ！」

その攻撃を避けて空高く舞い上がり攻撃をしかけます。

「反撃させていただきます。神鳴流……………龍槌閃。そし

て、龍槌翔閃！」

「がはあ！」

空から体重を掛けた重い一撃をいれ、さらに下段から切り上げ上空に飛ばしたあと落ちてきたところにさらに一撃をいれる。

「まっ」

「神鳴流、龍巻閃！」

回転して遠心力を利用して落ちてきたところに叩き込む。

「ぎゃああああああ！」

吹き飛び壁に激突しました。

「あ、木刀折れちゃった。」

その後、気を取り直した師範さんをちよつと治療した後、流派と血判をいただきました。

「私と再選して名誉を回復したいなら剣術大会の推薦書をご覧ください。そうしなければ、貴方たちは神鳴流よりおとつていゝる事になりますね。」

教わつたセリフをいってみたら効果靦面、推薦状をいただきました。これであと、一枚は手に入れなくては。次は練兵館です。

しかし、さっきはやり過ぎましたでしょうか？シオン様の神鳴流が馬鹿にされた感じがして追撃かけちゃいましたけど。気をつけましょう。

シオン様とエヴァさんと待ち合わせして、うどんを食べた後
シオン様とエヴァさんからプレゼントをいただきました。

「昨日木刀が壊れたとかいっていたからな。」

「俺とエヴァで一本作ってみた。」

「ほんとですか！実は先ほども折れてしまっ……

。。。」

「聞いて驚け、世界樹を使って作ったからかなりのもんだ。

たとえ悪魔だろうと妖怪にも利くぞ。」

「さらに、強度も申し分ない。真剣だろうと切られることは

無い。」

「それはすごいですね。」

「あと、昨日預かっていた首飾り返す。いろいろ面白いのつけておいた。」

「なにをしたんですか？」

形見なので大事にしたいですけど。みると水晶は変わりありませんね。むしろ輝きがましてる。

「それ使って龍神か木刀いれとけ。空間制御昨日つけた。まあ、ポケットがなんでもはいるようになる。」

「すごい便利ですね。」

「ああ。まあ、午後もがんばって来い。」

「はいっ！」

私は午後の道場破りにでかけました。

紗代 Side Out

エヴァ Side

木刀・・・・・・・・・・いや、神木刀を渡したあと私達は

開店準備中の店へとむかった。

「こんにちは」

娘が二人と元店主がいた。

「二人を紹介しますね。」

「お前のもな。」

「これは失礼。私は若松といいます。こちらが娘の咲と加奈です。」

「咲です。」

「加奈です。」

どっちも同じ容姿で12歳くらいの可愛い少女だった。

「シオンだ。こっちはエヴァだ。」

そついと同時に魔眼を使い私の名前に疑問をいだかせなくした。

「」よろしくお願いします。ご主人様。」「」

ついでに、色々洗脳したようだな。

「さて、若松は仕入れとか頼む。」

「ふたりにはこっちに来てもらおうか。エヴァ店のこと分かるな？」

売り物は既に昨日できているから在庫確認だけだな。

「ああ、やっておく。」

「んじゃ、二人共ついてきて。」

2Fへ二人を連れて行く。2Fには彼らを住ませる部屋などを
おいてある。

「おい、いくぞ。」

「へい。」

刀や木刀などの武器から衣服など、食料まで……………

・まるで雑貨屋だな。

一つの倉を改造した武器屋は入り口にカウンターがあり奥に武器とかがしまわれている。どれも結構強力だ。対魔関係の品品である。おおよそそろわれない物は無いというほどだ。

「しかし、すごいですね。いつのまにこんなに……………」

「。。。」

「昨日だ。あと、あまり詮索するな。」

「わ、わかりました。」

「それより、早く始めるぞ。ここが一番危険だから私がやる。
若松は食料と衣類などの染物を頼む。」

「へい。ただちに。」

若松は別の倉へといった。さて、奴はかなり優秀な部類に入

る。やはり陰謀か何かか……………こちらで

はつごうがいいがな。警備は厳重にしておくか……………

…人型がいいな。いや、それより双子を鍛えた方がいいか

?……………さて、いまシオンは双子と双子の

部屋にいる……………まずい、すぐ終わらせて向

かねば……………。

H
グ
ア
S
i
d
e
O
u
t

シ
オ
ン
S
i
d
e

双子をつれて彼女たちの部屋へと案内する。結構広くしてある。

「ここが君たちの部屋だ。はいつてごらん。」

「はい。」

しかし、怖いくらい息びったりだな……………逆に面白……………くくく。

「すごいね咲。」

「広いね加奈。」

しばらく、二人は仲良く部屋の設備を見ていた。

「これすごい、中が冷たいよ。」

冷蔵庫がこの時代には無いからな、倉まるまるとちっこのを作っておいたからな。

「そこに、水筒とかいれておくといい。冷たくて美味しいぞ」。

「はい。」

「さてと、二人共そこに布団しいて座って？」

「「っ！」」

二人同時にびっくりしたな。見ると面白い。

「ほら早く。」

「「はっ、はい」」

言われたとおりに布団を引きその上で正座する二人。

「じゃあ、次は俺の瞳をよく見ておくんだ。」

「「？」」

「いいね？」

「……………（じくじく）」

魔眼を利用し対象に知識を脳に直接植えつける。どちらかと

いうと催眠術に近いが魔法もくして実行する。

「「っ！」」

ついでにギアス使って命令いれとくか。

「我が命に絶対服従だ。」

「「はい……………」」

「目を逸らすなよ。」

しばらくして、彼女たちは倒れた。

「私というものが有り紗代までいながら……」

「

「はい、聞いてませんね。っと。」

今度は回し蹴りだ。

「この、この！天誅だ！」

「在庫確認終わったのっ、かな？」

エヴァと激しい攻防をしつつ現状を聞く。

「あっあ、何も、問題ない！くそ、あたれ！」

「そっか、ありがと。じゃあ、もう開けるんだね。」

エヴァの頭を斜め下に力をいれて抑えるとあら不思議エヴァ

の攻撃はとどかなくて可愛い姿がみれます。

「は、はなせ〜」

腕をぶんぶん振り回すがもちろん届かない。届きそうなのは微妙に下がったり押ししたりして距離を開けたりうめたりするので。

十分後。

「ぜえぜえ、お、おぼえてるよ。」

「うん。エヴァの可愛い姿堪能させてもらったからね。」

「わ、わすれろ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜／／／」

「嫌だ。」

しばらく、いちゃいちゃしたあと。

「この子達の脳にレシピア武器の扱い方にはじまり薬品の調合取り扱いなど刷り込んでいた。」

「便利な力だな。といっても……………」

「うん、知識と経験は別物……………それに、まだ未だ成だしね。手っ取り早いのに、そりこむのが早いんだけど。」

「ふん、好きにしる。ただし、私達も可愛がれよ。もし……………しなかったら……………地獄をみせてやる。幸い不意打ちにはいい永遠神剣だからな。」

「……………努力させていただきます。」

まじ、怖いな。エヴァさん、やきもちやいてる姿も可愛いけ
じ。

「おい。」

「ああ、いるね。」

「えっ、？」

さて、どうしようかね。こちらを見張ってる浪人さん達・

……護衛はおいといた方がいいな。後は……

……。

「エヴァ、一つ勝負しようか。」

「勝負だと？」

「うん、この店に買しかけてどちらがより捕獲できるか。」

「景品はなんだ？」

「連中を拷問する権利？」

「ふむ、チャチャゼロなら喜びそうだしいいだろう。」

「チャチャゼロと炎王鬼をここに交代しておくか。」

「シルフもいいな、セルシウスでもいいし………な

あ、日本には座敷童子とかいるんだろ？」

「いるね。」

でも、ここにはいないけど。

「その力をこの二人にたたきこんだら？」

たしかに、できないことは無いねルーンとかいれて。

「でも、それ人体実験。」

「紗代にやったこともほぼ人体実験だぞ？」

「まあ、繁栄はするだろうけど……。。。」

「どっちにしろ力はつけさせるんだ安全にやればいいじゃないか。」

「それもそうだな。」

安全面とか気をつけてやれば問題ないか。未来眼使って仮定の未来を見て調整すればいいだけ出し、疲れるけど。

「じゃあ、後は魔眼をギューフであげればいいか。」

俺の魔眼の一部をギューフであげるか、ギアスを与えるのも楽しそうだ。

「少なくともそんなじゅそこの奴には負けんし。福の神みたくなるんじゃないか？」

「百鬼夜行につれてけばいいか。本人の意思確認してからだ
がな。」

「そつだな。いつおきるんだ？」

「もつすぐだろうし、とりあえず罫仕掛けようか。」

「ああ。シルフとかには依頼しといてくれ。」

「OK」

俺はまずシルフ達に連絡して二人から三人に護衛についても
らうことにした。余談だがシルフ達の一部の精霊が罫の勝負
に参加した。結果的に要塞クラスの防備となった。侵入者に
心からご冥福をお祈りいたします。デストラップ多すぎだろ

..... 住人の方達にはちゃんと罨とか解除

方法は教えたよ。

シオンSideOut

徳田新之助 Side

め組に入り辰五郎に話しを聞いた。

「ええ、俺も噂だけなんですけど。うちの若いもんと長次郎が実際にあってましてね。」

「なに、それは本当か？」

「はい、雷を落として建物を壊し、壊した部分から進入したそうです。そして、中から建物が吹っ飛び子供を抱えた少女がでてきたそうです。その後、舞って雨を降らしたと。」

「ただいまもどりやした。」

「長次郎が帰ってきたみたいですね。おい、長次郎こっちへ来い。」

長次郎からも話しを聞くべきだな。

「へい。これは新さんじゃないですか。どうしたんです?」

「ああ、例の巫女についてな。」

「今、巷で噂になってますよ姫巫女って。」

「姫巫女?」

どういふことだ？

「まあ、巫女なのは間違いありませんし。神秘的であり気品もあるってことで、普通の巫女じゃないだろうってことでついたらしいですね。」

「ほう。ところで、その者は他に共はいなかったか？」

「いえ、ひとりでしたよ。興味があるんですか？」

「ああ。できたら探してくれ。」

「了解しました。おい、お前たちいくぞ！あの姫巫女探した

「！」

長次郎と若い衆は探しに出た。

「そうだ、新さんは道場破りについて知ってますか？」

元気な奴がいるもんだな。

「いや、知らんが？」

「なんでも神鳴流と名乗る者が次々と道場を破ってるそうです。」

「神鳴流か………聞いたことが無いな。」

「見たことが無い技を使い60人ほどなぎ倒したと………」

まさか、あの少女か？まさかな。

「そつちも引き続き調査してくれ。」

「それですがね、道場破りを受けた道場が分からないんです。」

どういふことだ？

「どこの道場も看板が無くなっていないし誰一人怪我してないんですよ。それに……………」

「それに、わざわざ流派の恥を自らさらす訳がないといふことだな。」

「ええ、へたに聞いたら打ち首されても文句言えないかもしれませんね。助けられた少年も姫巫女を探しているようです。」

あつて聞いてみるのもいいな。

「その子にはどこにいけばあえるんだ？」

「それが行方をくらましてね。分からないんです。探させちゃいますが……………」

「わかった、ありがとう。俺も探してみる。」

そうして、俺は道場を見て回ることにした。気になったのは今朝ぶつかった少女がいった士学館と練兵館だ。

士学館の前に行くとも6歳くらいの子供と大人の声が消えた。

「来ていないし、いない。我が士学館が負けることなど無い」。

「しかし！」

子供は無理やり押し込まれたれ門をしめられた。

「おい、どうしたんだ？」

「なんでもない人探ししてただけだ。」

「誰を探していたんだ？」

「姫巫女様……………」

「姫巫女か、なんでまたさがしているんだ？」

ひょっとしてこの子が火事で助けられた子か？

「助けてもらったからお礼がしたい。」

「そうか、俺も探しているんだ。何か分かったら教えてあげ

よう。」

「ありがとう。」

「一つ聞きたいんだがなぜ道場に？」

「神鳴流の道場さがしてたんだ。」

神鳴流……やはりかわりがあるのか？

「助けてくれた姫巫女様が神鳴流っていったきがしたから。」

「

「なるほどわかった。ありがとう。こちらからも何か分かつ

たら教えよう。俺はめ組の居候で貧乏旗本の三男坊の徳田新

之助だ。」

「私は、小次郎です。」

「そうか、送っていいこうか？」

「いえ、平気です。それでは失礼します。」

大丈夫なのか？御庭番の一人に練兵館を調べさせているし、
それに、オニにはここを調べてもらおう。目で指示し潜らせ
る。こんな時間だ爺が痺れを切らしそうだな・・・・・・・・あ
の子供は気になるが一旦もどるか。

シオンSide

夕方になり双子が起きてきたので武器の方へ連れて行く。

「「「すいません。気付いたらこんな時間で」「」

「「「気になるな。それより知識はどうだ？」

「「「変な感覚ですが、分かります。」「」

成功はしているようだな。

「この中から手に馴染む刀を選べ。」

「はい。」

二人が選んだのは小太刀二刀流。これは忍びの技とか教える
と面白そうだ。

「あとこれは二人の意思にまかせるが、お前たちに妖怪の力
をやることもできる。そして、それをするると半妖半人になる
。どじする。」

「……………」

「もちろん強制はしない。命令ではないからな。」

「それを得ればご主人様の役に立ちますか？」

「ああ。」

「……………」

「「なら、問題ありません。」」

「すげえ、シンクロしてるな。」

「私達は。」

「ご主人様の物。」

「「だから、好きなようになさってください。眷属でもか。」

「「まいません。」」

「……………やば、洗脳しすぎた？どっちかわからないけどならさせてもらおうか。」

「「わかった。じゃあ、二人の身体を弄らせてもらおうか。」」

「はい／＼／」

なぜ、そこで赤らめる……あ、たしかにそっこの意味になるな。

「さて、なにがいいかな？」

「二人共同じのがいいです。」

「なら、共振させてお互いの力も使えるようにしたらどうだ

？」

エヴァが現れました！なにいつてんだろ。

「そうだな。そうすれば3個くらいはくっ付けられるか、この二人のスペックなら。」

「座敷小童、アラクネ、風神」

.....レンさん？それ途中からぜんぜん違う。

「日本名でいくと土ぐも、風神は鎌いたちか？」

「いや、そもそもその力できんのか？」

「問題ないって.....創世がいつてるただかなり力消費するから.....別荘でやるべきだって。」

「わかった今からレンの別荘へ行こう。」

「うむ。二人共ついてこい。」

「「はっはい」「

すこし、後悔してそうだな。頭をなでてやってから召喚人に入るが.....エヴァも撫でて欲しそうにしてたので撫でてやった。

「べ、べつに嬉しくなんて……」「じゃ、やめ。」
「や、やめないで……嬉しいんだ！」

「よろしい。」

そして、到着したレンの実験室……うん、なんかいろいろ怖いのあるけど触れないよ？とところどころにある血痕なんて。

「じゃあ、二人は裸で台の上に寝転がれ。」

エヴァの命令で二人は服を脱ぎ台の上に寝転がる。エヴァも主人として設定されてるからギアスは有効だ。

「よし、手をこっちに……シオンも手伝え。」

「分かった。ほら、加奈手をだして。」

「うう………//」

胸や大事な所を隠していた手を拘束し、足も同じように拘束、最後に首もだ。これで完全に動けない。

「さて、これが敵などならこのままするのだが………」

「……。」

「「っ（ふるふる）」

「絶対ダメだ。痛くないように薬うつて、さらに眠らせるぞ。」

「わかった、私もサディストじゃないからな。仲間に関して
は。」

「どつちにしろ、悲鳴はなるだろうけどな。だが、安心しろ
次に目覚めた時には終わっている。」

すでに確認済み。

「「はい。」」

「じゃ、いい夢を……………」

二人に薬と眠りの魔法を掛ける。

「さて、準備するかな。」

エヴァが薬品を使い二人の裸体に陣を書いていく。

「んじゃ、俺こっち方面専門外だから変わるね。」

「ああ。」

「チエンジ。」

そして、レンへと変わる。

インサイド

シオンSideOut

おにいさまと変わり創世を使い準備する。

「この二人はどんな妖怪になるのかな？」

「鵺じゃないか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・鵺・・・・・・・・・・。」

うん。いいと思う。

「しかし、お前もそろそろ人前にでたらどうだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・嫌・・・・・・・・・・。」

怖いし、変な目で見られるし、誘拐されそうになるし、殺さ

れそうになるし。

「そうか、まあ魔道書取りに行く時はなにか考えてるんだろ？」

「うん、昔暇な時に見てた物があってそれを再現してみる。」

「

「なにをだ？」

「MS。」

「MS？」

「うん、モビルスーツ。」

ベットの上で見ていた奴。おにいさまがアニックスとかもしてくれてたから暇なのでずっとみてたりもした。

「なんだそれ？」

「うん……………動く機械……………」

……………魔法もつかって……………私と……………

創世で……………再現する。」

「面白そうだな、私も混ぜろ。」

「わかった……………すでに別荘内に……………」

……………開発スペース……………格納庫……………」

……………できてる……………設計図起こしてる……………」

……………材料も……………」

「準備ができたら言ってくれ。」

「うん、できた……………こっちの準備。」

「ああ、さあ開始だ。咲、加奈生まれ変わるがいい。」

「……………(17)>」

それから、一日がたった。

「よし、完成だ。」

「まだだよ。」

「そうなのか？」

「おにいさまがギアス与えてないから。」

「まあ、目覚めるまでMSの研究でもしてるか。」

「うん。」

二人が起きるまでまたないとギアスは与えられないからね。

その後、エヴァさんと一緒に二人が起きるまでMSの設計図を弄っていた。

「この禍々しいフォルムがいいな。」

「・・・・・・・・こつちも・・・・・・・・」

「ふむ、次元連結システムか・・・・・・・・これを再現するにはクーの解析が必要だな。」

次元竜の子供・・・・・・・・。。。

「うん、危ないことはだめだよ？」

「ああ、分かってるデータ取るだけだ。優しくする。」

「ならいいか……………」

「んっ。」

二人が同時に覚醒へとちかずにいく。

「起きたか……………起きた。」

私とエヴァさんもかさなった……………作業中もシンク

口してたし……………共振のせい？

「おはようございます……………」

「身体はどうだ？成功はしたがな。」

二人は身体をたしかめている。

「私の中に別の私を感じる。」

「……………それは多分二人とも。」

「共振でさらに近く感じられるんだろ。」

「あとは身体が軽い……………咲/加奈の思考が分かる

。かぎり無く同じ考え。」

「すごいな、ここまでとは……………ちょっと怖いかな

。」

その気持ち……………少しわかる……………

でも、わたしもほとんど同じ状態。

「じゃあ、最後に貴方たちに魔眼をあげる。」

「……………(じく)」

一人にギアスを与え、一人には魔眼を与えた。

咲にはギアスの未来が少し見える奴、加奈に殲滅眼(イーノ

・ドゥーエ）を与えた。共振の力で二人共両目が同じ魔眼になっただけだいいよね？

「隠密としてはかなり優秀じゃないか？暗殺者としてもな。

」

「……………うん、生存率も高そう……………」

……………よかった……………」

「使い方よくわかりませんが……………」

「俺が教える、お前たち双子の鵜をな。」

「よろしく願います。」

「さて、まずは徹底的に実戦だな。お前たちは戦闘技術ややり方が頭の中に入っている。あとは、それを自分のものにするだけだ。よって、店が終わったら別荘で修行だ。あとは

「俺とデートだな。」

「「？」」

「簡単だ妖怪達の保護に乗り出すから手伝え。」

保護？相変わらず優しい……。

「なんでまた？」

「ああ、不当に殺されてる妖怪もいるわけだし、悪い妖怪は切り、良い妖怪は保護する。基準は主観だな。神鳴流は妖

怪人間関係無くどちらにも力を振るうべきだと思ってな。」

「

「それは、面白いな。だが、私達も切られないか？」

「だから、いったたる主観だってな。（にやり）」

「……………それに、喧嘩売ってくるなら……………
……………つぶす……………だけ。」

「……………ふたりもいい？」

「はい、ご主人様達のお望みのままに。」

新たな仲間が百鬼夜行にくわりました。……………

……………鶺鴒の咲と加奈……………これから紗代さんと一

緒にがんばってください。神鳴流を妖怪が使う……………

・ 仏にあつては仏を切り、鬼にあつては鬼を切る……………

……………にいさまも気に入っていた言葉……………

悪と善は表裏一体……………ひとそれぞれ……………

……………なら……………神鳴流はそれを体現する剣

になる……………なら、いつそ……………MS

にも……………。

“さすがにそれは止めなさい。”

.....残念.....。

Inside Out

私は、5つの道場破りの帰り道を歩いています。今日の成果は十分でしょう。

「ん？この気配は……………」

路地のほうから妖怪の気配がします。

「いってみましょう。」

路地をすすむと大量の火鼠が火をおこそうとしていました。

「貴方達がこの間の火事の原因ですか？」

火鼠はこちらに振りむき襲い掛かってきました。

「しかたありません。降りかかる火の粉は払わせていただきます。」

龍神を引き抜き抜き戦闘を開始する。龍眼を使い一匹と逃さないよう効率よい殲滅を開始する。

「神鳴流、百烈桜華斬！」

円を描くように剣を振り、複数の敵を一度に斬りその後続けて業を放つ。

「百花繚乱！真・雷光剣！！」

直線状に気を放って、敵を吹っ飛ばしまとめて真・雷光剣で

とどめをさす。

「ふう、これでもう火事はおき……………っ!!!」

なんとか回避しました。さっきまで私がいた場所にはクレイターができていました。

「何者ですか？」

「良くもおらの仲間を殺してくれたな!!!!!!」

そこには巨大な火鼠がいました。3mほどの……………

いつのまに現れたの……………?」

「あちらから襲ってきたのですから正当防衛です。」

「う、うるさい。死ね!!!!!!」

な、どうでしょう……………さっきみたいに

簡単には勝たしてくれそうにありません。

「GURAAAAA AAAAAA!!!」

回避して切りつけますがあまり効果が無い！ならこれです。

「紫電、掌握！魔力充？・術式兵装!!!」

私は自身に雷を落とし闇の魔法で身体能力を強化します。

「神鳴流奥義、閃空双破斬!!!」

剣圧で敵を浮かせ敵の爪の付け根に一撃をいれさらに切りつけていく。

「まだです！虎牙連斬！！天翔龍閃!!!」

高速連撃を決めた後鞘にもどし天翔龍閃によって回避不能の

2連撃を叩き込む。

「ぐっ！」

さすがに、天翔龍閃はきつかったようです。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAA！」

これでどうですか？さすがにこれ以上は……龍

神化も視野に入れなければ……。

「くそおおおおお、食らえ！」

「っ！」

炎を吐き出し攻撃してきました。

「守護方陣！」

龍神を使い簡易結界を張ります。そして、炎が晴れた後には

焼け焦げた路地があるだけでした。

「逃げられましたか………つ。」

幸い引火はしていないので助かりました。このことを、かえ

って報告………ああ………失敗

してしまいました………なんで重力魔法解除してないん

ですか………私の馬鹿………これは

、お二人には内緒にしときましょう。

私は路地をでていそいで現場から離れます。結構はでに戦闘

してしまいましたから………一応人払いはしていた

のですが。

「きゃっ…」

「…っわ」

うう、不覚です。ぶつかってしまいました。

「あの、大丈夫ですか？」

「はい……ああああ、見つけた！」

「え？え？なんですか？」

誰なんでしょうか？

「私です私！」

「えっと、私さんですか？」

「違います！」

怒られてしまいました。

「火事の時助けていただいた……」

「ああ、あの時の子ですね。大丈夫でしたか？」

あときは、いろいろと汚れていたので良く分かりませんでした。

「あの時は助けにいただきありがとうございました。私は小次郎といいます。」

「え、えええええええ。」

お……弟と同じ名前です……。

「どうしたんですか？」

「いえ、無くなった知り合いと同じ名前だったのですいません。
ん。」

「いえ、姫巫女さまの弟君と同じならほ「らしいかぎりです

」。

「ひ、姫巫女ってなんなんですか？」

そんな恐れ多い名前が………。

「あの時いたみながそういつています。」

「わ、わたしには………。」

「いえ、貴方はまさに姫巫女です。その力と高潔さがなにより
の証拠です。」

「私、高潔なんかじゃないですよ………?」

いろいろしてからです。

「そんなわけではないです。」

は、話しを変えましょう。

「貴方はこれからどうするのですか？」

「はい、私にはもう親戚はいないので……………」

「……両親の残した財産も燃えてしまいました。でも、大丈

夫です。幸いどうにかかりますから。」

「ほんとに？」

「はい。それでは、ありがとうございました。」

小次郎君はさって行きました。

「ほんとに大丈夫なのかな？」

しばらく、帰り道のあるき足をとめます。

「やっぱり、大丈夫じゃないよね……………助けた

なら、最後まで面倒見ないとね……………」

龍眼を発動し小次郎君の居場所をみつけ、私は走り出す。

紗代 Side Out

姫巫女様とわかれ路地へと入ります。

「でも、お礼がいてよかった………これか、
どうしようか。」

当てなんてあるはずも無く………木箱の裏に
座り込み考える。

「お金もあとすこし、二日もたない………」

しばらく路地の隙間から黄昏の空を見上げていると………

・・・奥のほうから火をまとった鼠が数匹こっちにやってくる。慌てて逃げようとするけど囲まれた。

「江戸でなんで妖怪がこんなでるんだ・・・ついてないな。でも、ただでやられるわけには行かないな・・・」

「・・・」

覚悟を決めた時救いは現れた。

紗代Side

小次郎君のところへむかっているとき嫌な予感がした・・・

・・・龍眼を最大で発動したとき、小次郎君の方へ向かっている妖怪を確認した。

「まずい、急がないと!」

龍神を引き抜き、屋根の上に飛び乗り最短ルートを走ると同時に認識障害の結界を自身に展開する。

「まにあつて！」

計算した結果はぎりぎりだった。

「江戸でなんで妖怪がこんなでるんだ………ついてないな。でも、ただでやられるわけには行かないな………」

「………」

何とか間に合った、今度は守るんだ………

……今度こそ！

襲い掛かる火鼠の群れに飛び込んだ私は………

。

「やらせません、百烈桜華斬！！！！！」

周りの敵を倒し奴と後続がないかを確認します。

「姫巫女様……………」

確認完了どうやら大丈夫みたいですね。っ、龍眼全快はきつ
いですね。激しい戦いだったあとだけに。

「無事ですか？」

「はい！」

「単刀直入にいいいます。貴方に行くあてはありませんね？」

「それは……………」

私は彼の瞳を見続けます。

「はい……………ありません。」

「なら、私の所に来なさい。」

私は手を差し出します。

「えっ。」

「私は貴方を助けた。なら、最後までしっかりと面倒をみるべきだと思ったのです。それとも、迷惑ですか？」

「いいえ、ありがとうございます。」

小次郎君は私の手を握り返してきました。彼を起こし・・・

・・・・・・・・・・どうしましょう・・・・・・・・・・シオン

様とエヴァ様を説得しないといけません。嫌われてしまうか

も・・・・・・・・・・よりによって男の子をつれていくな

て・・・・・・・・・・でも、がんばってみましょう。

「では、行きましょう。」

「はい。」

そして、私は今日最大の敵と対峙しにいくのでした……

……訂正、この世で最強の敵でした……

私にとって。

長屋につき家に入ると、すでにお二人と……そつく

りな12歳くらいの少女がふたりいました。

「ただいまもどりました。」

「おかえり〜。」

「もどったか。」

「「お帰りなさい、お邪魔してます。」」

見事に一緒でした。

「で、その子供はなんだ？」

はい、さっそくですね。

「えっと、実は……………」

私は事情を説明し、双子のことを紹介と説明をうけます。

「つまりその子を引き取りたい……………」

「はい、馬鹿か貴様は……………いちいち助けてや

った奴の面倒をみるなど。」

「すみません。でも……………」

私も分かっています。弟を重ねてるだけだって……………

……………

「シオンはどうなんだ？」

「ああ。」

「うう。」

「……………」

私をじっと見つめてきます。

「うう、お願いです。嫌わなideてください。私は貴方のもの

ですから……………」

「あの姫巫女様……無理なら……。」

「それはダメです！でも、きらわれたくありません……」

「……どうすれば……。」

嫌われたら生きていけません……。

「おにいさま。」

「なんだ？どこから声が？」

「気にするな、紗代。」

「はいっ……」

うう、うう、びびりてしょうか……。

「おこび。」

「はー。」

シオン様の側まで行くと抱きしめられました。はう。

「最後まで責任もつんだぞ。」

それって、いいことですよね？ね？

「はい！」

「なら、小次郎。」

「はい。」

私の態度でちょっと驚いてるみたいですが。自覚しています。

……依存度がちやっています……

。。

「お前、紗代の養子になれ。」

「ええええええ。」

何を言うんですか？この年で子供……あれ、修行とか普段別荘に要る時間考えたそこまでおかしくないですね。

「最後まで責任取るんだろ？生憎嫁にくれてやる気は絶対ないからな。」

それは、とっても嬉しいです。

「あ……いいんですか？」

「はい、私がかまいません。この年なら子供いても大丈夫な年齢です17歳ですから。」

「それは、赤ん坊では？」

「あ……／／／」

「どこか抜けてるやつめ。」

「うう〜。」

「ちなみにだ、レンがたしなめなきやもつといじめられてた

ぞ。」

それってもしかして……………。

「単に私であそんでただけですか……………!!」

「ああ、可愛かったからな。」

「うう、そういわれると怒れません。」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫だろ。ちゃんとするところはするし……………」

・多分。」

天国の母様、弟様。早くも紗代は………母親になりました。

「これにて一件落着くでは、また明日です」

「おう、またな。」

「明日は店あけるから、気をつけてかえれよ。」

「はい」

「また、今度あいましょう。」

小次郎君もちゃんと挨拶しました。

「またね」

二人は奥にいつの間にか置かれた転送陣を使いもどっていき
ました。

「さてと、とりあえずだ。小次郎って一人でも寝たりできる
?」

「それはもちろんです!」

どうしたんでしょうか?

「なら、この長屋まるまる使え。俺たちはあっちの店の方で
寝るから。」

「そうだな、転送陣あるからすぐ移動はできるしな。ご飯と
かは一緒に良いからな。いいな?」

「はい!」

「いいのかな?」

「さすがにその年でそれくらいの子供はいろいろまずいしな

」。

そうなんでしょうか……。

「というかだ、俺が基本むこうになりそうだし、一緒に寝るわけだしな。」

「そういうことなら分かりました。小次郎君こまったことがあつたら相談するんだよ？」

「はい、大丈夫です。」

でも、不安だな。

「ん〜そうだ。炎王鬼さん。」

炎王鬼さん呼び出します。一応契約してますので。

「なんだ？」

「この子と生活してくれませんか？」

「かまわんが」ついでに鍛えてあげてください。「いいのか

？」

「はい、お願いします。」

「私からもお願いします！」

「なら、よかろう。シオン色々使って良いか？」

「もちろん好きに使え。」

なんかあぶなそうだけど大丈夫ですよね？

「えっと……姫巫女様……いえ、母上

、父上これからよろしくお願いします。」

「じゅらじゅら。」

「まて、それなら私も母だぞ。」

「「「「え。」

「なんでだ「ら〜〜〜〜〜〜〜！！！！」

それは、いくらなんでもだめですよね？え、いい？よかった

ですねエヴァさん。

Side
d
S
?..?

くそ、あの小娘めよくもやってくれたな……ん？あれ
は。

「く、妖怪か……。」

「おまえ、契約しないか？」

「なに？」

こいつの中にある野心が手に取るようにわかる。

「勘定奉行にしてやるぞ。」

「ほう、して貴様はなにを得る？」

「この町を炎の海にするんだ。お前は材木問屋とくめばいい

」。

くっくく、よってきやがったな。

「いいだろう。米屋も燃やすぞ。」

「ああ、契約だ。おれの力を好きに使え、ただし殺したい娘がいる。」

「いいだろう、契約だ。」

「ここに契約は成就された!!!!!!」

おれは奴の中に入りその欲望を糧にさらに力を強める。

「これからよろしく頼む。」

「ああ、「こちらこそな。」

「くくくく、あはははは。」

咲と加奈Side

???SideOut

あれから一週間経ちました。小次郎様は毎日炎王鬼さんに鍛えられています。私達もあるていど力を使えるようになった

あとご主人様に雪山につれて行かれました。

「「ご主人様・・・・・・・・寒いです・・・・・・・・」」

「そりゃ、こんなとこだしな。」

吹雪いています。でも、ご主人様は寒くなさそうです。

「「ご主人様は平気なんですか？」」

「ああ、気を全身に纏えばいいんだ。」

なるほど……二人同時にやってみます……。

「「むずかしい。」」

「というわけで今日は気の訓練だ。あの辺にかまくら作つといて、俺は食材と木材さがしてくるから。」

うう、できるかな？体の震えはとまりませんし。

「「わかりました……。」」

ご主人様は眼下に広がる森林の中に消えていきました。北海

道の旭岳あさひだけという山の山頂らしいです……

寒い。

「早く作ろっ加奈。」

「うん。」

私達はすぐに雪を集め、かまくらを作ります。気をつかえば
楽に作業できます。かまくらができた後、ふたりで抱き合っ
て暖をとります。

「眠いね……………加奈。」

「眠いね……………咲。」

「うん。」

まぶたがどんどんとじていきます。

「おい、大丈夫か！」

ご主人様が帰ってきたようです。

「「眠いです……………」」

「このままねたらやばいつて。」

即座に火をおこしてあつためてくれます。

「「あつたかいね……………咲ノ加奈。」」

「とりあえず、飯にするか……………来れ（アデアット）」

「。」

なんか調理道具ができました。

「これは、便利なんだよ。古今東西のありとあらゆる調理道具がよべるんだ。」

鍋の準備をしています。外を見ると白熊が倒れていました。

「……………」

「今日は熊鍋だよ。」

そして、すぐにできてお椀を渡したていただきます。あつた
かいです。

「いただきます。」

それから、ご飯をたべたあとも震えが止まりません。

「んゝ気の使い方がまだよくわからないのかな？」

「はい。」

なんとなくはわかるんだけど、記憶に霞がかかった感じですよ。

「どっすっかな……………」

「ん……………」

私達はご主人様に抱きつきました。

咲と加奈 Side Out

シオンSide

二人が抱きついてきた……だいが冷たいな。

「おい、大丈夫か？」

「「暖めてください。」」

「え、それはいいけど。」

「「夜伽もしてください。それが一番あつたまります。」」

「いいのか？」

たしかに、そのとき改めて使い方と気、魔力をあげたらいいけど。

「「お願いします。私達は貴方の物。」」

「わかった。」

結論から言うと共振のせいかしらないが、片方を感じさせて
たら、もう片方も感じてすごいことになりました。

朝、気持ちいい感じて目を覚ますと・・・・・・・・・・二人が
腰の部分でまあ、あれをしていた。

「おい、なにしてるんだ？」

「「ん、・・・・・・・・ちゅ・・・・・・・・れる・・・・・・・・朝の奉仕？」

「いや、そっただけど・・・・・・・・ん。」

「・・・・・・・・くくく。」

「おいだせつて。」

「大丈夫です。苦いけど美味しいです。」

しっかりと飲んでというか……かなり、魔力と気が
すわれたんだが？

「ご馳走様でした。」

「そうか……もう大丈夫か？色々。」

「はい。」

肌もどことなく艶々している。

「……できた。」

全身を気で纏っている。やっぱり知識の植え付けができてな
ったのかな。

「寒くないね、咲。」

「寒くないよ、加奈。」

「よかった……っ！」

「なんかきた。二人？」

妖気が2つ近づいてくる。逃げてるみたいだな。

「いくぞ。」

「はい！」

かまくらを出て状況を把握する………さて、
人の訓練にちょうどいいか。

シオン
Side
Out

咲と加奈Side

苦いしどろどろだったけど、美味しかった。喉を通ると魔力と気があふれてきた。房中術を使ったせいかな。

「「なんかきた。二人？」」

妖気が2つ近づいてくる。逃げてるみたいです。

「いくぞ。」

「「はい！」」

喉にまだ残ってる感じがするけど支障はないし、むしろ力が

わく……。……。

外に出てみると、5歳くらいの少女が全身毛むくじゅら

で直立二足歩行する辺なのに襲われていた。

「おまえはおれのものだ……!……!……!」

「いやあああああ……!……!」

どうしょ? たすけたほづがいいよね? うん。ご主人様に聞い

てみませう。

「鶴、あの雪男始末してきて。」

気持ちは同じみたいです。皆さんは私達を同時に呼ぶとき鶴と呼びます。

「「はい!」「」

私達は縮地を使い雪男の顔面に同時に飛び蹴りをかまします

。

「!」

手を十字にして飛び蹴りから顔を守ったようです。

「加奈。」

「うん、行くよ咲。」

私達は即座に後ろと前にわかれて挟み込み、クナイを数十本を風を纏わせて同時に投擲する。

「神鳴流、魔星剣！！！」

「ああ、マジックスターソードか……………、ほらも

う大丈夫。」

どうやら、女の子は無事みたいです。小太刀を抜いて構える

。

「があ！」

「耐久力たかい。」

「あれにしよう。」

「そっしゅじゅ。」

相談完了。相手の攻撃をよけつつ小太刀をあわせちまちまとダメージを蓄積させる。

そして、同時に仕掛ける。

「っ！」

「神鳴流、回天剣舞・六連」

左回転と右回転を同時に繰り出、遠心力をさらに増大させる。
。

「がああああ！」

まだ、耐える。

「止め。」

「浸透爆撃！」

小太刀を収め、気を手に集中し対象の内部に通し内部から細胞を爆発させる。それを左右から同時にする。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!」

「

左右から来た破壊の気がぶつかり合い威力をさらにあげる。

爆音が響きあたり一面に肉片が飛び散りる。風を操り私達にはかからなくする。

「勝ったね、咲。」

「勝ったね、加奈。」

「馬鹿、派手にやりすぎだ。」

ご主人様が女の子を抱えて走ってくるので……ご主人様の元へいくと……抱きしめられた

「うん。」

「？」

「……………」

「……………あ……………」

雪崩がせまっています。

「転移。」

視界が暗転して、次に気づくと店にもどっていました。

「「ごめんなさい。」」

「浸透爆撃は人間には禁止な。」

「はい。」

「で、お譲ちゃん大丈夫か？」

「……………（じくじく）」

「名前いってみ。」

「雪奈……………」

「雪女の子供か？」

「……………（じく）」

ひんやりして気持ちいね。なでなで。

「ん〜、行くあてあるか？ないならここにいればいいが。」

「……………いる……………」

しばらく考えた後、返事をしました。

「じゃ、雪奈は小次郎にあずけるかな。年も近いし。」

「「わかりました。」」

こうして、新しい仲間がふえました。冷蔵庫によくいそつだね。

咲、加奈 Side Out

小次郎
Side

いただいた訓練メニューをしていると父上がやってきました

。父上の後ろには小さな女の子がいました。

「小次郎、お前この子の面倒をめてやってくれ。」

「はい、わかりました。私は小次郎といいます君は？」

「……………雪奈。」

「この子も私とおなじなのでしょう？」

「この子、純粋な妖怪だから。気をつけてやってくれ。」

「妖怪……………」

「。じ。」

父上の後ろでびくびくしている。

「大丈夫おいで。」

父上をみて……………。

「……………（しん）」

てくてくとじつちに寄ってくる。頭をなでてあげる。

「」

「どんな妖怪なの？」

「……………ゆきおんな。」

「そっ、これからよろしくね。」

「んじゅ、雪奈にこれはずささせるなよ。結構あぶなくなるか

」。

雪奈の首に綺麗な青い宝石がかかっています。

「はい。」

「そいつで、雪奈がすごくしやすくなってるからな。」

説明をつけると、どうやら雪奈の体温や力を調整するための物らしいです。これがなくなるとたちまち体調を崩すか周りが凍ったりするそうです。

「はい。まかせてください。」

こうして、雪奈との生活がはじまりました。数日たつと懐いてくれて、袖をもって私の後をついたりしてくるようになった。

小次郎 Side Out

このごろ人気がでている店にやってきた。その店は米屋が
ぶれて買い取った後にできたようだ。しかし、潰れた経緯に
おかしなものを感じた。

やってきた、情報どおり繁盛しているようだな。

店に入ると若い双子の娘達が働いていた。

「いらっしやいませ。お食事ですか？道具ですか？染物で
すか？」

「食事で頼む。」

「ご案内します。」

案内され目録をみると知らない料理も多数ある。

「抹茶と苺大福を頼む。」

「かしこまりました。」

しばらくすると顔色の悪い元陰陽師の御庭番がやってきた。

「おまたせしました。抹茶と苺大福になります。」

「そちらのお客様は？」

「私は茶を一つ。」

「畏まりました。」

茶が届いた後話し始める。

「どうした顔色が悪いが？」

「ここは、まずいです。店員のどれもかなりの妖力をもって

います。先ほどの双子………結界の強度も半端では
ありません。」

「まことか？」

辺りを警戒しながら会話をにつづける。

「はい。もう一つご報告がございます。姫巫女と道場破りは
同一人物のようです。そして、この店に出入りしているそう

です。」

「つまりここがあたりと……」

「ぐはぁー!」

浪人のような奴が勢い良く店の外に吹き飛ばされていた。

加奈、咲Side

私達は、お団子に虫をつけようとしていた客を見つけた。

「おい、このみ」「食らえ。」「ぐはっ!!!!!!」

そいつに一撃をいれ店の外に吹っ飛ばす。

「てめら、なにしゃがる!」

「虫をつけようとしていたので止めたまで、御主人様の作

った物への侮辱は許しません。」「

にらめ付けると浪人はうろたえましたが、刀を抜きました。

「きゃああああああああああ!!!!」

店の中の客もそれを見て悲鳴を上げます。

「大丈夫です。お静かに。」「

静まるはずもありませんが………すぐ終わります

。

「お前！表に出ろここじゃ迷惑だ!!!!」

あれ、小次郎様が浪人の相手をするみたいですよ。見てみまし

よ。

外に出た浪人たちは小次郎様にやられました。少し苦戦した
ようですが、炎王鬼さんに鍛えられてる方が浪人風情にまけ
るはずありません。

「お怪我は？」

「無いです。それより、これ。」

彼らの財布ですか。迷惑料もいただいております。

「どごしたのですか？」

「あ、お帰りなさいませ母上。」

「お帰りなさいませ、紗代様。」

私達はお店の中に戻り商売にもどります。

「お騒がせしました。」

「あ、お侍様。」

「新之助さん。」

「ああ、ひさしぶりだな。」

その後、すこし話したあとわかれたようです。しかし、怪しい人たちです。

シオンSide

加奈、咲SideOut

夜、ご飯を食べ終えた。

昼間騒ぎがあったのを見てたけど………小次郎はもう技の修行にはいっていいな。

「小次郎。炎王鬼に技も教えてもらえ。」

「いいんですか？」

「ああ。」

話していると店の扉がノックされた。

「はい。なんの御用でしょうか？もう閉店してますがお侍様。」

「ああ、すこし話があったな。」

来たか。

「入ってもらえ。」

「……………」

「失礼する。」

そして、こちらを見る予想通りの人物。警戒しているな、こちらと同じだが。

「まあ、座ってください。」

「ああ。」

座ったと同時にお茶をだし。話を切り出す。

「はじめまして、私はここの主のシオンと申します。徳川吉

宗。」

“ 単刀直入にいきましたね。”

めんどろうだしね。

「っ、なぜそれを知っている？」

「ああ、変な気は起こさないほうが良いよ。ただこっちにも情報源があるっただけだ。」

“ 一応まちがってませんね。転生前の知識ですけど。”

「そうか……では、聞く。お前達はなにをする気だ？」

「なにをと聞かれたら金儲けだ。だから、店を開いた。」

「民には迷惑はかけない商売か？」

「ああ、あとあんたが探してる姫巫女はこの紗代だな。」

調べにかかってるのは分かってたからな。

「そうか、君が。」

「はい、上様。目礼にて失礼。私が頭をさげるのはただお一人なので。」

「かまわぬ。今は徳田新之助だ。」

「まあ、いい。とりあえずこっちからはあんた達が何かしない限り手は出さない。」

「では、今起こっている火事や進入した妖怪については？」

「火事は知らないな。妖怪は何人が連れてきてるが騒動はおこしてない。」

「なら、一つ責任をとってもらおうか。」

「へえ、いつてみ。」

この状況でいえるとはさすがだね。

「この江戸の結界を張りなおしてもらいたい。お前達が侵入したときにできた綻びから進入してきてる妖怪もいる。」

「あくたしかにそれはこっちの責任だな。いいだろう、ただし俺達は自由に出入りできるようにするからな。」

「それはかまわない。」

「じゃ、明日にでも張ろう。」

「頼む。」

つと時間だな。

「紗代、鶴狩りの時間だいいつといで。」

「「「はい。」」」

三人は出て行った。

「どづいっことだ？」

「なにこのへんの区画を修行代わりに見回らせている。」

「なるほど。ところで米屋の件だが。」

「ああ、あれはこっちでも辺に思って調べた。ほら、この店が買いだめしてる。こっちは木材を溜めているな。」

「ここに関わりがあるのか。ま、っそちはあんたの仕事。妖怪はこっちでやる。何もしてない妖怪を殺すならあんた達も殺すからそのへんは覚えておくといい。」

「わかった。では、失礼する。姫巫女殿に今度手合わせ願

たいと伝えて置いてくれ。」

「わかった、いっておく。武器とかもとりあつかってるからなにかあればおいで。」

「ああ、うまかったからまたくる。」

さて、一応接触とコネは成功と。

“どうするの？”

あると便利だからスポンサーになってくれるかもしれないよ？

“そっか。”

さて、事件はもうすぐ解決するな。手がかりはやったしな。

後は、紗代が逃がしたあの妖怪がただで終わらないよな・

……。三人いれば余裕だろう。俺はいろいろ保護につ

シオンSideOut

つるか。

紗代Side

上様がたづねてきてから早四日。妖力を感じたので鶴さん達と現場に向かうと、武家屋敷の一角で上様と武士らしき人が対峙していた。妖気は武士からでている。

「」どっししますっ。」

「いっしょー」

「了解。」

移動を開始する。

「ここまでだな。大人しく縛につけ。」

「まだですよ上様。たんに人がやられただけ、私の力をおみせしましょう。」

大きな火鼠の姿に変化した。

「おのれ外道に落ちたか。」

それはちょっと訂正もとめたいですね。

「死ねえ！！！！！」

「はい、そこまです！！！！！！」

「何奴！」

「お久しぶりですね。鼠さん。」

「やっと見つけたぞ。俺は貴様を殺したかったんだ！！！！！！」

「

熱烈なラブコールですね。お断りしたいですが。

「「他にもいる。」

「うん。」

「けけけ、紹介するぜ！雷獣だ！！」

雷獣が1体火鼠が200くらいかな？

「上様はさがっていてください。ここからは裏の領分です。」

「

龍眼を発動しお願いする。

「しかし……………」

「上様。われらは下がりました。彼らも全力を出せないか

と。」

「わかった。後は任せた。」

「心得ました。さあ、二人とも狩りを開始しましょう。」

私達は肉体に掛けていた枷をはずして行動を開始する。

「加奈は火鼠。咲は大きな方お願い。」

「「いいの？あつちには紗代様狙ってるけど。」」

「だから、都合がいいです。雷獣さんをさきに倒してしま
います。」

「「了解。」」

即座に行動を開始。

雷獣の前にいき力を解放する。

「雷龍!!千の雷!!!!!!」

雷龍が体の中からでてきて私の周りから千の雷を落とす。

「雷獣よ……我に従いなさい。」

雷をたくさん受けた雷獣は許容量をこえる力をつけつごけな
い。

「……………」

「いい子です。」

予想通り獣系統は従えることが可能ですね。圧倒的な力をみ

せれば……………され、お二人は？

紗代 Side Out

数だけ多くて面倒です……………いつきにけりをつける。

アラクネの力を使い。極細の丈夫な糸を大量に作る。一本一本に気を通し切れ味を強化させる。

「行きます。神鳴流奥義、繰弦曲・魔弾。」

糸による全方位からの刺突攻撃。

「我が糸からは逃れられません。さて、次ですね。」

咲平気かな？

加奈Side

咲
S
i
d
e

ん、紗代様や加奈もとばしてるね……………ここは—

つ私も派手にいこうかな。

「貴方の相手は私です。」

「うるさい小娘が！くっちまっぞー！」

「やれるものならどうぞ。」

やっぱり硬いけど………紗代様を待つ必要もないし………知識だけあるあの技やってみたかったの試そう。

「おらー！」

単純………。

「影分身ー！」

私は分身を4体つくり四方を囲む。

「このやろっ食らいやがれー！ー！ー！」

炎を吐いてくるけど風の防壁により阻める。

「次は私の番です。食らいなさい四重螺旋丸！！！」

「」

四方からの螺旋丸により奴の体は消し飛びました……

……威力おかしいですね……そして、消費はそん

なにつらくない。風神で自由に操れるから効率よくできるん

ですよ。四重はやめておきましょう。

拏拏S·i·D·e

咲S·i·D·e·O·u·t

「これが彼らの力か……」

「どれも、我らの太刀打ちできるものではありませんね。」

人間の領域を軽く超えておるな。恐ろしき神鳴流よ。しかし

、これはありがたいかもしれない。かれらに京都にはびこっている妖怪達の退治をお願いすれば……。

Index

鶴ちゃんと雪女ちゃんがやってきた。(後書き)

今回はグラムサイト2さんが書いてくれた雪女、雷獣でした。九尾は京都で人魚はその道程でたすけようと思います。

上様結構空気になってる。ごめんなさい。でも、勘弁してよね主役はあくまでシオン達。次はエヴァを暴れさせようかな。そして剣術大会……とばします。普通に考えて、勝てる気がしないしね。

では、また次回会いましょう。更新は遅れると思います。だって読みたい本がでてるんだもんカンピオーネとか色々と!!(土下座)では、また来週!

次回予告(嘘)

それはエヴァの反乱だった……江戸の町は燃えさかる……では無くて凍りついた。ブーストされつづけたこおるせかいはその名のとおり世界を凍てつかせる!!はたして世界の運命やいかに!森羅と創世が行くチート過ぎるネギま!第八話「逆襲のエヴァンジェリン!!乞うご期待。」

作者の悪乗りのため本編とは一切のかかわりはございません。ごめんなさい。デイスガ アっぽくやりたかっただけです。

女神の悲劇（前書き）

さて、そろそろ江戸編が終わりそうです。
アンケート続行中。

内容は大战をどの勢力でいくかです。

1 連合

2 帝国

3 紅の翼

4 独自勢力

5 世界ぶらり旅。

この5つのなかからお選びください。

現在5が3票、2が2票、3と4が一票です。

今吉宗に呼ばれ紗代と共に江戸城に来ている。

依頼していたこともあるけど城によばれるとは……………
・本来ならこないんだが。

「上様のおなぐり」

やっと来たか。皆平伏してるが俺と紗代は当然しない。

「無礼であるぞ！」

「黙れ。」

「ひい。」

ちよっと殺気をこめると押し黙った。

「よい。」

「しかし……………」

「よいとさつとさる。」

「はっ。」

不満はありそうだけど……………やっと本題か。

「城までご足労願って悪かったな。頼みたい事とそちらの依頼のほうで、城に呼ぶのがごうがよかった。」

「というと判明したのか。」

「まずは、紗代殿。」

「はい。」

「そなたの父親が判明した。」

「えっ。」

「ま、驚くよね……………頼んでた件はこれです。」

「調べた結果、お主は天皇家の血を引いていることが分かった。」

「へえ、思ったよりすごいのがきたね。第六天魔王とかもおもしろいけど。」

「それって……………。」

「父のことをきくか？」

「いえ、必要ありません。どのような父とて関係ありません。私はシオン様の物ですから。」

せつかく調べてもたらったけどいらなかったか？

「そうか、ならいい。紗代殿とも関係あるんだが……
・シオン殿と紗代殿に頼みたいことというのは、京都、江戸近辺など日本中で暴れている妖怪などを倒して欲しい。」

またとんでもないこといつてきたな。

「それと、私の関係というのは？」

「ああ、天皇家からも救援要請がきていてな。そこで相談した結果幕府、天皇家両方の連盟で全権をあずけることになったのだが……」

ああ、そういうことか。

「どうせ、血筋や権力ある奴にしか与えられんとかそんなのだな？
そして、紗代は天皇家の血を引いてるから面目は立つと・・・・・・・・
・・・・・・・・くだらんな。」

「ああ、その通りだ。なににおいても優先される力を与えるわけだからな。」

「・・・・・・・・どうしましょ？」

たしかに、悩みどころだけど・・・・・・・・しょうじきめん
どう。

「旅の代金や色々融通もきく、そして君たちの目的の保護のほうも
有効だ。」

「紗代はどうする？」

「私は・・・・・・・・やりましょう。人々と妖怪達も守りたいで
すから・・・・・・・・シオン様達に敵対しない限りは・・・・・・・・
・・・・・・・・」

微妙に黒いな・・・・・・・・。

「ありがとう。これが印籠と書状だ。」

印籠には天皇家の家紋と徳川の家紋が彫られているな。

「そして、シオン殿にも協力願いたいよろしいか？」

「ふん、紗代がいくんだ俺も行くに決まってるだろ。」

そうなることわかってるくせに。

「では、よろしく願います。あれを持ってきてくれ。」

運ばれてきたのは黄金色のお菓子。いいのか上様？

「これが支度金だ。旅の途中などこれを使ってくれ。」

「了解。ありがたくいただきますか。」

ちなみに千両箱です。

「いいのでしょうか……………」

「いいんじゃない?」

「ああ。」

「小次郎達どうしましょうか……………」

「しばらく江戸を拠点にやってくぞ。文句ないよな?」

「ああ、京都もしばらくはもつはずだ。江戸からも増援をおくるのでな。むしろ江戸の方が防備が緩くなるので頼む。」

「ああ。」

旅の準備してくか……………そのまえに派手に金稼ぎだ。

印籠貰ってから早一年がった……え？平気な
のかって？平気だろ、多分。やったことは江戸近辺や北海道あたりの妖怪を退治したり保護したりしていた。紗代は剣術大会に優勝しました。後ひとこというならこの時代の人間すげえ、普通に上の連中縮地や瞬動、虚空瞬動なんか使いやがる。現代になったら退化してくんだな……。

店の方が繁盛しまくってます。奉公人をやといれたり教育したりね。お蔭で店舗もふえてってます。店の名前は万屋神鳴（武器からなにならなまで扱ってます）……紗代の苗字にした。この一年で結構有名になったね、紗代が姫巫女で通ってますが……大概、紗代に鶺鴒達つけたらおわっちゃうからね。別荘に保護した妖怪達の住処も作ったから文句は出ていない。鴉天狗とかも連れてきたから諜報活動をお願いしている。

江戸から京都へ吉宗経由で武器をうつたりしました。対魔の刀とか薙刀などをね。これが結構収益が高い……武器商人もつかるんだな」と思いました。あと、泥棒や強盗などは我が家の罠で撃退されていきました。江戸の治安もいいしね……
・二日ほど前から大量に金つかってますけどね。ええ、江戸の土地買い占めてますよ……ふふふ、東京になるんだから儲けはまちがいなしとなる。今住んでる人たちにはそのまま貸してるよ？賃金はかなり安いです。倉にはまだ山と積まれた千両箱がございます。

「邪魔するぞ。」

吉宗さんが尋ねてきた……今は徳田新之助か。

「こつちこつち。」

今現在店の奥で作った酒を試し飲み中です。

「昼間から酒か？」

「試し飲みだよ……飲んでみてよ。」

「ああ・・・・・・・・・・言いな。」

「どれが旨いか評価つけて言ってね。」

「わかった・・・・・・・・・・ところでだがいつ京都に立つ？」

それだろうと思いました。

「武器送ってるけどまずいの？」

「ああ、だんだん危なくなってきたらしい。そろそろ寄越してくれって天皇家が言ってきた。金も随分溜まったんだろ？近頃はばら撒いてるらしいがな。」

「ああ、土地を買ってるな。お蔭で賑わってるじゃないか。」

「それはありがたいがな。新種の苗なども提供してくれたからな。安定して作物ができている。」

苗とか生活必需品を品種改良して売ってあげました。

「まあ、小次郎とかもだいぶ強くなってるしそろそろいいかと思ってる。」

「そうか………できるかぎり、早く頼む。」

「ああ。」

どんどん酒なくなっていくな。

「おい、私も混ぜろ。」

やってきたエヴァにも酒を上げて話しのつづきおする。

「なるほど。たしかに、各店舗も売り上げが順調に伸びているし問題ないだろ。」

エヴァも賛成みたい。それから二時間ほど立つと紗代が帰ってきた。紗代は今妖怪退治・保護以外は江戸に神鳴流の道場を作ってそこで親を亡くした子供たちを引き取って神鳴流を教えている。まあ、素質ある子達だけだけど、それ以外は普通の孤児院に入ってもらってる。ちなにみどちらもこの店の出資です。ようは、裏道場(?)神社建ててそこでやってるしね。そっちに炎王鬼さんや小次郎と雪奈

もうつつている。あとは神鳴流をある程度覚えた天狗さんも稽古してくれてる。基本小次郎だけだな。

「ただいまです……………／／／」

「ん？どうした餓鬼どもに問題でもあったか？」

「顔が赤いが……………」

「つらいなら寝とけよ？」

「いえ、子供達はいつもどおり元気です。その……………
・シオン様……………／／／」

「なんだ？」

どうしたんだ？

「……………えっと……………赤ちゃんができました……………」

「なに!」「」

ガシャーン!!!

「おめでとう。」

うわ、店から鶺鴒たちもきたな。

「本当ですか!」「」

「う……嘘じゃないんだな?」

エヴァが震えていて、鶺鴒も紗代につめよっている。

「はっはい……まぢがい、ありません……なんども確認しました……ウンディーネがそういつてました……」

ウンディーネがそういうなら確実かな。体調管理頼んでるし……. . .にしても……. . .ほんとに父親になるわけか……. . .よくできたな。

「なら確実だな……………」

「おめでとう紗代様。」

「そうだな、おめでとう。いいか、ちゃんと生めよ？ 私達の子でもあるんだしな。」

お〜エヴァがちゃんと年上みたいだ。

「はい。末永くエヴァさんや加奈さん、咲さんをお願いしなくては
おけません。」

「どういうことだ？人間の寿命なんて……………」

「問題というかわかりませんが……………調べた結果この子は龍神の血と真祖の血が交じり合っ
てすごいことになってるそうです。」

“おにいさま、ちゃんと責任とらないといけませんね。”

そつだな……………どうするか……………どうなるんだ？

龍神と真祖の血族って……

“わかりません。”

だよな。

「そういつことなら引き受けるぞ。」

「はい、おまかせください。」

「しかし、そうになると旅にでれないな……どっすっかな。」

お腹に子供がいる紗代を連れてくわけには……

「大丈夫です！ついて行きます！」

「いや、しかし。」

「そつだ、身体は劳わらねば……」

「」「」「」

皆から心配されてる。

「普通よりは大丈夫なんじゃないのか？」

確かに新之助のいうとおりだけど一年ですむとはおもえないんだよな。

「それにですね！この子すごい成長遅いそうなのです。ウンディーネいわく出産は3、4は掛かるっていつてました。その間私の力も上がるらしいです……この子の力を使って。」

「ん〜ならいいか。」

「」「」「いいんですか！」「」「」

みごとにはもったな。意味は三人と一人で違うけど。

「まあ、守れば良いし。絶対無茶するなよ？」

「はい！」

「んじゃ、そういうこといいな？」

「ああ、わかった。たしかに、お前の血に龍神の血だ……。よく観察してみたらかなりの力もってるようだしな。むしろ、力を使ってやって付加をかけるのはいいかもしれんな。」

「「そういうことならかまいません。私達が手だしさせなければいだけですから。」」

胎児のころから英才教育って……。すごそうだな

「では、祝いをしなくてはいけないな。」

「確かに新之助の言うとおりだぞ。」

店の人たちもこっち見てるな。あれだけ騒いだからな。よし。

「よし、今から倉にあるだけの食材で料理作れ。無くなるまで無料でかまわん。」

「はい！」

この後、晩までさわぎつつけた。その晩エヴァや加奈と咲に激しく求められたけど………。なんとか気絶させるまでやって寝れました………。三人同時はきついで。

“……………”

なんだレン？

“……………じいじやう……………”

う、いいかえせないな。

“……………うらやましい……………”

え、なんて？

“なんでもない……………おやすみなさい……………”

”

ああ、お休み。

俺も寝るか、順番きめるか。双子は一緒だろうか……
……
……
……
……
……

紗代 Side

旅にでる前に子供達に挨拶をして……………小次郎君と雪奈ちゃん、炎王鬼さんの元へ挨拶にきた。

「というわけでお母さんは旅に行ってきます。」

「しってます。父上達にききました。身体を気をつけてくださいね。」

「……………(じくじく)」

「私達がない間お願いしますね。」

「わかっている、安心していつて来い。」

護衛と先生は問題ありませんね。

「はい、小次郎いいですか？修行もしつかりやるんですよ？私達が帰ってくるまでに炎王鬼さんから一本とるんですよ。」

「は……母上それは無茶では……」

「大丈夫です。始めは道場の皆と一緒にでもかまいません。とればだんだんと人数をへらしていけばいいのです。」

「はい。店の方はどうします?」

「貴方は店の方は心配せずに、皆と共に励みなさい。次の世代を担っていくのですからね。」

「はい!まかせてください。母上に追いついて見せます!」

それは……無理だと思っな……。

「実戦では無理だな。しかし、稽古なら勝つ事もできよう。それをめざすといい。」

「しかし。」

「小次郎。貴方は皆を守る力を手に入れたらいいのです。それでも、私に勝ちたかったら帰ってきたらいつでも相手になってあげま

す。」

「よろしくお願いします。」

これでよしと、あとは……………

「雪奈ちゃん。小次郎君をお願いね。」

「うん。」

「母上私がお願いされる方なのですか？」

「「そう」

「……………精進します。」

そろそろ時間ですね。

「この辺りの土地は買い取ってますからある程度すきになっていいですよ炎王鬼さん。」

「そうか、ならば修練所を新しく作るか。」

小次郎が震えだしましたが………大丈夫ですよ？

「それでは、子供達と小次郎君や雪奈ちゃんたちをよろしくお願
いします。」

「ああ、それじゃあな。」

「お帰りをお待ちしております。」

「………またね。」

「ええ、いつてきます。」

「「いつてらっしゃい。」」

神社をあとにして皆さんとの合流場所に向かいます。ちゃんと成長
してるよつで安心です。

集合場所に着きました。

今回は馬でいくって言っていましたが……
ですか？

紗代 Side Out

H
J
A
S
I
D
E

とりあえず、目の前にいる奴について聞いてみるか。

「で、シオンこれはなんだ？」

「なにつて馬？」

「どこの世界に羽の生えた馬がいるか！！！！」

そう、目の前にいるのは白く羽の生えた馬だ。

「ペガサスだよ？」

「それは馬じゃない、幻獣だ！」

「だめなのか？」

ほんと不思議そうに聞いてくるが・・・・・・・・・・・・・・・・

「すごい馬ですね。」

「空も飛べるよ。」

「ほんとにこれで行くのか？」

「うん。とんでるときは認識障害使って普通に歩くときは羽けせばいいしね。」

「ならいいか。」

なんとかなるだろう。

「あの、それより一頭しかいませんけど……」

「紗代は僕の後ろでエヴァが前にのればいいよ。」

それは良い考えだ。移動中くっついてられるしな。

「鶴ちゃんたちは？」

「私達はそのまま並走するか、先行しますから平気です。空も飛べますし。」

たしかにすぐ動ける二人がいれば色々楽だな。

「紗代はいやか？」

「いえいえ、嬉しいですよ。」

「よう、じゃいぐぞ。」

「「「「「お〜」「」「」

こうしてペガサスに乗って江戸を旅立だった。商隊もすでにいかせてある問題ないな。

それから二週間がたった。雑魚どもが襲ってきたが鶴達によって音もせず瞬殺されていった。茶屋で休憩していると加奈が報告してきた。ちなみに今は咲が先行している。ふたりは距離とか関係なくお互いの所在地や考えてることまでわかるからかなり優秀だ。

「報告します。次の港で見世物小屋に人魚が捕らえられているそうです。」

「ひどいな。」

「ひどいです……………」

まったくこれだから一部の人間は……………。

「そしてもうひとつ……………海の方より蚊を筆頭に海龍人魚などに内陸から河童なども終結しています……………」

「同胞が攫われ怒り出したのか。」

「おそろくそつだと思いません。」

ほっておけば人間は死ぬただけだな。自業自得という気もするが……

「見捨てるのも手だな。」

「それはダメです！」

やっぱり紗代は反対か。

「海の方の到着時間は？」

「明日です。我々のいる場所からはぎりぎりですね。」

「なら、二手にわかれるか救助と足止めにな。足止めは俺とエヴァ
でいくから紗代は鶴と共に救助を頼む。」

「わかりました。」

「了解。」

まあ、シオンとならいいか。

「エヴァ、えいえんのひょうがでこおらせればいいからな。」

「おいおいかなりの範囲と魔力だぞ？」

「神剣のブースト機能使えば良いだろ。」

なるほど、ちょうどいい実験だな。

「いいだろ。思う存分使ってやる。」

ああ、楽しみだ。

H
ア
Side
Out

シオン様達と分かれてから町に入り咲さんと宿で合流する。

「どうでした？」

「所在地も確認。すぐ行動にうつせる。」

「じゃあ、いただいた権限さっそく使いますか。」

使えるものは使えって身を持って教えられていますからね。修行と
かで……………ガクガクブルブル。

「了解。大丈夫?？」

「はい、いきましょう。」

見世物小屋に向かいます。

さて、ここですか……………まずは中に入りますか。

「いらっしゃい。いらっしゃい。人魚や河童、蛟までいろいろめず
らしいのあるよー!」

「鵜ちゃんほかにもいろいろいるみたいけど?」

「今朝届いたみたい。昨日は無かった。」

ならしかたないかな。

「どうする、嬢ちゃんたちみてくかい？」

「三人お願いします。」

三人分お金を支払うと鶴ちゃんたちは不思議そうにする。

中に入り説明する。

「中にお金払って入った方が怪しまれないしなにがいるかみれるしね。」

「なるほど、なら直接聞いてみる。」

「だね。」

それからしばらく見世物小屋を見てると人魚がつれてこられた。綺麗だけどやつれてるみたい。翻訳魔法を使い念話をつないでみる。

『こんにちは。』

「っ！」

『大丈夫です。貴方の見方ですから。今私達は貴方の右上にいます。三人ですけどわかりますか？』

『はい……人間の貴方が？』

やっぱり警戒されています。

『私の隣の二人は半妖です。そして、私は……』

龍眼を発動します。これで分かるはず。

『龍神様………』

『どうですか？』

『わかりました。信じます。』

『私達は妖怪の保護したりもしています。聞いたことはありませんか？』

この一年で結構有名になり目の敵にもされたりしてますが。

『では、貴方達が………私達を保護してくれるのですか？』

『はい、こちらにはその準備もあります。一つききたいのですが、他の子供は何人くらいいますか？』

『同属が3人に河童の方が4人、蛟様の子供が1人、猫又さんが7匹です。』

多いですね………でも、がんばります。

『わかりました。もうちょっと辛抱していてください。』

『はい。お願いします。』

鶴ちゃん達と相談しましょう。

「どうしますか？」

「風で調べたところあつてる。」

「まずは穩便に交渉しましょうか。鶴ちゃん達は隠れて助け出す用意してください。」

「加奈はついていきます。咲ひとりで行けるよね？」

「平気。」

護衛は大丈夫なのに心配性なんだから。

「仕方ありません。貴方の身体にご主人様の子供がいるのですか

ら。」

「はい。」

顔にだしてみたいですよ。心配してくれるのはうれしいんですけどね。

「では、咲をお願いします。」

「了解。」

咲の姿が見えなくなりました。結界を展開したようですね。気配自体はまだかんじますから。

「私達もいきましよう。」

「了解。」

店員に話しをつけ団長の所へ案内していただきます。印籠みせたら一発でした。

今私達は団長室にいます。

「ようこそいらっしゃいました。ご用件は？」

ふとつたおじさんでした。それもいやらしい目で私と加奈を見えます。

「簡単です。ここにいる妖怪や動物を引き渡していただきます。」

「そんな無茶な。それそうおつの値段をいただかないと。」

「これは勅令です。」

印籠をみせて畳み掛けます。

「これは將軍家と天皇家よりの勅令ですがこれでも逆らいますか？」

「ぐっ・・・・・・・・・・・・・・・・そこをなんとか・・・・・・・・」

お菓子を差し出してきました。こういうときは底を確認するんですね。確認してみると黄金色でした。

「加奈。賄賂の現行犯です。」

「そうですね。捕縛いたしましょう。」

「くっ、こうなれば仕方ないですね・・・・・・・・貴方達には死んでいただきます！者どもー！」

「・・・・・・・・・・へい！！！！！！！！！！」

いっぱい武器をもってる人がきました。

「反逆罪もつかいですね。よって打ち首でも問題ありません。」

「このじょしきょうでなにやってやるー！」

化けの皮がはがれましたね。この程度じゃ鶴である加奈をとめられないのに……………。

「いいのですか？」

「なに？」

「この程度……………。たった40人たらずで私達を相手に本当に良いのですか？」

「なにを馬鹿なことを……………。手足を切り落として玩具にしてあげなさい！」

「そうですか。では、参りましょう。」

「いきますよ。」

「命令は？」

「見敵必殺です。」

「了解。任務開始。」

シオン様に教わったように命令すると嬉々として動きますね鶴の二人。

「網完了。繰弦曲・崩落。」

糸が部屋中に展開して網のように出てきた人たちをつつみこみ、その糸が内側へと収束していく……。

「「「「「ぎゃあああああ！！腕が！足が！！！！」」」」」

うん、後はすごいことになっていますね。残りの敵を切り伏せながら敵じゃなくてよかったですと思います。

「ば……ばかな……… たった二人で………」
「…こんな………」

「さて、これで終わりですね。」

「まだまだ、私の兵はまだいる！」

む、増援がいるんですか？

その時、扉があき中に血まみれの咲がはいつてきました。

「咲？大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。」

「「紗代様、任務完了です。この施設にいるこの部屋以外の全ての敵対勢力の沈黙を確認しました。」」

「え？」

「「見敵必殺との命令でしたので全て排除しました。」」

えっと加奈ちゃんに与えた命令だよね？咲ちゃんもそれを受けて行動したってことかな？繋がってるから片方の名前いれて命令しなきゃ………両方でそうっごいちゃうのか………気がつけないと。

「わ……. わかった……. つれていっていいから、いのちだ」
「…….」

首もはねましたし、これで終わりですね。

「では、皆さんを解放してあげてください。動物達も。」

「了解。」

二人は即座に行動を開始しました。

「こちらはこれでいいですけど……. そっちは大丈夫ですか？」

H
グ
ア
S
i
d
e

紗
代
S
i
d
e
O
u
t

ほう、これはなかなか見ごたえあるな。

「いっぱいいるな」

私達はコウモリの翼を出し空から数えるのも面倒な妖怪たちをみる。

「とりあえず交渉してみるかな。」

「そんな、まどろっこしいことするのか？」

「ああ、その間にエヴァはブーストしておいて。」

「わかった。凍てつく氷枢ゲリドウスカブ灰多ゲネット 術式固定 福音ブースト開始。」

「ブースト、ブースト、ブースト、ブースト。」

さて、説得なんて無駄だともうけどな。

シオンが交渉を開始した。

「おい、止まれ！お前らの指令はだれだ？」

おゝさすがに止まるか。かなりの殺気はなってるからな。

「貴様我らになんのようだ。我らの邪魔をするなら容赦せんぞ！！！」

「「「「「そうだ、そうだ。「「「「「

ふふ、リーダーは蚊か……たのしめそうだ。

「とりあえずなにするか教えてくれないか？」

「攫われた我が子と同胞を愚かな人間から取り返し、報いを受けさせるのだ……！」

なにげに律儀だな。

「それだが、まってくれないか？こっちで救助をおこなっている。」

「なに？」

「「「「「ほんと……！」「「「「「

「ああ、ほんとだ。すぐに助け出せるだろう。だから、ここは引いてくれない？なんだったら安全に住めるところも提供するが？」

「調子こくな……消すぞ。」

「やれるものならやってみるがいい!!!!」

攻撃準備しだしたな。

「待て、シオン！」

「エヴァ〜」

「私がやる。そういう約束だろ。それに殺すのはまずいだらう。」

「わかった。下がってるけど怪我するなよ。」

「ああ。」

「これでよっつと。」

「舐めた口聞いてくれるではないか……小娘ども……」

「結果損耗率10% 20% 30%」

「ふん、たしかに長く持たんな。」

「大丈夫か？」

「ああ リク・ラク ラ・ラック ライラック 契約に従い(ト・シユンボライオン) 我に従え(ディアーコネート・モイ・ヘー) 氷の女王 クリュスタリネ・パシレイア 来れ(エピゲネーター) とこしえの(タイオーニオン) やみ(エレボス) ! えいえんのひょうが(ハイオーニエ・クリュスタレ) ! ! !」

150フィート四方の空間をほぼ絶対零度となり身動きできるもの少ない。

「この程度! ! ! ! !」

「結果損耗率60%」

ゴーン、ゴーン。

「む。」

「50倍ブースト完了。」

「くくく、準備できたな。」

「なんだ!」

「食らえ!!!凍てつく氷枢ゲリドゥスカゾルネツタム解放!!!!!」

50倍に強化された凍てつく氷枢は見渡す限りの敵全てを氷柱の中へと封印できた……すばらしいな。

「くくく、いいぞ福音……しかし、魔力が馬鹿みたいに消費するな。む?」

ビキビキ……パライイイイイイイイイイ!

「やってくれるではないか!」

「貴様もやるではないか。」

まさか自力で抜けてくるとは……。

「ならば存分にいかせてもらおうか。リク・ラク ラ・ラック ライラック 左腕 解放固定 こおるせかい!!、右腕 解放固定 こおるせかい!! 双腕掌握!!! 術式兵装 氷封霊大壮、氷封霊双状。」

これはいつてしまえば自身が氷の精霊になり常時こおるせかいによる封印効果が発生する。逆に言えば殺すことができんがな。

「なんだそれは!」

「闇の魔法さ。ではゆくぞ! 氷神の戦鎚!!!マレウス・アクイロー「セム」エス連弾・氷神の戦鎚!!!マレウス・アクイローニス」

20tの氷の塊を二個つくり蛟にぶつけてやろうと思ったがやつもさすがに抵抗する。。

「おのれ!!!」

みわたすかぎり氷漬で氷柱の中には妖怪たちが封印され、ひととき
巨大な塊に蛟が封印されている。

「まあ、なるようになるか。とりあえず別荘にいでて、海を直すぞ。」

「ああ、わかった。」

その後、私とシオンはシルフヤセルシウス、ウンディーネの力を借りて別荘にかれらをいれて紗代達と合流した。

シオンSide

HブアSideOut

合流し別荘の中へと入り彼らの封印を解いた。蚊もおとなしくしている。

「ほら、攫われてた子達だ。」

それからは歓声などもあがってよかったとおもったが問題が起きた。

「おい！大丈夫か！」

「どうした蚊？」

「栗が……」

「……………はあ……………はあ……………」

「これは病気か？」

「ちよつとしらべてみる。」

「気を使い、魔法を使い調べる……………」

「呪いと薬品だな。」

「これはまずいな。」

「く、解除できるのか!?」

「ああ、呪いだけなら楽勝なのだが……………」

「なんだ!」

「混ざり合っつてかなり危ないな魔力………霊力がどんどん抜けてきやがる。それ以外にもいろいろと症状があるが、そっちは材料さえあれば消せる。」

「オノレ人間め………」

これは確かにひどいな………。

「紗代、この子治療してあげて。俺、材料とって来るから。」

「はい、わかりました。」

「まで、そ奴は人間だろ！」

「うるさい！紗代を侮辱したり怪我させたら娘もろとも殺すぞ。」

「っ………」

「大丈夫だ安心しろ。ここにいる人間はだれも手出ししない。」

「わかった………従おう………」

よし、そんじゃ魔境にいきますかね。

それから三日後ようやくそろった。さすがに強かったですよ？山ほどの大きさのティラノザウルスとか………どんだけ？森羅つかわなきやこつちがやばかったぞ。

「ただいま」

「おかえり………なさい………」

「かえったか………」

蚊と紗代がいつしよになって子供の蚊………雲を治療していた。

「大丈夫かお前ら、三日間ねてもいないのか。」

「はい。／ああ。」

「靈力を与え続けなくてはすぐに死んでしまうからな。」

「私も呪いの進行をおさえるために、エヴァさんも鶴ちゃん達と手伝ってくれてますけど……………」

まあ、根本的な解決しないとな。

「んじゃすぐ薬つくる……………アデアット。」

アーティファクト「万能調理具」を使い調査道具を出す。薬品調査に使うのって料理にも使えるから、料理道具を全てだせるこのアーティファクトには有効なんだ。

それから一時間が経過。

「よし、できた！……！」

「本当か！」

「ああ、飲ませるぞ。精霊薬と精霊水をあわせて……………」

雫の口にいれ飲ませる。

「……………んく……………」

何回かにわけ飲みし終えた。

「……………すう……………すう……………」

「これで大丈夫なんですか？」

「傷とか疫病とかには大丈夫だけど……………霊力が抜け出すのは数十年、数百年かけて徐々に解除してくしかないな。」

「そうか……………問題は……………霊力を作ること

もできずに供給し続けるしかないがそんなことはできないんだな・・・」

「できるぞ?」

「えええええええ。」

「ちよつとまって、できるのか!」

だれもできないなんていつてないじゃないか。

「ああ、使い魔の契約でできるな。使い魔は主から魔力をもらうし、無くなっても命自体は主と繋がってるからつごけなくなるだけで供給すれば良い。」

「でも、問題ありますよね。」

「ああ、子供とはいえ蛟を維持する魔力量の持ち主で長い寿命を持つものなど・・・」

「あ、目の前にいますね。」

「む、そうかおぬしなら……………」

そうなるよな、俺かエヴァだけどエヴァじゃきついだろうし。

「別にいいけど使い魔ってことは全てを預けるんだちゃんと本人に確認しとけよ？俺はもう寝るから……………さすがに眠い……………紗代もねるぞ。」

「でも……………」

「大丈夫だ。」

零に残ってる大量の魔力と気をくれてやる。だって、一日後とに全快するから結構あまるんだよね。だから、深夜零時になるまえに魔具とかいろいろ作るかこの別荘内に魔力放出するかしてるんだけどな。

「これで、明日の夜までは持つだろ。だから寝るぞ胎児にも悪いからな。」

「はい。」

「すまん。我はここでこの子をみている。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・すう・・・・・・・・・・・・・・・・」

「心配なのはわかるがお前も寝て霊力回復しておけ。明日は移動してもらおうからな。霊力回復しやすい湖に。」

「わかった。しかし、ここをはなれんぞ。」

「それは好きにしる。」

さて、これでとりあえず解決したが・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・どんだん人外魔境になつてくな。もう、ひとつの世界だぞ・・・・・・・・・・。

「それでは、失礼します。」

「ああ、ゆっくりり休んでくれ。」

紗代が手を握ってきたので握り返し館へと向かう。

「ずいぶん仲良くなったみたいだな。」

「はい、二日目からは結構中がよかったですよ。経過みるために龍眼発動したらおどろかれましたが。」

まあ、自分より上位の血をひく存在だからな

「まあ、仲良くてよかった。新しくはいった子達の住処もすぐ用意しないとな。」

「幸いこの別荘は大精霊達とシオン様が弄ってだいぶひろくなるじゃないですか。」

「まあ、海作つてあるくらいだな。」

ウンディーネが最初のころにつくったんだっけ。途中から好き勝手弄りだしたけど。他の精霊達と相談してるから良いけどな。お蔭で動物達や魔獣の進化がえらいことになってるからな

「今日は一緒に寝て良いですか？」

「寝るだけなら良いぞ。」

「はい」

ちて、どつなるいとちら………楽しみだ。

おかしい、なんだここは寝たはずだぞ………真っ白な
空間………どこか覚えがある。

そう、爺さんにあつたときの空間だな。

「よう、元気そうだな。」

「おかげさまでな。」

今度はどんなようたる。

「お主に合いたいといってる子がいての………連れてきた、あとよろしく!じゃ!……!」

「ちよつと待て!」

にやる消えやがった!……!!

とろろでどこだ連れてきたって奴はいないじゃないか。

「……………あの……………」

声が聞こえたけど辺りを見まわしても誰もいない。

「……………ひっく……………」
「………」

「うんやっぱいないな。」

「うえええん。したですううううう。」

む、下を見ると確かに泣いている幼女がいるな。まったく誰だな泣かしたのは。

「おい、大丈夫か？誰が泣かせたんだ？」

頭をなでてやると泣き止んできた。

「うう……………あなたですう……………ぐす。」

「そうか、俺か悪かったな。」

「名前は？」

「ひつく・・・・・・・・あてな・・・・・・・・」

おい、ちょっとまってなんで北欧の主神がギリシャ神話の女神つれて
くんだよー!!!

「まじでアテナ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（しぐ）」

ま、いいか可愛いし。

「で、なんのようなんだ？」

「えつとね・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・」

「いったいどうしたんだ？内容が分からないとどうしようもない。」

内容次第で態度かわるけどな。

「えつと・・・・・・・・楽しんであの世界みてたの・・・・・・・・」

「あの世界……俺がいる世界か。」

「……………」

「それならいいんだが、それで？」

「あの世界と……もうひとつ一緒に見てた……
あせりあの世界もみてたの……ぐす。」

おい、嫌な予感しかしないぞこれ！

「それで……きゅつにおっきなおとが
してね？わざとじゃないんだよ？」

「それで……？」

「おとしちゃったの……しよれで……せかい
のきょうかいがこわれえて……」

アテナの頭を掴みだきよせ尋ねる。

「それでどうなった？」

「ひいつ……そりえで……まじやって……
……せかいどうしに……みちができちや
ったの……」

「つまり、アセリアの世界の連中がこっちに来る可能性があるって？」

「……（にくにく）」

おい、まずいなここよりバグキャラだらけだぞ？特にエターナル。

「どづしてくれんだ？」

「うう……ごめんなしいい……
やんでもしゆるからゆるちて……ぐす……に

「ほづ。何でもか……なあ、道閉じることほできるのか
？」

それでいいんだが。

「……むりなの……ちいさくして……
……すこししかこれなくすることはできるけど……」

「なるほど。あの世界はマナも少ないしどうにかなるか？……
……しかし、宇宙こわせるような連中だぞ？まて……なら
げっこう（でなかった）なら中で起こったことは現実には関係ない
し……そのなかなら……知識がたりん……
……いや、ここにちようどいいのがいるな。」

“げっこうをエターナルの戦闘意識によって張るようにできたら……
……被害ないですね。そして、智の女神がここにいる。何でも
するっていつてくださってるしちようどいいですね”

だな、そうするか。

「……あ……あの……」

「よし、きまった。まずはアテナ、連中がどれくらいでくるかわか
るか？」

「けっかいかはれば……100年ちよつとはもちます

う……………」

「よし、なら張れ。」

「はっ……………はい……………えい。」

簡単だけど、結構すごいのはりやがったな。みてくれと精神はこんなんでもさすが戦女神だな。

“ しかも防御にひいでた女神ですからね。”

ああ。これはどうにかできそうだ。

「そ……………しよれで……………これからどうしたらっ」

うわ、弄りがあるな。涙目で可愛いや。

“ おにいさま、危険な思考です。”

「じゃ、お前はついてきてもらっつ。戻るぞ。」

しっかりと抱きかかえ今の俺の現実に戻る。

「え、え………こまります〜」

「だめだ、なんでもするんだろ？なら、お前は今から俺とレンのものだ。思う存分使わせてもらおう。」

「だやれかたしゆけてええええ!!!!!」

そして、俺達はアテナをGETした。（某ポ モンみたく。）

シオンSide

シオンSideOut

「がんばるんじゃぞアテナよ……ところで、これでよ
かったのかゼウス？」

「かまわぬ。暇つぶしにもなるし責任はとらせんな。あと、契約
は絶対だ。自ら言ったのだからな。」

「ま、これからがたのしみじゃな。」

「まいったくだ。」

Considered
Output

女神の悲劇（後書き）

紗代をどうするか悩みちゆうです。
生き残らせるかそのままかですが。

京都最終決戦〜江戸時代1時間目〜

シオンSide

ゆすられて目覚めると目の前に・・・・・・・・・・緑髪の青白い肌をした少女が裸で馬乗りしていた。

「とりあえず、どちら様でしょうか？」

思わず敬語になってしまった。

「・・・・・・・・・・震なの。」

震？震って蛟じゃなかったけ？

「その姿は？」

「人化なの・・・・・・・・人間の男はこっちのほうがいいってきいたの。」

だれだよそんなの教えたの！

「それに、私は貴方の使い魔となるの……ご主人様を喜ばせるの当然なの。」

「いやいや……ん？なるの？」

「それしか、助かる道も無いなの。それにお礼っていったの。」

「ならいい………のか？」

「と………そっちのちっこいのはいいなの？」

「ん？ちっこいの？」

「お、おかまいなく………」

「ああ、アテナか………紗代は………ぐっすり寝てるな。」

「いいこと思いついたなの………お前も参加するなの。」

雫はアテナの服も脱がしだしたな。

「やめえてて、たすけて〜〜〜」

「やだ、面白そうだし。ほら、据え膳食わぬわ男の恥だよ。」

「まって……………いろいろまずいはず……………」

「登場人物は全て18歳以上なの。よってなにも問題ないなの。」

きたな、魔法の言葉。

「なっ！」

あっというまに脱がされたアテナ！彼女の未来はどうなる！

まあ、美味しくいただいたのだがな。さすが女神房中術でいろいろ美味しくいただきました。

「うう……………せきにんとしてくださいいいい。」

「はいはい。ちゃんととってやるから。」

「そう、同じ使い魔としてなの。」

「え！わたしめがみにゃんですよ……………それが……………」

「うん、でも使い魔契約しちゃったしね。栗と一緒に。」

栗は急いだ方が良さそうに纏めてやったからな。

「……………うう……………かみにゃの……………」

「気にしたら負けなの。」

「げいんがいうにゃ……………」

「ま、これからよろしく。」

「はあ〜い。」

「よろしくなの。」

さて、これでゆっくりねれ……………

「じゃあ、次は私達の相手だな。」

「ですね。」

「え？」

横を振り向くとエヴァと紗代に鶴も……………寝れるかな？

ふう、アテナと雫をくわえてそのまま次の町へと目指した。アテナには別荘内でけっこうと同じ結果をつくってもらっている。

さらに1年が立ちようやく京都近郊へとやってこれた。まったく、どうでもいいが邪魔者多すぎだ。鬼にぬりかべ、一旦木綿、天狗などetc。駆逐しましたけどね。

「やっと京都だな。」

「ですね。」

「だな。」

「そして、間に合わなかったみたいです。」

おや、絶賛襲われ中だな。妖怪が空一面にいるな。狩るか。

「さて、とりあえず狩るわけだが………京都ごと消し飛ばしたらまずいよな？」

「あたりまえです。」

「なら、空から消した後地上からか？」

「それが無難かな。」

「空は俺とエヴァでいくから、そっちは紗代と鶴、雲でいっといで。」

「了解。」

「はい。」

「わかったなの。」

さて、どうするかな。紗代達の援護に派手にぶっ放すんだが……

「はでに、千の雷と燃える天空でいいんじゃないか？」

「それもそうだな。どうせなら複合技いくか。」

「わかった。お前達も準備しておけよ。」

「「「はい!」「」」

「わかったの。」

「リック・ラク ラ・ラック ライラック 契約に従い(ト・シユン
ボライオン) 我に従え(ディアコネート・モイ) 炎の霸王^{ホ・テュラネ・フロクス}
来れ(エピゲネーター) 浄化の炎^{フロクス・カタルセオースフロキネー・ロンファイア} 燃え盛る大剣 ほとばし
れよ(レウサントーン) ソドムを(ピュール・カイ) 焼きし(ハ・エヘフレゴン・ソドム)
テイオン) 火と硫黄 罪ありし者を(ハマルトートウス) 死の^{ウーラニエーヌ四ゲイヌクネット}
塵に(エイス・クーン・タナトウ) 燃える天空解放固定……………」

「デオス・デア・サタナス・アポカリプス 契約により我に従え(ト・シユンボライオン・ディアコネート) 高殿の王^{モイ・バシレク・ウーラニオーノーン} 来れ巨神
を滅ぼす(エピゲネーター・アィタルース) 燃ゆる立つ雷霆
(ケラウネ・ホス・ティーターナス・フテイレイン) 全雷精(オム
ネース・スピリトウス・フルグラノレース) 百重千重と(ヘカトン
タキス・カイ) 重なりて(キーリアキス) 走れよ(アストラ)
^{プサト}稲妻!!! ^{キーニヤウツサス長クネット}千の雷解放固定……………」

同時に燃える天空と千の雷を唱え次の段階へとうつす。

エヴァと手を握りお互いの手を前にだし唱える最強の魔法（嘘）！

「術式統合！範囲固定！開放！断罪の雷炎！！！！」

空を埋め尽くす敵に、数千の千の雷が着弾すると同時に膨れ上がり半径4m内を焼ききる。

「ふはは、すごい威力だな！！」

「一本一本が半径4mだからな、範囲重なってるところはすごい温度になってるだろ。しかも二人分の魔力だ。」

「「「「「「「「「「「「「「「「」

「ん？どうした？」

「はやく行ってこい。こっちはのこったの殲滅するから。」

残ってるかは知らないがな………それにしても………
………なんだあれ………むしろ核兵器だな。

“最上級呪文を掛け合わせて、魔力もかなりいれてますからそれぐらいいですね……”

夜なのにな。

「行きます！」

「了解なの。」

「「先行します。」」

さて、紗代たちがいったけど……お、生き残りがこっちにむかってきますよ、どうしようかな？

「どうする？こっちもだせばいいんじゃないか？」

「それもそうだな。契約……いや、暴れたい奴ゲートひらくから勝手に暴れて良いぞ空限定だが。」

空中に召喚陣を作りここと別荘を繋げる。

「あそぶ〜」

シルフを筆頭に大精霊達や蛟や天狗などの飛べる奴や遠距離攻撃できるもの達がどんどんでくる。

「結構集まってるな。」

「何体いるんだろうね〜もう百は超えただろうけど。東日本のほとんどの妖怪いるしね。」

「たしかにな。」

「おまえら、怪我するなよ〜危なくなったら言えよ。」

返事をして皆狩りに出かけた。別荘は魔力が満ちてるし成長も早いし強化されてるから平気だろ。俺とエヴァはお茶を飲みだす。

「ずず……………にしても、これなんて妖怪大決戦？」

「ずず……………さあな〜私達も一応妖怪になるんじゃないか？」

「なら、あれは間違ってるか。茶請けもあるぞ。」

「いたどころ。後は、若い者に任せてのんびり茶でも飲んでるか。」

「だねえ」

「……わたしもませてください。」

「アテナか。いいよどうぞどうぞ。」

こうして三人で妖怪大戦争を見ていた。

紗代Side

シオンSideOut

しかし、さっきの魔法は驚きました。空がしばらく夕暮れのように綺麗でした。っと。

「邪魔です、月牙天衝！！」

襲ってくる妖怪を纏めて切り伏せて進むんですが………
・どんどんきます。

「水弾300なの！！」

「「魔星剣！！」」

雫さんは水の弾丸で駆逐し、鶺鴒ちゃん達は大量のクナイを風を使い操り敵を殺していく。

「鶺鴒ちゃん先行って陰陽師の人達助けてきて。」

「「了解、加速。」」

暴風を纏い敵を吹き飛ばしながら突き進んで行っちゃった。

「じゃあ、いきますか……………雷龍、掌握、龍兵装・雷神龍装。」

雷龍を纏い自身を雷に変換し一撃一撃が雷光剣となる。龍眼を発動し並列処理と情報収集をおこなう。電流を使い神経の伝達速度を上げ思考を加速する。

「でたらめなの……………」

「神鳴流奥義、百烈桜華斬!!!」

切ると同時に爆発し回りの敵を一気に排除……………これを繰り返していけば……………いい。

「これは、私もやるなの……………紗代避けてなの!ダイダルウェイブ!!!」

っ!急いで飛び上がり津波を回避……………間に合わない!

「虚空瞬動・二連。」

なんとか越えました・・・・・・・・これは勝機では？水は電気を通しやすい・・・・・・・・龍眼で調べたところ純水じゃない・・・・・・・・ならば。

「開放、雷神龍撃！！！」

切り下ろすと同時に巨大な雷龍が現れ津波に突入し、猛威を振るう。

「おゝすごいなの。」

「あぶないですよ隼ちゃん。もうちょっとで巻き込まれるところでした・・・・・・・・あ、失敗しました。」

「どづしたなの？」

「町・・・・・・・・壊しちゃいました。」

津波と龍装、雷神龍撃の衝撃でぼろぼろです。

「気にしたら負けなの。」

「復興支援はお願いしましょう。」

「……………みんなきたなの。」

「たしかに、みなさんきてますね。」

後の方からたくさん妖怪がむかってきてます。ただ知り合いですけど。

「栗さんはあっちの指揮をお願いします。くれぐれも壊さないように。私は鷓ちゃんを追います。」

「了解なの。」

「では、いってきます。」

「いってらっしゃいな。」

ちよつと不安だけど大丈夫でしょう。

紗代 Side Out

咲、
加奈
Side

私達は、陰陽師の結界を探り当てそこへむかう。

「敵対勢力を確認。」

進行方向……邪魔だね。

うん、邪魔だね。潰そう。

「そうしよう。」

1mmの糸を複数使い切り裂いてゆく。

「神鳴流、繰弦曲・魔弾」

「つづいて、神鳴流、繰弦曲・跳ね虫」

やっぱり糸強いね。細切れだよ。

そうだね。細切れだね。

「進んだ先、突き当たりを右に行ったら陰陽師三人いる。」

加奈は現在未来眼発動中です。

「任務は、陰陽師の保護。」

「でもどっちが式紙わからない。」

「なら、両方殺そう。そうしよう。」

突き当たりを右に曲がり陰陽師3人と鬼が2匹、髑髏剣士が5匹。

「いくよ、加速。」

風を纏い速度を上げる。

「なっなんだ！また敵か！」

「そんな、これまでなの………」

「くっ。」

「神鳴流、斬魔剣・二連!!!」

小太刀二刀流斬魔剣で、髑髏剣士4匹消滅完了。

「神鳴流秘剣、百花繚乱!!!」

直線状に気を放って、残りの敵を吹っ飛ばした。

「綺麗……」

「風切り!!!」

吹っ飛ばした敵の殲滅完了。やはり鬼は式紙だったみたい。

「な……なんだ貴様らは!」

「こいつら……人間なのに妖力もってやがる……半妖か!」

「「どうしようか（加奈／咲）？」」

彼らは戦闘態勢をとってる。

「殺す？」

「でも、任務は保護。」

「なら、生かそう。」

「なにをいつているんだ！」

？さっき聞いたのにね。

「「主の命にてお前達を保護する。拒否は認めない。」」

「保護だと………信じられるか！」

「でも、俺達の手じゃ………」

「「そう、貴方達程度じゃ私達に傷をつけることはできない……
……む、邪魔。」」

追加で襲ってきた子鬼の眉間にクナイを当て殲滅する。

「わかったわ。」

「「おい！」」

「従うしかないじゃない。」

「そうだな。」

「くそ。」

決まっただみたい。

「「なら、陰陽師の本拠地に行くぞ。そら行くぞ。」」

「「「わかった。」」」

陰陽師の本拠地方面に強い反応があるね………楽しみ。

陰陽師の本拠地に30分後着いた。その間に陰陽師や剣士など系30名保護。風を使かったけどそれだけかかった。

「「ここがそうだね。結界邪魔だね、割ろつか。」」

結界もろとも門を吹き飛ばし中に入る。

「なんだ！」

「出会え出会え!!」

「「おゝ怪我人いっぱいだ。」」

「おのれ妖怪が神聖な境内に入りおって成敗してくれる!!」

襲い掛かってきたら反撃しよう。そうしよう。

「保護したの連れてきた。」

「なに？」

30名引き渡し完了。

「これより結界構築及び戦闘準備開始。」

陰陽師どもを無視し、クナイを四方に二重に配し準備完了。

「神鳴流、二重・四天結界独鈷鍊殻!!」

三角錐の結界……神鳴流対魔戦術絶待防御を展開完了。

「貴様らなにをしている。」

「下がっていて、もうすぐ来る。」

「何が来るんだ！」

「土蜘蛛。」

強大な気配の正体は土蜘蛛でした。

「なっ！」

「来た、結界一部展開。」

「なんでだ！」

結界を空けたところから土蜘蛛だけを中にいれ閉じた。

「なんで、いれたんだあ？」

3、4 mくらいの大きさおっきいね。

「貴方をここで狩るために！」

「カカ、面白いじゃねえか、やってみろ！」

「終わりだ……」

土蜘蛛の攻撃を避けた……地面にクレーターができた。

「威力高いね……逆螺子・二連！」

刀身に絡めた気の二重螺旋で相手を貫き、内部で螺旋を解き放つ技なんだけど……。

「きかねえな……！」

「化け物……」

「ありがとうよ！」

「神鳴流、千斬閃……」

残像を作り大量に切りつける!!

「痒いぞ!!!」

「「つと………ほんとに化け物なら………」

「なんだ?やってみろ!」

「「これならどうだ!神鳴流、風遁・螺旋手裏剣!!!」

周辺に振動と轟音が響き渡り、乱気流を起こし濃度と表現されるくらい攻撃をおこなう。

「「これで無理なら手出しできないね。」

煙が晴れ、出てきた土蜘蛛は足の半分が無く所どころ理が出ている。いってしまえばそれだけだった。

「やるじゃねえか!」

「さて、私達の手はなくなったね。どうしようか。」「

「なら沈んどけ!!!」

「くっ………っ!」

反動でうごきがにぶってた。肋骨などに損傷……戦闘続行不可。

あとまかせました紗代様。

咲、
加奈
Side
Out

京都最終決戦〜江戸時代1時間目〜（後書き）

これからやっぱり九尾と対決？ボスはある限り決まってる……
……他の妖怪みてきめてみます。

京都最終決戦〜江戸時代二時間目〜(前書き)

遅くなつてごめんなさい。

ほとんど戦闘です。

京都最終決戦〜江戸時代二時間目〜

紗代Side

嫌な予感がします。

結界に入り目にしたのは咲と加奈が傷だらけで倒れている姿だった。

「咲、加奈!!」

返事は無い……………かなり危ない状態ですが、生きてはいるようです……………よかったです。治療をほどこしながら敵を睨み付ける……………絶対ゆるさない……………。

- - - トクン - - -

「次は嬢ちゃんが相手か？楽しませてくれよ!!」

「っ！」

急いで、咲と加奈を抱え飛び去り二人を安全そうな所へ置いて土蜘蛛に向かう。

「極大・雷鳴剣・連撃・百花繚乱！！！」

大量の電気を纏わせ切りつけ、気を放ち敵を吹き飛ばす……
……これだけで終わるはずが無い……なぜなら、それなら鶴の二人が負けるはず無いから……。

「右手、雷龍、掌握、龍兵装・雷神龍装。」

右手に雷神龍装を纏う……これだけじゃダメ、あいつは土蜘蛛属性的に相性も悪い……なら、奥の手……ここ最近でできるようになった力見せてあげます。

「左手、炎龍、掌握、龍兵装・炎神龍装。」

母が使っていた炎龍を龍兵装としてまとう。

「ほう、面白いことやってんじゃねえか！！！！！！！」

やっぱり無傷ですか……………でも、まだです。

「双手、龍兵装・雷神龍装、炎神龍装……………融合、龍神兵装・炎雷！！！！」

身体全身に炎と雷を纏う……………よかったできた、成功率まだ6割だから。この技は闇の魔法を参考に開発した。私の体が炎雷によりに数千度の炎その者となり、早さも雷とかす。

「参る！」

「来い！」

走り出し、すぐに音速の領域まで加速し背後へと回る。

「霞桜。」

一閃の斬撃として放った気を目標の内部に浸透させ、多数の斬撃として四散させる……………これで、どうですか？

「く、やるじゃねえか!!」

自分で目標内部切り落として防ぎましたか……
でたらめな。

「こつちも本気で行くぜ、開放。」

土蜘蛛に糸が巻き付きどんどん小さくなっていく……
嫌な予感がします!

「焰切り!!」

居合い抜きによる斬撃と気による二段攻撃を仕掛けます。この攻撃
には炎雷も巻きついてるため地面が陥没したりする威力なのです。

「な……無傷……?」

「無駄だ、こいつを壊すことなんてできない!」

どんどん小さくなっていく繭と比例して気配や威圧感は増大してい

どうにか時間稼ぎして対策考えなきゃ……………。

「簡単な話しじゃな。こつちが本来の姿であり正確じゃ。あれは力を封印する衣もで、人格は喧嘩売ってくる奴を作るためじゃな。我が力を思う存分だせる相手を探すための……………その点、お主は合格じゃな。」

「それはありがとうございます。」

。傍迷惑な、そんなことで二人を……………。

666

「さて、時間稼ぎはもうよかるうて、何か思いついたかのう?」

ばれてましたか……………しかたないですね。奥の手を使いましょう。

「仕方ありません。この戦いに全力を尽くします。」

「くくく、それは楽しみじゃな。」

「永遠神剣第5位龍神・・・・・・・・龍神化発動！」

さっきまで見えなかったけどこれならいけるはず！

「ほう、面白いのう。では、行くぞ！」

うん、見える！これならいける！

「剛力徹破・突！！！」

「斬魔剣！！！」

くっ、拳に気を纏っただけで龍神化中の斬魔剣を防がれます。

「力をあげるぞ。」

「なんて力！」

力の勝負じゃ勝ちめがありませんね。

「ほう、速さで勝負かよかるつて。」

高速で打ち合いお互いの身体には傷が増えていく。しかし、土蜘蛛の身体はどんどん治ってゆく。

「回復能力もでたらめですね。」

やばいです……………もう、五分は立っています。

「どうした？我はまだ満足しておらんぞ！」

ならば……………魔法でせめます。

「千の雷、燃える天空、神雷、神炎」

これでどうですか！

周りは雷が暴れ周り、炎が周りを包み込む。

「ふははは、楽しいぞ！剛力徹破・斬！！」

敵の攻撃を受け脇腹が消し飛んだけどまだいける！気で拘束する。

「何じゃとー！」

「双龍開放、炎雷龍神浸透撃！！！」

土蜘蛛の身体に手を付け中かと外に炎雷を開放する。

「ぐ、おのれえええ！」

土蜘蛛の身体が爆発し弾け飛ぶ……やりまし……
……うそ、なんで気配がきえない……。

「やるではないか。まさかここまでとはな。」

空から聞こえた声を聞き、見上げると先ほどの少女が半身を失った姿でいた。

「我が意に従い、我が元へ集え。」

各地から結晶が飛んできて土蜘蛛の中に入ってゆく……あ

れはいつたい……………。

そして、1m40cmくらいに圧縮された力の塊となった。

「ふむ、久しぶりじゃ全力を出すのはな。なにを驚いておる。」

「なんで炎雷食らって生きてるんです……………?」

「死んでおったよあのままじゃつたらな。」

「ならなんで……………」

「それは……………」

「それは?」

「ボスに三段変化は基本じゃろ!」

「そんな基本なんて知りません!」

理不尽すぎます……………。

「大禍津日神の勾玉を使うことになるとはな。」

大禍津日神って邪神じゃないですか……………そんな力を持つものが相手なのですか。

「どちらにしる化け物ですね。」

「そついうお主もはや人でないの。」

周りはクレーターだらけで地面は焦げ付いている。

神社はなんとか守れていますが……………これは、救援を呼びましょう……………間に合うかわかりませんが……………。

『シオン様、至急応援願います。』

「ふふふ、無駄じゃ念話は妨害しておるぞ。」

ダメですか……………撤退もできるかどうか……………

「さて、ゆくぞー！」

仕方ありません……………やるしかないです！

「しんめい……………つ。ぐあ……………！」

なんで急に……………痛い痛い、全身に激痛……………
……………龍神化が切れた？……………そんな……………

「なんじゃ、急に動きがわるくなったの。」

「……………つ……………」

ここまでなの？そんなのは嫌！子供のためにも諦めない！

……………トクン……………トクン……………トクン……………

「お主はよくやった。ここまでじゃ、せめて痛みも無く消滅させてやるつぞ。」

迫ってくる大きな爪……………動いて、動いてよ！

。必死に身体を動かそうと頑張るが一切動かない……………

鵠
S
i
d
e

私達が気づいたとき、強大な気配の少女が紗代様にトドメを刺そうとする場所だった。

「「紗代様!!」」

私達は急ぎ紗代様の下へ行く。

「「加速!!」」

間に合って!!!!

紗代 Side

鶴 Side Out

トドメを刺されそうになったとき、目の前に傷ついた二人に突き飛ばされた。

「咲・・・・・・・・加奈・・・・・・・・」

土蜘蛛の攻撃は二人の下半身を吹き飛ばしていた。

「・・・・・・・・無事・・・・・・・・で・・・・・・・・」

「

「・・・・・・・・よかった・・・・・・・・です・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「いやあああああああああああ！！！！！！！」

・・・・・・・・トクン・・・・・・・・トクン・・・・・・・・

“ わか つ
た ”

「なんじゃその禍々しい力は」

体の中から力が沸いて来るこれは？ううん、力を
貸してこいつを葬るために！

「 結界龍滅 発動。」

心の中で湧き上がった術名を呼んだ。

シオン
side

なんだと……

「鶴の二人が消えた。」

「なんだと！どういふことだ！」

「鶴の………咲と加奈が殺されたということだ。」

くそ、そんな強い気配は無かったのに！

「どういふことだ詳しく教える！」

「お………おちついてくださいやいエヴァしゃん。大丈夫です。あの二人はシオンお兄ちゃんと使い魔契約してるんでしゅから、死んでも一定期間たつたらもどつてきましゅ。」

「そ………そうか………さて、紗代はどうな………」

「「「っ！！！」」」

その時、京都一部上空に紅く禍々しい巨大な魔方陣が現れ結界が展開された。

「おい、あれってまさか。」

「固有結界だな(でしゅ)。」

誰だ？禍々しいあんなものを展開する奴は………どっ
ちにしる良くしかないな。

「行くぞ！」

「ああ！」

「はい！」

無事であるよ………紗代………
………

土蜘蛛 Side

シオン Side Out

ととめを刺そうとした時、いきなり気配が変わり力の奔流が巻き起こった。

「……………結界龍滅……………発動。」

「何じゃ！」

いきなり小娘から紅く禍々しい巨大な魔方陣が展開され、世界は一変した。

そこは、一言で言うなら紅い世界。血のように赤くただ大地が存在するだけ。

「く、なんじゃこれは……………」

どんどん体力が吸われて行くのじゃ。小娘の方を見るとなんと面白いみたいじゃが。そして、姿が変わっておるな。

龍眼は攻撃的な緋色へと変わり、つややかだった黒髪は、獣のように逆立つ銀髪へと変わり、薄い闇色の膜が身体全身を覆い、陽炎のように立ち昇る陰の気が空間をもゆるがせている。格好も緋色の戦着へと代わっていた。

「殺してあげます……………」

くっ、プレッシャーが半端ないの……………これは面
白いの！

「剛力徹破・咬牙！」

外側と内側に気を通し、内外から破壊する技じゃが……………

「……………」

確かに辺り破壊したはずじゃが……………
……………

「無駄です、神鳴流、魔神剣。」

闇の剣か！しかし、おかしい……なぜ攻撃が聞かぬ。

「龍神化。」

その後、何度も打ち合っておるが……徐々にふり
になってゆく……それにこの体力を座れるの
がうざいの……まで、この結界は我が生命力を吸い小娘
に供給しつづけておるといのか……これは、これでは、
我が自分の生命力を自分で削ってるだけじゃな。結界を破壊せねば・
……我の負けじゃな。

紗代Side

龍神化し、攻撃を神速の速さで斬撃を繰り返しつづける。

「紅蓮大蛇。」

紅蓮の大蛇が土蜘蛛を食らおうと襲ってゆく。

「っち、ほんとに結界を………どうにか………
しないと………きついっのうー！」

紅蓮大蛇を踏み砕いたか………。

「一匹でダメなら………紅蓮大蛇・九頭龍。」

九匹の紅蓮大蛇が土蜘蛛に襲い掛かる。

「ほんとに化け物になっておるの……！」

「風烈刃……！」

真空の刃で次々と龍を殺していく………
実態がない龍すら殺すとは………。

「散れ死蝶桜。」

一面に黒いサクラの花が舞い意思を持ち襲いかかる。

「やばいのう、食らったら死にそうじゃな！咆気殺！！！」

口から放った震動波により分子の結合を破壊して分解しましたか。

「夜天の雷。」

「はあああ、今度は黒い雷かほんと多彩じゃな。」

「まだ、死なないのですか……………」

「そうかんだにはくたばらんのだ。」

「はっ！！」

同時に攻撃しあい、破壊の嵐を撒き散らしあつ。

シオンSide

紗代SideOut

俺とアテナ、エヴァは急いで結界の場所に向かう途中邪魔が入った。

「邪魔だどけ！」

「そうはいかないな！貴様らのせいで俺達の勢力はボロボロだ、ここで死んでもらうぜ！この飛騨の大鬼神リョウメンスクナノカミにかなう筈ないからな！」

図体だけでかい化け物が………殺す。

「エヴァ、そこの雑魚をやれ！」

「ああ、わかった。」

「この大将の酒呑童子にそんな嬢ちゃんがかなう筈ないやろ。」

「あんなことってますけど……」

「ふん、目に物見せてやる。アテナは、先にいって紗代を守って来い。」

「わかりました！」

それがいいな。道を作るか。

空に飛び上がり大鬼神リョウメンスクナノカミに攻撃を仕掛ける。

「レイディバックフォーリンダウン。」

森羅万象を操り、重力加速行う。重力加速を最大限に利用し大鬼神リョウメンスクナノカミにカカト落しを食らわせる。

音速を超えたカカト落しにリョウメンスクナノカミの一部が陥没し倒れそうになる。

「今のうちだいけアテナ！」

「ああ、これで京都は決着か。」

「あとは、あそこにいる紗代と中の敵をどうするかだな。」

「ああ、とつとつといこつ。」

頼むぞアテナ。

アテナSide

これが固有結界・・・・・・・・・・解析・・・・・・・・完了。紗
代お姉ちゃんが展開してるみたいです。防御結界を展開してゲート
を開く・・・・・・・・・・できた。あてないっきまゝす。

ゲートをくぐり固有結界の中に入った。中は破壊の嵐が巻き起こる

最終決戦な感じですよ。

「こ……これをとめるんでしょか？……」

「剛力徹破・死極！！！！！」

「神鳴流奥義、露桜！！！！！」

二人の攻撃の余波だけで大地がめくりあつてるんですよ！でもとめないとおしおきされる……ここは仕方ないです、がんばらないと！。

「おふたりともとまってくださいいい！！！！！」

「千人衝！！！！！」

「千斬閃！！！！！」

うう……聞いてくれません！

「邪魔じゃー！」

「邪魔です。」

「ぶっん……………ふふふ。」

いいでしょうそっちがその気なら……………やってあげます……………。

「マギア・アスネ母オリティス星の魔法・隕石!!!!!!」

だてにこの世界みてませんよ?とくにシオンお兄ちゃんをずっとみてたんだから使えて当然……………むしろ改良しました。智の女神はだてじゃないんだから!

巨大な隕石が結界内の上空に展開された魔方陣より隕石が落ちてくる。

「これで終わりでしょう……………ふふふ。」

「「!!」」

「龍神乱舞！！！！」

「阿修羅霸王拳！！！！」

なんでこんな時だけ協力するんですか！

阿修羅霸王拳で隕石を砕き、龍神乱舞でそれを割って行く。その間にも攻撃しあってる。

「しかし……わたしのかちれしゅ。」

二人が地上に降り立った瞬間。お互いしか意識していない今がちゃんしゅです。

「冥府の鎖、連弾・冥府の鎖……同時発動結界破壊……
……星の魔法コード……スターライトブレイカー……星光の破壊……条件追加……術式増幅30倍！！！」

発動と同時に土蜘蛛と紗代を拘束し、空に星光の破壊を放ち固有結界を破壊する。スターライトブレイカー

「なんじゃこれは抜けれぬ！！！」

「動けない・・・・・・・・・・力が抜けてゆく・・・・・・・・・・」

「ふふふ、だてにめがみじやにゃいんですよ！あれ？そよさんまずいでしゅ。すぐに治療しにゃいと！！！」

「大丈夫・・・・・・・・・・アテナ。」

「大丈夫じゃないでしゅー！」

紗代さんの身体が闇の力に浸食されまくってます。

「えっと・・・・・・・・・・お腹の子の力が増幅されてなったみたいでしゅね・・・・・・・・・・うう〜」

どうしよ〜どうしよ〜封印？だめ、お腹の子に影響出ちゃっしゅ・・・・・・・・・・お腹の子におくりつければいいんじゃないかにゃ？おお、そもそも闇の吸血鬼の真祖の血引いてるから平気・・・・・・・・・・むしろつよくなりゅー！

「すくなおしゅねー！」

「はっはい。」

「ふむ、まあがんばるとよい。」

「貴様！」

「けんかしにゃい！」

「「はい……………」」

術式で闇の力を……………神の力でいいかな……………
・圧縮して、お腹の子に送る。一緒に神の力……………神聖
な力も送る……………バランスを取らないと……………あれ、
これってアストラル体の私が構成している神の力をあげたら……………
・私の子供にも……………きにしちやだめきにしちやだ
め！！

「ふう、かなりようししゅた。」

それと同時に紗代さんの髪の毛や目なども元に戻ってゆく。

「おい！無事か！」

シオンお兄ちゃんとエヴァお姉ちゃんがやってきた。

「はい……でも、咲と加奈があの人に……」

「それは、心配ないほら。」

「守れなくてご免なさい。」

無理やり一時的にとどめてたんだ。

「これは……」

「もう、あえないかもしれないけど……私達はまた再生できるから気にしないで……元気でいてね……皆さん、また数十年か数百年後に……」
様お子さんのご主人様達をお願いします。」

「はい……また合いましょう。それまで、ゆっくり休んでください。」

「「はい…………おやすみ……………」
なさい……………」

「じふお。」

「おい、大丈夫か！」

「問題ない少し無茶しただけだ。魂を二個とどめるのはかなり辛いな。自分の中にいるゆえに。」

「防壁とか雁字搦めですもんね。守るために……………回復魔法をつかきましょう。」

「ありがとうアテナ。」

「じふゆ〜」

頭をなでなでしてくれました。

「で、こいつはどつするんだ？」

「で、お前はどつするっ。」

するーされた！

「ふむ、十分暴れたからな好きにせい。」

「そうか、ならお前は咲と加奈の変わりになれ。」

「ほう、この我を飼うというのか。」

あわわ、すごいプレッシャーが………この人
(?) 神に近い力もってますよ。あの固有結界の中にいてどうして
これだけまだ力あるんですか！

「なんだ、お前が好きにしろといったのに舌の根も湯かぬうちに違
えるのか？」

結構辛らつことってますね。

「ふははは、よいぞ気に入った。お主もかなりの力を持っているよ
うじゃいな。そして、我と同じ匂いがする。」

「ふむ、それもそうじゃな。ところで酒吞童子はどうなったのじゃ？」

「あいつなら殺したぞ。」

「なら構わぬな。」

あっさりしています。

「では、我は寝るのじゃ！」

そういつてほんとに寝だしました。

「どうしますか？」

结界は完全に壊れて陰陽師の本拠地に戻りました。そして、破壊の爪跡がのこっています。

「お前達はいったいなにもものなんだ！」

陰陽師の人達ができました。

「とりあえず中に入るか。」

シオンお兄ちゃんは土蜘蛛さんを抱き建物のほうへいきます。

「止まれ！！そいつは原因だぞ！！！！」

「うるさい黙れ。」

「ひい！だ……だめだ！」

なんとか耐えたみたいです。

「すいませんが、あなた方の意見をもとめる必要も聞く必要もありません。我々の行動は將軍家、天皇家両家の約定により妖怪に関してあらゆる権限の上位に存在しますので。」

そいつで印籠をみせ黙らせました。

紗代Side

アテナSideOut

今は、陰陽師の本拠地である寺院にいます。

そして・・・・・・・・・・・・・・・・皆さんにすごく怒
られました・・・・・・・・・・最後に使っていた力を使え
ば逃げるのは容易いだろうって・・・・・・・・幸
い子供も私も大丈夫でしたからよかったですけど・・・・・・・・
・・・・・・・・今は、陰陽師さん達の治療をしなきゃ。

治療をしましてから、約一時間が経過しました。

「ふう、これでもう大丈夫ですよ。」

「あ、ありがとうございます姫巫女様。」

定着してしまったようですね……………間違いで
はないですけど。

「次の方は……………こちらの方ですね。」

どンドン重傷者から直していきます。あの固有結界(?)の効果で
土蜘蛛さんからどンドン生命力吸っていたおかげで全然疲れません。
むしろ余ってますから治療がかなり楽です。

「よし、次は貴方ですね。」

「よ、よろしくお願いします!」

「緊張しなくていいですよ。怪我は肋骨ですね……………
ちよっと我慢しててくださいね。すぐですから……………
…はい、終わりました。」

「おおお、全然痛くないです。ありがとうございます!」

治療符もあるんでしょうが、このところの激戦でほぼ無くなり術者もあまりいないそうです。考えると西洋は威力が高く術者次第ですが数が少ないで日本の呪術は使いやすく、こまわりなど動きやすい。しかし、符が無くなると大変………どちらもどちらですね。私のような存在は特殊でしょうが。

「次の方………」

まだまだいますね。緊急の方も沢山います。死ぬ危険がある方から直しています。

「すみません。姫巫女様」

「なんですか？」

「天皇陛下がお呼びです。きていただけませんか？」

「用件はなんですか？」

「お話しをお聞きしたいと」

緊急性はみとめられませんね。

「では、3時間後に行くと言ってください。」

「それはできません。今すぐにお越しください。」

「お断りします。」

「御下命ですよ。」

「私が聞く理由も権限もありません。それに、今ここをはなれるわけにはいきませんので。」

私は治療を開始する。

「無理やりにもお連れします。」

私の腕を掴み無理やり連れてこうとしました。

「そうですか………それ………相応の覚悟した方がよかったですね。」

「は？」

「おい、人の女に手を出すとはいい度胸だな。」

途中でシオン様がいらしてましたから言葉がかわりました。て誰に説明してるんでしょうか。

「なんだきさ……があ！」

骨折りましたね。

「大丈夫か紗代？」

「はい、大丈夫ですありがとうございます」

撫でてくれるのは至福の時間です。

「き、きこま……」

「五月蠅い、紗代今日の晩相手をしろ。」

「はい、喜んで」

力を分けていただけのですね。あと、がんばったご褒美を……
……お仕置きかもしれないですけど。

「……………なんだって!!!!!!」「……………」

皆さんどうしたんでしょうか？

「そんな……………」

「すでに男持ち……………」

「いや、しかし……………」

「あの笑顔をみせられると……………」

「神は無情なり……………」

「どごしたんでしょっか？」

「気にしなくて良いよ。それより疲れは大丈夫か？」

「はい、平気です。治癒の続きますね。」

「ああ……………手伝い寄越すな。」

手伝い？だれでしょうっか？

それからシオン様がでていき少ししてレン様がやってきました。

「……………」

「この俺様が手伝いに来てやったぜー！」

「なるほど……………ありがとうございます。」

「……………（しく）」

ると天井にそって広がり医務室全体の天井に広がり発光しました。

「これは？」

「こいつは人体の自然治癒力を高め、なおかつ回復の雫を落としてくれるすぐれものだけ！雫をつけるだけであら不思議どんどん傷がなおるんだぜ！」

「すごいですね。」

「別荘にも生えてるぞ。」

知りませんでした。あそこは独自進化してますからね。

「では、私達で危ない人を治しましょう。」

「だな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（じく）」

シオン様に骨を折られた方は逃げ帰りましたし、どんどん進めまし

よう。命を助けるために。

「……………よし、これで大丈夫です。」

「ありがとうございます。」

「……………（くいくい）」

「なんですかレン様？」

「……………なにすればいい？」

「そちらは終わったのですか？」

「ああ、もう終わったぜあとは木で置いといても治るぜ。」

「こちらも終わりましたしもう平気ですね。」

「そうだ。その木を外にも置いてもらっていいですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（しゅ）」

雫が回復薬になるなら瓶を置いて入れて、町の人達にくばりまじょう。

「いけるがなんでだ？」

説明しました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった。」

理解してくれたみたいですよ。

「でもよ、紗代嬢よ。」

「なんですか？」

どこかまちがってましたか？

「俺が作ったほうが圧倒的に早いぜ！あいて、やめて叩きつけないで！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えい、えい。（バン、バン）」

「そうですね。そっちでお願いします。」

「おう、とりあえず外につんどくぜういこうお嬢。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（こく）」

「はい、お願いします。私は天皇陛下にあつてきますね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった・・・・・・・・・・ば
いばい・・・・・・・・・・」

「はい、また後であいましょう。」

私は医務室を後にして、謁見の間へと向かった。

謁見の間につき正座して待っていると天皇陛下がやってきた。

べつやら怒ってるみたいですね。

「よく来てくれたといたいところじゃが、遅すぎるのじゃ。一体何をしておったのじゃ？」

「皆さんの治療です。」

伝えた時間より早かったはずなんですけど。

「なんと、御主は私の勅令より兵士を優先したと申すか！」

「はい、貴方様のご用件に緊急性は認められなかったので、命が掛かっている皆さんを優先したまでです。」

「この痴れ者が！我が勅令より兵士の命のほうが重いと申すか！！！」

ずいぶん変なことで怒っていますね。

「はい、命の方が重いです。」

当たり前のことです。力を手に入れてからはよく分かります。ちょっと力を解放するだけで簡単に死んでゆき、殺される。

「私の勅令の方が重いに決まっておりますが!!」

「いいえ、命に変わりはありません。私もあなた方も兵士の方もどれも同じ命です。そこに、どれが重いかなど存在しません。」

「くっ………まあ、よい。御主が天皇家の血を引いてるのは分かっておる。ゆえに、我と婚姻せよ。そうすれば我が天皇家の力は磐石のものとなる。」

「それはようございますね。」

何を言っているんですかこの痴れ者どもは………。

「お断りします。」

「何じゃと！……！……！」

「既に私にはこの身の全てを捧げたお方がおりますゆえ。」

お腹の中に子供もいますし、それ以前にこの人はお断りです。

「ならば分かれればよからう！警沢もできるのじゃぞ……！」

警沢って必要ありませんし、やろうと思えばいくらでもできますしね。シオン様とエヴァさんの店の収益は国家予算よりちょっと低いくらいですよ？慈善事業にはばら撒いてますけど。

「どちらにせよお断りします。後、そこに隠している兵で私をどうしようとするのはお勧めできません。」

「……………」

「信じる信じないはかつてですが、京都の全兵力など私一人で殲滅できますので。」

いいすぎました。シオン様達や土蜘蛛さん除いてですね。

それからしばらく問答がつづいた時、誰かが転移してきた。

「なんじゃ!!」

「く、曲者!!」

隣の部屋にいた兵が陛下をお守りするため壁になりました。

私も、横に置いてある龍神刀（取り上げられそうになりましたが、弾かれて取ることも離すこともできませんでした。）に手をつけたんですが………必要ありませんね。

「ここにいたか紗代。」

「シオン様どうしたのですか？」

転移してきたのはシオン様でした。結界内部に転移とか相変わらず出鱈目です。

「何者だ貴様は！！」

「単に紗代の主だ。」

「なんだと、では御主は我よりこの穢れた者の方が良いと申すか！」

そんなの決まってるじゃないですか。

「はい、シオン様と貴方では月と鼈ほどの差があります。」

シオン様を侮辱するなんて……………どうしてやりましょうか。

トクン
トクン
トクン

「我を侮辱するか……………！」

危ないです……………心を静めなくては……………

。

ところで、何の用でしょうか？わざわざ転移してくるなんて。

「本題だが残党狩りに陰陽師と子供達を使う。すでに、京都に呼び出しているし明日には商隊と共に着くだろう。」

「子供達を大丈夫なのですか？」

「ああ、それに永遠神剣第6〜5位をもたせるからな。」

「我を無視するなでござる！！！！！！」

永遠神剣第6〜5位……………なら大丈夫そうですか？
でも……………心配です。

「ああ、チームとして子供達3人と陰陽師二人の構成で行く。保護者にばれない様に大精霊も配置するから実戦経験つませるには良い機会だ。」

「なら、安心ですね。」

「貴様ら~~~~~!!!!!!」

「で、さっきからなんのようだ?」

「実はですね……………求婚されてまして……………もちろんお断りしてるのですがしつこくて。」

いいかげんにして欲しいです。

「当たり前だ!こやつのような理からはずれた穢れた者に御主を渡すなど!!!!!!」

元からシオン様の物ですが……………。

「ああ、五月蠅い。人の女にちよっかい出すんだ殺されても文句ないよな?」

私のために怒ってくれて嬉しいです

「やれるものならやって見よ!!!!!!」

「そうか、ならば死ね。」

え、ほんとに殺すんですか！それはまずいような。

「兵士さんが可愛そうです！」

「！！！！なっ！！！！」

「それもそうだな。ならば、我が命に従え。」

左目が紅くなり瞳に紋章がでてますよ？

「！！！！Yes, My, Lord) イエス、マイ、ロード)！！！！」

何か違う言語になってますけど。

「ど……ど……ど……だのど……」

「お前ら復興支援手伝っていい。」

「Yes、My、Lord（イエス、マイ、ロード）！！」

兵士さんたちは出て行きました。

「さて、残るのは貴様達だけだ、覚悟は良いな。」

残ってるのは天皇とそれを補佐する人だけです。

「ひい！！」

「天皇陛下を手に掛けるなど神をも恐れぬ大罪ですぞ！」

「問題ない、そいつらはただの人だ。たとえば、そうだとしてみそれも打ち砕くのみ。」

すいことってますね。

「では、混乱がおきますー！」

「それこそ問題ない。紗代が天皇家の血を引いている。何か問題あるのか？無能な奴より民に慕われ神聖視されている紗代のほうが問題なかるう。」

「……………それも、そうですね。分かりました。いいでしょう、ただし天皇家の血を無くすわけには行かないのでお子様をお一人こちらに預けてください。」

あっさり裏切りましたね。

「な、なんじゃと裏切るというのか！」

「はっきりいいますと、貴方のお守りには嫌気がさしております。ゆえ。紗代様とのお子を教育したほうがよき導き手となりましょう。」

「たしかにそうだな。」

褒められました……………照れちゃいます

「ま……………まで、しかしそやつは穢れた者ぞ！その子は魔の血があるではないか。」

「ふむ、紗代様は別の方とお子を儲けるのはいやですよね？」

「あたりまえです！」

考えただけでも虫唾が走ります。

「では、貴方様の魔の力を封印して子を作っていたただければよろしいかと思えます。」

「へえ、できるの？」

「はい、封印は陰陽道の得意分野ですのでその呪法も伝わっております。夜伽のときだけ、符を数枚はるだけでできますよ。」

「ならいいぞ。」

それなら、問題ありませんね。

「ただし、教育には指図するぞ？」

「もちろんです。」

「というわけで、お前を殺さない理由は無くなった。」

「い……命だけは助けてたも……!!」

見苦しいです。

「ちなみに聞くが、ここまで戦況が悪くなったのは何でだ？こつちの予想では後一年は無事だったのだが。」

「はい、この方が政務をさぼったり、思いつきで作戦を実行しましたので、止めるまもなく劣勢になりました。我らに相談してくれればよいものを……その後指揮系統は我らが掌握しましたけど。」

全然ダメダメですね。

「よし、決定死ね。無駄な命を散らした貴様が悪い。」

「いや……いや……いやじゃあああああ……!!」

うわ、どんどん干からびてゆき………病で死んだよ
うな感じになりました。

「ふう、さすがに毒と時の魔眼による加速は疲れるな。」

「大丈夫ですか！」

目から血が流れていました。綺麗に拭いて直しました。

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

「しかし、これで病気による死去でどうとでもなりますね。」

「だからこうしてみた。」

「「ふふふ」

あ…………あくどいです…………この二人…………。

その後、話し合いの結果私がしばらく天皇になり業務をすることに…………あれ、私が一番そんしてませんか？復興支援に治癒したり政務ですよ？シオン様や周遊シュウウさんが手伝ってくれますから政務など書類仕事はほぼ無いですけど。でも、大規模な京都の区画整理とか考えてるみたいですけど…………。

次の日、子供達も参加しての即位式を行いました。

これから自由に動けないのですね……………残念です。ちなみに、私はあくまで借りということです。男子が生まれ次第教育して10歳くらいになったら即位させるそうです。史書にも乗せず姫巫女として乗せるそうです。

「母上無事でなによりです。」

「小次郎も元気そうでしたよ。」

「1」即位おめでとじいぞういます。」

「あまり、嬉しくはありませんが復興支援や店などに優遇できますからがんばります。」

その辺はちゃんと許可もらいましたよ。

「これから、皆をここ集めてください。」

「はい、分かりました。」

30分後、訓練所に皆が集まった皆を見渡し実力を測りますが……
……みんな予想以上に強くなってますね。

「皆さん、よくここまで強くなりましたね。苦勞したでしょ。」

「「「「「「はい……。」「ガクガクブルブル」」」

「「「「」

私と同じみたいです。容赦ありませんね炎王鬼さんにウンディーネ。

「これから、貴方達は実戦を経験します。それも、訓練ではない本当の実戦です。その為、シオン様より貴方がたの武器を預かっています。それをこれより渡しますが、これを持ち神鳴流を振るう意味を確り理解するのですよ。」

「「「「「はい！」「「「「「」

「よろしい。では、永遠神剣を渡します。」

ひとりひとりに手渡し最後に小次郎に渡します。

「小次郎、貴方に渡すのはこの永遠神剣第4位夕凧です。」

「第4位夕凧・・・・・・・・・・・・・・・・」

「はい、これには使用者の実力によって封印を解除したりできます。使いこなせるか貴方次第です。封印状態は基本的に他の子達の永遠

神剣とかわりはありません。」

「わかりました。この刀と神鳴流の名に恥じぬように働きます。」

良い子に育ってくれました。

「はい、よろしく願います。皆には陰陽師とチームを組み残党狩りを行ってください。投降するものは投降させてかまいませんが、細心の注意を図るようじ。」

「「「「「はい!」「」「」「」「」

これで、「こっちはできました。次は復興ですね。」

シオンSide

紗代SideOut

半年たちようやくまともになりだした。

ふう、創世を使いクレーターを直したり仮設住宅作ったり、人命救助に炊き出しなど……お金が馬鹿みたいに消えたな。馬鹿が溜め込んでいたのと店の金でどうにかなったけどな。

周遊と計画した区画整理も順調に進み京都は無事復興を遂げられそうだ。子供のほうだけど不思議なことに前できていた子がスペースをあげたというかなんというか普通の子ができた。成長も普通なそうだ。来年には生まれるだろう。姉になる子は全然成長して無いらしいが。

「シオン様。」

「どうした？」

「小次郎達の……神鳴流の評価はかなり高いですね。」

そうか、よかった。これで一応歴史どうりになったのか？原作あんま覚えてないけど。

「まあ、永遠神剣もたせたんだ。そんなものだな。」

「いえ、それがですね。あの子達ほんとに危ない時意外神剣抜いてないんですよ。」

「へえ、それで評価良いのか………いい子に育ったな。」

「はい」

新しく京都にも孤児院を作ったし………才能ある子達はこっちで作った修練所でもたたき込むか。

「でも、問題があつて………」

「なんだ？」

「永遠神剣使った模擬戦が今はやってるらしくつて………派手に戦闘行つてるんですよ！危ないですよね！」

「いいんじゃないか？いい訓練になると思つな。」

エターナルの連中対策もとらないといけないし………

・神剣に取り付けたデータ収集能力も有効だしな。パソコン+周辺機器も創世で作り、常に解析したりしている。

「それならいいですけど。怪我とかが……………」

「なら、修練所に山一個買い取って作ったからそこでやるように言っておけ、条件にウンディーネかセルシウス、シルフなど回復にすぐれた奴がいることが条件だとな。」

「分かりました！」

さて、あの山にはトラップも大量にいれたけど……………ぬけるかな？くくく。

結果は真剣使ってなんと抜けたそうだ。他の修行者にも人気になったけどね。

それからさらに一年ちょっとがすぎ無事男子が生まれて名前を直正ナオマサにした。

そして、痺れを切らした奴がやってきた。

「シオンよ、いいかげん戦つぞ！我は暇じゃ！……！」

「そうだな。たしかにいい時期かもね。会場は別荘だな。」

「うむ。」

「特設エリア作るか……。」

「我らが暴れると周りがすごいことになりそうじゃからな。」

成りそうじゃなくて成るだがな。

「よし、政務終了。いくぞ！」

「うむ、楽しみじゃ！」

別荘に移動して一つの区画（半径1km）を野原にしたり境界を張っているシルフ達がやってきた。

「あるじくなにするの????」

「ああ、俺と土蜘蛛で遣り合うんだよ。」

「そうじゃ……………いいかげん名前を覚えておくかの。
我は桜花じゃ。」

桜花か……………サクラの花ねえ……………

「何か文句あるのか?」

「なんでもない。」

「綺麗な花には棘があるものじゃろ?」

まあ、たしかに綺麗で可愛いが棘どころか竜の吐息だろ。

「失礼なことを考えてないか？」

「なんでもないって。」

「なら、よいがの。」

「ねね。私達もまぜて〜」

なに言い出すんだ？

「参加するの？」

「違う〜中継〜皆娯楽に飢えてる〜」

「我はかまわぬぞ。」

「俺も良いな。」

「やった〜じゃあ、中継してみんなにとどけるね。」

大事になるが中継ならかまわないだろう。

そして、後悔した。準備しだして三日後、別荘にいる全妖怪・意思ある魔獣に炎王鬼達やエヴァ、紗代、小次郎達に精霊達、周遊などほとんどの連中が見に来てる。

「くくく、盛況じゃな。」

「まっただくだな。」

「よしゆね。結界はわたしが担当しますのでえんりょう無くどつじよでしゆ。」

「うむ。」

「ああ。」

「では、がんばってください。」

アテナが消え用意された結界が展開された。

「ほう。これはこれは……………」

「100層を圧縮して五重に重ねさらに修復と瞬時展開準備までしているな。」

「さすが女神アテナじゃな。」

「だな。」

「テストス、問題ないみたいだな。司会は私セルシウスが執り行う。各自席に着き観戦するように。席を動き戦場に近づいた場合当方は一切の責任をとらにからな。」

かなり物騒なことってんな。

「係員の……大精霊の支持があつた場合すみやかに撤退することだ。これが生き残る秘訣だいいな？」

「おい。」

「くくく、ここまでいわれるとはの。」

「“それでは二人共準備は良いか？”」

「「いつでも！」」

「それでは、シオン対桜花始め……！！！」

こうして、想像を絶する戦いが幕をあけた。

さて、いくか。

「森羅のシオン参る。」

「桜花参る。」

初撃はお互いの拳を殴り合わせた。

「く！」

「我に力で挑むなど無謀よ！」

「たしかにそうだな！」

ぶつかり合った瞬間吹っ飛ばされた。

「力勝負では桜花の勝ちだ！！」

力が足りないなら入れるのみ！

「マギア・アスマ母オリティみボリト星の魔法・隕石、究極・掌握！」コンプレクシオー

「化け物じゃな！」

「隕石を取り込んだだと！」

くくく、隕石の重量をと破壊力を取り込んだこれなら問題なく相手
できるだろう！

「よいぞ！魔拳・・・・・・・・ビックバン！！！！！」

「つち、デイスガイアの技かそれなら！レムリア・インパクトオオ
オオオオオオオ！！！！！！！」

強大な力と力がぶつかり合い大地が浮き上がってゆく。

「あはは、楽しいぞ！千人衝・無空波！！！」

つちい！千人に分身していつせいに無空波かよ・・・・・・・・ほんと
ようしゃねえな。

「星の魔法・流れ星（マギア・アステリ）ディアトン・アステラス！！」

「っち、さすが魔法使い………おいまで、その魔法は反則じゃ！」

「知るか！アルティマ！！！！！！！！！！」

俺の周りに無数の黒い球体が召喚され桜花めざして突き進む。

「ならば暴虐の月メルセス・ドア！！！！！！！！！！」

っちむこつも似たようなの出してきやがったな。

「どっちも化け物だな」

「お互い黒い球体をぶつけ合い消滅させていってるな。あれは、我らでも食らえばひとたまりも無い。」

「ですね。アテナ様からの注意です。あれあたったら問答無用で結界消されるから気をつけるようにということです。」

ふむ、それもそうか。

「だが、知らん!!!!」

「食らえ星光の破壊!!!!!!」
スターライトブレイカー

「なんの無駄じゃ!!うりゃりゃりゃりゃりゃ!!!!!!」

おいなんだそれ!

「すごいな、魔法を単なる拳でぶち壊してる。」

「ふははは、我が拳に壊せぬものは無し!!!!」

「森羅、対象に干渉!!」

森羅万象を操り、桜花の行動を阻害しようとする。

「ふはは無駄じゃ!!」

爆音が響き星光スターライトブレイカーの破壊が跳ね返ってきた。

「おいおい、出鱈目すぎだろ。」

「貴様にゆわれたくないの！男なら小細工なしで拳で勝負せぬか！」

「それはお前が有利すぎだな。しかし、いいだろう剣技で相手してやる。魔法じゃ拉致あかんしな。」

右目に直死の魔眼、左目に未来視の魔眼を発動しきりかかる。

「剛力徹破・突！！」

「魔王炎撃破！！」

そこだ！

「まず片腕もらった！」

「っ！よからう持ってゆけこれは駄賃じゃ！虎砲！」

「ぐ。」

重いのもらったな。お蔭で距離を離された。しかし右腕は大きいだろっ。

「む、再生せんのこと………しかたない。」

おい自分で傷口えぐりとりやがった。

「ほら、くれてやるわい。」

「いらん！」

抉り取った奴を投げてきたので回避したが………
爆発しやがった。ほんと化け物だ。

桜花
Side

シオン
Side
Out

血肉沸き踊る戦いじゃな。

「ふん、片腕がないんだ降参したらどうだ？」

「まさか、まだまだじゃな。それに腕などこの通りじゃ。」

瞬時に切り取られた腕を再生し見せ付けてやる。

「おいおい。なんだその反則染みた再生能力は！」

「我は握りこぶしほどの肉片さえあれば再生できるそつじゃ。」

「でたらめだな。」

「まったくじゃな。我が身体ながらな。」

「うん、でもま直死の魔眼は有効ってことはわかったな。わざわざ挟らなきゃ成らんのだからな。」

直死の魔眼か………あればっかはどうしようもないの。

「お主を徹底的にぼこぼこにするか、我をダルマにするかの戦いじゃな。」

「そう聞くと俺がお前を犯そうと襲ってる凶悪犯の感じがするな！」

お互い会話しながら刀と拳を交し合う。

「あながち間違っておらぬじゃろつて!」

「風切り!」

「剛昇弾！」

その後も加速してゆき、マツハらの世界で戦っている。お互い気な
どで体をカバーしていなければ燃え尽きる。

「よくついて来れるの。」

「あんだこそ。」

「「大気圏を生身で突入してるようなもんじゃぞ（もんだ）。」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「現在するも〜しよんで移しております〜そ〜じゃないとみえ
ないからね〜」

「北斗百烈拳！……！」

「今度は北斗神拳かよ！アインツェルカンプ！……！」

まったく楽しいのう。

「ふふふ。」

「あはは。」

「「楽しいの（な）いいかげん、沈め！！！」」

その後一日が経過・・・・・・・・二日が経過・・・・・・・・

「いいかげん終わりにせんか？」

「なら沈めよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「現在は時の大精霊の力によってあそこだけ時の流れが加速しております。」

「すでに大地がゲル状になってますね。」

「 衝撃波がすごいもんね〜」

むづ、楽しいがさすがにつかれてくるの。負けてやる気は無いがな！

「 もう、負けても良いんじゃないか?」

「 お主こそ!」

「 「だが断る!!!!!」 「」

お互いもう意地じゃな。

その後も戦いは続き一週間がたった。

「ふははは。」

「あきたの。」

「だな。」

お互い一旦戦闘をやめた。不眠不休でマッハ5で戦闘し続けてたんじゃないからさすがに疲れたのじゃ。

「おふたりから、あきあたのことばがでた。」

「まったくげんじちゆでもふちゆかめですよ？こっちの苦勞も考えて欲しいでしゆ。」

「だそうだぞ？」

「しかたない、終わらせるか。」

ふむ、さすがに再生と気力は問題なくても体力がまずいのう。

「よかるう。お互い最大の―撃を持って相手の威力を上回った方の勝ちでよいかの?」

「そうだな。それでいこうか。それなら万が一にも死ぬことは無いだろ。」

「うむ。我らの実力はほぼ拮抗しておるしの。」

「森羅が有効ならもつと早くに決着ついたんだがな。」

「それは仕方ないの。我と相性が悪いんじゃないかな。」

「いい修行にお互いになったがな。もう、負けても良い気分じゃが最後までやりたいしの。」

「では、いくぞ。」

「うむ。」

「“ちよつとまったです”今からそつちの時間元に戻して、結界張りなおすので溜めてまっしてくださいでしゅ。”」

「だそうだ。」

「わかったのじゃ。なら、あれを使うかの。」

「これは………おれもあれ使うか。森羅はさげて
………ネタで作った永遠神剣を………
………」

なにかいやな予感がするのじゃがもんだいないじゃろう。

そこから20分後アテナと我らの準備は完成した。

「では、どつぞどつぞ………」

「うむいこうか(の)。」

そして私が奴の用意した物を見上げた。そうまさに見上げた。

「それはなんじゃ。」

「こいつは永遠神剣第3位金色の槌だ。」

金色の槌じゃと！成層圏までとどく強大なハンマーこれはホントに
まずいのう。予想通りの品ならとくにの。

「無想転生。」

「あ、それ無駄だよ。透明化してもつぶせるから。」

「じゃよな〜」

しかたない。

「あれやるか……………」

「いくぞー」

「115ー」

それから、しばらくして視界がもどる。

「ふははは、生きておるのか。」

「なんとかな。森羅で防いだが片腕が消滅した。」

「我よりましじゃろうて。こっちは両手両足完全につぶれておるの。」

「なんでだ？」

「実はな、跳ね返った拳閃でやられてしまった。そして再生の力も根こそぎ攻撃にまわしたからしばらくこのままじゃ。」

「ばかだろお前。こめなきや今勝てたかも知れんのにな。」

「この一撃で勝敗を決めるそついで約束じゃからな。」

なら、仕方ないな。

「さて、とりあえず疲れた寝るか。」

「そうじゃな。これからよろしく頼むぞ我が主よ。」

「ああ、契約とかあとだな。」

「うむ、恥ずかしいがしばらくは下の世話もしてもらわねばな。」

「適当に誰か寄越す……………とつかお前浮けるだろ。」

「ばれたか……………遊んでないで脱出するかの。」

「だな。」

この区画の消滅が始まっている。

「ふっふ。」

「どこを触っておるかえっちめ。」

「諦めるもてるところがほぼ無いんだからな。あと、俺の物になるんだ別にかまわんだろ。」

「女心を理解してないの………まあ、お主の言いつとおりじゃがな。」

ふん。

「これからよろしくな転生者。」

「うむ、こちらこそよろしくじゃな転生者殿。」

こうして、この馬鹿げた戦いは終わった。

後処理が大変だったけどな。

シオンSideOut

京都最終決戦〜江戸時代二時間目〜（後書き）

メア「というわけで土蜘蛛の正体は途中でわかったかな？」

シオン「まあ、いろいろ技使いまくってたかな。」

桜花「うむ、我が力は次回じゃな。しかしゴルディオンのマーは反則じゃる」

シオン「おまえが最後にうった、インフィニティ・ディゾルヴァーも対外だろしかも改造。」

桜花「うむ。元ネタはサイレンとソフィちゃんなのじゃ」

メア「ふはは、融合させましたごめんなさい。紗代に勝てるはずないよな。普通に最初は紗代に闇覚醒させて倒させるはずがどんどん強く強化されていきました。そして、三段変化ですよ！これぞラスボス！」

桜花・シオン「うむ。」

鶴「それで殺された私達は？」

メア「お前達は小夜の覚醒のためのいけ……鍵だったんだよ。」

鶴「ならいいです。しかし、再登場は？」

メア「未定。とりあえずあとがきとかをまかせる。」

鶴「わかりました。それでは、次話をお楽しみください。」

次回予告

ついに動き出したロウエターナル。

無残に散り逝くエターナル達。

我らのために立ち上がったのは桜花様！！

千切っては投げる。それだけでエターナルは消滅させられ神剣は奪われる。

がんばれエターナル！君達の明日は桜花を越えた先にある！

次回！「暴虐無情！！闘神少女桜花！！我が手に係り散るがいい！！！！」

桜花「で？どうだなのじゃ？」

メア「微妙にほんとですよ？」

桜花「ふむ、ではよからう。戦いはすきじゃからな。」

出会いと別れ

シオンSide

後日（三日後）ようやくまともに動くようになった身体をたしかめ、横で寝ている桜花に声をかける。

「で、お前はなんなんだ？」

「うむ、我は………私の家は華道、茶道の家元だったんだけど。正確には両親の実家なんだけど。」

5、6歳くらいまでに両方完全に覚えて新しいの作ったり天才とかいわれてただけだね。」

7歳から原因不明の病で長く病院生活が続いてね。」

どこの医者に見せても分からないし症状は酷くなって行くんだった。」

それで、両親はがんばってくれてたけどどうしようもなくなって最後には私の望むものをもってきてくれたんだ。北斗神拳とか修羅の門などの漫画やゲーム、アニメ、小説とかね。」

いままでみたこともなかったから暇つぶしにはちょうどよかったね。それで12くらいまでは生きられたんだが死んじゃってね。」

「結構かるくいってるな。」

「まあ、ここでこうして生きてるしね。」

それもそうか。

「それで、気づいたら白い空間にいて、周りを見ると神様がいて原因を教えてくださいました。私の病の原因は神同士が喧嘩した時に落ちてしまった封印されていた呪いなんだって。神でも解呪できない寿命をどんどん削ってく呪いだったらしくって、手出しできなくてすまないっていつてくれたから別に良かったのに、転生の話をだされてね。もう準備できてるから能力もあげるから好きなように生きておいでっていわれたんだ。」

「それで、ここに転生してきたのか。」

「うん、強く楽しいところっていいね。格闘家みたいなものになりたかったし。もらった力は魔力をなくしてその分気にまわしたね。金剛力無双と超再生能力、全ての技が制限無しの反動なども無し使える技術。そして、私が選んだ最後の能力は何と！」

「なんと？」

「なんだ？」

「理の破壊ですよ！」

「おい！」

「我が拳はありとあらゆる理を壊す！それがたとえ魔法だろうが不死だろうがね！」

「反則すぎだろ。そりゃ、森羅と相性悪いな。しかし、4つか俺は魂の関係で三個までっていわれたけど？」

「私の場合神の呪いで魂その物が変質してたみたいでさ。1個もらったのと神様がおまけで千変万化の能力くれたんだ。」

「ってことは五個かよ。」

「それで土蜘蛛に化けてたのかよ。」

それにしても………そういことか、俺は妹の分も頼んだし。弱体化はしてるが微妙レンの能力も使える。俺とレンで6個、桜花が5個………微妙な値だな。分離してもたぶん使えるだろうし良い感じだな。

「うん、それで化けたよ。そして、江戸時代あばれてみたら弱い弱いこれどうしろと？っていうときに酒吞童子達にあっけ一緒に暴れてみました。そしたら、紗代ちゃんやシオン君がかかってくるんだもん。もう、大喜びですよ。」

そりゃ弱いだろうよ。

「まあ、それで寿命とかあるのか？」

「あるわけ無いよ。再生能力のお蔭でほぼ無限に生きられるし、自分で自分を殺すことだってできるしね。」

「なるほどな。これから一緒にくるんだろ？」

「もちろん。たとえ断つても一緒に行くんだからね。それに恋愛とかデートとか興味もあるし。あ、あと調教されたりもすこし興味あるかな。」

こいつ、微妙にMはいつてるな。

「なら、たっぷり調教してやる。」

「わ、やぶ蛇だったかも。じゃあ、私の手足が治るまでたっぷり私を調教するといいのじゃ！」

「なんで口調変えてるの？」

「そうじゃないと力がでないのじゃよ。できると思い切れなくての
なら、口調を変え役になりきってみようって思ったのじゃ。」

なるほど、それで変えたのか。

「この口調はいやかえ？」

「いや、どつちにしろかまわんな。桜花には変わらないんだからな。」

「

「きゅん・・・・・・・・・・や・・・・・・・・・・やみしくしてね？」

「やだ。」

「・・・・・・・・・・」「

「じゃあ、激しくしてね？」

「両方ならいいぞ。」

「それをお願いするね。」

「ああ……………ん……………」

「……………ん……………ちゆ……………
／／／」

これはいいパートナーができたな。対エターナルにもたよれるしな。

そうしてレン以外の転生者が仲間に入った。

シオンSideOut

アテナSide

現在の居場所はれんちゃんの研究室（別荘）です。

「・・・・・・・・・・・・・・・・それでわかったてほんと？」

「はいでしゅ、れんちゃんとシオンお兄ちゃんの分離で確実な方法です。」

はい、先日桜花しゃんが仲間になったのでできるんですけどね。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おしえて。」

「はい、今までで一番問題だったのは世界の魂の容量・・・・・・・・・・
・・それは、わたしのせい・・・・・・・・・・世界が繋がり増えまし
た。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（くくくく）」

肯定されて複雑な心境でしゅ。

「それで、分離は可能です・・・・・・・・・・次の問題の肉体です
ね。」

「……………うん……………わたしの力に
肉体が持たない……………」

はい、なんとか実験しましたがホムンクルスが破裂したりしました。

「それで、こないだ紗代ちゃんを見て考えたんですけど……………
……………耐えられる身体がないなら耐えられる身体をつくれればいいんで
すよ。」

「ほむんくるじゃないの？」

「はい、ホムンクルスは限界がありました。クローンもそうですね。」

「ならどうするの？」

「ここからです。かなり外法ですけど。」

「はい、これはかなり酷い方法です。そして、少なくとも三人に協
力してもらわないといけないんです。そこで、そのお三方をお呼び
しました。」

「なんのよつじゃ?」

手足がないのに浮いてますね。無空術でしたっけ?

「来てやったぞ。大事な話があると言われたからな。」

これでエヴァお姉ちゃん桜花お姉ちゃんがそろいました。

「実はれんしゃんをシオンお兄ちゃんから分離する方法が分かりました。」

「ほう、妹君を分離する方法がな。」

「それはなんだ?いくらでも協力するぞ。」

「.....」

この方法聞いてもそういつてくれるんでしょうか?

「まず始めに、シオンお兄ちゃんとエヴァお姉ちゃんです子供を作り

ます。」

「子供だと！」

「最後まで聞いてください。」

「わかった。」

「うむ。」

「……………うん……………」

ではいきますよ。

「まず先ほど言ったように子供を作ります。これは真祖の力が必要だからです。そして、この時点でエヴァさんの子宮から桜花さんの子宮に子供を転移させます。」

「なに！」

「ほう！」

真祖の力は必須条件です。

「最後まで聞いてくださいね。桜花さんの子宮に移ししばらくした後、レンちゃんに入ってもらいます。この時普通なら力があふれ出して母体が危ないんですが。」

「私の再生能力じゃな。」

「はい。それと桜花お姉ちゃん自身のスペックが馬……チートクラスなので大丈夫です。」

「今変な事いおうとしておったが、まあよいじゃろ。」

あぶなかった。

「そして、桜花おねえちゃんの中でレンちゃんにあわせた肉体ができるということですよ。あとは普通に出産すればいいですよ。」

「それは、子供の魂はどうなるんだ？」

「はい、術式を使い孕んで貰いますから魂はもともとから空の状態です
ので、本当にレンしゃん専用の身体になります。」

「私の再生能力じゃたりないのか？」

産む子供をとりあげられるのは嫌ですよ。

「はい、計算したところ真祖の回復力では母体がだめになったあと、
子供の身体も吹き飛びます。ウンディーネさんに頼むこともかんが
えましたが、紗代ちゃんのほうをたのみますので。」

「間に合わせということか。両方の意味で。」

「はい。」

「なに、いいさ。レンはいいのか？」

「……………エヴァちゃんがいいなら……………」

「桜花は？」

あとは、桜花さん次第ですね。

「ふ、かわまぬぞ？子供も生んでみたいしな。それに、妹君とも戦ってみたいしの。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やだ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「

「残念じゃ、それにじゃエヴァ。どうせなら感覚共有して主も出産体験するのもいいんじゃないか？」

「ふむ、それもそうだな。それならたしかに私が生んだようなものだしな。」

「じゃあ、そういうわけで良いですか？」

「「「ああ(うん)。」」」

シオンお兄ちゃんはどうだろ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・おこいらまは？」

「そうじゃな、主殿はどうなんじゃ？」

「まさか嫌とはいわないよな？」

「別にお前達がそれでいいならいいぞ。レンに合えるんならなんでもいい。」

「決定だな。」

「じゃあ、術式は作っておきますね。あと、変わると位置情報が入れ替わったりするのでチェンジは禁止です。現実に肉体ができてからチェンジすると位置情報が変わると思うので気をつけてください。念話より協力な意思疎通も可能でしょう。」

「つまり、今の状態とすこし変化がある程度だな。分かった。」

さて、こんな感じかですね。

「じゃあ、次は蒼き魔神と白き魔神の特機だね。」

「「「「?」」」」

「坑マナを使って作った神剣なんてな。エターナルじゃ変換できずマナの結合を解除したりできないか?」

「あははは、確かにそれは強力な武器になるな。」

「うむ、後は弾丸もそれで作ればどうにかなるんじゃないか?」

たしかにそうですね。なんにも相手と同じ土俵で戦う必要は無いんです。

「作りましょう対エターナル兵器を……………」

「うむ。」

「特機はそれでいいが、MSのほうも開発はつづけるぞ。」

「……………うん……………」

「ああ」

こうして、レンしゃんの身体とエターナル用決戦兵器の開発はヒートアップしました。みなしゃんノリいいですから悪乗りし過ぎそうですね。大丈夫ですよ？ちなみに闇夜の魔 使いをもとにしたげっこうは改良発展型として絶界と名前を決めました。エターナルとの決戦準備はちやくちやくとできています。

シオンSide

1780年・・・・・・・・あれからほぼ50年がたった。

俺達は今世界中の近くに作った日本家屋で生活している。

「しかし、紗代………おまえ若いまんまだな。」

「ですね。」

紗代の姿はあれいらい変化ない。龍神の血かなにかしらんがな………寿命はそのままだが。ちよつと前に生まれたリリとレン………レンは計画通りだった。むしろリリがたいへんだった。やっぱリ力が強くて問題だったのでウンディーネをいれて事なきを得たがな。リリとレンは今紗代から母乳もらったりしている。他の人でもいいんじゃないかといったんだが………聞かなかつたほかの二人は時間いっぱいあるけど私には無いからってね。

「小次郎の子供も赤ちゃん産んだみたいですよ？」

「へえ、神鳴流教えるのかな？」

「小次郎は張り切ってます。」

「それは、楽しみだな。あっちの方はもう良いだろう。」

もう、妖怪が大勢集まってるの戦争はもうない。俺の膝にのっている

九尾の子供をなでてやりながらのんびりとすごす。エヴァや桜花は研究所で研究したり、別荘で遊びまわったりしている。

「平和ですね。」

「まあ、ここはね。すくなくともゆっくりすごせる空間だ。」

「お茶が入ったなの。」

雫からお茶を受け取りまったり時間をすごしてゆく。

。レンとリリの成長を見ながら・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、1830年ついにその時が来た。

「ふう、さすがにもう無理みたいですね。」

紗代の寿命が尽きようとしていた。

「よくもったほうだろ。龍神の血と力を延命に使ってたんだから。」

「そうですね。」

100年以上生きてたからね。

「それにじゃ、リリとレンは我らに任せておけばいいのじゃ。」

「はい、あとシオン様のこともお願いしますね。」

「ああ、心得た。」

「まかせておけ。」

まったく、あいかわらずだな。

「紗代お姉ちゃん元気でまた会おうね。」

「はい。必ずいつの日にか。炎王鬼さん栗ちゃん。リリのことお願
いします。」

「まかせろ。我が身に変えても守ってやる。」

「ふん、我が子も同然だから守るのは当たり前なの。」

「そうですね。」

そろそろか………未来眼でどう改変しようが無駄だった。
眷属など紗代は望んでいないしな。

「まま………いつちやうの?」

「………さよ………」

今二人共紗代に抱きついている。3歳か4歳くらいまでしか成長し
ていない。言語などは教育したが。

「はい……私はこちらまでです。でも、後悔はあまりありません。貴方達の成長した姿を見れないのと咲と加奈に会えなかったことくらいですね。それでもまたいつかきつと会えますから。貴方達にはお父様やお兄様、皆さんがいるんですから大丈夫ですね？」

「うん。」

「良い子です。」

紗代が二人の頭を撫でてやった。二人は泣き出した。

「ああ、紗代と俺の子だな。後のことは任せておいて、おまえはゆっくりお休み。」

「はい……最後にお願いがあります。」

「なんだ？」

「キスしてください。」

「わかった。ずっと愛してるよ紗代。」

「私も愛していますシオン様。」

静かにキスを終えた後・・・・・・・・・・紗代は息を引き取った。

その後、世界樹の近くに墓を皆で立てた。

???.Side

シオンSideOut

そこはどこかの神殿だった。

「その報告は本当なのかしら？」

私はいましがた受けた報告に耳を疑った。

「はい、間違いありません法皇。」

「そんな辺境の場所に高位の永遠神剣が多数あるなんてね……」

「調査はどうなっているのかしら？」

「数名を派遣したところ高位の神剣の反応を多数確認しました。どれも若く力が完全ではないようだったとのこと。」

「それは、つまり美味しい餌……まちなさい若いですって？」

馬鹿な、若い神剣など存在するはずが無い。

「調査に行った者達の神剣がそう答えたそうです。」

「つまりあそこには永遠神剣が作られるなにかがあるってことね。」

「恐らくは………そして、もう二つご報告があります。」

「なんですか？」

これ以上美味しい報告？それともまずい報告かしら？

「一つ目はカオスはこの世界に気づいておりません。」

「へえ、それはいいわね。」

「我らも偶然みつけましたからね。もう一つですが………偵察にいき先走ったものが不思議な結界につつまれ消滅しました。」

「なんですって!」

エターナルがすでにいるの？そんなはずは………でも、可能性はないわけではないわね。ナルの連中かもしれないし。

「そして、助けに行こう意思をしめした瞬間その者も結界にとらわれ消滅しました。」

「それは、慎重に調査しないといけないわね。結界がどういうものかどうか。敵兵力がどれくらいかとかね。」

「はい。最後の報告では民族衣装のような格好をした少女がわれらにこういったそうです。『この世界に手出し無用に願うのじゃ。さもなければ貴様らは灰燼と帰すであろう。』と伝言をつけとってきたそうです。」

「……………(ばき)……………なめた……………舐めたことほざいてくれるじゃないですか……………ふふふ、いいでしょうその喧嘩勝ってあげます。」

「法皇？」

「いますぐ、調査と平行して兵力を集めなさい。神剣とウサギちゃん狩りよ。」

「了解しました。開始いたします。」

ふふ、みてなさいよ！！！！！！！捕まえてたつぷり犯してやる！！！！！！

「そういえば変な報告があったな。でてきた少女は神剣の気配がなかったと・・・・・・・・・・・・・・・・まさかな、永遠神剣無しにエターナルに勝てる存在などいるはずがない。」

この判断が間違いであったことを彼らは後に後悔した。

Product

出会いと別れ（後書き）

鶴「お疲れ様でした紗代様。」

紗代「はい、ありがとうございます。私の出番はあるのかな？」

メア「もちろんあります。」

紗代「よかったです。でも、次ぎ出るのって王道なんですよね？」

メア「もちろん。」

紗代「どうなるのかな？みなと会えるならなんでもいいですけどね。」

メア「……………（にやり）」

次回予告

大量の数のロウエターナル……………

そして目覚めるは蒼き魔神……………

振るわれるのは破壊の力、そして始まるは大量虐殺。

次回「魔装機神！桜花とシオン！」

未来を切り開け魔装機神！！

紗代「たぶんほんとは。名前は違いますけど。」

屋敷への来訪者（前書き）

ごめんなさい。エターナル戦は次回になりました。

そして、強力なものがまたできちゃった。

日本妖怪はストーリー思いついたら出します。

屋敷への来訪者

桜花Side

1860年

ふう、偵察に来ていたエターナルを消滅させてたあと、いいかげんほかの連中に名前を覚えさせた

のじゃ。いつまでも土蜘蛛じゃいやじゃしな。我は桜花……
ただの人間じゃぞ？つつこまれ

たが。ちよつと姿を自由自在に変えられるだけなんじゃからな。とい
うわけで O H A N A S H

Iしてきたのじゃ。

「何をしておるのじゃ？シオン、レンよ。」

「ああ、桜花対策の武器作ってるだけだから安心して。」

「………うん………じゅっしきはこれでいい。」

「そうか、我対策をそれは安心じゃな」

「「うん。」」

「って安心できるか！なぜじゃ！」

つい突っ込みを入れてしまった。

「「だって、超再生能力反則だしね。」」

「むう……それはそうじゃな。」

たしかにあれは反則じゃな。ただ何度も殺されると精神が持たんじやろつが。

「そういうわけで、俺は永遠神剣で作ってみてる。」

「私は不死性無効と再生不可のコードを作ってる。」

「どっちもいやなものじゃな。」

我も対策を考えるか？技などを練り上げればいいだけじゃな。

「よし、永遠神剣できたよ。」

「おお、どんなのじゃ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どれ？」

出してきたのは刀身が深紅にそまった長剣だった。そこから陽炎がたちこめている。

「まさか・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・たぶん。」

「そう、世界を滅ぼす剣・・・・・・・・レーヴァティンもしくはスルトの剣・・・・・・・・やつちやつた。」

「

「やりすぎじゃろ!」

ほんとに同じ力があるんじゃないか？

「というわけで九つの封印も作ったよ。」

「たしかに、それだと我を一片も残さず焼き切れるの。」

理の破壊と力比べじゃな。

「私もできた……………」

「レンはなんじゃ?」

「うん……………普通に考えて……………無理だったから逆転させた。」

「逆転?」

逆転か……………?

「再生能力や不死を逆転させる術式……再生能力ならダメ
ージになって、不死なら死ぬよ

うになる。」

「我が食らったら即死に近いのじゃな。」

「名前は？」

「リバーズでいい……桜花だったら進行抑えられると思うけど？」

ふむ、自分で自由にONOFF可能じゃしの。

「次は何作ろうかな……鎌でも作るか……名前はどうしようかな……」

「

「冥王とかどうじゃ？」

O H A N A S H Iで思い出したのじゃ。

「かなり危なそうだけど………おもしろそうだな。」

「ああ、そうじゃエターナルどもから奪った神剣どうするんじゃ？」

「ああくれ、それ材料にするし。」

ふむ、まあ主の命令じゃしよいか。

「ほれ、4本じゃ。」

「ありがとう。俺はしばらく離れるしレンとリリの二と頼む。」

「どこかいくのか？」

この時期になんじゃろ？

「ああ、別荘でいいかげん完成させるからな。そろそろ時間がやばい。」

「心得た。エヴァも向こうだし二人はしっかり可愛がっておこう。」

「なんかきたら桜花の裁量で処理してくれていいからね。」

「うむ、精霊達にも相談するので安心するのじゃ。」

「じゃ、よろしく。」

シオンは行きおったし、リリとレンの世話でもするかの。

「レン、リリをよんどいで茶道を教えるのじゃ。」

「……………うん……………」

てくてくとリリの部屋にむかう……………うん、可愛いな。おれが我らの子じゃ。

1880年

20年たった。散発的に侵入してくるエターナルどもを殺したりしながら、リリとレンに茶道と華

道、合気道などの護身術を教えていった。4歳くらいじゃなかなか覚えがよろしい。

縁側に座って、庭で遊んでいる二人をお茶を飲みながら見学する。

「できちゃ〜」

「できちや〜」

「ほう、なにができたんじや？」

「「これ〜」

砂のお城が……可憐らしいの。

「よく出来ておるの。いい子じや。」

二人の頭をなでてやると気持ちよさそうにしている。

「うん……たいまほうしょう入きまついてるの〜」

「たいぶつしょう入きま〜」

「そ……そうか。」

よく見ると砂の城に魔方陣やらが組み込まれていて、中もちゃんとあいている。城壁まであるのだ

わりよう。動物とかすめそうじゃな。

「む、二人はここで遊んでいてくれ、我はちょっとでかけてくるの
での。」

「はい。」

「ようござじゃ。」

頭をなでてから屋根の上に飛び乗り目的地にいそぐ。

「侵入者ですね。」

「うむ、何人かの使い手のようじゃの。」

現れたマーテルと会話しつつ進んでいく。

「エターナルではないようじゃがな。」

「それはよかった。私はお姫様達をみていますね。」

「頼む。」

マーテルの気配が消えた。

「さて、急ぐかの。」

縮地を使い進んでゆく。

見つけた。4人ほどのか。

「ふう、ほんとにここにいるんですか？」

「ああ、まちがない。お前たちも聖地でいわれたんだろ？」

「ええ。」

聖地じゃと？たしか、この世界の聖地は全て我らの保護下にあるはずじゃが……。

「その者共止まるのじゃ。ここは所有地であるゆえ即刻立ち去れ。」

「応警告はしてみるがの。」

「「「「「「「」」」」」」」」

ほう、構えをとるか。構成は、剣士、魔法使い、魔剣士、子供じゃな。

無造作に構え、ワザと隙を作ってる。さあ、どうでる？

「貴方はなにものですか？」

「我か？我はこの守護をまかされておる者の一人じゃな。」

「どっどする？」

「まあ、まあ。」

ふむ。剣士が止めに入ったか………しかし、こやつもしや。

「はじめまして、私は神鳴流の望月影久と申します。」

「ほう、神鳴流か………ならば、用件ぐらいはきいてやるのつや。」

やはり、あれは神剣か。

「ありがとうございます。」

「ここを真つすぐ奥へといけ。そうすれば迷わんし畏にも掛からない。」

「わかりました。」

「忠告だけはしておいてやろつかの。変な気を起こさぬことじゃ。では、後ほど。」

さて、どうなるかの。

桜花
Side
Out

近右衛門Side

少女は現れた時同様音もなく消えた。

「ふう、どうにかまりましたね。」

「じゃな。」

「ええ。」

「どつしたんですか？」

さつきとは師匠達の態度が違う。

「まだわからないみたいですが、彼女の機嫌を損ねたら殺されてましたね。」

「瞬殺されておつたな。」

「最後の忠告のときの殺気と気の量が半端なかったですね。」

師匠たちでもそうだったんだ。僕は感じてないけど？

「子供の貴方には気づかれないよう配慮してくれたんでしょう。それより、いきますよ。」

「ああ。」

「はい」

そして、言われた通りの道を進むとすごく大きな大樹と大きい日本
家屋があった。

近右衛門 Side Out

桜花Side

ふう、できた。帰った私は出迎えの準備をしていた。具体的に言う
とレンとリリに着物を着せ、茶

菓子を用意したりなど茶席の準備をしていた。

30分後、到着したようなので茶室にお連れした。

「とう屋敷によつこそおいでくださいました。」

「「「くだしやいました」」」

うん、ちゃんと作法を覚えてますね。

「「まずどうぞ。」

レンとリリが入れた抹茶と茶菓子をだし、リラックスしてもらおう。

「結構なお手前で。」

などと、皆さん心得はあるよんですね。ちょっと四苦八苦していた外国人さんもいましたが。

「それで、ご用件はなんでしょう？神鳴流がこの地を訪れるのは数十年ぶりですが。」

「はい、今回は繋ぎとして参りました。こちらの方々がお話がある
そうなので。」

まあ、予想はつきますけどね。

「どござ、おっしゃってください。」

「はい、私どもに聖地を売っていただきたいのです。」

「ふむ。なんの為にですか？」

これは聞いとかないといけません。あと、マートルも呼びましよう
か。

「魔法使い育成のための学園を建てるためです。この世界や魔法世
界にある聖地はほぼ全て貴方達

に抑えられていますので、4個お譲りいただけませんか？」

「ふむ、残念ですが譲ることはできませんね。」

まあ、ほんとにレンがですけどね。

「そうですね、一、二、三条件を飲むなら土地をお貸ししてもよろしいですよ?」

「その条件とは?」

「我らに不干渉が一つ目。開拓などの建設に関してはこちらの指示に従うこと。もちろん事前に連

絡を入れてください。そして最後に無条件で永久的に経営権6割をいただきます。」

「「「なっ!」「」」

「それが条件ですね。この条件を飲むなら多少の援助も可能です。」

これなら最悪問題ありませんね。

「これならいいでしょマーテル。」

「はい、問題ありません。」

「では、以上のことが飲めるなら聖地をお貸ししましょう。」

「すこし、相談させてくれ。」

「ですよ。」

「わかりました。二、三日なら滞在してかまいません。」

「ええ、ありがとうございます。」

「さてと、いろいろ準備しないとけないの。レン、リリ手伝っておくれ。」

「……………（トク）」

しばらく四人を持て成した。

そして二日後結論が出たようじゃ。

「その話を受けさせていただく。」

「そう、わかりました。ではウェールズとことあとは後ほど選定しますね。あと、これが援助金

です。」

倉庫につまれている千両箱を1個もちだしてきた。

「換金はこちらで指定した業者でお願いしますね。」

「わ……わかりました。」

その後、下見や工事の発注業者なども指定した。

もちろんシオン達がやっていた店が神鳴財閥カミナとしてでかくなっておるからの。

その経営は私がしている千変万化を使つての。正確にはシオンと我じゃがな。

というわけで、結構資金は十分……税率とかうるさいの。いってしまえば千両箱使つてマ

ネーロンドンダリングみたいな感じじゃな？

こうして歴史道理かしないが、麻帆良学園ができたのじゃった。

屋敷への来訪者（後書き）

経営権 6 割！そして財閥！第一次世界大戦と第二次世界大戦はたして神鳴財閥はたえきれるかな？

ロウエターナルとの戦争（前書き）

リリは星空 メモリアのメアちゃん。好きだからだ！カンピオーネのほつと同じけどね。

カンピオーネの二次創作も書き出しました。後もう一作掲載します。

ロウエターナルとの戦争

桜花Side

あれから、学園の建設に携わり時間が過ぎた。我らが作り出した複合コンクリートなどを使って……

……コンクリートとかいつてるが中身は超合金とオリハルコンを混ぜた代物だ。対物対魔性能はばつ

ちりだ。実際コンクリートもはいつてる。これで、戦車を作ってナチスと日本帝国に売っちゃいました。

私ハーケンクロイツ好きだから　ちなみに核攻撃だつて中を封鎖してたら大丈夫ですよ？放射能を分解でき

るように術式組み込んだからだけどね。

聖地……や大切な場所はその術式を使い被害がでないよう保険を打った。

まあ、まだ第一次世界大戦すらはじまってないけどね。あれ？この時点でこの戦車10式（最新鋭）もたせ

てよかったのかな？まあ、気にしない！

そして、いいかげん報告のために別荘にあるレンちゃんの研究所にいったんだ……。

扉の前から………変な声が聞こえてきたのじゃ。
あまりのことにスイッチが切り替わっ
てしまったの。

「うふふふふ。」

「あははははは。」

「くくくくく。」

扉から不気味な笑い声と大きな音が立て続きにつづいてきおる。

「……できた！」

なにかできたみたいじゃな。

「邪魔するぞ？」

「……ぎゅっ……」

中に入ると物が錯乱しておった。そして、格納庫には二機の魔神がいた。

「もう、動くのか?」

「いまから取り付け。」

「はい、ブラックホール機関と対消滅エンジン、魔導力マネジエネレーター、次元連結システム……」

「……そして、最後の動力………永遠神剣!」

とんでもない仕様じゃの。

「ふふ、これが私達の研究成果だ。」

「武器もできたし装甲は、超合金とオリハルコン、ミスリルを複合して鎧前面に反射術式もほどこした。た

だ、消費はでかいけどな。」

「ほんとに決戦兵器じゃの。」

「残念ながらトランザムはまだできてないがな。」

この機体にそんなのつけたら手に負えんというのにの〜のママムド
どもめ。

「お主ら正気か？すこし、頭冷やそうかの？」

「「「「「「」」」」」」

「あゝたしかにやりすぎたかもしれんな。」 シオン

「ですね〜たのしかったでしゅけど。」 アテナ

「うんうん、悪乗りしすぎたな。」 エヴァ

まったく……………創世が魂抜かれたみたいになってるけど気に
しないのじゃ。

「ひびえぜー」

うむ気にしない。

「まあ、こつちももうちよつとじゃな。」

「ああ。」

「そうそう、本題じゃが魔法使い育成の為に聖地を使いたいという連中が来たので、永久的に経営権6割と

不干渉、聖地の勝手な開拓禁止という条件で貸し出したぞ。」

「OK、それならいいだろ。」

ふう、大丈夫みたいじゃな。

「あと、業者は神鳴財閥を使わせたのでお金の回収や収益も期待できるぞ。千両箱一個使ったが財閥で換金

して、千両箱をもどしてもいいし好きな奴らに売ってやってもいいし。」

「あくどいですね」

「そうだな。」

「恩だけ売ってこちらは痛手無しだからな。むしろ儲けてるし。」

まあ、ある程度未来が分かっておればな。

「実戦テスト・・・・・・・・・・・・・・・・世界大戦を・・・・・・・・いや
まずいな。」

「にしても、なんで学校にかしてやるんだ？」

「それはじゃな、将来的にリリとレンを学校にいかせるからじゃ。」

半分ほんとで半分嘘じゃがな。

「なら、安全なところ作ったら良いだろ？」

「そうだな。ならいいか・・・・・・・・よし、私は一旦出てリリと
レンにあってこよう。」

「なら、代わりに我が手伝って完成させるかの。」

もうすぐじゃいな。

「ただし、完成したら呼べよ！」

「わかってるって。」

「うむ。」

「はい。」

その後、完成した。

久しぶりの太陽じゃ〜〜〜。

「さて、ゆっくりするか。」

「残念だが書類がいっぱい溜まってるそうだがぞ？発注とか。」

「そっか、しかたないな。」

学園建設の奴じゃな。

「ちよっといつて終わらせてくるぞ桜花。」

「うむ、了解じゃ。」

会長職もちゃんとしてるんじゃ。千変万化を使い25歳くらいのキリっとしたキャラリアウーマンに変化する

る。シオンも同じように魔法を使い変わっている。

「いってくる。」

「二人共、気をつけてな。」

「ああ。」

「いってらっしゃいば〜まま〜」

「いってらっしゃいおにいちゃん、おねえちゃん。」

「いってきます〜」

そして、私達は転移魔法を使い社長室に転移し仕事をこなしてゆく。

「1111、11のボタンで設計したほづがいいな。」

「設計はまかせる。こっちは雑務引き受ける。」

「OK。」

設計はシオンの方が良いのできるしな。

それから、6時間ほど働いて書類の山は消えた。秘書達は大急ぎだったがな。私達の処理速度がやたら高い

からすぐもっていかなきゃいけない。

「おい、ドイツと日本から戦車もつとよこせてのが来てるんだが？」

「それは……………作ってあげちゃった 痛い痛い！」

ほっぺをひっぱられて遊ばれた。

「たく、自分らで解析しろっていっておくか。」

「ごめんなさい。」

「まったくだ。送るならMSにしろよ。」

「いやそっちのほうがダメでしょ!」

ガンダムですよ?ガンダム………たしかに、神鳴の隠し格納庫に一個置いてあるけどさ。

「まあ、仕事終わったしいいコーヒーでも飲むか。」

「うん。」

二人でゆっくりコーヒーを堪能してると………
無粋な連中がきたみたい。

『ロウエターナルがたくしゃん来ました。』

「わかってる。特機は?」

『準備できてます。いつでもいけますのでしゅ。』

「だつてさ。」

「なら、粉碎するだけじゃな。」

「じゃ、いこうか。パーティーにね。」

「では、エスコートをたのもうかの。」

「喜んで。」

こうして、我らは戦場に出かけていった。

法皇Side

桜花SideOut

今までの偵察の結果私達が戦闘する意思を見せた瞬間や力の発動をしたら結界が発動することが分かった。

なら、やることは単純ですわね。物量をもって邪魔者を排除するだけです。

「法皇、ロウエターナルとEミニオン2000体の準備が終わりました。黒き刃も準備できてるそうです。」

「では、いきましょう！我らの新たな力の為に。」

「はっ！」

うつぶ、さあ狩りの時間よ。

シオンSide

法皇SideOut

さて、俺達は現在囲まれています。それはもう完全に。ロウエターナル50人とEミニオン2000人。そ

んなにいるのかって突っ込みは受け付けない。なぜっていわれたらIFだからさ………な

にいつてんだろ。

「見事に囲まれおるの。」

「だな。」

「ふふふ、今まで散々こけにしてくれたお仕置きをします。」

「「黙れ法皇テムオリン。」」

まったく、むしろするのはこっちだろう。

「なぜ私の名前を？貴方達はエターナルじゃありませんのに。」

「答える義理は……………」

「無いな。」

「ですよ〜」

アテナもきたか。

「さて、パーティーを始めるかな。いけ桜花！」

「我がか？」

「挑発したのお前だろう。それにこれいって見たかった。桜花君に決めた！」

とってて桜花を敵陣の方に押す。

「我はポ モンじゃない!!」

突っ込みありがとう。

「あはは。」

「仕方ないな。おいテムオリン。」

「なんですの?命ごいですか?」

「これでいいのか?」

「は?」

「私達を攻略するのにたったこれぽっちの戦力で良いのかと聞いているのじゃ。」

「何を馬鹿な……頭をかしくなっただんじゃありません

んの？」

火の国と風の国に出てくる。某紅い鎧に紅いマントをした騎士のセリフだな。

「わかりますよ」

「老婆心ながら忠告してやったんじゃがまいいかの。」

「いいたっただけですな」

だな。

「うるさい！では、はじめるかの！！！！来たれ深遠よりもなお深き闇よりいでし蒼き魔神よ！！！！」

桜花がそついうと空間が揺れ桜花の後に強大な闇色の魔方陣が展開され、闇色の衣をまとったものが機械の

駆動音と共に出てくる。

「なんですの！」

そして出ると同時に闇色の衣が弾け蒼き魔神が姿を現す。全高27
3Mもの機械の魔神が戦場に光臨した

。

「なんて大きさなの！」

「楽しみじゃねえか！」

あはは、ほんとにやりすぎたな実物大なんて。

「と니까ですよ、普通に呼ぶと来るように、なんであんにゃ演出
ついでるゆんですか？」

「そんなものカツコイイからに決まっているだろうっ!!」「」

やっぱり桜花は分かっているな。

「.....」

なんだ、こいつら無駄な労力使いやがってみたいな目は……
……やめて！自分達でもちよっと

やりすぎたっっておもってるんだから。

「コホン、では始めるとするかの……
……移行シフト！……！！」

それと同時に桜花が蒼き魔神と重なる。具体的に言つとシュミクムみたいな感じになる。

「よし、システムオールグリーン。」

「ああ、暴れておいで。」

「データ収集開始しましゅ。」

そして、剣を構える蒼き魔神。

「さあ、行くぞ。ロウエターナルどもよ、前回宣言した通り灰塵に帰すがいい……！！」

「全軍攻撃開始！！！！！」

こうして、ロウエターナルとの戦争が開始された。

シオンSideOut

法皇Side

なんなのよ、あの化け物は！

「ふははは、まるで人がゴミのようだ！このグラ
ソンの力に恐怖
するがいい！ワームスマッシュャー！！！！

」

その一撃でEミニオンが400ほど消滅した。

「なんて威力なの！」

「食らいやがれ！！！！！」

タキウスたちの攻撃は効いているが再生されてゆく。まともにダメージを与えられるのはエターナルのみ。

「……………それも貯めてようやくだ。タキオスたち上位なら戦えるようだけど……………」

「……………まずいはね。」

「テムオリンあの剣はまずい、あれは坑マナによって作られている。あれで切られればエターナルといえ

ど消滅する。」

「それはホント？」

「ああ、それとあの魔神から強力な永遠神剣の反応が多数ある。」

”
「

秩序が冗談なんていうはずないし、本当なんでしょうね。

「皆、あの剣には気をつけなさい。消滅するわよ！！！」

「わかった。」

まるで巨人にひ弱な人間がいどんでる感じね。

「秩序全力で攻撃するわよ。」

「了解した。」

くらいなさい私の一撃を……………こんな存在秩序の
エターナルとして許せるはずも無い！！

！！

法皇SideOut

シオンSide

さすがエターナル部隊だな。傷が再生能力を上回りだしたか。

「グラビトロカノン!!」

技名はわざわざ音声認識の必要なかったな

「む、テムオリンが何かする気だな。」

「どうします？」

「高みの見物にきまってんだろ。」

「わかりました」

さあ、どうするテムオリン？

テムオリンが放った一撃は反射を越えグラ　ゾンの装甲にとどいた。
それと同時に行われたエターナル達の

全力攻撃により大ダメージを受けた。

「うわ・・・・・・・・・・って、エネルギーがなくなったの。」

蒼き魔神は召喚陣へと沈んでゆく。桜花はでてきたけど。

「ふふふ、負けをみとめるのね？ゆるさないけどね。」

「そうじゃ、ゆるさぬの。」

「ああ、せっかく作ったのをあそこまで壊しやがって……
……ちやんとその責任とってもらおう

か。」

俺と桜花から立ち上る覇気が共鳴する。

「え？」

「ただのやつあたりですね。」

ゆるさない。

「とうとうわけでの、2Rといじつかの。」

「俺も参加するか……アテナ。」

「なっ・・・・・・・・・・なんでしょう・・・・・・・・・・か？」

俺から距離を取るアテナの背後にいき、肩を掴む。

「ひい。」

震えてるな。大丈夫痛くないから。

「こ・・・・・・・・こわいです・・・・・・・・！！！！！！」

「アテナ・・・・・・・・・・はっはい！！」・・・・・・・・・・究極・掌握
「えっ！まっ！！いやああああ！！！！！！」

「神器兵装・アテナ。」

「「なんですかこれ・・・・・・・・ひどすぎます・・・・・・・・」」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

うむ、皆から下げずみの視線をもらったぞ？おかしいな。

「うむ、外道じゃの。」

「うるさい。それにだアテナどうだ？」

「うゝ嫌に決まって……………あれ？一つになれてむしろ気持ち良いかもしれません。全身あたたか

くていいきもちうにゅゝ”」

「な？」

「まあ、それでいいんじゃないかと……………まさか我にもできるとか……………」

なにいつてんだ。

「契約した奴以外できないぞ。」

「そうかなら我は安心……………って、契約してるじゃないか！」

あははは。

「さて、法皇テムオリン。我らはラスボス第二段階だと思え。」

「何をいって「簡単なことじゃ！我らがグラ　ゾンより強いそれだけじゃ！！」な！！！」

桜花の攻撃によりエターナル一人が消滅した。

「ならこっちも行くか。アテナはゆっくりしてる。」

「はいく〜うにゃにゃ〜」

さて、アテナの力を使うか。弓を取り出し言霊を吐く。

「これは矢にして矢にあらず。冥界の女王が放つ死への誘い。死そのものであるがゆえに何者も抗えず。」

矢を生み出し立て続けにエターナルを射抜いていく。背中にフクロウの羽をだし高速飛行しながら。

矢に貫かれたエターナルはなすすべもなく消滅してゆく。

「もしかして、我もあたれば死ぬ？」

「瞬間的にふっ飛ばせば大丈夫じゃないか？」

「当ててくれるよ！」

「なら、避ける！」

どンドン駆逐してゆく。桜花が前衛で俺が後衛ある意味理想的？

「ば……化け物どもめ！」

テムオリンの叫びがあるが無視して殺してゆく。そう、神剣すらも。桜花は手で砕いてるけど。

「ソードブレイク！」

「馬鹿な永遠神剣が……！」

などやっているると30分でけりがついた。

「ふむ、主だった連中は逃げたようじゃな。」

「まあ、いい。これでこの世界にいろいろが力を使えば結界が展開されるんだ。その時狩れば良いだろ。」

「そうじゃな。しかし、どうにかなるもんじゃな。我等生身でもな。」

「まあ、グラン　ンで消耗してたからな。」

それが無かったらきつかったな。桜花とか退避させ焼き払うぐらいしか選択しないしな。

「解放………帰るぞアテナ、桜花。」

「ふあ〜い〜」

「うむ。」

アテナを抱きクレーターだらけの結界を解除する。そうすれば元ど
おりになっている。そして、無事な神剣
を回収し帰宅した。

この二人は知らなかった。ここで追撃してテムオリンを殺していればよかったと。

桜花の一人旅(?)

桜花Side

1945年

第二次世界大戦が始まった。

そして、日本は負ける……私達が介入すればいいのだけどそれでは歴史が変わってしまうのじゃからな。

そして、我らはアメリカによる財閥解体からはずれるように交渉するため、行動している。

そう、太平洋上空を飛行中である……そう、飛行中である。

「ふむ、まかされたとはいえ面倒じゃな。」

む、前方から戦闘機が飛んできておるな。

「こ……こ……こちら 3……俺達は夢でもみてるのか？」

「3……報告は正確に！」

「こちら 3……信じられんが着物姿の女性が大日本帝国方面より空を飛んで接近中！」

「何を馬鹿なことを！」

「2より、本部へ……こちらも確認した……どうする？」

「1……こちらも確認した。集団幻覚じゃないかぎり事実だ。」

「上に確認します。」

「りょうか……本部へ突破された。本土へ接近中！どうする！」

「追え！直ちに援軍を送る！未確認物体をコールサイン魔女と認定。」

「

「了解追跡に入る！ 隊追跡を開始する！」

「「了解！」」

ふむ、追って来るか。少し遊んでやるかの。

「なっ！」

「ハローじゃ。」

我は戦闘機の上に乗るパイロットに挨拶する。無空術を使う我に空を縦横無尽に飛行できるため、戦闘機にのるなど朝飯前じゃ。

「どしする ー！」

「落ち着け！」

「すまぬが、このまま大統領府まで送ってくれんかの？」

「っ！本部、魔女の目的は大統領府だ！！！」

ふむ、やっぱり無理かの……お、前方からたくさん来たの……ついでじゃ潰しておくかの。アメリカ軍の力を見せてもらおうか！

「さてと、そろそろいくかの。」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

「おっと、危ないの。返してやるのじゃ！」

銃弾を全て素手で弾き返してやる。

「ば、ばかな！」

「化け物め！！大日本帝国にはこのような存在がいるのか！」

し沈めた。

「つと！」

沈み行く戦艦に砲撃が加えられてゆく！

それらを近くの瓦礫を広い迎撃する。

「指弾じゃ。」

「“完了です。”」

「うむ、では次か・・・・・・・・・・」

我は砲塔を叩き切り、戦艦二隻に投げつけた。

そのうちの一本に乗りタオパイパイと同じようにして行く。

「さて、次はあれじゃな。」

途中で飛び降り別の戦艦に乗り込む。後ろでは動力炉を貫かれた二隻の戦艦は機能停止した。

「ひい！」

「そう怖がるでない。といっても無理かの。」

床に手をつき動力炉に向かい気弾を叩き込む。

バン！！！！

「ほう、なかなかの勇気じゃが無駄じゃな。それでは、さらばじゃ」

そして、我は最後の航空母艦に突入し制圧に乗り出す。

「はっ！とっ！やー！」

瞬く間に制圧を完了し残すはブリッジのみとなった。

「こちらは全滅だ……………」

「馬鹿な……… たった一人に……… そんな
ことがあるはずが無い！」

「残念じゃが現実じゃな。」

そして、ブリッジのドアをふっ飛ばし中へと入ってゆく。

「おのれ魔女め！」

武器を向けてくるか………。

「やめておけ。」

「しかし！」

「我らの常識では測れぬ存在だ。」

「それが正解じゃな。では、私の言いつとおりにしてもらおうかの。」

これで楽しやな。

「わかった。」

「では、他の艦の連中を回収するのじゃな。」

「生きているのか？」

「うむ、全員いきとおるぞ。」

ウンディーネにそっちをお願いしていた。

「わかった。」

「その後は大統領府の近くに行ってもらおうかの。」

「了解した。」

「では、我は楽しませてもらうおつかの。」

司令席に座り周りを見渡す。良い顔はされては無いが……

「ポイントはこことここじゃ。」

ウンディーネが集めた船員達を連れた場所をいってやる。

それからしばらくして、救助活動が終わりアメリカに向かう。

席に座ったまま寝た。

「艦長いまなら……」

「やめておけ、対策も無くこんなところで寝るはず無かるつ。」

「はい。」

それから、一時間後目をさました。

「後どれくらい？」

「3時間ほどだ。」

「なら、飛んだほうが早いのだ。」

「……………」

さて、空を飛ぶかの

「では、ちがはじや。」

そして、航空母艦から飛び立った。

それから2時間後大統領と面会していた。大統領の後ろで重武装の兵士が銃を構えている。

「なんのようだ？」

「うむ、このままいけば遠からず大日本帝国は負けるのでな。」

「大日本帝国から手を引けと？」

嫌そうな顔しておるの。

「違つのじゃ、主らが勝つたら財閥解体など行つのだろ？」

「ああ、そのつもりだ。」

「我らの財閥に手を出さないと、大日本帝国の占領政策を任せてもらおうかの。」

「なに？」

今回の主目的はそれじゃ。

「もし、手を出すなら覚悟してもらおうことになるの。」

「手を出せば？」

「こやつでアメリカを滅ぼす。」

指を鳴らし、背後からMSが前回のグラゾンと同様の方法召喚される。

「いつ、これは―！」

「ジャパニーズ！！！！ガンダム！！！！！」

「実在したのかガンダムは！！！！！」

そう、これが聞きたかったのじゃ。わざわざこれだけの為にガンダム作ったんじゃないかな。

ちなみにすでにガンダムは日本で流れている。

「さて、どうするのじゃ？」

「くっ。」

「なに、大日本帝国を占領したら我らに任せてくれればよい。あと、貴様らが落とそうとしている原爆の場所も指定させてもらおうかの。」

「なぜそれを知っている。」

歴史が証明しておるしの。

「一ついうがもし断るなら。我らは大日本帝国とナチスに協力せざるおえないの。」

「それがどうだというのだ？」

「このガンダムやナチスと日本軍が一機所持している戦車と戦闘機を3000ほど与えてみようか。金色の戦車の実践記録は見てるで

あるっ？」

「あれは貴様らが作ったのか。」

「いかにも、我が面白半分で与えたものよ。」

与えてしまえば戦況は一気に変わる。

「いいだろうっ……………ただし、我らにも戦車をよこせ。」

そうだろうよ。

「それはダメじゃな。あれは回収するか破壊せよと命令されておる。」

さすがにオーバーテクノロジーすぎるからの。

「そうか……………なら、なにかないか？」

「そうじゃな。イージス艦の設計図じゃ。作れるかどうかはわから

んがな。」

「わかった。いいだろう。」

これで決まりじゃな。

「では、契約書をかいてもらおうかの。」

指をならし、ガンダムを帰す。

「わかった。」

原爆を放つ場所は既に逃がしてある場所だ。歴史と違い使者は少なくなるじゃろうがこればかりはどつしよつもないの。

その後、契約書を書き終えた。

「それでは、我は失礼するかの。」

「ああ。」

目を閉じ印を作り、瞬間移動（ドラゴンボール）を使う。

「ではさらばじゃー！」

我は本社にいるシオンの元へともどった。なぜ最初からそれ使わなかったかというと、この移動方法は対象の気を感じないといけないからだ。なんとなく説明してみた。

「おかえり、どうだった？」

「ばっちり貰ってきたのじゃ。日付も指定したしこれで安心じゃ。」

「Ok。あとは任せて。」

書類を確認したシオンに我はきりだす。

「少し旅に出る。今度落ちる原爆で死んだことにしておくね。」

「どこにいくんだ？」

「魔法世界で闘技場やいろいろ遊んでみようと思つての。ほう、いいだろう。」

「わかつた・・・・・・・・・・土産期待してる。」

土産かゝどれがいいかの。

そして、我は原爆で死んだことと成つた。

時は流れ1963年我は怪盗夜桜として元老院や帝国の悪い奴らから盗みまくつた。

それと平行して闘技大会のタイトルを桜花として総なめした。

さて・・・・・・・・・・進入完了・・・・・・・・本人確認の魔法防壁
か無駄な事を・・・・・・・・千変万化して解除・・・・・・・・お宝
をいただいでいく。

「そこまでだ怪盗夜桜!!!!!!」

またこやつかの。

「お宝スターサファイアはたしかに頂戴いたした!それでは御免!」

床に煙幕を張り逃げる。

「追え!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「やっぱり、予告状を出して盗むのは快感じゃな。」

ちなみに今は着物に皮ジャンをつけて頭に狐の仮面を横向けでかけ
てるだけの格好じゃ。そのままが大丈夫なのかって?大丈夫じゃ、
認識障害も働いておるし、我の変装技術は超有名じゃ。わざわざ敵
の前で姿を変えたりして遊んでおるしの。狐の仮面だけが見分け方
じゃな。

「撃て！……！」

しかし、魔法がうざいの〜

「指弾じゃ。」

魔法を迎撃してとつと逃げる。

それから、しばらくしてある民家にはいりスターサファイアと不正の証を置いて民家を去る。

「さて、次の町へいこうかの。」

一週間後。

どつちら、ここは闘技場があるのか楽しみじゃ……………。

「なんじゃとー!」

「すいませんが、お客様が参加することはできません。奴隷を戦わせる試合なので。」

どうする？我が奴隷になるか？だめだ、そんなことしたらシオンに殺される………。だめか、どっちにしろ怒られるの………。

「貴方も奴隷を買えばよろしいのでは？」

「ふむ、まあ見てみるかの。案内いたせ。」

「はい、こちらです。」

連れて行かれたところは牢屋だった。

「ご自身でお持ちになるかここに預けになるかですね。この中が買い手もない商品になります。」

「そっか。」

「おすすめは……………」

「よい。自分で探す。」

気を蛇のようにして放ち中にいる奴隷を調べる。

む、一箇所反応が無いの……………いってみるかの。

そして、牢の前まで中に行くと少年が警戒した表情でこちらを見ていた。

「お主先ほど我の蛇を殺しおったな。」

「それがどうした!」

ふむ、気はたくさんあるようじゃ……………我と同じタイプか……………面白い。

「いっつを賣じいぐらひじゃ。」

「はい、4500\$です。」

「安いので、5000\$で買い取ろう。」

我は色をつけて渡してやった。

そして、次の日奴隷の少年を受け取り。

近くの森へとむかった。

「おい、こんなところに連れてきてなにするんだ？まさかあんたの相手でもしろっていつのか？」

「お主ごときじゃ私の相手は役不足じゃな。」

「なんだと！！！」

「それとっておく、我にそのようなことを言ったりしたりしてみろ……殺すぞ。」

殺気を全快にしてたたきつけた。

「っ！わ……わかった。」

耐えたか。まったく考えただけでも虫唾が走るといっものじゃ。

「さて、ここに連れてきた理由は小僧お前を鍛えることじゃ。我が目的は一つ。あそこのタイトルを取ることにじゃ。ゆえにお前には私の代わりに闘技大会にでてもらう。」

「おれじゃ悔しいが勝てないぞ？」

「ゆえに、我が小僧を鍛えてやる。」

今のままでは勝てぬことなど分かりきっておるしの。

「わかった。だが一つ条件がある。」

ほう、なんじゃ？

激痛がはしりまくるがの。

「耐え抜けばようやく基礎の基礎が完成じゃ。死ぬ出ないぞジャックよ。」

それから、一週間で達様子を見に来た。食料は置いておいたから死んでなければ生きてるじゃろ。

そして、ジャックが寝ていた。

「起きるのじゃ。」

蹴り上げて起こした。

「いてえ、何しやがる！！」

「どつちやら耐えたようじゃの。」

「ああ、よくもやってくれたな！……！」

殴りかかってきたジャックをクロスカウンターで10mほどぶっ飛ばしてやった。

「では、これから基礎訓練じゃな。」

我は勝って来た。強化ギブスをジャックにつけ重力制御装置を取り付ける。コントローラーはもちろん我の手じゃ。

「なんだこれは？」

「うむ、こうするための機械じゃ。」

そして重力を5倍に設定した。

「お・・・おめえ！！！！！」

「その状態で、今からあの山でサバイバルじゃ。」

地面にへばりついてるジャックを持ち上げサバイバル道具の入ったバックを担がせ、山に向かって投げる。

「おやすみ・・・・・・・・千変万化・・・・・・・・」

研究員ひとりを目倒させ、隠し姿を真似る。

そして、進入する。

「おはようございます。」

「おはよう。」

声紋、指紋などの認証をクリアした。

「さて、目的の品とエターナルはどこにいるかの？」

む、あれは幹部の証じゃな。ちよつどいい。

「すみません、ご報告したいことがございます。」

「なんだ？」

「1111ではちょっと……内部に裏切り者けんで。」

「わかった。」

かかったの。

そして、我は個室に連れ込みO H A N A S H I Iして情報を聞き出しロッカーに閉じ込めた。

「次はこやつ姿じゃな。」

幹部になりすまし、情報どおり奥へと進んでゆく。

30分すすむと……これはエターナルの尖兵のEミニオンか？この世界で直接つくるとは大胆じゃな。

さらに、奥に進み研究員を潰して資料を処分……このEミニオン……いただくかの。(にやり

処分をやめ、シオンの元へ四次元ポケット(これは早々に皆で作っ

た)に仕舞う。

「何をしてるんだ、てめえは！」

「これはこれは……………黒き刃のタキオス殿ではないですか。」

結構大物がいるの。しかし、力を使わぬとはさすがじゃ。

「なぜ俺の名を……………あいつらの仲間か。」

「ならどうするんじゃ？」

「決まっているところで潰す！」

それと同時に絶界が発動した。

「そのいきやよし。我が名は桜花存分に参られい！」

「いくぞ……………！」

拳と黒き刃がぶつかり合い鏝迫り合いになるが。

「温いの！」

「がつ！馬鹿力が！！！！！」

その後、数十合打ち合い続けた。

「さすがタキオスなかなかやるではないか！」

「舐めやがって！！！！！」

くくく、楽しいのうー！！

「行くぞ！三段掌！連打掌！！猛龍拳！！！！！」

「くそが！」

三連撃技のあと四連撃をきめ、猛龍拳で強力な一撃をきめる。

「これでとどめじゃ！阿修羅霸王拳！！！！！」

膨大な気を練り上げ一撃に注ぎ込む。

「ぐふぁ！！！！！」

「まだ、生きておるか。やりおるの。」

原作では魔力全消費じゃが我のは調整がきく。

「くそ！！！」

「む！」

閃光弾か………逃げられたか。絶界の弱点は世界を
抜けられるとどうしようもないんじゃない。あくまで限定的じゃしな。

「まあ、よういこを潰すかの。」

我は空中に移動して・・・・・・・・・・両手を剣を握るように構える。

「できるかわからんがの！」

膨大な気を圧縮して巨大な光の剣を作る。

「クラウド・ソラス！」

施設を地下もろとも消し飛ばすことに成功した。

「さて、これで問題は無いの・・・・・・・・しかし、魔拳ビック
バンのほうがよかったかもしれない。無理じゃな。」

地下の深いところまで届かぬかも知れぬしな。

こうして、私の賞金額はまた跳ね上がったのじゃった。

怪盗夜桜・・・・・・・・懸賞金800万\$・・・・・・・・変装術、
気の使い手。

さて、ジャックは生きておるかの？

一週間ほどたっている。

「ふむ、適応しておるな。」

ジャックは魔獣を蹴散らしたり飼いならしたようじゃな。

「あんたか。」

「では、段階を上げるとするかの。」

我はいつきに重力20倍まで上げてやった。

「が……！……！……！……！……！」

「気を全身に纏わねば潰れるのじゃ。」

めり込んでるジャックに忠告してやる。

「覚えていやがれ!!!!」

「嫌じゃの。我のものをどうしようが我の勝ってじゃるっくやしければ奴隷から解放されるまでがんばるといいんじゃよ。」

「くそ!」

食料はここにおいといてやるのじゃ。さて、ミニオンとどけこいのかの。

「くーおいで。」

我の近くに小さなドラゴンがでてくる。次元竜のクーじゃ。この子を使いシオンの元へと帰った。

久しぶりの研究室でEミネオンが入ったケースと研究データを渡す。

「これは、また……………」

「面白い実験材料じゃろ？」

「たしかにな。では、弄りまくるか。」

「うむ。アテナも呼んで遊ぶぞ。」

「ああ。」

こうして「ミネオンのかい……………進化をさせる。」

ダイジェスト

「SEED植えましょう。」

「OK。」

「気と魔力のコントロール………そうじゃ、エブレインを埋め込もう。」

「なら、オリハルコンもいれて精神ネットワークも作るか。」

「学習装置、フィードバック機能もですね。」

「桜花の細胞突っ込もう。」

「再生能力便利ですね。」

「私の細胞は保管してあるのか？」

「ちゃんとしてあります。」

「ならいいかの………後は………武
器はどうする？」

「それなんだが体内に神剣うめこむというか、神剣と同じ存在に
してみようか。」

「人型神剣ですか、自立活動可能な………あきらかにし
ミニオンじゃありませんね。」

「うむ、ルナティックミニオンでいいんじゃないかの？」

「じゃ、吸血鬼の細胞もいれとこ。夜は身体能力アップ………
………しかし、なんで女性型しかないんだ？」

「仕様ですね。」

「仕様ならしかたないかの()。」「」

「そこまでじゃー！」

そして、襲撃者……ジャックとミニオン二人は止まった。

「ち。」

「はい。」

「どつちら、ちゃんと動けるよつじやの。」

「あたりまえだ！で、そいつらは？」

紹介しておくかの。

「こやつらはミニオン……人形じゃな。」

「人形？」

「といつても生きておるし、感情もある。まだ芽生えてないがの。まあ、簡単じゃこれからお主はこの二人と生活を共にしてもらう。」

「なっ！」

ふふふ、驚いておるの。

「毎朝9時より夜の8時まで三人で争い合え。それ以外は好きにいたせ。範囲はこの山の中。そして、毎朝ごとに重力はどんどん重くなってゆくからの。」

「おい、女と一緒に……」

「ああ、襲いたいなら襲うといいぞ？生殖機能もちゃんとあるしの。ただ子はできんがの。」

さすがにそれはつけてないの。

「いいのかよ。」

「ただし、反抗はするぞ？こやつらは自分より弱いものには従わぬようになつてるのでな。やるなら無理やりか倒して従わすのじゃな。」

「

「おいおい。」

まあ、当然じゃな。何かを得るために努力するが良い。

「それに、従わせたら自分の好きなように調教できるぞ？」

「それはいいな！」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」

ジャックを汚いものでも見る眼をして見つめてやる。

「そんな目で俺をみるな！！！！！！」

「さて、我は忙しいのであとはまかせた。」

「「はい。」」

「とつとといけ。」

「ふむ、では半年ほどいなくなるので達者で暮らせ。ルルとナナは買出しや食事の世話もしてくれるからいたれりつくせりじゃぞ。」

我は三人をおいて、世界各地からお宝とお金を盗み貧民層にばらまきつづけた。

たまに、トラップしかけてお宝隠したりしたけどの。

半年後、戻ってみると・・・・・・・・・・山の地形が変わっていた。

「ふむ、随分やったようじゃの。」

「ああ。」

ジャックの足を枕にしているルルとナナがいた。

「まあ、よいがの。さて、これから一ヶ月我が直接鍛えてやる。死を覚悟せよ。」

そして、はじめた。特訓でなんとか生き残った三人を闘技場に叩き込むと………相手にならなかったの………敵が弱すぎて。

その後、我がやったように三人で各地を旅させて稼がせたら、ジャックの奴………最大の闘技大会で優勝して我に優勝賞金一千万\$渡してきおった。

「残りの金でこの二人くれ。」

「ふむ、二人がそれで良いならかまわんぞ。」

「かまわない。」

「かまいません。」

なら決定じゃな。

「修行は愈らぬように。そやつらは、寿命が短いので気をつけるん
じゃぞ。」

「そうなのか？」

「試作段階での。あと17年くらいかの。」

それぐらいが限界じゃの。

「わかった、それでいい。じゃあな。」

「うむ。元気でな。」

ジャック達と別れてから、シオンに連絡したところにも問題ない

らしい。むしろ、データ集まっていらいらいからよかったの。

それから、しばらくは怪盗業+エターナル潰しに専念し、1975年にそろそろ帰って来いと言われたのでお土産を得るためにかい仕事に入る。

そう、メガロメセンブリアに予告状を送りつけたのじゃ!!

—————最高峰の封印されし禁忌の魔道書をいただきにまいります……………夜桜—————
———

とっつ感じでの。

「さあ、始めよう。show,time!」

夜空から鳥になり屋上から進入してゆく。

「じじいじゃな。」

気を蛇のようにして各方面に伸ばして調べてゆき、隠し通路を見つけ進入する。

「ふむ、魔術の探査か……………」

そのまますすむ。

「元老議員……………No.4と認定。通行を許可します。」

クリア。次は……………

どんどんクリアしてゆく。

「ちい、トラップか。」

罠を通り抜け進んでゆく。議員の姿や顔は知っていてもあってもないしの。

「ふう、やっとついたの………目的の品は………ないじゃと?」

持ち出された?嫌違っ………ほかになにか………
………む、空気の流れがあるの。

「ここかの。」

叩き壊し中に入る。警報装置は壊した。

「これは圧巻じゃな。」

目の前には巨大な本棚に納められた禁呪や禁術がたくさんある。

「ふ、吸い込め。」

我は吸引機をだしどんどん吸い込んでゆく。

「そこまでだ!……!」

「やふお、警察、軍のみなさん。」

「残念じゃったな。たったいま、全ての書籍をいただいた……
……まだ一冊地下にあるか……」

「なら、我らの勝ちだ！ここでは魔法や気はつかえん！」

ふむ、そうか。

「なら、単純な力技でいかせてもらうかの……！」

おもいつきり床を殴り崩壊させる。

「化け物め……！」

「うむ、やはり腕が壊れたが問題ないの。」

落下と同時に邪魔な物を壊し加速してゆく……
……最下層に鎖で雁字搦めにされた魔道書があった。

「これがほしかったんじゃ。」

鎖を引きちぎり、固有結界について書かれた魔道書を回収する。

「だが、逃げ場はないぞ。怪盗よ！！！」

上もすべて封鎖されておるの。

「では、正面突破とさせていただけようか。」

「その馬鹿力だけでどうにかできると思っているのか！」

「できるの！」

瓦礫を砕き砂塵をおこし、支柱を一本とり上に投げる。そして、それに飛び乗る。

「さらばじ……あぐ！」

天井に頭をぶつけてしまった。

「追え！！！」

屋上までにげた我を取り囲む兵士たち……………。

「プレゼントじゃ……………！！」

塔を二つに叩き割ってやった。

「きゃああああああああ……………！！」

「うわああああああ……………！！」

「では、諸君さうばいじゃ。」

フェニックスに変わり飛び立ってゆく。

「くそ、艦隊はにしておる！」

「ダメですどんどん落とされてゆきます……………！！」

「くそが！……！！……！！……！！」

ふはははははは。 我の勝利じゃ！！……！！

そして、我はレン達にお土産の本を渡し旅を終えた。

追記：懸賞金3000万\$となったのじゃ……………
こかの海賊とおなじじゃな。

桜花 Side Out

桜花の一人旅(?) (後書き)

ラカン強化完了
神剣は今度です

ナギはとんでもない物を賣っていきました。(前書き)

今回はちびっこナギが登場です。

ナギはとんでもない物を賣っていきました。

1975年・・・・・・・・・・・・・・・・まほら武道大会を開催した。
そ

れも盛大にね。

そのときゼクトとあった。

「こんばんは、同類。」

「こんばんはじゃな、同類。」

やっぱり2000年越えは強いな。

「どっするっ、戦っっ。」

「やめておっつかの。お主に勝てる気はしないのでな。」

でも、一応戦いたい。

「OK。じゃあ、試合ならいいんじゃないか？」

「ふむ、よかるう。」

その後、戦いゼクトと友達になり大いに騒いだ。優勝賞金でね。

それから、三年間・・・・・・・・俺は、国を三つほど潰してきた

。裏でエターナルと繋がっていたからな。テムオリンめ、めんどくさい

事しやがって。

1978年・・・・・・・・まほら武道会。

「では、これよりまほら武道会を行う。優勝賞金は一千万だ。諸君の奮

闘に期待する。約一名は手加減しろ。以上だ。」

今年は粒ぞろいか……昔作ったこの永遠神剣第4位緋那・

……ええ、魔剣ですよ？そうナルです。ただ、ナル化は封印

してある。これだけかにもいいかな？だめですね。

「さて、では予選を頑張ってくれ。」

桜花が気と回復能力、身体能力に封印をほどこして一般人よりちよつと

強い程度で参加している。

「ではゆくぞー！」

「きやがれー！」

威勢がいいな〜一人知り合いだけど。

それから、予選は予想どおりになり、決勝戦まで進み。なんと桜花が負

けたぞ。

「優勝はナギ・スプリングフィールド！おめでとう！」

「おう！」

そして、優勝賞金を渡してやった。

「では、各自解散。」

「おい小僧。」

「なんだ餓鬼？」

もう一度勝負とかいうきか？

「もう一度やりあわんか？」

「俺が勝つに決まってるんだろ？」

「枷が合ったからの。」

「なんだと？」

まあ、かなり押さえてるし………だけど。

「俺が相手をしよう。そっちの小僧のな。」

「お前なんかに負けるわけないぞ！」

「おいこら、私の相手は………」

ふむ、こいつ戦いたいだけか。

「なら、後で相手してやる全力でな。」

「ならよし。」

さて、いくか。

「ナギいくぞ。」

「へ、きな！」

さて、ゆくか。

「お前からこい。呪文を使っても良いぞ。」

「へ、覚悟しやがれ！」

「無理じゃろつな。」

「おまえら！」

その後、ナギをぼこぼこにしてやったんよ。

「つ……………つえええ……………」

「ちなみに今のは全然力使ってないぞ。桜花も9割以上封印してたしな」

「。」

「嘘だろ……………」

本当です。

「さて、帰るか。」

「うむ。」

「まで!」

「なんだ?」

早く帰って飯くいたいんだが。

「俺を弟子にしてくれ!」

さて、どうするよ俺？

「ん〜しかし、俺真祖だぞ？」

「関係ない、強く慣れるなら！」

ならいいか、ラカン鍛えたみたいだし。

「いいだろう。ただし、一度でしになれば生きるか死ぬかだぞ？」

「あははは、冗談だよな？」

「まじ」

さあ、どうする？

「.....」

「悪魔と契約するよつなものだぞ？」

「わかった………それでもいい！」

「決定だな。じゃあ、テストするから明日数ヶ月帰らない準備して
こい」

「こい。」

家の場所を教えてやる。

「わかった。」

「テストは明日中に家にたどり着けば良いから。」

「そんなの楽勝だな！」

くくく、だといいな。

「威勢が良いことじゃ。」

「では頑張れ。」

「ああ、期待しておるのだな。」

「ああ、まかせておけ！」

さて、どうなるかな。

「……」

「ぎりぎりじゃな。」

「明日はレンとリリ連れて遊びに行くから留守番はマーテルにまかして」

おくか。」

「じゃな。」

こうして、ナギの試験をまってる間に遊びにいくから帰ったらどうなっ

てるかお楽しみ。

麻帆良学園の一部に作った遊園地のオープニングセレモニーに参加して

きた。

「すごかったな。」

「無駄にオーバーテクノロジーを使ってるし。」

そら、重力装置やヴァーチャルリアリティシステムなど遊びまくったか

らな。

「……………みんながんばってた。」

「こわかった……………」

レンとリリがいつてるのは、お化け屋敷のエリアだな。一エリアをその

ままお化け屋敷にしてみた。買い物とかもできる。そして、なににより従

業員が本物の妖怪だ。そら怖いよな。

「まあ、皆楽しそうでよかったよ。」

「そうだな。」

「それにお楽しみはこれからじゃな。」

さて、ナギはどうなったかな？

家に着くとナギがボロ雑巾となっていた。

「おついたか。」

他の者達を部屋に戻らせ、ナギをみる。

「なんだあのトラップだらけは！」

「試験って言ったろうが。」

「う……たしかに、それより弟子入りの件はいいんだよね？」

ま、合格だし良いか。

「なら、こい。本格的な訓練の前に基礎作りだ。」

「い……いまからか？」

「別荘を使う。あと、反論はゆるさん。」

「わ……わかった。」

そつだ、呼び名もかえないとな。

「これから、マスターと呼べ。貴様を最強クラスにしてやる。」

「わ……わかつたマスター。」

そして、別荘に行き重力仕様の養成ギブス（だんだん重力があがって
てい

く）と一個の指輪を渡した。

「これなんなんだ？」

「ギブスはだんだんと重力が掛かっていく、指輪はお前の魔力に徹
底的

な負荷をかけて成長させてくれる。」

「気……きついでこれ……！」

そらな、そのためだからな。

「まあ、ここで生き延びろ。ほら、食料は置いておく。必要なものがあ

ればあそこで買え。そして、妖怪もいるけど殺すな。喧嘩はかまわんが

な。では、がんばれ。」

「わかった。」

そして、ナギを置いて俺はレン達の所に戻った。

それから、現実で一週間がたった。

そして、朝目覚めるとなんだこれ？

「レ、リリなにしてるんだ？」

「……………ちゅ……………ぺろ……………れるろ……………」

「……………エヴァちゃんたちだけずるい……………」

おい、兄弟だぞ？そしてリリは娘だぞ？

「リリもパパが好きだし……………れんちゃんがやるならやる……………」

「……………ちゅ……………」

「お前ら……………100歩譲っていいとして、年齢考えろ！！」

「……………100しゃいいじょうだよ？」

ですよね？あれ？ならいいのか？

「……………れるろ……………」

「うん……はむはむ……」

「ならいか……」

「いいわけあるか……!」

「ぐはあ……!」

エヴァの飛び蹴りが顔に……ガードの上から吹っ飛ばされ

た。

「まったくお前達もだ!」

「ずるい。」

「うん。」

・ 「う……しかしだな、いくらなんでも近親相姦は……」

「・・・」

あれ、あれって・・・やば！

「エヴァ逃げるー!!」

「・・・創世・・・」

「・・・冥皇・・・龍神・・・」

「え？」

レンの創世はともかく・・・なんで、リリは封印しておいた二

本の永遠神剣もってるんだ？え？管理はどうしてたかって？レンの別荘

にある倉庫にしまってるだけです。管理不十分だな。

「姉さんすいやせん。」

「ちゅ、ちゅめー！ちゅめろ〜〜〜！〜〜〜！〜〜〜！」

「……………じゃまもの……………はーじゅー

……………かんりょう……………」

「……………つづき……………」

お〜一瞬でエヴァを簞巻きにしたな。

「おい、なにしてるんじゃ？」

「……………(ジーーーーー)……………」

桜花は辺りを見回し……………扉をしめた。

「まて！助ける！〜！」

「すまん、エヴァよ。私の本能が止めておけと警告してあるのじゃ。そ

して、なによりそっちの方が面白いの……レン、リリヤ
るな

らちゃんと服脱いでよさめよつにするんじゃないぞ。さて、酒でもと
って

くるかの。」

「ちょー！」

「さすが桜花……面白そうって理由で十分なのか。」

「……わかった……」

「……うん……」

脱ぎだす二人。

「あと、しばらくは入れるのはやめておくんじゃない。さすがに、体
が出

来ておらぬし、それ以外ならよからうて。」

「……………」

こうなれば仕方ないか。

「本当にレンとリリがいいならいいぞ。」

「……………」

二人を可愛がってやった。

しばらくして、二人を満足させたら文句が飛んできた。

「おわたかの……………」

「ふん、娘にまで手をだしおって……………」

「……………」

「それを肴にして飲んでるのはどうなんだ？」

「うるさい……飲まなくてはやってられん！」

すでに数十本の瓶がある。

「まあ、いいではないか。ほら飲め。」

「俺も飲むか。」

両膝に二人の頭を乗せて寝させてやり、酒を飲む。

「まったくおまえときたら……」

「あはは、面白いの。ちゃんと責任をとるんじゃないぞ？」

「はいはい、わかってるよ。」

しかし、いつかレンはくると思っただけだな。

「うむ、幸せにしなければ分かっておるな？」

「わかってるよ、お前達もだけどな。一緒に進んでいくんだからな。」

「

「ふん。」

「それでこそじゃな。」

さて、今日は飲んでゆくか。

「そういえば一週間じゃが弟子はいいのか？」

あ、今日だったか。やば、忘れていた。

さて、あれから二人をちゃんと寝かせてから、別荘にやってきた。

「ナギ無事か？」

「あたりまえだろ！！最初はつらかったけどな。」

「そうか……じゃ、次の段階に入るぞ。」

「ああ。」

「まずは、お前は呪文どれだけ使える？」

「ぜんぜんだぜ！自慢じゃないが魔法学校中退だぜ。」

「そつだな……じゃあ、無理やり植えつけるか。」

予想通りだな。

「む……無理やり……」

「ああ、いくぞー！」

「があああああああ！！！！！！！」

知識を植えつけてやった。

「貴様に千の呪文を植え付けた。」

「死ぬうううううう。」

「身体だけは丈夫だろ。耐える。」

まあ、脳だろうが。

「関係ないだろうがあああああああ！！！！！！！！」

「まあ、耐える。がんばれ。」

「おぼえてやがれええええええええええ！！！！！！！！」

で紅 忘れた。切り株に座り音楽を聴きながら修行メニューを作り、片手

茶を飲む。

それからしばらくして、ナギが止まった。

「おい、生きてるか？」

「……………(つつん」

レンが遊びに入ってきて、つつんしてる。

「いきてるから、やめやがね〜〜〜!!!!」

「ひっ」

「おい、うちの子泣かすなよ?」

本気で殺気こめてみた。

「わっ、わかった。わるかったから泣くな?な?」

「……………(じく)」

「さて、身体はできてるから次は植えつけた魔法をある程度覚えろ。
修

行はこの子がつけてくれる。」

「こんな嬢ちゃんがか?」

ふむ、うさんくさげな目をしてるな。

「この子は魔法に関しては俺よりすごいぞ。」

「嘘だろ?」

「……………ほんと……………せんのかげちとかならむ
えい

しょう。」

まじだ。

「しょう」「……………もえるてんくう。」

ほんとに、空の色がかわった。

「嘘だろ……………」

「現実だね。」

「……………（くくく）」

「わかった、教えてくれ。」

「……………うん。まず教えられた魔法を一通り使っ

てみ

て。」

「ああ。」

その後、一通り使ってみたみたいだ。俺はその場から離れてリリに

H A N A S H I に行った。

ナギSide

シオンSideOut

魔法の修行を始めてから一週間がたった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・できたのは・・・・・・・・・・・・・・・・風系
だけ

？」

「ああ・・・・・・・・すまん。」

定着された魔法知識だが風以外はろくに定着しなかった。

「まあ、いいの……風系を鍛えるだけ。」

「ああ。」

「なら、場所移動する。」

ちびっこ師匠につれられて、風が吹き荒れる谷にやって来た。

「なんのよう？」

ちっこい子が空に浮かんでいた。

「しゅぎょじゅ。」

「そうなんだ〜じゅじゅにつかっていいよ〜」

「ここは、せいでいがたくさんいるから……かぜをつかう」

「ならここがいい。」

たしかにそこらじゅうに精霊がいるな。

「じゃあ、ここで生活する。」

「わかった。」

「魔獣もいっぱいいるから気をつけてね。」

たしかに、気配があるな。そして少女は消えた。

「じゃあ、がんばって生活するの。」

「ああ。わかった。」

「くれぐれも精霊たちとはなかよくするよつに……」

そういつてちびっこ師匠は消えた。

「さて、どうすっかな。まずは寝床と食料確保だな。」

こうして俺はまず食料の確保に向かった。

それから一週間で、この生活もなんとかできるようになった。

「お〜がんばってるね〜」

「シルフか……………」

「なんのようだ?」

「しゅぎょしつけたげる〜」

嫌な予感がするんだが………？

「よし、うけてやる！」

「おー あそぶのー」

やばい、魔法の射手がどんどん飛んでくる。

「おいおい、これが遊びかよー!!」

その後、数時間によるシルフの攻撃が行われた。

「たのしかったー」

「そ……そうか、疲れた。」

「じゃあ、またねー」

ふう、これで終わりだな。

「ご飯にするか。」

とても辛いけど、簡単な炎の魔法で魚を焼き食べた。

そして、夜に襲撃を受けた。

「なんだー!!」

風切り音と共に攻撃が襲ってきた。

「くそ！雷の暴風！！！！！」

「せんのいかづちー！！！」

「ちい、この威力かよ！」

雷の暴風と千の雷、やはり打ち負けるか！

「魔法の射手300矢！」

「サギタ・マギカ600や〜!」

「くそ、やっぱり力の差がありすぎるか!百重千重と(ヘカトンタキス

・カイ) 重なりて(キーリアキス・) 走れよ稲妻(アストラプサトー

(千の雷!〜!」
キーリブル・アストラペー

「イングラシルの恩寵を以って来れ貫くもの轟き渡る(グング)雷の

ナール
神槍!〜!」

どこまで化物なんだよ!〜!

その後も、何日も同じような戦いを繰り返した。さすが大精霊だな。

昼間はちびっこ師匠とマスターから魔法と体術を教えられ昼や夜などは

シルフと戦う生活だ。

それから一年間戦いようやくシルフにまともなダメージを与えられた。

「……………つぎ……………それはずして戦う。」

「ギブスを外すんだな。」

ギブスを外すととんでもなく身体が軽い。

「うお！すげ〜」

「リミット……………解除……………」

指輪から制限がとかれたようだ。

「それでシルフと戦ってみる。まあ、たぶん無理だろうが……………
・
…勝ったら良いことがあるぞ。」

「無理、無謀、無茶するのは俺の辞書になくてな！逆にそういわれると」

やる気が出てくるぜー!ー!」

さあ、いくぜー!ー!」

その後、辺りを焦土とかしつつ風の大精霊・

．．．いや、風の精霊王と戦う。

「喰らいやがれ!雷の暴風!」

「甘い〜サギタ・マギカ2000や〜」

うち、暴風をサギタ・マギカで対抗とか馬鹿だろ。

「おらおらおら!ー!ー!ー!」

「せっきんせんは〜にがて〜なんて〜」

くそ、まじ強えええ。

「雷の暴風・圧縮！」

掌に雷の暴風を球状に圧縮して威力を増大させる。

「それはまずいの〜」

「いくぞ！」

「いや〜！」

絶対あててやる！

シルフから放たれる風の刃や雷の嵐をどうにか避け、接近する

「くらえ！」

「いやだ〜！えい！」

目の前でいきなり千の雷と千の疾風が発動された。

「つち、避けられないことはないが………避けたら逃げら

れる………ならば！

「ちょー！」

「右腕くらいくれてやらあ……！食らいやがれ！嵐雷・螺旋撃……！」

「しゅぎゅしゅしゅ……！」

「身体の一部吹き飛んだが………まだだな！」

「これでと留めだ！千の雷・圧縮！千衝雷・螺旋撃……！」

「まけないもんくらえ！雷神の槌……！」

「お互いの攻撃が同時に辺り俺たちは吹き飛ばされた。」

「はあはあ、どうだこのやろ……！」

なんとか立ち上がったが……立ち眩みもしてきた。

「く……もうだめ〜」

シルフは身体のほとんどが消し飛んでいた。

「俺の勝ちだ!!!!!!!!!!!!!!」

「あ〜やりすぎだ、おまえら……」

「……………訓練なのに……………」

「……………ばか？」

くっ、そついや訓練だったな。すっかり忘れてたぜ。

「勝ったからいいじゃねえかよ。」

「「相打ちみたいなもの。」」

しかし、巨大なクレーターができてやがる。

「ほれ、シルフ。」

「創世………ナギの腕を再構築。」

「あいあいさゝしかしよくがんばったぜ！お前は最強クラスの仲間入り

だぞ！！！」

まじか、それは嬉しいな。

「腕ありがとうな。」

「代金は一千万\$でいいぜ。」

「金取るのかよ！しかも高すぎだ！」

「けけけ………や、じょうだっ！やめ！ゆるして！焼いても

美味

しくないって、あつ、あつい〜〜」

あはは、うさぎのぬいぐるみが炎に炙られてるぞ。だいじょうぶかよ？

「なき〜」

「お、シルフもう大丈夫なのか？」

「うん〜ナギにプレゼントあげる〜」

「なんだ？」

何くれんだ？10歳の俺はもらえるもんもらっただろ？

「いれあげる〜」

「…！…ちゅ…ちゅ…」

聖痕だと？

「わたしのちから……すべてのかぜのせいれいがあな

たにしたがう……」

「まじか！俺最強じゃね？」

「調子乗るな。お前の脳がもたないし……そもそも、俺ら

はシルフより強いぞ。」

だよな。そうじゃなきゃこいつらが従うわけないしな。

「まあ、これでお前は合格だ。本物でも……エターナル上位以

外には負けないだろ。」

「エターナルってマスター達よりは弱いけどかなり強い連中なんだ

よな

「？」

「ああ。まあ、連中が出たらすぐ分かるから俺たちで処理する。お前は

出会っても耐えてろ。」

「了解。」

さて、これからどうすっかな………服の袖をく

いくい引っ張られた。

「………次の………修行………

………」

「まだやんの！」

「ああ、ゼクトのそこって多人数戦や色々学んで来い。今のお前

はた

だ大型エンジンを搭載した新車を初心者が運転してるのと変わらん。

「

たしかに………いままで、ほとんどシルフとしか戦って
ない

しな。

「わかった、いってくる。」

「場所はここだ。」

地図と紹介状を受け取る。

「いってらっしゃい。」

「おう、世話になったな。また合おうぜ……!」

「ああ」

「うん」

「またね〜」

こうして、俺の風の精霊王シルフの契約者コントラクターとなり――

時修行は終わった。

ギブスと指輪を再発動させて次の目的地、魔法世界にいるゼクトつて奴

の元へとむかった。

ナギSideOut

・そういえば、手元にこんなのがあったの。くくく。」

『ルル、ナナ聞こえるかの？』

『桜花様どうしました？』

ルルがでたか………一人でも十分じゃな。

『ジャックに養成ギブスを送ったので付けさせるのじゃ。おぬしらがジ

ヤックを鍛えるんじゃないぞ？このままでは奴が死ぬでな。』

『ジャック様が………わかりました。もう、とどきまし

たね。ナナとお楽しみ中ですが………かまいませんね。』

『うむ。では、頼むの。』

たね、これだよじじや。

財閥の仕事の休憩時間になった。

もう着けた頃じゃろうな。

『ルルつけたか？』

『はい、お付けいたしました。』

『では、訓練を開始するかの。主らもがんばるようにな。』

『はい！』

そして、我は徐に………手元にあるリモコンのダイヤルを

1から30に変えた。

さあ、ジャックよ耐えるんじゃぞ？

くくく、こやつは100まであるからの………ふはは

はは

ははは！！！！

っと仕事仕事。

ジャックの悲鳴が聞こえた気がするが気のせいじゃな。

桜花 Side Out

法王テムオリン Side

さて、ここですね。彼らの本拠地は……私は宮殿を進みます

。

「動くな、ここになんの様だ。」

白髪に仮面をつけた者……その他、大勢ですわね。

前の二人は永遠神剣をもってますのね。

「始めまして皆様方……我が名は法王テムオリンと申します。」

以後お見知りおきを完全なる世界の皆様方。

「スモエンテレケイア

「

「「っ!」「」

警戒されておりますわね。

「「「言うておくが我らに貴殿らと戦う意思はない。」」

何人がびっくりしましたね。

「こちらは私の永遠神剣秩序です。始まりの魔法使いさんにお話が合っ

てまいりましたの。お取次ぎ願いますか？」

「ふざけるな!」

「やめておいたほうが身のためですわよ？ 私達エターナルとまとものに戦

えるのはそこのお二人だけですから。それに、わたくしたちと戦うと怖

い人たちが、忌々しいことにすぐに駆けつけて来ますの。」

長身のローブ姿の男で顔を仮面で隠しているものが仲間を抑えた。

「なるほど、貴様の言うとおりだな。しかし、いきなり来たものを造物

主様に繋ぐわけにはいかぬな。」

「よい、通せ。」

奥から声が聞こえてきた。

「では、おじゃまいたしますわ。」

さて、見極めさせていただきますわよ？ 完全なる世界（コズモエンテレ

ケア
)
.

ナギはとんでもない物を貰っていきました。(後書き)

ナギがチートになった!!!もとからですけどね。千の呪文の男に風の契約者も追加するかな?風抜くかもしれないけどね。次は・・・
・リリとレンの家出?二人が魔法世界にいつて冒険です。なんか、シオン達といくよりリリとレンでいかしたほうが面白そうなので・・・
・・・まだ考え中ですが。

リリとレンぶらり旅

シオンとエヴァ、桜花でエターナル潰しです。

あ・・・原作レイプ入りそうです・・・アリカ姫様普通にたすけちゃいそうなのごろ・・・オスティア崩壊なしかも?とりあえずウェールズのところには姫様だしたいんだ!!!!!!ごめんなさい。

プロフィール(?) (前書き)

前々から書こうと思っていたものです。
要望もあったので簡単に書きました。

プロフィール(?)

森羅と創世が行くチート過ぎるネギま!

〈設定編〉

鵜「なぜなに〜チートすぎるネギま!はじまるよ〜」

紗代「なぜこんな格好しているのでしょうか?／＼／」

鵜「似合ってますよ。そのウサ耳。」

紗代「ありがとうございます?二人は白衣なんですね。」

鵜「はい、白衣ですよ〜これがこのコーナーの正装らしいです。」

紗代「変なところですね。」

鵜「まあ、おいといて気にせずいってみましょう!」「」

紗代「はい、今回は設定資料です。」

鵜「下記をご覧ください。」「」

筋力：通常攻撃などダメージなど。

耐久：HPや防御能力など。

敏捷：攻撃速度や回避、移動能力など。

魔力：魔力の多さ、魔法の威力など。

気：気の多さ、気の威力など。

幸運：ステータス異常関係など。

紗代「これが基礎能力です。」

鵜「」では、まずシオン様です。どうぞ。」「」

名前：シオン

外見年齢：16歳

基礎能力

筋力：SS

耐久：SS

敏捷：SS

魔力：SS

気：SS

幸運：AA

神剣装備時基礎能力

筋力：EX

耐久：EX

敏捷：EX

魔力：EX

気：EX

幸運：AA

特殊能力

真祖の身体：

吸血鬼の基本能力全般に加え、太陽などの吸血鬼の弱点がほぼ存在しない。

永遠神剣製造能力：

その名の通り永遠神剣を自由に作れる。

素材は必要。

全ての魔眼をすべる瞳：

ありとあらゆる魔眼を使える。

2個まで発動可能。

代償は格魔眼ごとに存在する。

零時迷子：

深夜零時を迎えるとその日消費した全ての力が回復する。

吸収した力も自身の物とし、回復する。

所持永遠神剣：

永遠神剣第1位森羅

永遠神剣第1位世界を滅ぼす剣

永遠神剣第3位金色の槌

レンの兄にして本作品の一人目の主人公。

身内には甘く敵には容赦ない性格。

オーデインに殺されネギまの世界にレンと共に転生した。

肉親はレンのみで過保護。

容姿は上の中。

据え膳食わぬは男の恥を体現している。

紗代「次はレン様」

名前：レン
外見年齢：6歳

基礎能力

筋力：C

耐久：B

敏捷：S

魔力：EX

気：EX

幸運：B

神剣装備時基礎能力

筋力：BB

耐久：AA

敏捷：EX

魔力：EX

気：EX

幸運：AA

特殊能力

真祖の身体：

吸血鬼の基本能力全般に加え、太陽などの吸血鬼の弱点がほぼ存在しない。

全てのルーン：

ルーンを自由に使える。オーディンと同じく。

あらゆる生物を従える：

生物のほぼ全てを従えられるが、確固たる意識を持つ存在にはあまり効かない。

全ての生命と会話ができる：

ありとあらゆる生命と会話でき、意思疎通できる。

所持永遠神剣：

永遠神剣第1位創世

シオンの妹にして娘。

母親はエヴァと桜花。

容姿は上の上。

創世を本来の杖の姿をつさぎのぬいぐるみにしてもっている。兄のことを溺愛している。

鵜「次は桜花様ですね……………化け物。」

名前：桜花

外見年齢：12歳

基礎能力

筋力：EX

耐久：SS

敏捷：EX

魔力：i

気：EX

幸運：S

特殊能力

千変万化：

声紋、指紋、身長まで自由に姿を変えられる。

全ての技を使用できる：

知っている全ての技を制限、代償無しで再現可能。

理の破壊：

素手で魔法とかを殴ったりできる。森羅万象を一時的に破壊。ただし、一つ最大二つまでしか使用できない。

金剛力無双：

筋力を数倍、数十倍にたたき上げる。

超再生能力：

その名の通り、拳くらいの大きさくらいあれば再生できる。ONNO
F切り替え可能。

華道と茶道の家元に生まれ5、6歳まで天才と言われていた。7歳
とうじに原因不明の病にかかり12歳で死亡し転生したのち自由に
千変万化など利用し遊んでいたところシオン達と戦った。
バトルマニア。

紗代「次は私の娘リリですね。」

名前：リリ

外見年齢：6歳

基礎能力

筋力：E X

耐久：E X

敏捷：E X

魔力：E X

気：E X

幸運：S S

神剣装備時基礎能力

筋力：E X

耐久：E X

敏捷：E X

魔力：E X

気：E X

幸運：E X

特殊能力

真祖の血：

吸血鬼の基本能力全般に加え、太陽などの吸血鬼の弱点がほぼ存在しない。

龍神の血：

能力全般が上昇する。

八龍が体内に存在する。

女神の力：

アテナの神力を取り込み自身の力としている。

光と闇の力：

光と闇を融合させ虚無の力を手に入れる。

所持永遠神剣：

永遠神剣冥皇龍

永遠神剣天皇龍

永遠神剣封玉

シオンと紗代の娘。桜花との戦いのとき暴走した紗代を抑えるため、アテナが神力をいれたため闇と光が拮抗している。

時間と空間、重力と空間を操る永遠神剣を持つが使いこなせないため、ほとんどの力を封玉で封印中。

戦闘技術や技、魔法はシオン、レン、桜花の英才教育を受けている。

（現在永遠神剣は補助機関の役割）

紗代「以上ですね。」

加奈「リリ様がおかしいですね。」

咲「火、風、土、水、雷、氷、闇、光の龍も体内にいますしね。」

紗代「強そうですね。まだ経験はないみたいですけど。」

鶴「だからまだ勝ってますね。後半なると勝てるのはあまりいませんね。」

紗代「シオン様と桜花様、レン様くらい？」

鶴「紗代様mいたっ！」

紗代「禁則事項らしいですね。」

鶴「それは仕方ありません。それでは、また合いましょう。」

紗代「次回をお楽しみください。」

プロフィール(?) (後書き)

ロウに強力なキャラと思いたいテムオリンの姉妹作るうかと画策中。
教皇あたりによろしくかと思ってますので名前募集します。

永遠神剣は秩序と似た感じの奴がいいのですが、今あがっているのが規律、統制かなと思ってますがこちらも意見募集します。

暗羅七家丑(?)

シオンSide

1980年……………ナギが去ってから2年が経過した。それからは特に何事もなく仕事をこなしている。

書類を見て決裁などの仕事をしていると、密偵に放っているサトリの雛璃から連絡がきた。

「報告にきました……あわわ……」

紫色をしたとんがり帽子の鍰を弄りながら慌てている雛璃を観察して、助け船をだしてやる。全く仕方ないな……このろりっ子め。

「で、報告は？」

「あわわ……………もうしゅく魔法世界で、ヘラス帝国が彼ら古き民のの文明発祥の聖地オスティアを解放を目的に戦争を起こそうとしています。」

「それだけじゃないよな？」

それだけなら報告は必要ないし、わざわざひなり雛壇をヘラス帝国に派遣する必要は無い。

「はいです……………完全なる世界がコスモエンテレケイアヘラス帝国内部より工
作を行った模様です。その結果、戦争が始まるのは確実となり、ヘ
ラス帝国は開戦に向けた準備を進めています。」

やっぱり、動き出したか。

「上層部の一部の心を読んだ結果、エターナルがヘラス帝国とメセ
ンブリーナ連合でEミニオンを制作していることが判明しました。」

「やはりか……………」

「あわわ……………それと……………ヘラス帝国の軍師になっちゃいました……………ど、どうしたらいいでしゅか！」

それは都合がいいな……………雛璃の戦術眼は凄いしね。まさに鳳統と妖怪の中で呼ばれるだけあるね。

「構わない、このままヘラス帝国内部に潜り込め。ロウエターナルコスモエンテレケイアと完全なる世界に協力する振りをして情報を引き出せ。」

「あわわ……………わかりましゅた。」

さて、次はこれだな。

「今現在分かっている場所はこちらで潰しておく。あと、怪盗夜桜が一部の施設を狙っているらしい情報を手に入れた。(ニヤリ)」

「あわわ、それは大変です。直ちに対策を練らないといけませんね」

「だね。」

これで、ある程度の遅延工作と雛璃の株がさらに上がるだろ。

「それでは、またご連絡致しますご主人様。」

「ああ、派手にメセンブリーナ連合を潰しまくれ。戦況がヘラス帝国に傾くようにな。」

「あわわ……………了解しました。彼らの思惑以上にヘラス帝国を勝利させればよろしいですね。」

分かってるね。完全なる世界はともかく、ユスモエンテレケイアロウエターナルどもの計画通りさせるものか。

「そついでと。じゃ、よろしくね雛璃。」

「はい、ご主人様の身心のままに。どうぞご期待ください……………あわわ。」

感じんな所で……………可愛いからいいけど。

さて、どうするロウエターナル……………いや、法皇テムオリンよ……………貴様らが介入せねば二年も立たずに戦争がヘラス帝国の勝利で終わってしまうぞ？くっくく、なんせ雛璃の

戦術眼にレミニオンを4部隊（1部隊5人）持たせてるからな……
……あははははは。あれ、悪役っぽくね？まあ、い
いかな。俺は悪の魔法使いだしな。

我が覇道を邪魔するなら容赦はしないぞ。それが神だろうが魔王だ
ろうがエターナルだろうとね。

行ってみただけだな。（カンピオーネで使ったネタ）

シオンSideOut

はじめまして、
りりです。

U
U
S
i
d
e

りりは、しんそのちとりゅうじんのちにしんりょくもまってるの！

「それでは、魔法世界に行くんだな。」

「ああ、今度は数年間戻らんだろうな。」

ぽぼとままたちどこかいくのかな？

りりはママがいつぱいいるの。

「私とあと誰だ？」

エヴァママとぽぼがおはなししてるの。

「桜花だな。雫は雛壇につけてるし、アテナはMSなど量産たのんでる。」

「そうか、なら……………どうしたリリ？」

エヴァママにきずかれた。

「あのね、あのね。」

「ん？」

「なんだ？」

「りりもつねていって
「…」

いつもおるすばんで、いってみたいの。

「ダメだ。」

「なんでえ〜」

「危ないからな。」

「ああ、子供がいくとこじじゃない。」

「やだやだいきたい〜いっしょにいたいのか（わん）」

いつもならこれでゆるしてくれるけど……………。

「今回はだめだな。」

「できるかぎり叶えてやりたいが今回はダメだ、もうすぐ戦争がおこるしな。」

せんそうってなんだろ？

「……………だめ？(じりじり)」

「う、ダメだ。」

「ばばとママのばか〜うわ〜ん！」

いいもん、ばばとママなんてきりやいだ。

うう……………そうだ、ねんおねえちゃんの所に……………
…ここどこだろ？

おっきなとびら〜。

「ん〜と……………ば……………ばるす……………」

とびらにかかれてたもじをつぶやくととびらがくずれてきた！

「あれ？ここ……………あ〜めいちゃんにりゅうちゃんだ」

めいちゃんとりゅうちゃんをてにとり、しんめいりゅうのきほんの
かたをふるってみた。

「うん、いいかんじ……………でも、かたなとかまじやっばりっ
かいずらいの。どうにかならないかな〜」

がちゃがちゃかさねてあそんでるとめいちゃんとりゅうちゃんがひ
かりだした！すごいなんだろ！

ひかりがへやぜんたいをつつんだあとにりりのてにあったのはね、
くろとしろのけんだったの！

「なんだろこれ……………？」

ふしぎにおもつてるところえがきこえてきた。

“ 我は闇を司る冥皇龍 ”

“ 我は光を司る天皇龍 ”

「こえがけんからきこえる。

“ 我は重力と時間を操る ”

“ 我は磁力と空間を操る ”

“ 我等は相反する物。光と闇、善と悪。表裏一体の存在。光と闇
をその身に宿す汝を我等が主と認める。我等の力を自由に行使する
がよい。 ”

「わーい、あたらしいおともだちー あそぼー」

あれ？へんじがないよ？

それからいくらはなしかけてもへんじがないの。

「何をしているんですか？」

「れんおねえちゃんだー」

おっきなうさちゃんのぬいぐるみをもってるの。

「それは………また、持ち出すんですか？怒られたばかりなのに。封印まで解いてしまって………危険だからちゃんとこれつけてくださいね。」

「うそくじゅっしきをななこつけられた。

「れんおねえちゃん、おでかけしよ？」

「………いっしょですよ………？」

「わーい」

「どこ行くんですか？」

「ついてからのおたのしみ」

おてがみかいてっと。

「いくよ、てんちゃん〜じげんざん！」

くつかんをたちきりみちをつなげるの。つかいかたは、あたまのな
かにながれこんできた！

「すごいですね。」

「えへへ いこ、れんおねえちゃん。」

「まあ、大丈夫でしょう。ちゃんとおにいさまの許可はとりました
よねっ。」

「……………じゅん……………いじ」

「ならいいです。」

とってないけどきつとだいいじゅじゅぶー

りりとれんおねえちゃんはまほつせかいへぼつけんにてかけました。

いえでします。さがさないでください。りりとれん
おねえちゃんよりまぐる

「なんだこれは！」

「やられた、冥皇と龍神も無くなって。だれだ扉の破壊方法教えたのは！いやいい、だいたい見当はついてる。」

「で、ど、どうするのじゃ？レンも一緒なら特に問題ないとおもっ
がの。」

「そうだな、しばらく様子見だな。何かあればすぐわかるしな。そ
れに、問題は永遠神剣の方だしな。エターナル共にはれたらやばい
かもしれん。」

「そんなに危険なのか？」

「かなり……………ま、レンに任せればいいや、こっちはこっ
ちでやるぞ。」

「「あ／＼あ／＼」」

U
U
S
d
d
e
e
t

暗躍と家出(？) (後書き)

因みにりりが戦術、戦略さえちゃんとできればこの作品中最強です。
どこの戦闘民族の息子みたく。

レンとリリの旅（前書き）

レンのターンかもしれない。そして出てくるあの人とあの人たち。

レノルリの旅

リリSide

1981年……ヘラス帝国国境付近。

れんおねえちゃんとふたりでびくにっく

もりのなかをてをつないであるいているの！

「あれなに？」

「リスだよ。」

「あれは？」

「……………クロコダイルかな？」

「あのおつきなとりさんは？」

まっかで綺麗なの。

「ただのフェニックスかな？」

「ただのじゃねえ！みつちやくちや珍しいから！」

「……………ただのだよ。」

「分かった！分かったからその動作やめて！」

うさぎさんを上げるのやめたみたい。

「あれはなに？」

「ただの死体だよ。」

「ふうん、そうなんだ〜」

ちがどくどくでてるの。

そのまますすんでいくと……………。

「誰か助けてくれ！」

ひらけたところになるとわたしとおなじくらいのがつかまっていた。

U.S. History

U.S. History

ちて、いねどじしよ？

周りには兵士の死体が重ねられていて、少女以外殺されたようです。

「……………お構いなく……………いい。」

「に、逃げる！」

「見られたからには死んでもらう。」

リリちゃんもいるし早く片付けよう。

「創世……………構築……………ロード〔自由の翼〕……………」

「了解だぜ！コード〔自由の翼〕構築！」

「なんだ！」

地面の一部が分解され新たな物体へと再構築された。そう、自由の翼……………ストライクフリーダムへと……………5
Mくらいのサイズだけ。

「「かつこいい。」」

「ハイマツトフルバースト、対象敵対勢力。」

「あははは、消え失せやがれ！」

七色の光の本流が多数発射され……………敵対勢力は文字通り消滅した。

やり過ぎた？

「れんおねえちゃんあれなに！」

「そうだ、教えてくれ！」

「わぶ」

二人に抱き着かれ押し倒された。

「……………ど……………どいて……………」

「すまん。」

「ごめんなさい。」

ふう、服に叩き汚れを落として向き合う。

「……………あれは……………ストライクフリーダムていうゴレム。」

「ほ」

その後、説明と自己紹介を終えて分かったのはこの子がヘラス帝国第三皇女テオドラだと分かったの。

「なあ、そっちは敵陣の真っ只中だけど……………?」

「こっちの方が速いしね。」

「だね」

私達は敵陣を突っ切るタメに進む……………雛璃さん
から説明中に念話で連絡したら、連れてきてって言われたしついで
にお手伝いすることにしました。

テオドリス side

私を助けてくれたのは、驚いたことに凄くかっこいいゴーレムを従えた五、六歳の小さな女の子だった。

話したところ、二人で旅をしているらしい。さすが、闇の存在かな？もつひとりは光と闇の気配がしてよくわからんが……
……まあ、よいか。それより、敵陣を突っ切るらしいが……
……大丈夫か？

「あっ！」

リリという少女がなにかに気付き、神聖な気配を放っている長剣を召喚し森の中に入っていった。

「追わなくていいのか？」

「平気。」

「多分、偵察兵を狩りにいったただけだぜ？」

「だけって、危ないではないのか？」

「そ、そうか。」

「それに……あの……接近戦なら、私毛敵わないから……平気。」

それから、数分後に敵の陣地前についた。

「どつするのだ?」

「どつする。コード「赤い彗星」を20機。」

「「赤い彗星」20機構築。」

先程と同じ現象、地面が消滅し、新たな物体へと再構築される。ただし今度は1Mほどのものが20機できた。

「さあ、いきなさい。貴方達……………シャア専用ザクの力を
見せて。」

ブウンという音と共に赤い目が現れ、一心乱れぬ行動をし、敵陣に
凄い速度で突っ込んでいった。

「なんだこいつらは!」

「ひい!」

爆音が轟き、阿鼻叫喚の地獄絵図となった。

あんな意味わからん速度で動く奴にいきなり襲われれば仕方ないな。

数十分後に、問題が発生したようだ。

「けけけ……………こっちに気付きやがったな。」

「おい、大丈夫なのか？」

まだ、死ぬ気はないぞ？

「君達がこの事態を引き起こしたのかな？」

うむ、ダンディなおじ様だな。

「……………」

「なるほど、本物がいやがったぜ！」

マスタークラスか？

「悪いが排除させてもらう。」

これはまずいぞ、まさかガトウとは、やっぱり敵陣の中を進むなんて無茶だったのだ！

「別に……悪く……ない……これは……戦争……」

「そうか、君達、女の子を殴るのは嫌だから投降してくれないかな？」

「それは……必要……無い……私達の……勝
ち……たから……」

「なに？」

どづいづいと？明らかに私達の負けだけぞ。

「……貴方は……時間を……かけすぎた……」

「っ！」

ガトウが距離をとった。

テオドラスideOut

Inside

距離をとったのは正解。

「よけられちゃった。」

「リリ、気をつけてね。」

「。じ。」

とっと攻撃していれば勝てたと思うのに。

「おじさんつよそうだからやほんきな。」

「それは光栄だね。」

「いくよ、めいちゃん、てんちゃん！」

両方だしたの……………こっちも今の中に次のMSを創る。

「大規模創世、コード〔ソレスタルビーイング1st〕」

「了解だぜ！大規模創世！！」

辺りのものを資源として新たな機体の創造に入る。

「おいおい、まさかあっちのゴーレムもその場で作ったっていつのかいっ！」

「しんめいりゅうおつぎ〜らいめいけん〜」

「こっちは、神鳴流か！しまった！」

「完了。」

新たに創られた四機の機体。

「さあ、いきやがれ！エクシア、デュミナス、キュリオス、ヴァー
チエー！」

「これは、さっきよりやばそうだね。」

「メセンブリーナ連合の部隊をお願い。」

四機のガンダムは残りの敵を殲滅に向かった。

ガトウSide

インサイドアウト

これは本格的にまずいね。この子物理法則無視して無限軌道で空を飛び回ってるし。

「2が4に、4が16に、16が256だよ！」

おいおい、どんどん斬撃が増えて256の斬撃か、これはまずい！

「はあ！」

居合拳を全力で放ち斬撃を叩き潰す。

「どつやら、ここまでか。退かせてもらおう。」

「えっつまんない。」

「いい……………一つ……………教える……………この戦争の……………裏……………調べると……………いい。」

この戦争の裏だと？たしかに色々気になる点があるな。

「分かった。それでは失礼する。」

足場を壊して、土煙などを利用して撤退した。

何人生き残ったか。

「先生。」

「タカミチか、どうだった？」

「ダメです。僕達を含めて生き残ったのは、たった十名前後です。」

何なんですかあの理不尽な強さは。」

「さあな、術者に護衛の神鳴流使い……………それに、ヘラス帝国第三皇女テオドラ様がいた。」

「タカミチなにか知ってるか？」

あの子達がヘラス帝国についてるなら帝国の勝ちは見えてるな。向こうの軍師はかなり優秀みたいだからな。

「はい、どうやら前戦に激励にきていた皇女を誘拐しようとしたようです。」

「先の戦いはボロ負けだったから手柄が欲しかったのか。ようやくきた援軍はこれだから意味はなかったがな。」

むしろこれは都合がいい。

「タカミチ、メセンブリーナ連合から離脱するぞ。」

「えっ？」

「私達はこの戦争の裏を探る。君達はどうか？」

座り込んでいる少年兵に声をかける。彼らはタカミチのいうことが聞けたから生き残れたのだろう。

「僕達も連れて行ってください。」

「どうせこのまま戻っても殺されるだけだし。」

この子達は施設の出か。

「いいだろ、ついて来い。」

さて、創世と聞いていたが、神や魔王みたいな存在だな。

最後の言葉通り調べて見れば彼女達の正体もわかるかもしれんな。

ガトウSideOut

レンとリリの旅（後書き）

はい、テオドラとガトウ、タカミチでした。

コードは事前に設計図から物の構成まで事細かに記録させたのを使ってるため高速で構築できます。

創世の弱点は、構築中にエラーや不測の事態が起こるとリセットされることです。で接近戦に弱い。ガトウ戦では、あの距離にこられた時点で構築に妨害されて無理。まあ、魔術戦すれば良いだけなんだけど……ちなみに、レンのタイプは固定砲台です。

次回はヘラスと連合のシオンたちの予定です。

レンはとんでもない物を創りました。(前書き)

陰謀と家出の前にプロフィール追加しました。

そして書き忘れ。

桜花のイメージは空の境界のしきとおにごっこのすずか様を足して割った感じですか。(割ってないかもしれないけど)

リリさメモリアのメア、そして今回はあれが追加と………最初
初のイメージと変わってきましたよ。

まあ、よくあることです。現実逃避完了。

レンはとんでもない物を創りました。

離境 Side

ふう、国境付近に集結した戦力と増援も排除完了ですね。レン様のお陰でこちらの消耗はありません。

「進軍準備はございますか？」

「はっ、予定通り1200時に進軍可能です。」

「了解しました。」

「本体はどうでしゅか？」

「（かわいいな）はい、予定通りに作戦を開始することです。」

あわわ、可愛いなんて……………はっ、仕事仕事。

「（いいな）さすが雛璃様……………」

「でっ、では予定通り出発しますが途中で姫様と知り合いを拾いま

す。」

「……イエス、ユアハインス!」「……」

ちよつとびっくりします。それを見て楽しまれてるのも分かります。心が聴こえますから。

それからレン様達と合流した。

「御無事でなりよりでしたテオドラ様。」

「（面倒だが仕方ない）うむ、出迎えご苦労大儀である。」

「はい、レン様にリリ様もありがとうございました。」

本当の主君の親族ですから対応は間違つてはいけません。この二人は心の中が見えませんが。

「……………別にいい。」

「たのしかったし。」

「なんだ、知り合いなのか？」

「うん！おともだちなの！」

「そうか。」

嬉しいです。

「レン様、テオドラ様にお問い合わせがございます。」

「なに？」

「はい、テオドラ様には私達をテオドラ様直属部隊にさせていただきたいのです。レン様は戦艦を創っていただきたいのです。」

「構わぬぞ。（面白そうだな。）」

「おにいさまの役に立つならいい……………よっ。」

「有り難うございます。」

これで戦力は増強されますね。

「タイプとかは？」

「御自由にございませう。」

「……………（しく）」

材料はあれでいいですね。

「材料結構いるよ？すぐに廃棄するんじゃないからしっかり創らないといけないから。」

「はい、あそこにメセンブリーナ連合の廃材が積まれた山があります。あれとこの戦艦を使ってください。」

「わかった。」

「大規模創世準備開始。」

「イエッサー！大規模創世準備開始！」

では、こちらも準備しましょう。

「全乗組員に通達します。直ちに退艦してください。」

「『イエス、ユアハイネス！』」

さて、これで準備できました。

「開始。」

「了解。大規模創世開始する！」

山と戦艦が消滅した。

く敵陣く

「大変だ！」

「どうした！」

「山が消え失せた！」

「馬鹿な！」

「なんだこれは！」

「膨大な魔力反応を確認！」

「急いで対魔障壁を展開しろ！」

「了解しました！」

「お前は本体に連絡しろ！」

「了解。」

あわわ、あれは対魔障壁です。あんなところに敵がいるんですね。

「全部隊に通達します。テオドラ様とレン様を守ってください。」

「……イエス、ユアハインス!!」

防衛はこれでいいですね。次はこっちです。

「リリ様、遊び相手ができました。Lミニオン達と一緒に敵を排除してきてくださいませんか？」

「いいよ〜みないくよ〜」

Lミニオン達を連れて敵のほうに行きました。大丈夫ですよね？

それから三日間で完成しました。

私達の目の前には全長350Mもある戦艦ができていました。

「これは素晴らしいな。」

テオドラ様の言う通りですね。他の方々も驚いています。

「すごいね。」

「うむ、かっこいいな！これが我の直属部隊の旗艦か！」

「貸してもらっただけですよ。」

「分かっておる。」

借りるだけとの契約です。いろいろ問題あるそうなので。

「武装は陽電子破砕砲QZ X - 1タンホイザー、2連装高エネルギー収束火線砲XM47トリスタン×2、42cm通常火薬3連装副砲M10イゾルデ40mmCISWS×12、ミサイル発射管×多数、宇宙用ミサイルナイトハルト、地上用ミサイルパルジファル、迎撃用ミサイルディスプレイ、魚雷発射管×4、魚雷ウォルフラムM25、アンチビーム爆雷、ジャミング弾です。」

どれも強そうですね。

「すごそうな名前ばっかじゃな。」

「うん。」

「エネルギーはブラックホールエンジンと核融合炉を搭載しているけど……………落とされたらブラックホールが全部飲み込むから安心してね。」

「はい。」

危険な物沢山ですね。

「これはなんなのだ！このゴーレムは！」

「それは艦載機。Lミニオン専用ですが、インパルス、ザクウォーリア、ザクウォーリア（ルナマリア・ホーク専用機）、ザクファントム（レイ・ザ・バレル専用機）、ゲイツR×2、セイバー、グフイグナイテッド（ハイネ・ヴェステンフルス専用機）、デスティニー、レジエンドを各2セット用意しました。」

「有り難うございます。」

「この艦の名前はなんじゃ！」

「女神の名を冠する船ミネルバです。」

「ミネルバか気に入った。」

これで戦力は充分ですね。

「では、私達は訓練を開始しますね。」

「なら、訓練ついでに我等を帝都ヘラスに連れてゆけ。」

「御意。レン様とリリ様もよろしいですか？」

「うん」

「……………（しぐ）」

「では、各員準備はいいですね？」

「……………はい！……………」

「では……………」我にやらしてくれ……………分かりました。
どしどし。」

やっぱり、やりたかったみたいですね。

「ヘラス帝国帝都ヘラスにむけミネルバ発進せよ！」

「……………イエス、ユアハインス！！！！……………」

こうして私達はヘラス帝国第三皇女テオドラ様直属部隊となり戦場を自由に行き来できるようになった。

離璃 Side Out

Inside

戦艦ミネルバを創ってから帝都にいき、帝都に滞在しはや一ヶ月が立ちました。

ミネルバの戦果は凄まじく連戦連勝しています。

ヴァルカンやニヤンドマを陥落させたようです。グレート＝ブリッジまで進んでいるようです。次はオステアに行くそうですね。

私達はヘラス帝国を去る前に買い物に來ています。テオに抱き着かれた状態ですが。

「いれん着るのじゃー！」

あれは……………ゴシッククロリータ版の魔女っ子のコスチ
ューム……………何故こんなところに？

「レンに着させるために作らせたのだ！りりにはこっちだ！」

「わ〜い」

「私にこんなの似合わない……………よ？」

恥ずかしいです。

「いやいや、凄く似合ってるぞ！」

りりも試着室から出て来た。

「わふ〜どじですか〜」

「うむ、凄くよいぞ。私の目に狂いはなかったのだ！」

たしかに似合ってる。銀の髪とまっちして……………その衣装、
そうリトルバスターに出て来るハロウィン姿の宇宙に始めていった

犬の子の名前を持つ子にね。

「れんおねえちゃんどうっ？」

「似合ってるよ。」

「わふ〜！」

「その口癖どうしたの？」

今までなかったのに。

「なぜかいわないといけない気がしたの〜」

「うむ、この衣装は神がおりてきたようにすらすらできたぞ〜！」

「そうですか。」

「ふははは。」

「あははは。」

まあ、いいかな？今度おにいさまにも見てもらおう。

それからしばらくして、テオと別れて旅の続きの前にやらなきゃいけないことがありました。

リリの協力でやってまいりました月面です。

帽子の鍔を直しながら結界を広げる。

「ここになにするの？」

リリの後ろには空間の裂け目があり、魔法世界の空と繋げてあります。空気とかはそこからの供給と高位の永遠神剣に真祖の身体を持っている私達には空気なんてあんまりいいりませんけどね。

「ここにマイクロウエーブ発射基地を作ります。」

「マイクロウエーブ？」

「はい、ようはエネルギー照射機です。」

「そつなんだ〜」

「リリは護衛お願いしますね。」

「はい。」

さて、D・O・M・E・” Depths Of Mind E
levating”の制作に入ります。ただ、ニュータイプの人
を封じたりしませんけどね。

一週間後。

「わふゝなにこれ」

ドラゴンですね。

問答無用ですか、これは防衛もちゃんと考えないといけませんね。

「わがけんにたてぬものはなしゝきえええい？」

ブレスもろともドラゴンを真つ二つですか……………だれの物真似かな？

「またちゆまらやにゆものをきってしまつたや。」

ああ、ルパンの斬鉄剣の人ですか。あれは不思議です。なんで刀なのに斬鉄剣なんでしょう？ 斬鉄刀が……………関係ありません。

「リリ、可愛くないからやめて？」

「わふゝわかつた」

「うん、D・O・M・E・” Depths Of Mind Elevating”）は完成。防衛機構創りますね。」

「うん。」

じゃあ、ガンダムXをGビット化して管制システムにおいて……
……モビルドールに近いけど全自動で行動可能にし、自己修復に
学習機能もつけたし。

うん、GXビットを1000機と生産機能に衛星も創ろうかな。衛
星はドミニオンでいいかな。

それから色々創ってD・O・M・E・” Depths Of Mind Elevating”）が要塞化しました。普段はステ
ルス……別次元に存在してるけどね。

魔法世界に戻りGXを創って試してみた。

「つゆきはでているか〜」

「はい、でていますよ〜」

「さてらいときゃのんはっしゅじゅんび〜」

「貴方に力を……………」

サテライトキャノン発射シーケンスを行います。

「マイクロウエーブきた〜」

「サテライトチャージ開始……………1……………2……………3……………チャージ完了。」

「うて〜!」「」

トリガーを引くと膨大な光の本流と爆音が響き渡り、視界が白に覆われた。

「……………」

「やり過ぎたな主よ。」

ここまでだなんて…………… D・O・M・E の方も改造したのがいけなかったのかな？

「ですね。リミッターかけましょう。」

「だな。」

「きれいだったの。もっとうっていい?」

「「だめ!絶対!」「」

「しゅん」

こればかりは仕方ないです。

「ほら、遊びにいきますよ。」

「わぶ〜さきに〜はんがいの〜」

創った狼に乗り近くの町を目指す。レンは狼に乗らずに一緒に走ってる。この狼ってかなり早いのにすごいね。

「しかしよ、あんなの創ってよかったのかよ？」

「サテライトキャノン撃ちたかったし。言ってみたかったから……
……………だめだった？」

「別にいいんじゃないか？自由にすればよ。ただサテライトキャノンは絶界の中だけだな。届くようにはしたからな。」

「こっちでも撃つかもしれないけど基本的にそうだね。じゃあ、次はどこいこつかな〜」

私とりりは自由気ままに旅を続ける。

PS・創世の魔王とか言う二つ名がつかまりました。どうやら、テオを助けた時の生き残りとミネルバ創ったところを見られたりしてみたいです。

レンはとんでもない物を創りました。(後書き)

プロフィールにものせたこと。

ロウに強力なキャラと思いテムオリンの姉妹作るうかと画策中。

教皇あたりにしようかと思ってますので名前募集します。

永遠神剣は秩序と似た感じの奴がいいのですが、今あがっているのが規律、統制かなと思ってますがこちらにも意見募集します。

次回こそは、シオンsideです。シオンがエヴァと桜花を連れてイチヤイチヤラブラブするお話です。多分……………予告無く変更する場合がございます。

夜桜の死（前書き）

さようなら、夜桜さん。

そして、あの人つよくね？

シ
オ
ン
S
i
d
e

1981年……ヘラス帝国とメセンブリー
ナ連合の戦争が開始された。

俺達は、その裏で暗躍しているロウエターナル共を狩るために魔法
世界にきている。

「ほんとにいいのか？レンとリリをほつといて……一年に
もなるぞ？」

エヴァは、心配性だな。

「大丈夫だろうて、リリだけならなんとでも連れ戻すがレンもいるから平気だろうてな。武力的な意味もふくめてな。」

たしかに、大丈夫だな。

「それに、雛璃から連絡が来たぞ？レンとリリに会って戦艦ミネルバもらったてな。」

「戦艦じゃと？」

「ミネルバか！ということはレジェンドにデステイニーじゃな。我的には、ストライクフリーダムやインフィニットジャスティスのほうが好きなのじゃがな。シンはいけすかぬ。」

「たしかに……SEED覚醒前のアランに負けるとかないな。」

「おい、なんの話だ？」

「つとエヴァは知らないな………今度作って流してみるか。機動戦記ガンダムみたいに。」

「こんど見せてやる。」

「それより、いいかげんこやつ等の相手をしてやらねばな。」

めんどいけどな。周りを賞金稼ぎどもに囲まれている。

「賞金600万\$の闇の福音に3000万\$の夜桜だな！」

「いかにも！」

「夜桜って？」

そういえばエヴァは知らなかったか。

「この姿でちっと遊んでただけじゃぞ？」

「それで3000万\$もつくか！」

「しまったま。

「なら、お前が相手しろ。」

「そうだな、私とシオンはそこでお茶でも飲んでるからな。」

「あ、ずるいぞ！我も飲みたい。」

「知らないな。」

俺とエヴァは崖を飛び降りて、下の店に入った。

「覚えておれよ！！！！！！」

それって、覚えてなくていいフラグだよな？

シオンSideOut

桜花
S
i
d
e

くそ、めんどいな。

「こいつはラッキーだな！一人ずつ確実に狩るぞ！」

「「おっ……！」「」」

どれ、ひい、ふう、みい……ぎゅと200くらいか？

「それだけの戦力でよいのか？」

「なに？」

「たったそれっぽちの戦力で我を捕らえようとは片腹痛いな。」

「馬鹿なことをいつてんじゃねえ！やっちまえ！」

ふむ、ではとつととご退場願うかの。我はレンからもらった一つの焼き鳥を取りだす。

「へ、なんだそれは？」

「おぬしらを倒すのにこの焼き鳥で十分よ。」

「なめやがって！」

ふふふ、とくとみよ我が秘儀を！

「オーバールIMITS発動！」

「なんだ！」

「これぞ我が秘奥儀百花繚乱・乱れ桜！」

これは、時が止まって、敵の目の前に無数の焼き鳥ナイフを配置する。

「パチン（これで終わりじゃ。」

指を鳴らすと同時に配置させた焼き鳥ナイフは敵目掛けて突っ込んでゆく。

「ぎゃあああああ……！！！」

「いてええええ……！！！」

「私の勝ちじゃな。さすが、面白武器よの。」

ちなみに百花繚乱はグレイセスの技じゃ、焼き鳥もしかり。神鳴流

に同じ名まえがあったから乱れ桜とつけただけじゃぞ？

「さて、お茶にしようか」

シオンとエヴァを追って崖を飛び降り店に向かう。

桜花
Side

H
J
S
i
d
e

お茶を堪能した後、目的の施設を襲撃する………今回はあたりだといいたがな。

はずれだったり逃げられた後だったりしてうっとうしい事この上ない。

「どうだ？」

「ん、辺りかな。」

なら、突入だな。

「じゃあ、ゆくかの！」

「いくぞ、エヴァ。」

「うん。」

いきなり手を握られたからいつものような返事ができなかったではないか！

数分後、研究施設についた。

「当たり前だけど……これは……」

そうだな。

「少し前に廃棄されたみたいだな。」

「大量のEミニオンが作られてみたいだな。」

あの強さが大量にか……いろいろまずそうだな。

「ふむ、データも消されておるな……」

「だろうね。ついでに言つとそろそろかくれんぼやめにしないか？」

かくれんぼ？

「ん？」

「なんじゃ、エヴァ気づいてなかったのか………手を握
つてもらえて動転しておったか。」

「う、うるしい！／＼／」

くそ、たしかに気配があるな。

「そこか！氷神の戦鎧マレウス・アクイローニス！！！！！！」

巨大な氷塊を施設の一部に叩き付けてやる。

「さすがですね。森羅に闇の福音、夜桜。」

「貴様は！」

「だれじゃ？どこかで見た顔だが………？」

「久しぶりだね。フェイト・アーウェルンクス。」

いつかシオンが永遠神剣をくれてやった奴じゃないか。

「なんじゃテルティウムか。」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

すごい驚いてるけど……………テルティウム？

「なぜそれを知っている。」

「それは……………」

「それは？」

私も気になるな。

「企業秘密じゃ」

「「っ！」」

そつだ、こいつ奴だつたな。

「ふはははは。教えて欲しかったら我に勝つて見せよ！」

「……………いえ、こんかいは遠慮させてもらつよ。」

「残念じゃな。」

しかし、嫌な気配がするな。何故こやつはここにいる？

「フェイト、完全なる世界とロウエターナル組んだのか？」
「コスモエンテレケイア」

「何故そつ思つ？」

「ここにいることと、君達完全なる世界とロウエターナルの目的つてほとんどいっしょなんだよな。だから、組む相手としてはお互い申し分ないはずだから。」

そうなんだ。知らなかった。

「まあ、ばればれだよな。」

「ああ、エヴァ、桜花……………脱出するぞ。」

「なぜだい？もっと話していいじゃない？」

まさか……………罠か？

「ふふ、どうせ我らをこの施設諸共消す参段じゃな。テムオリンが考えそうなことであるしな。」

「だな。フェイトも幻影だしな。」

「汚いがいい手だな。」

自分の戦力は一切削っていないからな。

「ふう、ばれてるなら仕方ない。悪いけど時間稼ぎさせてもらおうよ

！幻想！！！！」

うわ・・・・・・・・・・・・・・・・10・・・・・・・・・・・・・・数十体
のフェイトか・・・・・・・・・・変な気分だぞ？

「たしかに、時間稼ぎに最適な人員だな。」

「まあ、撃ち貫くのみじゃな。」

「ふん、私達のをみせてやるか。」

「タイムリミットは・・・・・・・・・・・・・・・・」

シオンが魔眼を発動して調べてるようだな。

「5分だな。」

「余裕じゃ！魔拳ビックバン！」

巨大な拳がフェイトたちを消し飛ばすが・・・・・・・・・・どんど
んあふれてくるな。

「リック・ラク、ラ・ラック、ライラック、契約に従い（ト・シユン
ボライオン）、我に従え（ディアーコネート・モイ・ヘー）、氷
クリュスタリネ・バシレイア
の女王、来れ（エピゲネーテート）、とこしえの（タイオーニオ
ン）、やみ（エレボス）！えいえんのひょうが（ハイオーニエ・ク
リュスタレ）！！」

「ヴィシュ・タル、リ・シュタル、ヴァンゲイト、おお 地の底に
眠る死者の宮殿よ（オー・タルタローイ・ケイメノン・バシレイオ
ン・ネクローン）、我らの下に姿を現せ（ファインサストー・ヘ
ーミン）、冥府の石柱（ホ・モノリートス・キオーン・トウ・ハ
イドウ）」

「ヴィシュ・タル、リ・シュタル、ヴァンゲイト、小さき王、八つ
メタ・コークトー・ポドーン・カイ
足の蜥蜴、邪眼の主よ（カコイン・オンマトイン）、その光、我が
ト・フォース
手に宿し（エメーイ・ケイリ・カティアース）、災いなる（トーイ・
カコーイ・デルグマティ）、眼差しで射よ（トクセウサトー）、石
カコン・オンマ・ベトロセオース
化の邪眼！！」

「ヴィシュ・タル、リ・シュタル、ヴァンゲイトバーシリスケ・ガレオーテ小さき王 八つ足
メタ・コークトー・ポドーン・カイ
の蜥蜴 邪眼の主よ（カコイン・オンマトイン）、時を奪う（プノ
エーン・トウー・イウー）
プノエー・ベトラス
毒の吐息を（トン・クロノン・パライ
ル・サン）、石の息吹！！」

「ヴィシュ・タル、リ・シュタル、ヴァンゲイトト・ティコス・ティエルクサストー障壁突破、“石の

槍”（ドリユ・ペトラス）」

くそ、数が違いすぎるな。大質量で柱状に石化の煙、石化の光線、複数の鋭い石か！

「デオス・デア・サタナス・アポカリプス、契約に従い（ト・シユ
ンボライオン）、我に従え（ディアークネーター・モイ）、炎の覇ホ・テユラ
王、来れ（エピゲネーター）、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとフロクス・カタルセオースフロキネー・ロンファイア
ばしれよ（レウサントーン）、ソドムを（ピユール・カイ）、焼き
し（テイオン）、火と硫黄、罪ありし者を（ハマルトートウス）、
死の塵に（エイス・クーン・タナトウ）、燃える天空！！！！」

フェイトの魔法が私とシオンの魔法により相殺されてゆく

「リック・ラク、ラ・ラック、ライラック、全ての（パーサイス）、
命ある者に（ゾーサイス）、等しき死を（トン・イソン・タナトン）
、其は（ホス）、安らぎ也、アタラクシア“おわるせかい”（コズミケー・カタ
ストロフェー）」

「我は脱出口を作るかの！蝕め暴虐の月！！！！！！」メルゼス・ドア

天井を破壊……消滅させて行っている……相変わらず
の化け物ぶりだな。

「君達は相変わらずの化け物ぶりだね！冥府の石柱！！！！！」

折角開けた場所も防がれるか……………

「ち、もう時間がないな……………桜花！」

「なんじゃー！」

「エヴァ連れて逃げるから後よろしく！」

ええええええ……………いいのかそれは！

「ちょっとまっていー！」

「いいのかいそれは？」

「いいんだよ……………次元連結システム起動。」

「ふう、仕方ないの……………では、またあとでのー！」

「んじゃ、合流地点は予定通りにな！さらばだフェイト！」

シオンは私を抱え上げ転移した。

私達が出た場所は数十キロ離れたところだった。

「おい！桜花はいいのか！」

「平気平気。すぐもどってくるって。」

「信じるからな……………」

「ああ。」

今はすぎるしかないか……………無事でいろよ桜花。

H
A
S
S
I
D
E
O
U
T

桜花Side

いったかの。

「まったくひどい人たちだね？」

「そうでもないの。我は死なぬし、貴様も死なぬからな。これでフエアな戦いじゃ。」

「なにを馬鹿な……………数キロは消滅する攻撃だよ？」

普通なら死ぬの……………準備をしておるしの。

「くくく、その程度なら準備すればよいだけのことよ。これで死んだことになればそれはそれでいいしの！」

「狂ってるね。」

「夜桜として最後の戦い……大いに楽しませてくれよ！」

「っ！なんだいその膨大な気は……」

さあ、ゆくぞ！

「オーバーリミッツ、アクセルモード起動。心してゆけこれが我の本気じゃ！」

「僕は分身たち「それがどうしたのじゃ？」……なに？」

「いいことを教えてやるかの！」

「がっ！」

フェイトの分身を掴み腕の骨を叩きおってやった。

「馬鹿な……なぜ、本体がダメージをつける！」

「幻影にダメージが入らぬと誰が決めた？」

「それは、物理的に無理じゃない……かな？」

「ふははは、我にそのような理など効かぬは……！」

それも理だからの、我が拳なら破壊できるのじゃ。

「さあ、次じゃ！ゴムゴムのガントリングキャノン……！」

一発一発に気弾を込め爆発させる。それに、身体全体を千変万化でゴム人間にしているのじゃ！

「ぐはあ……にんげんやめてるね……」

「一応人間じゃぞ？ちよつとゴム人間になつたりできるだけじゃ！」

「バーシリスケ・ガリオオーテグイシユ・タル、メタ・コークター・ポドーン・カイリ・シユタル、ヴァンゲイト、ト・フオース小さき王、八つ足のメタ・コークター・ポドーン・カイ蜥蜴、邪眼の主よ（カコイン・オンマトイン）、その光、我が

手に宿し（エメーイ・ケイリ・カティアース）、災いなる（トイー・カコーイ・デルグマティ）、眼差しで射よ（トクセウサトー）、石化の邪眼カコン・オンス・ス・テローセオース！！」

む、石化してしまったの。

「これで僕の勝ちだね。」

「いやいや、残念ながら我に石化など無意味じゃな。」

千変万化で一度完全に石にしてから戻すとあら不思議、完全に元通り。

「反則だね……………」

「我もそう思うぞ？」

以外に千変万化も色々反則じゃ。

「まあ、タイムリミットが来たわけだが……………一人殺せればいいかな？殺せるかどうかも解らなくなってきたけどね。」

「それは仕掛け次第じゃの。見逃してやるからさっさとゆけ。」

「いいのかい？君が僕の分身を掴んでいれば僕も殺せるよ？」

「かまわぬよ。もう、満足したしの。それにお主をここで殺すわけにもいかないしの。」

お主は色々役割があるからの。

「わかった。お言葉に甘えさせてもらうとしよう。ただし、除かせてもらうが。」

「えっちじゃの。」

「違うけど、君みたいな可愛い子なら別に良いかもしれないけどね。」

「残念。我はすでにシオンの物じゃしな。」

「それは、残念。」

桜花 Side Out

シオン
Side

施設のあった場所が超圧縮された重力球でがりがり削られ消滅した。

「おい、ほんとに大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないか？今回はロウエターナルと完全なる世界の作戦
勝ちだな。普通ならだけど。」

「桜花……」「よんだ？」「……ひゃっ！」

エヴァを後ろから抱きしめて、驚いてるエヴァで遊んでるな。

「無事だったの……」「……おい、ぬれてるぞ？」

「しかたないよ。これからでたんだから。」

保存用の培養槽だな。

「しかも、なぜ裸なんだ？」

「再生したばかりだからね。シオン服ちょうだい。」

「ほら。」

バックから桜花の服とタオルを渡してやる。

「かせ。あと、どういふことが説明しろ。桜花の小ささもな。」

「まかせたの。」

エヴァに身体を拭いてもらってる桜花から説明を投げられた。

「桜花の再生能力しってるだろ？」

「ああ。でも、完全に消滅したら無理なんだろ？あれはどうみても完全消滅だろ。」

たしかに、でも何事にも抜け道はあるんだよな。

「答えを言つと……桜花の一部を俺がもってたらそこから再生できるんだ。」

「一部？」

「そうそう。内臓一個くらいなくなっただけいけるし。切り取った後に保存しておいたら、肉体も修復される。まあ、切り取った奴は再生

停止させていただけね。」

「つまり、なんどでも復活できると?」

「後、4回くらいじゃの。」

まあ、ためしたことがなかったけどな。

「……………せ……………」

「ん?なんじゃ?」

「私の心配した心を返せ……………!」

仲良いな。この二人。

「わっはは。可愛かったぞエヴァよ。」

「く、このおおお……………!」

しかし、やってくれたな。エターナルと完全なる世界……

「スモエンテレケイア」

……この借りは利子付けて返してやる。」

「フェイトとデユミナスは殺すでないぞ？」

「解ってるよ。そのために神剣もやったんだしな。」

「そうだったのか？殺してしまえば良いじゃないか？」

「それだと色々こまるんでね。」

「うむ。」

歴史がいろいろ変わっちまうしな。もう、ほとんど覚えてないけど。

「さて、次は消えていたEミニオンを追うぞ。」

「「わかった。」」

さて、オステアにもいってみるか。

シオンSideOut

夜桜の死（後書き）

というわけで、反則桜花ちゃんでした。

フェイト幻想使つと反則ですね。

百花繚乱はグレイセスでぜひ焼き鳥でやってみてね。笑うから。

神採リアルケミーマイスターやるので更新遅れると思いますけどどうぞよろしくです。

ナギ達と黄昏れの姫巫女（前書き）

ロリアスナ登場ですよ。

なんか過去のアスナの方が好きです。

（ぐはぁ）

ナギ達と黄昏れの姫巫女

ナギSide

俺はアルビレオ、詠春で紅き翼を結成してメセンブリーナ連合とヘラス帝国の戦争に参加した。

「その情報は本当なのか？」

「ええ、防衛に黄昏れの姫巫女を使うそうです。」

黄昏れの姫巫女っていや、またまだガキじゃないか。気に入くわねえな。

「戦とはいえ、このようなことに子供を巻き込むとは……………」

「しかたありません。小国にヘラス帝国の進攻を防ぐ手立てがないのですから。」

「どっちにしろ気にくわねえな！」

「では、どうしますか？」

愚問だぜ、アルビレオ。

「決まってるじゃねえか。助けにいくぞ！」

「まったく無調を言う。可能だろうがな。」

「ええ、では急ぎましょう。ヘラス帝国第三皇女の特務部隊も動いてるようですから。」

第三皇女の特務部隊っていや、連戦連勝でしられてる奴か。

「相手に取って不足はねえ。奴らの記録を止めてやるぞ！」

「ああ。」

「はい。」

俺達は急ぎ小国へと向かった。

小国に着いた。

「くっ、遅かったか！」

すでに戦争が始まっていた。

「ちっ……………気にいらねえぜ！」

くヘラス帝国陣営く

ドッ！！！！！！

戦艦から放たれる多数の精霊砲。

着弾すると思われた。

ブアツとい音と共に精霊砲が消失した。

「せ、精霊砲全弾消失！」

「消失！？王都の魔法障壁ではないのか！？まさか……………！！」

「広域魔力減衰現象を確認！減衰速度加速中……………間違いありません！！黄昏れの姫巫女です！！」

くそ、間に合わなかったか。

「黄昏れの姫巫女……………なんだってそんなもん引つ張りだしてくんだ!？」

「歴史と伝統が売りの小国に他に手はないでしょう。」

分かってるが……………言わずにおけるか!

「だが王族だろ!それにまだ小さな女の子じゃねえのか!」

「冷静になれナギ、やかましいぞ。」

「俺は常に冷静だっつーの。」

「戦争ですからね……………向こうの真の目的もおそろしく……………それに、少女の年齢も私同様みためどおりとは……………」

「……………」

「くそっ！」

精霊兵が指揮塔に近いていやがる！

「おらっ！」

殴り飛ばしてやった。

「そんなガキまで担ぎ出すこたねえ。後は俺に任せときな。」

背後にいる魔法陣の上に鎖で繋がれている少女と大人どもに宣言してやった。

「お……………お前は紅き翼……………風の……………」

「そう、ナギ・スプリングフィールド！！またの名を風の契約者！
……………」
コソトラクター

「フッフ、ノリノリですね。」

うるせえぞアル。むっ、1……………2……………3……………4……………5……………多数の精
霊兵が近づいてきやがったな。

「いくぞ。アル、詠春」

「ええ。」

「ああ。」

先ずは俺からだな。

「百重千重と重なり手、ヘカトシタキス・カイチヌヒヲチノト走れよ稲妻……………行くぜ、オラア
ッ！！千の雷！！……………キリブル・アストラペー」

ズグアッ！！！！

さすが俺……………ほとんどの精霊兵が死にやがったな。風の精霊
王シルフと契約してからというもの……………普通に撃つても威
力や範囲が数倍に跳ね上がってやがる。魔力消費は同じなのによ。

「相変わらず派手ですね。では、私もいきますよ。」

アルが多数の重力球を放ち、俺の魔法から生き残った奴を殺しにかかった。

「まったく、二人とも残りはどうするんだ。」

何体か抜けてきたな。

「詠春、任せた。」

「ええ、お願いします。」

「また、フォローか……………仕方ない。神鳴流決戦奥義……………
真・雷光剣!!!!!!!!!!」

どこがフォローだ。ちやかり殲滅してるしな。

「おおー！」

「安心しな。俺達が全て終わらせてやる。」

「なっ……………しかし……………敵の数を見たのか！？お前達に何が……………」
「俺を誰だと思ってるジジイ」……………」

「俺は最強の魔法使いだ。」

魔法学校は中退だな！！

「な……………」

「ふっふっふ、たしかに風の精霊王に喧嘩売る馬鹿に言われても説得力ありませんね。勝てたからいいものの普通なら喧嘩売りませんよ。」

「うるせえよ。」

それにあれは修業だったからな。まあ、どちらにしろ喧嘩うったがな。

「それに……………あなた個人の力がいかに強大であろうと世界を変えることなど到底……………」
「るせーっつってんだろアル。」……………」

「俺は俺のやりたいようにやってるだけだバーカ。」

んっ？黄昏れの姫巫女がこっちを見てるな。

「よう、嬢ちゃん名前は？」

鎖を壊して、嬢ちゃんの口についでる血をふいてやる。

「ナ……………マエ……………？」

「ああ。教えてくれないか？俺はナギ。ナギ・スプリングフィール
ドだ。」

「アスナ……………アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・
エンテオフュシア……………」

長いな。さすが王族か。

「なげーなオイ。けど……………アスナか、いい名前だ。」

「……………」

こんなガキを戦場にださせるわけにはいかねえな。ガキは笑ってな
くちなな。

「よし、アスナ待つてな。行くぞ、アル！詠春！」

「はいはい。」

「やれやれ。」

ふん、そういつてるくせに顔はやる気満々じゃねえか。

「敵は雑魚ばかりだ行動不能で充分だぜ！」

「ザコといつても数はしゃれにらんぞ。」

「数だけだろ？そんなの俺の敵じゃねえな。」

シルフに教えられた呪文を使ってやる。

「……………な……………れ……………」

裾を引つ張られたので振り返ってやり、話しやすいよう目線を合わせさせてやる。

「ん？どうした？」

「……………いやな……………よかんが……………するの……………しない……………で……………」

「ふっ、任せろ。アスナに害をなす連中は俺が消し炭にしてやる。」

「……………（しく）」

ちびっこ師匠のせいかマスターにいろいろ扱かれたからな。まあ、俺も賛成だからいいけどな。

「何している。先行くぞナギ。」

「おやおや、まさかナギがロリコンだとは……………」

「だれがロリコンだ！雷の斧！……………」

「おっと危ない危ない。」

ちっ、避けやがったか。

「まあ、行ってくる。俺の活躍をしっかりと見てな。」

アスナの頭を撫でやってから外にむかった。

「うん……………見てる……………がんばって……………」

…

「おう！」

さあ、戦いの時間だ……………始まるのはただ一方的な虐殺だな。

外ではすでに二人によって寄ってきていた敵は殲滅されていた。

「さて、詠春は護衛を頼む。アルは妨害宜しく！」

指示をだし、予め決めていた役割をこなす。力は使い方しだいでと
思い出したくもない修業で教えられたから、必死で戦術と戦略を学
んだんだ。智と力……………この二つを両立させることができた時
は嬉しかったな。（戦闘以外はだめだがな！）

「分かりました。」

「ああ。」

でかい魔法を使うため詠唱に入る。

「全ての風の精霊よ、精霊王との契約に従い我に従え、幾千幾億に
重なりて……………」

スゲー魔力使うな……………。

「すごい魔力ですね。」

「天空に集いて来たれ、我が前に立ち塞がりし愚かなる者に裁きの雷を与えん。」

空一面雷雲に覆われる。

「おっと、悪いが通さないぞ。」

「向こうも必死ですね。」

よし、詠唱完了……………いくぜ！

「喰らいやがれ！裁きの神雷！！！！！」

戦艦、精霊兵などの帝国兵に上空から流星群のように雷が降り注ぎ、目標を追尾して確実に敵を殲滅する。

「ふふふ、相変わらずでたらめですね契約者は。」

「全くだな。」

うるせえ、これ使っと頭が痛いんだぜ？脳の許容オーバーでな。

「しかし、これで殲滅完了だな。」

数分後、戦場は沈黙していた。

「っ！ナギ避けなさい！」

「なっ！」

視界の片隅に光が見えた。

ナギSideOut

離
璃
S
i
d
e

あれが紅き翼……………あわわ、戦略が意味を成しません。

「報告します。本体が敵の攻撃により戦闘継続不可能とのことです。」

さすがにシルフさんを倒した人です。

「では、これより作戦を変更します。目標の最優先事項は黄昏れの姫巫女アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの確保。第二に紅き翼の殲滅です。」

「了解」

「タンホイザー発射準備です。」

「イエス、マジエステイ。タンホイザー発射シークエンスを開始します。エネルギー充電開始。」

次はレミニオンたちです。

「MS部隊に通達。タンホイザー発射後発進。」

隊は紅き翼を

攻撃……… 隊は黄昏れの姫巫女の確保でしゅ。」

これでいいよね？いくらなんでもステイニー二機、レジエンドに各部隊のMSです。持ちこたえてくれるかな？持ちこたえてくれるといいな〜。

「タンホイザー充電率80%……………90……………100……………
… エネルギー充電完了。行けます！」

これで墜ちてくらしゃい！

「あわわ、撃ってください。」

「全乗組員は対ショック態勢を取って下さい。」

あわわ、忘れてました。

「では、改めてうって…！」

「タンホイザー発射！」

超遠距離にいるミネルバから光の本流放たれ紅き翼がいる地点に向かっている。

「次、MS部隊発進どうぞ。」

「了解。部隊発進する。」

「次 部隊どうぞ。」

「了解。目標を駆逐する。」

「部隊、発進どうぞ。」

「我等が主のために。」

「部隊、貴女達が勝敗の鍵です。がんばって下さい。」

「了解。これより黄昏れの姫巫女を奪還する。」

各部隊発進完了ですね。

「これよりミネルバは支援射撃を開始しつつ撤退準備を行います。」

「『イエス、ユアハイネス!!!!』」

「タンホイザーも再充電しておいてください。」

「了解。」

避けたら姫巫女さんが死んじゃうかも知れませんか？ナギさんが、がんばって防いでください。私達のためにも。

雜
璃
S
i
d
e
O
u
t

ナギ達と黄昏れの姫巫女（後書き）

次回は紅き翼対特務部隊です。

アスナの思い（前書き）

やっちまいました。なんか明らかにキャラ崩壊してる気がします。そして、また続きですすいません。

ナギSide

アスナの思い

うおっ、あぶねえ！ってやばい！

「直撃コースじゃねえか！」

アルのお陰で俺は回避できたが……………。

「任せろ、夕風で断ち切る！」

「頼む！」

「永遠神剣第四位夕凧発動！！！！」

夕凧の効果は、刀身に触れたエネルギーを消失させるんだっとな。
使用回数はあるみたいだな。

「はっ！」

見事に斬ったな。

「ナギ、どうやら特務部隊のお出ましです。」

「くそ、たしかにアスナ対策として連中はいい存在だな。」

「ゴーレムではないの？」

「あれは、純粹な機械らしい。」

魔法で動いてないからな。

「なるほど、厄介ですね。」

「ああ！だが断罪の神雷はまだ……おい、まさか……」

敵の戦艦が艦首を上に向けていた。

雜璃Side

さすが風の契約者とそのお仲間さんです。

タンホイザーが消されるとは思いませんでした。

「タンホイザー充電完了しました！」

「上空の雷雲を狙ってください。」

「了解！角度調整完了。タンホイザー発射シークエンス開始します。」

「撃ってくださいっい」

あわわ、はちゅどちゅの魔法大丈夫ですね？

ナギSide

ちっ、間に合うかわからんが仕方ないな。

「断罪の神雷……………術式改変……………神雷剣！」

術式と敵艦の主砲は同時だった。

ふう、どうにか間に合ったか。

今、俺の周りには神雷を高圧縮した剣が六本浮いている。

「来ましたよ。」

「行くぞ！」

「ああ。」

たしか、モビルスーツっていったな。15機だが問題なのは三機か。

「あの三機以外は夕凧で一撃のはずだ！」

「知ってるんですか？」

「後で教えてやる。」

銃撃を結界で弾きながら考える。なんか嫌な感じなんだよな。

「これはっ、面倒ですね！」

重力の槍を大量に創りだし相手に打ち出しているが……
……相手の高速移動が凄すぎるな。

「そこだ！」

アルの攻撃によって巧に誘導された敵を狩ってゆく。

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！」

問答無用で広範囲攻撃によって何機かを落とす………そし

て、留めをさすまえに三機と戦艦から支援が来て撤退される。

この繰り返しを数十分間続けた。

「ふう、残り三機ですね。」

「だな。」

「ここからが本番だろうがな！」

剣を構え、紫色の光翼を展開し高速移動してくる。

「任せろ！」

俺と詠春で受け止める。

「させません。」

小型の浮遊砲……………たしか、ドラグーンというのが俺達を狙っていたのをアルが防いだようだ。

「より……………目標をナギ・スプリングフィールドに固定。」

「了解。」

「おい！」

「人気ですね。」

冗談じゃねえぞ！

「そうだな。早くけりを付けるぞ！」

「おう。」

更に苛烈差がましてきやがるが……………隙ができるぜ！

「神鳴流奥義、天翔龍閃！！！！！」

敵の隙をつき、相手の背後からの攻撃……………まず一機か。

「む、ナギ……………ここはまかせてお嬢さんの所へ行け。別働隊がいたようだ。」

「マジかよー！」

「では、ここはお引き返けしませう。」

「分かった！」

無事でいるよ！

雜
璃
S
i
d
e

ナ
ギ
S
i
d
e
O
u
t

あわわ、気付かれちゃった見たいです。

「すぐに 隊に連絡して下さい。」

「了解。」

あの、二人も危険ですね。

「艦長……………紅き翼のアルビレオ・イマより膨大な魔力反応を確認しました。」

「……………効果はなんですか？」

「デスティニーとレジェンドの重力が数百倍に跳ね上がっています……………」

あわわ……………これを狙ってたんですか……………非常識です〜

「ぶじじみ……………」

「艦長。」

今度はなんですか？

「秘匿回線で通信が入ってます。」

「秘匿回線って……………繋いでください。」

いったい何でしょうか？

雜
璃
S
i
d
e
O
u
t

さて、ちまちまと撃ち込んでいた術式が効果を発しましたね。

「詠春、今がチャンスです。」

「ああ、神鳴流奥義、魔王炎撃覇！！！！」

黒色の炎を纏った斬撃ですね。

腕を焼き切るほどの火力ですか……………神鳴流は化け物
ですね。

「やはり、このままではおらんか……………」

「ええ、引き続き攻撃しましょう……………おや？」

「どつした？」

戦艦からの援護射撃がやんでますね？

「この戦い……………もうすぐ終わりそうです。」

「なら、楽でいいのだがな。」

「全くです。」

まあ、ナギしだいですね。

アスナSide

アルビレオSideOut

ナギたちが、おそとにいつてからすごい数の雷の音がたくさんする
..... 大丈夫..... かな？

「しかし、三人だけで大丈夫なのか!？」

「しかし、我々にはどうしようもないではないか!？」

大人達が言い争っている..... ナギ達どうなったんだろ？

崩れた壁から外を覗き見るために移動する。

「しかし、風の契約者様コントラクターなんだろ？大丈夫だろ。」

「それも疑わしいだろうがな。だいたい、大精霊ってのも疑わしい
だろうが。」

「会うことも稀らしいし、まして倒すなんてな。」

んしょんしょ……………やっと登れた。

「すごい……………」

すごい数のが落ちてとんどん敵を倒している。

「あれなんだろ？」

光がナギ達の向こうから迫ってきた……………ナギは無事みた
い……………よかった。

それから、光の前に不思議な剣を持った人が立った。

光が剣に触れると光が消えた。私と同じ力？

それからナギ達は変なゴーレムと戦いだした。これが、嫌な予感？

ゴーレム達と戦っているナギ達を数十分見ていた。

「姫様危険です。こっちに……………」

「大丈夫……私の身体は……民のために……あるから……危険なことはいない。」

「しかし！」

大丈夫、魔法で私を傷付けることなんてできはしないのに。

「それに、どこにいても同じ。」

「そんなことはありません！」

「いいえ、黄昏れの姫巫女の言う通りです。」

「あっ………」

壁を更に突き破り、大きな手が私を掴んだ。

「我々テラス帝国特務部隊が黄昏れの姫巫女をいただいてゆく。」

「待て！」

「抵抗するなら殺す。」

「っ!」

そっだよね、自分の命が大切だよね……………。

「アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシアが命
じます。」

「なにか?」

大丈夫。どこに行っても扱いは変わらないし……………。

「私を連れて行きなさい抵抗はしない。ただし、戦闘を直ちに停止
して皆とナギ達の安全を保障して。」

「……………」

「姫!」

「良からう、我々の任務は黄昏れの姫巫女の確保。それ以外のことは任務に無い。故に後は艦長と協議しろ。では、ゆくぞ！」

塔から私を連れてゴーレムは飛び立った。

最後に見えたのは、大人達のほっとした姿だった。

ナギ……………ごめんね。

アスナSideOut

ナギSide

っち、MSか………アスナはいないみたいだな。よし潰すか！

「サンダーキック……!!」

メイドが使い、魔王も一撃で倒す技らしい。

「っ!」

やっぱり、白いの一撃だな。

「雷の暴風!」

更に赤い奴に暴風を放ち、隙を作り神雷の剣を二本叩きこむと同時に爆発がおきた。

「まず二機!」

うお、あぶねえな。赤いザク二機の砲撃か？

「当たらなければ意味ないぜ!」

虚空瞬動で回避しつつ接近してゆく。楽勝だな!

「なら、当てるだけ。」

「Target Rock……………目標を狙い撃つ。」

なんか弾けたような気がする、行きなり反応速度が上がってきやがった！

「っち、魔法の射手・連弾・200柱!!!!!!」

200を煙幕がわりにして、もう200を誘導して敵の背後へとまわす。

「甘い。っ!」

「この程度なら、撃ち落とす。あ……………」

全部撃ち落とされるのは分かってんだよ!

「これで終わりだ!」

魔法の射手を囷にして隠していた近付けた神雷の剣が真下からザク

を貫き爆発を起こす。

「機体大破……………脱出。」

「悔しい。でも、私達の勝ち。」

ふう、後二本が行けるか？いや、行ける。しかし、後一機はどくだ？まさか！

おいおい、こいつら時間稼ぎの罠かよ！

塔の方から、最後の一機……………レジェンドがこちらに向かって来ていた。

「お前が私達の機体を破壊したのか……………」

「ナギ……………」

「アスナ！」

アスナはレジェンドの手に捕まえられていた。

「見ての通り、黄昏れの姫巫女は私達が頂いた。」

「ふざけんじゃねえ！」

アスナを物みたいにいいやがって！

「だが、姫巫女は了承した。」

なんだと？

「アスナ本当なのか？」

「うん。だから、戦わなくていいよ。兵は引いてくれる。」

そんな何もかも諦めた顔でいわれても納得できるか！

「お前は本当にいいのか？」

「うん、これでいいの。」

「嘘だな。」

「本当。」

「なら、そんな顔するかよ！ただ諦めてるだけじゃねえか！」

「っ！」

「いいか、アスナにだって自由にしたらいいんだよ。思ってること
言ってみろ！」

「でも……………」

ああ、くそ、いったい連中はアスナをどう扱ってやがった！

「でももへちまもねえ！ガキはガキらしく我が儘いえばいいんだよ
！お前はとうしたいんだ！心からの願いつて奴を言ってみろ！」

「……………わたし……………私は……………ナギたちと行きたい。」

へっ、それでいいぜアスナ。

「なら、分かるな？」

「うん……………助けてナギ……………」

「その願い……………アラルブラ紅き翼の風の契約者ナギ・スプリングフィール
ドが引き受けた！」

「うん。お願いナギ！」

「……………もういいか？」

「ああ、いいぜ。わざわざ待つなんていい奴だな。」

変な連中だ。

「私達にはこのような時には待つてやるのが作法とインプットされ
ている。」

どっかで聞いた気がするな。考えるのはやめだな。

「じゃあ、提案があるんだが？」

「なんだ？内容次第じゃ考慮する。」

「簡単だぜ？アスナを降ろして戦わないか？そっちもアスナが死んだらこまるだろ？」

お前らの目的はアスナの確保だろ？この提案は悪く無いはずだぜ！

「……………良かる。黄昏れの姫巫女をあの崖に置いて来る、しばし待て。」

「ナギがんばってね。」

「おう、俺は最強クラスの魔法使いだからまかすとけ！」

そして、奴がアスナを置いて戻ってきた。

「では、始めよう。」

「おっ！」

こうして、アスナを巡る戦いは最終局面に入った。

黄昏れの姫巫女最終戦

奴とアスナを賭けた戦いが始まった。

「貴方相手に手加減は無用。SEED発動。Iブレイン高速演算開始、ドラグーンシステム起動。敵対勢力を危険度S指定。」

なんかかなり危なそうなんだが？

ドラグーンは大型二機と小型三機………危険は大型と高出カビームライフル………まさかとは思ったが、絶対にちびっこ師匠関わってんな！

修業で何回か見せて貰ったしな。武器だけだが。

「手加減はいらねえぜ！」

「シュンタクシス・アンティケイメノイン気と魔力の合一」。

左手に「魔力」、右手に「気」を溜めて融合させ、体の内外に纏っ

て強大な力を得る高難度の究極技法、咸卦法を使用する。発動すると、肉体強化・加速・物理防御・魔法防御・鼓舞・耐熱・耐寒・耐毒等の作用が働く優れもんだ。

「喰らいやがれ千の雷！！！！」

「フルバースト。」

千の雷を的確に避けたり弾いたりしながら、ドラグーンによる砲撃を行ってくる。やっぱ、アルと詠春の援護ないと面倒だなぁと。

「千の雷を維持、雷の刃！！！！」

雷の刃……………マスターいわくサンダーブレードはその名の通り雷でできた馬鹿でかい剣だ。

「まず三機！」

大型1と小型2を破壊した。

「そして、一撃だ。」

「ちいつ！風花風障壁！」

ゴーレムの素手による一撃を貰った。いてえな。障壁の上からなのに吹っ飛ばされたぜ。

「堪えたか、私のエブレイン、ラプラスによる未来予測によりお前の勝利は不可能だ。」

「へっ、俺は不可能を可能にする男だぜ？未来が見えるってんならそのふざけた幻想をぶち壊すまでだぜ！」

「良かるう。ならば受けてたとう。」

そして、始まった砲撃合戦。

「魔法の射手300柱、雷の斧、雷の暴風……！」

「成る程、動きを封じてきたか。だが、甘い。」

それから、紙一重の戦闘が続いた。

「そこだ！」

「しまった！」

千の雷が降り注ぐ中行われる戦いは激闘というに相應しいな。俺は、神雷の剣に落ちるから平気だな。

奴のビームライフルに神雷の剣を叩きこみ爆発させ、必殺アイテムを使い詠唱に入る。

「……………契約に従い（ト・シユンボライオン）、我に従え（ホ・テュラネ フロコスディアークネート・モイ）、炎の霸王、来れ（エピゲネーテート））、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよ（レウサントーン）、ソドムを（ピユール・カイ）、焼きし（テイオン）、火と硫黄、罪ハ・エスフレゴン・ソドマありし者を（ハマルトートウス）、死の塵に（エイス・クーン・タナトウ）」

「しまった！」

「燃えるウーラニア・フロゴシス天空術式固定、同時発動、千の雷、術式固定、術式統合！
範囲固定！開放！断罪の雷炎！！！！！！！！」

うわ、すげー魔力喰うぜ……………マスターから教えてもらったこ

の魔法。マルチスベルと片方を無詠唱で魔法を使わなきゃできない奴だが。説明された時は千の雷一発一発がエクスプロージョンみたいな奴とか意味わかんないこと言ってたっけな。

「くっ、回避不能……………多重攻撃ですか。」

「ああ、お前もさすがにこの数を回避できないだろ。そのために、密集させたんだからな！」

轟音を轟かせ大地を破壊しまくった。

後にはもう、相当深いクレーターと壊れかけのレジェンドだけだった。

「お前、やっぱり女だったのか。」

コクピット(?)が剥き出しになっていた。

「よくもレジェンドを壊してくれたな。」

傍らにあった鎌をとって出て来やがった。まだやる気かよ。

「さて、続きをしようか。」

「まだやるねか？乗り物は壊れたぜ？」

「何か勘違いしてるようだが……………私達ミニオンは乗らない方が強い。」

「なんだそれは！」

「あれは大規模殲滅用だ。小回りが効かないのが弱点だな。」

「まあ、いい。どっちにしろお前を倒せばいいだけだしな！」

「違うな。私達5人だ。」

「えっ？」

残りの四人がこっちに向かって来てるな。

「っち、そついつことかよ。」

「誰も一対一とは言っていないからな。」

「まあ、こっちにも増援があるからな。いくぜ！」

「ああ。」

っ、早いな。縮地か！

「右脳、エブレイン 騎士発動。身体能力を2.5倍に設定。左脳、エブレイン ラプラス起動。未来予測発動。」

おい！かなりやべえな、こんなのが後四体かよ！

「千の雷・圧縮！千衝雷・螺旋撃！」

「魔王炎撃覇。」

おい、神鳴流かよ！

二人の攻撃がぶつかり合い、回りにさらに甚大な被害を与え合う。

「化け物だな。」

「私達は戦うために作られた人形だからな。」

「それも違うと思うが、決着つけるぜ！」

「……」

スレイヴ
聖痕を全力で発動させる。これによって、俺の周りに風を纏い、空中に浮く。

「空中戦か、良かろう。自己領域展開。身体能力強化を強制解除。」

向こうも浮いてきたな

「いくぜ！」

「刈り取る。」

空中で高速戦闘を行っていく。

その中で溜めた力を一気に解放した。

「これで終わりだぜ！雷神の鎚ミョルニル！！！！！」

「がああああ！！！！！」

決着をつけるために解放した力を全て雷神の鎚に乗せて力づくで叩き潰した。

「っ、さすがにきついな。」

「はあ、はあ……………ここまでとはな。」

クレーターの中央でボロボロになってるが生きてるようだ。

「隊長……………貴女の戦闘データは私達が引き継いでいます。」

「アップデート確認完了。問題無し。」

ちっ、もうきやがったか。

「ナギ無事か？」

「ずいぶん派手にやりましたね。環境破壊ですよ。」

「うるせえー！」

「「「これより戦闘行動に入る。」」」

「一斉に武器をだしたか……………こつちも臨戦態勢を整えるが、正直まずいな。」

「詠春にアル、どれくらい戦える？」

「かなりまずいですね。」

「五日ほどほぼ休み無しで走りつづけてからの連戦だからな。聞きたくないが、こいつらの力はどうか？」

「一級品、マスタークラスなみだぜ。しかも纏めてどんどん成長していきやがる。」

はっきりいって速攻でやらなきゃこっちがまずいレベルだな。

「それはまずいですね。万全ならいざしらず。」

「エブレイン起動……………戦闘を……………」

止まった？どうしたんだ？

「どっちら平気見たいですね〜」

「……………了解。任務終了、回収して帰還する。解散。」

二人を除いて、どっかいきやがった。

いったいどうしやがったんだ？

「おい、どうしたんだ？」

「私達の主より……………最優先命令権を発動なされました。私達には戦闘を中止し、ミネルバに帰還命令ができました。」

「では戦わなくていいのですね。」

「風の契約者様。主より言づてを預かっています。」

「なんだ？」

こいつらの主はだいたい分かってるから、聞かないとやべえ。

「黄昏れの姫巫女アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシアの保護を任せる。それと、次に行われるグレートブリッジ攻略作戦には見る以外参加するな。大人しくアスナのお守りをしておけ。追伸、Lミニオン一体に苦戦するとはまだまだのようだな、明日から指輪の重力を発動させるので覚悟するように……………」

やべえ、指輪外せないし！仕方ないか。

「彼女達の主と知り合いなのですか？」

「ああ、今回は命令系統別見たいだな。」

「で、どうするんだ？グレートブリッジわ。」

「まあ、見てるだけにしようぜ。多分マスターがかかわるってことは俺達にとつて危険でしか無えな。精霊王束ねてる奴だから、むしろ見て学んだ方がいいぜ。」

「成る程、なら見てるだけにしましょう。私達は修業しながらですが。」

「ああ、まだまだ未熟だ。小次郎様の域まで神鳴流を出しきれないいな。」

「神鳴流の開祖や免許皆伝は化け物だらけらしいな！頑張れよ詠春！」

「お前もな。」

「では、そろそろお姫様を迎えに行きましょう。」

「。お。」

もっともっと強くなってやるぜ！とりあえず、燃える天空をあんち
よに見ずにびきるようにするか。

雜
璃
S
i
d
e

あわわ、ご主人様からの緊急通信です。どうしましょうっ？

「う………ごきげんいかがでしゅか？」

「うん、微妙？」

あわわ、どうしましょう。

「次に始まるグレートブリッジ攻略作戦についてだが？」

「はい、今任務中で………」

「どんな任務だ？」

「機密が………」
「答える。」
「黄昏れの媛巫女の確保でしゅ！」

あわわ、どうしましょっ！すごくこわいです！（ガタガタブルブル

「………いいのか、部外者に漏らして？」

「……………（言い分けあるか！）」

「あの雛璃様？任務を……………」
「黙ってくださしい！」……………はい。」

あわわ、何かまずいことしたんでしょうか？

「ひよとして、ナギと戦ってる？」

「はい、黄昏れの姫巫女を確保するために……………戦ってます。ダメでした？」

「ああ、ダメダメだな。」

がーん。だめだしされました。

「まあ、今ミニオンに帰還命令出したから、すぐもどるだろう。」

「はい……………」

「話し戻すけど、一週間後のグレートブリッジ攻略作戦にレンとリを連れてきてくれ、今オスティアで王女と共にスイーツ食べてるらしいから。」

なんでそんなところで、そんな人物と？

「機体も盛大に壊れたみたいだし直してもらえ。これは最悪のケースだが、ミネルバを爆破する可能性もあるから荷物纏めておけ。では、グレートブリッジ攻略作戦で会おう。その手柄はやるから安心して撤退しらよ。」

ふう、助かりました。

「Lミニオン部隊全員帰還しました。一人損傷が激しいです。ラボで治療させます。」

「お願いします。本艦はこれよりオスティア近辺まで後退後待機、ミニオンが回復しだいレン様とリリ様を回収するためオスティアに派遣します。それまで持たせてください。なお、本国には任務失敗。黄昏れの姫巫女は朱き翼が手に入れた。本艦は修復作業に入るため連絡はできない。グレートブリッジ攻略作戦には参加できるようにすると連絡入れてください。」

「了解。いいのですか？」

「嫌なら降りてくれても構いません。私達は世界のために戦うだけです。」

「みんな雛璃様についていきますけどね。給金も別で頂いていますし。」

「だな。帝国じゃなくてもこの艦なら引く手数多だしな。」

「みなさん。ありがとうございます。生活を保障できるくらいのスポンサーはいるので資金は大丈夫でしゅ。」

「あはは、やっぱ和みますね。」

「雛璃様、最高。」

「大丈夫ですか？」

「あわわ、大丈夫です。」

これから、大きな戦いが始まります。皆さんを死なせないようにし

ないと……………ミニちゃんたちも怪我がないように気をつけ
なきゃ……………うん、頑張る……………

帽子を深く被り、新たな戦略を練るときの格好にした。周りからは
かわいいと言われてるけど、これが落ち着くの。

願わくば、次もみんな無事でいますように……………。

離境 Side Out

黄昏れの姫巫女最終戦（後書き）

PV1万5千にユニークが一万5千……………ありがとうございます。

ルルとナナを生かすっぱなしにするかどうか考え中。要望あればお書きください。

ちなみにその場合、寿命を延ばす薬のため、ラカンには金稼ぎのために傭兵になります。

どっちにしるなりますけどね。

話しかかりますがラグスムエナまじ可愛いです。神〇リマイスター面白いよ。アリスにも期待ですが……………

次回予告。

それは、色とりどりの群れだった。視界をうめつく青赤緑白黒の存在。理不尽な強さに、卑怯な呪法……………帝国は壊滅的な被害を受けるはずだった。

しかし、救世主が現れるたのだった！

次回！「創世魔法しよう………幼女レンと時空幼女リリ〜創って創って創りまくり斬りまくります〜」

無双魔法幼女始まりたす。

なお、予告なく変更する場合と、グロテクスなシーンが確実に入ります。

なんだこの痛い次回予告は！うん気にしたら負けだね。出して欲しいMSあったら、感想に書いてくれれば次の話で活躍できるかもしれない。書いてる途中ならね！

では、お休みなさいませ。

アリカとの出会い（前書き）

すみませんまちがってましたPVが15万でした。

今17万に増えてましたが。

あと、次回予告（？）はできなかつたです。先にアリカとの出会いを書きました。

アリカとの出会い

レインサイド

現在、私とリリはオスティアに来ていたのですが困ったことが起き

ました。

「まさか、リリと逸れるとは思わなかったぜ。」

少し目を離したらいなくなってた……………大丈夫かな？

「……………追跡は？」

「それがよ……………途中から次元を断ち切って移動しやがったみたいでマーカー消失してるぜ。」

マーカーが消えたんなら追跡は無理かな。

「今の所、リリのライフデータは問題ないぜ。」

「……………そう。」

なら、探さないと……………不安がって泣いて無いといいな。

「……………とりあえず……………写真創って……………聞き込み。」

「了解。」

他人と話すのは苦手、怖いし……………どうしたらいいのかわからない。

「まあ、聞き込み開始だな。」

「……………（じく）」

その後、しばらく聞き込みをすると見た人に出会えた。

「このお嬢さんなら王家が管理する森の辺りで見たな。」

「本当か!」

よかった。これでなんとかかなりそう。

「ああ、地図あるか?」

「……………（しぐ）」

「ここが王家の森だ。入ったら何されるかわからんから早く見つけてやるといい。一応結界が張られてるから平気だとは思っがな。」

それはまずいかも……………リリに結界なんて意味ないから。

「ありがとうよー！」

地図を受け取ってお礼をする。

「……………これ」

「お、お酒じゃないか……………いいのか？」

「……………（しぐ）」

おにいさまが研究したレシピで創った美味しいお酒をあげる。

「……………ありがとう……………」

「じゃあな！」

私達は目撃情報があった王家の森へと向かった。

アリカSide

父上は何を考慮しておる！

アスナを防衛の為の兵器にするの事について問いただしたが、全く相手にされなかった。

いくら王族とはいえ、あのような子供に頼るなどという恥をよくで
きるものだ！

「アリカ・アナルキア・エンテオフユシア王女殿下！」

だれだ無駄にフルネームで呼ぶのは、まるで紹介ではないか。

「何用だ？」

「王女様、どちらに行かれるのですか？」

そんなことが、得に問題ないから答えてやるか。

「森に行ってくる。」

「森？王家の聖域ですか？」

「そうだ。」

森は話し相手もいるし、気持ちを落ち着けるのにちょうどいいからな。

「危険です！もうすぐヘラス帝国が攻めて来るのですよ！」

「なればこそ、動物達も避難させねばならぬ。」

「しかし……………危険です。」

ふう、入口についたな。

「それに結界もあるから心配するな。誰かが招き入れぬ限りな。」

そう、招き入れない限り王族しか入れぬ。

「分かりました。お気をつけください。」

「ああ、では釣りでもしてくる。」

「釣り？」

さて、釣れるかな？

王家の森についたが……………む、どうやら先客がいる見
いだな。

「準備せねばな。アルティス・スベキアリス 特殊術式、無詠唱用発動鍵設定キーワード(シネ・
カントウ・クラウイス・モウエンス・シット)、ウーラニア・フロゴシス「燃える天空」、
契約に従い(ト・シユンボライオン)、我に従え(デアアーコネー
ト・モイ)、ホ・テュラネ・フロゴス炎の霸王、来れ(エピゲネーテートー)、浄化の炎、フロクス・カタルセオース
燃え盛る大剣、フロキネー・ロンファイアほとばしれよ(レウサントーン)、ソドムを(ピユ
ール・カイ)、ハ・エペフレゴン・ソドマ焼きし(テイオン)、火と硫黄、罪ありし者を(ハ
マルトートウス)、ウーラニア・デロゴチズネ・エフェクトゥス死の塵に(エイス・クーン・タナトウ)、燃え
る天空、術式封印……………さて、では行くか。」

森をしばらく歩いていると動物達がよってきた。

「みな元気そうだな。ああ、分かっている、侵入者だろ？」

鳥……………フェニックスを肩にのせ、傍らにユニコーンをつれて
奥へと進む。

「君はこんなところで何をしている？」

「お姉ちゃんだれ？」

「私はアリカだ。」

「わたしはりりだよ。とりさんをおってたらここにきたの。」

「結果があつたはずだが？」

「どうやら大丈夫見たいだな。」

「けっかい？てんちゃんできたの。」

成る程、転移ではなく空間そのものを繋げたか、それならばたしか
に入れるな。まあ、対策など出来ないし、できる存在もないだろ
うがな。

「つまり逸れたのか、この森は危ないから早く帰るといい。」

「りりはだいじょうぶ〜うまさんきもちいい〜」

完全に子供だな。まあ、構わないかな。

その後、しばらくゆっくりしていると動物達が騒ぎ出した。どうやらお魚がかかったようだ。

「お姉ちゃん？」

「ああ、どうやら掛かったみたいだな。」

「アリカ・アナルキア・エンテオフユシア殿下ですね。御命頂戴いたします。」

二十人か、やはり王族の中に完全なる世界と繋ユスモエンテレケイアがっている痴れ者がいるようだな。

「おい、その小娘はどうする？」

「一緒に始末する。」

ふむ、リリをどうするかな？

「リリ隠れている。」

「だいじょうぶだよ？」

「私が相手する。」

「わかった。」

「皆も下がっている。」

動物たちも下がらせた。では行くとするか。

「魔法の射手1001柱！」

「火炎壁！」

炎の壁で魔法射手を防ぐ。

「馬鹿な！」

「このような魔法が使えるなどという、報告受けてないぞ！」

「オスティアの王族には時々特殊な力を持った者が生まれるのでな。黄昏れの姫巫女みたいだが、私の力は誰もしらんよ。その訳は解るな？」

「くっ！一斉にかかれ！」

遅い。

「燃える天空、解放！！！！」
ウーラニア・立山ヨレタム

事前に詠唱した燃える天空を発動した。

「貴様正気か！」

「森で炎の戦略級魔法を使うなど！」

確かに普通なら燃え移るだろうな。

「我に従え。」

「ガアアアアアア！！！！！」

「馬鹿な、なんで俺達以外燃えないんだ！」

「残るは貴様だけだな。」

他の奴等は燃やし尽くした。

「まだまだ、増援がいる！」

奴の後ろから何か向かって来てるな。

「さあ、お前達やっつけてしま……………」

「リリか？」

馬鹿な後ろにいたはず。振り返っても誰もいない。

「なんだ貴様は、部下はどうした！」

「きまつてる？おにじっこしてあそんでもらったの。リリがおにで

顔と言ってることは無邪気な子供なのにやってることは違うな。予想通りあの二振りの剣は神剣か。

「動くな、切り札は最後に使うもんだ、こいつを使うとこの森もろとも消し飛ぶ。死にたくなければ……………」

そんなものまで用意していたか、炎なら操れるのだがな。

「ふふふ、一旦引かせてもらう。」

「あ、れんお姉ちゃん。」

ん？結界が消滅したな。

「……………やっと……………見つけた。」

「なんだ貴様は！」

「おい、そいつは！」

「……………ごめんなさい……………」

「何を謝っている？」

「簡単だぜ、面倒だからよ結界もろとも術式全部ぶっこわしちゃっただけだぜ！」

「なんだと！」

押しても反応ないようだな。

私がつっ込もうとした時、変な粒子を撒き散らし、二振りの剣を持つゴーレムが奴の手を切り落とした。

人形使いの一種か？

「貴様つら！」

「殺すな！」

危ない、とどめを刺す所だったな、せつかくの情報元だからな。

「止まって……………貴方は……………？私は……………レン。」

創世の魔女……………というより魔女っ子だな。

「成る程、この頃有名な子だな。私はアリカ……………アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだ。協力感謝する。」

「オスティアの王女様かよ。」

「いい……………リリが世話になったみたい……………だから。」

「このひびきするっ」

尋問するか。

「置いておいてくれ、誰が依頼者か話す気はあるか？」

「有るわけなかるっ！」

「……………まかせて。」

「いいのか？」

「ああ、楽勝だぜ！」

この口の悪いウサギのぬいぐるみはなんなんだ？

「な、何をする気だ。何をされても喋らんぞ！」

「完成、この自白剤を飲めば一発だぜ！副作用は……………」
ちよつと廃人になるだけ。」

それはちょっとでは無いが……………構わんな。

「さて、どうする？素直に白状するか、廃人になるか好きに選べ。」

「ふざけるな、そんな者信じられるか！」

「では飲め！」

「んぐ、くっ……！」

その後、色々聞かせて貰った後、動物達を避難させ、二人を王宮にある私の部屋へとつれていった。

それからかなり仲良くなった。

二、三ヶ月共に過ごし、二人共懐いてくれたからな。

「どうだ、美味しいか？」

「うん、おいしいよ。」

「はい。あ、連絡が来ました……………どうやら仕事できました。」

「完全なる世界か？」

「あと、ロウエターナルです。」

完全なる世界と手を組んだ連中だな。

「グレートブリッジで何かしているのは奴も言っていたな。」

「うん、どうやら大規模な戦力が準備されてるみたい。」

「たのしそう〜」

「あと、ヘラス帝国の攻撃は終わったみたい。」

「アスナはどうなったんだ？」

それが一番心配だ。

「朱き翼が保護したみたいだから大丈夫。」

「朱き翼？」

聞いた事無いな。

「あそこなら大丈夫。」

「兵器として使われるよりいいか。」

「それは大丈夫。」

「そうか、お前達もいくんだろ？」

寂しくなるな。

「うん。」「ミニオンを迎えに送るって行ってきたよ。」

「なら、私は私で探ろう。レンから貰ったこの発火布もあるしな。」

私の炎の王の力と相性がいい。

「うん。それじゃ、またね。」

「また、あそぼっね〜」

「ああ、待たな。無事でいろよ。」

「はい。」

「うん。」

そして二人と別れ、本格的な調査を開始した。

このような戦争は早く終わらせねばならない。

ア
リ
カ
S
i
d
e
O
u
t

アリカとの出会い（後書き）

アリカにつけてみた炎の王……………アスナちゃんいるしいいよね！

では、次回会いましょう。

グレートブリッジ攻略作戦開始！（前書き）

やっちゃまったぜ。駄文だと思われる確率たかし、恋姫のかりんやしえれんのような鼓舞かけないよ！

予定に無かった帝国 Side なんて書くからだけどね。後書きは無いです。明日というか、今日書く次話にこのまま続けるためです。

では、ごうぞー！

グレートブリッジ攻略作戦開始！

テムオリンSide

ようやく永遠神剣の準備が整いましたの。

「ヒツギ……………ミニオンの生産はどうですか？」

「くひひ……………問題ないよ姉さん。数も順調、素材はちよつたりなかったけどね。」

新たな材料を捕獲しませんといけませんね。

「では、グレートブリッジに送りましょう。」

「くひひ、すでに準備出来るよ。」

「さすが支配者ヒツギですね。作戦はどうなっておりますの？」

「日本のアニメからとった作戦だよ……………規模と物量はちがうけどね。」

我が妹ながらとんでも無いことしますね。覚悟なさいませ、次は地獄へ招待してさしあげますの。

「ところで、作戦名はなんですか？」

「それはね……………オペレーション……………」

テムオリンSideOut

久しぶりのミネルバ……………私は格納庫に案内された。

艦載機がずいぶん壊れてる……………。

「これは？」

「朱き翼と交戦したため、これ程の被害を受けました。」

ナギかな？

「分かった……………直す。」

「お願いします。」

「創世、修復……………」

「どうした？」

「作り替える。コード〔O O r s〕を19機」

次は戦争の介入……………容赦はしないの。

「了解だぜ、コード〔O O r s〕開始……………材料確保……………
創世開始だぜ！」

新たな力を手に入れ生まれ変わって……………一日中作り替える作業をした。

ハラス帝国Side

ハラス帝国Side

グレートブリッジ……………メセンブリーナ連合盟主国メガロメ
センブリアに続く巨大な橋を要塞化した物だ。ここを落とすべくヘ
ラス帝国軍は準備していた
。

グレートブリッジより数百？離れた位置に巨大な岩石にかこまれた
物体……………それは微弱ながら振動しているようだ。その周りに
いる多数の戦艦が巨大岩石に囲まれて作られた要塞へと入っていく。

「第23精霊艦隊到着……………本作戦に参加する全戦力の80%
が集結しました。」

「残りの集結を急がせる。テオドラ様の特務部隊はどうなっている
？」

「予定通り新たな兵器を持ち、直接グレートブリッジ攻略作戦に遊撃部隊として参加するそうです。」

そこは、官制室のようだ。中では多数のオペレーターが動き回っている。

「獣人部隊全部隊揃いました！」

「近衛竜騎隊も到着、本作戦に参加する全部隊99%揃いました。」

集結した兵数は一億近い数だった。

要塞の中でも一際豪華な区画があり、そこには多数の軍人が一人の綺麗な角の生えた女性に報告していた。

「セラフィナ皇女殿下、本作戦に参加する帝国軍99%揃いました。」

深紅の鎧をつけ、玉座に座っている女性はヘラス帝国第一皇女セラ

フィナだった。

「残りはテオドラのか部隊か？」

「はい、テオドラ様の特務部隊です。」

「そちらは、現地だったな？」

「はい。」

「ならばよい。」

セラフィナは席を立ち号令をくださった。

「では、1時間後作戦を開始する！」

その宣言に、その場にいた者達は驚いた顔をした。

「セラフィナ様、作戦開始時間は二日後では？」

「ふん、変更だ。本来の開始時間は既にばれておるわ。その為に、事前に早めに集結させたのだ問題ない。」

「それ……………」

ヒュンという風切り音と共に反論していた軍人の首が落ちた。

「片付けておけ。他の者は直ちに準備を開始しろ。一切の遅れは許さん。」

「……………イエス、ユアハイネス!!!!」

即座に部屋から退出し、進攻準備を開始に向かった。

「よろしかったので?」

「ふん、裏切り者を処分するのにちょうどよからう。」

「たしかに、反逆罪は死刑ですね。」

「さて、リディアアンのゴミミの変わりは予定通りにおおけ。」

「御意。」

セラフィナは部屋を出て行き、要塞の深部へと向かった。

そこには、台座があり宝玉が納められていた。

「では、始めるか。」

ここは王族しか入れぬ場所。

「いにしへの契約に従い、ヘラス帝国第一皇女セラフィナが願う奉る。」

言葉と同時に、腕を切り宝玉へと血液を流す。

宝玉の光りと共に振動が大きくなってゆく。

「ヘラス帝国守護竜竜巖よ今一度目覚め、我が呼び声に答えよ！」

「皆の者よく聞け、これより我等はグレートブリッジ攻略作戦を開始する。我等の悲願であるオステイア奪還作戦はかなりの犠牲を出し失敗した。これ以上犠牲をだすわけには逝かぬ。よって、巖竜と共に転移しグレートブリッジを攻略する。その後、即座にメセンブリーナ連合盟主国メガロメセンブリアを強襲し戦争を終結させる。メガロメセンブリアさえ潰せばオステイアは外交によって取り返せる。死んでいった者達の為にもこの戦は勝たねばならぬ。苦しい戦いになるかもしれぬが恐れるな、我等には守護竜がいる！我が帝国の威信と我等の命を賭けこの作戦を完遂させる、皆の者奮起せよ！グレートブリッジ攻略作戦開始！！！！」

セラフィナが剣を掲げると同時に12回にわけ転移が開始された。

「伏兵部隊転移完了しました。」

「巖竜を転移させよ」

「イエス、ユアハインス！！」

巖竜が転移し、歴史に残るグレートブリッジ攻略作戦が開始された。

ヘラス帝国 Side Out

デュナミス Side

あの女帝め、やっつけてくれるな。

「どうしたんだいデュナミス？」

「ヘラス帝国に紛れこました部下や協力者が尽く抹殺された。」

「それはまた……………王はどうしてるんだい？」

「真つ先に沈黙させられた。意識不明の重体だそうだ。私の部下達に罪をきせて抹殺の口実にされた。」

「凄いな。」

「しかも、気に食わないだけで罪をでつちあげ容赦なく殺しやがる。」

「思ま思ましい小娘め。」

「それ、よく指示持つね？」

「嗅覚でかぎ分けるのか分らんが、尽く我が部下達を抹殺するのだ。的中率100%だ。」

「なんだい、その化け物は？」

「全くだ……………」

む、ヘラス帝国に動きがあったようだな。

「してやられた。」

悔しそうに仲間の一人がいった。

「どうした？」

「帝国内部の潜入していた最後の奴が殺された。それと同時にグレートブリッジに転移で攻め込みやがった。」

なんだと！

「たしか、二日後じゃなかった？」

「いきなり早めやがった。」

「見事に裏をかかれたな。連絡をとるか。」

「だね。」

気に食わぬが連中は使えるからな。

デュナミスSideOut

グ
レ
ー
ト
ブ
リ
ミ
ジ

セ
ラ
フ
ィ
ナ
S
i
d
e

「本日も以上なし、さてもどるか……………ん？なんだ？急に暗くなったな、太陽でも……………か……………くれ……………なっなんだこれ……………」

彼が最後に見たのは巨大な岩石の固まりだった。

着いたか。

「転移無事完了しました。」

「巖竜よ撃て！」

手を振り、指示をだすと巖竜により竜の吐息……………ブレスが放たれた。

「グレートブリッジの障壁消滅しました！」

「全部隊展開、二射めと同時に攻撃を開始せよ！」

「全部隊発進どうぞ！」

二射めのチャージはもうすぐだな。

「全部隊展開完了。」

「撃て！」

二射目によって、出撃しようとした部隊は皆の防壁と共に消滅した。

「全部隊攻撃開始！」

勝ったと言いたい所
だがまだだな。

セリフイナSideOut

ヒツギSide

ん？デュナミスから通信だね。

「どうしたんだい？セラフィナの女帝に出し抜かれたのかい？くひひ。」

「何故それを知っている。」

「簡単な事だけど教えないな。」

「くっ、契約通り頼む。」

くひひ、ずいぶん嫌がってるね。

「くひひ、了解。とくどご覧あれ。」

通信を終えた。さて、姉さんに確認をとろうか。

「やるけどいい？」

「ええ、構いませんわ。連中もすぐ介入するでしょうから。」

「くひひ、了解。ポチツとな。」

赤いボタンを押した。

トシギSideOut

セラフィナSide

っ、嫌な予感がするな。

「全軍に警戒体勢をとらせよ。」

「はっ！」

「っ！多数の隕石を確認！」

隕石だと？

「大気圏で燃え尽きません！」

「直撃コースです！」

「迎撃開始！」

「全艦迎撃開始！」

これで、どうにかなればいいが……………。

「ダメです！」

「障壁展開！」

衝撃が襲ってきた。

「報告します。多数の隕石が障壁を突破しましたが問題はありま……………アラーム！侵入者！」

まさか！

「隕石の画像をだせ！」

「了解！」

突き刺さった隕石の画像がてる……………見ていると隕石が割れ、内部から五体の人型がでてきた。

「なんだあれは！」

「他の隕石からも多数でてきます！」

「全部隊に通達、直ちに侵入者を排除せよ。」

よもやこのような手段にでるとはな。

「え、なにこれ！」

「何事だ。」

「始めまして女帝さん。くひひ、僕のプレゼント………オペレー
ション・メテオは喜んでくれたかな？」

「貴様は？」

「僕は、支配者ヒツギというものさ。」

「完全なる世界か？」

「彼等とは同盟関係だよ。じゃ、頑張つて生き残りなよ？あの娘達の目的は君の抹殺だからね……………くひひ。」

言いたいことだけ言ってくれたな。

「第一、第五部隊生命反応途絶。」

「他艦からも援護要請が来ています！」

やってくれるな。

「私も出る。」

「危険です！」

「問題無い。皆は、部隊の安否を確認しろ。」

「了解！」

私は一人玉座へと向かった。

玉座に置いて有るもう一本の大剣を取ると気配がした。

「来たか。」

「……………」

「人形か、来い。」

襲い掛かって来る敵を右手の大剣で一刀両断し、左手の大剣で二体纏めて切り殺す。

「む、消滅したか。」

人形の身体と剣は光の粒子となり消えていった。

「これはなんだ？」

疑問に思いつつも、両手を動かし死体……いな、光りの粒子を量産する。

「ちっ、これは上級兵以外どうしようも無いな。」

外に向かうか。

「確認されてる数はどれくらいだ？」

「200以上の隕石でしたので、最低でも千以上かと思います。」

「分かった。」

これは仕方有るまいな。我のミスだ。

切り殺しながら外にでた。

「全軍に通達する。セラフィナ第一皇女が命じる、全軍一次後退し体勢を立て直せ！」

これでよい。

「リディア、後の指揮は任せる。」

「御意。」

通信を終え、脱出用転移魔法を使いグレートブリッジの前の地面へと降り立った。さあ、来るがいい人形共！！！！

グレートブリッジ攻略作戦〜セラフィナの戦い〜

見渡す限り視界一面敵だらけか、ある意味壮観だな。

後退の時間を稼がせてもらおうか。

「掛かって来い。」

襲い掛かって来る敵に一辺の容赦無く一刀の元に両断する。

どれも、相当の強さか。何より知らぬ魔法が面倒だな。

「重力加速、重力刀発動。」

重力を操り加速し、重力で強化した大剣で相手の武器ごと破壊して行く。

一人で戦いだしてから既に30分たった。

300……………ちっ、有象無象共が！

「この数のEミニオン相手に良くやるものだな。」

「デユナミスか、久しいな。」

三年ぶりか？Eミニオンを切り伏せながら会話する。

「相変わらずの化け物ぶりだな。」

「ふ、さすがにかすり傷は受けるがな。」

「諦め、我等の仲間にならぬか？」

「断る。このような無駄な戦争を引き起こした貴様等に協力する気は無い。ヘラスを舐めるな！」

「ならばここで死ぬがいい。」

さすがにこいつまで来るとまずいな。

「千刃黒耀剣。」

無数の石で出来た剣で無数の人形を串刺しにしながら、デュナミス
を片手で相手する。

「いくら何でも、我を片手とは……………何かカラクリがあるな。」

「ほっ?。」

「貴様は強くなりすぎています。これだけの高位魔法を維持しながら
の戦闘だ。永遠神剣を持つでも無い……………明らかにおかし
すぎるであろう?。」

「くっくく、これが私の本来の実力だぞ?。」

無論嘘だな。

「私の神託からは逃れられぬ!。」

ちっ、さすがに普通では避けられぬか……………ならば、我は否
定するまでだ！

「何！」

「隙ありだ！」

人形を両断したら、即座に身体を回転させ、デュナミスに遠心力を
乗せた攻撃をしかける。

「っ、だが見え……………っ！」

無駄だ！

「馬鹿な神託を超えただと……………」

「失敗したか、首を落とすつもりだったのだが……………腕だけ
とはな。」

我が瞳の力を狂わせるとは、さすが永遠神剣か。

戦術を変えたか、やはり先程殺せなかったのは痛いな。

「ゆけ、人形共！」

デユナミスが戦術を変え、人形共を指揮しながら他の完全なる世界の連中と仕掛けて来てから数十分がたった。

（セラフィナ様、部隊の後退がほぼ完了しました。セラフィナ様も撤退をお願いします。）

（リディアか………残念ながらそれは出来ぬな。我が退けば追撃が来る。我が殿しんがりを努める故、巖竜を置いて撤退せよ。）

（できません！セラフィナ様を置いて行くなど皆も納得しません。）

全く、仕方ない連中だな。

「全軍に通達する。」

人形を纏めて数体切り伏せ、全軍に勅命をだす。

「全軍撤退後より、全指揮権を第三皇女テオドラに移行する。万象貫く黒杭の円環！」

無数の石化の針を飛ばしながら伝達する。

「テオドラの補佐にリディアと雛璃をつける。」

「遺言か？」

デュナミスの言う通りだな。

「そうだな。ここからが本題だ。我命は巖竜を復活させたため、最早三日も持たぬが、我等ヘラス帝国の勝利は揺るがぬ！我が命を持つてヘラスに勝利をもたらす！」

（そんな……………聞いてません！）

（言っっては止めるだろ。）

（当たり前です！今セラフィナ様を失えば、残る第二皇女は病弱で

第三皇女はまだ子供ですよ！

まさに、その通りだな。

（だから、お前達で補佐しろ。どっちにする最早どうしようも無い事だ。悪いがヘラスとテオドラを任せる。）

（セラフィナ様はズルいです……………後の事はお任せ下さい。）

（頼む。）

「それが強さのカラクリか。」

「ああ、だがタダでは死んでやらんぞ。」

「デユナミス、勝手に死ぬのだから、ここは引いておけばいいのではないか？」

ほう。

「私は構わぬぞ？」

「馬鹿者め、そんな事をすれば後悔することになる。」

「ちつ、引いたらグレートブリッジやメガロメセンブリアなどメセ
ンブリーナ連合の主だった戦力を徹底的に壊滅させられたのにな。」

「貴様の考えなど分かるわ。」

面倒な奴め。まあ、よい。ここで、完全なる世界共の戦力を削り取
つてくれる！

「では、始めるか……………巖竜よ、宝玉を媒介に我が身に宿れ！
……………」

我と巖竜が光り、巖竜光りの粒子となり私の内部へと流れ込んでく
る。

「止める！」

もう遅いわ！襲い掛かって来た人形を片手を振り消滅させる。

「さて、行くぞ完全なる世界！」

背中から竜の翼が生え、身体中に紋様がでている。

「総力戦だ、ここで奴を逃せば我等の計画は致命的な遅延を被る。何としても殺すぞ！」

「おっ！」

我が最後の戦とくと見るがよい！

「くらいやがれ！」

「温い！」

完全なる世界と人形数十体を纏めて剣で一刀両断する。

「明らかに届いて無かったぞ？」

「簡単な事だ、あの質量の力が私に圧縮されているのだ。剣の一撃が巖竜の一撃と同じ範囲に威力を持たせるなど容易いことよ。」

「それに、重力制御で重量無視の高速連撃か……………」

「お喋りは終わりだ。冥府の石柱！」

上空に多数の石柱を召喚し、雨のように降らせる。自身も空高く飛び上がる。

「先程のお返しだ。さすがに隕石とはゆかぬがな！」

「っち、行け。」

む、人形共が冥府の石柱を足場に昇ってくるか……………迎撃だな。

「同時発動、万象貫く黒杭の円環、千刃黒耀剣！」

先程とは量も大きさも違うぞ！

テムオリンSide

セラフィナSideOut

出鱈目すぎますねあの小娘は……………永遠神剣も持ってないく
せに……………変化してからもう4時間ですわよ？

「くひひ、面白い実験体じゃないか。」

「笑い事ではありませんわ。本命の前にEミニオンが全滅ですわよ
？」

「大丈夫さ、所詮あれは失敗作だからね。ちゃんと本命用は残
して有るよ。」

「なら良いのですが。」

さすが、我が妹……………準備がよろしいこと。

「くひひ、増援がきたみたいだね。」

「焼け石に水では？」

「いや、あれはミネルバ………オーバーテクノロジーの塊だから充分戦力になるだろうね。」

彼等の関係者ですか、お手並み拝見いたしましょう。

テムオリンSideOut

レインSide

まさか、Eミニオンがこれ程の数なんて……………馬鹿なのかな？
意味ないのに。でも、永遠神剣を持たずにこれ程の戦闘をするなんて、あの人はおかしい。

「セラフィナ姉様……………まさか、その姿は……………」

「あわわ、使っちゃったようです……………勝手も負けても今日中に……………」

「言つな。姉様が自ら望んだことだ。それより援護できるか？」

お姉さんなんだ……………大丈夫かな？

「もちろんです。全部隊発進、その後再編成している本体に合流します。」

「何故じゃ？」

「テオ様を乗せては戦えません。」

たしかにそうだね。

「しかし……………」

「セラフィナ様亡き後、ヘラス帝国を支えるのはテオ様ですよ？」

「分かった。」

私達は本陣に連れていかれた。おにいさま何処だろ？リリもないけど戦艦の中だねきつと。

「テオドラ様！」

「リディアよ、再編成はどうじゃ？」

「間もなく完了します。」

「では、その後出撃じゃ！」

戦力を考えると……………止めなきゃ。おにいさまは放置するだろうけど……………テオの為だしね。

「では準備を……………」それはダメだよ。「……………え？」

「貴女達の戦力じゃ……………」

「まっ、足手まといになるだけだな。」

「なんだと！もっぺん言ってみろ！」

それが現実。

「へっ、何度でもいってやらあ。朱き翼ぐらいの戦力は最低でもねえとEミニオン共の相手にもならず足手まといになるだけだっとな。」

あの数だから……………そうだね。

「赤毛の悪魔なみの力だと……………」

「それでも姉様を助ける為には行くしか無いのじゃ。」

「テオ……………」

しばらく見つめ合った。

「……………」

「……………テオの馬鹿者。」

テオの頬つぺたをむにくと伸ばしてあげる。

「なっ、にゃにを!」

「無礼な!」

「無駄死になるだけだぜ！」

「……………テオのほう的大事。」

「むう……………しかし姉様がな……………」

簡単なのに。

「私が行けばいい……………ヘラス帝国の全軍より私のほうが強いし……………?」

「何を馬鹿な！」

事実。

「では、レン……………悪いが頼む。」

「うん、任せて。」

「材料に戦艦三つほど頂くぜ。」

「構わぬぞ！」

「無茶です！このような子供に！」

たしかにその通り子供だけど……………。

「問題無い、これは命令じゃ！」

「っ、了解。」

その後、戦艦を材料に変換し転移した。

テオの願いを叶える為に頑張らなきゃ。

Inside Out

支配者としての登場

セラフィナSide

やはり数の違いはうっとうしいな。

「諦めたらどうだ？」

「黙れ、面倒だ。冥府の石柱125連。」

合計500本の石柱が上空から放たれた。

「反則だな。どっちにしろこれで終わりだな。」

確かにもう体力がないな。魔力はあるからいつそ自爆でもしてみるか？

その時、多数の光の本流が見えた。

「どっちら終わりじゃないみたいだっ！」

「ぐっ！」

デュナミスを光の本流の方へ蹴り飛ばしてやった。

「ちい！」

障壁を張って、逃げたか。

「増援か………だが、餌にしかならんな。行け人形共。」

まだまだ、いるようだな。

「普通の戦力ならな。」

「なんだと？なっ！」

来たか、情報と姿が違うがデュナミスを弾き飛ばしたから間違いないかな。

「ヘラス帝国第一皇女セラフィナ様ですね。」

「テオドラの特務部隊か？」

「はい。戦闘可能ですか？」

「問題ない。」

こいつらしただいだな

「了解。では、完全なる世界コスモエンテレケイアの相手をお願い申し上げます。あれは我々の本来の敵ですので。」

「ふ、関係無いな。敵は全て滅ぼす。見敵必殺だ。」

「了解。全力戦闘にはいります。」

「ああ、やれ！」

さて、どうなる？

「トランザムライダー起動。GNソード？……ライザーソード発動。介入を開始する。」

ほう、こいつらも二刀流か……………高速機動による高速戦闘……………危険かもしれんな。

「おのれ、どこまでも忌ま忌ましい。」

「貴様の相手は私がしてや……………」

「どっし……………」

19個の光の塊から一つから二つの光……………合計38の光の剣が戦場を縦横無尽に蹂躪していた。あいつらが通った後、人形達は消滅していた。

「なんだあれは！」

「化け物だな。」

やはり危険だな。あれ一機で戦場がひっくり返るぞ。

「くひひ、全くだね。いったいどんな技術なんだろうね。」

「「っ！」「」

いつの間に出現した！真横にあらわれたのに気付かなかった。

「貴様は！」

「はっい、支配者ヒツギさ。」

「何用だ？」

「僕等のお客様が来るんだよ。それより、終わりそうだよ？すごいね。失敗作なら仕方ないだろうけどね。」

「こんなに早くだと！」

「馬鹿な………っつて、失敗作とはどっついうことだ！」

「役に立ったでしょ？」

「確かに……………」

「くひひ、いいじゃんそれより……………
クフティスター・アイギス
最強防護！！」

ヒツギが障壁を張ると同時に多数の攻撃が飛んできた。

「すまん。」

「まだだよっ！」

あれは鎖か？それでライザーソードとかいうのを四本纏めて止めた
だと。

「貴様……………魔法が使えるのか？」

「くひひ、僕は天才だからね。覚えたんだよ。」

「化け物だな……………」

「デユナミス下がってて。」

19機が円陣をとった。

「来たよ。」

っ、なんだこの膨大な魔力は！

円の中心が光り何者かが転移してきた。味方かどうか……………。

「始めましてお嬢さん。」

「……………」

19機は転移してきた魔女の格好をして、手にうさぎのぬいぐるみを持った子供を守るように陣形をかえた。膨大な魔力はこの者か。

「けけけ、エターナルが直接現れやがったか！」

いったい何なんだこいつら……………？

インサイド

セラフィナサイドアウト

転移完了……………？

「けけけ、エターナルが直接現れやがったか！」

この人強いかも。

「……………貴女……………だれ……………？」

「くひひ、僕は永遠神剣支配と改変の契約者、支配者ヒツギオ。」
想像の通りロウエターナルだよ。」

リリと同じ二本ですか。

「名乗らなければ……………行けない？」

「まあ、基本的かもね。名乗る名乗らないは自由だよ。僕は適当さ。」

そうなんだね。

「永遠神剣第一位創世の契約者……………創世の……………」

「ごろ悪いし……………そういえば魔王とかもいわれてたからそれでいいかな？」

「創世の？」

「魔王？」

「お前が創世の魔王か。」

「それでいいかな。」

「んじゅ、改めてんじゅ。」

やるの？

「やらなきゃだめ？」

「だめ。」

「永遠神剣第一位創世の契約者、創世の魔王レン……………これでいい？」

「くひひ、いいよ。じゃ始めようかな。デュナミスは下がって死ぬから。」

「分かった。」

「お姉さんは近くについて。」

「分かった。」

やっただ。

「こい、僕の作品達！」

大規模転移魔法か……………多いね。羽の生えたEミニオンが赤青
緑黒白に別れてたくさんいる。

「何体いるの？」

「10万かな？画期的な手段で量産できるからね。」

「そう。創世全拘束術式解除……………コード〔自由の翼M〕〔無限
の正義M〕〔ゼロカスタム〕〔サイコMK2〕〔デストロイ〕全部
二機ずつ。」

「了解だぜ！」

デストロイ二機とサイコガンダムMK？二機、上空にウイングガン
ダムゼロカスタム二機、ストライクフリーダムミーティア二機、イ
ンフィニットジャスティス二機。ダブルオーライザー19機……
……………これがこちらの戦力。

「合計29機……………そして、来て白い魔神天のゼオライマー！」

50Mの巨体だよ。

「……………」

「くひひ、すごいね。さすが創世の魔王だよ。こっちもだすか皆！」

何も起きない？

「ふむ。ぴぽぽと……………」

携帯電話？

「もしもし姉さん？」

「ヒツギ！こっち手伝いなさい！行きなり現れた二本の永遠神剣持っ子に襲撃さるてっ！なんて、理不尽な！遊びじゃないわよ！」

「ふむ……………そっちはそっちで何とかしてね。じゃ。」

「まちなっ……………」

切った……………多分リリのせい？

「仕方ない今回はミニオンだけで実験かな。」

「「進撃せよ」ゴーアヘッド」！」「」

Eミニオンとガンダム達の戦いが始まった。

それから1時間敵の数はどんどん減っていった。

「くひひ、ここまでの戦力差かね。面白いね。」

「降参？」

その方が楽だけど。

「いやいや、ここからだよ。行けミニオン達。」

「なにあれ？あんなの当たっても。」

小さい武器がいっぱいあんなのでどうして？

「デストロイ、サイコガンダムMk？機能停止！」

「なぜ！」

「あの武器は恐らく対ゴーレム、人形使い用アイテムだ！」

「しまった。」

「もう遅いね。」

「ストライクフリーダム、インフィニットジャスティス、ウイングガンダムゼロカスタム機能停止……………自爆！」

自爆スイッチであらかた巻き込めたかな？

「自爆装置だつて！」

「何か文句でもあるんか？」

「素晴らしいね！」

この人マッドだね。

「ゼオライマー次元連結砲……………撃て」

「それはダメだね！」

鎖の一撃で軌道がずらされた……………。

「おっ、あれ？なんで剣が？」

「ゆだんたいてきだよ。おねえさん。」

ヒツギから黒い剣が生えてきた。あれはリリ？

「それはそうだね。君もただだね。我が命じる。全力を持って逃げ
せ！」

結界が発動した！

「っ！」

「リリ！」

「大丈夫か！」

リリの身体が震えてる。

「それでは、またね。逃げるよデュナミス！」

遠くの方を見てる？

「了解した！」

引いたみたい……………。

「ああ、その子はレジスト高いみたいだから安心していいよ。」

ヒツギ達の気配が消えた。

「抵抗してるだけ？」

「見ただげ。チェックしたが無ら問題はねえ。」

「ねみゆい〜」

寝たみたい。

「それより、こっちの方がまずいぜ！」

「私はどうしようもない。お前達のお陰で勝てた。ありがとう。」

「……………別に貴女のためじゃない。」

「それでもだ……………テオドラに伝えておいてくれ、ヘラス帝国を頼むと。」

「自分で……………」

身体が消えかかっている。

「分かった。必ず伝える。」

「ありがとう。では、さらばだ小さき戦友よ。」

「いっちゃったね。」

「だな。じゃあ戻るか。」

「うん。」

あの人普通に戦ったら負けてたかも……………もっと修行しなきゃ。

シオンSide

ノブSideOut

よく頑張ったな。

先程までレン達の戦いを見ていた。

「手を貸さなくてよかったのか？」

「「「いらないね。」」

桜花と意見は同じかな。

「甘やかしすぎるのも問題じゃ。」

「本当に危なかったら手をだすが、あの支配者レツギは……」

「うむ、こっちに気づいておった。最後の説明は我等に対してじゃな。」

「私は分からなかったな。」

普通はわかんないだろうね。

「リリのほうは大分手助けしたけどな。」

リリがロウエターナルの基地に突っ込んだのは驚いた。

「増援は尽く殺したただけどね。」

「うむ。あの子も随分強くなったの。」

「確かに剣技はましたが、まだまだ力に頼りすぎだな。」

「仕方ない、まだ子供だしな。」

エヴァの言う通りだけどな。

「それよりもヒツギだな。」

「あやつ、全く本気じゃなかったの。」

「だな。力もかなりあるし、あの力は厄介だな。」

「支配に改変か名前からみてヤバすぎじゃな。」

「本気で戦う気は余り無いみたいだな。」

「あれはどちらかと言えば技術者だろうな。」

だろうな。

「レン達に会うか？」

「いや、いや。監視だけはしておくが………仕事溜ま
つてると思うんだ。」

「奇遇だの、我もそう思う。」

山積みだろうな。

「では、帰れ。私がレン達を見ておく……………」

「ダメだ手伝え。」

「待て！やめっ！」

「では、行くぞ！」

「いやあああああ！」

山積みじゃなかったけどデータが馬鹿みたいにあった。

シオンSideOut

支配者ヒツギ登場（後書き）

グレートブリッジ攻略作戦終わりました。

作品中に使ったのは、チャオ戦で使われた物です。

ナギ、ゼクトジャックの邂逅

ナギSide

くひひ、楽しかったね〜

「笑い事ではありませんわよ。よもや、こちらに乗り込んでくるとは……」

「見事な襲撃だったね。隕石攻撃時の空間歪曲反応を確認して攻めて来たんだね。」

「私が用意した戦力を尽く殺してくれましたわ。」

姉さんは随分怒ってるね。

「ヒツギ・・・・・・・・・・貴方本気を出してなかったですね？」

「まあ、監視がいたからね。」

「彼らですか。やはりまだ準備が足りませんね。」

「あやつらは化物じゃからな。」

来たみたいだね。

「貴方は？」

「ヒツギの知り合いじゃ。」

「準備はできてるの？」

「無論じゃ、契約は覚えておるっつな？」

あれかい、不思議な契約だね。

「くひひ、勿論覚えているし準備もしているよ。」

「ならばよい。では、後日連絡するのじゃ。」

いっちゃった。

「では、彼に黄昏の姫巫女の確保をお願いしたのですね。」

「くひひ、そうだよ……………ユスモエンテレケイア……………配役
としてはすばらしいんだよ。完全なる世界の牽制にもなるしね。」

「たしかに、このままこの世界を消されてはかないませんね。」

協力関係ではあるけど、僕たちの目的は永遠神剣だからね。

「もう一つ……………これはどうですか?」

姉さんが培養槽を指さした。

「彼女かい？もちろん準備できてるし、魂も確保したんだろ？」

「もちろんですわ。記録の除去も完了しましたし、ヒツギの案通り改良も加えておりますしね。」

培養槽の中には、12歳くらいの少女が浮いている。

「くひひ、とつてもいい実験材料だよ。この娘は魂や力は普通にエターナル並みだからね。」

「心理的にもダメージを与えられますからね。」

「えぐいこと考えてるよね姉さんわ。」

「もちろん、やられっ放しは我慢なりませんわ。」

たしかに、この娘との戦いは見てみたいね。

「永遠神剣はこちらでとっておきを用意しておきますわ。」

「じゃ、認められるように本気で色々弄ろつかないか……」

「ええ……うふふ。」

楽しいね……そういえば悠久も呼び出してると
いだね……カオスの連中もそろそろ気づきそ
うだし、実験にはこまらないね……くひひ。

ナギSide

ナギSideOut

俺達は今グレートブリッジ近くの街に来ている。グレートブリッジ
攻略作戦を観戦していたためだ。姫子ちゃんことアスナは、隣でデ
ザートを食べている。

「ふふふ、世界は広いですね。」

「ああ、あのような実力者が多数存在しているとは思わなかった・
・・・・」

「だな、ヘラス帝国の女帝様もかなり強かったな。」

最後は圧倒的だったな、魔法や剣技両方ともマスタークラスだ。

「詠春から見て彼女の剣技はどうでした？」

「ナギ・・・・・・・・・・・・・・・・創世の魔王は貴方のなんなのですか？」

「ん？だから俺の師匠の一人だが・・・・・・・・・・・・・・・・言っただけ？」

「聞いてないわ（です）！！！！」

「そうだけ？」

「まあ、いいじゃないか。それより・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そうですね。その貴方・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何の用だ？」

「気配を消してこっちを見てる奴がいる。」

「ふむ、この程度は気付く様じゃな。」

アルも詠春も臨戦態勢だな。俺は姫子ちゃんを守る位置に立っている。

「子供が何の用だ？」

「ふむ、そう警戒するで無い。わしはメセンブリーナ連合からお主達紅き翼に派遣されてきた者じゃ。これが証拠じゃ、店員よ、あそこのお嬢さんと同じものをくれ。」

「わかりました。」

店員に注文して……………同じで良いのか？あのパフエすげえでかいぞ。

「どつやら、本物ですね。」

「だな。」

「では、改めて自己紹介しようかの。わしの名はゼクト。そして、ナギこれからお前の師匠でもある。」

「「え！」「」

ああ、やっぱりか。

「やっぱり、あんたがマスターの言っていたゼクトか。探していたんだが全然見つかなかったぜ。」

「わしも探してはいたんじゃがな・・・・・・・・・・・・・・・・き
たの。」

やっぱりでええなDXジャンボパフェ。

「これから、紅き翼にも参加させてもらうかの。」

「いいぜ！」

「ええ。」

「たしかに戦力になりそうだな。」

すげー勢いでパフェが消えて行くな。

「次の任務地はどこだ？」

「辺境じゃな。」

「おいおい、グレートブリッジはいいのかよ！」

上層部は何考えてやがる。

「うむ、ヘラス帝国は最低でも後一ヶ月は攻めてこぬ。」

「なんでだ？」

「ヘラス帝国の伝統ですな。」

「うむ、王族の死後しばらくは防衛以外の作戦行動は取れぬのじゃ。」

くそ面倒な伝統だな。

「わしらは辺境に行くのじゃが………その子

はどじするのじゃ？」

姫子ちゃんか……………どうしようか。

「その小娘も連れてゆくのか？わしはかまわぬが足手まといになるぞ？」

「なっ！」

「そうだな」

「たしかに、危険ですね。」

しかしだな……………。

「ナギ……………私は別に……………」

「それに、危険すぎますしね。」

「連合の知り合いならいるし、あずけてみるかの？」

「そうだな。姫子ちゃんはそれでいいか？」

姫子の意思は確認しないとな。

「それでいい……………まってる……………」

「分かった。」

「では、連絡しておくかの。」

これから、修行だな。姫子ちゃんの為にもがんばって戦争を終わらさないとな。

テムオリンSide

ナギSideOut

こっちはこれでいいですわね。

「姉さん、フィリウスから連絡がきよ。」

フィリウス……………ああ、この間の子ですね。

「なんていつてきたのですか？」

「うん、黄昏の姫巫女はメセンブリーナ連合に預けられてるってね。」

仕事が速いですね。

「では、完全なる世界にまわしておきますわ。」

「くひひ、これに詳しい場所とかも乗ってるよ。」

「確かに、うけとりましたわ。」

「じゃ、僕は色々やることがあるからこれで………ばいばい。」

「ええ、またね。」

ヒツギには色々頼んでますし、カオスの連中の相手でもしますか………こちらは、完全なる世界に頑張っていただ
きまじょう。

テムオリンSideOut

テオドラス side

今我はヘラス帝国王都にある玉座の間におる。そして、非常に機嫌が悪い。

「なぜじゃ！今すぐ進軍すれば姉上の敵であるメセンブリーナ連合に決定的な一撃を加えられるのじゃぞ！！！！！」

「だめです姫様。伝統により最低でも二ヶ月は喪にふくませぬとなりませぬ。」

伝統など……………今攻めれば終るというのに！！！！

「伝統など破棄じゃ！今すぐこの戦争を終らせるために攻め込むべきじゃ！！！！！」

「なんとおいたわしや……………姫様お心を落ち着けください。我が軍も先の戦いで甚大な被害を受けました。現実的に考えて勝率が悪すぎます。」

「く……………ならば私の部隊だけで攻略してくれる！！！！！！」

「ちっ」

「何か言ったか？」

気のせいかな？

「いいえ、なにも……姫様、作戦行動事態がだめなのです。それに、姫様は式典のための準備を今からしていきます。おい。」

「はっ！」

なんじゃと！

「こら、離さぬか！不敬であるぞ！！！」

私の両腕を掴まれ執務室へと連れて行かれる。

「離せ……………！！！！！！！」

「しっかり、お仕事をなさってください。もう、セラフィナ様はいないのでから。」

姉上………すいません。

テオドラが連れ去られた後にのこったのは大臣一人だけだった。

「ふ、しぶとかったね。まあ、これで大丈夫だろう。これで向こうも準備できるね。」

大臣の姿がぶれて、一人の青年が新たに出てきた。

「ここは、まかせるけど。雞璃って子には近づくのはダメだからね。」

「

「分かっている。」

「では、僕はいくよ。」

青年は消え去った。床に水を残して。

大臣は何事もなかったように退出した。

テオドリスサイドアウト

ジャックSide

俺は最強の男ジャック・ラカンだ。現在はヘラス帝国辺境にいる。

「戦争なんていやですわねえ。」

「また、お水の値段があがっちゃうわ。」

たしかに、このごろ高くなってきやがったな。俺様には関係ないがな。

「鬼神兵、そばで見に行こうぜ!!!!」

「連合軍の鬼神兵がこっちのより強いってホントかな？」

「バーカッ、皇女様が全部倒してくれろって！」

ガキどもは知らないみたいだな。

「対象はターゲットこの三人の男、それにこの少年だ。」

こいつは俺に依頼を頼んできたヘラス帝国のエージェントだろう。
合計四人の写真をだされた。

「フン……………なんだガキじゃねえか。」

こんなガキに大金積む価値があるのかね？

「子供と思って油断していると痛いめを見るぞ。」

この俺様よりは弱いだろ。

「オステイア回復作戦の失敗の主因はこいつらだ。すでに精鋭で組織された討伐隊も送ったが悉く返り討ちだよ。」

そいつらが弱いだけじゃねえか？それにしても今は作戦行動禁止じやなかったか？

「君が望むなら部下もつけよう。君も知っての通り、現在は表立って作戦行動が取れないため正規兵ではなく傭兵・賞金稼ぎになっってしまうがな。」

「いらねーよ。一人で充分だぜ、任せときな。」

「分かった。期待して待っている。」

「ああ、期待してまっつてな。」

さてと、ゼクト、サムライマスターこと青山詠春、鬼畜優男アルビレオ・イマ……。そして最大の殲滅対象の風の契約者^{クター}ネギ・スプリングフィールド……。にしても、さっきの奴怪しかったが、かまわねえな。何かあれば力づくで解決すればいいだけじゃねえか。んじゃ、いくとすっかな。

ジャケットSideOut

ナギSide

「姫子ちゃんと別れてから約一ヶ月が過ぎた。もちろん修行三昧だ。仕事もこなしてるけどな。」

「んっふっふっこいつが旧世界で言う日本の鍋料理って奴かあ」

「前に日本に行った時……マスターに修行してもらった時も鍋料理はなかったしな。寿司はあったが……ほとんどサバイバルだったっていうのも理由だな。」

「じゃ、早速肉を」

「あっ！ナギおまつ……何、肉を先に入れてるんだよ……！」

「トカギ肉でもうまいのかのう？」

さあな？

「いいじゃねえか旨いもんから先だよ。ホラホラ！」

ひよひよいと肉をいれてやった。

「バツバカ、火の通る時間差というものがあってだな……
……まずは野菜を入れて……
あ、ちよっ！」

「あーうっせ、うっせーぞえーしゅん！」

「フフ……知っていますよ。日本では
貴方のような者を「鍋將軍」と呼び習わすそうですね。」

ナベ・シヨーグン!?

「……強そっじやな。」

「わかったよ………詠春俺の負けだ。
今日からお前が鍋將軍だ。」

「んー嬉しくないなー………鍋奉行じゃ？」

「全て任す好きにするがよい。」

さすが師匠。

「おお、なんじゃこのソースうまいぞ？」

「ホントだ、うめえっ!？」

あれ、似たようなの食ったことある気がするな。

「これこそが日本の誇るしょうゆだ。」

「それに、大根降ろしですね。」

「これがしょうゆか!スゲエうめえっ!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ナギは日本に来た時に、寿司食っただろ。」

あの時のソースか。

「にしても、姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな。」

「姫子ちゃ・・・・・・・・・・ああ、オスティアの姫御子のことじゃない？」

「まあ、戦が終われば彼女を完全に自由にできる機会掴めるかも知れませんか。」

「その戦だが・・・・・・・・・・やはり、どうにも不自然に思えてならん。」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろうが。鳥頭め・・・・・・・・・・肉ばっか食うな！」

っ！俺とアル、師匠は飛んできた大剣をよけ、空中に放りだされた
具材を掴んだ。

もくもぐ、旨いな。

「食事中失礼~~~~ツ、俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン
！！いつちよやろっぜッ！」

「何じゃ？あのバカは。」

「帝国のって訳じゃなさそーだな。」

「フ……フフフ……」

「えいしゅ……むお!？」

詠春が鍋を頭から被ってた。

「フ……食べ物に粗末にする者は……」

「どした？来ねのかあ来ねならこっちから……」

いッ……ッ」

「切る。」

おゝすげえ〜詠春マジだな。崖もろとも切ってやがる。

「お？詠春の攻撃凌いでるぜ。」

「おの大男見たことがあります。やりますよ。」

へえ、そうなんだ。

「ちょっと前に、南で話題になった剣闘士ですよ。」

会話の間にも詠春の剣戟がバカを追い詰めてる。

「ちょっと、タンマタンマ！アンタまじでつええな。ちよい待たね？」

「ふざけるなッ、貴様やる気なら本気を出せッ！」

「へっ、そ〜スか。けど4対1だし本気出す訳にはいかんのよね。」

こいつ、俺ら全員を相手にする気か？バカだろ。

「あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ！？」

なんだあのカプセルは……………うお、裸の女がいつぱいでてきやがった。

「情報その1、生真面目剣士はお色気に弱い。」

「くっ……………卑劣な……………いや、何のこれしき心頭滅却すれば……………火もまた……………ぐはあ！！」

保険ちゃんがためきの置物で……………なんであんなものは？

「ホイ、一丁あがり！」

じゃ、次は俺だ。

「白き雷！」

「ぬんっ！」

回転しながら避けるとか無駄なことしやがって。

「おう、出たな情報その4………赤毛の魔法使いは弱点なし特徴は無敵。」

「てめえら、手えだすなよ。」

「言われずとも。」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ。」

師匠にアルめ、誰がバカだ！

「奇遇だな小僧。俺も南じゃ無敵と滅法噂の男だ。」

ならいい戦いはできそうだな。

「へっ、おっさん剣なしでいいのかよ？」

「心配すんな、俺は素手のが強え！」

「はっ」

「ぶん！」

いく……………なっ！

「」「」

俺とあいつは急いで距離をとった。

「なんだ！」

さっきまでいた所にクレーターができていた。

「……………」

なんだあの子は！

ナ

S
i
d
e
O
u
t

U
U
S
i
d
e

ん？おねがいがあるんだって。

「リリ様………テオドラ様のためにこの者達を倒してきていただきたい。」

「このひとたち？」

「ええ、紅き翼………我がヘラス帝国………いえ、テオドラ様の敵です。」

「そうなんだ………」

「はい、ナギ・スプリングフィールド、アルビレオ・イマ、青山詠春、ゼクト、ジャック・ラカンを倒してきてください。」

いっぱい………テオのてきならたおしちゃう。

「では、お願いしますね。」

「うん、いってきます。」

わたしはてんちゃんをつかっててんいした。

U
U
S
i
d
e
O
u
t

ナギSide

なんだこの子・・・・・・・・・・・・・・・・嫌な予感しかしねえ！

「おいおい、このちびっ子はなんだ？」

「ておのてきはたおす！」

「へっ、やれるもんなら・・・・・・・・やってみな！」

「ばっかっ！」

消えたと思ったらあのバカの後ろから現れ、剣を振り下ろそうとしていた。

「うお！」

「しんめいりゅうおうぎ、かいてんけんぶろくれん！」

「やべ！！！！気力バリア展開！！！！」

「すぐふつとんだな。しかし、神鳴流か……………詠春
しってるか？」

「アル！」

「ええ、起こしました。」

「つう……………なんだ……………？」

「気をつけよ！」

詠春は目をさましたな。師匠でも危険か。

「あのこは……………」

「知ってるのか詠春！」

「知らん。」

「知らないのかよ！」

たくつ。

「しんめいりゅう……………あまかけるりゅうのひらめき！」

「ちょ！体が引っ張られる！」

「うち、助けてやるか！」

「千の雷！」

無詠唱で奴ごと攻撃した。

「ぐはっ！てめえ、なにしゃがる！」

「助けてやったんだろぅが。」

「雷光剣！」

「しんめいりゅう……………しもん・びゃっ！」

すげえ、分身したな……………しかもどれからも本物みたいに感じるぞ。

「あれは……………」

「今度こそ何か知ってるのか？」

「ああ、神鳴流の宗家にのみ伝えられる秘技……………四門のひとつだ。」

「効果は？」

「見たとおり分身だが、質量や気、魔力ももっている……
・思考は統一されてるドッペルゲンガーを作り出すようなものだ。」

「どんだけ反則なんだよ。」

「らんげき・せつなむげんとう。」

「最強防護！」

「ちい！」

ジャック・ラカンも含む全員で全力防御する。

分身による驚異的な速度での転移攻撃を食らっている。

「このままじゃもたねえぞ！」

「やべえな！」

「まったくじゃな。」

「ですね。」

「バカいってないで、生き残るためにがんばらんか!!!!!!」

詠春の言うとおりだが……………

「……………大次元斬!!!!!!」

これ、無理だ死ぬって……………なんだよあの大き
さの次元刀わ!

「転移反応じゃ!」

着物姿の少女と……………あれはちびっこ師匠か?

ナギ
Side
Out

桜花
Side

むう、レンと共に転移したらすでに始まっておったか。

「「あぶねえ！」」

「何がじゃ？ジャックよ。」

「ナギも……………どうしました……………？」

「……………」

「一体どうしたのじゃろうか。」

「まあ、息災でなによりじゃな。」

素手で受け止めていた次元斬を砕いてやる。

「素手かよ……………」

「面倒じゃ、魔拳ビツクバン！」

「……………ヴァニティワールド・ジ・アンリミテッド……………」

綺麗さっぱり分身が消滅したかの。

「おつかままに、れんおねえちゃんなんでじやまするの〜?」

「馬鹿者が、おしおきじゃ！」

リリのほっぺをむにむに引っ張ったりして遊んでやる。

「いたやい……………」

「ナギ無事？」

「ああ、周りの被害がやばいけどな。」

たしかに、ぐちゃぐちゃじゃの。

「分かった……………直す……………創世……………」

「了解……………修復開始。」

「ところでどこゆくのじゃ？ジャックよ！」

リリで遊びながら、逃げようとしていたジャックの逃げ道をふせいでやったのじゃ。

「ちょっとな……………それより、娘なのか？」

「うむ、可愛いじゃろ あ、手を出したら一片も残さず消滅させるからの？」

「あつああ……………」

「すいませんが、そろそろ事情説明お願いできますか？」

「うむ、わしからも頼む。」

それもそうじゃな。

「簡単な話じゃが、リリが完全なる……………こほん、ヘラス帝国の連中にはめられただけじゃ。主等を倒すようにな。」

「俺も帝国の依頼で動いていたんだが俺ことか？」

「みたいじゃな。」

リリが頷いておる……………柔らかくて気持ちいいの。

「あいつ等……………」

「というわけで、遊びに来ていた我とレンでリリをおってきたのじ

「や。」

「わかりました。では、貴女達と戦わなくていいのですね。」

「うむ……………しかし、一人除いて主等弱すぎるから不安
じゃの……………」

「ちょっと早いが良いかの。」

「ジャックよ。」

「なんだ？」

「お主はこれから紅き翼に入れ。その方がこちらとしても都合が良
いのでな。」

「おいおい。」

「終わり……………ナギもいいよね？」

「修復完了か……………早いのか。」

「まあ、おれはいいぜ？」

「まあ、いいでしょう」

「ふん、それより彼女が使った神鳴流の方が気になる。」

「そうじゃな。」

「それは、秘密じゃ。知りたければ我等が屋敷にくるといい。」

手順がわかればじゃがな。

「分かりました。かならず行きます。」

「ナギ……………最後に……………」

「この戦争の裏を探しな！そして隠された真実って奴をみつぐはあ
……………」

「……悪い子は……お仕置き……」

「やめ、タイダルウェイブは勘弁して~~~~~!!!!!!」

相変わらずじゃな。

「では、がんばるのじゃぞー!」

「またね。」

「またあそぼうね」

三人とも転移した。

桜花 Side Out

ナ

S
i
d
e

邪魔されたから、ぜんぜんくいたりねえな。

「さてと、とりあえず……………めしの続きしね
？」

「だな。」

「というわけで、ラカンさんとナギは食材とってきてください。」

「動物はいるのか？」

「それも、作られてるようじゃ。」

たしかに、改めて気配調べるといやがるな。

「では、お2人も制限時間は10分です。多く獲物をとり戻ってきたほうの勝ちです。」

勝負形式か、おもしれえ！

「負けないぜ！」

「抜かしやがれ！」

俺とジャックは再生・・・・・・・・新たに作り直された森に入った。

「扱いやすい人たちです。」

「まったくじゃな。」

「ああ。」

その後、結果は引き分けだったが勝負をとつて仲良くなった。食事の最中に次の方針を決めた。ちびっこ師匠とうさぎが言っていた戦争の裏、隠された真実を探すことにした。

ナギSide

反逆者！

俺達はグレートブリッジ奪還作戦に参加し、見事勝利をもちとった
ぜ！まあ、特務がでてこなかったから楽勝だったかな。

1391

「ナギ、貴方のファンクラブができたみたいですよ。」

「ファンクラブだと？」

「ええ、かなりの人数らしいです。」

「面倒にならなかつたら別に行けどな。」

それより気になっていることがある。

「俺の故郷がある旧世界じゃ、超強力な科学爆弾が発明されてこんな大戦はもう起こらねえそうさ。戦を始めたが最後みんなまとめて滅んじゃうからだってよ。だが、こっちの戦はいつ終わる？帝都へラスまで攻め滅ぼすってか？」

おかしいだろ！

「やる気になりや、この世界にだって旧世界の科学爆弾以上の大魔法はある。こんなこと続けてどうなる？意味ねえぜ！！まるで……」

まさかそんなはずは……

「まるで……誰かがこの世界を滅ぼそうとしているよ
うだ……ですか？」

ジャックはどうでもよさそうだな。

「ある意味、その通りかもしれんぞ。」

「ガトウ。」

こいつは、ガトウ。タカミチと共に新たに紅き翼に入った仲間だ。

「俺とタカミチ少年探偵団の成果が出たぜ。」

なんだと？

「やはり奴らは連合・帝国双方の中枢まで入り込んでいる。秘密結社・完全なる世界とその協力者口ウ・エターナルだ。」

エターナルってマスターたちがいった奴等か……………
どうするか……………どちらにする世界を滅ぼさせやしねえな。

ナギ
Side
Out

レンに呼び出されたのでオスティアにやって来た。

「なんだ？」

「おにいさま……………永遠神剣が欲しいです……………」

「あれ、創世あるじゃないか？」

「二本目か？」

「大切な人にあげたいの。」

「まさか男か！」

「違う……………アリカさん。」

よかった……アリカ？アリカってあの？

「うん……炎フレイムロードの王の力を……もって
るみたい。」

「炎の王か……いいのがあるな待ってる。すぐ作っ
て送ってやる。」

「ありがとう……おにいさま大好き……」

レンの頼みは断れないからな。その後、レンといちゃいちゃしてす
ごした。

ナギSide

シオンSideOut

その後しばらくして、ガトウから本国首都に呼びだれた。

「わざわざ本国首都まで呼び出して、何だよガトウ。」

「あつてほしい人がいる。協力者だ。」

「協力者？」

「そうだ。」

なんだこのじいさん。

「マクギル元老院議員！」

詠春達は知ってたみたいだな。黙っておくが。

「いや、わしちゃう。主賓はあちらの方だ。」

軽いじいさんだな。

「ウエスペルタティア王国……アリカ王女だ。」

「……………」

綺麗な人だな。

それからしばらく話したあと、ジャックが絡んできた。

「ワハハハハ、上手いことやりやがってこんガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ。お姫様とイチャイチャキヤイキヤイおしやべりしてたろーがッ！」

「してねえつつの。何がイチャイチャだ。バカ！」

こいつ本当に大丈夫か？

「なーに言っただよ。俺なんか………気安く話しかけるな下衆が………だぜ~~~~~？いや、ありゃいい女だぜ。一本芯の通ったな。」

「頭大丈夫かジャック？ひよつとしてあんたマゾか？俺あ、あんなおっかねえ女見たことねえぞ。」

たしかに綺麗だが。

「グハハハハハ、そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよな。てめーはよ。」

「んっだそりゃ、意味わかんねえし、さわんなっつーの。勝負すっかてめー！」

「仲いいな。」

んなわけねえだろうが。

「しかしよ。ウエスペルティアの王女ってことはアレか？例の姫子ちゃんの姉君ってことかよ？」

「いや……………姫子ちゃんのごとは……………なんか話しくいみだいだった。」

「へえ……………？」

「アリカ……………姫か……………」

よくわからんな・・・・・・・・

完全なる世界とロウ・エターナル・・・・・・・・この集団は国際マフィアや死の商人では無かった。真の正体が一切わかんねえ。

そこで俺達は、休暇中に完全なる世界についての独自の内定を開始した。・・・・・・・・といっても俺やあのバカはどう考えても調査向きじゃなかったからもっぱらガトウ、タカミチ、詠春、アル、師匠まかせだったかな。

「ん？なんだって？」

「だから、買い物に付き合えと言っている。」

「買い物に付き合え？何だって俺がッ！」

バチーン

「私は狙われておるのだから当然だろ?。」

この女……………。

結局買い物に付き合わされた。

「あれはなんじゃ?」

「知るか。」

高く積まれた箱を持ちながら話していると……………招かれざる客の登場だ。

そして、いきなり攻撃魔法がとんできた。

「大丈夫か姫さん。」

姫さんを抱きかかえて飛び去ることができた。

「うむ。」

街には炎が燃え上がっていた。

「くそ、こんな街中でデカイ魔法使いやがって！死人でてないだらうな！」

「やはり今は……………」

「ああ、奴等の刺客だろう。アンタと俺どっちを狙ったかは知らねえけどな。けど、ようやく尻尾を出しやがったな。追尾魔法もかけたし、逃がさねえぞ！」

手のひらに拳をぶつけ気合をいれる。

「よしっ、姫さんは皆のトコに帰ってる。俺は奴等の本拠地をぶっ潰し……………ぐえっ。」

姫さんがローブを掴みやがった……………首絞まっているっての！

「……………私も行くっ。」

「ああ？」

なに言い出すんだ？

「ここに私を一人残しておく方が危険だとわからぬか愚か者が。それに私の魔法は役に立つぞ？ 忘れたか鳥頭。」

鳥頭って・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、やくたつんだろっけど。

「はっ、いいぜ姫さん。ついてきな！」

俺と姫さんは敵の本拠地に乗り込んだ。

「貴様ら！」

「黙れ。」

姫さんが指を鳴らすと同時に爆発が起こり敵が吹っ飛んだ。

「なんだよ、それ・・・・・・・・・・」

「レンという少女からもらった。」

ちびっこ師匠かよ！

「それより、Eミニオンのお出ましか。」

「なら、こつちを使うか……………こい、炎雷覇。」

姫さんの手に一本の剣……………永遠神剣が現れた。

「それも、もらったのか？」

「ああ、これなら自由に火もおこせるしな。焼き尽くせ炎雷覇。」

炎の本流が敵を焼き払った。

「じゃあ、駆逐するが壊し過ぎないように気をつけるよ姫さん。」

「誰にももの言っている。いくぞー！」

その後、姫さんと一緒にEミニオンや雑魚共をことごとく叩き潰した。

帰ってからのほうが大変だった。

「貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れまわした挙げ句、その敵の本拠地とやたを壊滅させてきたのか！それは、どんな夜遊びだ！」

「まあ、後処理は警察に任せたがな。」

その後も詠旬のがみがみは続いた。

「だいたい、姫さんノリノリだったぜ？楽しかったとか言ってたぞ。」

俺より倒してたからな。

「嘘つけ！だいたい……………」

あゝうるせえ。

「詠春さん！」

「なんだタカミチ？」

「あのコワイ冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリって……僕びっくりしちゃって……あ、なんかナギさんにお礼伝えてだそうです。確かに笑いましたよね？」

「うむ。驚いたのじゃ。」

「……」

詠句は固まってるし、アルの忍び笑いも聞こえるな。

「な？それにちゃんと証拠も見つけてきたぜ。」

「な……………それは……………」

それからしばらくして、姫さんが帝国第三皇女に会いに行くことにしてみたんだ。

「あの証拠があれば、戦を終わらせられるのじゃな？」

「まっ、多分な。」

「では、それは主に任す。」

「あんたもよくやるぜ。戦火の中こんなボロ舟で帝国第三皇女と接触しにいこうっていうんだからな。」

かなり無茶だ。

「なんじゃ、心配しておるのか？」

「へ？心配？何の？」

こんどは両方叩かれた。

ふう、無事でいるよ姫さん。

その後、マクギル元老院議員に連絡して。指定された時間に訪れた。

「マクギル元老院議員。」

「ご苦労。証拠品はオリジナルだろうか？」

「ハっ……法務官はまだいらっしやいませんか？」

「法務官は……来られぬことになった。」

「……は……？」

どういふことだ？

「あれから、少し考えたのだがね。せつかくの勝ち戦だ。ここにきて……慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってるね。」

「はあ。」

「……………」

怪しいぞ。

「いや……その……私の意見ではないが、そう考える者も多いということだ。時期が悪い、時を待つのだ。君達も無念だろつが今回は手を引いてだな……」「待ちな。」……」

「あんた、マクギル議員じゃねえな。何もんだ？」

魔法の射手をぶっ放した。

「ぶっ!?!?」

「「なっ!?!?!」」

「ちょーーーーーっ！！ナギお前何やってんだよ！！」

「元老議員の頭もやしたがって！」

慌ててるな。

「良く見てみるよおっさん。」

「何っ！」

炎の中、そいつは現れた。

「良くわかったね。風の契約者。こんな簡単に見破られるとは……
……もう少し、研究が必要のようだ。」

「マクギル議員をどうした！」

「本物のマクギル議員なら、残念ながらすでにメガ口湾の底だよ。」

「てめえ！」

思い知らせてやる！

「通しませんよ。」

「食らえ。」

突っ込んだら、いきなり両サイドに現れた二人に攻撃され吹っ飛ばされた。

「こいつら強ええぞ！！！」

「ハツハハ、だが、生身の敵だ。政治家だ何とかガチ勝負できない奴より、万倍！！！！戦いやすいぜ！！！」

「フッ」

白髪の奴、何する気だ？

「わ、わしだ！マクギル議員だ………うむ、反逆者だッ！あ

あ、確かだ。奴等に暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼む！！スプリングフィールド、ラカン、ヴァンデンバーグ……
・ 奴等は帝国のスパイだった！そうだ、奴等の仲間もだ！今も狙われている！至急軍に連絡をっ……」

「げ」

まじで？

「やられたな。」

「おおおおー！！」

「こつなりゃ、くるまえにとつと殺すしかねえ！

「フ……君達は少しやり過ぎたよ。悪いが退場してもらう。行くぞ幻想。」

なっ！神剣持ちだと！奴の数が増えていき同時に攻撃してきた。

「やばい！なんだこいつらー！」

「これが永遠神剣の力だ。」

その後、ステイグマを全快にしてどうにか逃げることはできた。

「昨日まで英雄呼ばわりが一転して反逆者か。ヌッフ、いいねええ、人生波乱万丈じゃなくちゃな。」

「タカミチ君達は無事に脱出できたかな？」

ジャックは放置、ガトウの心配はもつともだが………ア
ルや詠春がいるし大丈夫だろう。問題は………。

「姫さんや姫子ちゃんがやべえな………。」

その後、俺達は辺境を転戦として姫さんや姫子ちゃんの情報を集めた。

ナギ
Side
Out

反逆者！（後書き）

VRMMORPGのデスゲームを書きたくなったので書いてます。
こっちと両方のつけてきますのでどうぞよろしくです。

修行の始まり（前書き）

短いよ

修行の始まり

ナギSide

皆と相談した結果、俺達は弱いという結論にいたった。

マスターに稽古つけてもらえるのは死ぬし……………。

「やはり、一番効率いいのは永遠神剣を手に入れることだな。」

「手に入れる当てはあるのですか？」

「神鳴流の宗家にあった書物で観たことがある。」

嫌な予感しかしないが……………。

「では、いくのじゃ。」

「場所は聖地だ。」

それから俺達は旧世界の聖地があるアメリカのイエローストーン国立公園にやってきた。

「ホントにここか？」

隠された地下通路を使い、火口付近まで来た。

「熱すぎるな。」

俺と師匠、アルは平気そうだ。俺は風使ってるからな。後はしらん。

「貴様等……………ジャック！」

「気になんねえな。」

「まあ、いい。我、神鳴流を次代に繋ぐ者なり、いにしえの契約に従い我が前に現れたまえ！」

詠春が夕凧を突き立てると夕凧が光りだした。夕凧がキーになったのか。

少しして、とてつもなく巨大な気配が膨大な熱量をともなって現れようとしていた。

「私の後ろ隠れる！」

詠春の言う通りに隠れたお陰で、夕凧が守ってくれた。

「誰だ、私の領域にやって来た愚か者は……………なんだ人間か。」

威厳のある声と共に顕現したのは深紅の用に紅い髪をし、炎を纏った11歳くらいの少女の姿をした存在だった。

「私は神鳴流の青山詠春です。火の大精霊イフリート様。」

「神鳴流の者か。して、何用か？戦いに来たか？」

「いえ、永遠神剣を頂きたく参りました。」

「試練か……………」

やっぱり嫌な予感しかしねえ！

「詰まらぬな……………む、お前はシルフの契約者か。私の契約者とどちらが強いかな？いいことを……………」

いるのかよ。どうした？

「……………はい。了解しました。それなら文句などありません」

いきなり雰囲気変わったぞ！

「喜べ お前達に永遠神剣を与えてくれる方の元へ連れて行ってやる。」

「本当ですか！」

「ああ、だからみな手を繋いで離さないように。死ぬからな。」

急いで、手を繋ぐと同時に俺達はMAGMAに飲み込まれた。

カポーン。

ここは……………どこだ？

「とっと起きぬか!？」

「ッ!」「」

殺気を感じて皆飛び起きた。

辺りを見渡すと和室のようだ。茶をたてている和服の少女に一人の青年。イフリートはお茶を飲んでいる。

「マスター!」「」

ジャックと声が重なった。

「ああ、桜花の弟子はジャックか。」

「うむ、どうぞ。」

「結構なお点前で。」

「で、永遠神剣が欲しいんだが……………」

嫌な予感はあるよな。

「いいが、とりあえず。」

「とりあえず?」

「鍛え直しじゃな。」

「なっ!」

「お前達、徹底的に鍛えてやる。何、安心しろ完全なる世界のこと
も任せておけ。むしろ中途半端なら死ぬ。」

死ねって……………本気みたいだな。

「どうします?」

「ゼクトとアルは完全なる世界の調査を手伝え。」

「分かりました。」

「うむ。」

なんでアルと師匠だけ?

「アルはこれをつけてな。こいつは重力制御装置だ。お前は重力に
もっと慣れる。」

「はい。」

「では、お主達はこちらだ。」

「」「」「うおー！」「」

いつの間にか、体中に鎖を付けられて引っ張られた。

それからダイダラに入れられた。

「では、まず自己紹介からじゃな。三人の鍛練を担当する桜花じゃ。

」

「そして、実戦を担当するイフリートだよ。」

「迎撃を担当するシルフだよ。」

「治療を担当するウンディーネです。」

おい、凄い布陣だな。あれ実戦？実戦訓練じゃなくて？

「まず三人に言うことは二つじゃ。死ぬでないぞ。」

「えっ？」

精神的にだろっな。

「次に……………頭の中で思い付くだけの地獄の特訓を思い浮かべよ。」

「……………」

やべえ、冷や汗がとまらねえ!？

「思いついたか？」

「……………ああ。」

「そんなものは楽園じゃ!」

「……………!」

桜花がそう宣言すると同時に身体が地面に縫い付けられた。

「現在このエリアの重力は約200倍じゃ。この中で動けるようになるのじゃな。」

食料を目の前に置かれ、修行が始まった。生き残れるのかこれ？

ナギSideOut

修行の始まり（後書き）

修行は飛ばします。

イフリースの恰好は覚醒時のしなみたい。

ナギSide

オステイア

1983年・・・・・・・・・・ようやく、修行が終了した。(実際は4、5年

修行)

何度となく焼死に掛けたぜ。今は茶室に全員呼び出され、正座させられている。

「さて、お前達にはアリカ姫とテオドラ姫の救出をしてもらおう。」

「姫さんの居場所が分かったのか!?!」

「ああ、救出した後は完全なる世界を潰しに行け。あと、こいつは永遠神剣は風

神だ。」

「よっしゃッ!」

やっとだ………まってるよ姫さん！

「詳しい場所は私が知っています。」

「じゃあ、さっそく行くぞ！」

「ああ。」

「ええ。」

それから俺たちは、夜の迷宮ノクティス・ラビリントゥスへ向かった。

夜の迷宮ノクティス・ラビリントゥスの壁を打ち破り中に突入した。護衛な

ど有象無象でしかなかったから簡単だったぜ！

「よお、来たぜ姫さん。」

「遅いぞ我が騎士。」

「我が騎士ってなんだ！」

「行くぞテオ。」

「うむ。」

「おい！」

く、無視かよ！姫さん達はとつと外に出て行きやがった！

それから、タルシス大陸極西部オリンポス山の隠れ家に来ている。

「何だこれが噂の紅き翼の秘密基地か！どんな所かと思えば掘立小屋ではないか

！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ。」

ジャックの言う通りだな。

「何だ貴様無礼であろう！」

「へっへっくん、生憎とヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね。」

「何い？貴様何者だ！」

ジャックが面白い顔してやがるな。

「あの、やけに元気な少女が……………」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。アリカ姫との交渉に出向いた所を一緒に敵

組織が誘拐したみたいですね。」

なるほどな。それより……………。

「さーて、姫さん。助けてやったはいいけど、こっからは大変だぜ。連合にも帝

国にも……………あんたの国にも見方はいねえ。」

調査資料を見ると、どこもかしこも敵だらけだったからな。

「恐れながら事実です皇女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で……………」

……………いえ、最新の調査ではオスティアの上層部が最も黒い……………
……………とい

う調査結果がでています。」

「やはりそうか……………我が騎士よ。」

ハズかしー呼び方しやがって。

「だからその我が騎士って何だよ姫さん。だいたい、クラスでいっいたら俺は魔

法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろ。ならば主は最早私のものじゃ。それに、どち

らかと言えば魔法騎士であるづ。」

「なっ！」

「しかし、連合に帝国……………そして、我がオステイア……………」

「……………世界全てが我らの敵という訳じゃな……………じゃが、主と主の

紅き翼は無敵なのじゃろ？」

この姫さん何行ってんだ？

「世界全てが敵……………良いではないか、こちらの兵は紅き翼と私……………」

「……………たったの八人だが最強の八人じゃ。ならば我らが世界を救おう。そして、我

が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ。」

へ、すごいことってやがるな。さすが姫さん………だが、俺は魔法使

いなんだがな。

「やれやれ、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。いいぜ、俺の杖と翼をあんたに

預けよう。」

姫さんの前で跪くと俺の肩に炎雷覇が置かれ姫さんの騎士となった。

「まあ、まつのじゃ。」

「どうしたテオ？」

どうしたんだ？

「ふふふ………」

なんだ？急に暗く……………おいおい……………まさか……………
……………。

「現れよわらわの切り札ミネルバ！」

ガラスが碎けるように突如として戦艦が出現した……………。

それから、しばらく俺たちはミネルバのミラージュコロイドを使い、
完全なる世

界やロウ・エターナルの拠点を奇襲して壊滅させてやった。

当初の予定よりテオの嬢ちゃんのお蔭で明らかに早い。リリちゃん
やちびっこ師

匠も乗ってるしな。

しげらしくして、ブリッジに呼び出された。

「あわわ、皆さん……………」

この艦長席に座っている子は雛璃ちゃん。さんかく帽子を弄っている。この艦の

全てをコントロールしている。この嬢ちゃんのお蔭で見方もだいぶ増えた。

「どづした？」

「オスティアで……………王が殺され占拠されました。」

「……………何!」「……………」

姫さんはここにいるんだぞ!

「ギョウゴウゴウギョウギョウ」

「わかりませんが……………アリカ様に招待状がきています。」

オスティアを

返して欲しくばアリカ様とナギ様だけで来いと……………

「・

「おいおい。」

「皆のもの行くぞ！」

姫さん正気かよ？あきらかに畏だぜ？

「よろしいのですか？」

「構わぬ。畏ならば畏ごと打ち碎けば良いだけじゃ。お主ならで
きるじゃろ？」

「

「当たり前だ！」

「ええ！」

「ああ。」

それから俺たちはオスティアを目指した。

ナギSideOut

???.Side

ふむ、予定道理・・・・・・・・オスティアに先入完了かの。

「議員殿どうかしましたか？」

「王はどなたにいる？」

「玉座にいます。」

「ありがとうございます。案内してくれ。」

「分かりました。」

ちよろいな。

しばらく歩いた後、巨大な扉についた。

「どつぞちちらです。」

扉が開けられた。

「「「なッ！！！なぜ議員殿が二人！！！！」」」

「それはどういことじゃー！」

周りの兵を回し蹴りで蹴り飛ばした。

「ぐはぁッ！……！」

兵達は吹飛ばされ柱を破壊しながら壁にぶつかった。

「なんじゃ貴様は！」

「何、そこにいる王の命を……いや、完全なる世界に組する者を狩

りに来ただけじゃ。」

「お逃げ……がッ！」

遅いの。周りの雑魚どもを三秒ほどで消滅させた。

「化物め！来い、ミニオンども！……！」

たかがミニオンで我をとめられるとっておるのか……片腹痛いの！

一分後、ミニオンは光となり消滅した。王は心臓を貫き死に絶えて

いる。

「このような事をしてただで済むと思っっているのか!!!!」

「安心しろ………全て貴様に罪が行くようにしてあるのでな。」

「なんだと!!」

「では、ゆっくり休むと良い。」

絶望を浮かべた議員を跡形もなく消滅させた。

「さて、次は………アリカ姫に招待状をだすか。」

「「「「ご無事ですか!!!!」」」」

「遅かったな、王はもう死んだぞ。これよりオステイアは我らメガロメセンブリ

ア元老院が支配する。」

ふふふ、楽しくなってきたな。

「何を馬鹿なことを！」

「これは侵略行為ですぞ！」

「それがどうした？」

「ええい、仇を取れ！！！」

無駄なことを適当に痛めつけてやるか……………さあ、早く来い…………

…………アリカにナギよ。

ア
リ
カ
S
i
d
e

?
?
?
S
i
d
e
O
u
t

まさか父上が殺されるとはな………我とナギはオスティアの王城へと来

ている。他のメンバーの反対を押し切りここに来ている。

「姫様!!」

「無事か？」

「はい、殺された者もいますが、大抵の者は怪我ですんでいます。」

不思議なものだな……………。

「で、敵はだれだ？」

「メガロメセンブリア元老院議員です。」

「何！！！」

「間違いありません。姿も確認しましたし、正式に特使として来ておられました」

。それが突然……………」

いったいなにがどうなっているのじゃ？ますますあやしげぞ。

「メガロメセンブリアは知らぬ存せぬです……………」

「それで奴はどこにいる？」

「玉座にいます。」

「行くぞ、姫さん。」

「ああ。」

確かめねば分からぬな。

「お気をつけて……………」

それから我らは玉座の間にいき篡奪者と対峙した。

「よく来たな。コントラクター風の契約者ナギ・スプリングフィールドにオ

スティア王女アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下……………
……いや、

火の契約者コントラクターといったほうがいいか。」

なぜ知っている？

「何！姫さんがイフリートの契約者だったのかよ！！」

「何を言っている。言わなかったか？」

「聞いてねえよ！！！！！！」

おかしいな。行った気がしたのだが……………まあいい。

「詮無きことだな。それより、オスティアを返してもらおうか。」

「確かにな。この爺……………半端ねえな。本当に議員かよ？」

確かにその疑問はまっただな。

「ゆくぞ。まずは右ストレートだ。」

「ッ！！！」

宣言道理に、右ストレートを10M以上離れた場所から放とうとした。
届くはずが

……………

「何をする！無礼であろうっ！」

ナギに押し倒された後、巨大な気の塊が通り抜けた。気の塊が通ったあとは壁が

破壊され外が見える巨大な穴ができておった。

「あぶねえな。」

「すまぬ……」

ナギの手を借り改めて対峙した。やはりこやつはおかしすぎる。

「改めて問う。貴様は何者だ？」

「Need not to know。」

く、知る必要の無いことだと？答える気は無しか。

「姫さん、全力でいくぞ！」

「うむ。全ての火の精霊よ、精霊王との契約に従い、我に従え！」

「全ての風の精霊よ、精霊王との契約に従い、我に従え！」

我とナギの契約の力によって膨大な数の火と風の精霊がこの場に顕現し、圧縮し

ていく。

「さすがと言うところかな？では、我も………」

「『食らえ！』！』！』」

一瞬で膨大な気を圧縮して放たれた気砲と我がナギと共に集めた膨大な力がぶつ

かり合い鬨ぎ合いを続けた。鬨ぎ合いの余波により周りには破壊され続けていた。

「やりおるの………だが!!」

さらに、圧力が上昇してきたな!!

「炎雷覇!!」

「風神!!」

ナギと共に永遠神剣の力を解放した。それと同時にいきなり気の圧力が減少した

。

「見事じゃ!!」

着弾と同時に爆炎と爆風により全ては吹き飛ばされた。

「おい、姫さん……………」

「うむ……………明らかに手を抜いていたな。」

「それに知ってる感じがしたな。」

我は会った事は無いな。

「それえで、姫さんどうするんだ？こんなに破壊しちゃったがよ。」

「ふむ、確かにいささか壊しすぎたか……すべては、メガロメセン

ブリアに抗議をしてからだな。」

「それもそうだな。」

その後、メガロメセンブリアに抗議したが事実無根と言われたので、証拠映像を

たたき送ってやったのだが、議員の暴走ということで片付けられた。

そして、父上の代わりに我が女王となった。

ア
リ
カ
S
i
d
e
O
u
t

1983年9月20日

Inside

今までの調査、殲滅のお陰で連合にも帝国にも味方が増えた。帝国はテオのお陰

で大丈夫。連合はオスティア襲撃の件で元老院の権威は失墜したから楽でした。

しばらくして、瑠璃に呼び出された。

「あわわ………皆さん、完全なる世界の本拠地を見つけました。」

「……どこだ……！」

「世界最古の都、王都オスティア空中王宮の最奥部にある墓守り人の宮殿です。」

「

予定通りというわけだね。

「つまり、始まりはオスティアからといわけか………」

「姫さん……………」

「よい、連合軍と帝国軍を動かしてくれ。」

「了解。」

さて、これで準備は整っています。

私は「っそりおにいさまに連絡を取る。」

「おにいさま今回はどうしますか？」

「今回は出張るよ。桜花と一緒にね。」

「桜花ねえ……………ママも一緒ですか？」

まえ、お姉ちゃんって呼んだら怒られた。

「ああ、まだ暴れたり無いらしいからな。」

「わかりました・・・・・・・・・・予定通り、1983年9月29日（木）です。お待

ちしていますねおにいさま。」

「ああ、こっちは別ルートで中に入るから外の敵を頼む。」

「はい、御武運を・・・・・・・・・・」

こないだの対策はとれてませんがどうにかしてみます。

1983年 9月29日(木)

私達は、墓守りの人の宮殿前に来ています。

「奴ら、不気味なくらい静かだな。」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」

「それは……胆略的……」

「う……………うるせえ！」

やっぱり、ジャックは馬鹿。

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入

できる。頼んだぜ！」

「ハッ、それであの……………ナギ殿……………」

「ん？」

ナギ……………

「サ、サインをお願いできないでしょうか？」

「ナギ、もてもて？」

「うるさい。まあ、それくらいいいで。」

「ありがとうございます。尊敬していました。」

「ウハハハハ！！」

「こちらは、こんな感じ……あつちは大変そう。」

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決

戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私達でやるしか無いでしょう。」

「すでにタイムリミットだ。」

「確かにもう時間は無いよね。」

「うん、時間は……無い。」

「ええ、彼らはもう始めています………世界を無
に帰す儀式を

………世界の鍵たる黄昏の姫御子は彼らの手にあるのです
から。」

「それに………私がいる………連合も、帝国もい
らない………」

・すべて………消し飛ばしてあげる………よっ。」

跡形もなく………

「「あ、ああ………」

「「え、ええ………」

「ばばたちもくるらしいからへいきだよっ。」

りりの言ひと通りだけ。

「リリ……危ないよ？」

空中に足をぶらぶらして遊んでる。

「よし、野郎共！姫子ちゃんを助けに行くぞ！！」

「「「はい／ああ」「」」

「2人ともお願いするぜ。」

「うん。」

「まかちて〜」

私は大規模創世の準備を開始した。

Consider

?.?.?.
S
i
d
e

あれが奴らやプリームムが言っていた奴らだな。

「なぜあいつ等は我々の考えを理解しない。」

「仕方あるまい。それが人間という連中だ。」

「そう……何があっても前に進む。それが全ての原動力だよ。そして、行

き過ぎた力で人間は滅ぶ。」

こやつはヒツギか。

「貴様！」

「よい。主らは他にも参加するのか？」

こやつ等の力は当てになる。

「僕と姉さん、悠久が参加するよ。」

「三人だけだというのか！」

「3人でも平気だよ。僕達は造物主と同等以上の力はあるよ。不滅ではないけどね

」。

「だが、向こうにも存在しているからな。よろしく頼むとしようか。」

こいつらを信用しているわけではないがな。

「くひひ、任せておいてよ。」

ふ、お互い利用する関係だ。所詮こやつらは別世界の存在だからな。
さあ、人間

よ足掻いてみせよ。

???SideOut

最終決戦過去編（前書き）

ユーフィーの性格がおかしいかもしれないけど勘弁してね。

最終決戰過去編

Inside

創世の準備ができたみたい。それと同時に絶界を展開。

「準備完了した、ちびっこ師匠頼むぜ。」

「まかせて……………」

眼前には狙いをつける必要も無いほど自動人形や召喚魔、羽根突きEミニオンどもがいる。

「行くか？」

「うん……………」

「じゃあ、行くぜ。コード「DX」、30機創世開始だぜ!!!」

ガンダムDXを10機ずつ横一列に編成し、上中下に配置した。

「何だあれ……………」

「これが……………」

「創世の魔王の力……………」

後は時間……………。

「……………月は出ている……………?」

「いや、夕方だがまだ出ていないぞ?」

「そうですね。」

「残念……………でも、平気だよ。創世!」

そのための準備も出来ているから。

「了解だぜ。ドミニオン微調整開始……………一号機、
五号機、12号機調整完了……………」

「マイクロウェーブ照射。」

「D・O・M・Eより照射を確認!!--!」

ドミニオンの出番です。



月にあるマイクロウェーブ照射施設であるD・O・M・E……
……そこから、マイクロウェーブが照射された。

ただし、照射されたマイクロウェーブは地球ではない惑星方向へ向かい衛星に当たり、増幅され方向を変えられた。

3機の衛星による角度調整、増幅され一条の光は多数に分かれ、求められた場所に送られた。

計画通り30機のDXにマイクロウェーブが届いた。

「おいおい、まじかよ。」

「ツインサテライトキャノン発射準備完了だぜ！」

ハンドガンを両手で持ち、前方に向けた。

「斜線上は問題なし……………サテライトキ

ヤノン………ファイヤ！」

引き金を引くとDX30機から60発ものサテライトキャノンが一斉に発射された。

サテライトキャノンは動人形や召喚魔、羽根突きエミニオンどもも消滅させながら、墓守りの人の宮殿に着弾した。

サテライトキャノンは宮殿の障壁を破壊し、内部にもその攻撃は届いた。その圧倒的な破壊力がありとあらゆる再展開された障壁を破壊し続けた。

「でたらめだな。」

「まったくだな。」

「ええ。」

「というか、姫子ちゃんもろとも壊しかねないな。」

たぶん大丈夫。

悠久Side

インサイドアウト

呼び出された私は他の人達………。ロウ・エターナルの人と合流した。なんでロウに入ったかは聞かないくださいね。あれ？なんでこんなこと言ったんだろ

？まあ、いいです。

そして、目の前に迫る光の本流が迫って来た。

「またですか~~~~~ゆーくん!!!!!!」

私は急いでゆーくんと一緒に光を止めるのです。

「オーラフォトンバリア!!」

どんどんこちらを狙ってきます！

こんなの無理だよ~~~~~

最初は平気だったんですけど。じりじりと押されて来ました。

「もうだめ！」

目をつぶった瞬間。暖かい感じに包まれました……………
パパ、ママ先発つ親不幸ものを許してください……………。

1483

「おい、起きろ。」

「え、死んだんじゃ……………」

「少なくとも、死んでないな。」

私は男の人に抱きしめられていました。助けてくれたみたいです。

「すみません、ありがとうございます。」

「気にしないでいい。ユーフイー。」

「なっ、なんで私の名前を知ってるんですか？」

しかも、愛称ですよ。

「気にしないでいいよ。こちらだけ一方的に知っているのも問題だから名前を覚えておく。シオンだ。」

「シオンさんですね。」

「別にかまわぬが、いつまで抱いておる気じゃ？」

「え、あ、すみません。すぐおりまッ！」

降りようとして、足をつくと痛みが走りました。どうやらさっきのダメージみたいです。

「いいよ、軽いしこのままで。」

「そんな悪いです！」

「気にしなくていい。」

いえ、恥ずかしすぎますよ……男の人にお姫様抱っこなんて……顔が赤くなってくるのが分ります。パパの国の民族衣装を着た人も見てますし……

……

「のう、最深部にいきたいんじゃないが道は分るか？」

「え、最深部ですか？こっちです。」

「じゃ、ナビゲートよろしくね。」

「はい！任せてください。」

それくらいはしないといけませんよね。その間に、傷を治しましよ
う。

それから、事前に送られた案内に従っていくとすぐに最深部に到着しました。

「あ、テムオリンさんにヒツギさん到着しました。この優しい人につれてきてもらいました。どうしました？」

ヒツギさん以外啞然としていますね。

「くひひ、まさか案内してくるとはね。」

「貴方は敵に連れて来てもらってどうしますの！」

「て……敵？ええええ！敵なんですか!!！」

「あれ？ユーフィーってカオスじゃなかったけ？」

確かに前はカオスでしたけど。

「うむ、誤解しておったようじゃな。我等はユーフォリアをカオス

「と思い。ユーフォリは我等をカオスとっておったと。」

「まったく何を考えてますのかしら？」

「うう……私のバカ……ちゃんと確認すればよかったです。でも助けてくれたから……味方だと思ったのに……ぐすん。」

「「面白いからいいんじゃないか？」」

シオンさん桜花さんヒツギさんは面白ければいいんですか？。

「良くありませんわ！」

「まあ、取り合えずだ。黄昏の姫御子を返していただくか。あと、ユーフィーちゃんはどうだい？」

「ええ！」

「ちょうどいってなんですか！」

「ふざけていますの？」

「本気、ユーフィー気に入ってるとういふか好きだし？」

「っえ、す……すきって……」

「「わはははははー！」」

桜花さんとヒツギさんは思いっきり人事だと思って笑っています。私は告白されて………心臓がドクドクいって変な感じですよ。どうしようゆうーくん。

「ふん、なら力づく奪えばよろしいのではないですか？」

「OK、了承した。今回の戦いの景品はユーフィーだな。」

「ちよ、ちよつと待って……」

「では2on2でいいかの？」

「だね。」

え、え？景品は確定なんですか！！！！

「君達はいつたいなにをしてるんだ？」

救いの人に来てくれました！ありがとうございます。白い髪の人。

「や、久しぶり。自爆以来だな。」

「やっぱり生きてたんだね。彼女も。」

「殺しそこなっていましたね。」

「ふん、あの程度で我がやられるはず無かるづ。」

皆さん啞然としてますね。

「とういか、お前ら早く防衛に行かないと………サテラ
イトで消滅するぞ？造物主の結界でどうにか持つてるくらいなんだ
からな。」

「くひひ、あの威力は反則だね。人形殺しも近づくと前に殺されて意味無いしね。」

「今は三体をローテーションで連続で放ってやがるからな。」

「まあ、こっちはこっちで勝手にやるので、そっちも勝手にどうぞ。」

私を置いて話しはどんどん進んでいきますよ……………。

「姫御子はいいいのかい?」

「姫御子とユーフィーならユーフィーが欲しいからな。」

「はう……………」

「らしいのじゃ、そして我は主に従うのみ。ぶっちゃけ、暴れられれば良いのでな。」

恥ずかしすぎますが、この人たち危ない人です！助けてパパ、ママ、望さん！

「良い、いつて来い。こやつらの戦いは我が見学しておる。」

「了解しました。」

ああ………白い髪の人や色々な人がいなくなりました。

「我が審判をしてやる。お嬢さんをこっちに渡せ。」

「んじゃよろしく。造物主………丁寧に扱えよ。」

「うむ。」

「私、完全に景品になってます！私の意志は！」

「………知らんな（知りません）」

全身が真っ黒い人に引き渡されました。

「ああ、結界はお前達で張れ。崩壊されたらたまったものではない

「のでな。」

「OK、絶界をさらに展開。カウントダウンを頼む。」

「うむ。10・・・9・・・8・・・。」

「この人達本気です・・・私なんのために来たんでしょうか？」

「ヒツギ、本気をだしてくださいね？」

「姉さん。」

「お願いしますわ。後で何でもして差し上げますから。」

「くひひ、ならしかたないね。」

「確か、ヒツギさんの神剣は鎖と瞳でしたね。」

「6・・・5・・・4・・・。」

「ヒツギはこっちで相手をするから、テムオリンをお願い。」

「うむ、一度自らの手で完膚なきまでボコリたかったのでちょうどいいの。」

テムオリンさんは色々恨みを買ってるみたいです。

「2・・・・・・1・・・・・・スタート!!」

こうして、私を賭けた戦いが始まりました・・・・・・わ、私は認め
めてないですからね!

悠久 Side Out

ナギSide

ちびっこ師匠による砲撃支援……支援じゃねえな。殲滅砲撃によって敵は死に絶え、すでに宮殿そのものに攻撃をしかけている。

「結果があるから平気とはいっていましたが……」

「大丈夫だろ。」

俺たちは揺れる宮殿の中に侵入した。メンバーは俺、アル、詠春、ジャック、ゼクト、リリちゃんだ。

「……………お……………」

楽しそうに双剣を持って走るリリちゃんの通ったあとは敵の死体だけだ。俺たちは左右から奇襲してくる連中を殺しながら進んだ。

しばらくすると白髪達にあった。

「ここから、先には行かせないよ。君達のせいで僕らの仲間も随分減ったからね。敵討ちとさせてもらうよ。」

「へっ、前の俺らだと思っなよ？」

「きつい修行つけたからな。」

「行くぜ!!!」

それから10分もたたずに決着がついた。

へ、風神のサポートによつて聖痕を全快にできる俺の敵じゃねえな!

「まったく………理不尽な強さだな。」

「とつとと姫子ちゃんの居場所を吐きやがれ!」

「まさか、君達は僕が黒幕だと思っているのかい?」

「何?」

その時、下からバカみたいに強力な攻撃がきた。

「まずい!最強防壁!!!!!!」

師匠が咄嗟に張った防壁も貫通した。俺たちも必死で防いだが2撃目の攻撃にやられた。

「ふう、いいんですか？下放置してますけど。」

「かまうまい、連中の戦いは時間稼ぎだ。お主さえ傷つかねば何も問題ない。」

「景品にされたますし……どうにかなりませんか？」

「無理だな。我の関与する所では無い。」

現れたのは漆黒のローブを纏った魔法使いっぽいのと青銀の髪と瞳の少女。天使の翼のような髪飾りがついている。

「どっちもとんでもなく強いな。」

「はあはあ、信じられませんね。1撃目はあの少女が放った見たいですね。」

「お前達、ご苦労だった。さあ、終わりの始まりだ。」

「「「はい!!」「」」

「治療しなくていいんですか？」

「かまわん。戻るぞ。」

少女をつれて、空いた大穴から戻っていった。

「おい、無事か？」

敵の連中は満足げに倒れてやがる。

「俺は……両腕をやられた……」

「残念だが私もだめだ……」

「わしはなんとかかの。」

「一人くらいは回復できます。」

「りりもへいきだよ。」

りりちゃんにかんしてはすげー速度で治っていったるな。

「アル、全力で俺を癒せ。」

「バカかてめえ！あの2人は化けもんだ。負けるのが目に見えてやがる。」

「それにもう、崩壊は始まった。」

「まだだ、まだやれる！諦めるわけにはいかねえだろうが！！！」

「姫子ちゃんや……………姫さんとも生きて帰るって約束したからな。」

「ならばわしも行くぞ。傷は浅いからの。」

「りりも！」

「よし、アル！」

「ええ。」

「行くぜ！！」

師匠とリリをつれて最下層へ向かった。

そして、最下層で見たのはとんでもない戦いだった。

シオンSide

ナギSideOut

ツち、厄介な。支配の能力で森羅のお互い消しあっているからな。

「鎖ってうっとうしいな！」

「くひひ、便利だよ！」

360 どこからでも多数の鎖が捕らえようと迫ってくる。この鎖に触れた物は変わっていく。火が水になったり反転するようになっっていく。

「まさか、これでミニオン生産してたのかよ！」

「正解。材料は生きた人間だよ。燃える天空。」

「千の雷！てめえ……………こい、終末の剣……………
レーヴァテイン！！！」

炎の魔剣の封印を第5まで解除して、ヒツギに切りかかる。

「それはまずいね！」

「神鳴流奥義魔王炎撃覇！！！」

レーヴァテインにより、格段に威力があがっている。鎖に中ると同時に紅く変色し焼ききれていく。

「何その永遠神剣、反則すぎじゃないかな？」

「よく、言っな。すぐ再生するくせに！」

「後ろががら空きですわ！」

「うち、テムオリンめ！」

「そっくり返してやるのじゃ！剛掌波！」

桜花が圧縮した気を放ちテムオリンに攻撃する。しかし、ヒツギの鎖が邪魔をする。さっきからこの繰り返しだ。

「うち、面倒だ。桜花耐えろよ！」

「うむ。」

「何をする気？」

レーヴァテインを第6開放した。

「全てを焼き払え、レーヴァテイン！！！！」

真名を開放すると世界が燃えた。炎の龍が多数暴れ狂い世界を燃やしていく。

「なんだこれは！！！！！」

「最終決戦ぽくなってるのじゃな。」

「パパすい〜」

お〜ついにきたか。

「炎は理の破壊でいいかの。ならば、こっちもいくぞ！」

「え、ちよつとまっ！」

「いやじゃな！食らえ、七死闘氣断！！！！」

光線のような超弩級の闘気を乱射しテムオリンの肉体を粉碎しようと迫る。テムオリンが放つ光の攻撃も、ヒツギの攻撃もものともせず粉碎していく。

「あれって北斗七死闘氣断か……………生命力かなり減るはずだが……………大丈夫か。」

「くひひ、さすがにこれは無理かな。姉さん！……！」

「ユーフォリア입니다！」

「え？え？」

不意打ちか？バカだなユーフィーにそんなのできるはずないじゃん。

「つち、つかえませんか。仕方ありませんわね。今回は引かせていただきますわ。」

「じゃあ、私はどうなるんですか？」

「勝者の彼らの物になるね。それじゃ、ばいばい。次はその反則神剣対策取らせてもらうよ！」

「覚えていなさい……！」

ヒツギとテムオリンはこの世界から出たようだ。

「あれ、さっきいた奴は………？いや、そんな奴いなか
ったな。」

エターナルじゃなきゃ、基本的に世界から出たエターナルについて
覚えていられないんだよな。例外はあるけど。俺や桜花、エヴァ達
にもほどこしてある。

「ふむ、勝者はお主達だな。景品だ。」

「きゃッ！」

ユーフィーが投げ渡された。

「確かにいただいた。」

「私は認めてませんよ！」

「なら、勝負する？」

「えっ？」

「徹底的に調……教育してあげるよ。」

「ひつ……今調教つて……」

何をいつてのやら、教育だよ。

「教育だよ。」

「でも、やっぱり戦います！勝手に決められるなんて納得できませんから。」

それもちょっと違うのだが………まあ、いか。

「というわけで、ナギそっちは任した。」

「お……おっ。」

「では、我はリリと見学………いや、リリよ。ゼクトを殺すのじゃ。」

「「なッ！」」

とんでもない命令だすな。桜花は。

「ッ、最強防壁！」

「むただよ〜」

「なんでだ！」

「決まっているの。そやつが敵だからじゃな。」

「完全なる世界……いや、ロウ・エターナルにも所属しているよな？フィリウス。」

まったく何考えてるのか分らんが敵側には違いない。

「なんじゃ、ばれておったのか。」

「師匠本当なのか！」

「ナギよ、悪いがシオン達が言ったとおりじゃ。我が2600年の絶望がそうさせる。」

「むずかしい、おはなしおわった？」

といつつすでに切りかかっているな。

「ふ、存分に戦ってくれる。」

「師匠！」

ゼクトとリリは別のところで戦うみたいだな。

「桜花、行ってくれ。」

「心得た。」

これでよし、次はナギか。

「ナギ、考えてる時間は無いぞ！」

シオンSideOut

過去編最終決戦(2) (前書き)

いろいろ飛ばしています。飛ばしてるところは漫画みちゃってね
おい

過去編最終決戦(2)

ナギSide

青銀の子は師匠が相手だからこつちだな。つち、まじでこいつ強ええな。

「さすが、始まりの魔法使いか」

「貴様もただの人間の癖によくここまでの強さを手に入れたものだな」

「へっ、行くぜ!!!」

「来い!!!」

無詠唱で千の雷や雷の嵐を放った。

暴風で足止めをして、千の雷が造物主に襲い掛かる。

「甘いな」

片手を振っただけで、暴風をかき消しやがった。

「次は我の番だ」

両手を広げると、多数の巨大な魔方陣が瞬時に作られ、数々の漆黒の球体が目標めがけて襲い掛かった。

「おいおい、でたらめだな!!」

「よく言う。貴様も同じだろうが。」

風の刃を多数作り、漆黒の球体にぶつけて迎撃し接近する。

大魔法を含む数々の魔法を撃ち合い続けた。

「食らいやがれ！千衝雷・螺旋撃！！！」

「くッ！」

造物主に雷が螺旋状に超圧縮された魔法が、中ると同時に解放され絶大な威力を発揮する。

「フフ………フフはははははは。私を倒すか人間、それもよからうッ！」

このやろう！！確かに効いてる筈なのに！

「私を倒し英雄となれ！羊達の慰めともなろう。だが、ゆめゆめ忘れるな。全てを満たす解はない。いずれ彼等にも絶望の帷が下りるだろう。それは、貴様も例外では無い」

「ケッ、グダグダうるせえええッ！」

拳に大量に圧縮した精霊の力と魔力を乗せぶつ放した。

造物主を貫いただけでなく、宮殿の外まで威力はとどいた。

「たとえば、明日世界が滅ぶと知ろつとも！！！！あきらめねえのが人間ってモンだろっがッ！！」

さきほどと同じく、大量に圧縮した精霊の力と魔力を込めた拳を乱打しまくった。みるみる造物主にダメージを与えて行った。

「くつくく……………貴様もいずれ私の語る永遠こそが全ての魂を救い得る唯一の次善解だと知るだろっ！」

「うるせえ！！人間をなめんじゃねええええーッ！！！！」

風の精霊と魔力を圧縮して雷の槍を作り出し、ボロボロの造物主にレールガンのように投擲した槍は造物主もろとも神殿を破壊した。

Inside

ナギSideOut

世界の終わりが始まったね。

「広域魔力減衰現象を確認！」

「これまで観測されたものの比ではありません！」

「世界を飲み込む勢いです！」

準備しなきゃ。

「間に合わなかったのか……………」

「彼等に限ってそんなハズは……………」

クルト君が後を気にしていますね。なんででしょうか？

「陛下ッ……これは罨ではないのですか！
？おそらくネガロメセンブリア元老院直轄の……」
「……」

「よい、クルト」

「しかしッ、アリカ様……」

確かに……でも、手は色々あるよ……
・用意はしています。

「全艦艇、光球を取り囲み押さえ込め！！魔導兵団大規模反転封印
術式展開。全魔法世界の興廃はこの一線にあり！各員全力を尽くせ、
後はないぞ……」

「女王陛下、よろしいのですね……？」

「よろしいハズが……ないッ……」

「なら……私が止める。」

「「「えっ！」「」」

転移魔法を発動させ魔力消失現場へ向かった。

到着した私は、創世を本来の姿である杖に戻した。

「お嬢、作るのは……………」

「魔力を作って放出する。」

「了解だぜ！」

「世界樹からも魔力をもらって。」

「アイアイサー」

どんどん魔力が圧倒的な速度で減少していく。ここが普通の世界なら大丈夫なだけだね。

空間を開け、世界樹から魔力をもらい作り出した魔力を拡散する。

「というかよ。絶界があるんだから、現実に影響しなくないか？」

「絶界も魔力を使ってるからこのままいけば消えるの。」

「まじかよ………マナじゃねえのかよ」

「マナにしたら簡単にエターナルが操るよ。」

「なるほどな」

「なんとかなってるけど、危ないかな。」

「ジエネシス発動………」

「魔力減衰現象速度と魔力増加現象速度が同じになっただぜ」

「なら、問題ないかな。しばらく持つ？」

「問題ないぜ。」

「なら、次は……………」

「ちびっこ師匠か。」

「ナギ……………アスナは？」

「問題ないぜ。」

ナギの手の中でアスナは寝ている。

「なら、脱出して。ここからは私の仕事。」

「おいおい、そっちはどうするんだ？」

「問題無い。邪魔だからとつと行く。」

「えっ！」

ナギとアスナを問答無用で転移させた。

「では、おにいさま、桜花ママ、リリ後はお願い」

「ああ、まかせておけ。」

「うむ、そっちは任せるのじゃ。」

「またね」

さて、アスナが儀式をさせられた場所へ移動した。

「ほう、何をする気だね？」

「簡単、この消失術式は黄昏の姫巫女の力を増幅させて消し去る。なら、魔力を増幅させられる私が儀式の中心になれば？」

「ふ、術式の効果は反転されるか………相変わらず規格外の存在だな。」

「貴女に言われたくない。始まりの魔法使いさん。」

体の半分以上消滅しかかっているのに……生きてる。

「まあ、がんばるといい……貴様等もいずれ私の語る永遠こそが全ての魂を救い得る唯一の次善解だと知るだろう」

「そんなことはさせません。」

「精々ががんばるといい。」

いきましたか……でも、嫌な予感しかしない。

「いくよ、創世……」

「術式リンク完了……魔力増幅開始……」

これから私は、しばらく眠ることになる。オスティアはきっと大丈夫だよ。任せましたよ、おにいさまやママ達。

Consider

ナギSide

俺たちは英雄として皆から褒め称えられた。

「どうしました？」

「ふん、ちびっこ師匠はまだあそこにいるんだぜ？」

「確かに、彼女のお蔭で減衰した魔力はどんどん回復してるみたいですね。」

子供を犠牲にするなんて……………。

「ナギ、その考えは間違っているぞ。」

「え？」

「あの人達があの子を犠牲にするわけないじゃないか。」

「それもそうだな。あの親バカ連中が安全確保しないはず無いな。」

絶対にながあってもないな。

「まあ、いろいろ引つかかっているがな。」

「そうですか。」

「まあ、俺は散歩してくる。」

「いつてらっしやい。」

とりあえず散歩して気分落ち着けるかな……………。

その後、姫さんと色々あった。

それから、しばらくして事件は起こった。

ナギSideOut

ア
リ
カ
S
i
d
e

これで全て終わりか………しかし、レンが戻らぬ。それに、一旦魔力が消失したため、オスティア周辺の魔力は不安定になっている。

「陛下………大変です。」

「どうした、ガトウ？」

「崩落が始まりました。」

なんだと？

「なぜだ？崩落は五分五分だが………むしろ安定に向かって問題なかったはずだが。」

「それが、空中王都の一部が突然崩落を始めました。それから崩落は空中王都全体に広がっています。」

「原因は不明か………ただちに民を避難させよ……！」

く、いったいなにがあったのだ。

私は現状を知るために旗艦乗った。

「空中王都崩落拡大中！！原因不明ですが飛翔が出来ないみたいで
す！！！」

「本艦にも影響が出ています！即席の対抗呪文装甲でどうにか持っ
てます。それに、魔力消失現象も起きています……………」

「泣き言はいらぬ！！あと数時間もてばよい！！最も的確に市民を
救えるよう最大効率で船を回せ！！ただし、捨ててよい命はない！
！一人も救いもらすな。これは厳命じゃ！！！」

レンがいれば……………無いものねだりは
できんな。

「貧民島の避難作業が難航しています。このままでは……！」

「理由は何じゃー!!」

「街の構造が複雑な上……不法移民が多く全住民の把握ができていませんー!!」

「……………ッ……………わかった……………」

だれ一人として見捨てるわけにはいかぬ。

「陛下、どこへ!？」

「貧民島は妾が直接趣き島ごと不時着させる!」

「しっ、しかし」

「妾の魔法ならこの中でもどつつかなる。」

「行けません女王陛下ッ!」

魔力消失でも契約者としての力は問題ない。

「ゴルアアーツ！こんのバカ姫！！」

「なんじゃ？」

「やい、アリカてめえ！！どういつこったコレは！？」

「ナギ……………見てのとおりだ。世界を救う代償に自らの国を亡ぼした。案ずるな妾もいずれ遠からぬうち
に地獄へ墮ちる。」

「なんで話さなかったこの唐変木！！」

ばか者が。

「話しても無駄であろう。戦いしか能のない主が一人で何の役に立つ。」

「馬鹿ヤロウ！！いいか、俺がそっちへ行ってやる！！！！」

「ならば手伝え、我とナギで時間を稼ぐぞ。」

「わかった。どうするんだ？」

「それはついてからだ。以上、通信終わり。」

「おい！」

童は、通信を切って現地にむかった。

シオンSide

ちっ、してやられたな。

「この崩落は連中かの？」

「ああ、テムオリンとヒツギの仕掛けだろうよ。」

時限式で魔力減衰の魔法をわざわざ用意していやがった。

「五分五分になることが分かっていたようじゃな。」

「ふん、どうせ面白半分の仕業だろう。ユーフィーの件の仕返したろうよ。」

「そういえば、ユーフィーに随分苦勞させられてたみたいだの。」

「ああ、だって傷つけられないじゃないか。どれも強力で苦勞した。」

永遠神剣はどれも強力すぎる。

「なるほどの。では、これからどうするか?」

「ナギヤアリカが救出しているだろう。」

「助けぬのか?」

「他人に興味はねえな。」

これで死ぬのは3%以下だろうしな。

「レンとリリに嫌われるぞ?」

「えっ?」

「あやつらの知り合いが多数いるからの。」

「.....」

「さて、どうする主殿？」

明らかに楽しんでるな。

「ちっ、いくぞ桜花。崩落する大地の破壊及び人命救助だ。来い大精霊共……」

「……………」

「なんだよ？」

「いきなり本気じゃな。」

「なにになに？」

「何ですか？」

「命令は1つ、人命救助……いや、^{オーダー}全ての生命を救え。」

「了解」

「イフリート、シルフはアリカとナギのサポートを頼む。」

「さて、行くぞー!!」

桜花がなにかこっちみてるな。

「なんだよ？」

「なに、ただシスコンと親バカだと思っただけ。」

「うるさい」

「だって、明らかにオーバー戦力じゃの。」

「知るか。」

確かに、大精霊8体以上だからいわれてもしかたないかもしれんがな。

ナギSide

シオンSideOut

俺はアリカのいったとおり合流した。

「で、どうするよアリカ。」

「私とナギの聖痕を全力で解放して、落下速度と落下位地を調整する。」

「そんなことができるのか？」

「火と風を操ればいいのじゃ。火で推進力を作り、風で方向を操ればいいのじゃ。」

確かにできなくはねえな。

「しかし、出力たりないか？長時間、広範囲の発動になるしな。」

「気力でなんとかしろ。」

「無茶苦茶だな。だが、やるしかないか。」

まったく、難しい注文だぜ。

「なら〜ふたりの共同作業に〜力かしてあげる〜」

「そうじゃな。」

「シルフ！」

「イフリートか。」

二人の人ならざるものが現れた。

「主の命において手伝いに来た。」

「二人の力を増幅してあげる。力の細かいコントロールは任せて。」

詳しく聴くとどうやら大まかな指示を感覚だけでいいみたいだな。

「じゃ、やるか。」

「うむ。」

「あゝ手を繋いでやってね。」

「えー！」

「大精霊がそういうなら仕方ないな」

なんか若干嬉しそうだぞ。

「では、契約者よ始めましょう」

「ああ」

最大出力で聖痕を使い、崩壊の被害を最小限した。

結果的に言うと、マスター達の活躍もあり被害者はゼロ、それどころか動物達も救い出されていたため、失われた命がほぼゼロに近い。化けモンだな。

桜花Side

ナギSideOut

あれからアリカ陛下がメガロメセンブリアで逮捕されたのじゃ。オスティアの情報の偽装改ざん、完全なる世界との関与、父王殺しを元老議員に偽装及び殺害したという罪だ。

「というかだ、父王殺しの偽装って桜花だろ。」

「うむ、そのとおりじゃな。どうする？ いっそ、殺すかの？」

「まだ早いだろ。」

「次回が楽しみだな。」

あの大嫌いな元老議員共は皆殺しじゃな。

ふふふすごく楽しみじゃな。

アリカSide

桜花SideOut

投獄されてから二年か……私は手足を縛られ身動きができない。

「なんだよ。また食べなかったのかい？女王様。」

「……………」

「まったく、死なれると困るんだがな」

「庶民のお味はお口に合わねえってか。」

ふん、だいたい手足が縛られていて食べられるわけもないだろうが。

「へ………しかし、今のアンタにやお似合いだな。なんせアンタはあの戦争を引き起こした張本人だろ。アンタに味方する人間はこの世にやいねえ。まったくいい気味だよ。」

「……………」

ふん。

『くすくす、おかしいよね。味方はいっぱいいるのにね。』

イフリートの言うとおりでな。イフリートはあれから妾のそばにずっと姿を隠している。というより、聖痕を通していつでも現れる。

「あつ、これは議員……………こんな辺境にわざわざ」

「うむ、ご苦労だね。下がちなさい。」

「し、しかし……………」

「大丈夫だ。話は通してある。」

懲りずにまた来たか。

「これはこれは……見るにも耐えぬみずほらしい姿ですな。最古の王家の末裔にこのような仕打ち……まことに心が痛みます。」

「『芝居はやめよ。』」

「乗らせてくれても良いじゃないかの。」

「うるさい。今回の情報は何だ？」

議員は一瞬で着物を着た少女桜花になった。

「10日後アリカ陛下の処刑が決定した。」

「場所は？」

「ケルベラス渓谷じゃな。」

ケルベラス溪谷は魔法は使えないのだったな。

『安全対策は？』

「すでに、リリが魔獣を切り殺しているのじゃ。」

「仕事が速いな。」

『リリなら楽勝だな』

あの子は魔法が無くても強いから大丈夫だろうな。

「では当口。」

「うむ、ナギ達もむかうだから安心するいいの」

ナギが………来てくれると………
そんなはずは無いか。

どっちにしろ私の安全は確保されているわけだ。

そして、処刑当日・・・・・・・・・・驚いたことにナギに助けられプロポーズされた・・・・・・・・・・嬉しかった。王女ではなくなったがこれからはナギの妻として生きることした。

戦後処理と木乃香と刹那

シオンSide

エヴァ、桜花と共にメガロメセンブリア元老院議会に来ている。

ここには、紅き翼がアリカを連れ去った件で議員が全員集まっている。

「...」

「取り返すべきでは！」

「なんだ！」

俺が展開した絶界に気づいたようだな。

「貴様等はいったい……………」

「なっ！闇の福音！！！」

「エヴァンジェリンだと！衛兵！？」

「無駄だ、すでに倒した。」

侵入するときに処理したからな。殺してはいないが。

「何用だ！」

怒鳴って気を持たせているな。

「簡単、貴様等を殺すだけだ」

「なめっ」

「遅いの」

桜花が殴り飛ばしたか。

「貴様等に生き残れる手段は一つだ。我が眼を見る。」

くっ、くく。どうせ殺されぬのに、必死で見てるな。

「我が命は絶対厳守せよ。」

「「「「イエス、ユアハインス！！！！」」」」」

使ったのはルルが持っていたギアスだ。いってしまえば、完全な洗脳だな。

「さて、まず我を元老院議員議長にせよ！」

それからのことは楽だった。

俺達の賞金を消し、使える人材に引き継がせた。

俺達三人でメガロメセンブリアを牛耳り、オスティアへの援助などや意識改革を行った。

用無しになった元元老院議員は始末したが、意識改革はまだまだ時間がかかる。

それから、数年達、三人の仕事量が馬鹿でノイローゼになりかけたので、元老院は引き継がせてやめた。だるすぎるわ！学校、財閥、国って普通に無理！というわけでクルト達に投げた。

その後、ナギとアリカ、詠春の結婚式に出席して盛大に祝った。そのまま詠春の家に住まわせてらった。

1985年。

リヨウメンスクナノカミが復活したので再封印した。

遊びに来ていたナギやアスナ、アリカ、リリ、エヴァ達と京都観光を堪能した。

アスナとリリをナギに預けて俺は天皇家の行事など参加しながら、詠春家で仕事をしていた。

しばらく時間がすぎ1900年。

「シオンさん！」

「どうした？」

「娘が生まれました！」

詠春の娘というと木乃香かな。

「おめでとつ。」

「ありがとうございます。できたら、名前を付けてあげてください。」

「

「じゃあ、このか……………字は木乃香でいいか？」

「はい、ありがとうございます。」

さて、木乃香が生まれたか。光源じ……………ごほごほ、木乃香の育成プランを考えるか。

それから4年。計画通り木乃香は懐いてくれた。

「おにいちゃん〜 せつちゃんもはよおいで〜」

「このちゃんまって〜」

刹那には原作と違う変更があった。刹那は鳥族では無かったのだ。それは後でいいな。現在木乃香と刹那の世話をメインにしている。

今は三人でキャンプ（別荘）に来ている。

「じゃあ、お父さんには内緒でいいこと覚えようか」

「わい」

「では、まずキスからだ」

「うん ちゅ」

いきなりキスしてきたので、瞬時に仮契約の魔法陣を書き、主人を俺、従者を木乃香にして仮契約した。

「わーこれなんや？」

「バクティオー仮契約カードだよ。」

「かわええなー ほら、せっちゃんもしよーや」

「う、うん……………」

刹那とも仮契約した。二人の唇はスタッフ（俺）が美味しく頂きました。

「よし、これから二人には魔法や戦闘技術を教える。どっちがいい？」

「うちは、まほつがええな」

「うちは、このちゃんをまもれるほつがええよ」

「了解。でも、修業厳しいけどついてこれるかな？」

「うん！」

「よし、いい子だ」

二人の頭を撫でながら準備をする。

「じゃあ、服脱ごうね。」

「はい」

二人を裸にして、精霊王のローブを二人に着せてやる。

「ぶはあ、これ気持ちええな」

「うん、快適や」

このローブは全大精霊の力をこめてある。核兵器だろうが着ている本人にダメージはいらないし、自動で着用者を鍛える効果がある。どんだん重力をふやしたり、魔力回復効果とかなどがたくさんある。自動で清潔を保ってくれる優れ物だ。

「今日からしばらく、それを着てね。」

「「うん」」

まず木乃香に、初心者用の杖を渡した。次に、刹那に神木刀を渡した。

「呪文は、プラクテ ビギ・ナル “火よ灯れ（アールデスカット）だよ”

「うん。プラクテ ビギ・ナル “ひよともれ（アールデスカット）”………なんにもおきないえ」

「頑張つて練習だ。」

「うん、がんばるえ」

次は刹那だな。

「刹那、お前は神鳴流を覚えろ。」

「はい！」

その日の晩御飯に生命の水をまぜて、二人の老化を遅くした。

「美味しいな」

「だね、このちゃん」

二人は喜んで食い散らかしている。うん、かわいいけどしからなきやな。二人の口を拭いてやる。

「「わぶ」」

「作法なども教えるか」

それから、土日を一ヶ月にして二人をちよ……………特訓を行って
いった。無論、詠春とかには内緒だ。息抜きに遊園地や動物園など
も連れていったりした。

刹那も大分強くなってたな。

「次は刹那自身の力を鍛えるぞ」

「うん」

「お前には雪女の血を引いているからな。その力を引き出せ。」

「うん」

刹那は雪奈の血を引いているから、氷を操れるし、氷で作った翼で
空飛んでも面白いな。

それから、力の使い方を教えた。木乃香はひたすらコントロールと呪文を教えた。ちなみに、木乃香は魔女っ子姿だ。刹那は胴着だ。

精霊王のローブは自分で自由に、形を変えられるので私服に最適なので、きっぱなしにさせている。破れても自動修復。そんなわけで木乃香と刹那は体力も増えてどんどん強くなっている。着々と計画は進行中。

シオンSideOut

戦後処理と木乃香と刹那（後書き）

いろいろ飛ばしてるな〜リリはナギとアメリカにあずけっぱだし。

詠春のライフはゼロ（前書き）

質問があったので書きます。

刹那は雪奈と小次郎の一族の血を引いています。宗家ではないけどね。先祖帰りか何かがおきたみたいな感じですよ。

詠春のライフはゼロ

シオンSide

あれから、一年がたった。木乃香と刹那の修行は順調だ。すでに一流の魔法使いになっている。（魔法先生クラス）まあ、さすがにグリフォンに襲われたときは助けた。いくら、平日は各種勉強と技術を教えこみ、土日は二ヶ月に増やし戦闘・魔法技能を教えこんだとはいえな。

今は平日、すこし前から木乃香達が庭で遊んでいる姿を屋根の上から愛でながら仕事をしている。

「売上はよし、株の動きは……………この会社は経営がだめだな。技術はあるし……………経営件奪うか。見込める売上が4億か……………なら、1億で株買い込んで……………」

もちろん、複数に分けた名義で購入する。これは買収に気づきにくくするためだ。

「今から送る会社の株集める。予算は1億だ。そして、調査して裏を見つけたら利用しろ」

「了解しました」

財閥の方の買収関連を纏めた部署に電話していると気配が近づいて……………これは、詠春か？なんか怒ってるみたいだな。もしやバレたか？

「ボス？」

「ああ、気にするな。では、よろしく頼む」

「ボスの仰せのままに……………」

「シオンやつと見付けた！！！！」

電話を終えると同時に、詠春が抜き身の夕凧を持って近づい……縮地で接近、夕凧を振り下ろしてきた。詠春が現れてからその間1秒。

「危な！？」

夕凧を白羽取りして、鬼気迫る詠春をどうにか止める。

「落ち着け、俺がいったい何をした。」

いや、いろいろ暗躍してるけどさ！

「貴様……………何もしてないと言うのか？」

「誓って何も悪いことはしないぞ？」

「木乃香」

すげー力が増してきた。木乃香といわれて思い出すこと……………

一つ……いや、二つ？

「木乃香が………木乃香が！！！！」

なんか数えたら10超えたな。木乃香のことで暗躍したのわ。

「待て、落ち着いて説明しろ。そして、夕凧を退けてくれ」

「木乃香が私とお義父さんに………」

そういえば、あの妖怪爺きてるんだったな。俺は無視してた。

「なんて？」

聞きたくないなでも、聞かないといけないな。

「大好きだから、シオンおにいちゃんのお嫁さんになるって言われたんだ！？貴様にこの気持ち分かるか！！普通お父さんのお嫁さんになるだろ！！！！」

うわ、血涙流してるぞ。しかも、言ってること無茶苦茶だ。

「まじで、木乃香がそうだったのか？」

「ああ!？」

「あ、それ嬉しいな」

「きいさま〜!!!!」

圧力増して来やがった。

「まじで嬉しいな。いや、ホントに。計画成功。」

「それが本音か!しかも、計画ってなんだ!」

「ふははは、よく考える詠春。赤ん坊のころから仕事であまり構ってくれない血の繋がった父親に、赤ん坊のころから遊んだり色々構って助けてくれる血の繋がって無い異性。どっちを選ぶ?」

「ぐっ……………それは……………って、ちょっと待て!!血の繋がって無いとかの意味はなんだ!？」

「一般常識教え込んだ!!」

ちゃんと一夫多妻制とか血の繋がりによる弊害とかの解除の仕方もバッチリ教えたさ。ほんとに魔法でどうとでもなる。後、下準備に一国買い取ったからな!? 日本に法律一時的に認めさせてもいいし、それだけの金と権力はある。

「なんてことを……………ささやかな父親の夢を奪うとは……………」
「…許すまじ!!…!!」

「俺はレンからもリリからも言われたな」

「死ね!!…!!」

「だが断る!?!」

その後、しばらく押し合いを続けた。家事場の馬鹿力かやばい、押されて来てる。

「夕凧!もつとだもつと力をよこせ!?そして、吸い付くせ!?!」

詠春完全に壊れてやがる。永遠神剣には作った時の細工があるから耐えてるけどな。仕方ない切り札を切るか。

「俺を殺していいのか詠春？」

「何？」

「木乃香が思いっきり悲しむし、嫌われるぞ」

「ぐはぁッ」

よし、効いたな！

「それに俺が居なくなったら生きていられないって言ったぞ」

すでに盲信の域までそめこんだ。ただ行き過ぎて、依存症にちよつとなつたのは焦った。急いで持ち直させたがな。ちなみにさっきの言葉は依存症の時の言葉だ。今は大丈夫だが馬鹿正直に教える気は無い。

「くっ……………」

「隙あり！」

「しまっ！」

右手に力を込めて押し込み、同時に左手の力を抜いて後側に振り抜き、身体を回転。遠心力の力を加えて夕風をずらし、そのまま左手で詠春の後頭部に一撃を与える。油断と足場のやばさが交わり、詠春は成す術もなく瓦と共に下に落ちていった。

「きゃっ！……………おとうさんだいじょうぶ？」

「だいじょうぶですか？」

一瞬、刹那は木刀に力を込め、木乃香は後退していた。うん、いいできた。まだまだだけどな。

「いたたた。ああ、大丈夫だよ二人とも。」

「詠春、無事か？」

「きい〜さま〜!〜!」

まだやんのか?次は応戦するぞ?

「やめてやッ!」

「木乃香……………そこをどきなさい!」

木乃香が間に割り込んできて、手を目一杯広げて俺を守っている。

「しーひん!」

「しかし、これは木乃香の為……………」

「うちのためやない!おにいちゃんにいじわるするおとうさんなんてだいつきらいやッ!?」

「そんな……………木乃香……………」

詠春は木乃香によって一万のダメージを受けた。詠春のダメージは0だ。

「ふん。おにいちゃんいこ〜」

ふんで詠春からそっぽを向き、振り返って、俺の手をとり満面の笑顔で引つ張ってゆく。それを見た詠春は追撃ダメージ二万のダメージを受けた。

「ほらはやくやくせつちゃんもいくで〜」

「ああ……………」

「うん、いいのかな？」

木乃香の母親が何とかするだろう。ネギの方もあるし、そろそろでなきゃな。ナギの生死はぶっちゃけどうでもいい、だって居場所知ってるし。アリカは桜花が付き合っただけ産んでるし、何よりイフリートが近くにいるから安全は問題無い。

1995年に明日菜が麻帆良学園に転校してくるので木乃香達も事前に入学させた。まあ、既に高校LVまで終わらせてあるがな。護衛と教官としてウンディーネ、セルシウスを派遣しておいたのだから心配は無いだろう。ちなみに、木乃香は九尾の狐がペットにいる。麻帆良学園にも連れて行くみたいだな。

その後、二人を麻帆良学園に送ったあとウェールズに移動。途中で自立起動型永遠神剣一方通行を作成。名前はかーくんだ。

シオンSideOut

詠春のライフはゼロ(後書き)

ちなみにかーくんはFF8のやつです。武装形態は指輪、人間形態はチキたん。

アルを殺す(ださない)か……………どつするか悩み中です。

小さな村にて

桜花 Side

我は現在ナギの故郷である小さな村に住んでいる。住んでいるのは、
我とりり、アリカ、アリカの息子ネギだ。

原作とは違い、我やシオン、アリカがローテーションを組んで造物
主の封印を手伝っている。現在常駐しているのはナギとレンじゃな
我等ローテーション組はあんまりいらないけどの。

そんな感じなのでネギは原作よりましだ。ときたまナギに化けたり
するしな。リアルタイムでナギと念話しながら。

「ネギ、桜花ただいま」

「お母さんお帰りなさい」

「お帰り、特に問題は起こってないの」

アリカがネギを抱っこして、頭を撫でたりしている。

「そうか、リリはどうした？」

「まだ、寝ておるよ」

「そうか、ネカネはスクールだったな。」

「うむ、もうすぐ帰ってくるだろ。」

それに不穏分子は沢山あるの。

「あれ、アリカままお帰り〜」

「ああ、ただいま」

リリがちょうど降りてきたか。アリカとも随分一緒にいるし面倒なのでこんな感じになった。

「さて、朝食にするから二人で裏から卵と牛乳取ってくるのじゃ」

「はい」

ネギとリリの朝の仕事じゃな。

「さて、アリカは朝食の準備じゃな」

「う……………うむ」

アリカはやはり家事が苦手じゃ、随分ましになったがの。我は色々勉強したし調理師学校などでの。ちなみに、パティシエの免許などももっている。

まず、パンを焼いて、焼いてる間にサラダを作る。サラダが終わったらコーンスープを作る。パンが焼き上がり、戻ってきた二人から

卵と牛乳を受け取り、二つを混ぜ切ったパンを浸ける。付けた後、フライパンで焼き上げる。以上で朝食の完成じゃな。

「うむ、いい感じじゃな」

「ああ、二人ともできたぞ」

「「お腹すいた〜早く〜」」

料理を食卓に並べて皆席につく。

「「「いただきます」」」

ちゃんと手を合わせて食事を開始する。二人には礼儀作法は叩き込んでいる。王族の血を引くのじゃから当然。

「お父さん元気だった？」

「うむ、会いたがっていたな」

「そうだ、いいことを思いついた。ビデオレターを作るのじゃ」

「ビデオレター？」

「何それ？」

「簡単に言つと映像と音を記憶する奴じゃな」

「それで色々録るのか」

概ね好評なのですぐ取ってきた。本当に、瞬間移動は便利じゃな。

それから、村の人達も撮り、何度か送りあつた。

しばらく、緩やかに時がたちネカネが冬休みに帰ってきた。

「おい」

「うむ、来たの」

既にシオンもこちらに一応待機していた。

「半信半疑だったのだがな。ネギは大丈夫か？」

「ああ、かーくんを連れていかせてるからな。こっそりとだが」

ネギは相変わらずのナギ大好きっ子だ。ちなみに、シオンはネギと会っていない。森の方で守っていた。

「しかし、どこの連中だ？」

「完全なる世界の残党か？」

「いや、違……………」

「どうした？」

千里眼で監視しているはずじゃが？

「やられた、ヒツギめッ!？」

「どうしたっ？」

「向かって来ている悪魔が魔改造されてる」

「……………」

ただでさえ強い悪魔を魔改造とは、確かに強力な戦力じゃな。

「後、バジリスクも多数いるな。」

「こちらの戦力は四人か……………」

全てを守るのは不可能だの。

「手が足りぬな。大精霊は？」

「封印に使ってる」

「超広域火力による殲滅は可能？」

「可能だが回りの被害を……………それこそ、村もろとも消し飛ばすな」

「なら、できる限り助ける。基本的に石化だから後で戻せばいい」

それしか無いかの。

「広場にウェールズへの転送陣を展開しておくから飛び込ませろ」

「了解した。なら、基本的に見敵必殺だな」

「だな。リリには、ネギの確保を頼んだ。」

「なら、安心だな」

さて、何人助けられるかの？

ふう、数が多すぎるの。

「お父さんッ!?!」

まさか……………リリは間に合わなかったか。

急いで声の方へと向かうとナギとネギがいた。

「ナギ、すまぬの。こちらの不手際じゃな」

「気にすんな。こいつは予想外だろ。仕方ないだろ。ネギ少し……………」

「やはり、現れましたね。風の契約者ナギさんに夜桜さん、神剣の創造主」

神剣の創造主はシオンのことかの。

それにしても、この緑の短髪で仮面を付けた少女は強い

「よく、我が夜桜と分かったの？」

「私達に認識阻害は効きません」

「なるほど」

「では、改めて自己紹介を……………私の名前はイワナと申します。所属はロウです」

エターナルか、まずいの。

「ナギ、ネギを中央にある転送陣にほつり込んでこい」

「分かった。」

「行かせません」

仮面を取ると、力が急激に……………まずい！

「させぬ!？」

ナギはネギを抱えてなんとか逃げたか。

「石化能力か……………ッ」

かばって石化した腕を切り落とし、新たな腕を再生させる。

「出鱈目ですね」

「人のことは言えぬじゃろう!」

こやつは我の天敵じゃな。石化されてはどつしよつもないわ。

「踊りましょう」

「そうじゃな」

その後、必死で戦ったが逃げられた。相性が悪すぎるからの。絶界無かったらまずかった、回りは石化された建物ばかりじゃ。

ナギ達の確認に向かうと、広場に向かう途中でみつけた。ナギとネギが会話していた。

「そうだな、お前にこれをやるっ」

あれはかーくんじゃな。気づいておったか。

「この子は？」

「知り合いに頼んだ。俺とアリカからのプレゼントだ」

「ありがとう……………」

「こいつも形見としてお前にやるっ。」

こっちは原作通りかの。

「あうっ」

「ハハハ、重すぎたか……………悪いな、もう時間が無い」

「えっ？」

「ネカネは大丈夫だ。わりいな、お前にはほとんどなにもしてやれなくて……………」

「お父さんっ！」

「元気に育て、幸せにな。桜花後は頼む」

「うむ、任せるのじゃ」

「お父さん……………」

これで封印は厳しくなったか。

「行くぞネギ。ナギを追いたければ強くなるのじゃな」

「えっ？」

「ナギのいるところは世界最高クラスの強さでなくては行けぬ」

どうせ巻き込まれるのじゃ。せいぜい鍛えねばな。

「分かった……………頑張る」

「よし、いい子だ。」

中央にいくと逃げ遅れ、石化した人達を運び出していた。

「リリ、見失ったの」

「「じめんなさい」

「？」

「ネギ、無事だったか」

「うん、お母さん。お父さんが助けてくれたの」

「そうか……………よかったな」

アリカは悲しげな笑みをしていた。

「ネギ、母さん達はこれから忙しくなる。だから、二人でも大丈夫だな？」

「うん。平気だよ。」

「いい子だ。」

こうして、ネギとリリをネカネに預け私達は封印の強化にむかった。

シオンは遊撃を頼んでいる。

桜花
Side
Out

小さな村にて（後書き）

アリカさんはネギと一緒にしてみた。さすがにあそこはどっしりゆづもないので。

シオンSide

1997年9月。メルディアナ魔法学校の入学式と学園の抜き打ち調査を行った。それから、麻帆良学園よって、木乃香と刹那を京都に連れて帰る。木乃香と刹那の成績なら問題無い。ちなみに刹那は京都の学校になるみたいだな。詠春から神鳴流を学ぶために。

「はええな〜」

「うん」

現在新幹線で移動中。

「二人とも麻帆良学園はどうだった？」

「楽しかったえ〜」

「うん」

「そうか、よかったな」

二人の頭を撫でてやりると、抱き着いてきた。

「なな、おにいちゃんうちが大きくなったらお嫁さんに貰ってな〜」

「ずるいよこのちゃん。私も……………」

「二人ともいきなりどうした？」

「先生が色々教えてくれてん。」

「婚約というものがあるって……………」

なるほど、だから婚約だけしとこうと思ったのか。

「でも、いいのか？俺のお嫁さんは結構いるが」

「うちはええよ。愛人でもな」

「このちゃん……………私も……………」

「二人がいいなら構わないぞ」

詠春に無茶苦茶なにか言われそうだが。

「婚約指輪をやる」

単なる仮契約カードを指輪に加工しただけだがな。ちなみに念じればすぐにカードに戻る。アーティファクトを永遠神剣に改良したので問題無い。

「わゝ綺麗や、ありがとゝおにいちゃん大好き」

「うちも大好きや」

木乃香と刹那にキスされたのでキス仕返してやり、二人を左右において指輪の説明してあげる。

「すごいんやな」

「わ」

説明したあと、二人といちやつきながらお土産などを買ったり、ついでからモールなどでショッピングしたあと、家に帰った。一緒にお風呂に入ったりしたあと戦場に出かけた。まあ、でるときにいつてらっしゃいのキスされたのを詠春に見られたため、急いで離脱した。夕凧を全快にして襲ってくんよ!?

そんな感じで京都を後にした。

シオンSideOut

マナSide

今、私は必死に森の中を走っている。

「くそっ、くそッ！あいつめ！？」

悪魔の実験場がある場所の情報を受けていった場所に、現れた悪魔によってNGO団体「四音階の組み鈴」カンバナラス・テトラコルドネスは壊滅的な被害を受けた。今も戦闘は続いている。私だけが増援を呼ぶために逃がされた。しかし……………

「鬼ごっこは終わりだ。半分だけ同胞の君も彼等の所に送ってあげよう。」

「お断りだ！私は生き残るッ！！」

10分前にこの悪魔が現れた。つまり四音階の組み鈴カンバナラス・テトラコルドネスは私を除いて全滅した。

「残念だがそれは無理だな」

「くそッ！」

逃げながら銃を連続に三発を同じ場所に放ったが、全て皮膚に弾かれた。

「さて、悪あがきは終わりだ」

奴の右腕がガントリングガンに変わり闇の魔法の射手がすごい勢いで吐き出された。

「ぐはぁッ」

両腕両足に二発、肺に一発うけ、地面に倒れた。

「くっ、そ……………」

「ここまでだな、さらばだ。」

「まっ……………て……………」

「貴様はこのまま放置すれば死ぬだろ。せいぜい残りの命を楽しめ」

笑いながら消えた……………くそ……………必ず殺してやる……………

……………

目の前が真っ暗になり、気を失った。

それからしばらくして、とんでもない激痛が身体を走った。

「がッ!？」

「生きてたのか」

私の目の前にいたのは少年だった。激痛の正体は少年の指が私の眼をえぐるうとしていた。

「……………なに……………に……………し……………て……………る……………」

「死んでいるなら魔眼だけ頂こうと思ったんだがな。ふむ、死にたくないか？」

こいつは何を言っているんだ？もう、私は助からない。

「……………助かる……………なら……………生き……………た……………い……………」

「いいだろう。助けてやってもいい。条件を飲むならだがな」

「……………なん……………だ……………?」

「受けるなら、力もくれてやる。条件は永遠を生き俺のものになることだ。もう、時間はないぞ?」

く……………永遠か、復讐できるなら構わぬな。

「……………いいだ……………う……………復讐……………できる……………なら……………」

「契約成立だ」

少年の整った顔が近づいてきて、首筋に痛みを感じると同時に意識を手放した。

んっ、ここは……………どこだ?

「起きたか。気分はどうだ?」

「っ」

どうやら雪道をおんぶされているみたいだな。

「私は吸血鬼になったのか？」

「ああ、俺の眷属になった。」

「そうか……………太陽は？」

「真祖の眷属だからな、少したてば平気だろう。しかし、処女でよかつたな」

「なっ!？」

何を言っているんだこいつは!

「処女じゃなかったらグールになってた可能もあるってどっかで聞いたからな」

「知らないのか……………」

「まあいいじゃないか、とりあえずお前の名前は？」

そういえば、言ってなかったな。

「私はマナ・アルカナだ。ご主人様は？」

「シオンだ。これからお前を鍛えてやる」

それから、修業しながらあいつらを追っていくことになった。ユーフォリアって子も一緒だ。

修業は厳しいが、色々な銃技を教えてくれる。吸血鬼になったことによりAMライフルを片手で扱えるようになった。シオンと仮契約することで貰ったアーティファクトARMS……こいつは使用者のエネルギーを使い自由に姿形を変える優れた武器だ。人間ならすぐ死ぬが、半魔族に吸血鬼だ。はつきりいつて生命力はハンパない。しかも主からの供給もある……アームズは基本的に対化物戦闘用13ミリメートル拳銃ジャツカルだ。全長39センチメートル重量16キログラム装弾数はほぼ無限。魔法を弾丸に込めることによって敵内部から魔法による破壊も可能。パーフェクトだ。こいつを二丁装備している。

それから三年ほど三人で旅をして敵や仇を滅ぼしていった。その後、龍宮神社に預けられた。吸血鬼が神社ってどうなんだ？

マナSideOut

眷属（後書き）

ちなみにアームズも永遠神剣化しています

新学期！

リリSide

早いもので、今日はメルディアナ魔法学校の卒業式です。ネギお兄ちゃんは首席でリリが次席です。長い学園長の挨拶が終わり、理事長の祝辞になりました。

「この度は卒業おめでとう。これから社会に出ていく君達に忠告だ」
パパが皆の前で忠告をしています。

「与えられた情報を鵜呑みにせず自ら見て、考えること。そして、自らの信念を持ってこれからの人生を歩んでほしい……………最後に、正義は一人一人違ふことを心に留めておくように」

パパの祝辞が終わり、試験が書かれた紙を貰ってアーニヤ達と確かめ合った。

「私は占い師ね、ネギは？」

「僕は日本で教師することみたい」

「教師！」

リリは日本で学生だったよ。その後、ネカネお姉ちゃんとアリカママと一緒に学園長室に乗り込んだ。

「おい、爺これはどういうことだ？」

「お、落ち着いてください……………試験は変更しようはありませんぞ。それに、安心してください。麻帆良学園の学園長は知り合いですし、理事長に桜花さんもあっちへ行かれるそうですから……………」

「なら、安心じゃな」

「「いいの!？」」

「別に構わないだろう」

こうしてネギお兄ちゃんは麻帆良学園に教師として赴任するため、日本に向かったのです。

日本につき、麻帆良学園に向かう電車のなかでネギお兄ちゃんと逸れて大変です。

麻帆良学園に到着

「あの、あなた、失恋の相がでてますよ」

そんな声が聞こえてきました。

「え………し………しつ………って、何だところんガキヤ
ー！」

大変、ネギお兄ちゃんが鈴を付けたツインテールの人にアイアンク
ロ―されてます。自業自得だけど。

「お久しぶり、麻帆良学園へようこそ、いいところだろネギ先生、
リリちゃん」

「タカミチだ」

「え？知り合い？」

「先生？それにこのかわいい子は？」

黒髪の人がかわいいっていつてくれた。ちなみにドレスだよ。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりましたネギ・ス
プリングフィールドです

「リリは転校生の神鳴リリだよ。さっきは、ネギお兄ちゃんがごめ
んなさい」

「気にしなくていいわ……………って、ちょっと待ってよ、この小さい子が転校生なのは、百歩譲っても、こんなガキが先生なんて！」

「二人は頭いいからね。安心したまえ。あと、ネギ君は僕の変わりに君達A組の担任になってくれる」

「そんなあゝアタシこんな子嫌です。さっきだって……………」

ネギお兄ちゃん達が話してる間にタカミチと改めて挨拶する。

「これからよろしく、お願いします」

「ああ、こちらこそよろしく。りりちゃんはエヴァの所だから安心して」といふ

「うんッー！」

それから学園長の所へいきました。

「学園長先生、いったいどうゆーことなんですか!？」

「まあまあ、アスナちゃん落ち着きなされ……………なるほど、修業のために日本で先生を……………こりゃまた大変な課題をもうったの」

「は、はい。よろしくお願いします」

最初の言葉無視してる

「しかし、まずは教育実習とゆーことになるかのう」

「はあ」

「今日から3月までじゃ……………ところでネギ君には彼女はるか?うちの孫娘などどーじゃ?」

「ややわ、じいちゃん」

「ぎいちゃあああ!??」

あ、笑顔で的確に経脈にダメージ入れて苦痛与えてる。

「じいちゃん、うちはもう心に決めた人と婚約してんねんで？いくら、じいちゃんでも怒るえ？」

「えっ」

「いや、でもわしも知らんし、婿殿かてみとめておらんし……………」

「じいちゃん？」

「こほん、ネギ君、この修業はあ大変じゃぞ。ダメになったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじやな？」

「は、はいっ。やります！やらせてくださいっ」

「うむ、わかった！では今日から早速やってもらおうかの。指導教員のしずな先生を紹介しよう。しずな君入ってきたまえ」

学園長先生が呼ぶと胸の大きな女性が入ってきたの。そして、ネギお兄ちゃんは胸の中に埋もれたの。

「わからない事は彼女に聞きなさい。」

「よろしくね」

「はい」

「それともう一つ、このか、アスナちゃんしばらくネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？まだ住むとこ決まってなくての。」

「え／＼」

「リリちゃんは……………」

どうしたのかな？

「これミスじゃないよな？いや、しかし……………タカミチに連絡取るか」

「どづしたの？」

「エヴァンジェリンの所じゃ」

「うん、問題無いよ」

その後、学園長先生とネギお兄ちゃんと共に講堂に向かいました。

講堂には中等部が集められていました。学園長先生から新学期の挨拶や私達の紹介などが行われました。

次に理事長の挨拶です。いつもは行われないのに理事長によって全校集会が開かれたみたい。

初等部や高等部などは映像らしい。今回は中等部に増えたから中等部がメインみたい。

「え、次に理事長の挨拶はまだ来ていないみたいなので………」
「あ」

講堂の入口が開かれ、フードを被った人が入ってきました。

「なんだおまえッ……………」

捕まえようとした先生を片手で後ろにほりなげた。真ん中の道を堂々と歩き、司会からマイクをふんだくったよ。

「さて、初めまして私はこの学園の理事長をしているものです」

やっぱり、パパだ。

シオンSide

さて、驚いてる奴が多いな。中にはなんでフード？とかいうこえもするがあえて無視。

「さて、今回全校集会を開いたのは何もネギ君達の紹介だけじゃない。」

「えっ？」

「新しい学期の挨拶？新教員の顔見せ？どうでもいいな。そんなの麻帆良学園の学内ホームページを見る」

乗ってるしな。皆あぜんとしてる。

「新しい校則を発表する」

「ちよ、そんなのわし聞いてないよ！」

「うるさい、解任するぞ。」

「」「」「うわ」「」

「爺は無視して、話を進める。新しい校則は外部でのアルバイト完全禁止だ」

「」「なんだと！？」「」

「生活費が！」

「うるさい、黙れ」

「「「「ツ」「」「」

殺気を解放し、静かにさせる。

「お前等の言い分ももつともだ。ちゃんと対策取ってるに決まっているだろ。最後まで話を聞け、最後に質問を受付……………るかもな」

「「「「ちょッ、かもですか」「」

「面倒だからな」

ダメだこいつとか思われたな。仕方ない、実際面倒だし。

「さて、諸君等は麻帆良学園の中に大きな建物が夏休み中にできているの中には知っている奴もいるだろう。あれは学園側にも内緒で作ったシヨッピンゲモールだ。勘のいいやつは分かるだろう。モールを部活優先だが一般生徒に解放する。部活などで作ったものを自ら店を経営して販売するといい。売上の一割は維持費にさせていただく。具体的にいうと科学部とゲーム同好会などでアーケードゲ

ームを作りゲームセンターに置くその売上の9割が君達の懐に入る。ユーフォーキャッチャーなら裁縫関係の部活などと組めばいい。これは社会の厳しさや経営の仕方など学べることは多いだろう。特許申請忘れるなよ？ 忘れたら真似されても仕方ないぞ。まあ、端的に言うなら局地的な文化……………模擬店祭だな。」

「……………」

「初等部の低学年は禁止だ。高学年から2時間までなら許可する。さて、話は変わるが、今回生徒手帳を電子カード式にしたので麻帆良ポイントを作った。これは、学園内でしか使えない金だ。モールでの給料はこいつで支払うこと。学費も支払い可能だ。規制回避のためだから面倒だが諦める。月初めに毎月初等部千、中等部二千、高等部三千のポイントを支給する。ようは小遣いだな。店について説明不足だった。毎月最終日付近で店をチェックする、失敗したら店舗剥奪だから気をつけるように」

「おっしゃー!」

「やるぞ!」

「やりたい奴は登録しろ。内心点など成績に反映されるからな」

こうして遊び場と社会勉強ができる楽しいショッピングモールがで

きた。

シオンSideOut

新学期！（後書き）

やっちまった公開はないが眠いつす。

同棲開始(前書き)

このちゃんといちちゃんからいきます。

同棲開始

シオンSide

あれから色々文句言われたが問題無い。モールは基本的に桜花に任せてる。エヴァ、レン、リリ、ユーフィーも、あのクラスにぶち込んである。エヴァは最初っから、レンとユーフィーは前期途中からだな。エヴァ以外出席番号32から34だ。(作者が面倒です。いちいち番号変換が)へんな電波が……………まあ、いい。現在、アリカがレンの変わりになっている。

「それでじゃな。ネギ君の補助として副担任を頼めんか？」

「かまわんが高いぞ？」

1時間で資産運用すれば数百万円は軽く稼げるしな。

「いくら………主の学校じゃろ！ちょっと手伝ってもええんじやないのかの？」

「まあ、適当で好きにしていればいいぞ」

「それで構わんぞい」

お金は使うためにあるからな。今あるばっかだし。

「住む場所は適当にする。夜の警備は基本的にしない」

「なっ、なんでじゃ？」

「世界樹が最優先だからだ。まあ散歩はするし、先生の仕事を取る気もない」

「わ、わかったわい」

面倒なことは終わり。

「分かってると思うが、俺の大切な子に何かしたら殺すから。正義とかに自惚れている連中に言っておけ」

「う、む……………」

学園長室を出て、服装を変えて教室に向かう。

教室に付くが中が騒がしいな。

「言いがかりはおやめなさい。あんたなんかオヤジ趣味のくせにい
い！」

「なっ」

「知ってるのよ、あなた高畑先生のこと……………」

「うぎゃーその先を言うんじゃないーこの女ー！」

「うるさい、黙れ授業中だ」

扉を開けて教室に入った。もちろん言霊に乗せてだがな。そのおかげで、教室は静まりかえった。

「よろしい。さて、改めて自己紹介だな。俺はこのクラスの副担任になった神鳴シオンだ」

「……カッコイイ!?」「……」

馬鹿な俺の言霊をただの一般人が破っただと！規格外すぎるだろ。

「だから黙れ、他のクラスに迷惑だ。しずな先生、ここは任せてください。」

「わかりました。後、お願いしますね」

よし、しずな先生が出ていった後、遮音結界を展開した。どうせ破られるんだからな。

「まっ……んッ」

ネギが口走りそうになったのをアイアンクローで止めた。

「」「ひゅ……」「」

「さて、続きだ。」

「何事もないように……」

「いつもどおりだな」

「一応全教科教えられるので臨時に授業するし、後は特別授業だ。考えているのがスキーしに北海道とかな」

「」「おおっ！っ」「」

「さて………授業を始めろぞ。」

「質問！」

「何だ、朝倉和美。」

「名前覚えてるんだ」

クラスの連中は覚えてるな。

「要注意人物としてだがな」

「えっ」

何を信じられないような顔をしてやがる。

「覚えがないと？」

「……………「ほん、それで質問何ですが」

逃げたな。

「言ってみる。どうせ聞かなきゃ授業にならんしな。」

「じゃあ、質問。趣味と気になってる人、付き合ってる人とレンちゃん、リリちゃんとの関係は？」

「趣味は虐めることと愛でること」

「うわ、Sの人だ」

「好きな人とかはNeed not to now。レンとリリとの関係は簡単、家族だ。リリは娘で、レンは妹であり娘だ」

「結婚してるの？」

「結婚はしていたな。リリの母は他界したが」

「すみません……………」

「気にするな。大分前だからな他に質問は？」

「では私から、神鳴というと武器からありとあらゆる物を作るあの

神鳴財閥の関係者ですか？

「そつだ。そこのトップのうちの一人だな」

桜花とエヴァ、レンで経営している。

「玉の輿！？」

「リリちゃんお母さんって呼んで！」

色々凄いな。ほとんどネタだろうが。

「うちも呼んでほしいな」

訂正、一部本気もいるな。

「ええい、うるさいリリとレンは私の娘だ！？」

「「「えっ」」」

せっかく隠したのにエヴァの馬鹿。だんだん真っ赤になっていく姿が可愛いな。

「エヴァちゃん？」

「冗談だ」

「なぐんだ」

「ふえ……………冗談……………なの……………？ママ……………リリのこと……………ひつく……………嫌いにな……………ったの……………？」

うわ、リリが泣き出した。

「えっ、えっと」

「マスター？」

「「エヴァ」」

レンと俺や教室全体からの非難の目が……………訂正、慌てて

あうあうしてるエヴァも可愛い。

「ああ、もう。嫌いになんてなってない！冗談でも無いから泣くな。私はお前の義母だ」

「ほん、と？」

「ああ。だから泣き止め」

「うん……………エヴァママ大好き」

エヴァに抱きしめられて撫でられたからリリも落ち着いたようだ。

「まったく、怒りはするだろうが、エヴァがリリを嫌うはずないだろ」

「うん」

さて、授業時間はもう無いな。

「ネギ君、今日の授業は終わりだ。今日は仕方ないが明日から君の

授業を評価させてもらうからな」

「えっ？」

キーンコーン、カーンコーン

「ほら、授業終わりだ」

「はい、今日はここまでです」

「あ、そうそうモールに出店したいやつはチャオに任せてあるから詳しく聞け。では、またな」

爆弾発言を投下してとっと逃げた。

「「「チャオ、エヴァちゃん!?!?!」」」

「うわ、これはないアルよ」

「シオン逃げるな」

しばらくエヴァのと同じにはいけんな。

「シオンお兄ちゃん」

教室をでて少しした所で木乃香が抱き着いてきた。

「木乃香か、可愛くなったな」

「ありがとうえくなら、結婚しよう？」

「いい子だから、後二年待て」

頭を撫でてやると気持ち良さそうにさらに擦りつけてきた。

「うにゅ〜、しゃあないな〜10年近くまったんやし……………な
ら、しばらく一緒に住も？うち、学生寮の643号室にいるし」

「ルームメイトはどうするんだ？」

「別に気にしなくていいえ、ベットはうちと一緒に使ったらええし、

花嫁修行もちゃんとしてんねんで？」

今帰るとエヴァに色々言われるし、そういえばネギも一緒だったな。木乃香に手を出されるのは我慢ならんし、何より木乃香に期待に満ちた目を上目遣いでお願いされたら叶えるしかないじゃないか。

「分かった。しばらく一緒に暮らすか」

「やった〜 そや、買い物付き合って〜」

「いいけど？木乃香以上に優先することは無いしな」

「ありがと、歓迎会するから買い物してきてやってメールが……..
……シオン先生確保つと」

その文面はどうなんだ？

「ほら、しくぞ」

「うん」

それから木乃香が腕に抱き着いた状態で買い物を行った。教室の前でネギと合流して中に入った。

「ようこそ、ネギ先生、シオン先生、リリちゃん！」

クラッカーが鳴り響き、髪にたくさんかかったな。自分のと木乃香についたやつを取ってやった。

「ほら主役は真ん中！」

「ほら、行ってこい」

ネギをいけ……………送り出して、ユーフィー達の所へ行ってみた。

「シオンさん。それなんですか？」

「どこかで見た気がするね」

「これか？これは単なる酒だ」

空けて飲む。

「ここは学校だよ？」

「気にするな。飲むか？」

「頂こう。」

さすがマナ。マナは吸血鬼化したため、木乃香達と同じくらいの成長度だ。

「だっだめですよ。」

「私にもよこせ！まったく、根掘り葉掘り聞きやがって。」

いつの間にか来たエヴァが酒を奪い飲んでいく。

「マスター……………」

「茶々丸か、これからよろしくな。」

「はい、こちらこそよろしく申し上げます。ご主人様。」

「ああ」

茶々丸の開発には関与した。資金援助や技術協力でな。方法は簡単、転移してきたチャオを取っ捕まえただけだ。未来でチャオに技術を教えたのは俺達みたいだ。

「こちら、シオンさんお酒なんて持ってきて何してるんですか」

タカミチがやってきた。

「タカミチ、お前も飲め」

「いや、仕事中ですので」

「俺の酒が飲めないと？」

「いただきます」

落ちたな。

「先生達ずるゝい」

「お前等はダメだぞ、未成年だからな」

「マナやエヴァはすでに飲み干して、素知らぬ顔をしている。」

「そういえば、ネギが宮崎を助けたせいでアスナにばれたぞ」

「アスナ姫なら問題無いでしょう」

「まあ、両親譲りの巨大な魔力のせいでコントロールに難ありまくりだな」

「密かに読唇術で会話しあう。」

「修行つけてあげないのですか？」

「死ぬぞ？それにかーくんがある程度コントロールしている。」

「あの反則なペットですか」

「まだ眠った状態だがな」

ネギは父から貰ったペットとしか思っていないしな。

「ま、成長に期待だな」

「ええ」

「先生、なにその可愛い生物は！」

どうやらネギがかーくんを出した見たいだ。

「行方不明の父から貰った大切な友達です」

「先生……………」

かーくんに餌を上げてるみたいだな。

「でも、なんて種類？」

「そいつはうちがバイオテクノロジーとナノマシンで新たに作り出した種だぞ」

「えっ」

「実験も終わって、欲しがってる奴がいたから上げた。10年以上前にな」

ネギの顔が最初明るくなって、最後に暗くなった。誰が教えるか、密かにネギを録画してナギ達には見せてるけどな。

「お前等、いい言葉を教えてやる」

「「「え？」「」」

「ねだるな勝ち取れ……………分かるな？誰かが助けてくれても最後は自分の力が物を言う。覚えておけ」

「「「はい」「」」

「確かにいい言葉ですね」

まったくだ、レントンの父親はいいやつだ。

「さて、みんな下校時刻だよ。片付けてお帰り」

「ネギは仕事が残っているな」

「いや、子供ですし……………」

「なら、首だな。子供だろうが教師だ。その責任は同じだ」

甘やかす気は無いぞ。両親からも許可はでていな。

「わかりました。やります!」

「ネギは後でタカミチが送ってやね。そして、お前はネギにとつと引き継がせる」

「はい!行くよネギ君!」

二人で一緒に職員室に向かったようだ。

「なんか……………高畑先生も子供みたいだったね」

「いったい何者？」

「さあ？」

「でも、カツコイイね。頼れる……………出来る人って感じ」

タカミチには稽古つけたりもしたしな。

夜遅く……………2時くらいに643号室に訪ねてみた。ノックをするとすぐに扉が開いた。

「お帰り、遅かったな」

お帰りでいいのか？すぐに木乃香が迎えてくれた。

「ただいま、寝てなかったのか？」

「ちゃんと旦那様の帰りを待ってるえ」

「OKOK、ちゃんと連絡するから寝ておけ」

「はい」

頭を撫でやった。

「あ、お兄ちゃんご飯は？」

「作ってあるの？」

「簡単な物ならすぐにできるえ？」

「なら、いいよ。時間も遅いしな」

「なら、シャワー浴びて寝よか」

「ああ」

シャワーを浴びて、木乃香と一緒に布団に入ると木乃香から甘い匂いがしてきた。

「えへへ、シオンお兄ちゃん」

「木乃香は甘えん坊だな」

抱き着いてきた木乃香を抱きしめ、腕枕をしてやる。

「シオンお兄ちゃんの前だけや（すりすり）」

「早く寝ろ」

「お休みのキスくれたら寝るよ」

お休みキスカ……………木乃香とは何年ぶりかな。上目遣いのおね

だりに弱いな

「ほら、んっ」

「ん〜ちゅ、えへへ」

「「お休み」」

それからお互いの温もりと匂いに包まれ眠りに誘われた。

シオンSideOut

同棲開始（後書き）

カモ君どうするか決まらない・・・
まあ、これからもこのちゃんとはいちゃらぶします。

四人の共同生活

木乃香 Side

シオンお兄ちゃんと一緒に寝ると昔のように安心して安眠するのがぐっすり寝れたわ〜

「
「

寝ているお兄ちゃんに抱き着き、まどろんでいると……………

「ちょっと、あんた！何で私のベッドで寝てるのよーッ」

「えっ………母さ………あ！？」

アスナは朝から元気やな

「ア、アスナさん！？すすす、すいません。僕お母さんがいるときは一緒に寝てて、アスナさんがお母さんに似てて………」

「な、何よそれ！？全く子供なんだからあ！ちゃんとソファア貸したげたでしょ！！それに、そんな歳じゃないわよ！？」

アスナとネギ君のお母さんにはにてるんやな。

「わっ！！もう5時じゃない。行ってくるね、このか！」

「アスナさんどこへ？」

「ん〜バイトやな」

「待て」

お兄ちゃんの手から糸みたいなのがアスナの足に絡み付いたわ

「きゃっ!?!」

自然の摂理に従ってアスナは盛大にこけた。痛そうや。

「アスナ、大丈夫か?」

「いったい、なんなのよ!?!」

「悪かったな、やったのは俺だ」

お兄ちゃんは多才やな。私はお兄ちゃん身体を預けたままや。ネギ君がアスナを助け起こしてるし、仲良くなるチャンスやから。

「何すんのよ!え?」

「シオンさん?」

「ああ」

ん〜、もうちよっとくつついていたいけど起きてご飯の用意しなな。

「何でシオン先生がここにいるのよ！しかも……………木乃香と一緒に……………まさか、木乃香を無理矢理！？許さないわよ！？」

お〜アスナ本気で、怒ってくれてるな。結構嬉しいな〜

「まあ、落ち着け。木乃香を無理矢理……………というのいいかもしれんが、そんなことしたあとこんなところで寝るわけないだろ」

「うつ、でも……………」

「無理矢理？」

「まあ、うちは無理矢理でもいいけどな〜、ちゃんと私の気持ち考ええてくれるし……………」

うちは、身も心も全て任せるつもりやしな〜。

「ちよつ、木乃香どういうこと!？」

「ほら、前に婚約者がいるっていったやん」

「えっ、じゃあ……………」

「そ、木乃香の婚約者だ。そこはいいか？」

「はい、って何で止めたの!」

「大人です」

10歳にしたら大人だろうよ。アスナにもちゃんと説明するか。

「止めた理由だがバイト禁止だといっただろ」

「でも、生活費とか付き合いが……………って、よく考えたら教師と生徒が付き合っつて問題じゃない!しかも、同衾って問題あるまくりじゃない!？」

皆が話し合いをしてる間に、朝ごはんはんと飲み物を用意しよ。」

「婚約したのは5歳くらいの時だし、問題ないだろ。」

「問題ありまくりでしょ！このロリコン！」

ネギ君はあわあわしてる。でも……………。

「むくいくらアスナでも、シオンお兄ちゃんとの仲を邪魔すれなら許さないで？」

「ちよつ、木乃香？目がやばいんだけど、まさか本気？しかも、その包丁怖いんだけど？」

アスナは、目に見えてうるたえてるな。

「……………」

「……………木乃香？」

「もちろん、本気やで？」

「ッ」

アスナがだらだら汗流してるな

「どうするんアスナ？」

「え、えと……………」

アスナがシオンお兄ちゃんとネギ君に目配せしてるな。

「俺にいつても無駄だ。俺は木乃香に賛成だしな」

「僕にはよくわかりません」

「ちなみにな、しばらくここに住むしな」

やっぱり、これから一緒に住めるのは嬉しいな

「えッ！」

「安心していいぞ。木乃香しか興味ないし」

「なっ」

「嬉しいな」

「それに、俺の行動を妨げることができる奴なんてこの学園内にいないぞ？」

「……………」

「権力は使うためにあるからな。ちなみに、バイトはやめると連絡してあるぞ」

「なっ、なんて」としてくれるのよー」

「安心しろ、生活費と授業料はこっちで払ってやる」

何で、お兄ちゃんが？

「どついでとよ？」

「お前が両親から、相続するはずの金が手違いでお前に渡って無かったんだ」

「えっ、私の両親を知ってるの？」

「ああ、もう亡くなっているんだがな。だから資金については安心しろ。月々10万ほど生活費込みで千万ほどか、そく受け取るか？」

アスナお金持ちや。

「えっと、月々でお願いしま……す？」

「両親については聞くな、人づてで頼まれただけだ。しかも、どこかの馬鹿が渡し忘れたせいで金はこっちの自腹だ」

「いいの？」

「かまわん。これくらいなら単なる遊ぶ金だ」

さすが財閥の幹部さんや。

「まあ、分かったわ。木乃香を敵に回したくないし好きにしたらいいわ。ただし、木乃香を悲しませたら許さないから」

「任せろ、幸せにするつもりだ」

「ほら、ネギ君。運ぶの手伝ってな」

「はい」

それから、四人で朝ごはんを食べて学校へ行きました。

こうして、四人の楽しい生活が始まりました。あとは、せつちゃんだけやな

木乃香 Side Out

四人の共同生活（後書き）

アスナがなんでバイトしてるのかわからなかった。

タカミチとかから支援あると思いますのでこんな形になりました。

温泉

シオンSide

あれから、数日が経過した。その間に、アスナの授業でネギに辱められたり、惚れ薬事件のフォローしたりした。

なにやってんだか、さっそくアスナにばれてるしな。

「ピンポーン、ピンポ、ピンポーン」

「あ、は〜い」

「誰よこんな時間に……………」

「アスナ、そこ違うぞ。公式が間違っている」

「あつ、ほんとだ。ありがとう」

ついでなので二人をみている。アスナは勉強を、ネギは事務についてだが。

「ネギ先生こんばんはーっ、授業の質問に参りましたーっ」

「ん？」

「「「「あつ」」」」

「何で神鳴先生がここにいますか？」

夕映のいうとおりだな。

「ネギのサポートだな。ついでに木乃香とアスナの家庭教師だな」

「まあ、上がり上がり」

「くんばんは」

「どうも〜」

それからすぐにうるさいのがきた。

「ちょっと、アスナさん！どーゆーことですか！？ネギ先生と相部屋で同居中だなんて初耳ですわっ」

「あーいいんちよ、今ちよーど勉強会が始まったとこやー先生二人いるで〜」

「えっ！？ネギ先生と勉強会！？わかりました。私もお付き合いします」

俺は無視か、まあいいけど。

「はいはい、ほなそこ座りや」

「よし、できた。ほら、クッキーだ食べてみる。」

「えっ、何故シオン先生がここに？いただきます」

「なにこれ、ほんとに美味しい」

「信じられませんこんな美味しいクッキーがあるなんて」

「馬鹿、食べちゃ……………遅かったか……………」

「……………えっ？……………」

このクッキーは美味いそれはあっている。ただ、余りの美味さに中毒症状がでる。別荘で見付かった特殊な粉末を使用している。しばらくしたら消えるし、後遺症は無いんだがな。

「さて、問題だ。問題を解いたら一問につき一個くれてやる」

手を伸ばして来る生徒からクッキーを遠ざけ、問題をやらせる。

「……………」

凄い速度で問題に向かいました。

「教師がこんなことしていいの？」

「平気だ。危ない事はない」

カップ酒を飲みながら見ていると夕映が先に終わったみたいだ。ちよつと、遊んでみよう。

「ほら、あ〜ん」

「あ、あ〜ん」

夕映が顔を上げ、口をあけて上目遣いで見上げてくる。ペンギンの子供が親から餌を上げるような感じになった。ちよつと来るものがあるな。

「いいな〜うちにも〜」

「ほら」

ねだられたので木乃香にも食べさせて上げた。のどかとかは、ネギが渡した。

「「美味しい」」

夕映と木乃香をどんどん餌付けしていく。

「終わったわよ」

アスナも結局クッキーを食べる。みな凄い速度で課題を終わらせた。

「木乃香、例のお茶を振る舞って上げて」

「うん」

木乃香が振る舞ったお茶で中毒症状が消え、即座に正気に戻る。

「あ、あううう」

「夕映！」

正気に戻った夕映は顔を真っ赤にして部屋を出ていった。

「夕映っ、待って！失礼します」

「あなたも帰れ！」

アスナがいんちよを追い出した。

「先生、無茶苦茶だよね」

「何を今更」

「凄いです」

「ネギ、ダメよ。こんな大人になっちゃ」

「えっカツコイイやん」

「あなたは刷り込まれてるだけよ。シオン先生のことに関して木乃

香の評価は当てにならないわ」

言えてる。本当に身も心も捧げてくれてるし。

「ひどいな」

アスナに抗議しつつも、木乃香はしな垂れかかり、身を寄せて来る。

「まあ、いいわ。ん？あんた汗くさいわね。風呂入ってんの？」

「えっと、その〜風呂嫌いでした……………」

「シオン先生入れてきてよ」

「嫌だ」

「なんでよ？」

「俺は木乃香と一緒に入ってるし、木乃香の裸とか見たら殺すぞ。最低でも両目は破壊する」

「じゃ、じゃあ、木乃香と入らなければいいじゃない」

「絶対嫌や。背中とか洗うのはお嫁さんの仕事やしな」

「嫌、違うでしょ、水着きたら？」

「それは、マナー的にダメだ」

お前が言っなと思われてるだろうな。

「というわけでよろしく」

「仕方ないわね」

「アスナは優しいな」

「うるさい」

アスナがネギを連れていったのでこちらも準備する。

「じゃあ木乃香、風呂いくか」

「うん、準備はできてるよ」

早いな、しっかり俺の分まで準備しているしな。

「じゃ、いこうか」

「温泉」

俺と木乃香は世界樹の方にある家に温泉に入りきた。

「いい湯やね」

「ああ」

二人でお互いの身体を洗った後、湯舟に使っていると乱入者がやって来た。

「二人共湯加減はどうじゃ？」

「いい感じや〜」

「ああ」

桜花が淡い炎を纏いながら一升瓶を二本お盆に乗せて、湯舟に入ってきた。

「浄めの炎で身体を洗ってるのか」

「うむ、この頃忙しくてな。モールは来週までには開けるようになるがな」

さすが桜花、仕事早いな。

「お〜、シオンお兄ちゃん。できたら、デートしよ〜や〜」

「うんぬん」

「おぬぬんぬん」

「桜花もするか？」

「うむ ただ、問題が………私達なら仕事の話になりそうじ
や」

視察になるのが目に見えている。

「確かに」

「なら、三人で行けばいいんや」

「なるほど」

「それで行くか」

「うむ」

木乃香が一升瓶を取って、お酌してくれる。

「しかし、両手に花じゃな」

「二人共可愛いし特にな」

二人を抱き寄せると顔を赤くして恥ずかしそうにしているが、二人共身を委ねてくれる。

「もう……………お酒でござい」

「ありがとう」

「しかし、あれじゃな」

「ん？」

「ハーレムも別にいいが、ちゃんと責任は取ってくれよ？」

「ああ。任せておけ」

「「ふつつか者ですが、未永くよろしくお願いします」」

この二人って大和撫子って感じ何だよな。だから、桜花と木乃香は気が合うみたいだ。

「「「あはははは」「」」

三人で楽しく温泉をゆっくり入った。問題はあとで、エヴァやレン、アテナ達に呼べと怒られたことだ。ネギはネギで大変みたいだが、浄めの炎は教えてやらん。なぜなら、風呂嫌いが悪化しそうだからだ。木乃香や刹那は修行の初めの方に覚えた。汗くさいのは嫌だからだけだね。

しばらく日にちがたった。校内を見回っているとトラブルを発見した。ちっ、うちのクラスじゃなきや放置なんだがな。

「ほら、どうしたんですの!」

あれはアコ、ユーナ、マキエ、アキラか……………危ないな。

「えっ、先生!」

廊下から飛び降りて、壁を蹴ってアコ達の方へ向かう。3階だったから滞空時間は問題無い。

「はい、そこまでだ」

アコに迫っていたボールを受け止め、上空にトスを上げる。

「なんですか貴方は！」

「ここは女子校ですよ!？」

「何って、単なる通りすがりのお節介妬きかな？」

「なっ！」

「シオン先生……………」

「…………先生!…………」

うるせーな。アコ達には、怪我無いようだな。

「とりあえず、事情を教える」

「はい……………」

事情を聞き終えた。概ね見た通りか……………

「うん、お前達が悪い」

「なんで、ですか!？」

当たり前だろうが。

「アコ達が先にここで遊んでただろうが」

「何を根拠に!」

「あ、名前呼び捨てだ」

後ろで何か言ってるが放置。

「聞いた情報は食い違っているから俺のクラスを信じる」

「先生！」

「なっ、横暴です」

全くだな。このままだとだが。

「証拠は……」

「証拠は俺があそこから見えていたからな」

「さっきのは何！信じるとか、確定してるじゃないですか」

「……あんな所からこんなに早くこれるはずありませんわ」

「飛び降りたしな」

「えっ」

おー驚いてるな。

「まあ、あれだ。それにお前達の方法に従ってもいいぞ?」

「「「「えっ」「」「」

両サイドの意味は全然違うがハモったな。

「簡単だ」

落ちてきたボールをアタックした。放たれたボールは、彼女達を霞めて地面に激突し、食い込んだ。そう、地面に……………。

「まあ、どっちにしる監視カメラ見たら一発だな。それでも、やるなら相手になってやるぞ?」

「「結構です〜」「」

「くっくく」

脱兎の如く逃げたな。

「先生やりすぎじゃないかな」

「そうか？（ニンマリ）」

「でも、すつきりしたよ」

「あの、助けてくれてありがとうございます」

アコが丁寧に頭を下げて来る。

「気にするな。女の子に傷を負わせる訳にはいかないしな」

「先生、キザだよ」

「うるさい、それより遊ぶ時間なくなるぞ」

「はい」

「先生も遊ぶ？」

「いや、そこで見学してる」

「わかりました」

木に寄り掛かりながら、ふと思い付いた歌詞を歌う。そう、自由に空を飛ぶ歌を……………。

キーンコーン、カーンコーン

予鈴が鳴ったので、歌をやめ、目を開けると人だかりができていた。

「なにこれ？」

拍手がたくさん鳴り出した。何なんだ？

「凄いです、感動しました！」

「アカペラであそこまでいくなんて……………」

歌を聞かれてたのか。

「おい、お前達予鈴なつたぞ。いいのか？」

「「「「あつ」「」「」」」」

人だかりが無くなったので歩みだした。

「先生が歌いだしたら急に回りが静かになったね」

「みんな聞き惚れてた」

「そうか？即席で作った歌詞なんだが？」

祝歌だしな。理由はセイレーンの技術を利用したからか？祝歌としては失敗だったが。

「「「「凄い」「」」」」

「あ、あの……………先生……………」

「何だ、告白か？」

「違います！歌を教えてください！」

予想通り、真っ赤にしながら答えたな。

「なんでだ？」

「私達、バンドをやってるんですよ。アコがヴォーカルで」

「なるほど、だが断る」

「なんでですか！」

答えは非常に簡単だ。

「面倒だし、俺に得がないだろ？」

「っっ」

「それに教えても上手くなるかわからんしな」

これ以上仕事が増えて実りがないのは嫌だ。

「それでもお願いします！」

「もう、いいよ……………確かに私……………」

「ダメよ、アコ……………」

なんか、アキラのほう在必死じゃないか？

「次の授業は音楽だから、急がないといけないよ？」

「音楽……………それだ！まきえナイスだよ。先生、音楽の授業なら問題ありませんね？全教科いけるとおっしゃってましたし」

確かにそれならいけるな。

「だけど、音楽の授業だと余り教えられんぞ？」

「構いません。私達の成長をみてください。アコもいいよね？」

「う、うん」

「なら、音楽の先生の許可とれたらいいぞ」

「すぐ行ってきます！」

走って行きやがったな。

「え、シオン先生を？」

「お願いします」

「いいわよ」

「いいんですか！」

「私、もうすぐ育児休暇とるから……………かわりの先生がどうなってるか校長先生に聞いてみて」

「ありがとうございます」

すぐに、学園長室に向かう。

「授業が……………まあ、いいか。これも、青春よね」

学園長室の扉をあける。

「学園長先生！」

「何じゃねいきなり、電話中じゃぞ……………それで、変わりの音楽教師じゃが……………」

「えい」

「なんで切るんじゃない！」

「音楽教師の件なんですけどシオン先生でどうですか？」

「無視か……………その手は考えたが、本人が納得せんじやろ」

「大丈夫です。既に既に説得してます！」

「少々待っておれ……………さっきはすまぬ、教え子がな……………
うむ、なら1クラスだけ任せるといこと……………本人が嫌
がるだろうしの……………では、それで……………ふう、待たせた
の」

「どうなん……………ですか？」

「うむ、主らのクラスだけシオン先生に担当してもらおう」

「「やった」」

「それで、さらに説得する方法じゃ……………」

「わかりました！」

という会話があったと後から聞いた。レンやりり、エヴァに、さらに聞いてきた木乃香とマナまで加わったらどうしようもなく、音楽の授業を引き受けた。爺覚悟しておけ、やり返してやる。

シオンSideOut

温泉（後書き）

アコフラクを立ててみた。アキラがアグレッシブになってしまった。

ドッチボールと初めて音楽授業（前書き）

なんか書いてると音楽の授業が変なことになったよ！

ドッチボールと初めて音楽授業

シオンSide

嵌められた。あのくそしじい、覚えてろよ。(アコやアキラ達は生徒なので放置)

「突然だが、次からお前達音楽授業を担当するら」

「……はーい!」「」「」

八つ当たりには、音楽機材注文するか。学園長の給料から引いて。いや、まで………どうせなら、チャオに作らせるかな。採算度外視で………チャオに相談してみた。

「できるが、先生、鬼ね」

「断るか？」

「まさかー、私にまかせるね」

その後、1500万ほどの請求書が学園長におくられたが、この話は後だ。

屋上でエヴァとひなたぼっこしていると下がうるさくなつた。あれは高等部の連中じゃないか。

「レクリエーションでここは私達が使ってますわ」

「ふざけんなっ！」

「喧嘩はいけません！スポーツで決着をつけましょう！？」

ネギにしてはいいこといった。

「なんだ？」

「授業だな」

「どうでもいい。寝る」

エヴァは身体を預けて、すぐ寝息をたてる。

「なら、ハンデに人数倍でよろしいわ」

「それ、ハンデじゃないだろ」

「シオン先生！」

ドッチボールだぞ？

「何でエヴァちゃんがそこに？」

「マスターかわいい……………」

エヴァを膝の上に乗せ、自分の頭をエヴァの頭に乗せている。

「気にすんな。クーフェ、楓、マナ、ユエ、マドカ、アスナ、マキ
エ、レン、リリ、ユーフィーが参加しろ」

「「「「えっ」「」「」

明らかな過剰戦力だが。

「成績に色つけてやる。」

「「「……………」」

後一押しか。

「勝ったら、クラス全員に寿司奢ってやる」

「「「やる（やれ）！？」「」

あはは、食い気が優先か。

「お前達が勝つたら、ネギ君を上げよう」

「いいでしょう」

そして、茶々丸の合図で始まったゲームは予想通りだ。

「6対10」

準備が整ったか。

「リリ、右39度、威力40」

「うん、いくよー!」

リリがレンの指示通り投げたボールは、五人抜きをして、外野にいったマナの手にボールがわたる。

「なんですかこれは!」

マナー撃が正確無比に命中し、ボールがユーファイにいき、ユーファイが更に弾き返し、中てる。6対3。

「アスナ」

「くらえ！」

アスナのボールは止められた。

「弱い人から！」

「っ」

「卑怯な！」

「知りませんわ！」

レンを狙いやがったか。

「レンお姉ちゃんに手出しさせないよ」

リリが割り込んで、ボールを止めている。

「アスナさんどうぞ」

リリが、ボールを上下に挟みアスナの前にさしだす。

「なに？」

「殴ればいいよ」

「わかった。いっけえ！」

助走をつけて殴りつけた。リリのサポートをうけたボールは相手も
るとも場外に吹き飛ばした。

「最後はこれでおわりアルな」

クーフエの一撃で、ゲームは終わった。予想通りこちらの勝利だな

「「「やった〜！」」」

「まだ……………」

あいつ、アスナを狙ってやがる！

「アスナ！」

「えっ？」

アスナに放たれたボールは、ネギが割り込んで防ぎ、弾き返した。何故か武装解除が発動して、連中の服が破れたが自業自得なので気にする必要は無い。

「あ、ありがとう……………」

「えっ、なんて？」

「何でもないわよ！」

ツンデレだな……………まあ、勝ったので、約束通り寿司を奢ってやる。モールで店だす奴のモニターがわりだがな。

というわけで、7時頃寿司屋に到着。ここは、回転寿司と回らない寿司の両方だ。そして、こいつら、回らない方にほとんどこいきやがる。委員長とか金持ってる奴は、回転寿司にいつているが。

「お前等、ちゃんと評価つけろよ！」

「……………はい……………」

リリヤレンは真ん中にある巨大な生け簀のお魚を見ている。ここは水族館のレストランみたいな作りだ。

「やった〜」

「マグロが吊り上げられたので、解体ショーしますよ！」

「……………おー、ユーフイーナイス！……………」

ユーフイーとマナ、刹那は釣りしていたみたいだな。この二人は結構仲がいい。

「お、こっちは鮭だな」

「私は、鯛だな」

「じゃあ、そつちもやりますね」

みんな楽しんでいるみたいでよかったな。

「美味しい」

ふむ、味はいいな。

「ちよつ、桜花先生それ、お酒！」

「気にするな。ほら、飲むぞ」

桜花がこっちの席に来た。

「ああ、生ビールか」

「うむ」

「先生……………」

「ダメだ」

未成年だからな。

「おー、やっていますね」

タカミチやしずる先生達もやってくる。

「今日は生徒がいるんですね」

「学生のモニターもいるでしょ」

「ですね。一番多い客は学生だから」

みんな思い思い好きにしている。何人が注意されているが……………

「桜花先生、次は串焼きとかどうですか？」

「あつちは、まだ訓練中じゃ。飲食店は特に気をつけねばならぬな」

「よろしく願います」

「うむ」

桜花が料理教えているから味はいいんだがな。高等部などの先生も来ている。

「学園長は来てないのですか？」

「いってないからな」

後、魔法使いの連中もな。その後、先生達と酒盛りしながら活け作りなど堪能した。学生帰して、酒場にもいった。ここは、まじで雇い入れたので皆さん好評だ。ノンアルコールもあるし学生でも安心。マナ達の武器屋でもある。マスターはオールバックの執事みたいな外国人だ。

その後、10時に帰宅すると木乃香にお酒臭いと言われてしまったので、即座に浄めの炎で酔いや臭いを吹き飛ばした。残念だが、一緒に寝ないと言われる方が嫌だしな。え？もちろん、木乃香の可愛い寝顔を堪能してから寝ましたとも。

ついに音楽の授業です。音楽の歴史とかは放置する。

「まずは、発声からだが………チャオ、博士計測頼む」

「はい」

全員の声を調べて、悪い場所を具体的にデータでみせる。その後、練習させて直させる。

次の授業で発声技術を教えるメンバーと楽器組にわけける。発声は俺、楽器はレンに担当させる。レンは入院していたときや暇なとき楽器で遊んだりしていて詳しいから大丈夫。歌はあまり人気がないのか微妙。アコは歌に来てるけどな。前半を音程の直しや楽譜の読み方。後半は歌と楽器を教え込む。確実録音した奴は聴かせて反省点を洗い出させてやる。これを10月後半まで行い、それ以降、合唱をさせる。

「ふむ、大分上手くなったな」

「先生のおかげです」

「うん、うん」

なら、いいか。

「12月……………冬休み前に北海道で行われる合唱コンクールがあるが、登録しておいた」

「えっ？」

「コンクール含めて一週間ほど滞在予定。コンクールが終わったら適当に帰ってもいい。全て学校持ちでコンクール後に観光ができる。泊まる場所は、スキー場の近くで、温泉もあるし、リフトやレンタル代もタダだ。スキーやスノーボードは体育の成績に加算するからな。まあ、コンクール上位入賞すればだが……………このままいけばいけるだろ」

「部活とかそんなLVのきがするけど……………やったるうじやな」

い！」

「夕映」

「ええ、やりましょう。体育の成績に＋は大きいです」

クラス全体やる気充分だな。

「これって、マスターが行きたいだけだろ？」

「多分、そうですね。レンさんやリリちゃん達が冬休み旅行行きたいとか言っていましたから」

「ついでに、学園長への嫌がらせも含んであるんだろうな……………
全く、シオンさんは……………」

マナ、ユーフイー、刹那の会話。

「スキーがやったことがないから楽しみだな」

「そうですね、マスター。リリ様やレン様をけしかけたかいありま

したね」

「人聞きの悪いこというな！ええい、巻いてやる！」

「あゝ、やめ、あつ」

エヴァが黒幕か、レンやりりも喜んでるしよし。

その後、彼女達の入れ込み具合はヤバかった。脇目も振らず練習三昧だ。委員長は、ネギ先生とご旅行とかいって本気だ。新品の楽器を寄付しようとしてきたりしてきた。かなり高価なの。まあ、介入して我社の新素材で作った楽器を入れてあるから寄付金だけ頂いた。気持ちより、物だ。いや、好きな子の気持ちは欲しいけどな。

「種類色々あるからメンバーも別れるから、慎重にな」

木乃香は横笛だし、ギター、バイオリンなど選んだ奴もいる。音楽の祭典というか、色々な分野のコンクールが同時に開かれる。パンフレットを見せたら、個人の部も参加する奴が多い。優勝賞金に釣られたか。そんなこんなで、放課後遅くまで練習したり、モールで生演奏したりしている。すでに、麻帆良学園に存在するどの吹奏楽部や音楽部より美味い。パフォーマンスマスまで取り入れ出したしな。木乃香とマナが神楽鈴を使い、実際に舞ったりするグループまである。一応、日本音楽に入るしいけどな。そんな熱意見せられると

答えたくなるわけだ……練習が8時過ぎになるのはざらだから、モールでご飯を奢ってやる。それ目当てに練習を最後まで参加する奴もいるが、技術が上がっているので構わない。他の先生も熱心な姿を見て、応援してくれる人がほとんどだ。監督は俺や桜花がしているし問題ない。何かいつてきても理事長権限でだまらした。

モールも休みには、学園外からお客がくるし、客寄せにも都合がいらいしい。外部の人は麻帆良モール入口で現金をポイントに変えて貰っている。あくまで、生徒が行う社会勉強の一環だからだ。余ったポイントは次回使えるし、各フロアにも換金場所があるので問題ない。全体的に安いしな。換金場所は自動化してあるし、護衛にMSが巡回しているので問題ない。もちろん、着ぐるみみたい（カモフラージュ）な大きさに縮小されているが、ちびっこ大人気だ。先生にもメリットはある、ここに人が集まるから一般の巡回が楽になるからだ。

一部、水族館や動物園にもなっている。複数のサークルやクラブが合同で出しているし、他にはない最新技術で作られたゲームもあるから若者にも人気だ。父兄の方々にも賛同いただいている。

こんな感じに人は沢山くるので訓練にもちょうどいい。どこまでいくか、楽しみだ。

シオンSideOut

ドッチボールと初めて音楽授業（後書き）

あんなコンクールがあるわけがない。というわけで勝手に自作。

図書館島探検部（前書き）

久しぶりの投稿です。

レ n s i d e

時が流れるのは早いものでもう学期末。お兄様の授業の方は・・・
・・・やりすぎでもあるけど特に何も問題無い。ネギ先生の方は多
少問題があるけど・・・訂正、お兄様にも問題がある。それ
は、木乃香の所に入り浸っている事・・・ちゃんとかまっ
て欲しい。

ん・・・前方からネギ先生に椎名さんに明石さんがやって来た。

「そろそろ中等部の期末テストが近いからね」

「来週の月曜日からだよネギ君」

そういえばそうでした。テストなんてどうとでもなりますし（赤点
ギリギリ）、それよりお兄様の事です・・・でも、リリ

が心配ですね。

「へー……学期末テストですかあゝ大変なあ………って2
- Aもそうなのでは!？」

教師が今頃気づくのは不味いのではないのでしょうか？

そうこう考えている間に先生達を通り過ぎ屋上へ向かいます。

「って、レンさん!もう直ぐHRですよ!」

「………面倒………」

「ダメです!ほら、行きますよ!」

せっかく、屋上でエヴァちゃんと日向ぼっこをしようと思ったのに………残念。

教室は相変わらずうる………賑やかですが、委員長が率先して静かにさせました。

「みなさん、聞いてください!今日HRは大・勉強会にしたいと思います。次の期末テストはもう、すぐそこに迫ってきています!」

わざわざ大をつける必要はないと思う。

「あのっ、そのっ、………実はうちのクラスが最下位脱出でき

ないと大変なことになるので~~~~皆さんががんばって猛勉強していきましょ~~~~」

そういえば、ネギ先生の最終課題はこれでしたね。でも、特に興味ありません・・・・・・ナギやアリカの息子とはいえ、本人では無いのですから。

「はい、提案提案！」

「はい！桜子さん」

「では！！お題は『英単語野球拳』がいーと思いまー！すつ！」

野球拳・・・・・・ジャンケンをして負けた方が一枚ずつ服を脱いでいくというあれですね。ちょっとやってみたかった。脱ぐのは御免ですけど。

「ちょ、皆さんー！！」

「むー！ーじゃあ、それで行きましょ」

「えっ！？」

絶対分かってないよねネギ先生。

「ちょっと、ネギ！あんだ、野球拳が何か知ってんの！？」

知らないと思います。というか、教師が認めるはず無いことですね。

「お姉ちゃん、野球拳ってなに？」

「私も気になります」

リリとユーフィーは知らないでしょうね。

「……………英語を答えれば大丈夫……………後は、見れば良い……………」

「うん、わかった」

それから、私はとつとと答えて見る側に回る。

「あうあう」

「それは、分かるよ！答えはファンタジー！」

「リリちゃんも抜けたね！」

ユーフィーはダメみたい。というか、日本語すら怪しいのにな。

「……………（こうなれば最終手段です！ゆう君！？）」

「……………なんでこんな解る……………」

難問の衰退とか絶滅とかをユーフィーがすらすらと答えて行く。神剣の力を使うのは反則だと思います。さすがエターナル……………汚い。

「汚くないです！」

「どうしたのユーフィー？」

「なぜか言わないといけない気がただけです……」

結局、リリはリボンだけでユーフィーが上着を脱いただけで終りました。バカレンジャーはもう下着姿ですけど。

「ちょっと、何でレンちゃんは成績悪いのに答えられるの！」

「あっ、それは気になるね」

「………答え………赤点ギリギリ狙ってるだけ………」

「………なんじゃそりゃ!!!!」

だって、面倒じゃないですか？

「お姉ちゃんは大学の問題でも答えられるしね」

「というか、IQ200超えてたと思います」

「………」

「ふっ、やる気が無いだけだな」

真名の言う通りです。私がエヴァちゃんを巻き込んで学校に来ているのは、前世で出来なかった学生生活を楽しみたいだけですからね。

「な、何やってるんですかー！ー！」

「だって……………」

ガラガラ

「五月蠅い。いったい何をやってい……………」

あつ、お兄様だ。

「……………きゃあああああああ……………」

「え〜と、ネギ先生……………」

「これはその……………」

「まあいい、とりあえず服を着ろ。その後、全員正座！」

「……………はいつ!?……………」

その後、二時間ぐらい正座したまま説教+勉強をさせられました。間違ったり、脚を崩したりすると容赦なくハリセンで叩かれます。お兄様は鬼ですか？そのハリセンって一部、鉄と皮できてますよね？

レノSideOut

シオンSide

まったく、あいつらは……眼福でもあったけどな。何？
わざとあのタイミング狙っただろって？男だから仕方ないだろう。

「ねえ、ねえ、聞いた？次の期末テストで最下位のクラスは解散な
んだって」

「本当なの？」

「先生が話してたらしいよ？」

面白そうだな。とりあえず、学園長室に行ってみるか。

「爺、どうなってやがる!」

「ふおっ!いきなりなんじゃ!というか、主の方が明らかに年上じやろう!」

「麻帆良中に聞いてみるか?」

「………ところで、主語が抜けて折るんじゃが?」

「ああ、期末テストの解散の話だ」

原作でもあったな。最下位はクラス解散と幼稚園からやり直しだっけ?

「それは、ネギ君の為じゃな。じゃが、本当にやる気はないぞ?」

「面白い、俺が認めてやる」

「ふえ!?!」

くっくく、楽しみじゃねえか。

「だから、クラス解散は認めてやる。さすがに、幼稚園からってのは無しだな。後、最下位ならネギはクビだ」

「ちよ、待つんじゃ!?!」

「ああ、どうせなら飛び級も数人認めてやるか」

「お主はいつたい何を考えて……」

「何って、あんた達が考えてた事をかき回してやるうかと思ってな。全処理はアンタに丸投げするからあしからず」

「っ!？」

顔面蒼白なぬらりひよんの顔は結構面白いな。2-Aってやっぱりネギの為の生贄だと思っただよな。別に自らの意思で此方側に来るのは止めないけど、無理矢理ってのは良くないと思う。それに、やるならしっかりと鍛えてやれや。色々甘すぎる。まあ、原作と違っている程度ネギのケアはしてあるけどな。魔力制御はかー君が徹底的にしてあるしな。

「じゃ、通達して来るわ」

「まっ……」

無視して学園長室を後にした。爺もこれで懲りるよな？クラス解散は振り分ければどうにかなるし、人数が過剰になっている2-Aに入るのはまずくない。せいぜい、魔法生徒ぐらいだろう。さて、図書館島をどうするかだな。

前方に着物姿の少女を発見。これより襲撃を開始する。

「襲撃はひどいと思うのじゃ」

「といいつつ、居合い拳を撃つて来る桜花さんでした……………」
まあ、あれだ、久しぶりにヤルか？」

「おもしろいのっ!」

お互い居合い拳の乱打を打ち合い続けながら報告している。

「何してるんですか!？」

髪をお団子にしてからさらにツインテールという少女がエンカウン
トしましたよ？

「「挨拶?」」

「「こんな挨拶はありません……………バレたらどうするんですか……………」

「ふむ、それもそうじゃな」

「まあ、いいや。君は……………佐倉愛衣だったな」

「はい」

「この子も可愛いんだよな。魔女っ子ばくてさ。アーティファクトが
算ってどうなのよ?あきらかに狙ってるだろ。」

「ああ、そうだ。期末テストがんばれば良いことがあるぞ」

「え?」

「また、何かたくらんでおるのか？」

「それは秘密。桜花、今夜は警戒レベル下げたおいて。後、明日からネギと俺の代わりに教師を宜しく」

今日は図書館島フラグが立ってるしな。

「龍殺しでよいぞ？」(図書館島じゃな)」

「龍？」

「お酒だよ愛衣ちゃん」

「み、未成年なんですからダメですよ？」

「(俺)私達江戸時代から生きてるぞ？」

「ええええええ！？」

成人なんて何回しただろうな？まあ、ついになんて愛衣ちゃんにはクラス解散が本当のこととして伝えてもらうようにした。

夜になり、木乃香と共に食事を作っている。

「はい、あ〜んや」

「うむ、相変わらず木乃香の料理は美味しいな」

「えへへ」

「私はアンタ達のバカッブルぶりがすごくムカツクんだけどね」

アスナは切れそうだな。ネギは特に気にしていない。といっても、味見をしあっているだけだが。

「それより、アスナさんは勉強ですよ！」

「ああ、それなんだけどさ。図書館島に賢くなる魔法の本があるらしいのよ」

「えっ」

「うちらでそれを取りに行こうって話になってな〜お兄ちゃんもおへん？」

ぶつちやけ、木乃香の魔法技術は既に原作後半クラスだから気にする必要は無いんだが………やっぱり心配だな。

「ああ、行こう。そんな本が無くてもネギと二人で徹底的にバカレンジャーとユーフィーを教えればいいからな」

「そうですね！僕達でがんばりましょう！」

「げっ……結局スパルタじゃない！」

「覚悟してくださいね？」

「くそぉ~~~~~!!!!!!」

ネギも良い性格してるな。

シオンSideOut

夕映Side

私達はテスト勉強の為に、図書館島入り口にやってきました。メンバーはバカレンジャー（ホワイト：ユーフィー）とシエルバ&地下連絡員に教師二人です。しかし、教師二人ですか……。ネギ先生は来ると思っていたですが、シオン先生まで来るとは思っていなかったです。

「なんでシオン先生が？」

「ああ、お前達が心配だしな」

「っ／／／」

わざわざ、顔を近づける必要は無いと思います。前の勉強会のせいでとても恥ずかしいです……………／／／／／／／／

「後、バカレンジャーズ。例え魔法の本が手に入らなくても二人できつちりと頭に試験範囲を叩き込んでやるから覚悟しておけ」

「……………ひいつ!?!」「……………」

それが狙いですか!?!でも、あの料理はまた食べたいです……………頑張らない……………はっ、危ないです!美味し過ぎる食べ物には麻薬と変わらないです!気をつけないと!!!

「それでは行きましょう」

「……………おお……………!?!?!」「……………」

私は図書館島について説明しながら中へと皆を誘導して行くです。

「この図書館島は明治の中頃、学園創立とともに建設された世界でも最大規模の巨大図書館です」

「確か、二度の大戦中にも戦火を避ける為に大量の書籍がここに運び込まれたな」

「そうです……さすが理事長です？」

シオン先生の言葉は何か現実味がありますね。

「蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返され現在ではその全貌を知る者はいなくなっています」

「ここに、全貌が乗った地図があるけどな」

「「「えっ!?!?」「」」

シオン先生が取り出した地図には階層深くまで確りと書かれた地図……いえ、これは設計図？

「ください!?!」

「ダメだ。欲しければそれなりの代価を差し出せ」

「くっ……」

「夕映？」

「パルヤのどかの為にも何としても手に入れたいです。」

「何が欲しいのですか？」

「はっきりいって、お金や地位は持っているので何が欲しいかわかりません。木乃香と付き合ってるみたいですし……いえ、エヴァンジェリンさんや管理人の桜花さん、龍宮さん、ユーフィーとも怪しいです。それにリリちゃんにいたってはパパです。女性関係が全然分かりません。」

「そうだな……じゃあ夕映本人で」

「っ／／／ 木乃香！」

「あつ、うちは別にええよ？お兄ちゃんがうちの事を大事に思ってくれてるのは分かってるしな」

「既に調教済みですと!？」

「何してるのよ!先行くわよ!!!」

「まあ、今は先行くぞ」

「はい……／／／」

先に行っていた皆と合流してから続きを話します。

「図書館島を調査するため、麻帆良大学のい提唱で発足したのが、私達麻帆良学園図書館探検部なのです！」

「中・高・大の合同サークルなんや」

「サークルというか部だな。予算申請もあるしな」

「そうなんですね。それにしても、本がいっぱいホントに凄いでしょ！」

ネギ先生はおおはしゃぎですね。その気持ちは良く分かります。10Mくらいある空間に見渡す限りの大量の本棚に納められた本達が見えるのですから。しかも、木や、滝まである意味が分からない空間ですね。

「ここが図書館島地下3階。私達中学生が入っているのはここまでは」

「ほらほら、アスナさん見てください。こんな珍しい本が沢山ありますよ！これなんか……」「あつ、先生。貴重書狙いの盗掘者を避ける為に……」

ビュン！

「うひゃ！？」「おっと」

シオン先生が矢を止めて、楓さんがネギ先生を射線上からどかしましたね。

「ワナがたくさん仕掛けられていますから気をつけてくださいね。」

ちなみに、まともな図書館は地上部分だけです」

「えええええ！？」 「嘘ッ！？」 「ホンモノでしょ死ぬわよ！？」

「しかし、我々には行かねばならない理由があります」

「「うっ」

ふっ、ちよろいです。おっと、のどか達に連絡しなくてはいけませんね。

「こちら夕映。地下3階に到着したです」

「（地上班：ハルナ）了解、がんばってネ」

「了解」

地上班はハルナとマドカです。ネギ先生とアスナさんが何やら内緒話をしています・・・マドカのためにも気になりますが、今はおいておきましょう。

「ねえ、夕映ちゃん。あとどれくらい歩くの？」

「はい、内緒で部室から持ってきた地図によると・・・地下11階まで降りて地下道を進んだ先に目的の本があるらしいです。往復でおよそ4時間。今は、7時ですから・・・11時には帰れますね」

「ちゃんと帰って寝れるんですね」

しかし、この地図は怪しいのです。どうぞ持って行ってくださいって感じで部屋に置いてありましたから。

「夕映」

「なつ、なんですか先生？／＼／」

私の頭の横から頭を出して、地図を覗き込んできました。

「そんなルート通るよりもっと早いルートがあるぞ」

「え？」

「このルートを通れば1時間だ。ただし、ワナは結構危ないがお前達なら平気だろう」

「わかりました。では、それで行きましょう／＼／」

特に考えもせず答えてしまいましたが……大丈夫ですよ？

シオン先生の言うルートを先生の先導の元通って行くんですが、まるでワナがそこにあるのが解っているように忠告してくださいます。それでも、掛かる人はいますが……バカレンジャーの身体能力は可笑しいのでどうとでもなっているんです。特にユーフィーの身体能力がおかしいです。助走や器具無しで10M以上を軽く飛び越えられる身体能力は異常です。楓達も大概ですが。

「よし、ここを渡れば休憩所だ」

「シオン先生。渡ればって……100m以上離れてるんだけど?」

「これは無理でござるよ」

「そうアルね」

皆の言っている事は当然です。100M先に明るい道が見えますが、それまでに200〜300Mもの深さがありそうな場所を飛び越えると言われていたのですから。いつてしまえば崖ですね。

「うむ、何も問題は無いが……全員一列になれ。ネギ君が先頭だ」

「え!?!」

「ちよ、今のネギに無理よ!?!」

「大丈夫だ!」

「うわっ!?!」

ネギ先生をシオン先生が放り投げたです。普通は落ちるはずなんです、そこに床があるかのように止まっています。

「す……すごい、僕浮いてます!?!」

「いや、立ってるだけだからな?」

「見えない床？」

「ああ、実際は見えない様になっただけで道が続いている。ネギ、杖で床を確認しながら帰って来い」

「はい！」

ネギ先生の足取りに淀みはありません。それにしても、シオン先生は凄いですね。あの設計図にワナの類は載っていなかったのに。

それから、ネギ先生の先導の元見えない床を進むと食事を取れるスペースに着きました。

「ここで食事だな」

「やっと夕食アルね！」

「お腹空いたわね」

「すぐ準備するからな」

「手伝う」

「うん」

シオン先生と木乃香が二人仲良く、テキパキとお弁当を広げ、飲み物を用意していきます。スペック高すぎです！

「……………いただきます……………」

「お、コレ美味しい」

「ポテチいる人〜？」

どうやら今回は普通のようですね。あれは、気をつけなければいけません。しかし、あの設計図はやっぱり欲しいですね。しかし、代価が私自身ですから・・・非常に悩みます。とりあえず、このカツサンドでも食べてみましょう。

「んっ!？」

外はサクサクで中はとろける濃厚な味わい。さらに、ソースがアクセントとしてさらに味の深みを増す・・・いったい何の肉を使ってるんですか!〜くっ、手が止まりません。

「夕映、どうしたアルか？」

「なっ、なんでもありません」

「そうアルか」

どうやら、他の人は気づいていないようですね・・・今の間に・・・あっ、ちゃっかり木乃香は確保していますね。なら、私も確保するです。ああ・・・この料理が食べられるなら別になってもいい気が・・・だっ、ダメです!これが、胃袋を握られる感触・・・お、恐ろしい。

「美味しいか？」

「はい、とっても美味しいです(はむはむ)

「デザートもあるんだが……いるか？」

「ください!？」

即答してしまいました。もう、ダメかも知れません。

「ほら、あ〜ん」

「うっ……／＼／＼」

「いらないのか？」

くっ、恥ずかしくてそんな事は出来ません。しかし、身体の震えが……止まらないです！

「……」

「いらならうちがもらっ」

なっ、木乃香！

「あ〜ん」

「ほら、美味いか」

「美味しいわ〜」

くっ、この泥棒猫!？ずるい、あれ私の!？はっ、何を……ダメだ、木乃香の口の中に消えていくゼリーのよ様な黄色いデザート

ト・・・・・・・・食べたい。

「ほら、夕映。無くなるぞ?」

「あつ、あゝん」

「いい娘だ」

ああ、口の中に広がるすっきりしているが奥深い味わい。それにほのかに香る甘い匂い。舌の上から溶けて無くなって行く、冷えたゼリー・・・・・・・・もつと欲しいです。

「もつとください」

「いいぞ」

「はっ、私は・・・・・・・・」

「あ、気づいた」

私はどうやらシオン先生の膝に頭を乗せてご飯を食べさせて貰いながら、さらに頭を撫でてもらっていたようです。とても気持ち良いですがやっぱり恥ずかしくすぎます。

「あの、すみません／＼／」

「気にするな」

「そうそう、とっても可愛かったえ夕映」

「うう／＼／／」

恥ずかしすぎて顔を見られません。あ、やっぱり木乃香がいいからあの提案は良いかもしれませぬ。身体をあげるだけであの料理を食べられるなら良いかもしれぬ……うん。

夕映 Side Out

シオン Side

食事を終えて先に進めば、本棚に囲まれた部屋に着いた。部屋の中央には台座があり、台座の上に一冊の本。その両サイドにハンマーと大剣を持った石像があった。

「す、すす、すごすぎるーっ!？」

「私こーゆーの見たことあるよ。弟のPSで」

「ラスボスの間アルー」

ラスボス? いや、爺の間だろう。

「とつとつ着きましたね。魔法の本の安置所です」

「ははは……こんな場所が学校に……」

夕映はじーんと感動を噛締めていて、アスナは呆れているな。二人の気持ちは両方理解できるけど……答えを知っている身としては微妙だな。

「見て！！あそこに本が！！」

「！？ あっ・・・あれは！？」

「どうしたのネギ！？」

うわっ、マジで本物だな。爺・・・・・・・・正気か？

「あれは伝説のメルキセデクの書ですよ！！ 信じられない！！
僕も見るのは初めてですよ！！」

いや、世界中の魔法書をガキが全部見てるわけ無いだろ。というか、
見せない。

「なぜこんなアジアの島国に・・・・・・・・」

ここがこの世界の中心だから。

「てことは・・・・・・・・ホンモノ？」

「ホ、ホンモノも何も、あれは最高の魔法書ですよっ！ 確かにあ
れならちよつと頭が良くなるくらい簡単かも・・・・・・・・」

「えーホント！？」

む、袖を木乃香が引いているな。なんだろ？

「（お兄ちゃん、あれホンモノ？）」

「（ホンモノ・・・・・・・・魔法使いには喉から手が出るほど欲しい奴じ

「やないかな？」

「（そんなの読ませて大丈夫なん？）」

「そんなもの決まってるよな？」

「（無論）」

「ホツと胸を撫で下ろしている木乃香に真実を伝えてやる。」

「（大丈夫な訳が無い）」

「（えっ）」

「（高位の魔法書はその存在その物が魔法と言っている。つまり、適格者じゃない人間が読めば精神が病んで廃人か脳死だな。当然、高位の魔法書は暗号化されていてトラップも大量に仕掛けられているだろうよ）」

「暗号解読を失敗しても死ぬとか酷いよな？さすが禁書だ。」

「（止めないと！）」

「やったー！ー！ー！！！」

「これで最下位脱出よ！」

「あー、あたしもー」

「一番のリアル！」

「待つて、みんな!？」

馬鹿どもは祭壇前にある橋をダッシュで渡って行く。畏があるに決ま
つてるのにな。

「あんなに貴重な魔法書なんですから、ワナがあるに決まっています
から気を付けて!！」

ガコン

「きゃあああ~~~~~」

「いたー」

「わあ!？」

予想道理、橋が割れて落とされたようだな。

「いたた.....」

「え、何これ？」

「何つて、『英単語でTWISTER Ver1.0.5』って書
いてあるだろう」

「ツ・・・ツイスターゲーム？」

やっぱり爺は馬鹿だな。こんなトレジャーハンターなら楽勝だろう。
こいつらにはいいLvなんだろうけど。

「ユーフィーちゃん強いな〜」

「待て、待つんじゃない」

おっと、ゴーレム（爺）が命乞いを始めたぞ？

「お断りします!」

蹴りで上空にたたき上げ、自身もジャンプして回し蹴りを放ち、虚空瞬間を使い追い越してまた蹴る。その起動にそって長く青い銀の髪が揺れ動く。

「凄いアルね〜」

「で、ござるな……」

「戦ってみたいアル（でござる）」

あゝ、勝てないと思うぞ？人間とは超えられない壁があるからな。チート級じゃないと相手にならないし。

「ま……待つのじゃ……ルールというものが……」

「ユーフィーちゃん……聞いてあげようよ」

「そ……そうやな……聞いてあげよ?」

「聞くだけならタダですから!」

ネギもアリカの教育か……結構いい性格をしているな。

「皆さんがそういうなら構いませんよ？」

「ふお……助かった……コホン」

残ったのはハンマ を持った奴だけだな。

「この本が欲しければ……わしの質問に答えるのじゃー……
……「jee」……答えてくださいお願いします……」

「あ、気にしなくて良いですよ？どこかで感じた気配だと思っただけですから」

ユーフィーが手をぶんぶん振っているせいか、ゴーレムは警戒している。良い気味だ。

「まあ、色々いい事もあるけどいいです。質問をツイスターで答えればいいんですか？」

「そうじゃよ」

「解りました。では、皆さん頑張りましょう！」

「「「「お〜！」「」「」

「あつ、教師二人と黒髪の子が教えるのは禁止じゃぞ」

これも意味分からんよな？なんで生徒にやらせる必要があるんだよ？おっと、今の間に隠れておこつ。

「では、第一問『DIFFICULT』の日本語訳は？」

「ええー何それー」

「んー、難しいです！」

「だから難しいって……」

「いや、それが答えですよアスナさん！」

ユーフィーはこの変が分かるんだな。

「まあ……今回はよかろう……」

「難しいでいいのね？」

「あつ、でも……ツイスターゲームなら出来る限り短い方がいいですよ？」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

さて、ここからなんだが……そうだが、いいことを考えた。

「ネギ先生」

「はい？」

「君が効率よく指揮するんだ。いいね？」

「はい！」

「第二問『CUT』の日本語訳は？」

うん、さすが天才。効率良く配置を変えたりしているな。

「ネギ君、二人分の手を置いて押さえてからなら入れ替えるのはいけるえ」

「解りました！」

「ふえ！？」

これでエロ爺の欲望は防げるな。

それからしばらくして……結局こうなった。

「アスナのおさるル~~~~~!!!!!!」

「いやあああああ~~~~~!!!!!!」

「ふおふおふお！」

皆が落ちて行くが、ユーフィーがちゃんと回収してくれるから平気だろう。こっちはメルキセデクを頂こうか。

「森羅」

「えっぎゃあああああ!!!!!!」

ゴーレムを細切れにしてメルキセデクの書を確認する。

「よし、やっぱりホンモノだな」

「か、返すんじゃない……」

「ヤダ」

残っていたゴーレムの頭を踏み砕いてから、穴に飛び込んだ。

下は地底図書館。床が水に沈んでいて世界樹の枝が多数存在している。保護魔法を掛けられた本が無秩序に本棚に納められ放置されている。中には水の中にも存在するが、まったく問題は無いくらい保存状態は良好だ。というか、人口の滝や館などの人工物まで多数存在しているからな。

「おそかったですね」

「お兄ちゃん、こっちは終わったよ」

「ああ、お疲れ様」

ユーフィーが悠久を出して回収したようだ。二人以外は全員が気絶している。ネギはアスナに抱きしめられているし。

「木乃香とユーフィーは回復を頼む」

「うん、汝が為に（トウイ・グラーティアー） ユピテル王の（ヨ
ウイス・グラーティア） 恩寵あれ（シット） “治癒”^{クイラ}」「マナ
リンク」

二人の治療により全員の怪我は無くなったな。

「さて、あそこに見える館まで移動するぞ」

「はい（うん）」

全員を館に運び込んでから食料と教材を探して即席の青空教室を作り上げた。寝る場所は館でいいだろう。原住民のオカマ野郎にはご退場願った。うん、俺の土地だし問題無いな。

シオンSideOut

ネギSide

「JJJは……」

「起きたか」

「そうだ、落とし穴に落ちて……アスナさんに抱きしめられたら何かの光に触れて気を失ったんだ。」

「シオン先生？皆は！！！」

「皆は無事だ。外で朝食を取っているから行くぞ」

「はい！」

「みんな無事でよかった……それに、ここはどこだろう？」

「ここは地底図書館にある館だ」

「へ」

外に出ると幻想的な光景が広がっていました。

「凄いです!」

「あつ、ネギ君!」

「ネギ先生!」

「皆さん、大丈夫でしたか!」

見た感じ誰も怪我が無くてよかったよ。

「大丈夫よ。むしろアンタの方が心配ね」

「そやな」

「す、すみません……」

それから、皆さんとご飯を食べました。キッチンまであるなんて不思議すぎます。

「さて、これからどうするネギ君?」

これは試されています……普通は、出口を探すんですが期末試験もあるし……そうだ。

「僕達は期末テストに向けて勉強します」

「……ええ……!」

「その間にシオン先生は出口を探して置いてください。木乃香さん

は食事をお願いできますか？」

「ええよ。お兄ちゃんもええよな？」

「ああ。それで問題無い。昨日のうちに勉強する用意も出来ている。手際いいですね。．．．．何者なんでしょうか？それに、ユーフオリアさんも凄く強いですし。．．．．シオン先生は恐らく魔法先生でしょうけど。．．．．リリがパパといっくらいですし、この学園の理事長なら魔法の事は知っていて当然だと思います。だから、探索は任せて問題無いですね。もう、出口もわかっているかも知れませんが、それを言わない理由は恐らく、この環境が勉強にうってつけだという事だと思います。」

「では、朝食後さっそく勉強をしましょう。」

「．．．．え．．．．」

「ネギ君、こういう連中は物で釣るんだ。」

「ヒドッ！」

「そうですね。母さんもいつてました。頑張った者達に褒美をやるのは、士気だけでなく関係を保つ上でも重要だと。物．．．．じやあ、がんばった人には学食で何かを奢りますね。」

「．．．．やった、がんばるよ！．．．．」

具体的に何をあげるかなどの明言は避けたほうがいいって母さんが言っていましたからこれでいいですね。今の状況だと給料がどうな

るかわかりませんから。

ネギSideOut

桜花Side

さて、2-Aに行くかの。無論、我も教員免許は持っておるぞ？シ

オンと共に取ってある。

「何ですって！？ 2-Aが最下位脱出しないとネギ先生がクビみ
~~~~~!? ど、どーしてそんな大事な事を言わなかったん  
ですの桜子さん!?」

「だって先生に口止めされていたから……………」

「とにかく、みなさん！ テストまでちゃんと勉強して最下位脱出  
ですわよ。そのへんの普段マジメにやってない方々も！」

あははは、ご主人様は本気じゃからな。

「げ……………」

「仕方ないな〜」

「特に赤点ギリギリ狙っているレンさんとエヴァンジェリンさんも  
ですよ！」

「「面倒」」

「うわ、シンクロしてるよ……………」

あの二人は昔から仲が良いからなの。こっそり教室に入ったが誰も  
気付いてないの。

「二人共!！」

「お姉ちゃんもママもネギお兄ちゃんの為にお願い!！」

「仕方ない」

「早っ！」

「って、ママ！！」

普通は驚くの……えっと、授業の変わりには音楽と英語じゃな。うん、問題無しと……期末範囲も網羅しておるしの。

「みんなー大変だよー！？」

「うええええっ」

「ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に……！！！」

「え……」

このタイミングじゃな。

キーンコーンカーンコーン

チャイムもなつたからの。別にチャイムに邪魔されたわけじゃないんだからの！！

「こほん、ほら、席に着くのじゃ」

「……あれ？誰……可愛い」

「む……？」

「桜花……元の姿のままだぞ」

エヴァの忠告を考え姿をみると……変身しわすれておった。

「いいから席に着くのじゃ!!」

少し殺気を込めて命令すると全員が大人しく席に座った。まあ、エヴァとレンは元から座っているからだがの。

「シオン達は無事じゃ。期末テストまで向こうでバカレンジャーズを徹底的に鍛えるそうなので、期末テストまでネギ先生とシオン先生の代わりにこのクラスの授業を受け持つことになった桜花じゃ」

「……ええええええええ!!!!」

「五月蠅いの……」

「桜花さんってモールの人じゃ?」

「でも身長や年が……」

もう面倒じゃ、バラスかの。

「とう!」

煙球を床にたたき付け、発生した煙の中で千変万化を使用し姿を変更する。

「この通り、変装術は得意なのじゃ」

「凄い！！！！」

「声まで違う！」

ボン！

「本来の姿はこっちじゃが、主等の倍は生きておるぞ？」

本来は倍ですまぬがの。

「さて、HRを開始するのじゃ！！！！」

騒いでいるのを無理矢理収めてHRを始める。真名や刹那は理解しておるし、エヴァやレンも大人しく聞いてくれる。よし、こやつらは適当に鍛えて、リリをメインにみるかの。え？公私混同？娘のほうが大事にきまっておろう！



ネギSide

あわわわ、眼前にアスナさんの顔が……なぜか胸がドキドキしてくる!!

「ほら、オデコ……」

「あう……」

みんなが水浴びしてて、逃げた先にアスナさんが泳いでいて……  
・・なんでこんな事になってるの!!!!

「キヤーーーーーッ!!!!」

「大変やアスナーー」

「どづしたのこのか!?!」

急いで引き返すこのかさんの後を追って行くと、ゴーレムに捕まっ

た佐々木さんがいた。

「誰か助けてー！ー！ー」

「またあのでかいの！？」

「動く石像ですよアスナさん！」

「あれ……なにか変じゃない？」

「………ツギハギだらけ？」

ゴーレムにはまるで、糸で縛った上に接着剤で無理矢理くっつけた様な跡が沢山あった。

「く、いくらなんでも僕の生徒に……魔法の………だめだ！まだ日にちが………そうだ！」

「ふお？」

「来いカー君」

「きゆる！」

身体の中から緑色の小さなカーバンクルが出てくる。カーバンクルは魔法反射の力を持つと言われる伝説上の生物なんだけど………父さんが僕にくれた大切な子。しかも、この子は特殊みたいなんだ。

(画像はFF8参照)

「行け、カー君！！」

「可愛いー!!」

「ちよっ!?!」

「きゅー!!」

カー君が中ると同時にゴーレムの動力部のベクトルを変更して内部に向けた。すると、すぐに臨界点を超えて爆発する。今度は爆発のベクトルを変更してゴーレムに集中させる。するとゴーレムは自爆したようになる。佐々木さんへのダメージも一切ない。

「クーフエさん、楓さん!」

「OK!バカリーダー!」

「え?」

クーフエさんがゴーレムの破片を素手で碎き、長瀬さんが碎かれた破片を足場に使い佐々木さんを救出した。

「すごい……」

「おい、こっちだ!」

「シオン先生!」

「そいつの相手は任せて滝の裏に行け!」

「はい」

後を振り向くと新たなゴーレムがこっちに向かってきていた。

「大丈夫なの？」

「お兄ちゃんなら大丈夫やで（マスターなら大丈夫）」

「そ、そう？」

「アスナさん、みなさん早く！」

滝の裏には非常口に埋め込まれた問題がありました。意味わからないよ！

「むむ……答えは「red」ね！」

ピンポーン！

どうやら、正解すると扉が開く仕掛けみたいです。中に入ると中は螺旋階段になっていました。

「登るでいじめる」

「部活よりきついよ！」

「皆さんは先に行ってください」

壁をつき破って別のゴーレムが現れた。

「大丈夫なの？」

「これくらいなら平気ですから」

「すみません、お願いしますユーフォリアさん」

「はい」

そう言ったユーフォリアさんの手には機会仕掛けの槍が出現していた。魔力は感じないから科学ですよ？科学って凄いです。

「行くよユー君！プチニティーリムーバー！」

槍の先端が光る大剣となりゴーレムを紙のように切断して行く。

「凄いやアルな……ハカセとチャオの開発アイテムアルか？」

「可能性はでかいですね」

「いいから早く！」

ゴーレムは次々と出てくるようです。しかし、ユーフォリアさんの敵ではないみたい。これが本物の力……いつか僕もあれぐらい……ううん、もっと強くならなきゃ！

少ししてエレベータに到着しました。中で待っていると槍に跨ったユーフォリアさんとシオンさんが現れました。槍って浮くんですね。

「おい、きりが無いからとつと逃げるぞ」

「あははは、ミニオンが出てくるとは思いませんでしたね」

「どつとでもなるが、面倒だしな……………乗ったか？」

「はい」

確認すると、皆さんちゃんとエレベーターにのっています。でも、重量オーバーです……………どうすれば……………ここは役に立ってなかった僕が……………。

「なら、上がるぞ」

ガンつと操作パネルにナイフを突き刺すと、エレベーターが浮上していきました。

「……………何で!?」

「これ、神鳴で開発したハッキングツールなんだ。刺すだけで電子機器なら自由自在だ」

「便利〜〜」

「(神剣ですよね?)」

「(神剣やな。しかも、実際は重力制御で無理矢理あげてるだけやろ?)」

「(間違い無くそうですね)」

「（トリックはバレナキヤいいんだよ）」

なにかこそ会話していますが、すぐに地上に着きまして。

「わっ、まぶし！」

「外に出れた~~~~~!!!」

それから一旦解散して皆さん、徹夜で追い上げをしました。僕とシオン先生は交代で教えながら仮眠を取りましたけど。

「花の香りよ（フラーグランティア・フローリス） 仲間に元気を  
（メイス・アミーキス・ウイゴレム） 活力を（ウィーターリタ  
ーテム） 健やかな風を（アウラーム・サルターレム） r e f <sup>レフエ</sup>  
<sup>クテイオー</sup>  
e c t i o」

テストでは花を触媒にして、気分をリフレッシュさせる魔法を使い、皆さんを支援しました。テスト事態はシオンさんと僕が採点して集計すると、なんと驚いたことに一位でした。みなさん本当にかんばってくれました。そのおかげで、正式採用になりました。みんな、ありがとうございます。正式採用が決まった後、約束どおり食堂で2・Aのみなさんとパーティーを開きおはしゃぎしました。母さん、父さん、僕は日本でこれからもがんばって行きます。

ネギSideOut



図書館島探検部（後書き）

エクスリリアが発売また遅くなりますが、明日更新します。

## 夕映と愛衣

### シオンSide

期末試験が終わり、解散させられたクラスもあつた。2 - Aには解散では無く、飛び級で佐倉愛衣がやって来た。まあ、狙ったんだがな、ちよつと教えた魔法や技法がたくさんあるからな。魔法生徒だから引き込むには問題無いし………。箒の神剣つて面白く無い？面白いに決まっている！京都に行ったら犬も魔改造し

なくてはな。

さて、合唱コンクールも無事優勝で終わり、クラス全員で北海道の山中にある里に来ている。ここは雪女の里……。雪奈と刹那の故郷だな。温泉など完備しているので十分だし、現在ではリゾート施設の一つだ。といっても、VIPのみなんだがな。

「僕、スキーって始めてです!」

「リリも」

「お子様達は元気ね……………」

「アスナはしんどうそやな?」

「そりゃ、ネギのはしゃぎっぷりのせいだね」

昨日の晩は凄かったみたいだな。ネギとアスナは部屋割り的には別になってるんだが、みんなで夜どうし遊んでみたいだ。俺は別のところにいたから知らんがな。一家団欒してたぞ。

「シオン様、お久しぶりです」

「雪奈か」

「……綺麗……………」

「当主様……………」

雪奈も綺麗な人になっているな。25歳くらいか?白銀の髪の毛に

白い着物はやり過ぎだろう？そして、刹那がガタガタと震えている。

「皆様、ようこそお越しくございました。どうぞゆっくりしていただくさい」

「……………はい……………」

元気だな。呆れてる奴等も何人かいるしな。

雪奈に案内されたの大きく豪華な旅館で、内装まで金をかけているしサービスも行き届いている。氷の彫刻とかが多数置かれているし、氷でできたアスレチックとかまである。

「部屋割りも含めて適当に二人一組を作るからな」

「……………はい……………」

エヴァは茶々丸と、刹那は真名と、木乃香はアスナと、ノドカはクーフエと、リリはユーフィーと、夕映は愛衣と……etcとなった。ネギと俺は一人部屋だ。ああ、良い忘れていたが、従業員はどれも綺麗所だ。

案内された部屋も豪勢で、明らかに学生が泊まるような場所じゃないが気にしない。温泉もレジャー施設のような豪華設備だしな。

「シオン様、刹那はどうですか？」

「護衛としてはダメダメだな。木乃香を避けてる部分があるし、実力はまだまだだからな」

「では、鍛えなおしましょう(にこり)」

おおう、部屋の温度が0 を下回ってきたぞ？

「なら、同室の真名も連れて行って鍛えてくれ」

「大丈夫ですか？」

「俺の眷属だからな。平気だよ。寒中戦闘も覚えさせたいからな」

「はい……では、お任せください。あと、山を越えた向こう側に魔物が出るとの噂が御座いますから生徒の方々が行かないよう注意してください。我々が行っても姿を現さないので倒すことが出来ていません」

この子達にはそんな技術が無いからな………待てよ？  
魔眼ならみつけられるんじゃないか？

「真名……同室の子が魔眼を持っているから視付けられるかもしれないから、一緒に処理させるか」

「はい。お食事の用意も出来ていますので食堂の方へどうぞ」

「ああ」

とりあえず、二人の戦闘訓練だな。その後、生徒達に熊が出るので危険な場所には近づかないように注意したんだが………

聞いてるのか？

「何、この豪華な料理の数々は……………」

「食べて良いの？」

「本当にタダなの…！」

「もう、食べるアル！」

「皆さん、落ち着いてください…！」

「賑やかですね……………」

「2・Aではこれが普通です」

「どうもこいつも聞いてないな？OK、もう知らん。

「よし、食べて良いぞ」

「……………よしや……………！」

「本当にバクバクと食べているな。

「おい、シオン。飲むぞ！」

「まあ、いつか」

「お兄様……………」

「そうそう、飲むのじゃ」

いつの間に着たんだ桜花・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、いいや。盛大に飲むとしようか。

「ノンアルコールもあるな」

「パパ、伊勢エビ美味しいよ」

なんとというか、満干全席などの古今東西の料理があるな。儲け出るんだろつかここは？

「神鳴流の訓練地でもあるし、何より食材はお主の別荘から直輸じやからの。利益しか生んでおらんよ」

「そりゃ、VIPどもに人気が出るはずだな・・・・・・・・・・茶々丸、次をもつてこい」

「はい・・・・・・・・・・どうぞ」

エヴァは茶々丸にお酌をさせながら寿司や刺身を摘んでいるな。

「アスナさん、これとても美味しいですね!!」

「そうね・・・・・・・・何の肉なのかしら？」

「（魔力まで回復している気がします・・・・・・・・・・）」

「どうした刹那？」

「当主から私と真名の訓練を行うとさつき連絡が来た。最後の晩餐になるかもしれん……………」

「それは……………しつかりと食べておこつ」

「ああ」

「一部へんな会話があるな。」

「がんばってくださいね」

「「お前も来い!!」「」

「それはいいですね」

「えっ!? 雪奈さんいつのまに……………ほら、私と君には訓練は必要ないよ?」

「ね、リリちゃんもそうだよね!」

「リリは面白そうだから参加したいの」

「「来い!」「」

「うっ、リリちゃんはバトル好きでした!」

「では、四名ですね(ニ)リ」

まあ、大丈夫だろう。あそこにまともな人間はいないしな。半妖、元半魔族の吸血鬼、生まれながらのエターナル、龍神の血を引く生



まねながらの真祖であり半エターナル……うん、全然問題無いな。

「くつくく、面白くなってるじゃないか……桜花、お前も鍛えてやったらどうだ？」

「ふむ、なら茶々丸も混ぜて教官は三人でどうかの？」

「えっ？」

「……修理は……私がする……」

「教官が4人で生徒が5人か……」

なんか、訓練の密度が馬鹿みたいに増えているな？

「どうせなら木乃香も混ぜてやれ」

「なんや、すぐここから逃げないと大変なことになりそうな気がするえ」

「しかし、贅沢な環境だな」

「まあ、本気でやるかの。蘇生はレンと木乃香に任せればよいしの桜花、字が違うどころじゃないだろ！」

「まあ、どうでもなれ……」

それから、カラオケ大会やバンド、隠し芸大会など色々やりつつ夜

が更けていった。

シオンSideOut

愛衣Side

言われた通りテストにがんばってみたら飛び級してしまいました。そして、連れて行かれたのが音楽コンクールと豪華な旅館……。確かにいい事かも知れませんが姉様と同学年になったせいで姉様の機嫌がすごく悪くなってるのが難点ですが……。せつかなので楽しみましょう。

旅館に付いてから、早3日がたちました。その間に同質の夕映さんとも仲良くなりスキーなどを堪能しました。今日は、山頂の方に来ています。

「夕英さん、ここになんの用なのですか？」

「ここ近くに秘湯があるらしいのです」

「そうそう、ぜひ入りたいよね」

「……………ここまで来る必要は無いとは思ってますが……………それに熊が……………」

そういえば言っていましたね。熊ならどうにかなると思いますし。

「まあ、大丈夫よ!」

「そうです!」

メンバーは私と夕映さん、ノドカさん、ハルナさんです。

「んじゃ……………」

コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ  
コ

「すごく嫌な予感がするんですが?」

「う…………後ろ…………」

後ろを振り向くと白い津波が押し寄せてきました。

「……………きゃ……………!!!」

その後、私達は意識を失いました。

シオンSide

愛衣SideOut

さて、雪崩が起きて大変な事になった。原因はわかりきっているがな。目の前で正座しているエヴァ、桜花、レン、リリ、ユーフィ、刹那、真名、木乃香、茶々丸、雪奈。

「で？」

「ちょっと訓練で調子乗りました……」

「ちょっと？」

「たくさん……」

雪崩の原因は簡単で、こいつらが訓練に熱を入れすぎただけだ。

「確認終わりました！！！」

「どうだったネギ君？」

ネギには生徒達の所在確認をさせていた。

「先生！三人が！！！」

「ハルナさんが言うにはノド力さんと夕映さん、佐倉さんが雪崩に巻き込まれたそうです！」

「私ははじかれて助かったんだけど三人が……」

三人だけ行方不明か……愛衣がいるなら生きてはいるだろう。まあ、とっとと救助に向かうとするか。

「ハルナは休んでろ。後はこつちでやる」

「えっ、わたしも……………zzz」

面倒なので眠っていただいた。ここからは魔法の時間だ。

「さて……………アクセス……………」

生徒達に持たしている学生手帳にはサーチャーを仕掛けてある。ついでに言つと、生体情報の登録もしてあるのでどこであるつと所在が解る。当然、違法だがな。

「ふむ、生体反応に問題は無いな……………木乃香、リリはハルナを連れて行け」

「うん」

ハルナは二人に連れて行ってもらつたし問題ないな。

「さて、敵の出現域に生体反応があるんだ。だから急ぐぞ。ネギ君は一つだけ離れているノドカを助けに行つてこい。残り二人は俺が行く。残りは山狩りだ」

「……………うん！……………」

「分かりました。そつちは、お願いします！」

ネギはノドカの間所を聞いたら直ぐに飛び立った。というか、全員嬉々として出て行つた。そんなに説教が嫌だったか。しかし、4人

の願い事は聞いてやらないとな。

「さて、俺も行くかな」

身体能力と能力をフルに使い二人を目指し出発した。

シオンSideOut



私達は暗い森の中を走って逃げています。私達の後ろには黒いオールのような不気味な物を纏った熊が多数こっちを追ってきている。

「魔法の射手16本！」

愛衣の手を引いて私が先導している。愛衣が魔法に専念するため仕方ない。今は混乱する頭を無理やり押さえつけて冷静になっているだけです。最初は取り乱しましたが愛衣のお陰で落ち着けたため、生き残る為に必死で走っています。

「まさか、愛衣が魔法使いだっただなんて……いいえ、そもそもこの世に魔法があるなんて思っても見ませんでした」

「秘匿していますから………すみません、私の力が足りないために逃げなきゃいけないなんて………」

「気にしなくていいです。私だけならすでにあいつ等に食べられてしまっているでしょうから」

ノドカやハルナが心配ですが、私達が引き付けておけば二人はきつと無事でしよう。

「先生達がきつと助けてくれますから」

「そうですね……それまで生き残りましょう」

しかし、このままではギリ貧ですね。シオン先生とネギ先生が来るまで持つとは思えませんね。あれは岩……そうです！

「愛衣、前方の岩に魔法を！」

「はい！」

私達が横を通り過ぎたと同時に愛衣が魔法を放ち、岩盤を砕いた。そして、落石を引き起こし追って来た熊に激突していった。

「はあはあ、これで大丈夫ですね」

「はあはあ……だといいですけど……もう、魔力もありません」

熊のような物体は液状になり岩から這い出てきた。そして、元の姿に戻った。

「スライム？」



そして再度、目の前に熊モドキの爪が迫った時、数々の剣が熊モドキを突き刺した。

「2人共無事か？」

「先生！」

私達の目の前には予想通りシオン先生が現れました。

「無事とはいえません……………」

「命もかなり危ないですね……………」

「そうか、なら……………こいつらには消滅してもらうかな。2人共ここで見ている……………本物の力で敵を滅ぼして治療してやる」

「はい」

本物……………あまり私達と歳が変わらない先生の力はどんなものでしょうか？私は激痛に耐えながらシオン先生を見ている。

「百重千重と（ヘカトンタキス・カイ）  
アストララサト 重なりて（キーリアキス・  
キリブル・アストラペー）  
走れよ稲妻 千の雷！！」

先生の呪文が完成すると同時に轟音とともに数々の雷が降り注ぎ熊モドキを焼きつきしていきました。凄い光景ですね。人為的に雷の嵐を起こすなんて現実では考えられません。

「ふう、生きてるか？」

「・・・・・・・・・・」

もう、しゃべる元気もありません。

「ちっ、出血が激しいな・・・・・・・・・・生きたいよな？」

「・・・・・・・・・・（こく）」

何を当たり前な事をいつてるんでしょうか？

「まあ、いいや。今回は完全にこっちの落ち度だからな。俺の物になるなら、蘇生に加えて特別に力もくれてやるけどどうする？」

力・・・・・・・・・・欲しいですね。あの美味しい料理も食べたいですから・・・・・・・・・・それに、真理に近づける気がします。なら、迷う事はありませんね。

「・・・・・・・・・・お願い・・・・・・・・・・します・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・私も・・・・・・・・・・力が・・・・・・・・・・欲しい・・・・・・・・・・です・・・・・・・・・・」

「OK、任された。まず用意するのは二振りの神剣・・・・・・・・・・これを叩き込む。あっ、痛いけど我慢しろよ！」

「「っ!?!?」「」

私達の心臓に光り輝く剣が突き刺さり、剣がみるみる沈んでいく。それと同時に激痛が襲ってきますが、不思議と握った手から暖かい

感じがして力を与えてくれるのか耐えられます。

「さて、第二ステージは傷の修復っと」

「「っ」」

首筋にシオン先生が噛み付いて……これは牙？何かが私の身体の中に入ってくる感じがします。シオン先生って吸血鬼だったんですね……身体中が暖かくなり、少しして私達は意識を失いました。

夕映 Side Out

夕映と愛衣（後書き）

さて、二人を吸血鬼化するかは悩み中です。  
たぶん、半になるか・・・未覚醒状態になります。

感想お待ちしております。

さて、明日はエクシリアやるぞ！



## 首だけノドカ

ノドカSide

私に気が付いたら辺り一面真っ白でした。

「うう〜夕映〜ハルナ〜愛衣〜どこにいるの〜」

今、私は雪の上に顔だけ出ている状態です。なんとか動けないか試しているのですが、どうしようも無いです…………ぐすつ、私はここで死ぬのかな？

「夕映達も無事ならいいけど…………」

その後も、叫んだりしたけど変化はありませんでした。

「やっぱり、ここで…………死ぬ…………ですね…………ママ…………パパ…………先立つ不孝を許して…………ください…………先生…………最後に会いたかったな…………」

そして、私の視界は真っ黒になった。



た。

「ひっ!?!」

殺されて食べられるを覚悟して眼をつむった。そして、シャアアという音とともに横に吹き飛ばされる様な感触がした。

でも、襲って来る痛い感触は無く、むしろ暖かくて抱かれている感触がした。

「えっ、ネギ先生?」

私はネギ先生にお姫様抱っこで抱き抱えられていました。

「遅くなつてすみません」

「あう、あう、その／＼／＼」

意識したら急に恥ずかしくなってきました。

「もう大丈夫ですよ。僕が守りますから」

「はい……／＼／」

ネギ先生はスノーボードを巧に操り熊から距離をとって行きます。ここに来てから練習したはずなのにもうプロみたいでカッコイイです。

「ネギ先生……夕映達は?」

「大丈夫ですよ。シオン先生から救助したと連絡がありましたから」

「よかった……」

「はい。宮崎さん？」

二人の無事を確認できて安心できたのか眠気が襲って来ました。

「んっ……」

「お休みなさい……後はお願い」

「はい」

そして、私は意識を失った。



## ノドカの魔科学手術

シオンSide

あれからネギ先生もノドカを救いだせたので、三人共無事(?)に保護で来た。だから、とりあえず旅館近くにある治療院に入院させて検査を行った。ノドカには一般検査をして、夕映と愛衣には特殊な検査をした。身体の安定とかがあるからな。

「夕映と愛衣の二人は問題無いですね」

「雪奈さん、宮崎さんはどうなんですか？」

「宮崎さんですが、全身に凍傷が起きています」

さて、どうするかな？とりあえず、三人のご両親には連絡を入れて現状を説明した。

「なら、魔法で……」

「駄目だ。ご両親に報告したから早すぎる治りは怪しまれる。これ（報告）は、教師として……いや、人として当然だから仕方ないがな」

「そうですよね」

「言われた通り、治療費とお見舞いに来るご家族の方々の航空券と宿泊費などは全てこちらで持つとはお伝えしました。実際、何名かは来るようです」

「会社の方も融通が効くように資金提供も手配したし、大丈夫だろう」

3人には悪いが2〜3週間は入院だ。特にノド力がだがな。

「魔法を使わずに行う治療は大丈夫なんですか？」

「（魔）科学で問題無く治療できるからな。むしろ、迷惑料として身体能力を上げてやるかな」

図書館探検部だし、運動苦手みたいだな。

「という訳で、3人はこちらでお預かりします。ネギ先生も連絡頂ければ何時でも起こしください」

「はい。ありがとうございます」

「ネギ先生は他の生徒達を帰してくれ。こっちはここで親御さん達の相手をするからな」

「わかりました。よろしくお願いします」

さて、とりあえずノド力を軽微の魔改造してから、三人にリハビリとか言って訓練させるかな。

シオンSideOut

1799

レンSide

お兄様に怒られた。ちょっと、青い眼の白竜を四十体を創成して、



刹那達を追い回しただけなんですけどね。

「いや、死にますから！」

「流石にあれは死を覚悟したよ」

「……良く言う……レールガン……500口径……撃ったから……雪崩起きた……」

私のせいじゃないよね？滅びのバーストストリームを撃つただけだから。

「むしろ、マスターが『こおるせかい』なんて詠唱したせいでユーフォリアさんとリリさんが止めるために、殲滅から離れたために起こる火力不足を補うために放ったんですから」

「……つまり……エヴァちゃんの……せいと……」

「おいつ！」

「まあ、訓練のお陰でアームズ（神剣）の力を予測以上に引き出せた事が原因だな。後で四人にそれとなく謝っておこう」

「……うん……」

それからみなでお見舞いに行つて謝つた。雪崩の理由は捏造しただけ。4人は簡単に許してくれました。ハルナさんは食券で、

他3人はしばらく美味しい旅館の料理が食べられるので。

ノドカさんには手術すれば確実に治るし、後も遺らないとネギ先生が説得してみたみたい。

21Aの皆は麻帆良に帰ってから数日後、ノドカの手術の日になった。ノドカは両親に見送られ手術室に入った。

「……あの……/ / /」

「気にするな」

お兄様は、ノドカを裸にして縛り付け、無理矢理麻酔を使い眠らせた。

「どつする?」

「もち、改造」

「わかった」

まず、私がノドカを魔法で空中に上げる。次にお兄様がノドカの焼けた皮膚を綺麗に全てを取り除いた。

「さて、次は色々施そうか」

「うん」

私が魔力をノドカに与えて、肉体内部を循環させる。お兄様が気を与えて循環させる。

「創世、馴染ませて作り替えて」

「アイアイサー！」

何十にも重ねた魔法陣がノドカの身体を作り替えて行く。気と魔力の両方を取り入れて生成される。

「量的には、メガロメセンブリアのエリート兵<sup>モウ</sup>クラスだな」

「弱いですけど、一般人には充分ですね」

「ああ、原作通りなら明らかに足りないだろうがな。まあ、保険はあるがな」

「保険ですか？」

「ノドカ用の神剣は既に用意してあるんだからな」

お兄様は一体何を用意したのかな？

「よし、培養槽に移すぞ」

「……うん……」

二人（三人）でノドカを培養槽に移して、身体能力を上げた状態で

皮膚を再生させる。

「後は、再生能力もいれておこうか」

「うん、時間あるしね」

それから、お兄様と一緒に時間をかけてノドカに色々施そした。そして、4時間後ノドカは完全に元に戻った。一応、神鳴財閥が開発したナノマシンによる最新治療といつてある。もちろん、実際に特許と認可はとつてあるよ。公開はしていないけど………再生能力はナノマシンによる力だから嘘は言つてない。

それから、病室に移り無事を確かめあつたようです。

「ノドカ………」

「よかった………」

「うん、ありがとうお母さん、お父さん」

他にもネギ先生や夕映達も来ている。お兄様は、落ち着いた両親などのご家族の人と会話している。

「はい、安定とリハビリのためにもうしばらくはこちらに居てもらうことになります」

「はい、よろしくお願いします」

一般人に出せる治療費（数億ドル）じゃないし、元以上に綺麗な傷一つ無い肌になったから信頼してこちらの言う通りにしてくれるらしい。私達は麻帆良に帰つて、お兄様と三人はリハビリと言つ名の

スパルタ（地獄の）訓練を行うらしい。三人共頑張ってね

Inside Out

## ノドカの魔科学手術（後書き）

ノドカはネギ君のヒロインにする予定です。当然、いどのえ日記も当然あたえます。

## リハビリという名の強化実験

愛衣Side

私達（私、夕映、ノドカ）は今雪山の山頂にきています。寒い雪の中、頑張つて下山しています。

「ノドカ、しっかりするです！」

「夕映……………眠いよ……………」

「駄目です！寝たら死にますよ！」

ノドカさんは既に眠そうです。それも仕方ありません。私達は既に吹雪の中、二日間歩き回っているんですから。

「はあああ、リハビリなのになんでこんな事に……………」

「先生は本当に容赦無いです」

「一応、これもリハビリなのかな？」

私達の身体能力はかなり上がっていました。吹雪の中、不眠不休で

動き続ける事ができるくらいには高い身体能力です。

「ノド……あつ、あそこに洞窟があるです!」

夕映が指差した方向には、確かに洞窟がありました。私達の視力なら、吹雪の中でも普通に見えます。(普段は数キロ先まで見えてしまいます)

洞窟は雪の中、大きな岩の裏に隠されていました。洞窟の高さと横幅は3メートルくらいで、奥深くに続いているようです。

「ここで休憩にしましょう」

「うん、お願い」

「ノドカは寝ていてください。私達が、火と食べ物を用意しますから」

「ごめんね……」

これは仕方ありません。私達(私と夕映)とノドカでは身体能力の差が激しいです。私達は半分闇の眷属で、体内に強力なアーティファクトが納められているんですから。

「愛衣、ノドカが寝ました。火をお願いします」

「うん。メイプル・ネイプル・アラモード 3柱の火の精霊さん、顕現してください」

私が呼ぶと、魔法の矢三本くらいの魔力で30センチくらいの火の



精霊さんが3柱、召喚に応じてくれました。本来なら、もつと長い呪文と大きな魔力が必要なのですが、シオンさんの眷属になってからはお願いするだけで来てくれます。本当は、呪文や発動キーすらいらぬみたいですよ。精霊さん達が自ら私に力を貸してくれます。こうなると、魔法学校で習った無理矢理使役（嫌だったのであまり使っていませんでした）するような事はできません。今までの事を謝ると、喜んでくれたのかかなり力を貸してくれるようになります。

「では、1柱借りますね」

「うん、夕映をお願い」

火の精霊さんは夕映の近くに行きました。

「では、行ってきます」

「お願いします」

夕映は枝と食料を探しに洞窟を出て行きました。簡易的な譲渡契約をしてあるので、火の精霊は力を使う時に夕映からも魔力を貰う事が出来ます。夕映自身はまだ魔法を使うことが出来ませんから、変わりについてる精霊さんが魔力を使って強力な魔法（無詠唱）を使うか、仲間の精霊さん達を召喚するなどしてくれるので、護衛としても優秀ですし、私とパスが繋がっているからここに帰って来るのも問題ありません。

「君はノドカさんと一緒にいて暖めてあげて」

精霊さんを1柱をノドカさんに付けて、私は洞窟の奥へ向かいます。

洞窟の奥は深く、私の身体能力（平均男性の数十倍）でも20分程かかりました。

そして、私の前には綺麗な4メートル四方くらいの窪みと少し前に死んだように偽装された血抜きされた熊の死体、放置された包丁や鍋などの調理道具が含まれたアウトドアグッズがありました。

「これって……明らかにシオンさん達が用意してますよね？」

スパルタなようで甘い所もあるんですね。もしくは、雪奈さんかな？そっちの方が可能性が高いです。

「ご丁寧に崩き片まで乗っている本がありますし、熊さんも可哀相だからいただきますし……うん……」

やっぱり悲しいし、恐いけど生きるために仕方ないよね。せめて、感謝していただきますし。

それから、ノド力をこちらに運んで熊さんを崩きました。一部は塩を付けて燻製にして保存食にします。水は綺麗な雪を火の精霊さんにお願いで溶かした後、水の精霊さんに人体に有害な菌を取り除いて貰い、沸騰させます。

「水の精霊さん、すいませんが窪みに綺麗な水貯めて貰えますか？」

水の精霊さんは沢山の窪みに水を貯めてくれました。飲み水もこれで大丈夫ですね。私と夕映は平気と思うけど、ノドカさんは人間だから気をつけた方がいいと思いますしね。

それから、木の実やハーブと一緒に熊の肉を炊いたスープを作りました。

「愛衣、こんな所にいたのです……か？」

「夕映、お帰りなさい」

「愛衣、これはなんですか？」

お魚と湿った枝を持った夕映が聞いて来たので、伝えてあげます。

「お節介というか、ノドカがいるから保険でしょうね。次は自分達ですっかりと用意しろということでしょうね」

「うん、私もそう思うよ」

夕映が取ってきた枝を使い火を起こします。そこに枝で作った串に刺した鮭（内蔵を取ってハーブなどを詰め込ん）を焼いて行きます。

「さて、完成ですね。ノドカを起こしますか」

「待つて、まだやる事があります」

「なんですか？」

「こうするのです。火の精霊さん、お願いします」

一番大きな窪みに溜まった水を精霊さんが沸かしてくれて、簡易的なお風呂が出来上がります。

「お風呂ですか！」

「うん、入りたいですよね？」

「当たり前です！」

「じゃあ、ノドカも入れましょう」

「うん」

二人でノドカを裸にして私達も入りました。少し恥ずかしいですが女の子同士なので平気です。お風呂に入っているとノドカさんも眼を覚ましました。最初は驚いていたけど直ぐに気持ちよさそうに入っていました。それからお風呂に入りながらご飯を食べました。それにしてもどうしてこうなったのかな？

一週間前

私達はシオンさんに呼ばれました。どうやら今日からリハビリを開始するようです。

「さて、まずはこの指輪を付けてくれ」

「はい」

綺麗な指輪ですが、なにか魔力を感じます。

「付けたな。なら、まずはランニングマシンで10キロだ」

「えっ！」

「やれ」

「はいつ!?」

私達は何故か逆らう事が出来ませんでした。ランニングマシンはどんどん加速していきます。しかも、シオンさんが手に持つてる鞭つてまさか……バシッ！ほ、本気みたいですよ！

それから三人共、必死に走りました。さらには、腕立て伏せに、ダンベルなど様々な運動をさせられました。全て終わる頃には最早立つこともできません。

「雪奈」

「はい、お任せください」

雪奈さん達に連れていかれたのはマッサージを行う部屋です。そこで私達はマッサージにより苦痛を伴う方法で身体を無理矢理柔軟に作り替えられました。

後は、美味しいご飯とお風呂でしたが、これが日に日に厳しさがま  
していきました。

「さて、今日はリハビリの最終試験だ」

「……はいっ！」「」

私達はどこから手に入れたのか、旧ドイツ軍……ナチスの  
SSの制服のような物を来ています。

「では、速やかにへりに乗れ」

この一週間……良く考えたら軍隊で受ける訓練を更に酷く  
したようなものでした。特に私は何故か兵器の勉強をさせられまし  
た。

私達は直ぐにへりに乗りました。へりは飛び立ち、どこかに向かっ  
ていきます。

「装備は確認したな？」

「……はい！」「」

パラシュートまでありますけど……まさか？

「では、Good Luck!」

「えっ？」

「「「きゃあああああ!?」「」」

後部ハッチが開いて、私達三人は空中に投げだされました。

「合格条件は五日いないに旅館に帰ってくる事だぞ〜!」

「いやあああああ!?!」

「落ち着いて下さい!パラシュートの準備を!?!」

「うんっ!」

今までの訓練の賜物か、いつでも冷静になれるようになりました。

着地は無事に成功。身体能力はかなり高いですから。

「さて、これからが問題ですね。食料は二日分しかありませんから」

「途中で確保だね」

二人ともたくましいです。

「では、頑張りましょう」

「「おー!」「」」

ということがありました。ご飯を食べ終えた私達は交代で眠り、体力を取り戻しました。

「あの、ソリかスノーボードを作りませんか？」

「・・・・・・・・それはいい考えです」

「うん！」

それから三人で木を削りソリを作りました。もちろん、精霊さんに強力してもらいました。

それからは、ソリに乗って山を下って行きます。コントロールは箒と同じで簡単です。

「そういえば、ノドカはネギ先生と進展ありました？」

「ふえっ!？」

「あつ、ノドカさんはネギ先生が好きなんですか？」

「そつ、それはその・・・・・・・・あう・・・・・・・・」

ネギ先生ですか、ライバル以前に英雄の息子ですから大変でしょうね。死と隣り合わせですから。

「ノドカさんはネギ先生のためなら本当に命を賭けられますか？」

「「え?」「」

「ネギ先生は特殊な生まれの方です。命を狙われる事だってあります。それでも、好きで一緒にいたいのですか？」



「愛衣っ!？」

ごめんなさい夕映。貴女は私に力が足りないばかりにこちら側に巻き込んでしまいました。だから、夕映は私が責任を持って守ります。でも、ノドカには手遅れになる前にしっかりと覚悟を持って欲しい。

「夕映、これは必要な事です」

「それは……………」

夕映も分かっているのでしょう。けど、感情がついて来ないのかな？

「……………うん、考えてみるよ」

「それにしても、普段はおっちょこちょいの癖に言うことは一人前です」

「あう」

「あははは」

二人共ひどいです……………私は人見知りなだけで、だから人前に出ると緊張して失敗するだけなんですよ!ほんとですよ!!

それから、私達は無事に到着出来ました。



## リハビリという名の強化実験（後書き）

愛衣の性格がかわってしまった。頑張っ  
て治します

京都は大変になりました。

シオンSide

訓練を終えて四人で帰って来たら何かな騒がしいぞ？

「何かあったのかな？」

「また2ーAが騒いでるだけでしょう」

「そうだと思うよ？」

ちょうど亜子が通りかかったので聞いてみた。

「何でもネギ先生はお嫁さんを探しに来た王子様らしいんです！ひよっとしてシオン先生も？」

「あゝ国家予算くらいの資金は確かに持つてるが……」

「……あるんですか！」「」「」

というか、一応天皇家の一員になるから間違っではないのか。軍

事力も馬鹿みたいにあるしな。

「まあ、王子云々はあってるぞ」

「えっ？」

「ただ、滅んだがな」

まあ、何時でもオスティアは復興できるんだがな。むしろ、管理は我々が行っている。

「そうなんですか……」

「まあ、恨まれたりもしてるから付き合う気なら命懸けだな。実際に何度か襲撃を受けたらしいからな。あっ、この学園は安全だから気にしなくてもいいぞ」

「はい」

後、諸注意事項を伝えてから別れた。

それにしても、嫌な予感しかしねえな。このタイミングで何かが起こったはずだ。流石に原作は覚えて無いからな。

「くそっ、なんなんだ？」

校舎の中を探している。

「あつ、お兄ちゃん!？」

廊下の億から黒髪で和服姿の可愛いらしくも綺麗な和服美少女がやって来た。

「助けて!？」

そして、飛び込むように泣きながら抱き着いて来た。

「木乃香か？」

「うん……」

「可愛いぞ。それで、助けてとは？」

「ありがとう／＼／＼ それでね、お爺ちゃんが勝手にお見合いを組もうとしてて……うちにはお兄ちゃんがいるのに……」

ほう、爺め。やってくれるでは無いか。

「木乃香お嬢様、お戻りください!」

「ヤダ」

俺の後ろに隠れた木乃香を守るために、黒服達との間に入る。

「木乃香お嬢様をこちらに渡してもらおうか」

「却下。そもそも木乃香は俺の婚約者だしな」

「なっ！」

「そつやで、うちはお兄ちゃんのモノや！」

「木乃香お嬢様！」

「まっ、そつという訳で解散しておけ。爺には話しを付けておくしさ」

「……………そうですね。理事長なら問題無いでしょう。木乃香お嬢様も本当によろしいんですね？」

「うん」

「わかりました。おい、引くぞ」

「はっ」

あっさり引きやがったな。以外に話しがわかるようだ。

「お兄ちゃん」

「よしよし、そつだ木乃香。お前、このまま家を出ろ」

「うん、お兄ちゃんの所に行くね！」

そろそろ木乃香との婚約を発表しても問題無いしな。しかし、60歳以上の歳差か……………凄いな。

それから爺がいる学園長室にやって来た。

「なんじゃ二人して？おお、木乃香は可愛いぞ」

「おい、爺に警告したよな？」

「はて、何のことか？」

忘れてやがるな。まあ、いいや。やっちなまえ。

「御祖父様、今日はお別れをいいに来ました」

「はっ、なんじゃ改まって？しかも、お別れじゃと？」

ぬらりひよんがオロオロしてやがるぜ。いい気味だ。

「うん、うちはお兄ちゃんと結婚するから家であるから。これからは神鳴の家でお世話になるから気にしなくてええよ」

「なんじゃと！？ そんなの認められるはずなからう！ 素奴はわしより年上じゃぞ！ それに人では無いんじゃぞ！」

いろいろ取り乱してやばいこと喋ってるぞ？後、木乃香の機嫌が凄く悪くなっとな。

「御祖父様には関係無い。うちはお兄ちゃんが好きだから！ それに、お兄ちゃんの事を悪く言う御祖父様なんて大嫌いや！」



「そんな・・・・・・・・木乃香・・・・・・・・」

「いこつ、お兄ちゃん」

爺には汚いモノを観るような視線を与え、俺には満面の笑顔を与える木乃香。

「ああ」

こうして、俺と木乃香は学園長室を後にした。後ろから爺の泣き声とか聞こえるが気のせいだ。

寮に帰り荷物を纏める木乃香。俺のも纏めてる。

「ただい・・・・・・・・何やってんの木乃香？」

「あ、お帰りアスナ」

「どうしたんですか？」

ネギとアスナが帰って来た。まあ、驚くよな。

「出て行くんやで」

「えっ？」

「ちょっと待って!？」

それから二人に説明すると、なぜかアスナ達も来る事になった。

「いや、だって木乃香がいなかったら誰が料理すんのよ!」

「……………自分でしろよ」

「……………食材が可哀相だわ……………(ぐすっ)」

「アスナさん、アスナさんには他にも良いところがいっぱいあります!」

「ありがとうネギ。そうよね、料理が出来なくても死にはしないわ!」

うん、まあ、それでいいんじゃないかな。流石に黄昏れの姫御子だから、生粋のお姫様なんだしな。

「さて、なら移動するぞ。一応寮として申請しておくから大丈夫だ」  
メンバーは他に夕映や愛衣、ユーフォリア、リリ、レン、真名も来る。刹那は渋ったが無理矢理呼んだ。

「わかったわ」

「はい」

こうして、俺達は世界樹のふもとにある我が家へと招待した。みんなは温泉や日本庭園とかに喜んでいた。パソコンにネットも繋がるし、温泉は電気から滝湯までありとあらゆる湯が用意してあるからな。

そして、夜。一本の電話が掛かってきた。

「どういうことだ」

「えっ?」

「木乃香の事だ! 貴様、木乃香に一体何をしたっ!?!」

詠春め、本気の殺気を放ってやがる。

「何もしてないぞ。木乃香が自ら俺に告白してきたので受けたただけだが?」

「子供の頃の話だろうが!?!」

「その頃から木乃香の恋心が続いているんだろ?」

光源氏計画は成功したぞ。ふはははは!

「くっ、だが貴様に……いや、誰にも木乃香はやらんぞ!」

「あっ、悪い。既に手遅れだ」

「なん、だと! まさかっ!?!」

「ああ、もう木乃香の初めては全て貰った」

とても具合はよかった。喘ぎ声とかも可愛かったよ。

「貴様、殺してやる!!」

「やれるもんならやってみろ!!」

「良いだろう、首を洗って待っている」

「貴様もな」

木乃香は誰にも渡さん。たとえ父親の詠春でもな。多分、京都で決着をつけるんだろな。あれ、詠春は本気で鍛えるんだからフェイトと結構いい勝負するんじゃないか？神鳴流はチート武術になってるし。ヒナを持ち出しそうで怖いんだが……。まあ、大丈夫だろう。

シオンSideOut

## 愛衣と夕映の修業

シオンSide

俺は今別荘に来ている。というのも、爺からネギとリリを襲えとユーフィーと真名に依頼が入ったからだ。リリもナギの娘と勘違いされているふしがある。まあ、依頼はちょうどいいので一千万で受けてやった。お金は結婚資金にあてるぞ。

さて、場所は別荘の霊脈の滝だ。そして、俺はプニプニした柔らかい物を踏んでいるわけなんだか……なかなか起きない。

「あう〜みないで〜／＼／」

「踏まないで〜／＼／」

俺の足元には生まれた姿で、手足に拘束具を付けられたエロい姿の

夕映と愛衣が倒れている。拘束具にはグレイプニル（神剣）を混ぜて取り付けてあり外れる事は無い。そして、自分にも取り付けている。

「よし、休憩終わりだ」

「ちよっ」「待って」

「だめ」

容赦無く霊脈……龍脈に二人を叩き込む。

ドボンと言う音と共に滝の中に消える二人。

ちなみに、裸なのも服が龍脈により消滅するからだ。それに、龍脈の力を吸収するのに肌をさらした方が効率がいい。拘束具も、引き上げるために付けてある。引き上げなきゃ、取り込まれて溶かされて消滅してしまうからな。

グレイプニルを登って戻って来るのがクリア条件だ。龍脈の力を自由に扱えるようになればかなりの力を得られるからな。

「既に六回目だが……」

「大丈夫だと思います」

水が人型を取ったような存在が答えた。

「ウンディーネか」

「そもそも、半吸血鬼で永遠神剣を体内に取り込んでいるからこそ出来る無茶ですよね？」

「まあな。しかし、京都まで時間が無いから無茶をするしかない。連中が永遠神剣を持っている二人を見逃すとは思えないからな」

「そうですね」

「ぶはあ、夕映大丈夫ですか」

「はあ、はあ、こっちは何とか平気です」

龍脈を扱った事で無限の気を手に入れるようなもんだしな。咸卦法すら出来るようになる。

「お疲れ様。ほら、タオルと服だ」

「はい／＼／＼」

ウンディーネが回復してくれたようでしたら落ち着いた。

「さて、二人覚えて貰うのは特殊な魔法だ」

「えっ？」

「特殊ですか？」

驚いているようだな。

「ああ。まず愛衣には物質魔法マテリアルマジックを覚えて貰う」

「物質魔法？」

「こんな種も仕掛けも無い手品のような魔法だ」

パチンと指を鳴らすと空中に数十本になる剣が出現した。それをその辺の木に指刺すと数十本の剣が次々と突き刺さった。

「「凄い」」

「次は夕映だな。夕映には契約魔法か召喚魔法だな」

「おお、覚えたいです！」

「なら、修業だな」

「「はい！」」

それから、午前八時から知識を得るための勉強をさせて、午後から七時まで訓練。八時から十二時まで実戦訓練だ。これを一日が百倍になる設定で二年行った。もちろん、俺は付きっ切りだしレンにも強力してもらった。

新学期が近いため今日が最終試験だ。

「では、愛衣」

「はい、行きます！」



愛衣の前には、鎧武者が存在している。こいつはレンが作成した。

「我、兵を求む。ぐおおおっ!」

瞬動を使い急速に接近する武者。

「ソード30、シュート!」

武者の前方に30本の剣が創られ射出される。武者は持っている刀で居合切りを行い全ての剣を切断した。

「敵、どこだ」

愛衣は既に距離を取っていた。ぽっと言っ音と共に空間に現出……  
……走り混んできた列車はそのまま武者に体当たりを仕掛けた。

「ぐおおっ!?!」

当然、吹っ飛ばされる武者に列車は……愛衣は追い撃ちを仕掛けた。

「目標鎧武者さん、弾丸装填、完了、撃ってください!」

ドオオオオオン!!!

轟音と共に放たれる88mmにより鎧武者は吹っ飛ばされた。

|        |            |              |      |
|--------|------------|--------------|------|
| あれは砲身長 | 4930mm、重量  | 6861kg、口径    | 88mm |
| m、発射速度 | 18発/分、最大射程 | 約2km、製造はドイツク |      |

ルップ社製……アハト・アハトだと!?

「第二次世界対戦に使用された列車砲を作り出すなんて凄いです」

「そうだな」

「次弾装填、ファイヤー!」

列車の上におっかなびっくり乗りつつ、空中に剣も創りだし足止め  
に使い、剣もろともアハトの砲撃を行う愛衣。

「まだ落ちませんね……奥の手です!」

列車の車両の天井がガコンと次々と開き、白く丸くて上が三角錐の  
ようになっていた筒のような物が沢山あった。

「まさか、ミサイルポットですか?」

「いや、物質魔法はイメージさえ出来れば出来るんだけどさ?」

レンが創世を元に作り出した魔法だし、愛衣に入れた神剣はそれに  
特化してるんだけどな?

「種も仕掛けも無いただの質量兵器です!」

「いや、そうですけど……」

「今の愛衣に何言っても無駄だと思っ」

「ショータイムです!」

その言葉により放たれた無数のミサイル。しかも、放出される煙りは七色で鮮やかだ。無論、威力はでかい。それを放出して、閉じて、開けるとあら不思議。元に戻ってる。

「ひどいですね」

「やばいな……愛衣が壊れた」

「だ、大丈夫でしょう」

「だといいな」

龍脈から力を引っ張りだしてるからほぼ無限だな。

「倒せました！」

「嵌め殺しですね。現実でやるとは愛衣グッジョブです」

「お疲れ様」

「はい、やりました」

抱き着いてきた愛衣の頭を撫でてやる。愛衣と夕映も可愛い彼女みたいなものだな。

「次は夕映だな」

「はい、場所は変えますよ」

「ああ」

移動したのは龍脈の入口だ。その近くにとどかい召喚と契約の魔法陣がかかっている。星の位置や風水を計算した結果、ここが一番いいんだろう。

「では、始めます」

「ああ、頑張れ」

「頑張つて、夕映なら必ず出来ます……」

「はいです!」

まずは、手首を切つて魔法陣に血を流す。夕映にとって始めて一人だけの召喚だ。今まではサポートについて、俺の感覚などを覚えてただけだからな。

「我、綾瀬夕映の呼び声に答え、我が求めに応じ顕現せよ!」

夕映が五芒星を描き、自身の魔力と気を龍脈に繋げ出力を増大させていく。

「主様、まずいです!」

「えっ?」

「龍脈を通して繋がった世界中の聖地から膨大な魔力と気を奪い注

いでいます!」

「つまり、やばいのが出ると?」

「はい」

聖地自体は魔力とか気が余り気味だから、丁度いいんだが……  
・夕映が契約できるかだな。

「グオオオオ!!」

魔法陣から出て来たのは、巨大な龍だった。とぐるを巻き全長がわからない程だ。放ってくる力は膨大で真正銘の化け物だ。

「くっ、凄いです……でも、負けないです!我が名は綾瀬夕映、汝を召喚した者なり!我は汝との主従契約を求む!我に従うです!!」

六芒星を描き契約に全力を入れる夕映。

『よかるう、やってみるが良い!』

膨大な水の奔流が夕映を包み込む。ここからは精神対決だ。

「くっ、なんて膨大な力!でも、負けません!水の精霊さん達!」

水の精霊が夕映の求めにおおし顕現する。呼吸だけは整えたようだ。

『諦めよ、人間ごときが妾を操るなど出来わせぬわ!』

「誰が諦めるものですか！既に諦めるような所は過ぎています！」

『何？』

お、夕映が押し出したな。

「それに、信じて待つてくれている人達もいるのです！こんな所で負けません！」

『無駄な足掻きじゃ！』

「私は勝ちます！」

それから精神勝負が続いていく。契約は精神勝負がモノを言う。それでも、体力も重要だからな。

そして、三日がたった。今だ戦い続けている夕映。多数の精霊が自らの意思で夕映に協力している。

「決めました」

「ウンディーネ？」

ウンディーネまで何か感じる事があったのか、協力しだした。拮抗状態だったのがウンディーネの乱入により夕映に傾いた。

「今です！綾瀬夕映の名の元『馬鹿な！人間事気に！？』汝を我が使い魔にする！！！！」



## 愛衣と夕映の修業（後書き）

ウンディーネは夕映の心と精神の強さにより契約を決めました。

捕まえたのは次回判明します。理解した人は凄いです。ちなみビツクネームです。

魔王少女夕映が始まるかも？



夕映は闇の道を歩きだした！

エヴァ Side

私はシオンにいきなり呼び出された。

確か、アイツは綾瀬と佐倉を鍛えているはずだが、一体何があったんだ？

「来たか」

「うむ」

茶室に着いた私。そこには私を呼び出したシオンに桜花、レンが茶を立てていた。他には拘束された綾瀬。

「で、何事だ？まるで戦争でも起こしそうなメンバーだが」

比喩では無く、単体で終末戦争を起こせるメンバーが揃っていた。しかも、シオンは横に新羅を置いて、レンは創世を……。これはいつもか。桜花は素手だしな。まあ、どいつも常時戦場を心得ている奴等だが警戒ランクが馬鹿みたい高くなっているな。

「ああ………夕映がSランクオーバーの龍と契約した」

「おいつ!?!」

Sランクオーバー………つまり龍樹と同等かそれを超える連中って事だぞ!

「明らかに力が足りて無いだろ………暴走を抑えるためのメンバーか」

「そうじゃ」

桜花がたてた抹茶を頂く。

「ふん、確かにSランクを被害無しで抑えるならこの戦力には納得だ」

「………夕映は………無傷が………ベスト………」

「しかし、どうするのだ?」

難しいと思うぞ。一度契約したとしても言うことを効かずに暴走してしまう事がある。

「それなんだが、永遠神剣の聖獣にしてしまおうと思う」

「聖獣?」

「各永遠神剣には意思がある。それが何らかの姿をとり現れる。そ

れを聖獣と言う」

なるほど。力のほとんどを神剣に封じ込め、綾瀬自身に少しずつ封印を解かせる気だな。

「では……」

「綾瀬嬢の中に入っている永遠神剣を改造し、もう一つの永遠神剣に力を封じ込め、永遠神剣同士を融合させるのよ。つまり魔改造じや！」

桜花が畳をひっくり返すと手術台が創られた。そう、創られた。

「夕映を台に乗せてと」

「拘束はしつかりな」

ふははは、楽しくなって来たでは無いか！

「んっ！んんっ！？」

「マスター、お持ちしました」

「ん、茶々丸か？」

茶々丸は私くらいロリボディになっていた。ここまでいい、黒を強調したドレスのようなコートは私の趣味にも合っているからな。だが、ワゴンに乗せて運んで来たのはなんだ？

「何って手術道具だが？」

「心を読むな！？だいたい、私が驚いているのはな、ぜ！チェーンソーやドリルとかがあるかだ！！！！！！」

「人体実験の基本？」

「レン、私はお前をそんなふうに育てた覚えは無いぞ！？」

「育てられた……泣かないで……私はエヴァちゃん……お母様とお兄様の子供で……育てられたから」

「ぐすつ、泣いてなんかいない！ニヤニヤするな！写真を撮るな！」

「ご馳走様でした」

くっ、生暖かい眼で見やがって！しかも、茶々丸は裏切るし……  
・私は人望が無いのか？ぐすつ、嫌だめだ、考えるな！だいたい、今はそれどころじゃない！

「ほら、とつとやるぞ！」

「んん！？」

「夕映、ちよつとの我慢だぞ」

「んんんんん！」

綾瀬は気絶したか、それにこれは仕方ないな。後で風呂に入れさせるか。

「あははは」

チエーンソーで胸を開く。しかし、肉体が実際に開くわけでは無く、魂的な物をあけたんだ。すると一冊の本が見える。

「これが綾瀬の永遠神剣か」

「うむ。永遠神剣第二位誓約」

「魔改造開始」

「うむ！」

こうして、魔改造が始まった。

「ふはははは」

「ここか、ここじゃな！」

「あつ、限界値超えた」

「直せ！」

こんな感じで綾瀬の……夕映の魔改造はおわった。

次の日、夕映は起きた。

「んっ………怖い夢を見た気がします」

「おはよう」

「おはようございます。シオン先生、エヴァンジェリンさん」

「早速で悪いが、契約した者を呼び出してくれ」

「はいです」

夕映が素早く五芒星の印を切り、詠唱をする。

「契約に答え、我が呼び声に答えよ！」

詠唱終了と共に、五芒星から30〜40cmの青い髪で、頭に螺旋状になった真つ直ぐの二本の角が生え、背中に小さな羽の生えた幼女（リリナノのリン2みみたいな）が現れた。

「可愛い」

「お主が妾を呼んだのじゃな！」

ふむ、予定通り人格は消えているか。知識はあるが記憶は無いという状態だろうか。

「そうです。でも、龍だったはずでは？」

「知らぬ。妾は今生まれたと感じておるゆえ。それより、ソナタと妾の名はなんじゃ？」

「えっと……」

「心の中で感じた名を言ってやれ。それがその者の名だ」

「ああ」

召喚して契約したなら、お互いに相手の名は魂に刻まれるからな。

「私は綾瀬、綾瀬夕映です。姓が綾瀬、名が夕映です」

「綾瀬夕映………夕映じゃな」

「そして………貴女の名は………えっ？」

「……どうした？」「」

「それが肝心」

夕映が信じられないと呆然としていたが、やがて決心したように名を紡いだ。

「何度考え直しても信じられないのですが、私の中に浮かんだ名前  
は一つでした」

「………」「」

皆が次の言葉を静寂の中待った。

「レヴァイアサン、リヴァイアサン、レヴィアタン………地  
獄の海軍大提督とか七欲の魔王と言われるレヴァイアサンです………  
………」

「あははは。思った以上のビックネームじゃの」

「凄い」

まったくだな。レヴァイアサンと言えば旧約聖書で、神が天地創造の5日目に造りだした存在で、同じく神に造られたベヒモスと二頭一対（ジズも含めれば三頭一対）を成すとされている（レヴァイアタンが海、ベヒモスが陸、ジズが空を意味する）。ベヒモスが最高の生物と記されるに対し、レヴィアタンは最強の生物と記され、その硬い鱗と巨大さから、いかなる武器も通用しないとされる。世界の終末には、ベヒモス（およびジズ）と共に、食べ物として供されることになっていたな。他にも、レヴィアタンはその巨大さゆえ海を泳ぐときには波が逆巻くほどで、口から炎を、鼻から煙を吹く。口には鋭く巨大な歯が生えている。体には全体に強固な鎧をおもわせる鱗があり、この鱗であらゆる武器を跳ね返してしまう。その性質は凶暴そのもので冷酷無情。この海の怪物はぎらぎらと光る目で獲物を探しながら海面を泳いでいるらしい。本来はつがいで存在していたが、あまりにも危険なために繁殖せぬよう、雄は殺されてしまいい雌だけしかない。その代わり、残った雌は不死身にされている。また、ベヒモスを雄とし、対に当たるレヴィアタンを雌とする考えもある。その姿

は、伝統的には巨大な魚やワニなどの水陸両生の爬虫類で描かれるが、後世には海蛇や（それに近い形での）竜などといった形でも描かれている。『イザヤ書』に登場する海の怪物ラハブと同一視されることもあり、この場合、カナン伝説と同じ起源を持つ（七つの頭をもつ海の怪物リタン）。同時にバビロニア神話に登場するティアマトとの類似性が挙げられる。ここから後世、後述のレヴィアタンを悪魔とする見識も登場した。

しかし、悪魔として実在していたようだな。これは他の七欲も来るかも知れないな。



「ど、どうするですか先生！」

シオンに縋り付く夕映……ちよつといらつくぞ。

「大丈夫だ。夕映が強くなればいい。俺がそれまでちゃんと責任持って守ってやるし、みんなもいるし安心しろ。それにレヴィアアサンを従えられるなんて間違い無く夕映には類い稀なる才能があるんだからな」

「はいです！」

「それに、どんな凡人でもマスタークラスの師匠に師事して、修行をこなせばマスタークラスになれる」

「本当ですか？」

「うむ。実際、虐められっ子がマスタークラスのいる道場に入って、不良共をボコボコにして、最終的には武器商人と渡り合えるようになった者もおるしの（漫画じゃが）」

「ああ、実際に見て来たからな（漫画がだが）」

「わかったです。これからも頑張るです！レヴィアアサン……長いので愛称レヴィアと決めます」

「レヴィアか……ふむ」

「これからよろしくですレヴィア」

右手を差し出した夕映。

「うむ、せいぜい妾の力を引き出してみせるがよい」

「はいです!」

握り返したレヴィア。

うん、まあ、いいんじゃないか？召喚士としてレヴァイアサンは破格の存在であろう。恐らく、なんの代価や儀式を必要せずにレヴァイアサン配下の悪魔を召喚できるだろうからな。これは鍛えがえのある奴が二人も追加されたから楽しみだな。他の連中も笑っているが、頭の中でプランを考えてやがるな。夕映には七欲の魔王になって貰うとするかな・・・くっ、くくくく。おや？そんな震えてどうしたんだ茶々丸よ？

レヴァイア Side

夕映は闇の道を歩きだした！（後書き）

はい、結果はとぐるを巻く龍リヴァイアサンでした。そして、夕映の未来やいかに！次回、魔王少女夕映「初めての襲撃」テイクオフ！

魔王少女夕映「襲撃前の出来事」(前書き)

襲撃まで行きませんでした！すいません。とりあえず、オリジナルに改造してあります。ノドカちゃん涙目だしね。

## 魔王少女夕映「襲撃前の出来事」

愛衣Side

新学期が始まり少し立ちました。あれから私達は修行を続け順調に強くなっていっています。でも、問題が一つあります。それは、私と夕映の力の差が開く一方な事です。物質兵器じゃ問題があるのか、夕映の召喚悪魔レヴィアに勝てません。

「あれ、ここはどこですか？」

レンさんの別荘に入って、考え事をしてたら迷っちゃった！どうしよう、どうしよう！

「誰がいるの？」

「えっ？」

奥の扉から金髪の幼い少女が、こちらを覗いていました。

「誰？」

「あ、あの佐倉愛衣といいまっくくっ！」

「大丈夫？」

「ひゃい」

舌を嚙んじやいました。恥ずかしいです……うう。

「佐倉愛衣……愛衣ちゃんだね。私はアテナだよ」

「アテナさんですね」

それから自己紹介とお互いの事情を話し合いました。

「愛衣ちゃんにピッタリないのがあるよ！（新しい楽しみが出来たの。確か、神界から持って来た鏡があそこに繋がってたはずだね）」

「そうなんですか！」

「うん、この鏡を見て」

「はい」

鏡の中には色々な4メートルくらいの機会仕掛けの巨人が、悪魔と呼ばれる人達と戦っていました。

「ね、ぴったりでしょ？」

「はい！」

「覚えたい？」

「お願い出来ますか？」

「うん、行っておいで」

「えっ！」

私はアテナちゃんに鏡の中に押し込まれました。それから、様々な人達に憑依して操縦を学びました。皆さんありがとうございました。

毎夜、私と夕映は桜並木通りで結界を張って闘っています。

「愛衣、来るぞ」

「はい。クリエイト：127mm速射砲15門」

私が作り出したのは、イージス艦にも採用されている速射砲です。それを前方から迫って来る悪魔の軍勢に向けます。

「ファイヤー」

15門の速射砲が一斉に装填された銀の弾丸を放ち悪魔達を駆逐して行きます。

「刹那さん」

「ああ、神鳴流奥義斬魔剣！」

私の背後に現れた悪魔を刹那さんが倒してくれませう。刹那さんが私のサポートについでいてくれます。

「っ！」

瞬く間に速射砲4門が破壊されました。

「真名か」

「多分、そうです」

そう、夕映には真名さんが付いています。

「愛衣、数をどうにかできるか？」

「はい。クリエイト：炎剣フランベルジュ」

80本の炎剣が悪魔達に突き刺さる。でも、これだけじゃたりませぬ。

「クリエイト：ナパーム」

ナパームと炎剣により爆発的に熱量が増大して、悪魔達を焼き付くしていきます。

「えぐいな」



「そうなんですか？」

「まあ、いい。舞えダイヤモンドダスト」

熱によりボロボロにされた悪魔達は、ダイヤモンドのような氷の力ケラによりズタズタにされました。熱されて冷やされ脆くなっている所に速射砲から放たれた弾丸が悪魔を襲い粉碎します。

「これで………」

「ええ、私達の勝ちです！レヴィア」

「うむ」

空から迫って来る数十トンにもなるだろう津波が私達に迫って来ます。

「空から津波ってなんですか！刹那さん！」

「ダメだ。夕凧でエネルギーを消しても落ちて来る水は変わらない。凍らせても被害が増えるだけだ」

「なら、これなら！クリエイト：シエル」

対核用のシエルです！

「無駄です！真名さん」

「ああ、任せろ。荷電粒子砲を喰らってみるといい」

「「なっ！」」

はい、勝てません。やっぱりあれを使うしかありません。あの二人のメンバーは反則です〜きゅう。

愛衣Side Out

ネギSide

今日から新学期です。僕も頑張らないといけません！決意を胸に教壇に立ちました。

「「「「「三年A組、ネギ先生ー」」」」」」

「「「（バカばつかです（だな））」」」（アホだな）」」」

皆さん元気ですね。呆れてる人もいますけど。

「三年A組を受け持つ事になったネギ・スプリングフィールドです。改めて、今年一年間よろしくお願ひします」

「「「「「は〜い」」」」」」

ん？何人からか鋭い視線が……あれは、綾瀬さんと龍宮さん神鳴さん二人に……エヴァンジェリンさん？なんだろう？

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3-A組も準備してください」

「わかりました。では、皆さんぬ……準備してください。僕は外にでていますね！」

ふう、危ない危ない。母さんや桜花さんに殺されちゃうところだよ。前は……ダメだ、思い出したらいけない！うん、止めよう。危ない危ない。

## ネギSide Out

## 夕映Side

ふう、身体測定ですか……この成長しない身体は嫌になるです。まあ、幸いシオン先生はこんな身体でも気に入ってくれるようですし、将来は例え愛人でも安定ですね。えっ、なんで解るかっ？エヴァンジェリンさんやユーフィー達を見ていたら解ります。毎日取っ替え引っ替えてイチャイチャしてますから……え

え。

『主よ、心地好い気配を感じるぞ』

む、危ないです。もうちょっとで勝てない戦いに挑む所でした。

『良いのではないかの?』

いえ、エヴァンジェリンさん達も順番だと理解して納得してるです。それに、今の私達では瞬殺されてペナルティーで更に順番が減るだけです。

『そうなのかの?』

はい。悪魔何それ美味しいの?と言われるだけです。と、言うか理解してるですよ。わざと戦うように仕向けてますね?

『うむ、ばれたか。残念じゃ』

後でお仕置きです。

『ふん、お仕置きなど恐いはず・・・』おやつ抜きです』待つんじゃない?!?あの極上のスイーツを独り占めする気か!??』

知りません。今日は確か、温度差の激しい所で裁判した、特別なイチゴの中でも最高に味のいいイチゴを使ったイチゴのタルトでしたね。千個に一個だけとか言われる奴に生地も最高級品を用意したと言っていたです。

『の・・・(じゅん)』

いやはや、シオン先生の別荘は本当に美味しい食材が沢山です。楽しみですね。昨日勝利したので二ホールも貰えますし。真名と一緒に一人一ホール食べましょう

『待て、悪かったのじゃ！だから妾にもくれ！』

わかったのならいいです。心優しい私に感謝するのです。

『くっ……妾はもう寝る！いいか、おやつ時には起こすのじゃぞ！絶対じゃぞ！』

はいはい。さて、レヴィアは寝たみたいですし、脱ぎ終わりましたから向かうとしますか。それにしても、おやつに負ける地獄の海軍大提督って何なんです？

「ねえねえ、最近寮で流行ってる噂、どう思う？」

「何々？」

「夜の桜並木通りに夜な夜な沢山の悪魔が出るんだって！」

えっ？

「確か魔女の格好をした少女と人形のように小さい少女が悪魔の軍勢を操ってるんだよね！」

明らかに私じゃないですか！

「それと少女が闘ってるって聞いたよ！」

「何それ知らないよ〜!」

ハルナが変なモノを黒板に………それ、チュパカブラに三角帽子を付けただけですよね？

「そういえば、愛衣ちゃんと桜咲さん来て無いよね？どうしたんだろ?」

「身体測定が嫌でサボリとか?」

「あの二人にそれは無いでしょ」

「確かに………まさか………」

正解ですね。でも、二人共学校には来ていましたが………まさか？

「もうだいたい、そんな存在がいるはず無いでしょ。速く並びなさいよ」

それが居るんですよ。私の体内に住んでいますし。

「アスナ、あんたひよつとして恐いの?」

「そんなはず無いでしょ!」

「でも、悪魔なら願い事を叶えてくれるかも!」

「でも代償に魂を取られるって言うわよ？」

「でも、魔女っ子が操ってるんでしょ？なら……」「」「」「  
「叶えてくれるかも！！！！」「」「」

もちろん、断るです。何の代価も無く力を貸すなどゴメンです……  
……私は自分を安売りしないです。それでも人を見る眼は持つて  
るつもり……多分、きつと、あつたらいいです。

「だいたい、あんなのいるはず無いでしょ!？」

少しからかってみましょう。

「アスナさん」

「何よ？」

「悪魔は貴女のような元気な魂が好物みたいですよ？」

「なっ、夕映まで何言って……」

「まったくその通りだな」

「えっ?あつ……」

エヴァンジェリンさんが参加して来たです。

「先生、大変やく愛衣がつ!愛衣が!!!」

廊下から亜子さんの切羽詰まった声が聞こえて来ました。愛衣、い

ったいどうしたのですか！

夕映 Side Out

ネギ Side

僕は事情を聴いて、急いで保健室に向かいました。するとそこには、ベットで死んだように眠っている佐倉さんとその横で看病している桜咲さんがいました。

「桜咲さん、佐倉さんは！？」

「落ち着いてください。命に別状は無いそうです」

「よかった……それで、何か知っていますか？」

「いえ、気付いたら倒れていたの……」

「そうですか……うん？」

佐倉さんから貸すかに悪魔の気配が……まさか、本当に？



でも、この気配は薄いけど間違い無い。父さんが助けてくれた時に感じた気配だ！

「大丈夫ですか愛衣っ!？」

叫びながら入って来たのは綾瀬さんでした。

「っ!」

「夕映、愛衣は大丈夫です。だから、落ち着いて下さい。そして、服を来て下さい!」

「そうです!」

「えっ?あっ……いやあああっ!」

そう、夕映さんは下着姿でここまで来ていました。

「夕映ちゃん急ぎすぎ」

「夕映、服だよ」

「あう〜ありがとうございますノドカ」

ふう、とりあえず皆さんを教室に戻しましょう。

「佐倉さんはただの貧血のようですよ!だから皆さん、教室に戻って下さい!」

「ええ〜心配だよ」

なんとか皆さんを教室に戻し、身体測定を受けてもらいました。

ネギSideOut

真名Side

あれからまだ、愛衣は眼を覚まさない。私と刹那、夕映の三人は身体測定が終わってからすぐここに来て愛衣を見ている。

「来たぞ」

「待っていたよ」

他の二人も頷いた。来たのは、眠そうにしているエヴァだ。

「貧血と聴いたが、仮にも半吸血鬼なんだぞ？心配する必要は無いのでは無いか？」

「それなんだが、変な感じがするんだ。イビツと言つか違和感と言つか……」

「「お願いします」」

三人でエヴァにお願いすると、めんどくさそうに愛衣に近づいて行く。

「仕方ない・・・な・・・」

なんだ？眼を見開いて・・・それから信じられ無いようなモノを見た眼をして、真剣な表情になった。

「これはどういう事だ。愛衣の魂が無い」

「「「はっ？」「」」

「だから、愛衣の魂が無い！これは単なる器だけだっ！？」

魂が無いだと！？

「そんな、愛衣は・・・」

「「「どういう事ですかリヴィア！」」」

突如呼び出されたリヴィアだが、直ぐに理解したようだ。

「「「どうもどうも、コヤツには魂が無い。ただの肉の塊じゃ。といっても、かろつじてまだ繋がっておるから元に戻るかも知れんがの。ちなみに、妾達にはどうしようも無い。原因は妾や妾達でも無いし」」」

「そつだな。現状ではどうしようも無いの」

「シオン先生は！」

「無理だな。今日はシオンとレン、桜花、リリ、ユーフィーは神鳴財閥の関係で今日は戻らない」

「くそ」

「愛衣……」

私達はただ、愛衣の無事を祈るしか無い無力な存在だった。だから、せめて原因を探す事にした。

真名SideOut

魔王少女夕映「初めての襲撃〜覚醒の刻〜」

愛衣Side

「構造を解析して生成……えっ、製造に一人の魂ですか？流石にまずいですよ……？そうだ、私の魂を使いましょう。でも、このままだと私が死ぬから……何か無いかな？」

私は今、図書館にきています。もちろん、切り札を造るためです。私の廻りにある大量書物を元にしています。物質魔法は私が理解し想像出来れば作れます。逆に理解と想像が出来なければできません。後、無機物ならなんでも作れます。

「ん？」

私が無造作に置いた手には一冊の本。両親を悪の人に殺され、母親の祝福のお陰で悪の人を殺し、額に雷の傷を負い英雄になった魔法使いのお話し。

「あっ、これです！これならなんとかあります！」

私は早速実行しました。

「ここは……そうでした。私は魂を10個に別けたのでした。そして、ここは私の精神の中ですね。」

「流石に永遠神剣があってもしんどいですね。でも、他人を犠牲にするよりましです。それに、半吸血鬼だから別けた魂の力も充分ですね。」

さて、直ぐに造りましょう。解析し理解も終わっています。生贄も準備出来ました。ノープロブレム。」

「さて、佐倉愛衣の種も仕掛けも無いマジックの始まりです。／＼」

恥ずかしいよ。でも、こうしろって言われたし、仕方がないよね。そして、私は色んな技術を混ぜ混み4メートルの巨人達を造りました。それらを9つのトランクに仕舞いました。一つは使いますから鍵はかけません。」

「ここは？保健室？確か図書館で色々やりましたけど……？」

「わっ！」

カーテンを開けると窓から月の光が差し込んで来ました。

「もう夜です〜！身体測定とかあったのに〜」

多分、図書館で倒れてたんですね。やっぱり魂を別けるのは大変だったんですね。心なしかぼ〜としますし。

「あつ、行かなきゃ」

私は保健室を出て、桜並木に向かいました。

## 愛衣Side Out

## 夕映Side

食料も買いましたし、早く保健室に戻りましょう。助かる方法はシオン先生とエヴァさんが考えてくれますから。

「愛衣、ただいま……」

扉を開けた部屋の中には、答えてくれる人は誰もいない。それどころか、愛衣の身体も無い！

「レヴィア！」

「何じゃ？」

「全悪魔を召喚します！」

「地獄の全海軍をか！？」

「はい、愛衣の搜索に宛てます」

人海戦術を使つても見つけ出さなければいけません。誰かに見られようが知った事ではありません。

「仕方ないの。全部は無理じゃが直ぐに動ける連中を呼ぶかの」

そして、召喚した中級悪魔は3000体。その全てが愛衣の搜索に乗り出した。

少しして、一部のエリアで悪魔が消えた。

「桜並木じゃ」



「ええ、直ぐに行きましょう」

「うむ！」

私は黒色のドレス（リリなのルーちゃん）の様な格好をします。

それから、レヴィアと共に転移した。

私達は上空に転移した。眼下には桜並木が広がっている。そして、悪魔と戦いつつ愛衣を抱いて連れ去ろうとしている人物が一人いた。

「レヴィア」

「何じゃ？」

「殺すのです」

何故でしょうか？私の口から冷酷な言葉がすらすらでます。一秒でも早く、愛衣を私達の手に取り替えたいのです。それが、例え何人が犠牲になろうと、愛衣を取り返すためなら構わないと思ってくるのです。

「では、やるかの（良い力が主から流れて来るわ。これは、期待出来そうじゃ）」

「まずは左舷後方に攻撃です」

私は悪魔の指揮を行う。

「ふっ」

「なっ！」

レヴィアが片手の一降りで3メートルもの火球を瞬時に8発も作り出して放った。

「風花風障壁！」

誘拐犯が風の障壁で巨大な火球を防ぐが、そこに悪魔達の攻撃魔法が沢山飛んでいく。普通なら死ぬはずだった。

「きゅっ！！」

肩に乗った緑の生物の額にある紅いルビーのような宝石が光ると、悪魔達の攻撃は跳ね返された。

「ほう、カーバンクルか」

「反射魔法がうざいです」

「仕方ありません。本気で行くです」

「うむ」

レヴィアと融合し、角が二本生えて来た。更に背中から巨大な三対の黒い翼が出ている。

「アクアジェット」

翼を使い加速し、全身に水を纏いながら特攻をかける。

今度は不可視の反射と激しい激突をしてから爆音が響いた。

「えっ、貴女は綾瀬夕映さん！」

「先生だったんですか……」

「その格好……まさか、夕映さんは悪魔？」

「いいえ、違います。私は人間です」

「なら、僕と同じ魔法使いなのに何故こんな事をするんですか！」

先生は………勘違い？

『そつみたいじゃ』

『おい、今はネギと闘ってるのか？』

『シオン先生？』

『ああ。それと、愛衣はどうにかなりそうだ。後、ネギなんだがこてんぱんにしろ』

何故なんでしょうか？まあ、いいですね。私のご主人様たるシオン先生の命令なのですから。従者として断れません。

『了解しましたです』

「どうなんですか！」

ふむ、お子様に先輩として現実を教えてあげましょう。やっぱり、まだムカつきますし。

「先生は悪の魔法使いがいなくても？」

「魔法使いは民のために……」

「……先生、ちょっと待つです」

「はい」

「……うん、理解したです。」

「まず、先生のおっしゃってる事は帝王学です。それは上に立つ選ばれた力ある者が口にする事です」

「そうだったの！お母さん達がそう言ってたからってつきり……」

流石、王族と神鳴が教育しただけありますね。ですが、今の先生の力と知識じゃ宝の持ち腐れです。

「言っておきますが、正義と言うのは人それぞれの中にあります。善人には善人の正義が、悪人には悪人の正義がです」

「それは……」

「そして、何故こんな事にとiいうのは愛衣を取り返すためです」

「まさか、佐倉さんが倒れたのは……?」

「はい、私のせいですね（多分ですけど）」

「なら、佐倉さんは力付くでも渡せません!」

「そうですか……なら……死ぬです……」

「えっ……がつ!？」

先生が認識の出来ない速度で殴り飛ばした。

「やはり、カーバンクルとはいえ先生達が認識出来ない速度の攻撃は大丈夫ですね」

「くっ、精霊、あぐっ!？」

「どうしました?先程の悪魔達にしたように得意な詠唱魔法を放つて来ては?」

バックステップして、距離を取るネギ先生。あまあまです。

「馬鹿にしないでください!僕は雷の暴風だつて使えるんだ!」

「ではやってみるです」

「後悔しないでくださいね!ラス・テル マ・スキル マギステル  
ウェニアント・スビト 冥界スーレス・フルグリエンテース  
来れ雷精 風の精!!! 雷を纏いて(クム・フルグラティオーネ)

吹きすさべ（フレット・テンペスターズ）

南洋の嵐 雷の暴風

アウストリーナ ヨウイス・テンペスターズ・フルゲリ

「！！！」

『確かに強いな』

「ただ、力だけです。レヴィア！」

『うむ』

ネギ先生が唱えたのは、強力な旋風と多数の雷が融合した強力な魔法が私に襲いかかったです。

「やった！」

残念、無駄ですよ。

「そんな、なんでっ！？水で防げるはず無い！」

私は展開していた水の膜を掌に圧縮する。

「簡単ですよ先生。水が電気を通し易いのは水に沢山の不純物が入っているからです。不純物が無くなった純粋な水は電気を通しません」

「そうなんだ……でも、負けないぞ！」

「では、再度どうぞ」

「ラス・テル マ・スキル マギステ……がはっ！」



「あのれ、人間ふぜいが」

「この……えっ、夕映ちゃん？」

「まあ、良い。始末するゴミが増えただけのことよ」

「なっ！」

「逃げてアスナさん」

「何言つて……ひっ」

水を圧縮して作った水剣がゴミを切るため一閃した。しかし、突如割り込んだ筈によって妨害された。

「愛衣、何をするのじゃ？」

なんで？これは愛衣のタメなのになんで邪魔するのじゃ？

「夕映、殺すき？」

「うむ」

「ダメ、止める」

「なら、やってみよ」

「うん。二人は逃げてください」



「でも……」

「邪魔です」

「わかった」

ふむ、まあ愛衣がいるならよからう。

「では、行きます！」

「「来い」」

愛衣はティガーとパンツァーを10機ずつ作り上げ、砲撃を開始した。

「「その程度、無駄じゃ」」

「時間稼ぎだから。夕映にはこれで正気に戻ってもらう」

「「なんじゃ？」」

「行くよ、これが私の切り札です！闇より暗き深淵より出でし其<sup>そ</sup>は、科学の光が落とす影！来て下さいクロガネ鐵！」

「なんじゃと！」

愛衣の影から現れた4メートルもある機会仕掛けの漆黒の魔神。

「「人造悪魔じゃと！？」」

「そう、これは悪魔に対抗するために作られた機会アスラ・マキナ悪魔機巧魔神です」

「「やって来れるわ!!」」

「行くよ鐵!レッツ、ショータイムです!」

そして、我等は魔王少女VS魔女っ子ハンドラー演操者の戦いが始まった。

夕映(?) Side Out

魔王少女夕映「初めての襲撃〜覚醒の刻〜」（後書き）

予想と違った展開になった。まさか夕映がああなるとは！！後悔はしていないけど！

魔王少女夕映V S 演操少女愛衣く嫉妬魔王と機巧魔神く

アスナSide

今、私の目の前で信じられない光景が展開されている。

「「これならどうじゃ!」「」

夕映ちゃんに角が生えて、私とネギを殺そうとしてた……  
それを起き上がった佐倉さんが助けてくれた。

「甘いです、鐵!」

夕映ちゃんが手を一降りすると、召喚されたのか、大量の悪魔が出現した。それを愛衣ちゃんが呼び出した黒いのが、黒い光を纏った手足で殴ったり蹴ったりして殺していつている。

「「それなら500体には対抗できるかの?」「」

夕映ちゃんの周りに今度もとんでもない数が現れた。

「ふふふ、確かに普通の鐵なら無理ですよ？でも、魔神って言い  
ましたよ？」

「「む？」「」

佐倉さんがそういうと、黒いのの胸の部分が開いた。

「えっ、あれは……」

「佐倉さ、っ」

「ネギ！」

顔は原形を留めていないし、身体中に傷跡があるのに無茶して……  
……こつちもそうだけど、佐倉さんが二人いるほうがおかしいわ  
よ！？

「「なんじゃそれは！？」」

「機巧魔神を動かすための「贄」として機巧魔神の中枢部には少女  
(処女)が収められています。機巧魔神はこの少女らの魂の質量を  
削って演操者の願いを叶え続ける。機巧魔神は副葬処女の魂で動く  
ため彼女達の意にそぐわない場合、演操者の命令でも動かないこと  
があります。私自身なのでそこから問題ありません。そして、魂を  
削られた副葬処女はそのたび感情をすり減らし、全ての感情を無く  
したとき消滅する。また、当然ながら封印されている機巧魔神の中  
枢部が破壊されれば死んでしまう。私はこれを自身の魂を分割し副  
葬処女に使用しました。更にいろいろ改造しています」

自分を生贄にするなんてよくやるわね。私なら無理よ。



「水龍」

空の海から出現した巨大だいな龍が、海の水を全て圧縮したのか、空の海は消えたみたい。

「行け」

「負けません！鐵、ブラックホールクラスター！」

重力を利用して迫り来る龍に、黒いのが胸の前作り出した真つ黒な球体を放った。真つ黒な球体が龍に触れると球体は拡がり龍を飲み込んだ。

「……理不尽だ！」

「ふふ、これが私の力ですっ！行って鐵！」

「ぐはっ！？」

あっ、黒いの一撃をもろに喰らったわね。油断大敵？

「きゅっ」

「あっ、分離した」

普通に制服を着ている夕映ちゃんと角の生えた人形みたいなのに別れた。

「夕映大丈夫！」

「む、身体中が痛いです」

「良かったよ、やり過ぎちゃったか……ちょっと待ってね」

あれ、なんか嫌な予感がするんだけど？あの黒いのもこっちに向いてるし。

「アスナさん」

「な、何よ？」

「すいませんが、記憶を消させていただきます」

「ちょっと、嫌よ！それに魔法使いの事なら知っているから！」

「えっ、そうなんですか？」

「そっよー！」

危ないわね。流石に頭がクルクルパーになるのは嫌だからね。あれ、佐倉さんの反応がおかしいわね？何か虚空に向かって話してるような感じ。

「分かりました、ご主人様のために排除しますね」

「えっ、ご主人様？」

「ぎぎぎ（アスナさん、ネギ先生、ごめんなさい。ご主人様から排





「あれは……リリ!?」

「ネギお兄ちゃん、そのまま突き進んで!」

「「えっ?」」

「行くよ、めいちゃん!」

リリちゃんが私達を通過した。そして、リリちゃんより長い漆黒の長剣を振り下ろすと、黒い剣閃みたいなのが放たれて、何かが激突した音がしたと思ったら、中心で黒い渦が発生して、周りの物を吸い込みだしたんだけど?

「ぶ、ブラックホール……よね?」

「そうだよ? あっ、引いたみたいだね。てんちゃん、じげんざん」  
今度はいつのまにか握っていた白い剣が、信じられない事にブラックホールを切り裂いて消滅させたのよ。

「大丈夫?」

「うん、ありがとう」

何かネギが信じられないような顔をしているんだけど?

「ねえ、リリちゃん。ネギの怪我って治せない?」

「無理ですよ。リリは魔法が苦手なんですから」

「できるもん！」

「どうせできなっ、え？」

「ちよっ！」

リリちゃんが黒い剣でネギを切り付けた。

「ネギ！」

「……………あれ、なんともないや。それに傷が治ってる」

「ね？リリにもできるんだよ！」

「うん、ごめん。リリはその剣どうしたの？」

「えへへ、パパに貰ったの！」

うわっ、凄い笑顔。よっぽど好きなのね。いいな、私には両親なんていないし……………って、何私らしくないこと言ってるのかしら。

「そう……………リリは強いんだね……………」

「んにゃ？ネギお兄ちゃんも強いよ？」

「僕なんか……………」

「かゝ君はネギお兄ちゃんの力だよ？」

「えっ？」

「かー君はナギがパパに頼んで、ネギお兄ちゃんのために作られた永遠神剣なんだから！」

へへ、そうなんだ。凄いわね……って神剣！神剣って言えば神様が作った剣じゃないの！？シオン先生って何物なのよ！？まさか………神様………なわけないわよね。

「うん………」

それから、私達は解散した。リリちゃんの事は親のロリコンに聞きましよう。娘がいるのに、中学生の木乃香を愛人にしてるんだし、確実に歳は離れてるんだからロリコンでいいわ。次の日は怖がって学校に行かないと言う駄々っ子を連れて行くのを苦労したわ。しかし、同じ寮に住んでるんだから寮にいても確実に会うのにな？まあ、学校に行ったら夕映ちゃんに色々聞いて見るかな。一応、護衛をリリちゃんに頼もう。



魔王少女夕映V S 演操少女愛衣く嫉妬魔王と機巧魔神く（後書き）

なんか愛衣が強い！ネタで演操者<sup>ハンドラー</sup>にしてみたが、普通に強いですね。しかも、グランゾンとかの魔改造済みでエネルギーが無尽蔵。魂が減らない。当然、技術はアテナが提供しました。そして、何気に天才で秀才な愛衣ちゃんです。

お仕置きの定番？（前書き）

少しエッチめ？

お仕置きの定番？

シオンSide

さて、俺の前には正座している愛衣と夕映がいる。もちろん、説教のためだぞ。

「夕映、被害状況を言ってみろ」

「うっ………桜並木通りが全壊です………」

だよな。一部クレーターが出来てるし、桜の木はぐちゃぐちゃだ。まあ、絶界を展開してあったから大丈夫だがな。

「それもそうだが、一番の被害はネギだろうな」

事前にボコられていて、さらに魔改造された鐵に終われるとか、可哀相だろ。うん、予測していなかったな。



「「すみません」」

「まずは愛衣だ」

「あうっ（ガタガタ）」

びくびく震えて可愛いじゃないか。顔色が真っ青だけど。

「魂の分割に生贄だと？しかも、後先考えずに一人で行ったと」

「……（じくじく）」

「この馬鹿者がっ！？どれだけ心配したと思っている！？」

「ひっ」

エヴァが容赦無く頭を叩いたな。というか、取られた。まあ、今回はほぼ部外者だからな。

さらに、エヴァが凄い形相で殺気と威圧を放ちつつ説教している。流石、魔王と謡われた闇の福音だな。愛衣だけじゃなく、夕映 泣きそつに……いや、泣いているな。

「とりあえず、愛衣は命がかかる様な危ない事するなら俺かエヴァ、レンに必ず伝える。マジで心配したんだからな」

「……は……い……ごめん……なさい……ぐすっ」

姉も心配してるだろうしな。というか、闇の眷属になったのはばれてるかどうか分からないがな。

次は夕映だ。こいつは色々大変だぞ？

「夕映、気付いたらレヴィアと融合してたんだよね？」

「……（こくこく）」

「どうやってなったんだ？」

エヴァが詳しく夕映から聞き出すようだ。エヴァはやっぱり面倒見いいよな。ツンデレだけど。

「えっと、服が乱れてた愛衣が倒れてて、それをネギ先生が抱いてたのです。それが、襲ってる様に見えて……」

「私が起きたら訓練の時間だったので、急いで桜並木に向かって、着いたら倒れてしまつて……」

「そこに来たボーヤが抱き起こした所を夕映が目撃したのか」

ネギ、マジでタイミング悪いな。というか、可哀相だ。

「そこで、愛衣を取られると想つたら、身体の中から力が沸いて来て、シオン先生のオーダーを受けて……気が付いたら愛衣と戦って負けてたです。うっすらとは覚えているですが」

「はい、そこにご主人様から命令が来たので、ネギ先生に攻撃を仕掛けました。当然、死なないように加減は多分出来てたと思います。出来てるよね？出来てたらいいな。そしたら、リリちゃんが破壊したので引きました。ダメ……でした？」

「ふむ、まああれだ。夕映は嫉妬の増加・増幅でレヴィアと融合したんだろう」

「なら、徹底的な精神修業だな。感情のコントロールを覚えて、融合していても冷静でいられるようにな」

しかし、レヴィアタンの実力は流石だな。愛衣は愛衣なりに答えを見付けて強くなったし……どちらも危な過ぎただけだな。

「ふむ、では精神修業をさせるか。後は愛衣をたぶらかした奴にお仕置きだな」

「ああ、幼女女神にな……」

「その前に、二人にお仕置きだ」

「なっ、何をします／＼」

「あうゝ脱がさないで／＼」

二人の下着もろともスカートを脱がせて可愛い桃を露出させた。もう解るよな？

「お仕置きだ」

「「ひっ、いやあああ！？ごめんなさい！？」」

むろん、容赦無く何度も何度も叩いて真っ赤にしてやる。これはお仕置きだからな。

それから、別荘内の一部では悲鳴が何度も聴こえたとき。

Side Out

ネギSide

うう、怖いよう、殺されちゃうよ、綾瀬さんは悪魔の王を従えてるし、佐倉さんは人巧悪魔(?)とか言うのを従えてるし! それに、悪の魔法使いって言ってたし……アスナさんの馬鹿!

「みんなおはよーっ」

「あつ、ネギ君、アスナ」

「おはよー。ん、ネギ君どうしたの?」

うう、言えないよ。クラスの人達に迷惑をかけることなんだし、何より魔法の事なんだから!

「あれ、佐倉さんと綾瀬さんがいない?」

「あの二人なら休みか遅刻だよ？」

ユーフォリアさんが横から答えてくれました。その後ろに龍宮さんに木乃香さんがいます。

「そう聞いている。だよな木乃香」

「そつやで（お尻が真つ赤で動けないみたいやし）」

「呼びますか？（氷囊でお尻冷やしてた気もするけど）」

「い、いいです！？」

綾瀬さんに佐倉さん、まさか自分のクラスの生徒の中にこんなに凄い人達が……待って、おかしいよ！？佐倉さんは魔法生徒だからわかるよ！でも、21Aの時の夕映さんには何の力も気配も無いタダの一般人だったんだよ！それが魔王を従えてるって何なんですか！？

キーンコーンカーンコーン

はあ〜新学期早々大問題が……やっぱり、魔法使いにはパートナーが必要なんだね。確かに、あの二人もパートナー（？）を連れていて凄く強かった。でも、そんなすぐには見つかるわけないし……ダメかー。あっ、リリをパートナーにすれば良いんじゃないかな？よし、聞いてみよう。

キーンコーンカーンコーン

放課後になって予定通りリリに提案してみる。

「リリ、ちょっといいかな？」

「なに？」

「うん、実は……僕のパートナーになってくれないかなって」

リリもまだだよ。兄弟なんだからいいよね？

「パートナーって従者のだよね？」

「うん」

「ならダメだよ？」

「なんで!？」

「えへへ、だってリリはパパと本契約してるもん！」

「えええええっ!？」

本契約だって!？本契約は生涯で基本的に一人なのに!しかし、仮契約じゃなくて本契約だったらどうしようもないや。

「そうだったんだ……どうしよう……」

「パートナーに悩んでるなら、リリはアスナさんがいいと思うよ?」

「アスナさん？」

「うん、黄昏れのひ……なんだったか忘れちゃったけどリヤネギお兄ちゃんにも関係ある人だよ？」

うん、確かに色々関わって貰ってるし……でも、これ以上迷惑を掛けるのは嫌なんだよね。

「わかった。もっと考えて見るよ。ありがとう」

「ううん。でも、ちゃんとお互いに事情を話し会って、しっかりと相談してから決めてね？」

「うん。でも、それは母さん達の受け売りだろ？」

「うん」

いつも二人の母さんから言われてたからちゃんと覚えてるよ。血筋の事もあるしね。

「じゃあ、気をつけて帰ってね」

「はい」

うん、パートナーの事も大変だけど、ちゃんと教師としての仕事もしなきゃね。

職員室に向かっていると、前から沢山の本を持った宮崎さんが歩いて来た。確か前にもあったよね？また、こないだみたいな事があったら危ないな。

「宮崎さん、手伝いますね」

「ふえ!？」

宮崎さんが返事をする前に本の半分以上を奪い取って僕が持つ。しかし、重いな。こんなの女の子にはきついよ。もうちょっと持ってあげた方がいいかな？

「もっと持つから貸して？」

「い、いえ!大丈夫です!その……ありがとうございます……  
ございます……/ / /」

「気にしないで下さい。紳士の勤めですから」

「はっ、はい/ / /」

顔が赤いけど大丈夫かな?でも、宮崎さんって可愛いよね。

それから、図書館島に向かいながら聞いてみる。

「えーと、あの、つかぬ事をお伺いしますが、宮崎さんはパ……  
パートナーを選ぶとして10歳の年下の男の子なんてイヤですよ  
ね?」

「えと……その……わ……私はーあのーあ……あう  
/ / / (前に愛衣に忠告された事もあるしどうしよう!??でも、い  
いか、ダメかで言われたら)お……OKです/ / / (言っちゃっ  
た!どうしよう!?)」



「ありがとうございます。あっ、丁度着きましたね」

「はっ、はい、ありがとうございます（ぺこり）」

「いえ、いえ。余り遅くならないようにしてくださいね」

「わかりました／＼」

「それでは、また明日」

「はい」

宮崎さんと別れてから、無事に仕事を終えました。というか、帰りたく無いです！？だって、寮にはあの二人がいるんですよ！？ばったり会ったら殺されます！？悪魔には吸血鬼のような満月みたいな物は存在しないのですが、弱点も特に有りませんから。

というわけで、夜になり仕方なく帰っていると、早乙女さんと宮崎さんがいました。

「早く帰ってくださいって言ったでしょ！？」

「ごめんなさい先生」

「それより、ネギ君こそこんな時間にどうしたの？もう、8時だよ」  
「？」

うっ、これはまずいです。

「ほらほら……」

その後、早乙女さんの追求に、寮の人と喧嘩してしまい帰りたく無いと言う事を伝えました。

「ふふふ、それなら私達の部屋に泊まればいいのよ！」

「えっ、ハルナ!？」

「えっ、ええええ!？」

「ふははは、問答無用!」

「ちよっ!？」

こうして、僕は二人の部屋でお世話になる事になりました。

Side Out

Side

ふう、無事に脱獄出来たぜ！やっぱり俺っちは最強だな。しかし、潜伏先をどうするかだな。

「そつだ、アニキの所に行こう。恩返しもしたいし丁度いいぜ！それに麻帆良学園の中等部は女子寮があるらしいからな……むふふふ」

待っててくださいえよ、アニキ！！俺っちがお手伝いに向かいやす！！

S i d e O u t

???Side

ふむ、封印は安定しているな。ここに閉じこもって何年になるやら分からなくあるが、貴様のタメにも妾がいるのだからな。だから、早く出てこい。

「陛下、現状はどうですか？」

「貴様か。特に問題はない」

「そうですね。それはよかったです。それではお茶などどうですか？」  
何を馬鹿な事を言っておるのだ？

「ご子息の事でお話があるのです」

「仕方あるまいな。話せ」

「ええ。その前に貴女もおすわりなさい」

「はい。ところでここはどこなんですか？」

ふむ、黒い服を来た幽霊とは珍しいな。

「場所や意味は秘密ですが、あつちに來たら案内しますよ。それより学園の事をお願いします」

「はいっ！新しい子供先生が來てですね……………」

それから、麻帆良学園について色々聞いた。どうやら元気にやっているようだ。桜花の報告通りだな。

「で、貴様の事だ。他に何か有るのだろうか？」

「ええ、この子がこんな物を見付けて來ましてね」

「ふむ……………これは……………」

「気に入りましたか？」

確かにこれは良いな。

「良く知らせてくれた。感謝する。褒美を取らせたいが生憎とこのような状態でな……………」

「気にしないで下さい」

「しかし……………」

「それなら、友達になって下さい！」

「わかった。よろしく頼む」

「こちらこそです！」

桜花かシオンに頼んで、身体でも用意させるか。何、友達のためなら構わんだろう。

「少し出て来る。後を頼むぞ」

「早めにお嬢さん方を頼みますよ」

「わかった。案内頼む」

「はい、お任せ下さい！」

さあ、数年ぶりの外だな。我が息子と娘、妹は元気にしておるか？ いや、ちゃんと成長しているかが心配だな。まあ、妾が直々に鍛

えてやるとするか。

S i d e O u t

お仕置きの定番？（後書き）

さて、ネギをノドカとハルナの所に突っ込んだ！あつ、部屋は適当です。

次回は出るようになったアイツと懐かしいあの人が出てきます。丸解りかも知れませんがね。

後、永遠神剣の意思が形になるのは聖獣じゃなくて神獣らしいので後程修正します。

あと二回くらいで三巻が終わりそうです。先は長いね！

どうでもいいですが、来月は真剣恋が楽しみです。

## 魔王様達のゲーム

### ノドカSide

ハルナがネギ先生を無理やり部屋に泊めてから数日が立ちました。やっぱり、色々恥ずかしいですけど先生との仲は順調に進んでいると思います。でも、ネギ先生はアスナさんとも仲が良いですけど。



アスナさんはネギ先生の事どう思ってるんでしょうか？

「ネギ先生、ご飯が出来ましたよ」

「ありがとうございます。手伝いますね」

「お願いしますね」

ハルナはいつもモールの仕事で遅いです。何やら売り出した漫画がヒットしたため忙しいみたいです。だから、二人だけのご飯です。でも、この頃もう一人来ています。

「やつふお、今日もお邪魔するわね」

「いらつしやいアスナさん」

アスナさんはネギ先生が心配で見に来たみたいですけど、どちらかと言うと別の理由があるのかもしれないが。

「え？実はね、あの人前でイチャイチャする空間にいるのが嫌なのよね」

「アスナさん？」

「このかと先生だけじゃなく……ふふふ」

「だ、大丈夫？」

「うん、大丈夫。ハルナにも許可はもらってるから」

眼がちよつと虚ろになつてゐるけど大丈夫だよな？しかし、アスナさんの話を聞く限り先生はこのかと他の人とも付き合つてゐたいです。しかも、エヴァさんとレンさんと多重結婚してゐたいです。本人達は納得してゐるみたいですけど……漫画や小説でおきるような事が……あわわ／＼

「ん、何か来ました！」

「「え？」」

「アニキ、やつとみつけやしたぜ！」

どこからか声が……聞こえてきました。

「カモ君！」

「「フェレットが喋った！！！！」」

そう、いつのまにか動物が部屋に入ってきたけど、一番驚いたのは言葉を喋ったことです。

「俺たちはアルベル・カモミールってんだよろしくな！」

「いったい、どうなつてゐるの？」

Inside

ノドカSide  
Out

これは……………障壁を突破して来た。

「エヴァちゃん」

「ああ、侵入者だな」

「排除……………する……………ウンディーネ、シルフ、イフリート、ノーム」

私の周り大精霊が召喚した。

「来いセルシウス、ヴォルト、アスカ、シャドウ」

エヴァちゃんも自身の周りに大精霊を召喚した。

「くっくくく、愚かにも我等が領域に無断で侵入して来た奴等だ、どうしてくれようか？」

暗い中、各大精霊達の光が明滅して私とエヴァちゃんが座っている大きなソファを照らす。

「何しに来たかによる……………十七分割」

「ちよっ、それは待て！ゲージが……………くそ！偽りの月！」

激しく私達の眼前で戦いあう二人。お互いに必殺技を放ちながら泥沼な戦いを行っている……コントローラーを高速で動かす。

「くそ、負けた!」

「というか、私達はいったい何のために呼ばれたんですか?」

「そっだよ」

「うむ」

ただ、大精霊達を呼びっぱなしでゲームしていただけですよ?

「なんとかというか、魔王風味で呼び出されたと思ったら、真っ暗にしてシアタールームでゲームしてるだけじゃないかよ!」

「どちらも魔王級の実力はあるんですからね」

「そだね」

「でも、面倒だ」

確かに面倒。どうしようかな?

「ふん、理由は簡単だ。侵入者を排除して来てくれ」

「「「「「ヤダ」「」「」」」」」

「お前ら……」

「それに、我等なら侵入者が動いてからでも瞬殺出来る」

「そうですね。ここは私達の領域だし、危険なところになきゃ放置でいいかな。」

「こものなんて〜ほっとけばいいの〜それより〜わたしもやるの〜」

「そうだな」

「きゅ」

「ならば、大精霊達も含んでゲーム大会だな」

「皆もやる気まんまん。私も負けない。今度は私と同じ名前にしよう。さあ、私とエヴァちゃん、大精霊8柱のゲーム大会が始まった。」

「あつ、最下位が進入者を潰して来るでいいな」

「「「「「うん（ああ）」「「「「」

「負けないよ……」？

Inside  
Out





魔王様達のゲーム（後書き）

ただのゲーム大会になっています。

麻帆良学園のDDRは超技術(前書き)

Side変更毎に月日がちよつとまき戻ってます。

## 麻帆良学園のDDRは超技術

カモSide

よう！ 俺たちはパンツの事なら何でもお任せ！ パンツ神ことアルベール・カモミールだ！

そんな俺たちは今現在麻帆良学園に来ている。そう、本国の牢獄を脱獄してネギの兄貴を支える為だ。俺たちにとっても都合がいいし、恩返しが出来るからな。それに……麻帆良学園には……  
・・ムフフ。

「そうなんだ！ 苦労したんだね！ 分かった、月五千円でいいなら僕が雇ってあげるよ！」

「すまねえ兄貴！」

「妹さんの為に頑張ったんですね」

オカッパのようなコイツは俺っちのセンサーにピンピン反応しやがるし、結構単純みたいだな。

「ちよつと待ちなさい！いくら妹さんの為とは言え、こいつは下着泥棒よ？それに、なんか怪しいわよ」

「そんな事は無い……いや、姉さんが疑うのも無理ありやせん。それなら、あつしは行かせていただきやす。例え、罠にはまりあつしが死んで妹が倒れても、それはあつしの事情ですからね。姉さん方を巻き込む訳には行きませんな……兄貴と嬢ちゃんの好意は無駄にはしやせん。姉さんもどうぞお気になさらず……それじゃ、あつしは行きやす」

「……………」

俺っちはカウボーイハットを被り外へとゆっくり歩きだす。

「アスナさん!？」

やつべー、これからどうしよう!？追つてもいるんだぞ！兄貴の所ならどうにかなるのに、畜生!？

「ああ、もう！ 分かったわよ！好きにしなさい！ それに、ここは私の部屋じゃないんだから最初から権利は無いんだしね。ただ、ハルナにはちゃんと確認を取っておきなさいよ」

「はい！」

ふっ、全ては俺っちの計画通りだぜ！えっ、前の焦り？そんなの嘘に決まってるじゃないか！

「よかったね。カモさん」

「ああ、ありがとうよ。これから世話になるぜ！」

ふふ、さあ次のプランだ。

「さて、兄貴。この二人には魔法の事はばれてるんですかい？」

「アスナさんにはばれてるよ」

「？」

嬢ちゃんの姿を見る限り間違いないな。

「なら、パートナーになってもらいやしよっよー！」

「ええっ！？」

それから、色々聞いたがやっぱりパートナーは必要だな。何、全て俺に任せてくれれば間違いないぜ！

それから俺たちは嬢ちゃんと兄貴を告白させ付き合わせるために計略を仕掛けた。

さて、準備は重畳、結果が楽しみだぜ。そう、俺たちは翌日に早速行動を起こしたんだぜ。まあ、色々まずいからな。

それより、俺っちは今通り過ぎた金髪のナイスバディな女性の方が気になるぜ！

「ふふ、行くぜ！」

目指すはブラジャーだぜ！ヒッター！！

「ふむ、こっちはか？」

「あれ、こっちはですよ」

「そうか」

よし、後はタイミングだな。にしても、一人なのに誰かと会話してるみたいだ……。綺麗なのに残念だぜ。

「というか、急ぎすぎですよ？まだ日にちに余裕はありますよ？」

「ああ。どうせなら日常も見てやるうと思っただけ……。む」  
「今だ！俺っちは高速で接近し、ブラジャーを抜き取るためにジャンプした。」

「愚か者が」

うおっ！俺っちの目の前に変な剣が迫って来た。なんとか身体を捻

って避け………「ぐはあっ!？」

馬鹿な、風圧で吹っ飛ばされただと!ちくしょうが!?

「炎の精霊58柱」

金髪の女性が無詠唱で追撃を放って来やがった!くそっ、背に腹は返られねえ!

バンっ!バンっ!と爆発が数十回起きた。

「ふむ、仕留めたか?そうか。まあ、良い」

「どうしたんですか?」

「何、害虫がいたので排除しただけだ」

「そうですか?あっ、そこを右ですね」

「うむ、急いじ」

「ふう、死にかけたぜ。化け物もいるもんだな。いや、悪魔使いと人巧悪魔使いがいるんだっとな」

俺っちはコインを投げて、精霊を爆発させた。そのお陰で多少の火

傷で済んだぜ。ただ、俺たちの財布は火の車だな。

「っと、そろそろ時間だぜ」

しっかりと稼がせてもらいますぜ。

カモSideOut

とある大精霊Side

ふははは、ゲームと言うのは難しいものだな。よもや我がここま  
で負けるとはな。

「姉さん……弱すぎ」

「うるさいな。自身の身体で戦うのとは完全に別物なのだからな」



次に私が選んだのはネロ・カオス。コイツは、身体の中から様々な獣を出して戦う戦術のようだ。

「相手はサツキか」

「格闘タイプ……かな？」

「それではスタートだ」

エヴァの宣言通りゲームが始まった。

そして、一日が経過。メルブラでは最下位だったがこれなら大丈夫だな。

「ふははは」

「ん、右、左、右、上……」

「………何で出来るんだ！」「」「」

私と妹はダンスダンスレボリューションの最難関の一曲MAX30の数倍という科学部とゲーム研究部、音楽部、チャオパオズが制作したらしい。

「ふ、楽しい物だな」

「余裕、ですね」

足を高速で動かし、滝のように流れて来る矢印を押していく。

「人間にクリアは不可能だな。というか、足に残像を残すほどの速度は無理だろう」

「セルシウスの言う通りだな」

「ふん、詰まらぬな。よし、歌うか」

「えっ？」

「付き合え」

「……………無理」

「却下」

「……………」

それから私達姉妹は、即席で歌を作り歌った。無論、満点だった。

「……………」

「どうしたんだレン？」

「ネットに二人のをアップしたら反響が凄い」

ふむふむ、神曲キター、足が見えねえ、神だ、歌美味い、ツインテール美少女双子最高、俺のヨメなどなど否定的な意見もあるみたい

だがな。

「回覧数、凄い」

「他にも色々あげる？」

「どうでも良いな」

「そうだね」

そもそも、他人の評価など興味は無い。

「次は私」

レンが私達と同じのを選択した。うむ、こやつもやるな。

二日後、私と妹は麻帆良学園にある大浴場に来ている。

「負けたね」

「ふん。やはり、身体を使わぬゲームは難しい」

「不器用なだけじゃ？」

「……………」

言いたいことをさすは言ってくれな。

「こんにちはとなりいいかな？」

「すみません」

背の小さい小学生くらいの少女二人がやって来た。

「かまわぬぞ」

「うん」

「「ありがとう」」

というか、既に入ってるからな。

「髪の色が銀と黒だけど、二人も双子だよな？」

「うん、黒い髪の私が妹」

「そして、銀の髪の我が姉だ」

「そうなんだ」

「二人は動画に出てましたよね！」

それから、様々な話をした。こやつら、何か力を持っておるな。まあ、侵入者では無いのだから放置だな。む。

「姉さん、見つけた？」

「ああ。見付けた」

「どうしたの？」

「仕事の時間」

「分かった。またね」

ふふ、懐かしい気配がしたのだが、果してどうなるのか……  
楽しみだな。

「ねえ、どう思う？」

「人間じゃないと思うよ？」

「力が強すぎる」

「どうする？」

「報告する？」

「マークかな？」

「そうしよう。ネギ先生も監視対象だし、出来たら引き込みたい  
ね」

「「行こう」」

いたな。あれが侵入者か。

「うひょっ！？ツインテール超絶美少女双子の裸だと！？もう、死んでも……………」

「「なら死ぬといい（よ）」」

私達は狩りを開始した。ターゲットは期待出来ない下等生物だな。まあ、少し遊ばせて貰うとしようか。

とある大精霊SideOut

ノドカSide

先生との同居生活はとても幸せで毎日が充実しています。やっぱり、私はネギ先生の事が好きみたいです。

「あれ、手紙？」

下駄箱から落ちた手紙を読んでもみると、ネギ先生からで、な、内容はわ、私にパートナーになつてくれって・・・・・・・・うそ、こ、これって先生からのラブレター！？

私は着替えて指定された場所に来ました。少しするとネギ先生がやって来た。

「だ、大丈夫ですか？」

大丈夫？私がパートナーになつてくれるかだよね？

「はい。あ、あのーわ、私なんか・・・・・・・・パ、パートナーでいいんでしょうか？／／／」

「へ・・・・・・・・」

「？」

「カ、カモ君！？」

「（すまねえ兄貴・・・・・・・・手っ取り早くパートナーの契約を結

んでもらうため、ひと芝居つたせてらいましたぜ」

「どうしたんですか？」

何かオコジヨのカモさんと話してるみたい。

「あの……私は先生に何度も助けて貰ってますし、先生が助けてくれなかった私は雪山で熊に殺されていたか、凍死してしまいました。だから……お返しにーネギ先生のお役に立てることなら何でもーが……がんばりますから何でも言ってくださいね……？／／ 私の命は先生の物ですから……」

「み、宮崎さん……」

「（ふふ、俺の読みは間違ってたな）」

「（どういこと!?!）」

「（一口にパートナーと言ってもただ隣にいりゃいいって訳じゃ無いんだよ！ 互いに信じ合いたわりあえる関係であることが重要！ その点、この娘はネギ兄貴を好きであることではズバリ現時点 NO.1!!!）」

「（え……ええっ!?! み、宮崎さんがぼ、僕の事が好きー！ そんな、嬉しいけど困るよ!）」

「（何言ってますか！ マギステル・マギになるためにはパートナーが必要なんですぜ！ そして、パートナーはお互いが信じ合いたわりあえる関係じゃなきゃいけねえ！ お互い好き合ってるの



が一番ですぜ。それに、兄貴も嬢ちゃんの事が好きでしょ？、なら相思相愛で問題なんてありやしませんぜ！ これは嬢ちゃんの為でもあるんですから！！」

「（宮崎さんの為に……相思相愛……母さんも言ってた……）あの、宮崎さんは僕の事をどう思いますか？」

「わ、私は……好きです／＼」

い、言っちゃった。ど、どうしよう！

「ぼ、僕もよくわかりませんが、宮崎さんの事が好きだと思います……」

バクテイオー  
「契約！！」

「わっ！！」「きゃっ！！」

何か私達の足元に、光輝く魔法陣がかかれてとても気持ちいいです。

「ん、この光……なんだかドキドキします……」

ネギ先生……嬉しいなー

「さあ、二人共。キスするんだ！」

「キス……」

私達は吸い寄せられる様に顔を近付けた。

「バクティオー 仮契約!!」

先生と私はキスをした。

「何やってんのよこのエロオコジヨ!？」

「あ、アスナさん!?これはそのっ!」

アスナさんがカモさんを押さえ付けてました。

「あんたね、子供をたぶらかしてナンテコとしてんのよ!?お姉さんに頼まれて来たなんて嘘じゃない!!ホントは下着泥棒したんでしょ!!」

「それは無実で……」

それからカモさんの話を聞きました。けど、下着泥棒なんて……  
・・・そういえば何着か無くなっていました。

「ノドカちゃん、どう思う?」

「最低です」

「うっ」

「でも、もうしないならいいと思いますよ」

ネギ先生は助けたいみたいです。

「「ありがとう!」」

こっちはいいかな・・・？それより、魔法・・・これが愛衣が言つてた事なのかな？でも、この頃夕映と愛衣が学校に来ないんだよね。メールが来るから大丈夫みたいだけど・・・どちらにしても、何か隠してやるよね。後、アスナさんも気になるかな・・・うん、ネギ先生に捨てられないように頑張ろう。

ノドカSideOut

## 麻帆良学園のDDRは超技術（後書き）

ゲーム後、襲撃に入ったのが一番最後になります。

## カモ君のデスゲーム一時間目

カモSide

ちよつ、死ぬううっ!?

「中々しぶといね」「ああ。少し力を入れるか」

銀髪ツインテールが放つて来た黒色の魔法の射手をなんとか避けたつてのに、更に追撃かよ!?!これは良く見て避けないと……  
ぐふふ。あのみずみずしく輝く陶器のような染み一つ無い裸体、なんて眼復なんだ!?!

「ぐはあ!?!」

「馬鹿だな」「うん」

「くっ、やるじゃねえか!まさかこの俺に色仕掛けをして来るなんてよ!だが、効きやしないぜ!?!」

「色仕掛け?」「ふむ、裸であったな」

気付いて無いのかよ!?!というか、気にしていないみたいだな……  
……うひひ。

「また、ウンディーネが五月蠅そう」「確かにな……セル  
シウスも五月蠅だな。まあ、良い。しかし」「鼻血を出しながらだ  
と説得力が無い」

「なっ、俺つちとしたことが!？」

くっ、眼を反らせば……いや、ダメだ!どうしても眼が見  
ちまう!

「でも、姉さん」「ああ。生きてる価値も無い害虫に」「肌を晒す  
必要は無いよ」「うむ」「装着」

ひでえ、全否定かよ!というか、ヘンシンシーンだと!?!うひょー  
!これは見逃す手はあるのか!いや、無い!反語!

光に包まれて一瞬で服が装着された……「変身シーン飛ば  
すんじゃない?!おっきなお友達に失礼だろうか!？」

「知らん(ない)」

銀髪ツインテールは、胸の辺りまでしかない白いジャケットと見せ  
ブラみたいなタンクトップ型の水着だ。黒髪ツインテールは黒いジ  
ヤケットを止めていないし、中の黒いブラにズボン。どちらも星の  
マークが入っているし、色は黒と白で統一されている。どうしても  
そそる姿だぜ。(イメージはブラッ ロックシュータの総督とステ  
ラ)

「さて、本格的にゲームを始めよう。ルールは簡単で何でも有り、  
クリア条件は殲滅だ」

「それでは「待つ」スタート」

「まずは小手調べだ」

小手調べで放たれたのは2mを越す漆黒の球体だった。

「ちょ、小手調べってLvじゃねえ!？」

あれは加えられた魔力を考えると千の雷クラス……戦略級魔法じゃねえか！オコジョ一匹に使う魔法じゃねえ!？

「ああ、安心してください」

ほっ、この場合は殺されないとかだよな？

「絶界を張ったので周りに被害はでないよ」

「うむ」「そつちかよ!？」

ヤベー、あの魔法が地面を消滅させながら進んできやがる！

「ほう、これ避けるか……お前達、行け」

「ちよっ!？」

三万くらいある魔法の矢が飛んで……ふっ、あめえ、ぐはあ！追尾機能だと！ちくしょうが!？

「なるほど。動き回ってブラックホールに精霊達を注ぎ込んでいる

みたい」

「無駄なのだがな。球体が更に膨れ上がり……あ」

「姉さん？」

黒い球体が壁に辺り、全てを喰らった。

「絶界が壊れた」

今のうちに逃げなきゃな！ん？待てよ？

「おいつ、俺たちは兄貴……ネギ・スプリングフィールドに雇われてんだ。だから、殺される理由は無いぜ！」

「知らない」「我等が受けた」「オーダーは」「侵入者の」「サ  
ーチ&デストロイ」「ただ一つ」

「ちくしょうっ！？なら、逃げさせてもうぜ！あばよ！」

ふう、何とか逃げれそうだな。しかし、やばい連中だぜ。無詠唱で戦略級を放ってくんなんてな。

「む、手加減しすぎたか」

「ですね。しかし、エターナルがいなければ絶界の精度は私達の間にも耐えられないみたいだね」

「改良を依頼すべきだな」



「うん」

「再度狩りを行おう」

やっぱり、かなりヤバいぜ。出来る限りネギの兄貴の所にいよう。

カモSideOut

ネギSide

僕がノドカさんに魔法使いについて教えたら、カモ君がボロボロになって帰って来た。

「大丈夫カモ君！」

「ええ、大丈夫ですぜ。それより、一人になった時に狙いましょう」

「「「えっ!」「」」

それから僕達は力毛君の襲撃計画を聞いた。

「夕映と愛衣が……………」

「はい……………」

「悪魔に操られてんのかも知れんぜ?二人共悪魔を使ってるからないや、そうに決まってるぜ!」

「確かに2ヶ月も無いのにあそこまでの実力が付くはずが無いですが悪魔がとりついているか、入れ替わっているのは納得です。」

「二人を助ける方法は無いんですか?」

「たぶん、あの人形が悪魔に間違いないでしょうね。それを取り上げて燃やすとか?」

「それがベストなんじゃねえか?」

「そつだといいんですが……………」

「でも、問題はノドカちゃんの身体能力よね?」

そうですね。図書館探検部だと言ってもあくまで一般人ですし。

「そつだ、姐さんも兄貴と仮契約すればいいんだぜ!」

「「えっ」」

「ちよ、何言つてんのよ!」

そつだよ。ノドカさんもいるのに。

「いや、仮契約はキスだけで何人とても出来るしな。何より姐さんの身体能力ならかなりのもんですぜ?」

「う……………」

「それに、下手したら兄貴も穰ちゃんも殺されちまうか大怪我するかも知れませんか?」

「それは……………」

「姐さんはそれでも後悔しやせんか?」

「くつ……………分かつたわよ!!ノドカ、ネギ!これはノーカ  
ンだしね!」

「「はいつ!?!」」

それから、僕はアスナさんとも仮契約した。そして、悪魔について色々調べて夕映さんを探す事にした。

ネギ Side Out

## カモ君のデスゲームー時間目（後書き）

ちなみに、シャドウが白い総督様で、アスカが黒いステラです。ダ  
イス神の導きで選ばれて負けたのは総督様でした。

## カモ君達のデスゲーム二時間目

夕映Side

ふう、猫は可愛くて癒されです〜ほらほら〜と猫で遊んでいます。

「にゃ〜」

私は今、茶々丸さんに頼まれた猫……ぬこ達の餌やりをしているです。

「猫じゃらしならぬにゃらし〜」

「ちよっ、妾をおもちやにするでない!」

「にゃ〜」

「ニヤ、ニヤっ!」

「痛い、痛い!?!」

さすがはぬこです。見事な連携でぬこパンチとかを決めています。

「……………夕映？」

ノドカですか……………レヴィアは人形の振りをしています。

「おや、ノドカじゃないですか。こんな所にどうしたのです？」

「えっと、この頃学校にも来てないしどうしたのかなって思って……………」

どうやら心配させてしまったようですね。

「私は大丈夫です。シオン先生達にお願いした事で忙しかっただけですから」

「そうなんだね」

何か様子が変わるですね？

「そういえば、ノドカだったのですね。私を付けていたのは」

「えっ！？気付いていたんだ……………夕映の事が気になって……………それで……………」

ぬこを二人で撫で回しながら聞いてると……………和みます。

「あ、この可愛い人形って何なの？（さっきから動いてたみたいだし、何か喋ってるからこれだよな？）」

「これですか？これは……………拾いました」

「そうなんだ……」

ノドカがレヴィアを抱き上げて……後ろから接近したオコジヨが奪った。

「ゴメンね。これも夕映のためなの」

「えっ？ノドカ……？」

「今です兄貴！」

「うん！」

ネギ先生が現れ、レヴィアを燃やした。

「なっ、妾を燃やすじゃと！」

「これで夕映さんも悪魔から助かります！」

「あ〜」

何となく読めたです。つまり、私が悪魔の人形に操られてたと思っただけですね。確かにあの時は操られてたような物ですが、私自身が召喚して使役してるとは思っ………そういえば、普通悪魔の召喚はレヴィアがしてますし、融合とか考えると私が操られていと勘違いしても不思議はありませんね。ノドカやネギ先生、アスナも完全に心配してでしょうね。怪しいのはあのオコジヨですか？どちらにしても、ノドカも覚悟を決めたようですし………それがノドカの幸せなら別に問題は無いですね。





裂ける痛い熱い裂ける痛い熱い裂ける。これ以外何も考えられない。

夕映SideOut

ノドカSide

ど、どうしよう、夕映まで苦しみだしたよ!?

「せ、先生!」

「癒しの風よ!」

「おいおい、なんて魔力だっ!」

「夕映から変なのが出て来たわよ!??」

アスナさんの声を聞いて、夕映を見ると、夕映の身体を中心に巨大な魔法陣が作られていました。更に中から鎖に感じながらもにされた扉が出て来ました。

「おい、まさか……………」

「か、カモ君……………凄くまずい気がするんだけど？」

バチンと言う音共に、鎖が次々と壊れて扉が開いて行きます。

「封印っばいんだけど……………しかもなんか黒い水が出てる！」

「ゆ、夕映！」

「やべえ、逃げたほうが……………」

「何言ってるの！綾瀬さんをほって置ける分けないよ！」

「しかしよ……………」

バチン、鎖が扉の内側から圧力により破壊されたようです。そして扉の中からは巨大な龍が解き放たれたように出て来ま……………した。その龍はどんどん外に出て来て空を多い尽くしても止まりません。

「あ、悪魔なのよね？」

「あ、あの……………夕映はレヴィアと言っていました……………」

「レヴィアって名前の付けられる悪魔の龍は……………まさか……………」

「一匹しかいませんよね？」



う、動いて！夕映やネギ先生を助けるために！

「行くわよ！」

「はいっ！」

私とアスナさんも囿くくらいにはなれる。

それから数分で私達は動けなくなった。目の前には龍の牙。ここま  
でみたいです。ごめんね夕映。すいませんネギ先生、約に絶たなか  
ったです。

『これで終わりじゃ……………』

「ちくしょう……………」

「ごめんなさい。ノド力さん、アスナさん……………僕のせいだ……………」

「気にしないでいいわよ（です）」

魔王がブレスを吐こうとしたとき、紅い深紅の羽が太陽のような輝  
きと共に空から舞い降りて来ました。

ノドカSideOut

女王様Side

変な気配がしたので来てみれば、この愚か者共は何をしたのだ？  
まあ、良い。久しぶりに全力で暴れてくれるわ。

「ふ、私の息子が世話になったようだな蛇よ。これは駄賃だ。燃え  
尽きよ」

ステイグマ  
聖痕を全力発動させ、炎雷覇の力を引き出しプロミネンスを球形に  
形成し放った。

『なつ、貴様！』

一瞬で大量の魔力を込めた水を作りだし防いでいる。水は瞬時に蒸  
発するが、相手も力任せに供給しつづける。

「ほう、やるな」

『貴様、コントラクター契約者か！』

「そつだ。ふん、温い」

迫ってきた尻尾による一番を炎雷覇で焼き切り、火の精霊を多数召

喚する。

『化け物め！夕映、力を貸りるぞ！』

「む、水の精霊が……水の契約者が依り代か……」  
コントラクター

蛇が空へと舞い上がり、私と対峙する。尻尾は再生されたようだな。しかし、長いな。そして、頭の部分に少女が取り込まれたようだ。

「ふはははははは！行くぞ！！」

お互いに数十数百万の精霊を導入した大決戦だな。お互いに大量の魔法の矢を放ち撃ち合う。

「貴様の毒のブレスなど……多分、大丈夫だな」

『ブレスすら蒸発させるか！？』

む、水蒸気爆発も多数起こっているし、速めに決着を付けるか。

「黄昏れ時か……まずいな」

『夜は妾達の領域ゆえ、汝等人間には無理よな』

全くその通りだな。ならば、早期決着。そのために大きいのを撃つか。

炎雷覇に大量の力を注ぎ込み刀身を巨大化させ、黄金色の神炎を身に纏う。

『ふつ、決着を付ける気が．．．．．良かろう』

数秒後、私達は全力の攻撃を撃ち合った。

「『消えろ！』」

そして、問題が発生した。それは、私達の攻撃の中心点に轉移してきた。

「ちょっと、何なのよこは．．．．．望、皐月？」

「おい、避けるっ！？」

「えっ？きやあああああああ！！！！！！！！！」

圧倒的な破壊の力にさらされながらそいつは無事だった。

「『．．．．．』」

吹っ飛ばされて行ったがな。

女王様 Side Out



大精霊Side

面白い事になっているな。レヴィアタンの本体が出て来たぞ。

「見てみるアスカ」

「・・・うん・・・広域次元結果を展開」

これで怒られる事は無いな。あいつらは被害さえでなければ問題は無いからな。全く、ウンディーネ達は五月蠅いんだ。ちよと先に生まれただからと・・・  
「姉さん。誰かが乱入して来た」・・・愚痴を言っていたら状況が変わったか。

「ふむ、上位の魔王と対等に戦うとは・・・殺しがいが有りそうだな」

「姉さん、駄目だよ・・・私達・・・姉さんの目的はあつちだよ？」

む、アスカの指差した方向を見ると、レヴィアと人間が戦っている下に人間三人と目標の一匹を見付けた。

「しかし、アスカよ。奴は侵入者では無いのか？」

「違うみたい。麻帆良学園の結界に問題は無いし、そんな連絡は無い。だから、奴は正規の関係者かな」

「ならば、仕方あるまい。当初の予定通りで構わんか………行くぞ」

「うん」

奴等は派手に空中戦を行っているし我は接近戦と行こうか。

大精霊 Side Out

## カモ君達のデスゲーム二時間目（後書き）

アリカ様つえーの回になります。途中で被害を受けた第三者は京都編にでてくるかも。多分、予想つくと思います。

## カモ君達デスゲーム三時間目

シャドウSide

転移完了。目標以外、どいつもこいつもボロボロだ。つまらん仕事だな。

「ふふ、見付けたぞ害虫」

我はアスカが作りだした白い刀身と柄だけの刀を持ち害虫に切り付ける。

「ぎゃっ!?!」

「カモ君!?!」

「先ずは前足か……次はどこを切り落とそうか」

刀身には血が一切残っていない。素晴らしい！

「な、何するんですか!？」

「何と?」

「なんなのよ!？」

「なんなのよと聞かれたら答えてあげるのが世の情け……  
とでも言うと思ったか!」

「がつ!?死ぬ……兄貴、た、助け……」

「カモ君!一体カモ君が何をしたって言うんですか!」

何をしたんか……知らんな。精霊に聞いてみるか。

「ふむふむ、なるほどな。盗撮、下着泥棒、脱獄、不法侵入、覗き、  
痴漢だな」

「「ええええ!?!」」

「まあ、そんなのはどうでも良いのだが、我等が守護するを領域へ  
の侵入は赦されぬ。故に排除する」

「待つてくだせえ!誤解です!俺はやつてなえ!？」

「関係無い。私達はここに侵入した存在を排除するだけ。一般人な

ら誘導するけど悪意を持って来る存在は容赦しない。と、言っても姉さんがゲームに負けたのがいけないんだけど……」「五月蠅い、私はこんとろーらー(?)とか言うのは苦手なんだ」

ちよと力を入れたら壊れるし、身体を動かす方がいい。言っておくが、知識や技術なら負けぬぞ。

「ぎゃあああ！」

ちくちくと刺しながら悩んでいた。

「上も決着が……は?……うん、了解……  
これから、防御結界を張る」

「ん?」

「姉さん、殺さずに連れて来いだって。後、気をつけて」

「何が……」

視界の端に光り輝く何かが見えた。

ShadowSideOut

レンSide

面倒だから……押し付けたけど……更に変に……  
……なってる。

「アリカとレヴィアタンの戦いか。アスカのお陰で通常空間には被害が無いのが救いだな」

「それも……いつまで……持つか……わからない……」

「ならどうする？」

「……頭冷やさせる……ふふふ……」

五月蠅いし……イライラ……準備。創世、大規模  
創世開始……  
チャージ初め。完了。

「おい、なんだこの馬鹿でかいゴーレムは!？」

「全長1200Mだよ」

「デカすぎだろ！」

「ん、チャージ完了。撃て、バスター・キャノン」

広域次元結界の中に作りだされた1200Mのゴーレムが放ったビーム兵器は目標変わらず両者に辺り、偽物の麻帆良学園もるとも全てを破壊した。

「死んだんじゃないか？」

「さすが……地球から月軌道にいる……艦隊を壊滅させただけ……ある？」

「死んだだろ!？」

「……大丈夫……魔力ダメージに……変換……コンバーター……付けた……あうあう」

エヴァちゃんに……首絞められ……死ぬ……きゆう。

「おい！レン、しつかりしろお！死ぬな!？」

次に気付いた時、目の前に血まみれのオコジヨと真つ青になって正座させられアリカに説教……OHANA SIさん、夕映、レヴィア、愛衣がいた……もうちよつと寝ておこつ。



「こら、寝るな」

「むー、エヴァちゃんのせいなのに……茶々丸、紅茶アツプルで」

「ケケケ、自業自得ダロ。俺八口マネコンティデイイゼ」

「わかりました。少々お待ち下さつ、あう。マスター酷いです」

「ソウダゼ」

茶々丸とチャチャゼロに……ハリセンツツコミを入れた？

「チャチャゼロはそんな高価な物を頼むな！茶々丸はそんな物を出すな！だいたい有るわけが……あの、シオン様と桜花様が50億\$くらいで買いあさってました」……「ソレニ、品質改良シテ量産シヤガツタゼ？売リニハ出セネーカラ好キニ飲ト言ワレタゾ御主人。シカモ、日本酒ヤ世界中ノ高級酒ヲ買イアサツテタゼ」あの馬鹿の酒豪共め！金の無駄遣いをしおつて！」

確かに……お酒が沢山ある。業務用倉庫を多数うめつくすくらいはあつたかも。

「ケケケ、ダカラ気ニスンナヤ。ダイタイ金八使ツタ方ガイインジヤネエ力？」

「経済的にみればそうだが……量産してる時点で駄目だろ……まあ、いい。馬鹿共には後でO H A N A S I Iだ」

結局無駄なんだろうけど……キスで歡樂されて、お兄様に

可愛がられて機嫌が直るだけ。いつものパターン。

「さて、アリカ………そっちはどうだ？」

「うむ、反省させてお互いに謝らせた」

「まあ、こっちもやり過ぎてたようだしな。レヴィアの再封印は問題無いから構わん」

福音は便利だと思う。適当に増幅させつづければいいし。封印だつて簡単。

「あ、あの………母さんはエヴァンジェリンさんやレンさんを知っているんですか？」

「ああ。神鳴レンにエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルだな」

「ちょ！エヴァンジェリンっていやあ！闇の福音、人形使い！真祖の吸血鬼、1000万\$の賞金首じゃねえっすか！」

(シオン達と共に多数の破壊活動をしていたため、高くなっている)

「……ええっ!?!」

「ふふふ、元だがな」

「そして、神鳴レン………創世の魔王………4500万\$の真正正銘の化け物だぜ………他にも、ワンマンアミー一人軍隊………ワンマンキングダム………いや、一人王国、ゴレムマスターとか………破壊と再生の使徒とか………とにかく、危険ランクはSSS………」

「私……エヴァちゃんより……高い……なんで……なの……?」

「いや、一人で多数の国を滅ぼしたり、戦場の敵を滅ぼしたからだろうか?」

確かに、旅の間にさら地に変えて、ジャングルにしたりしたけど。

「……なんでそんな人が学園にいるの!?」

「答え、この土地が……神鳴の私有地だから……」

「だな。あくまで貸し与えてるだけだからな。実際経営権の6割は神鳴が保有しているからな」

世界中の聖地と魔法学園は制圧してある。だから、正義の魔法使いは多少まし。

「……」

「まあ、私とレン、エヴァ達とは親友であり仲間だ。だから、桜花と一緒にネギを育てていたのだ」

「ああ。後、ネタバレをすると、爺からボーヤとリリを鍛えるために依頼があったから襲わせたんだがな。まあ、愛衣の事は完全な予想外だったがな。それから、暴走しないようコントロールを重点的に教えたのだが……ゲートを繋ぐ触媒が破壊されるとはな」

「油断してた……予測では夕映と愛衣の圧勝……」

だから、優先的にコントロールを鍛えたんだけど……」

これは鍛え直しかな。夕映の実力が上がればどうとでもなるし。

「まあ、こちらのミスもあるし、気にしなくていいぞ。夕映と愛衣は修行のやり直しだ」

「あ、あの……」

「なんだ？」

「その……」

「言ってみろ」

10歳の子供にプレッシャーをかけて聴く少女……あれ、別におかしくないの。

「がつ、学校があります！学生なんですからちゃんと授業に出てもらわなくては困ります！」

「……」

見つめ合う二人。

「「ぷ、あははははは」」

エヴァと二人で笑っちゃた。

「な、なんですか!？」

「いや、間違っていないぞボーヤ。なあ、レン」

「うん……二人は授業にでなきゃね……」

「二人ともですよ!!」

「いや、私達はもう600歳を超えていてな？知識もたっぷりあるんだが……」

「関係無いです！学生には変わりありません！」

うん、その通り。夕映にやった事はちゃんと反省してるし、聞いてもいいかな？

「くくく、お前達の負けだ。諦めて授業を受けるんだな」

「ちっ、仕方ない。価値ある授業をするなら出てやるつ。レンもいない？」

「うん」

これで終わりかな？

「いや、まだだな。馬鹿息子と馬鹿アスナ、ノド力を鍛えるからダイオラマ魔法球を貸してくれ」

「ああ。構わんぞ」

「よし、行くぞ」

「「「えっ、ちょー!」「」」

「ああ、言っておくが拒否は認めん。お前達三人はいつ命を狙われ  
てもおかしく無いし、息子を任せるのなら、多少は強くなってもら  
わねばならんからな」

「はっ、はい!」

ノド力は気合いが入ってる。

「なっ、なんで私まで……。「良いな」……。「はい、  
姉様……。あれ?私なんで……。まあ、いいか」

四人は出て行った。

「一瞬記憶が戻ったのか?」

「多分、身体が覚えてたんじゃないかな?」

「自身が望んで記憶を消して自由を得たと言うのに……。自  
ら危険に踏み込むとはな」

「どんなに足掻いても……。自分の過去からは逃れられない。  
……。」

「そう……。だな……。」

しんみりしてる。仕方ないけどね。

「俺達、忘レラレテイルナ」

「仕方ありません」

それから四人でお茶会を行った。

レノSideOut

## カモ君達デスゲーム三時間目（後書き）

カモ君は一応生きています。そして、アスナ刷り込みでアリカに逆らえない。そして、アリカのイフリートを使った恐怖の修行が始まる。

ちなみに、介入は桜花も候補に上がっていたけど、レンにしました。子供達はアスカが守ればいいしね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8889r/>

---

森羅と創世が行くチート過ぎるネギま！

2011年10月1日20時15分発行